重田定義

メッセージ集

2026 年 8 月 27 日更新

イエス様の七つの特性

録音日不明、テープ聞き取り
重田定義

今月は 12 月でイエス様のご降誕の月であり、クリスマスの 25 日の直前です。ですから今日のご一緒に学んでみたいのは、イエス様というのはどんな方かということです。改めて聖書のあちこちからみことばをお聞きして、ご一緒にイエス様のすばらしさを、イエス様が私たちのために何をしてくださった方であるかということを改めて考えてみたいと思います。

この世でクリスマスと言いますと、イエス様、出て来ないんです。この世の人はサンタクロースです。ですから、そういう方々のクリスマスと、私たちがお祝いするクリスマスと、全然、質的に違うわけなんですけど、それでは、教会でイエス様のことをどれぐらいのクリスチャンの方々が分かっておられるかというと、分かっておられない方が案外多いんです。というのは、よくクリスチャンのお宅に伺いますと、いろんなことばが紙に書いてありますけど、「神様」という言葉が非常に多いんです。

「神様」という言葉は知ってる。要するに、神様がどんな方かということは分かっている。ところがイエス様が分からないんです。私は神さまは信じるけども、イエス様の十字架は分からないからという方が多いんです。私たちはそういう意味で、吉祥寺集会の兄弟姉妹は、「イエス様」、というふうにお祈りの中で呼びかけて祈られる方が非常に多い。

一般の教会ではお祈りのときは、「神さま」、「父なる神さま」とか、そういうふうに呼びかけをするお祈りが圧倒的に多い。私も教会に行ってたときはそういうふうな祈りをするもんだと思ってたんです。ところがやはり私たちのためにいのちを捨ててくださって、私たちを罪から救い出してくださったのはやっぱりイエス様ですし、その方のお名前を私たちは知ってるだけではなくて、そのイエス様と人格的な交わりをすることを通して私たちに喜びがあり、イエス様の平安が与えられるということですから、やっぱり私たちはイエス様をよりよく知る必要があると思うんです。

そういうわけで、今からイエス様のお持ちになってる七つの特性と言いますか、七つの特質について聖書から見てみたいと思います。イエス様の持つ七つの特質というのは、神の属性をお持ちになってると同時に人の属性を持っておられる。天上の属性と地上の属性を兼ね備えておられる。そういうイエス様の特質があるわけですけども、七つというのはイエス様は完全な方ですから、七つというのは完全数ですから、そういうことで七つの特性をこれから聖書からずっと見てみたいと思います。

まずイエス様の第一の特性というのは、神のことばでありながら、血と肉を持たれた方。神のことば、これは神の属性です。神のことばでありながら、血と肉を持たれてる。これは人の属性です。そういう方であるということです。これはもうよくご存知の箇所ですけど、

> ヨハネの福音書 1:1-2
> 1 初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。
> 2 この方は、初めに神とともにおられた。

このことばですね。このことばというのはもちろん神のことば。神のことばというのは言い換えますと、神さまのお考え、あるいは神さまのご計画が証言されるものなんです。ことばって、私たちもそうですね。私たちは自分の心の中で思ってることは、ことばを出さなければ分からない。ということは、ことばというのは自分の考え。自分の意思を表わすものなんです。

それで、神のことばというのは神さまの御意思、神さまのお考えを表わすものであるわけです。それがイエス様なんですね。その神のことばが人となって私たちの間に住まれた。

> ヨハネの福音書 1:14
> 14 ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。

それからヨハネの黙示録の 19 章の 13 節、ここにこのように書かれています。

> ヨハネの黙示録 19:13
> 13 その方は血に染まった衣を着ていて、その名は「神のことば」と呼ばれた。

イエス様が十字架におつきになって血を流された。そのイエス様は私たちのところにおいでになるわけですけども、その方イエス様は血に染まった十字架で、ご自分が流された血に染まった衣を着ておられた。その名は「神のことば」と呼ばれたとあります。イエス様は神のことばであるということです。

> ヘブル人への手紙 2:14-15
> 14 そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、
> 15 一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放してくださるためでした。

子たち、要するに私たち、人の子です。人間はみな血と肉を持っておりますから、神のことばであるイエス様もまた同じように、血と肉をお持ちになった。血と肉を持つということは、限りがあるいのちを持っているということです。

それでイエス様はなぜ血と肉をお持ちになったかというと、死ぬため。さっきもお祈りの中でありましたけど、イエス様は私たちに代わって死ぬためにおいでになった。死ぬことができるというのは、血と肉を持っているものでなければ死ぬことはできない。神さまは死なないわけです。永遠なる方ですから。ですから私たちの身代わりになるために血と肉を持ってくださったということであります。

二番目の特性は、神のひとり子でありながら、人となられた。人間となられた。最初ちょっと似てますけども、神のひとり子である。神のがわに、天上の属性です、であ

りながら、地上の属性である人となられた。

マタイの福音書 3:16-17
16 イエスはバプテスマを受けて、すぐに水から上がられた。すると、天が開け、神の御霊が鳩のように下って、自分の上に来られるのをご覧になった。
17 また、天からこう告げる声が聞こえた。「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。」

イエス様はなにもバプテスマをお受けになる必要はないわけです。神さまですから。罪の悔い改めをお受けになる必要はない。けれども、やはりイエス様は私たちと同じレベルに立ってくださった。ですから人の子としてイエス様はバプテスマをここでお受けになったんですけども、そのときに神の声が天から聞こえた。

「これは、わたしの愛する子」すなわち、神さまの御子であるということを神さまご自身がこのようにはっきり私たちに、「イエス様は自分の愛する子である。」ということを知らせてくださっているわけです。

ガラテヤ人への手紙 4:4
4 定めの時が来たので、神はご自分の御子を遣わし、この方を、女から生まれた者、また律法の下にある者となさいました。

これはこの通りです。ご自分の御子を人としてくださったんです。女から生まれた者、律法の下にある者というのは、これは私たち人間は神さまの掟、あるいは定め、御意思の下にすべての人間が置かれています。そういうふうな人に、私たちと同じそういう人としてイエス様を置いてくださったわけです。

ローマ人への手紙 1:2-4
2 ――この福音は、神がその預言者たちを通して、聖書において前から約束されたもので、
3 御子に関することです。御子は、肉によればダビデの子孫として生まれ、
4 聖い御霊によれば、死者の中からの復活により、大能によって公に神の御子として示された方、私たちの主イエス・キリストです。

ここにも、神の御子でありながら人となってくださったイエス様のこと…イエス様ご自身が神でありながら、人となってくださったこと自体が福音であります…そのことは神さまが遠いむかしから、イエス様がお生まれになる、この世にお遣わしになる神さまがなるはるか前から聖書において神さまが預言者たちを通して約束してくださったことであるというふうにあります。

ピリピ人への手紙 2:6-8
6 キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、
7 ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。
8 キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。

キリストは、イエス様は神の御姿であり、神のご自身の性質をお持ちのお方でありながら、私たちのために仕える者の姿をとってくださった。イエス様は人としての性質を持ってくださっています。

人としての性質とは何かって言うと、これは私たちと同じ罪の性質を持っておられるっていうんじゃないです。そうではない。イエス様はまったく罪のない方です。それが人間としてはお生まれになってはおりますけども、私たち人間とはまったく違うただ一つの点なんです。

それ以外の人としての性質、すなわち例えば、肉体に痛みを、私たちと同じ肉体の痛みをイエス様もお感じになることができる。そういう性質、あるいはイエス様はご存知のように私たちと同じ生まれたときはちっちゃな赤ちゃんだったんです。ところが成長された。大人になられた。神さまはそんなことはない。初めから神さま。立派な大人・・って言っていいかどうか分からないけど。要するに年齢がない。

要するに加齢現象です。エイジ（age）って言うんですけど。私たちは生まれたらもう、そのときからエイジが始まる。それが歳を取っていくということです。イエス様も人として生まれた。イエス様は赤ちゃんから大人になれる。人としての性質を持っておられるということであります。それから死ぬことも、ですからおできになる。おできになるというのは人間と同じように死を味わえる。

三番目の特性は、すべての主。イエス様はすべての主でありながら、人間のしもべとなられた。こういう特質を持っておられるんです。そのことに関するみことばをいくつか挙げてみたいと思います。

コロサイ人への手紙 1:15-17
15 御子は、見えない神のかたちであり、造られたすべてのものより先に生まれた方です。
16 なぜなら、万物は御子にあって造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によって造られたのです。万物は、御子によって造られ、御子のために造られたのです。
17 御子は、万物よりも先に存在し、万物は御子にあって成り立っています。

すべてのものの主、すなわち万物は御子によって造られ、御子のために造られ、そして御子にあって成り立っている。王座も主権も支配も権威も、すべて御子によって造られたということは、すべてのものの主であるということです。

ピリピ人への手紙 2:9-11
9 それゆえ、神は、キリストを高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。
10 それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが、ひざをかがめ、
11 すべての口が、「イエス・キリストは主である。」と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。

すべての口が、「イエス・キリストは主である。」と告白する。すなわちすべてのものの主はイエス様であります。そのイエス様はこの世に来て、こういうふうに仰っておられます。

> マタイの福音書 20:28
> 28 人の子が来たのが、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためである

すべての主であるイエス様は、「人の子」と自分のことを仰る。人の子というのは私たちと同じです。私たちも人の子です。イエス様はご自分の使命をはっきり、このようにご自分をお呼びになることで私たちに示してくださいました。「あなたと同じです。わたしは人の子として来た。」と仰った。

それはここにありますように、仕えられるためじゃないんだ。あなたがたに仕えるためであり、あなたがたの贖いの代価として、自分を与える。「そういう形であなたがたに仕えるためにわたしは人の子として来た。」というふうに仰っておられるわけです。

> ローマ人への手紙 15:8-9
> 8 私は言います。キリストは、神の真理を現わすために、割礼のある者のしもべとなられました。それは先祖たちに与えられた約束を保証するためであり、
> 9 また異邦人も、あわれみのゆえに、神をあがめるようになるためです。

割礼のある者、すなわちイスラエル人、ユダヤ人のしもべとなってくださっただけではなく、異邦人のしもべともなってくださった。すなわちユダヤ人以外のすべての民族、私たちも含めてすべての人のしもべとなってくださったということであります。

四番目の特性。イエス様の特性は、正しい方が罪人となられたということです。正しい方、これは完全に正しい方ということです。要するに、神さまの属性です。その神さまの属性を持っている正しい方は、罪人、すなわち、人の属性である罪人とされたということです。

> ペテロの手紙第 I、2:22-24
> 22 キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。
> 23 ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。
> 24 そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。

キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。これは人間としては不可能なことです。私たちは生まれてから今まで、何の偽りも口に出したことがないか。そんなことは不可能。イエス様だけが正しい方である。イエス様だけが何の偽りも口からお出しにならなかった。すべて本当のことを仰ることができたんです。

この方が、その正しい方が私たちの罪をその身に負われている。十字架の上につけられたと書かれています。罪人とされたわけです。私たちは、イエス様の打ち傷のゆえに、いやされたわけです。ペテロの手紙第 I、3 章の 18 節。同じようなことばが別の表現で使われております。

> ペテロの手紙第一、3:18
> 18 キリストも一度罪のために死なれました。正しい方が悪い人々

私たちのような悪い人々、神さまにそむいた人々

> ペテロの手紙第一、3:18
> 18 の身代わりとなったのです。それは、肉においては死に渡され、霊においては生かされて、私たちを神のみもとに導くためでした。

イザヤ書の 53 章の 4 節、5 節。これはよくクリスマスのときに礼拝で読まれる箇所でありますが、

> イザヤ書 53:4-6
> 4 まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。
> 5 しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。
> 6 私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。

もう申すまでもなく、彼というのは正しい方、いわゆるイエス様であります。そのイエス様に私たちのすべての咎を父なる神さまが負わせた。それによって私たちに平安が与えられた。罪から解放されたわけです。

五番目の特性は、永遠なる方が死を味わわれたという特性です。神さまは永遠の方です。要するに、死なない方です。永遠に生きておられる方です。その方が死を味わわれた。

> ヨハネの黙示録 1:17-18
> 17 彼は右手を私の上に置いてこう言われた。「恐れるな。わたしは、最初であり、最後であり、
> 18 生きている者である。わたしは死んだが、見よ、いつまでも生きている。また、死とハデスとのかぎを持っている。

イエス様が仰っておられることばです。「わたしは、最初であり、最後であり。アルファであり、オメガであり。」これは神さまの属性です。「生きている。わたしは死んだが、見よ、いつまでも生きている。」確かに十字架の上で亡くなりましたけれども、死にましたけれども、生きている。「見なさい、わたしは生きている。」

「また、死とハデスとのかぎを持っている。」、これはどういうことかと言いますと、イエス様は死をも支配されるんです。死のかぎをイエス様ご自身が持っておられる。ハデスも同じように、ですからそのイエス様が死を制御される方。死に勝利される方であるということです。そのイエス様ですから、十字架の上で死んだけれども、生きることがお出来になる。

そのイエス様を信じる私たちは、イエス様のその死とハデスのかぎを持っているイエス様によって、私たちも死に勝利をすることができるわけです。マルコの福音書 15 章の 25 節から、飛び飛びに 39 節までお読みします。これは確かにイエス様が十字架の上で死んだという原始的な事実がはっきりと書いているということなんです。イエス様が十字架で死んだということが、これは事実なんだということであります。

マルコの福音書 15:25
25 彼らがイエスを十字架につけたのは、午前九時であった。

時間まで明記しております。十字架にイエス様をつけた時間。

マルコの福音書 15:33-34
33 さて、十二時になったとき、全地が暗くなって、午後三時まで続いた。
34 そして、三時に、イエスは大声で、「エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ。」と叫ばれた。それは訳すと「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか。」という意味である。

完全にイエス様は神さまから見捨てられた。なぜ神の御子が父なる神さまから見捨てられたか。それは罪人として神さまから罰せられたということです。要するに私たちがこの叫びを上げなければいけない。神さまから見捨てられたときに叫ばなければいけないこの恐怖の叫びを、イエス様がご自分で罪を負ったために体験されたということです。身代わりの体験なんです。死の恐怖です。

マルコの福音書 15:35-39
35 そばに立っていた幾人かが、これを聞いて、「そら、エリヤを呼んでいる。」と言った。
36 すると、ひとりが走って行って、海綿に酸いぶどう酒を含ませ、それを葦の棒につけて、イエスに飲ませようとしながら言った。「エリヤがやって来て、彼を降ろすかどうか、私たちは見ることにしよう。」
37 それから、イエスは大声をあげて息を引き取られた。
38 神殿の幕が上から下まで真二つに裂けた。
39 イエスの正面に立っていた百人隊長は、イエスがこのように息を引き取られたのを見て、「この方はまことに神の子であった。」と言った。

イエス様を、要するに異邦人である百人隊長、ローマの百人隊長ですら、イエス様が確かに息を引き取られて、しかもそのイエス様をその目で見て、「この方はまことに神の子であった。」と言わしめるほど、イエス様は本当に正しい、聖い方で神の御子であるということが霊の目を開かれて分かるんです。神殿の幕が真二つに裂けたというのは非常に象徴的です。イエス様の死によって私たちは神さまと和解する道が開けたということであります。

六番目の特性です。よみがえられ、天に上げられた方は、今、信じる人の中に住んでくださっている。ヨハネの福音書 20 章の 11 節から 16 節。これもイエス様がよみがえられた事実ですがここに書かれております。

ヨハネの福音書 20:11-16
11 しかし、マリヤは外で墓のところにたたずんで泣いていた。そして、泣きながら、からだをかがめて墓の中をのぞき込んだ。
12 すると、ふたりの御使いが、イエスのからだが置かれていた場所に、ひとりは頭のところに、ひとりは足のところに、白い衣をまとってすわっているのが見えた。
13 彼らは彼女に言った。「なぜ泣いているのですか。」彼女は言った。「だれかが私の主を取って行きました。どこに置いたのか、私にはわからないのです。」
14 彼女はこう言ってから、うしろを振り向いた。すると、イエスが立っておられるのを見た。しかし、彼女にはイエスであることがわからなかった。
15 イエスは彼女に言われた。「なぜ泣いているのですか。だれを捜しているのですか。」彼女は、それを園の管理人だと思って言った。「あなたが、あの方を運んだのでしたら、どこに置いたのか言ってください。そうすれば私が引き取ります。」
16 イエスは彼女に言われた。「マリヤ。」彼女は振り向いて、ヘブル語で、「ラボニ（すなわち、先生）。」とイエスに言った。

七番目は、神の右の座に着かれた方が再び来られる。

マタイの福音書 26:63-64
63 しかし、イエスは黙っておられた。それで、大祭司はイエスに言った。「私は、生ける神によって、あなたに命じます。あなたは神の子キリストなのか、どうか。その答えを言いなさい。」
64 イエスは彼に言われた。「あなたの言うとおりです。なお、あなたがたに言っておきますが、今からのち、人の子が、力ある方の右の座に着き、天の雲に乗って来るのを、あなたがたは見ることになります。」

神の子が人となって私たちのところに来てくださったことを信じていないわけです。イエス様に向かって、「あなたは神の子かどうかはっきり自分自身で答えろ。」と言ってるわけです。イエス様は「そうだ。」と、「自分は神の子である。」と大祭司にお答えになったわけですけども、もちろん大祭司はそんなことは頭から信じていないわけです。だから張り付けにしたわけですから。

それでイエス様は、「あなたに言っておく。今からもし人の子が」、神さまの‥要するに、「ご自分が父なる神のもとに行って、そしてまた、来ます。それをあなたがたに言っておきます。」と仰ってるわけです。これは大祭司をさばくために、イエス様を見ながら信じない人々をさばくた

めに来られる。

> マタイの福音書 25:31-33
> 31 人の子が、その栄光を帯びて、すべての御使いたちを伴って来るとき、人の子はその栄光の位に着きます。
> 32 そして、すべての国々の民が、その御前に集められます。彼は、羊飼いが羊と山羊とを分けるように、彼らをより分け、
> 33 羊を自分の右に、山羊を左に置きます。

これが、ここにあります羊と山羊…羊はイエス様を信じるが、山羊はイエス様を信じない…そのように彼らを、人間を、イエス様はより分け、結局それはそれによって信じない者を主がさばかれるために、これはより分けをなさるわけなんですけども、そのためにおいでになるわけです。

> ヨハネの黙示録 1:7
> 7 見よ、彼が、雲に乗って来られる。すべての目、ことに彼を突き刺した者たちが、彼を見る。地上の諸族はみな、彼のゆえに嘆く。

これは本当に端的に、イエス様を信じない者は、イエス様が雲に乗っておいでになるのを見て嘆くんです。嘆き悲しむんです。それはもう自分たちが、どういうことになるか。それは彼らが知ったからです。喜んで迎えるのではない。喜んでイエス様のご再臨を迎えることができるのは、イエス様を信じた人たちだけです。そうでなくて、イエス様を拒絶した者、信じない者はイエス様のご再臨を嘆き悲しみつつ見るんです。彼を突き刺した者たちが見るわけです。

このように今まで七つ、イエス様の特性をお話しました。繰り返しますと、一番目が、神のことばでありながら、血と肉を持たれた方である。二番目が、神のひとり子でありながら、人となられた方である。三番目が、すべての主でありながら、人間のしもべとなられた方である。四番目が、正しい方が罪人とされたことです。五番目が、永遠なる方が死を味わわれた。六番目が、よみがえられ、天に上げられた方が、今信じる人々の中に住んでおられる、そういう方。七番目は、神の右の座に着かれた方が再び来られる。

この七つの特性をイエス様が持っておられます。神のひとり子の神さまがなぜ人になったか。なられたか。それはただ一つ。人間に対する神さまのあわれみによるんです。神さまはそのように仰ってる。

> エゼキエル書 33:11
> 11 わたしは決して悪者の死を喜ばない。かえって、悪者がその態度を悔い改めて、生きることを喜ぶ。悔い改めよ。悪の道から立ち返れ。

神さまからそむいている者が悪者です。その神にそむいた者の死を神さまは決して喜ばないと仰ってます。かえって、悔い改めて、生きることをわたしは喜ぶんだ。だから悔い改めなさい。それが人間に対する神さまのあわれみであります。

そして、神さまは人になったイエス様・・・神さまは御子を人にしてくださって、私たちのところにおくってくださったんです。イエス様は私たちの滅びの原因である罪をご自分のいのちで贖ってくださったわけです。ですから、私たちが自分の罪を認めて、神さまに悔い改めるときに、そのイエス様は、あなたの罪はわたしが代価を払ったから、もう赦されていますというふうに仰るんです。

死を免れることができて、そして永遠のいのちをいただく。天国の国籍を私たちが得るためには、私たちはイエス様以外に、この方以外にすがる方はいないんです。それ以外に道はないんです。最後に使徒の働き 4 章の 12 節をお読みして終わりたいと思います。

> 使徒の働き 4:12
> 12 この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかには、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。

私たちはしたがって、キリスト教を信じるんじゃないです。この御名だけ。イエス様を信じることによって、私たちは救われる。私たちが救われるべき御名としては、世界中でイエス様という御名以外には、人間には与えられていないわけです。そのイエス様がこの世に来てくださったことを感謝するのがクリスマスということです。私たちは再確認したいと思います。

信仰による決断

1993 年 11 月 2 日、テープ聞き取り
重田定義

> ヘブル人への手紙 11 章 7 節
> 7 信仰によって、ノアは、まだ見ていない事がらについて神から警告を受けたとき、恐れかしこんで、その家族の救いのために箱舟を造り、その箱舟によって、世の罪を定め、信仰による義を相続する者となりました。

今、兄弟に読んでいただきましたこのヘブル人への手紙の 11 章の 7 節から、今日は信仰による決断ということについてご一緒に考えてみたいと思います。神さまのあわれみによって、私たちは御子イエス様を信じる恵みにあずかりました。そして、神の子とされたわけですけれども、その私たちにも、毎日毎日の生活の歩みの中でいろいろなことが起こります。もう、次から次へと大小さまざまなことが起こります。

その中で、そのまま放っておいていいようなものもあるんですけれども、そうはいかない重要な問題、事がらについては、私たちはどうしたらいいかということを決断しなければいけないわけですね。決断して処理をしなければいけないわけです。で、この世の人であればこのときの決断というのは当然、人間の知恵によってされます。けれども神の子にされている私たちは、その場合に、右に行くか左に行くか、進むか止まるか、そういうふうな決断を自分の知恵によってではなく、信仰によって下さなければならないわけですね。

にも関わらず、ともすれば、そのようなときに私たちは自分自身の思いで物事を決めてしまうことが多いのではないでしょうか。私自身、そういうことが身にしみております。今日は、私たち神の子がなすべき信仰的決断、信仰に基づく決断についてそれがどのようになされるべきであるか。また、信仰によって決断する者に対して主なる神の恵みがどんなものであるか、それについて聖書から考えてみたいと思います。

これから少し、今日はみことばをたくさん引用します。まず信仰による決断というのは、どのようにしてなされなければならないかということについて、ご一緒に考えてみたいと思います。六つほどあります。

まず第一番目は、信仰による決断というのは祈りによってなされなければならないということであります。祈りによって決断しなければいけない。そのお手本、たいへん模範的なお手本があります。それはイエス様のゲッセマネの祈りにおいて見られるものであります。ルカの福音書 22 章の 42 節にその祈りが書かれております。このように主は祈っておられるわけです。

> ルカの福音書 22:42
> 42「父よ。みこころならば、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、みこころのとおりにしてください。」

神さまであって同時に人となって、私たちと同じ血と肉をもっておられたイエス様は、そのご自分の肉においては、できることならば、この十字架の苦しみは避けたいというふうに思われたわけです。もちろん、イエス様は人であると同時に神ですから、ご自分の力によってその杯を取り除くことは容易におできになった。ところがイエス様は、父なる神に、どうしたらよいでしょうかということを祈られて、その祈りによって決断を下されたんですね。祈りによって決断をすべきであるということの見本、お手本であります。

二番目、信仰による決断には、みこころが問われなければいけない。もちろん、最初のことと関連がありますけど、みこころが問われなければ決断を下すことができないということであります。

> エペソ人への手紙 5:15-17
> 15 そういうわけですから、賢くない人のようにではなく、賢い人のように歩んでいるかどうか、よくよく注意し、
> 16 機会を十分に生かして用いなさい。悪い時代だからです。
> 17 ですから、愚かにならないで、主のみこころは何であるかを、よく悟りなさい。

私たち、この地上を歩む神の子らに対して、サタンの攻撃は非常に激しいですね。その中を私たちは日々歩んでいるわけです。したがいまして、サタンの罠に陥らないためには、主のみこころをよく知る必要があります。

> 詩篇 86:11
> 11 主よ。あなたの道を私に教えてください。私はあなたの真理のうちを歩みます。私の心を一つにしてください。御名を恐れるように。

このようにみこころを問うこと。「あなたの道を私に教えてください。あなたのみこころを私に示してください。」ということですね。

> 詩篇 143:8
> 8 朝にあなたの恵みを聞かせてください。私はあなたに信頼していますから。私に行くべき道を知らせてください。私のたましいはあなたを仰いでいますから。

私たちのたましいがイエス様を見上げて、たましいの目で、霊の目でイエス様をしっかりと見つめて、そしてイエス様からのみこころを私たちが問うこと、行くべき道がみこころによって示されること、それを主に問う必要があります。信仰による決断にはみこころが問われなければなりません。

三番目、信仰による決断は御霊によってなされなければならない。御霊によって決断をしなければいけない。

> ローマ人への手紙 8:5-6
> 5 肉に従う者は肉的なことをもっぱら考えますが、御霊に従う者は御霊に属することをひたすら考えます。
> 6 肉の思いは死であり、御霊による思いは、いのちと平安です。

私たちは御霊に従う者であるはずです。したがいまして、私たちは信仰による決断は御霊によって、御霊から示されてすべきであります。

コリント人への手紙第一、2:11-12
11 いったい、人の心のことは、その人のうちにある霊のほかに、だれが知っているでしょう。同じように、神のみこころのことは、神の御霊のほかにはだれも知りません。
12 ところで、私たちは、この世の霊を受けたのではなく、神の御霊を受けました。それは、恵みによって神から私たちに賜わったものを、私たちが知るためです。

コリント人への手紙第一、2:16
16 いったい、「だれが主のみこころを知り、主を導くことができたか。」ところが、私たちには、キリストの心があるのです。

キリストの心、すなわち御霊によって私たちは決断をしなければいけないと思います。

四番目、信仰による決断はみことばに基づいてされることが必要であります。みことばに基づいた決断をしなければいけないということであります。

ヘブル人への手紙 4:12
12 神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄の分かれ目さえも刺し通し、心のいろいろな考えやはかりごとを判別することができます。

神のことばは生きていて、力があります。私たちの心のいろいろな考えやはかりごとを正しく判別することができます。神のみことばによって正しく判別することができる。したがいまして、神のみことばによって私たちは物事を決断しなければなりません。

五番目、信仰による決断は疑わずに心から主に信頼してなされなければならない。疑わずに心から主に信頼してなされなければならない。

ヤコブの手紙 1:5-6
5 あなたがたの中に知恵の欠けた人がいるなら、その人は、だれにでも惜しげなく、とがめることなくお与えになる神に願いなさい。そうすればきっと与えられます。
6 ただし、少しも疑わずに、信じて願いなさい。疑う人は、風に吹かれて揺れ動く、海の大波のようです。

主に信頼する。主の恵みを、主の私たちに対する愛を疑って、主に祈ってもなんにもなりません。私たちをご自分のいのちをもって救い出してくださった、その私たちを愛してくださる主に、疑わずに信頼して決断をすることが必要であります。

六番目、信仰による決断は持続されなければいけない。続かなければいけないということです。

ルカの福音書 9:61-62
61 別の人はこう言った。「主よ。あなたに従います。ただその前に、家の者にいとまごいに帰らせてください。」
62 するとイエスは彼に言われた。「だれでも、手を鋤につけてから、うしろを見る者は、神の国にふさわしくありません。」

イエス様のみことばによって祈って、御霊によって決断をくだした。「さあ、くだした決断を実行しよう。」と思っても、ちょっと待ってください。それよりも先にこのことをしなきゃいけないということは、信仰による決断が持続することにはならないですね。ここにありますように、「だれでも、手を鋤につけてから、うしろを見る者は、神の国にふさわしくない。」と主が仰っておられます。

詩篇 119:112
112 私は、あなたのおきてを行なうことに、心を傾けます。いつまでも、終わりまでも。

信仰によって示された決断は、主のみこころなんです。「私は、あなたのみこころを行なうことに心を傾けます。」というふうにこれを読み換えてもいいんです。いつまでも、終わりまでもです。心を傾けるというのは一瞬じゃないんですね。心を傾け続けなければいけない。いつまでも。一旦、主のみこころが示されて決断したならば、私たちは困難や試練に遭ったからといって、勝手に方針を変更したり、中止したりしてはいけません。

行き詰ったそのときにどうしたらいいか。そのときにはまた主に祈り、主のみこころを問い、みことばと御霊に導かれて、また決断をすればいいんです。自分で勝手に中止したり、変更したりしては、信仰による決断をしたとは言えない。

信仰に基づく、信仰による決断をくだす基本的な要因っていうのはいったい何でしょうか。それは、神の子とされた私たちのこの世にある間の日々の歩みというのは常に、常にいのちか死か、祝福かのろいか。言い換えれば、サタンか神かの選択の上に立っているからです。

どんな些細なことであっても、私たちは神の子としてそれを決断をしなければいけない。それは、必ずそこには神かサタンかのどちらかなんですね。そのことを私たちは知っております。そしてさらに、そういう物事の決断をするには、いかに自分が頼りにならないか、いかに自分が愚かで無力であるかということを私たちはよく知っているから。

箴言 14:12
12 人の目にはまっすぐに見える道がある。その道の終わりは死の道である。

本当にこれは真理であります。私たちがいくら自分の目で、肉の目で、「この道は正しい道だ。」というふうに自分で思って進んでも、結果的にはそれは、その道の終わりは死なんです。「自分で決めてはダメだ。」ということです。「自分の判断で決めると大変なことになります。」ということです。

箴言 20:24
24 人の歩みは主によって定められる。人間はどうして自分の道を理解できようか。

と、ここに書かれているとおりであります。私たちは聖書の中に多くの信仰の決断の例を見ることができますので、その例を、見てみたいと思います。

二通りありますね。信仰による決断ができなかった例を始めにちょっと見てみたいと思います。マルコの福音書 10 章 21 節、22 節。有名な例であります。金持ちの青年がイエス様に聞きに来たところであります。

マルコの福音書 10:21-22
21 イエスは彼を見つめ、その人をいつくしんで言われた。「あなたには、欠けたことが一つあります。帰って、あなたの持ち物をみな売り払い、貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むことになります。そのうえで、わたしについて来なさい。」
22 すると彼は、このことばに顔を曇らせ、悲しみながら立ち去った。なぜなら、この人は多くの財産を持っていたからである。

彼は残念なことに、信仰によって決断できなかった。いいところまで来たんですけど、イエス様のところに会いに来たところまでは良かったんです。ところがそのときにイエス様に言われたことばは、「これは信仰によって決断しなさい。」ということなんです。それが彼にはできなかった。彼は肉によって決断してしまった。

それでは二番目に、信仰に基づく決断がなされた例をご紹介します。それは最初の聖句のヘブル人への手紙の 11 章の 7 節が一つです。ノアの例です。

ヘブル人への手紙 11:7
7 信仰によって、ノアは、まだ見ていない事がらについて神から警告を受けたとき、恐れかしこんで、その家族の救いのために箱舟を造り、その箱舟によって、世の罪を定め、信仰による義を相続する者となりました。

神さまの声を聞いたときに、まだノアの住んでいる世界は、何の変化もなかったんですね。その神さまの警告がまったくまだ形としては現われていなかった。洪水の気もなかったわけです。ですから世の中の人はそれこそ、「平和だ。」って言って、飲んだり食べたり、嫁いだり、楽しくやっていた。

そのときに神さまは、「箱舟を造れ。」、たいへん大きな箱舟ですね。聖書を見ますとそれをノアは、人々から馬鹿にされながら神さまのみこころに従って造った。肉の思いではなくて、彼はまったく神のみこころに従って、従順に決断をくだし、それを実行したわけです。

ヘブル人への手紙 11:24-25
24 信仰によって、モーセは成人したとき、パロの娘の子と呼ばれることを拒み、
25 はかない罪の楽しみを受けるよりは、むしろ神の民とともに苦しむことを選び取りました。

彼のこの決断、これはまさに信仰による決断であります。肉による、人の思いによる決断だったらこんなことできるはずがないんです。彼はパロの娘に育てられた。もう将来を約束された人の栄誉を手に握っていた人だったんですね。けれどもモーセは、信仰による決断によって、ここにありますように、はかない罪の楽しみを受けるよりは、むしろ神の民とともに苦しむことを選んだんです。

私たちが、信仰によって決断をくだそうとして主を仰ぎ見たときに、主はそれを本当に心から喜んでくださる。そして、そのときに私たちに助言を与えてくださる。みこころを示してくださいます。そして正しい選択ができるように、正しい決断ができるように助けてくださいます。

なぜそんなことをしてくださるのか。いちばん最初にちょっと申し上げたように、それはご自分の血によって神の子としてくださった私たちを心から愛しておられるからです。そしてまた、このことを通して主ご自身がご栄光を現わされるからであります。詩篇の 32 篇の 8 節。主は私たちが信仰的決断をしようと主を見上げたときに、このように仰ってくださいます。

詩篇 32:8
8 わたしは、あなたがたに悟りを与え、行くべき道を教えよう。わたしはあなたがたに目を留めて、助言を与えよう。

さらに、こういうふうに仰っておられるわけです。

イザヤ書 30:21
21 あなたが右に行くにも左に行くにも、あなたの耳はうしろから「これが道だ。これに歩め。」と言うことばを聞く。

これは、私たちが主に心の目と耳を向けていないで、自分勝手に選択をしてるときは、こんなことはなさらない。私たちが、「本当に無力で愚かで、自分では何にも正しい判断も決断もできない。イエス様。助けてください。どうしたらいいでしょうか。」と言って、心の目と耳を向けるときに、そのときに、あなたの耳はうしろから「これが道だ。これに歩め。」と言うことばを聞くことができます。

詩篇 91:15
15 彼が、わたしを呼び求めれば、わたしは、彼に答えよう。わたしは苦しみのときに彼とともにいて、彼を救い彼に誉れを与えよう。

私たちは本当に、人生において多くの決断をしなければならないときがあります。しかし先ほど申し上げたように、この世の人ならばそれはおそらく、人の知恵で人に頼り、また自分の知恵に頼って決断をくだしてしまっていたと思うんですね。

しかも、それがきっと間違っていないと思っていました。けれども、今や私たちはこの世の人ではない。主によって生まれ変わった神の子であり、神の国を相続する相続

権をいただいている者であります。その私たちは人と同じように、世の人と同じように自分の知恵で決断をすることはできないということを知っていながら、つい忘れがちなんですね。

けれども、私たちは常に何事も決断するときに、今、申し上げたように、祈って、みこころを問うて、御霊とみことばによって正しい道を選ぶこと。それは何よりも私たちをいのちに代えて救ってくださったイエス様が望んでおられます。

無価値な者を顧みられる主

2000 年 3 月 7 日、テープ聞き取り
重田定義

サムエル記第二、9 章 8 節
8 彼は礼をして言った。「このしもべが何者だというので、あなたは、この死んだ犬のような私を顧みてくださるのですか。」

今、兄弟に読んでいただきました、このサムエル記第二の 9 章 8 節、これはメフィボシェテという人のことばであります。このことばから、無価値な者を顧みられる神さまと、その神さまの顧みの対象にされている私たちの態度について、これからごいっしょに少し考えてみたいと思います。

メフィボシェテというのはサウル王の子どもであるヨナタンのその子どもであります。彼が 5 歳のときにおじいさん、お父さんはペリシテ人と戦いました。その結果おじいさんもお父さんも戦死をしてしまいます。メフィボシェテも乳母に抱かれて逃げたのです。そのときに乳母が彼を落としてしまったので、それから足が不自由になってしまいました。サムエル記第二の 4 章の 4 節を見ますと、そのことが書いてあります。

サムエル記第二、4:4
4 さて、サウルの子ヨナタンに、足の不自由な息子がひとりいた。その子は、サウルとヨナタンの悲報がイズレエルからもたらされたとき五歳であった。うばがこの子を抱いて逃げるとき、あまり急いで逃げたので、この子を落とし、そのためにこの子は足なえになった。この子の名はメフィボシェテといった。

このように書かれております。サウル王とヨナタンが戦死してから 7 年後、7 年半になりますか、ダビデがこのユダとイスラエルを統一して王となりました。そしてダビデは、自分の無二の親友であったヨナタンのために、サウル家で生き残った者に何か恵みを施したいというふうに考えたのです。

そしていろいろ調べて、親友ヨナタンの子どもで、足の不自由なメフィボシェテがいるということを知りました。ダビデは人を遣わして彼を自分のところに連れて来させました。それがサムエル記第二の 9 章の 6 節から 8 節に書いてあります。

サムエル記第二、9:6-8
6 サウルの子ヨナタンの子メフィボシェテは、ダビデのところに来て、ひれ伏して礼をした。ダビデは言った。「メフィボシェテか。」彼は答えた。「はい、このしもべです。」
7 ダビデは言った。「恐れることはない。私は、あなたの父ヨナタンのために、あなたに恵みを施したい。あなたの祖父サウルの地所を全部あなたに返そう。あなたはいつも私の食卓で食事をしてよい。」
8 彼は礼をして言った。「このしもべが何者だというので、あなたは、この死んだ犬のような私を顧みてくださるのですか。」

メフィボシェテはかつては王子であったのです。王子として多くのしもべにかしずかれていたと思います。富も権力も保証されていました。ですから、この世的に言えばこの上ない恵まれた境遇にあったと言えます。ところが祖父と父親はペリシテ人との戦いに敗れて戦死をして、その結果、王家は没落しました。それ以来、彼はかつての家臣の家に身を寄せて、ひとり寂しく、ひっそりと暮らしていたのです。

その上、今ありましたように、幼いときに落とされて骨折した両足はもう萎縮をしてしまって、成長しても歩くことも不自由なからだになっておりました。このようにして、彼からは親も富も権力も健康もすべて取り去られてしまっていたのであります。彼はどんなに寂しく、みじめで、悲しい思いで、それまで生きて来たことでありましょうか。そのような自分を彼は「死んだ犬のような者だ」と思うほどであったのであります。

イスラエルではどういうわけか、犬というのは忌むべき動物として、人をさげすむと言いますか、そういう表現に使われております。箴言の 26 章の 11 節にもその犬のことが書かれているのです。

箴言 26:11
11 犬が自分の吐いた物に帰って来るように、愚かな者は自分の愚かさをくり返す。

この箴言のことばも、その犬をほめてはいないです。何回も懲りずに過ちをくり返すような愚かな者を犬に例えて軽蔑しているのです。日本ではどうかなと。犬というのはみんな可愛がって、ペットとして扱っているのですけれども、恥ずかしい行ないをした、あるいは恥ずかしい行ないのことを昔から「犬にも劣る」というふうにたとえます。そうなると、どうもこれは犬の評価というのも必ずしもいいとばっかりとは限らない。イスラエルと通じるようなものがあるなというふうに、ちょっと考えたのですけれども。

そういうふうな、評価の低い犬の、さらにその犬は死んだ犬ということになりますと、これは本当に価値のないもの、無価ものもいいところではないかと思います。すなわちメフィボシェテは、自分はもう死んだ犬に等しいと。もう生きていても何の価値もないという、自分をそういうふうに思うほど、自我が砕かれて、すくめられていたのではないかと思います。その彼に全く思いがけないことが起こったわけです。

それは今ごいっしょにお読みしましたように、ある日、ダビデ王から呼び出されて、これは何かまた怖いことでもあるのではないかなと思ってビクビクしながら、ダビデ王の前に出てひれ伏した彼にダビデ王は、メフィボシェテのおじいさんのサウル王の財産を全部、返そうと言ったばかりではなくて、いつもダビデ王の食卓で、王とともに食事をしてよいというふうに言われたわけです。おそらく彼は自分の耳を疑ったほど驚いたに違いありません。自分に与えられた恵みが信じられないという思いがしたと思うのです。そこで彼の口をついて出たことばが、「このしもべが何者だというので、あなたは、この死んだ犬のような私を顧みてくださるのですか。」という問いだったのであります。

このエピソードは私たちに二つのことを示唆しているのではないだろうかと思います。一つは、無価値な者を心にかけてくださる神さまと、御子イエス様の恵みであるということであります。もう一つは、その恵みをいただく私たちの態度であると思います。

まず第一に、無価値な者を顧みてくださる、無価値な者を心にかけてくださるイエス様、神さまについて考えてみたいと思います。出エジプト記の 33 章の 19 節で神さまはモーセに次のように仰せになっています。

> 出エジプト記 33:19
> 19「わたし自身、わたしのあらゆる善をあなたの前に通らせ、主の名で、あなたの前に宣言しよう。わたしは、恵もうと思う者を恵み、あわれもうと思う者をあわれむ。」

神さまの恵みというのは、このように私たち人間の基準とは全く違うのです。神さまのみこころ次第であります。神さまは私たちに何か価値があるから、私たちが何か努力をしたから、あるいはまた何か立派な行ないをしたからその報いとして恵んでくださるのではないのです。そうではなくて、ただ神さまご自身のお考え、ご自身の意思によって私たちを恵んでくださるのです。

イエス様が取税人のザアカイに示された恵みも、これはイエス様からの一方的なご意思による恵みでありました。よくご存知のザアカイですけれども、ごいっしょにもう一度、見てみたいのですが、ルカの福音書 19 章の 1 節から 6 節を見てみたいと思います。

> ルカの福音書 19:1-6
> 1 イエスは、エリコにはいって、町をお通りになった。
> 2 ここには、ザアカイという人がいたが、彼は取税人のかしらで、金持ちであった。
> 3 彼は、イエスがどんな方か見ようとしたが、背が低かったので、群衆のために見ることができなかった。
> 4 それで、イエスを見るために、前方に走り出て、いちじく桑の木に登った。ちょうどイエスがそこを通り過ぎようとしておられたからである。
> 5 イエスは、ちょうどそこに来られて、上を見上げて彼に言われた。「ザアカイ。急いで降りて来なさい。きょうは、あなたの家に泊まることにしてあるから。」
> 6 ザアカイは、急いで降りて来て、そして大喜びでイエスを迎えた。

このエピソードでもわかりますように、ザアカイはそれまでイエス様の評判を噂で聞いただけで、一度もイエス様にお会いしたいことがなかったのです。ですから、まさかイエス様から自分の名を呼ばれるということは思いもよらなかったのです。しかも、イエス様から、「きょうは、あなたの家に泊まることにしてあるから。」と言われて、彼は大喜びでイエス様を自分の家にお迎えした。

イエス様はザアカイが金持ちだから、あるいは町で尊敬されている立派な人物だから彼の家に泊まろうとはお思いにならなかったのです。そうではないのです。というのは、今のみことばに続いて 7 節から 8 節に次のように書かれていることでわかります。

> ルカの福音書 19:7
> 7 これを見て、みなは、「あの方は罪人のところに行って客となられた。」と言ってつぶやいた。
> 8 ところがザアカイは立って、主に言った。「主よ。ご覧ください。私の財産の半分を貧しい人たちに施します。また、だれからでも、私がだまし取った物は、四倍にして返します。」

と言っています。このようにイエス様は、彼が町の人たちからどんな目で見られているかを、とっくにご存知だったのです。そしてまた、ザアカイ自身も自分が町の人からどんな目で見られているか。自分を町の人たちが軽蔑している、またそして自分自身もどんなに悪いことをした人間かということもよく知っておりました。そんな価値のない自分のところにイエス様が来てくださって、そのような自分を顧みてくださったという恵みを、本当に覚えて感謝して、その気持ちが素直に、ここにありますように、「主よ。ご覧ください。私の財産の半分を貧しい人たちに施します。また、だれからでも、私がだまし取った物は、四倍にして返します。」という、そういう言い表わし方で、イエス様に罪の悔い改めを告白したのであります。

イエス様は好んで、この世的には価値のない、価値があるとは思えない人たちと食事をされております。そういう個所が聖書の中にもありますが、例えばマタイの福音書 9 章の 10 節から 13 節。ここにもそういう場面が描かれております。

> マタイの福音書 9:10-13
> 10 イエスが家で食事の席に着いておられるとき、見よ、取税人や罪人が大ぜい来て、イエスやその弟子たちといっしょに食卓に着いていた。
> 11 すると、これを見たパリサイ人たちが、イエスの弟子たちに言った。「なぜ、あなたがたの先生は、取税人や罪人といっしょに食事をするのですか。」
> 12 イエスはこれを聞いて言われた。「医者を必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。
> 13『わたしはあわれみは好むが、いけにえは好まない。』とはどういう意味か、行って学んで来なさい。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。」

有名な個所であります。イエス様が取税人や罪人といっしょに食卓に着くということは、ただ食事を共にするということを意味しているのではない。彼らと親しい交わりをするという意味を持っているのであります。

ここでイエス様ははっきりと、ご自分を必要としているのはこの世の基準から見て立派な人、価値のある人ではない。そうではなくて、罪人であり、また無価値な人であって、そのような人たちを招待するために、そしてまた、そのような人たちと親しく交わるためにこの世に来たというふうに仰っているのです。私たちはここに、罪人に仕えるためにおいでになった、愛とあわれみに満ち満ちたイエス様のお姿を見るのであります。

一方、このイエス様の恵みをいただく私たち、イエス様を信じたキリスト者の態度はどうであろうかということをここで考えてみたいと思います。私たちはイエス様の前に、自分は死んだ犬のような無価値な者というように、本当に砕かれ、すくめられた態度をいつも取っているであろうか。自分自身を振り返って見たときに、残念ながらそれどころか、イエス様の前に大きな顔をしている自分に気が付いて、ここを読んだときに、私はハッとしました。

私たちはイエス様からの大きな恵みをいただいて、イエス様に支えられながら歩んでいるのにも関わらず、そのことをすっかり忘れて、自分の足で歩いているような気持ちになっている自分に気が付いて、そしてまた口では「主の恵みを感謝します。」と言いながらその恵みを本当に感謝していない、そういう自分に気が付いて、ハッとするのであります。創世記節を見ますと、これはアブラハムが神さまにこう言っているのです。

> 創世記 18:27
> 27 私はちりや灰にすぎません

私たちはどうでしょうか。やはり、ちりや灰にすぎない。自分がちりや灰のように、吹けば飛んでしまうような価値のない者であるにも関わらず、そのような者をイエス様がご自分の尊いいのちを代価として、滅びから救い出してくださったということをすっかり忘れてしまって、イエス様が私たちを恵んでくださるのが当然であるかのような傲慢な態度でイエス様の前にいるのではないかなというふうに思わされるのであります。

自分がイエス様とともに食事の席に着くのは、全くふさわしくない者であるにも関わらず、そのような自分をイエス様が招待してくださったことがどんなに恐れ多いことか、どんなに光栄なことか、どんなに大きな恵みかということも忘れて、平気で平服のまま食卓に着こうとしているのではないかと思います。詩篇 8 篇でダビデは次のように言っています。

> 詩篇 8:3-4
> 3 あなたの指のわざである天を見、あなたが整えられた月や星を見ますのに、
> 4 人とは、何者なのでしょう。あなたがこれを心に留められるとは。人の子とは、何者なのでしょう。あなたがこれを顧みられるとは。

このように宇宙万物を創造され、支配しておられる偉大な神さまが、私たちのようなちっぽけな人間を特別に扱ってくださっているということへの驚きを込めて、ダビデは賛美をしております。これはしかし、いかに自分は神さまの前に無に等しい存在であるかを知って、そして主なる神さまを心から恐れ尊んで初めて、こういう賛美が口から出るのだと思うのです。さて、このメフィボシェテはどうなったか。第二サムエル記を見ますと、このように書かれております。

> サムエル記第二、9:13
> 13 メフィボシェテはエルサレムに住み、いつも王の食卓で食事をした。彼は両足が共になえていた。

彼はその後、王の都でダビデ王と同じ食卓で王とともにいつも食事をするという恵みにあずかっていたのであります。そして彼の足は依然として砕かれたままであったのであります。

それでは、イエス様を信じる私たちはどうか。私たちのことを振り返って考えてみたいのです。もし私たちが砕かれて、心を開いて、心の扉を開いていれば、イエス様は、王の王、主の主であるイエス様は私たちとともにいつも食事をしてくださる。これはそのように聖書に書かれております。

> ヨハネの黙示録 3:20
> 20 見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところにはいって、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。

しかしイエス様が仰っているように、せっかくイエス様がいつも私たちと食事をしたいと仰ってくださっているのに、私たちはそのイエス様を拒んで戸を開けない。イエス様を外に立たせているのではないか。これはイエス様を信じた者にイエス様は言っておられるわけですから、私たちのことであります。

イエス様は私たちにいつも同じテーブルで、いつも食事をしたいと仰っている。本当に恐れ多いことであり、光栄なことなのです。けれどもそのようなすばらしい恵みにあずかる私たちは、本当にこのメフィボシェテの足のように、いつも砕かれたままであるか。そうであれば本当にこの恵みに感謝して、あずかって、イエス様も親しい交わりをして喜ぶことができます。

私たちはいつも心砕かれて、すくめられて、いつも自分の力では一歩も歩けない足のなえた者であることを、いったい自覚しているのでしょうか。そうしたときにこそ、本当にそのような無価値な者を顧みて、食事をともにして、親しく語りかけてくださる、王の王、主の主であられるイエス様の限りない愛とあわれみを私たちは身に沁みて覚えることができて、そしてそのイエス様に心からの感謝をささげる者となれるのではないかと思います。

聖歌の 522 番。まさにこの歌詞は、地のちりに等しいような無価値な者に、救いの恵みを与えてくださったイエス様に対する賛美の歌、賛美の詩なのです。ごいっしょにこの歌詞をお読みして、ともに心から主を賛美して終わりたいと思います。

> 地のちりにひとしかり、なにひとつとりえなし
> 今あるはただ主の愛にいくるわれぞ
> みすくいを受けし罪人にすぎず、
> されどわれ人に伝えん
> 恵み深きイエスを
>
> 罪の世を望みなく、いくとせかまよいしを
> ただ君が愛もて救いませるわれぞ
> みすくいを受けし罪人にすぎず、
> されどわれ人に伝えん
> 恵み深きイエスを

もし恵みなかりせば、はや滅びはてしならん
あるはただ罪のみいさおしなきわれぞ
みすくいを受けし罪人にすぎず、
されどわれ人に伝えん
恵み深きイエスを

されば世にあるかぎり、主をうたい主を伝えん
滅びよりいのちにうつされたるわれは
みすくいを受けし罪人にすぎず、
されどわれ人に伝えん
恵み深きイエスを

どうもありがとうございます。

二度の御再臨

2001 年 10 月 16 日、吉祥寺学び会
重田定義

> ヘブル人への手紙 9 章 28 節
> 28 キリストも、多くの人の罪を負うために一度、ご自身をささげられましたが、二度目は、罪を負うためではなく、彼を待ち望んでいる人々の救いのために来られるのです。

おはようございます。先月のニューヨークとワシントンに対して行なわれた、恐るべきテロ攻撃にはじまった、ま、ブッシュ大統領が言う、いわゆる「新しい戦争」の情勢は連日、テレビや新聞で報じられております。先日、あるテレビの司会者は、「今度の戦いの本当の相手は、いったい誰なんだろう？そしてまた、この戦いはこの先どうなるだろう？議論をすればするほどわからなくなる。」と言っておりました。おそらく多くの方々は、この司会者と同じように、混乱して、恐れと不安を感じておられるのではないかと思います。けれども、イエスさまを信じる私たちは、「このことは、主のご再臨の近い証拠である。」ということを、信仰によって確信することができます。

そこで今日は聖書の今、読んでいただきました箇所から改めて、キリストの御再臨について、しかもそれは、一度ではない。二度ある。という、キリストの御再臨について、「いったいどうして二度も御再臨になるのか」、「またそれは、いつなのか」ということを、聖書のみことばに基づいてご一緒に考えてゆきたいと思います。

神の御子イエスさまが、最初にこの世においでになったのは、二千年前でありました。おいでになった目的は、今読んでいただきましたみことばの前半に、

> ヘブル人への手紙 9:28
> 28 キリストも多くの人の罪を負うために一度ご自身をささげられました。

とありますように、すべての人間の罪を、身代わりによって、十字架におかかりになり、ご自分を神様に供え物としてささげて、私たち人間を罪から、贖いだしてくださるためでありました。

しかし、冒頭のみことばの後半に、「イエスさまがまた来られる。」とあります。では、今度は何の目的でおいでになるのでありましょうか？また、おいでになるとすれば、その時期はいったいいつなのでありましょうか？実は、このことはイエスさまを信じている者に限らず、すべての人間にとって、大変に大きなしかも、重要な問題なのであります。イエスさまの御再臨については、聖書の多くの箇所に書かれているにもかかわらず、多くの教会は、信者にイエスさまの御再臨について、語っていません。従いまして、教会に行っていても、多くの人たちは、御再臨の重要性を知りません。また、集会の中にも「イエスさまの御再臨が、まだ信じられない」とおっしゃる方が、わずかですが、おられるのはたいへん悲しいことであります。もし、御再臨が信じられないのであれば、イエスさまが、私たちの罪を贖ってくださるために、十字架の上で死なれたことも、そして、私たちに永遠のいのちを与えてくださるために、三日目によみがえられたことも、信じられないことになります。

しかし、イエスさまの御再臨は、神様の私たちに対する、救いのご計画である十字架と復活のみわざを、締めくくるものとして、まことに重要なものなのであります。

そこで今日は、私たちにとってたいへんに重要な、イエスさまの御再臨についてみことばに基づいてご一緒に考えたいと思います。

先ほども申しましたけれども、イエスさまの御再臨は、二度あります。二回、あります。そして、二度の御再臨はその目的も時期も異なっております。

まず、一度目の御再臨の目的は、イエスさまを信じて、神の子どもとされた人々を、朽ちないきよい体によみがえらせて、天の御国にひきあげるために迎えに来てくださることであります。イエスさまは、十字架におかかりになる前に弟子たちに次のようにおっしゃいました。

> ヨハネの福音書 14:1-3
> 1 あなたがたは心を騒がしてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。
> 2 わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言っておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。
> 3 わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。

イエスさまはここで、「わたしは、あなたがたの永遠の住まいを天の御国に準備するために、いったん父なる神のみもとに行くけれども、準備ができたらまた来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます」とおっしゃっています。これこそが、一回目の御再臨の目的であります。この時は、イエスさまは地上までは降りては来られません。天から降りて来られますけれども、空中で聖徒たち、すなわち、イエスさまが十字架の上で流された血によって、罪あがなわれた人々をお迎えくださるのであります。ですから、これを「空中再臨」と申します。この御再臨の時にイエスさまを信じた人々はどのようにして天に引き上げられるのでありましょうか？聖書には次のように記されています。

> テサロニケ人への手紙第一、4:13
> 13 眠った人々のことについては、（・・・・これは、死んだ人々のことでありますが・・・・）兄弟たち、あなたがたに知らないでいてもらいたくありません。あなたがたが他の望みのない人々のように悲しみに沈むことのないためです。
> 14 私たちはイエスが死んで復活されたことを信じています。それならば、神はまたそのように、イエスにあって眠った人々をイエスといっしょに連れて来られるはずです。
> 15 私たちは主のみことばのとおりに言いますが、主が再び来られるときまで生き残っている私たちが、死んでいる人々に優先するようなことは決してありませ

ん。
16 主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、
17 次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。

イエスさまを信じた者が死にますと、霊はその瞬間に天の御国にあげられてイエスさまのみもとで憩うことができますけども、体は骨となってお墓に入れられます。けれども、いつまでも霊が裸の状態のままなのではありません。イエスさまは、ご自分の聖徒たちを迎えにおいでになる時には、天の御国にすでに召されていた聖徒たちの霊を連れて来られ、まず墓に眠っている彼らの骨となった体をイエスさまの復活の御体に似た朽ちないきよい体によみがえらせて、その体と霊を一つにして、一体にして、霊肉ともに完全なものとしてくださり、それからその時にまだ生き残っている、イエスさまを信じた人々の体をも、同様に朽ちないきよい体に変えられ、完全なものとしてくださいます。こうしてイエスさまを信じたすべての人々は、永遠に朽ちないきよい霊と体に変えられて、イエスさまとともに天の御国に引き上げられるのであります。

しかし、なぜ私たちの体がきよい朽ちない体に変えられなければならないのでありましょうか。その理由をパウロはコリントの教会の信者にあてた手紙で明らかにしております。

コリント人への手紙第一、15:50-57
50 兄弟たちよ。私はこのことを言っておきます。血肉のからだは神の国を相続できません。朽ちるものは、朽ちないものを相続できません。
51 聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみなが眠ってしまうのではなく、みな変えられるのです。
52 終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。
53 朽ちるものは、必ず朽ちないものを着なければならず、死ぬものは、必ず不死を着なければならないからです。
54 しかし、朽ちるものが朽ちないものを着、死ぬものが不死を着るとき、「死は勝利にのまれた。」としるされている、みことばが実現します。
55「死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。死よ。おまえのとげはどこにあるのか。」
56 死のとげは罪であり、罪の力は律法です。
57 しかし、神に感謝すべきです。神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました。

一回目の御再臨が起きる前に、イエスさまを信じれば、その瞬間にその方の霊はきよいものに生まれ変わります。けれどもまだ、体は不完全なんですね。そのために神様やイエスさまのみこころに反して、どうしても自分勝手な行動をとってしまうんです。それはすべてのキリスト者が体験するところであります。しかし、神様の住まわれるきよい永遠の御国で生きるためには、私たちは霊だけではなく、体もきよく、また朽ちないものでなければなりません。

神様は、そのためにイエスさまを信じる私たちにも復活のイエスさまと同じ、朽ちないきよいよみがえりの体を与えると、約束してくださっているのであります。この神様のお約束に基づいて、イエスさまは、罪を犯しやすい地上の血肉をもった私たちの体を、御再臨の時に、きよい朽ちない体によみがえらせてくださるのであります。そしてその時には、先に天に召され、その体が墓に葬られた私たちの愛する兄弟姉妹が、まず朽ちないきよい体によみがえり、続いて私たちも、朽ちない体が与えられて再会できるのですから、イエスさまを信じた者は、誰でもその日が一日も早く来るのを待ち望むのは、当然のことであります。

では、その日がいつ来るのでありましょうか。イエスさまは、「その日は、父なる神様だけがご存じである」とおっしゃっています。けれども、イエスさまは、その日が近くなるとどんな前兆があるのかを、弟子たちに教えてくださいました。

マタイの福音書 24:5-8
5 わたしの名を名のる者が大ぜい現われ、『私こそキリストだ。』と言って、多くの人を惑わすでしょう。
6 また、戦争のことや、戦争のうわさを聞くでしょうが、気をつけて、あわてないようにしなさい。これらは必ず起こることです。しかし、終わりが来たのではありません。
7 民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、
方々にききんと地震が起こります。
8 しかし、そのようなことはみな、産みの苦しみの初めなのです。

そしてまた、御再臨の近い前兆をいちじくの木のたとえによって、私たちに示唆されました。

マルコの福音書 13:28-29
28 いちじくの木から、たとえを学びなさい。枝が柔らかになって、葉が出て来ると、夏の近いことがわかります。
29 そのように、これらのことが起こるのを見たら、人の子(・・・・すなわちイエスさま・・・・)が戸口まで近づいていると知りなさい。

はじめに申しましたように、私たちは、アメリカの同時多発テロにはじまり、世界中を混乱に陥れている昨今の情勢から、イエスさまのたとえの通り、御再臨の日がますます迫っているということを、痛感することができます。

また、パウロは主の御再臨について、テサロニケ人への手紙第二で、次のように言っております。

テサロニケ人への手紙第二、2:1-6
1 さて兄弟たちよ。私たちの主イエス・キリストが再び来られることと、私たちが主のみもとに集められることに関して、あなたがたにお願いすることがあります。
2 霊によってでも、あるいはことばによってでも、ある

いは私たちから出たかのような手紙によってでも、主の日がすでに来たかのように言われるのを聞いて、すぐに落ち着きを失ったり、心を騒がせたりしないでください。
3 だれにも、どのようにも、だまされないようにしなさい。なぜなら、まず背教が起こり、不法の人、すなわち滅びの子が現われなければ、主の日は来ないからです。
4 彼は、すべて神と呼ばれるもの、また礼拝されるものに反抗し、その上に自分を高く上げ、神の宮の中に座を設け、自分こそ神であると宣言します。
5 私がまだあなたがたのところにいたとき、これらのことをよく話しておいたのを思い出しませんか。
6 あなたがたが知っているとおり、彼がその定められた時に現われるようにと、いま引き止めているものがあるのです。

「主の日」と申しますのは、イエスさまが神様に背く人々をさばくために御再臨される日であります。この「主の日」は、不法の人、あるいは、滅びの子と呼ばれる、キリストに逆らい、自分を神として、人々に礼拝させるような政治的権力者が現われた後に来ます。けれども、今はそのような者が現われるのを引き止める力が働いているから、まだ主の日は来ない、とパウロは言っているのであります。いったい、なぜ引き止められているのでありましょうか。それは、神の怒りの日、主の裁きの日、が来る前に、イエスさまはご自分を信じた人々、一人でも多くの人々をよみがえらせ、天に引き上げてくださるためなのであります。ま、この理由について、パウロは次のように言っております。

コロサイ人への手紙 1:21-22
21 あなたがたも、かつては神を離れ、心において敵となって、悪い行ないの中にあったのですが、
22 今は神は、御子の肉のからだにおいて、しかもその死によって、あなたがたをご自分と和解させてくださいました。それはあなたがたを、聖く、傷なく、非難されるところのない者として御前に立たせてくださるためでした。

自分の罪を心から悔い改め、砕かれて、イエスさまのみもとに救いを求めた者はイエスさまが、十字架の上で死んでくださった尊いいのちのあがないによって、ここに書かれておりますように、きよく、傷なく、非難されることのない者として神様から義と認められ、そして神様の御前に立つことができます。このように救われた私たちは、イエスさまによって、神様との和解が成立しておりますから、神様の怒りを受けることなく、主の裁きの日の前にイエスさまが迎えに来てくださって、天に引き上げられるのであります。

では、2 度目の御再臨の目的はいったいなんでありましょうか？

それは、神様に逆らい、神様の救いの御手であるイエスさまを、拒んだ者に対する神様の裁きのためであり、その時期は、先ほど申しましたように信じる者を天に引き上げられた後、今度は、地上にイエスさまがおいでになるのであります。従いまして、この御再臨を「地上再臨」と言います。地上再臨については聖書は次のように記しております。

テサロニケ人への手紙第二、1:7-9
7 そのことは、主イエスが、炎の中に、力ある御使いたちを従えて天から現われるときに起こります。
8 そのとき主は、神を知らない人々や、私たちの主イエスの福音に従わない人々に報復されます。
9 そのような人々は、主の御顔の前とその御力の栄光から退けられて、永遠の滅びの刑罰を受けるのです。

終わりの日には、サタンに操られて自分を神と称して、人々を惑わし、ま、強大な力によって、世界を手に治めた指導者、反キリストが、イエスさまに逆らう者たちを率いて、天から下って来られたイエスさまに率いられた天の軍勢と戦って、そしてイエスさまに滅ぼされます。その時の状況をヨハネはヨハネの黙示録の中で次のように記しております。

ヨハネの黙示録 19:11-14
11 また、私は開かれた天を見た。見よ。白い馬がいる。それに乗った方は、「忠実また真実。」と呼ばれる方であり、義をもってさばきをし、戦いをされる。
12 その目は燃える炎であり、その頭には多くの王冠があって、ご自身のほかだれも知らない名が書かれていた。
13 その方は血に染まった衣を着ていて、その名は「神のことば」と呼ばれた。
14 天にある軍勢はまっ白な、きよい麻布を着て、白い馬に乗って彼につき従った。

ヨハネの黙示録 19:19-21
19 また私は、獣と地上の王たちとその軍勢が集まり、馬に乗った方とその軍勢と戦いを交えるのを見た。
20 すると、獣は捕えられた。また、獣の前でしるしを行ない、それによって獣の刻印を受けた人々と獣の像を拝む人々とを惑わしたあのにせ預言者も、彼といっしょに捕えられた。そして、このふたりは、硫黄の燃えている火の池に、生きたままで投げ込まれた。
21 残りの者たちも、馬に乗った方の口から出る剣によって殺され、すべての鳥が、彼らの肉を飽きるほどに食べた。

ここにあります「獣」というのは、世界を支配し、人々に自分を神として礼拝させる、反キリストをさします。このようにイエスさまは神様に逆らう者を裁くために、地上に御再臨なさるのであります。今日はお読みしませんけれども、ヨハネの黙示録 20 章には、詳しく、「その時、サタンも捕らえられて、千年の間、地下に繋がれ、それから、千年の間、地上はイエスさまとイエスさまによってよみがえらされた信者たちが支配する平和な日々が続く、とあります。けれども、千年の後になって千年の後に、サタンは、再び地下の牢から解き放されて、そして、イエスさまと信者たちに最後の戦いを彼らは挑みますけれども、敗れて火と硫黄との池に投げ込まれて、永遠の苦しみを受ける。」、そのようにもう記されております。そしてまた、イエスさまの救いの御手を最後まで拒んだ人々は、この時に生きている者も、またそれまでに死んだ者も、すべて、イエスさまの前で裁かれて、サタンや、反キリストや、に

せ預言者と同様に火と硫黄の池に投げ込まれて、永遠に苦しむということも記されております。

以上に述べましたように、イエスさまの一度目の御再臨は、ご自分を信じた者を、神様の怒りの日、「主の日」が来る前によみがえらせて、天に引き上げるために迎えに来てくださるものであります。そして、二度目は、イエスさまを信じる者が天に引き上げられた後、サタンや、反キリストや、神様にそむき続けた者を裁いて、滅ぼすために地上までおりて来られるものなのであります。

確かに、イエスさまの御再臨は自分の頭で理解するゆうことは、不可能であります。しかし、これについて、ペテロは初代教会の信者に宛てた手紙の中で次のように言っております。

ペテロの手紙第二、3:3-9
3 まず第一に、次のことを知っておきなさい。終わりの日に、あざける者どもがやって来てあざけり、自分たちの欲望に従って生活し、
4 次のように言うでしょう。「キリストの来臨の約束はどこにあるのか。先祖たちが眠った時からこのかた、何事も創造の初めからのままではないか。」
5 こう言い張る彼らは、次のことを見落としています。すなわち、天は古い昔からあり、地は神のことばによって水から出て、水によって成ったのであって、
6 当時の世界は、その水により、洪水におおわれて滅びました。
7 しかし、今の天と地は、同じみことばによって、火に焼かれるためにとっておかれ、不敬虔な者どものさばきと滅びとの日まで、保たれているのです。
8 しかし、愛する人たち。あなたがたは、この一事を見落としてはいけません。すなわち、主の御前では、一日は千年のようであり、千年は一日のようです。
9 主は、ある人たちがおそいと思っているように、その約束のことを遅らせておられるのではありません。かえって、あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。

現在、世界で起こっている大変な情勢は、前に申しましたように、まさにこれは、御再臨がいよいよ迫っている前兆であるということを、私たちキリスト者は、みことばによって、また、信じる者の中に住んでくださるイエスさまの御霊によって、確信できるのは、本当に幸せであります。この情勢は、今後ますます悪化するでありましょうが、私たちは、次のヨハネの黙示録のみことばによって喜び勇んで主を待ち望む備えができるのは、なんという感謝なことでありましょうか。そのみことばをお読みいたします。

ヨハネの黙示録 22:6
6 御使いはまた私(・・・・ヨハネ・・・・)に、「これらのことばは、(・・・・今までヨハネの黙示録にずっと述べられていた言葉は・・・・)信ずべきものであり、真実なのです。」と言った。預言者たちのたましいの神である主は、その御使いを遣わし、すぐに起こるべき事を、そのしもべたちに示そうとされたのである。
7「見よ。わたしはすぐに来る。この書の預言のことばを堅く守る者は、幸いである。」

ヨハネの黙示録 22:10-11
10 また、彼は私に言った。「この書の預言のことばを封じてはいけない。時が近づいているからである。
11 不正を行なう者はますます不正を行ない、汚れた者はますます汚れを行ないなさい。正しい者(・・・・すなわち、主に忠実に従う者・・・・)はいよいよ正しいことを行ない、・・・・

ここで正しい正しいと言っておりますけれども、これはいわゆる私たちが考える「正しい」というのではなくて、ほんとに主に従いたい、心から願って、そして主を見上げて歩む者、でありますが

ヨハネの黙示録 22:11-14
11 ・・・・聖徒はいよいよ聖なるものとされなさい。」
12「見よ。わたしはすぐに来る。わたしはそれぞれのしわざに応じて報いるために、わたしの報いを携えて来る。
13 わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である。初めであり、終わりである。」
14 自分の着物を洗って、・・・・

これは、イエスさまの十字架の上で流された尊い血潮で罪を洗いきよめる、という意味であります。

ヨハネの黙示録 22:14
14 ・・・・いのちの木の実を食べる(・・・・これは、もちろん永遠のいのちの木の実を食べる・・・・)権利を与えられ、門を通って(・・・・天国の門を通って・・・・)都にはいれるようになる者は、幸いである。

ほんとに、私たちはこのみことばによって、喜び勇んで主を待ち望む備えをすることができます。そしてこのように大きな主のお恵みを受けた、私たちキリスト者は、御再臨を待ち望む者の心得として、ここに記されております。

ヨハネの黙示録 22:11
11 正しい者はいよいよ正しいことを行ない、聖徒はいよいよ聖なるものとされなさい。

と言われた主の仰せに忠実に従って、ますます心を引き締め、身を慎み、そして主が一人でも滅びることなく悔い改めることを望まれて、愛と忍耐を持って、裁きの日を延ばしておられる今のうちにですね、私たちのうちに住まわれる御霊から力をいただいて、一人でも多くの方々にイエスさまを真剣にあかししていかなければならない、ゆうことを心から切に願う次第であります。

どうも、ありがとうございました。

2002 年元旦御代田メッセージ

2002 年 1 月 1 日、御代田福音集会
重田定義

新しい年を迎えて、イエス様が、私たち信じる者を迎えに来て下さる時が、さらに近くなったことを、ご一緒に心からお祝いしたいと思います。21 世紀最初の年であった昨年に起こった、激動の世界情勢を目の当たりにして、信じる私たちは、主のおいで下さる日が目の前に迫っていることを実感として、味わったのであります。今年は、さらにどんな思いがけないことが起こるのか、わかりませんけども、何事が起ころうとも全き信頼をおいて歩んでまいりたいと思います。

さて年の初めにあたり、今日は、終わりの日がいよいよ間近に迫っている今のとき、イエス様を信じる私たちのうえに生じる、様々な患難の意味と、どのようにして対処したらよいかということにつきまして、みことばを通してご一緒に考えてみたいと思います。

ペテロは、その第一の手紙の中で次のように言っております。「罪を犯したために、懲らしめを受け、それを忍耐したとしても、なにも名誉なことではないけれども、イエス様に忠実に従っているために迫害されて、苦しみを受け、それを耐え忍ぶならば、その忍耐は主が喜ばれることである。あなたがたが召されたのは、実にそのためである。」

どうしてイエス様は、ご自分に従う者の忍耐を喜ばれるのでありましょうか。それはヤコブの手紙の第 1 章に、次のようにあるからであります。

> ヤコブの手紙 1:2-4
> 2 私の兄弟たち。さまざまな試練に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい。
> 3 信仰がためされると忍耐が生じるということを、あなたがたは知っているからです。
> 4 その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは、何一つ欠けたところのない、成長を遂げた、完全な者となります。

このように、試練を耐え忍ぶことによって、私たちの信仰が、神の子どもとして御国の相続者としてふさわしく成長するからであります。けれども、私たちが主から来る信仰の試練を忍耐し、その忍耐を完全に働かせることによって信仰が成長するためには、どうしても「原動力」が必要なのであります。では、その原動力とはいったい何でありましょうか。

忍耐を生む原動力の一つは、「イエス様に対する絶対的な信頼」であります。たとえどんな患難にあっても、イエス様の前にへりくだって、イエス様に完全に信頼して忍耐するならば、イエス様は必ず患難に打ち勝つ力を与えてくださるという、主に対するゆるぎない信頼であります。ダビデは、大きな患難にあったときにも次のように主を信頼しました。「私のたましいは、ただだまって神を待ち望む。私の望みは、神から来るからだ。神こそわが岩。わが救い。わがやぐら。私はゆるがされることはない。」

私たちが患難にあったときに、ダビデのように心騒がすことなく、イエス様の御前にへりくだり、静まってイエス様に心から信頼して祈るときに、イエス様は必ず、その祈りに答えて試練を耐え忍ぶ力を与えてくださいます。

> イザヤ書 30:15
> 15 神である主、イスラエルの聖なる方は、こう仰せられる。「立ち返って静かにすれば、あなたがたは救われ、落ち着いて、信頼すれば、あなたがたは力を得る。」

とある通りであります。忍耐を生む原動力の二つ目は、「忍耐する信者に対する主の報い、ご褒美、の約束」であります。イエス様は、ルカの福音書 21 章で、

> ルカの福音書 21:19
> 19 あなたがたは、忍耐によって、自分のいのちを勝ち取ることができます。

と、忍耐する者に永遠のいのちのご褒美を約束しておられます。またヤコブも、信仰の試練を耐え忍ぶ信者の受ける報酬について、その手紙の第 1 章で次のように言っております。

> ヤコブの手紙 1:12
> 12 試練に耐える人は幸いです。耐え抜いて良しと認められた人は、神を愛する者に約束された、いのちの冠を受けるからです。

このように、信仰の試練を耐え忍んで主に従い続けた者には、イエス様のご再臨のときに、ご褒美として朽ちないいのちの冠をいただくのであります。何というすばらしいご褒美ではありませんか。忍耐を生む原動力の三つ目は「御霊なるイエス様が、いつも私たちとともにいて、祈ってくださる。という確信」であります。ローマ人への手紙の 8 章に、

> ローマ人への手紙 8:26
> 26 御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてくださいます。

と、ある通りであります。忍耐を生む最大の原動力は、「イエス様のご再臨の希望」であります。私たちキリスト者は、主のご再臨のときには自分の体が、よみがえりの主と同じ朽ちない聖い体に変えられるという、確かな希望を与えられております。信じる者が、どんなに体のよみがえりを待望しているかを、パウロはローマ人への手紙の 8 章で、次のように言い表わしております。

> ローマ人への手紙 8:23-25
> 23 御霊の初穂をいただいている私たち自身も、心の中でうめきながら、子にしていただくこと、すなわち、私たちのからだの贖われることを待ち望んでいます。
> 24 私たちは、この望みによって救われているのです。目に見える望みは、望みではありません。だれでも目で見ていることを、どうしてさらに望むでしょう。

25 もしまだ見ていないものを望んでいるのなら、私たちは、忍耐をもって熱心に待ちます。

主が、信じる者を、これから起ころうとしている大患難の前に、天に携え上げてくださる空中再臨は、主の確かなお約束であるがゆえに、私たちキリスト者は、ご再臨を、忍耐と希望をもって熱心に待ち望むことができます。ヘブル人への手紙 10 章では、神様によって義とされたキリスト者が、永遠の朽ちない体を与えられるという、約束のこのご再臨のときは、遅くなることはないから、信仰の試練を恐れずに希望をもって耐え忍ぼうと、次のように励ましております。

ヘブル人への手紙 10:36-39
36 あなたがたが神のみこころを行なって、約束のものを手に入れるために必要なのは忍耐です。
37「もうしばらくすれば、来るべき方が来られる。おそくなることはない。
38 わたしの義人は信仰によって生きる。もし、恐れ退くなら、わたしのこころは彼を喜ばない。」
39 私たちは、恐れ退いて滅びる者ではなく、信じていのちを保つ者です。

またヤコブは、ご再臨を待ち望むキリスト者を、農作物の実りを忍耐して待ち望む農夫にたとえて、主のご再臨はもうすぐだから、心を強くして、そのときまで耐え忍びなさいと、その手紙の 5 章に書いております。

ヤコブの手紙 5:7-8
7 こういうわけですから、兄弟たち。主が来られる時まで耐え忍びなさい。見なさい。農夫は、大地の貴重な実りを、秋の雨や春の雨が降るまで、耐え忍んで待っています。
8 あなたがたも耐え忍びなさい。心を強くしなさい。主の来られるのが近いからです。

このようにして、イエス様は多くのみことばによって、私たちを力づけてくださるだけではなく、ともすれば信仰によって歩む足取りが、弱くなりがちな私たちに、ご再臨が本当に近いという前兆を、今世界中で起こっております
様々な現象によって、信じる私たちの目に見えるかたちではっきり示してくださり、だから、希望をもって忍耐するようにと、力を与えてくださっているのであります。

信仰における忍耐は、これまでご一緒に考えてきましたように、ただ単に自力で忍耐するというような、確信のない、望みのない、また終わりの見えない空しい忍耐ではありません。
主ご自身が、忍耐する力を私たちに与えてくださり、また主がともにいて、支え、励ましていてくださいますから、その主に信頼して忍耐すれば、必ず勝利することができる、という確信と、希望に満ちた忍耐であります。

終わりの日、ご再臨の日が、間近い今のときに、私たちは主の御心に改めて心から感謝し、主のご愛に応え、主が約束されたご再臨の日を待ち望みつつ、与えられた信仰の試練を、喜んで忍耐することができる者に、成長させていただけますように、新しい年のはじめにあたって、ご一緒に御霊の満たしとお導きを、心から祈りたい、と思うしだいであります。

主のみこころを行なうことの喜び

2002 年 7 月 14 日、吉祥寺福音集会
重田定義

詩篇 40 篇 8 節
8 わが神。私はみこころを行なうことを喜びとします。
あなたのおしえは私の心のうちにあります。」

今、司会の兄弟に読んでいただきました、この詩篇 40 篇というのは、イスラエルの王のダビデが歌った賛美の歌であります。ダビデはこのように神様の御心を行なうことが、自分の喜びとなっているというふうに神様に感謝いたしました。今日は、神様の御心に従うことを喜びとする大切さと、どうしたらそのようになれるかということについて、ご一緒に考えてみたいと思います。

この問題を考えるにはまず、愛と恵みに富み給う創造主なる神様が、何のために愛するご自分のひとり子の神であるイエス様を、人としてこの世に遣わし、十字架にはり付けにされたのか、ということを知る必要があります。皆様方の中には、「そんなことは分かっている。神様がご自分に対する背きの罪によって、滅びの死に定められている私たち人間を哀れんでくださってそして、御子イエス様を罪の身代わりに十字架に架けて、私たちの罪を赦してくださるためだろう。」と、おっしゃる方が少なくないと思います。全く、その通りなんです。

しかしながら、ただ、人間の罪の赦しのためにだけ、神の御子の尊い血が流されたのではないんです。十字架の贖いのみわざは、単に人間の罪の赦しのためにだけなされたのではありません。では、いったい何のためでありましょうか。それにはまず、神様が人間をお造りになられた目的を知らなければなりません。

親を心から愛する親孝行の子どもは、自分を愛してくれる親を喜ばすことによって、親の喜ぶ顔を見ると自分も嬉しくなります。残念なことに、親孝行という言葉は久しく耳にしなくなりましたけれども、神様は正にそのような親しい親子の関係をお望みになって、最初の人間アダムを創造されたのであります。

ところがアダムはサタンにそそのかされて、その結果、神様の御心を守り行なうことを喜ぶどころか、神様の御心に逆らい、自分の思いを満たすことを喜ぶ、という神様に対する背きの罪を犯してしまいました。そのために神様の怒りを受けることになってしまったのであります。その結果、人間は死ぬべき者と神様に定められたんですね。

しかも神様に背いたその時から、アダムの中に入った罪はアダムの罪の遺伝子として、アダムの子孫である私たち人間すべてに受け継がれたために、人間は神様の御心に従うことを喜ぶのではなく、自分の肉の願望を満たすことに喜びを覚えるという、罪の性質を持って生まれついてしまったのであります。神様がご自分の御子を十字架に架けられたのは、このように神様から離れ背いた人間を罪のの中から救い出し、再び神様を愛し神様の仰せを守り行なうことを喜びとするような神のの子どもにふさわしい人間、そして神様と共に永遠に生きる人間として、神様のみもとに立ち返らせるためでありました。

ご自分の愛の対象としてお造りなったにもかかわらず、神様に背いた人間に対して、そのような御心を持って、御子イエス様を私たちの罪の身代わりにしてまでも、私たちを救い、ご自分の許に立ち返らせ、創造した初めから望んでくださったように、人間に対して親と子のような考えられないほどの特権を、私たち再び与えようと望んでくださるということは、何という哀れみ深い神様のご愛でありましょうか。

以上のように、人間に対する神様の救いの目的は、私たちの犯した背きの罪によってもたらされた、死と滅びからの救出だけではありません。御子イエス様を救い主と信じ、神様の憐れみによって、神様の子どもという特権を与えられた者が、神様の深い愛の御心を知って、その御心に従うことを自分の喜びとすることであります。これが私たち人間を限りない愛をもって愛し続けてくださる主なる神様の御心なのであります。

御子イエス様が十字架におかかりになったのは正に、この神様の御心のためでありました。これについてパウロはコリントの教会の信者に宛てた手紙で次のように言っております。

コリント人への手紙第二、5:15
15 また、キリストがすべての人のために死なれたのは、生きている人々が、もはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえった方（・・・・すなわち、イエス様・・・・）のために生きるためなのです。

パウロの言う通り、イエス様を信じる者はもやは自分のために生きるのではなく、自分のために十字架にかかって、罪の代価を支払ってくださり、また復活されて永遠の命を与えてくださったイエス様のために生きるのであり、これこそ神様の御心喜ばす神の子どもとされたキリスト者の生き方なのであります。しかし、そのためには肉の思いを満たすことだけを考え、それを喜びとするという自己中心のわがままに満ちた自分に、はっきりと気が付かなければなりません。そして、そのわがままが神様の御前に粉々に砕かれる必要があります。

人が心砕かれて、神の前にどうしようもない自己中心の傲慢な者である、そういう自分を知った時に、初めて神様の前に人はへりくだることができ、そのような自分を主のご支配にお委ねしたい、と 初めて願うようになることができるからであります。

次に、信じる者のうちに住んでくださっている御霊によって、キリスト者の霊が強められ導かれる、ということがどうしても必要になります。なぜならば御霊を宿しているキリスト者も、この世に置かれている間はなお、肉の衣を着ているために、自分を主に明け渡したつもりでも、依然として肉の欲望によって動かされ易いからであります。ですから、パウロは次のように私たちキリスト者に勧めております。

ガラテヤ人への手紙 5:16-25
16 私は言います。御霊によって歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。

17 なぜなら、肉の願うことは御霊に逆らい、御霊は
肉に逆らうからです。この二つは互いに対立していて、
そのためあなたがたは、自分のしたいと思うことをす
ることができないのです。
18 しかし、御霊によって導かれるなら、あなたがたは
律法の下にはいません。
19 肉の行ないは明白であって、次のようなものです。
不品行、汚れ、好色、
20 偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派
心、分裂、分派、
21 ねたみ、酩酊、遊興、そういった類のものです。前
にもあらかじめ言ったように、私は今もあなたがたに
あらかじめ言っておきます。こんなことをしている者た
ちが神の国を相続することはありません。
22 しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、
善意、誠実、
23 柔和、自制です。このようなものを禁ずる律法は
ありません。
24 キリスト・イエスにつく者は、自分の肉を、さまざま
の情欲や欲望とともに、十字架につけてしまったので
す。
25 もし私たちが御霊によって生きるのなら、御霊に
導かれて、進もうではありませんか。

肉の衣を着ております私たちキリスト者は、パウロが勧めておりますように、いつも御霊に拠り頼み御霊の力によって強められて、肉の欲望の一つ一つに打ち勝って、霊的に成長することができるように、日々、祈り続けることがどうしても必要であります。次に信者が神様の御心を喜ばすには、信じたことによって罪の奴隷から解放され、与えられた自由を神様に従うために用いることを自分の喜びとすることであります。神様はイエス様を信じる者に完全な自由を与えてくださいました。そのことはイエス様が次のようにおっしゃっている通りであります。

ヨハネの福音書 8:36
36 ですから、もし子があなたがたを自由にするなら、
あなたがたはほんとうに自由なのです。

イエス様はこのように、信じる者に約束をしてくださっております。みことばの通り、イエス様を信じた瞬間に、私たちは罪の束縛から完全に解放されて、罪からも死からも自由になったのであります。しかしもし私たちがその自由を、自分の思いのままに使えば、また罪を犯すことになります。ペテロはイエス様によって信じる者に与えられた自由を、どのように用いるかについて、初代教会の信者に次のように勧めております。

ペテロの手紙第一、2:16
16 あなたがたは自由人として行動しなさい。その自
由を、悪の口実に用いないで、神の奴隷として用いな
さい。

また、パウロはローマの信者に宛てた手紙の中で、ペテロの言っております神の奴隷と同じ意味で、義の奴隷という言葉を使って、次のように言っております。

ローマ人への手紙 6:17-19
17 神に感謝すべきことには、あなたがたは、もとは
罪の奴隷でしたが、伝えられた教えの規準に心から
服従し、
18 罪から解放されて、義の奴隷となったのです。
19 あなたがたにある肉の弱さのために、私は人間的
な言い方をしています。あなたがたは、以前は自分
の手足を汚れと不法の奴隷としてささげて、不法に進
みましたが、今は、その手足を義の奴隷としてささげ
て、聖潔に進みなさい。

奴隷には買い取られた主人に、誠心誠意、仕えることが求められております。イエス様を信じる私たちキリスト者は、主イエス様に命の代価を支払っていただいて、買い取られた者ですから、代価を支払ってご自分のものとしてしてくださった、ご主人である義なる神様と、御子イエス様に心から仕えるようにと求められているのであります。しかし、残念なことには、キリスト者の中には、救われた後の自分に神様が自分に何を望んでおられるかを、よくご存知ない方が少なくありません。

ヘブル人への手紙 5:12-13
12 あなたがたは年数からすれば教師になっていな
ければならないにもかかわらず、神のことばの初歩を
もう一度だれかに教えてもらう必要があるのです。あ
なたがたは堅い食物ではなく、乳を必要とするように
なっています。
13 まだ乳ばかり飲んでいるような者はみな、義の教
えに通じてはいません。幼子なのです。

このように書かれております。このように指摘されている信者は、神様の御心がよくわからない信仰の幼い信者であります。神様の愛と恵みを受けて、ただ喜んでいるだけでは成長しない幼子のような信者であって、それでは神様の御心、すなわちイエス様がどんな方か、私たち人間のために何をしてくださったかを、人々に証しすることはできないんですね。

親がもし、自分の子が生まれても成長しないのを見たら、どんなに悲しむことでありましょう。そのように生まれたままで成長しない信者は、神様を悲しませる者となってしまいます。信仰的な幼子の状態のままで、霊的に成長しない信者は、なにか困難な問題が起こるとそのことに心が奪われ、すぐにイエス様から心が離れて自分の肉の思いに従ってしまいます。そのような信者についてイエス様はたとえによって、次のようにおっしゃっております。

マタイの福音書 13:20-22
20 また岩地に蒔かれるとは、みことばを聞くと、すぐ
に喜んで受け入れる人のことです。
21 しかし、自分のうちに根がないため、しばらくの間
そうするだけで、みことばのために困難や迫害が起こ
ると、すぐにつまずいてしまいます。
22 また、いばらの中に蒔かれるとは、みことばを聞く
が、この世の心づかいと富の惑わしとがみことばをふ
さぐため、実を結ばない人のことです。

ヘブル人への手紙 6:1
1 ですから、私たちは、キリストについての初歩の教
えをあとにして、成熟を目ざして進もうではありません
か。

と、いうふうに勧めておりますように、私たちはいつまでも信仰の幼子に留まるのではなくて、信仰の成長した者、すなわち神様の御心を知ってそれに従うことによって、主が喜んでくださることを自分の一番の喜びとする、霊的に成長したキリスト者になりたいものであります。

では、どうしたら神様の御心を知ることができるのでありましょうか。それにはまず、神の前にへりくだって、霊の耳を主に向け、心から「どうぞ、御心をお示しください。」と、へりくだった態度を取ることが必要であります。預言者サムエルの例を見てみたいと思います。

サムエル記第Ⅰ、3:7-10
7 サムエルはまだ、主を知らず、主のことばもまだ、彼に示されていなかった。
8 主が三度目にサムエルを呼ばれたとき、サムエルは起きて、エリのところに行き、「はい。ここにおります。私をお呼びになったので。」と言った。そこでエリは、主がこの少年を呼んでおられるということを悟った。
9 それで、エリはサムエルに言った。「行って、おやすみ。今度呼ばれたら、『主よ。お話しください。しもべは聞いております。』と申し上げなさい。」サムエルは行って、自分の所で寝た。
10 そのうちに主が来られ、そばに立って、これまでと同じように、「サムエル。サムエル。」と呼ばれた。サムエルは、「お話しください。しもべは聞いております。」と申し上げた。

もし、私たちが神様から御心を示していただきたいと心から望むならば、このサムエルのように、神の御前にへりくだりと従順の心を持って、「主よ。お話しください。私は聞いております。」という、姿勢を取ることが必要であります。そうしたとき、かならず神様は、ご自身の御心を知ることができるように私たちを導いてくださいます。このように神の御前に心くだかれ、へりくだって、御心を求める姿勢が整えらた者は、祈りによって神様の御心を問う者となります。祈りは、神様と神のしもべとされた者の交わりのために、神様が備えてくださったもっとも大きな恵みの手段であります。

しかし、私たちキリスト者は、この祈りをどのように、日々の信仰生活に活かしているでありましょうか。ともすれば、「こうしてください。」「ああしてください。」と、いうような自分の肉の思いによる祈りが多くなってしまうのではないでしょうか。あるいは、心を尽くして御心を問う祈りではなく、習慣的、惰性的な祈りになってしまっているのではないでしょうか。詩篇の作者は次のように祈っております。

詩篇 143:8
8 朝にあなたの恵みを聞かせてください。私はあなたに信頼していますから。私に行くべき道を知らせてください。私のたましいはあなたを仰いでいますから。

詩篇 143:10
10 あなたのみこころを行なうことを教えてください。あなたこそ私の神であられますから。

このように祈るときに、主は御霊によって、御心をその人に現わされて、行くべき道を啓示してくださいます。イザヤ書 30 章 21 節、これは有名な箇所ですが

イザヤ書 30:21
21 あなたが右に行くにも左に行くにも、あなたの耳はうしろから「これが道だ。これに歩め。」と言うことばを聞く。

と、書いてある通りであります。ここで私たちキリスト者が注意しなければならない、大切なことがあります。それは次のことであります。私たちは信仰の歩みにおいて、とかく自分の思い通りにことが進むときに、「主の御心にかなっている。」と思い込み、反対に、自分が思ったようにことが運ばない場合には、「これは御心ではない。」と、勝手に考えてしまうことがないでありましょうか。

しかし、神様の御心は必ずしも私たち思いとは一致しません。いや、むしろ私たちの思いとは、逆であることが少なくありません。神様の御心は、私たちの思いをはるかに超えて高いので、人間の知恵では知り得ないからであります。イザヤ書で主は次のように仰せになっております。

イザヤ書 55:9
9 天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。

このようにある通りであります。ここで、パウロとテモテの例を見てみたいと思います。

使徒の働き 16:6-8
6 それから彼らは、アジヤでみことばを語ることを聖霊によって禁じられたので、フルギヤ・ガラテヤの地方を通った。
7 こうしてムシヤに面した所に来たとき、ビテニヤのほうに行こうとしたが、イエスの御霊がそれをお許しにならなかった。
8 それでムシヤを通って、トロアスに下った。

このように記されております。パウロたちは、二度にわたって、自分たちの伝道の行く先を変更させられました。その理由は彼らには分かりませんでしたけれども、彼は素直に、御霊に示されるままに目的地を反抗することが神様の御心であると知って、それにしたがったのであります。

私たちは自分の肉にとって都合の良い方を選びたいときに、「御心だから。」という理由をつけて、自分の考えを正当化することがないでしょうか。私たちは聖霊のお導きを大切にして、何が本当に主の御心なのか、熱心に祈り求め、教えをいただく必要があります。そして、祈りを通して教えていただいたならば、自分の思いを捨てて、主の御心に従う決心をして、それを実行することが大切であります。

前にも申しましたように、私たちキリスト者は、イエス様に罪の代価を払って買い取られた主の奴隷、主のしもべであります。その主の奴隷、しもべに対して、イエス様は

次のように言ってくださるんですね。

> マタイの福音書 12:50
> 50 天におられるわたしの父のみこころを行なう者はだれでも、わたしの兄弟、姉妹、また母なのです。

もはやイエス様は、主の御心に従う者に対して、しもべとは仰せになっていないんですね。「わたしの兄弟、姉妹、また母のなのです。」、と言ってくださるのであります。本当に何というありがたいみことばでありましょうか。

私たちはほんとに弱い者で、自分の力では到底、主の深い御心を知り、それに従うことはできませんけれども、「神様の御心を行なう者はだれでも、わたしの兄弟、姉妹、また母なのです。」と言ってくださるイエス様にただ感謝して、主の前に心からへりくだって、主にお聞きすることによって御心を知って、且つ、御心に従うことによって、本当の霊的な喜びを体験することができるように、御霊によって、私たちの信仰の姿勢を整えていただく必要があります。

これまでに申しましたように、神様はご自分の御子イエス様の尊い命によって、私たち人間を滅びの罪から救い出してくださいました。そして、その大きなご愛ののゆえに、神の子どもとしていただいた私たちキリスト者が、主の御心を知り、御心を喜ぶようにと、望んでおられるのであります。もし私たちキリスト者が、神様に従いたいと心から願って、祈って日々の歩みを続けるならば、必ず御霊なるイエス様はの私たちの霊を強め、成長させてくださる。ますます、それによって深く神様の御心を知り、そしてそれに従うことを喜びとする者としてくださる筈であります。

> ペテロの手紙第一、4:2
> 2 こうしてあなたがたは、地上の残された時を、もはや人間の欲望のためではなく、神のみこころのために過ごすようになるのです。

ペテロは、ここで初代教会の信者にこのように書き送っております。このようなキリスト者は、本当に主によって祝福された者であります。ご再臨が間近い今、私たちも残された地上の時を、このように豊かに祝福されて主の御心のために過ごし、迎えに来てくださるイエス様にお会いできたなら、どんなに喜ばしいことでありましょうか。もう一度、最初に読んでいただいた詩篇 40 篇の 8 節をお読みして終わりたいと思います。

> 詩篇 40:8
> 8 わが神。私はみこころを行なうことを喜びとします。あなたのおしえは私の心のうちにあります。」

どうもありがとうございました。

御心にかなう信者の生き方とは

2003 年 10 月 21 日、吉祥寺学び会
重田定義

> コリント人への手紙第二、6 章 14 節-18 節
> 14 不信者と、つり合わぬくびきをいっしょにつけてはいけません。正義と不法とに、どんなつながりがあるでしょう。光と暗やみとに、どんな交わりがあるでしょう。
> 15 キリストとベリアルとに、何の調和があるでしょう。信者と不信者とに、何のかかわりがあるでしょう。
> 16 神の宮と偶像とに、何の一致があるでしょう。私たちは生ける神の宮なのです。神はこう言われました。「わたしは彼らの間に住み、また歩む。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。
> 17 それゆえ、彼らの中から出て行き、彼らと分離せよ、と主は言われる。汚れたものに触れないようにせよ。そうすれば、わたしはあなたがたを受け入れ、
> 18 わたしはあなたがたの父となり、あなたがたはわたしの息子、娘となる、と全能の主が言われる。」

いみじくも司会の兄弟が言われたことは、私も家内から同じように言われております。「二重人格」という表現ではなくて、「あなたは、メッセンジャーとしてここで立って言うこととと、日常生活で言うこととととは違うじゃない。」「まことに、その通り」、と言わざるを得ないんですね。しかしその時、家内は、「でも、そういうことをあなたに言うのは、私だけですよ。他の兄弟姉妹は思ってても言わない。」、まことにその通りで、良き助け手を与えられて、兄弟も私も、与えられておることを大いに感謝しております。

今日は兄弟に読んでいただきました、この聖書の箇所から「イエス様を救い主と信じた者がこの世を歩む姿勢について」、別の言い方をしますと、「何が主の御心にかなうキリスト者の生き方であるか」ということについて、ご一緒に考えてみたいと思います。

ここに「くびき」という言葉が出てまいりますけれども、これは昔、牛や馬を使って穀物をひいたり、あるいは畑を耕したりする時に、牛や馬の首につけて鋤や車を引かせるために使う、木で作った横木のことをいいます。そして「くびきをともにする」というのは、一本のくびきに二頭の牛、あるいは馬を結びつけて仕事をさせることをいいます。もし牛どおし、あるいは馬どおしを一つのくびきにつければ、これは同じ種類の動物ですから、つりあってありますから足並みがそろいます。そして仕事がうまく進みますけれども、牛と馬とを同じ一つのくびきにつければ、当然、足並みがばらばらになって仕事になりません。「つり合わないくびきをともにする」とは、こういうことをいう言葉であります。

ではイエス様を信じた者と、イエス様をまだ信じない者とがくびきをともにすることができないのは、一体なぜでありましょうか。信者と不信者とはどうしてつり合わないくびきなのでありましょうか。パウロは、今読んでいただきました箇所で、

> コリント人への手紙第二、6:14-16
> 14 正義と不法とに、どんなつながりがあるでしょう。光と暗やみとに、どんな交わりがあるでしょう。
> 15 キリストとベリアルとに、何の調和があるでしょう。信者と不信者とに、何のかかわりがあるでしょう。
> 16 神の宮と偶像とに、何の一致があるでしょう。私たちは生ける神の宮なのです。

と言っておりますけれども、まさにここに対比されているほどに、イエス様を信じた者と信じない者は違うのであります。「正義」とか「光」は、まことの神、および御子イエス様の属性を示しております。一方「不法」あるいは「暗やみ」は、ベリアル、すなわちサタンの属性を表現しております。イエス様を信じた者は、イエス様が十字架の上で流された尊い血によってきよめられた結果、今、読んでいただきました箇所のところで神様がおっしゃったように、「神の子ども」として、また「生ける神の宮」として生きるように導かれます。一方、イエス様を信じない者は、自分では気がつかなくても、この世の支配者であるサタンに支配され、自分を第一とした自分中心の生き方、すなわちこの世だけを愛するという生き方をします。

ですからイエス様を信じた者と信じない者が、いくら心を合わせて一緒に生活しよう、一緒に行動しようとしてもそれはつり合わぬくびきをつけることになり、目指す方向も歩み方も違いますから、一致することはできません。だから神様は信者に、「彼らの中から出て行き、彼らと分離せよ」とおっしゃるのであります。しかし、「彼らの中から出て行き、彼らと分離せよ」というのは一体どういうことなのでありましょうか。イエス様を信じて神の子どもとされた人々が、この世において汚れたものに触れずに生きるために、「彼ら」すなわちイエス様を信じない人々と別々に住まわなければならないという意味なのでありましょうか。この世の人と交わって信仰がゆるがないようにするために、この世から隔離された社会で、厳しい戒律を守りながら信仰生活を続けようというのが、修道院での修道僧や修道尼の生き方でありますけれども、私たちもそのように生きなければならないと言っているのでありましょうか。イエス様は、ご自分の尊いいのちで贖い出した人々に対して、そのような生き方によって自分の信仰を正しく保ちなさい、そのような生活によってこの世とつり合わぬくびきをともにしないようにしなさい、とおっしゃっているのでありましょうか。今、読んでいただきました聖書のみことばで神が仰せになった、「彼らの中から出て行き、彼らと分離せよ」という意味は、物理的な分離、距離的な分離をさしているのでありましょうか。

確かにこの世から隔離された、自分たちだけの社会で結束して戒律を守るという信仰生活を送れば、物理的な意味ではこの世の悪から、汚れから、へだてられるでありましょう。しかしながらサタンは、私たちが自分でいくら努力しても、いくら高い壁を作っても易々とその壁を突破して、私たちの心の中に進入してまいります。サタンはそのような力を持っているのであります。また、戒律を守ろうとすることに熱心であればあるほど、それに縛られて、せっかくイエス様が罪から自由にしてくださったその喜びが失われて、苦しみ信仰生活を送るようになるか、あるいはパリサイ人が律法を形式的に守って、それで自分の信仰を「正しい」とするような、偽善的な信仰に陥る危険があるのであります。

そのように見ていきますと、「彼らの中から出て行き、彼らと分離せよ」とおっしゃる主の御心は、信者が未信者と

分離するというような、物理的な、あるいは距離的な分離を意味するのではなくて、霊的な分離をさしておられるということが分かります。では、この世の人々の中に置かれて生活しております私たちキリスト者が、この世の人と霊的にはっきり分離をしなければならないのは、一体どんな場合なのでありましょうか。例をいくつかあげてみたいと思います。

第一に、信者がこの世の人々と分離しなければならない最も大きな問題は、偶像礼拝でありましょう。最初のみことばに、

> コリント人への手紙第二、6:16
> 16 神の宮と偶像とに、何の一致があるでしょう。私たちは生ける神の宮なのです。

とありますように、イエス様を信じた者は、生けるまことの神が主が住んでくださる「神の宮」とされます。またイエス様を信じた者は、罪のために閉ざされていた霊の目が御霊によって開かれ、その結果、天地万物を創造され支配されている唯一まことの生ける神である神を、「父」とお呼びすることができるようになりました。では、父なる神様は子どもとされた私たち信者に何をお命じになっているのでありましょうか。それは、律法学者が「神のすべての命令の中で、どれが一番大切ですか」と質問したことに対するイエス様のお答えによって知ることができます。

> マルコの福音書 12:29-30
> 29 イエスは答えられた。「一番たいせつなのはこれです。『イスラエルよ。聞け。われらの神である主は、唯一の主である。
> 30 心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』

この世の人々は、まことの神も偶像の神も見分けがつきません。それはかつての私たちもそうであったように、霊の目が罪によって閉ざされて盲目になっているからであります。ですからなんら罪の意識もなく偶像を拝みます。仏壇や神棚に手を合わせ、また葬儀の時に、すでに魂が宿っていない遺体の前で焼香して、手を合わせて拝んでも何も悪いこととは思いません。しかしこのような世の人の中に置かれている私たちキリスト者が、この世の冠婚葬祭に列席する機会は少なくありません。その時、私たち信者は一体どのような態度をとるべきでありましょうか。

この世の中に生かされている私たち信者には、親族、職場、学校、近隣のお付き合いなどが当然あります。これらのお付き合いを大切にするためには、「角が立たないように、本心からでなくても、みなに調子を合わせる」というのが、この世の人たちの諸性質でありましょう。しかし、もし「神の子ども」とされている信者が、「神の宮」とされている信者が、そのことを強く自覚し、父なる神を全身全霊で愛するならば、人の目を気にし、この世に妥協して偶像を拝したり、偶像に従うことなどできるはずはないのであります。それは父なる神様の御心に反することであり、父なる神様を悲しませることだからであります。パウロは次のように言っております。

> ローマ人への手紙 12:2
> 2 この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。

このことで私は、ある地方のキリスト集会の一人の兄弟の話を思い出します。その兄弟は、自分が勤めている会社の社長さんが、「神棚を作って、社員が毎朝礼拝する」という計画を立てているということを知った時、たいへん驚くとともに非常に悩んでイエス様に祈りました。そして兄弟は、「もしそうなったら、自分は会社を辞めなければならない。生活のことを考えると会社を辞めることは辛いけれども、自分には偶像を拝むことは絶対にできない」、この自分の決心を「社長に話そう」というふうに決心をしました。そして社長に会って、「自分はイエス様を救い主と信じていること、神棚に祭ってあるのは、偶像の神であること」を、この兄弟の表現をそのまま言いますと、震えながら話したそうです。社長はじっとその兄弟の言うことを聞いていましたけれども、やがて「君の言う通り、神棚を拝むのは偶像を拝むことになるから、この計画は中止しよう」と言ってくれました。この兄弟は社長の言葉に驚き、「自分に力を与えて、このように言わせてくださった主に、心から感謝した」と、私に話してくださいました。

神様を愛し、神様を第一とした兄弟を主は守ってくださったばかりではなく、この兄弟に、御霊によって力と勇気を与えてくださって、社長に信仰の証しをすることができ、このことを通して主はご自身のご栄光を現わされたのであります。私たちの父なる神は生きておられ、私たちが神様を第一にしようと決心して神に信頼した時に、神様は必ず私たちを守ってくださり、その信頼に答えてくださる方であることを、私たちはこの兄弟の話を通して知ることができます。

「不信者とつり合わぬくびきを一緒につけてはいけない」という代表的なもう一つの例は、結婚であります。イエス様を信じた者は、主の恵みによって罪がきよめられ、この世に属する者から神様に属する者に変えられます。従いまして、神様に属する信者の生きていく土台というのは、イエス様であります。一方この世に属する人の生きていく土台は、この世しかありません。この世に属する人は、この世を愛し、どうしたら自分を満足させることができるかを第一に考えますけれども、イエス様を信じイエス様に属するように変えられた者は、どうしたらイエス様に喜んでいただけるかを第一に考えるようになります。パウロは次のように言っております。

> ローマ人への手紙 8:5
> 5 肉に従う者は肉的なことをもっぱら考えますが、御霊に従う者は御霊に属することをひたすら考えます。

ここで言う「肉」というのは、生まれつきの自己中心的な人間性のことであります。生まれつきの自己中心的な人間というのは、自分の肉を喜ばすことをもっぱら考えます。一方、イエス様を信じた者は、その中に宿ってくださってる神の御霊によって、肉的な基準ではなくて霊的な基準、すなわちイエス様の御心を基準として、すべてのことを考えるように変えられるのであります。このようにイエス様という土台に立つ者と、この世という土台に立つ者と

は、考え方、生き方の基準が根本的に違っておりますから、このような二人が結婚しても一致できるはずがないのであります。

集会では、かつては、妻が、圧倒的に先に救われることが多い。今でもそうでありますが、その先に救われた妻がイエス様を信じて、その結果どうなったか？以前にも増して、夫婦の間に一致ができなくなってしまった。そのために苦しむんですね。まだ救われていない夫の救いをイエス様に必死に祈って、その祈りが聞かれて、今はともにイエス様の土台に立つ一致した夫婦として、主に祝福され、御霊の実を結ぶ信仰生活を送ることができた、という証しをたくさんお聞きしました。これは生きた教会の一つの大きな特徴であります。しかしこのごろは、悲しいことにそのような証しが前よりも少なくなっております。一体どうしてでしょうか。祈り会などで、救われていない知人・友人のためには一心に祈るけれども、肝心の未信者の夫の救いについては、一向に祈らないという方が少なからずおられるということであります。これは、「つり合わぬくびきをつけている」という自覚がおありにならないから、「夫とともに祈り、賛美し、主に仕えたい」という、熱い思いがないからであります。これでは、主に祝福される夫婦とは言えないのであります。

神様が私たちキリスト者を、イエス様を信じていない人の中に置かれている目的とは一体何でありましょうか。それはイエス様を知らないために、この世がすべてと思い込んでる人々に、イエス様をお伝えすることであります。

> 使徒の働き 4:12
> 12 この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかには、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。」

このように、すべての人を恐ろしい滅びの罪から救い出してくださる、唯一の救い主であるイエス様を人々に紹介すること。ご自分の尊いいのちを私たちの罪のために捨ててくださった、そのイエス様の大きなご愛を証しすること。それが先に救われた私たち信者のすること、なすべきことではないかと思うんです。このように、信者がイエス様の証し人としてはっきり立つならば、この世との妥協を恐れるあまり外の社会と接触することを極度に避けるような生き方、あるいはこの世の人とくびきをともにするような生き方はできないはずであります。そのような生き方ではなく、尊いいのちを捨ててまで私たちを愛してくださったイエス様を、まだイエス様をご存知ないで滅びの道を歩んでおられるこの世の人々に、方々に、恐れることなく証しすることが、私たち信者がこの世の人の中に置かれている大きな理由なのであります。イエス様は、ご自分を信じる人々に対して、「わたしは、滅び行く人々に福音を伝えるために、あなたがたを世に遣わします」とおっしゃっているからであります。

> ヨハネの福音書 20:21
> 21 イエスはもう一度、彼らに言われた。「平安があなたがたにあるように。父がわたしを遣わしたように、わたしもあなたがたを遣わします。」

イエス様は、世の終わりの間近い今日、失われたたましいを救うためにご自分と一緒に働く者を求めておられます。そのような時に、信者が自分だけの信仰に閉じこもって、「平安だ、平安だ」と言って喜んでいるというのは、これは自己中心的と言われても仕方がないのではないでしょうか。私たち信者は、この世と隔離して自分の信仰を守るというような閉鎖的な姿勢をとることなく、またこの世とつり合わぬくびきをともにすることなく、イエス様からサタンの支配するこの世に遣わされた者として、自分では気がつかないでサタンとくびきをともにしているこの世の多くの方々に、イエス様を証しし、一人でも多くの方が永遠の滅びから救いに導かれるよう、一心に御霊により頼み、御霊に祈って歩む日々でありたいと思う次第であります。聖書は次のように、私たちイエス様を信じる者に語りかけています。

> ユダの手紙 1:20-23
> 20 しかし、愛する人々よ。あなたがたは、自分の持っている最も聖い信仰の上に自分自身を築き上げ、聖霊によって祈り、
> 21 神の愛のうちに自分自身を保ち、永遠のいのちに至らせる、私たちの主イエス・キリストのあわれみを待ち望みなさい。
> 22 疑いを抱く人々をあわれみ、
> 23 火の中からつかみ出して救い、またある人々を、恐れを感じながらあわれみ、肉によって汚されたその下着さえも忌みきらいなさい。

これまで、「不信者とつり合わぬくびきを一緒につけてはいけない」というみことばについて、何が主の御心にかなう生き方なのかをご一緒に考えてまいりました。それは私たち信者がこの世に身を置きつつも、この世とつり合わぬくびきをともにしないで、イエス様を証しするという生き方であります。確かにこれは容易なことではありません。困難な生き方と言えるでありましょう。なぜならば、この世に置かれている私たち信者は、日々直接サタンの攻撃に身をさらされるからであります。イエス様は次のようにおっしゃっています。

> ヨハネの福音書 15
> 18 もし世が（・・・・すなわち、サタンが支配しているこの世の人々が、・・・・）あなたがたを憎むなら、世はあなたがたよりもわたしを先に憎んだことを知っておきなさい。
> 19 もしあなたがたがこの世のものであったなら、世は自分のものを愛したでしょう。しかし、あなたがたは世のものではなく、かえってわたしが世からあなたがたを選び出したのです。それで世はあなたがたを憎むのです。

なぜ、サタンとサタンの支配下にある世の人々が、信者を憎み迫害するのか、その理由をイエス様はこのように私たち信者によく分かるように説明してくださっています。しかしながら、もし私たち一人一人が真剣にみことばにより頼み、私たち信者のうちに住んでくださっているイエス様の御霊にしっかりと聞き従い、「イエス様から霊的な力と知恵をいただいて、日々歩みたい」と熱心に祈るならば、私たちはこの世に置かれていても、御霊の助けと支えを頂いて、この世とつり合わぬくびきをともにすることなく、サタンの誘惑と戦ってこれに打ち勝つ信仰生活を送ることが可能なのであります。パウロは、コリントの信

者にあてた手紙の中で次のように言っております。

> コリント人への手紙第二、10:3-4
> 3 私たちは肉にあって歩んではいても、肉に従って戦ってはいません。
> 4 私たちの戦いの武器は、肉の物ではなく、神の御前で、要塞をも破るほどに力のあるものです。

私たちは、パウロのいうように、この世にあっては確かに「肉」を着て歩んではおります。けれども「『肉』に従って歩んでいるのではない」と、はっきり言えるようになりたいと切に思います。キリスト者は、「肉」の力ではなく、私たち信ずる者に住んでくださっているイエス様の「御霊」の力でサタンと戦うのであります。決して自分の力で戦っても、勝てるものではありません。ヨハネは、初代教会の信者に宛てた手紙で次のように言っております。

> ヨハネの手紙第一、4:4
> 4 子どもたちよ。あなたがたは神から出た者です。そして彼らに勝ったのです。あなたがたのうちにおられる方が、この世のうちにいる、あの者よりも力があるからです。

このように言っております。私たち信者がこの世に置かれた神様のご目的を、私たちははっきり自覚して、主の御霊により頼んで戦えば、私たちを通して「御霊」の力が働いてくださって、恐ろしいサタンに打ち勝つことができ、主がご栄光を現わしてくださるのであります。イエス様のご再臨が間近いこの世に置かれた、私たちキリスト者の使命というのは、「この世とくびきをともにするのではなくて、主のしもべとして、神の子どもとして、主から与えられた、いただいた御霊にしっかりとより頼んで、御霊から知恵と力をいただいて、サタンの束縛のもとに、滅びの道をご存知なくて歩んでおられる多くの方に、この主の恵みを、素晴らしさを、ご愛を、証しすることができることではないか、」と、そのように私たちは切に、ご一緒に祈っていきたいと思います。

どうもありがとうございました。

傲慢の罪から守ってください

2003 年 11 月 25 日、テープ聞き取り
重田定義

> 詩篇 19 篇 13 節-14 節
> 13 あなたのしもべを、傲慢の罪から守ってください。それらが私を支配しませんように。そうすれば、私は全き者となり、大きな罪を、免れて、きよくなるでしょう。
> 14 私の口のことばと、私の心の思いとが御前に、受け入れられますように。わが岩、わが贖い主、主よ。

今、読んでいただきました、この詩篇の箇所、私にとって大変痛いみことばでもあるんですね。少し前から火曜日の学びでベック兄は、信仰のリバイバル、すなわち、霊の覚醒につきまして連続してメッセージをしてくださっています。ひとつひとつが私たち信者の心を強く打ち、主に心の中を探っていただき、霊の目を覚ましていただくために、私たちにとっては本当に大切なメッセージであるということを痛感して感謝しております。

それらのメッセージの中に、信者の犯しやすい多くの罪の一つとして、傲慢の罪が挙げられておりました。私自身、自分の信仰を顧みまして、自分がいかに傲慢な罪を犯すことの多い者であるかということを、改めてここで強く思わされた次第であります。そこで今日はご一緒に、この冒頭のみことばから、今、読んでいただきましたこのみことばから、信じる者が犯しやすい傲慢の罪、言い換えますと、おごり高ぶりの罪についてご一緒に考えてみたいと思います。

私たちは普通、いばっている人、自分を誇ってはばからない人、あるいは自惚れの強い人、横柄な態度の人、人を見下したり、軽蔑するような態度の人などを指しまして、「あの人は傲慢な人だ。あの人は高ぶっている。」というように批判いたします。そのように私たちは「傲慢」というものを、その人の外に現われる言葉とか態度によって判断しております。しかしながら、傲慢な言葉や傲慢な態度が、もし私たちから見えなければ、私たちはその人が傲慢な人間かどうかということを知ることはできないんですね。

けれども表には傲慢な振る舞いを出さなくても、もし心の中で高ぶって、密かに自分を誇ったり、人を見下したり、さばいたりすればそれは同じように傲慢な人間であります。人の心の中まで見通される神さまの御前には、表に現われた傲慢であっても、表に現われない心の中に持っている傲慢であってもそれはすべて同じ傲慢なのであります。しかしながら、傲慢はなぜ罪なのでありましょうか。このことは神さまのみことばであるところの聖書によってのみ知ることができます。

神さまがすべての被造物の中で特別に愛し、ご自分に似るものとしてお造りになった最初の人のアダムとエバは、蛇の姿をとったサタンにそそのかされて、神さまから食べてはならないと言われた木の実を食べてしまいました。彼らがサタンの誘惑にのった原因というのはサタンから、「あなたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになり、善悪を知るようになる。」と言われた言葉にありました。

これは創世記 3 章の 5 節に出ておりますが、創造主であられる神さまと同じようになりたい、神さまのように善悪を知る者、すなわちすべてを判断できる者になりたいというアダムとエバの思い上がり。これこそが傲慢の罪、高ぶりの罪なのであります。なぜならそれは、自分を神さまの地位に置くことであり、その結果として神さまを仰ぎ、神さまの仰せに従う、忠実に従うという神さまの創造物、被造物であるところの人間に与えられたこの本来の生き方、すなわち神中心に生きるのではなくて、神さまをないがしろにして自分を中心として、自分を誇り、自分の栄光を求める、そういうふうな生き方をしたいというふうになるからであります。ダビデは次のように詩篇に書いております。

> 詩篇 36:1
> 1 罪は悪者の心の中に語りかける。彼の目の前には、神に対する恐れがない。

ここで言う悪者とは、神さまを無視し、自分中心に、自分の栄光を求めて生きる傲慢な人間のことであります。人間はすべてアダムとエバの子孫でありますから、すべての人間は生まれながらの肉の性質として、自分では気が付かなくても、この傲慢という性質を宿しておりますために、高ぶりの罪、高ぶりの罪を犯してしまう。そのような愚かな者なのであります。そして、このような生まれつきの傲慢な性質のために、それが思いとして、あるいは、言葉や態度、また行動の上に出て来るのであります。けれども、愛とあわれみに満ち給う神さまは、この傲慢で愚かな人間をもお見捨てにならずに、なお、愛してくださって、悔い改めてご自分に立ち返るようにと預言者を通して何回も呼びかけてくださいました。例えば、神さまは預言者のイザヤを通して次のように言えと仰せになりました。

> イザヤ書 57:15-17
> 15 いと高くあがめられ、永遠の住まいに住み、その名を聖ととなえられる方が、こう仰せられる。「わたしは、高く聖なる所に住み、心砕かれて、へりくだった人とともに住む。へりくだった人の霊を生かし、砕かれた人の心を生かすためである。
> 16 わたしはいつまでも争わず、いつも怒ってはいない。わたしから出る霊と、わたしが造ったたましいが衰え果てるから。
> 17 彼のむさぼりの罪のために、わたしは、怒って彼を打ち、顔を隠して怒った。

顔を隠して怒ったと仰っているのは、非常に激しい神さまの怒りを表わしております。

> イザヤ書 57:17
> 17 しかし、彼はなおそむいて、自分の思う道を行った。

自分の思う道とは言うまでもなく、神さまに逆らって自分の考えを正しいとして、生きることを意味しております。

> イザヤ書 57:18
> 18 わたしは彼の道を見たが、彼をいやそう。

彼の罪を赦そう。

イザヤ書 57:18
18 わたしは彼を導き、彼と、その悲しむ者たちと（・・・・その罪を悲しむ者たちのことでしょうが。・・・・）とに、慰めを報いよう。

このように、神さまは預言者たちの口を通してご自分に立ち返るようにくり返し私たちに呼びかけてくださったのであります。そして、その神さまの呼びかけにも耳を傾けず、相変わらず傲慢な罪を重ね続けている人間を立ち返らせるために、神さまはついにご自分のひとり子イエス様を私たちの罪を贖う代価としてこの世にお遣わしになったのであります。父なる神さまの御心に従って、この世に人の子としてお生まれになったイエス様ご自身が、ご自分がこの世においでになった目的を次のように仰いました。

マルコの福音書 10:45
45 人の子が来たのも、・・・・

人の子というのは、イエス様ご自身がよくご自分を指して人の子と仰って、神の子が人の子となったという意味でありますが、

マルコの福音書 10:45
45 ・・・・仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためなのです。

このように、イエス様はご自分が神の御子として私たち人間に仕えられる立場のお方でありながら、神さまにそむき、おごり高ぶって、自分の思いを正しいとして生きている傲慢な私たち人間の罪の代価をご自分のいのちをもって支払ってくださるために、身を低くして、私たちに仕えるお姿となって、この汚れた世においでになったのであります。これこそ傲慢の対極にある謙遜の極みであります。

そして、この御子イエス様の犠牲の、大きな犠牲のみわざの前に自我が砕かれて、神さまに対する罪が示され、心から悔い改めて、イエス様を自分の救い主と信じ受け入れた者はだれでも、この罪が赦されるのみならず、イエス様の永遠のいのちをいただいて、神の子どもとされる特権が与えられるという私たちの考えをはるかに超えた恵みをお与えになってくださったのであります。ヨハネの福音書 1 章の 12 節にそのことが書いてございます。

ヨハネの福音書 1:12
12 この方を受け入れた人々、すなわち、・・・・

神のことばとして世に来られて御子イエス様を受け入れた人々は

ヨハネの福音書 1:12
12 ・・・・その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。

では、イエス様を信じる信仰によってこの神さまの大きな恵みとして神の子どもとされる特権を与えられた私たち信者、キリスト者はもう、傲慢な思いやおごり高ぶる思いを持つことはなくなったかと言えば、悲しいことにそうではないのであります。おひとりおひとり自分を吟味して見られたときに、「そんなことはない。」と、「私はおごり高ぶり、傲慢な思いなんか決して持ってはいません。」と、「もうイエス様が全部取り去ってくださったから私はそんな思いはありません。」と言い切れるかというと、なかなかそう仰れる方はおられないと思うんですね。

なぜか。それはキリスト者はイエス様が十字架の上で流された聖い血潮によって霊はその瞬間に聖められますけれども、この世におかれている、私たちがこの世におかれている間は、私たちはまだ不完全な肉の衣をまとっておりますから、その肉の衣のゆえに、肉の思いである自我というものが完全に砕かれきっていないからであります。ですから恵みによって神の子どもとされていながら、しばしばこの肉に属する思いというのが顔を出して、そのために傲慢な思いや態度が起こってきてしまうのであります。イエス様は自分を義人と誇り、他の人々を見下している信者を宮で祈ったパリサイ人のたとえによって、厳しく非難しておられます。

お読みしませんが、ルカの福音書の 18 章の 9 節から 14 節にこのパリサイ人と取税人の例えが出ております。パリサイ人は傍らで祈っている取税人と比べて、自分がいかに神の掟である律法を正しく守り行なっているかということを誇らしげに神さまに祈りました。しかしながら、このパリサイ人が心から律法を守っているのではなくて、ただ形だけ、ただ上辺だけのもの、すなわち、言い換えますと、御霊に導かれた守り方ではない。行ないではないということをご存知の神さまは、イエス様は、この例えを通して、私たち信者の傲慢さを厳しく指摘しておられるのであります。

また弟子たちは、自分たちの中でだれが一番、偉いかということで論争しております。そのときイエス様は、「あなたがたすべての中で一番小さい者が一番偉いのです。」と諭されております。これも、お読みしませんが、ルカの福音書の 9 章の 46 節から 48 節にでております。この二つの例は、私たち信仰者がとかく陥りやすい傲慢の罪をよく表わしていると言えると思います。私たちが自分自身を振り返って顧みたとき、自分の信仰を、主にある兄弟姉妹と比べてみて、密かに自分の信仰は立派だと、自分の信仰のほうが優れてるというふうに誇ったり、あるいはそれによって兄弟姉妹をさばくというような傲慢の罪を犯してはいないでありましょうか。心の中まで見通される主の前で、そんなことは決して今まで一度もしなかった。と私たちは言い切れるでありましょうか。箴言には次のようなみことばがあります。

箴言 16:5
5 主はすべて心おごる者を忌みきらわれる。

心おごる者っていうのは傲慢な罪を犯している者。おごり高ぶっている者でありますが、

箴言 16:5
5 確かに、この者は罰を免れない。

このように箴言に書かれております。そしてイエス様も私たちに次のように仰っております。

マタイの福音書 7:1-4
1 さばいてはいけません。さばかれないためです。
2 あなたがたがさばくとおりに、あなたがたもさばかれ、あなたがたが量るとおりに、あなたがたも量られるからです。
3 また、なぜあなたは、兄弟の目の中のちりに目をつけるが、自分の目の中の梁には気がつかないのですか。
4 兄弟に向かって、『あなたの目のちりを取らせてください。』などとどうして言うのですか。見なさい、自分の目には梁があるではありませんか。

キリスト者の傲慢は、まだイエス様を信じておられない方に対しても、また主にある兄弟姉妹に対しても、イエス様のかおりを放つどころか、それとは反対に、つまずきを与えてしまう大きな罪であります。ですから、それでは私たちは今、申しました通り良き管どころか、その管に傲慢の罪が詰まってしまっているわけですから、主がお用いになれないのは当然であります。

また傲慢は、信者の信仰の成長を妨げます。イエス様は私たち信者を、信じた当初のままの状態、すなわち信仰の赤子のままにおいて、よしとはなさいません。信者が霊的に成長して、大人になるのを求めて、成人になるのを求めておられます。なぜならば、信者が霊的に成長していなければご自分の手足として、ご自分の器としてお用いになれないからであります。パウロはコリントの教会の信者に対して次のように言っております。

コリント人への手紙第一、3:1-3
1 さて、兄弟たちよ。私は、あなたがたに向かって、御霊に属する人に対するようには話すことができないで、肉に属する人、キリストにある幼子に対するように話しました。
2 私はあなたがたには乳を与えて、堅い食物を与えませんでした。あなたがたには、まだ無理だったからです。実は、今でもまだ無理なのです。
3 あなたがたは、まだ肉に属しているからです。あなたがたの間にねたみや争いがあることからすれば、あなたがたは肉に属しているのではありませんか。そして、ただの人のように歩んでいるのではありませんか。

このように言っております。御霊に属しているということは、御霊のご支配のもとにあるということであります。肉に属しているとは、肉の支配下にあるということです。このことについてパウロは、今度はローマの信者に対してローマ人への手紙 8 章 13 節で次のように警告しております。

ローマ人への手紙 8:13
13 もし肉に従って生きるなら、あなたがたは死ぬのです。しかし、もし御霊によって、からだの行ないを殺すなら、あなたがたは生きるのです。

ここに、肉にあって生きるなら死ぬとありますが、これはどういうことかと言いますと、肉の思いに従って生きるならば、御霊が働くことができないから、そのような信者の霊は死んだも同様であるということであります。私たちは死んだような信者にはなりたくありません。イエス様のために生きたい。イエス様のために働きたいと心から願う者であります。けれどもそのためには御霊によってからだの行ないを殺さなければ、すなわち、私たちの傲慢な性質を意識して捨てることができるように、いつも自分の思いを主に明け渡して祈り願わなければならないのであります。なぜなら、このような生まれながらの罪の性質は自分の力では、とうてい変えることはできないんですね。イエス様によって変えていただく以外には方法がないからであります。

パウロはかつて、天国に引き上げられるという、だれも経験したことがないすばらしい霊的な体験をいたしました。しかし彼はそれを誇ることがないように、傲慢になることがないようにと肉体に棘、すなわち、病という苦痛が与えられました。パウロはそれについて次のように言っております。

コリント人への手紙第二、12:7-9
7 また、その啓示があまりにもすばらしいからです。そのために私は、高ぶることのないようにと、肉体に一つのとげを与えられました。それは私が高ぶることのないように、私を打つための、サタンの使いです。
8 このことについては、これを私から去らせてくださるようにと、三度も主に願いました。
9 しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。

このように、イエス様は信者をご自分のしもべとして、ご自分の器として用いようとなさるときには、高ぶることのないように、神さまの御前に無に等しい者であるということを悟らせるために様々な試練をお与えになって、自我をお砕きになるのであります。自我が砕かれるというのは私たちの肉にとっては大変な苦痛であります。

けれどもイエス様はそれが主のしもべとしての器に整えられるために必要であると同時に、より深く主の御心を知り、より主に親しく交わることができるように、その試練をお与えになるんですね。それを通して、試練を通して、私たちに主の御心を示してくださるのであります。

ペテロの手紙第一、1:7
7 信仰の試練は、火を通して精練されてもなお朽ちて行く金よりも尊いのであって、イエス・キリストの現われのときに称賛と光栄と栄誉に至るものであることがわかります。

このようにみことばにあるとおりであります。今日は、キリスト者が犯しやすい傲慢の罪について、ご一緒に考えてまいりました。主のご再臨が近い今、私たちは主のしもべとして、主のかおりを放つ器として、主に用いていただきたいと切に願う者であります。そしてそのために、主に心の中を調べていただいて、傲慢が砕かれて、自分を

主に明け渡すことができるように、始めに読んでいただいた詩篇の 19 篇のダビデのように、あなたのしもべを傲慢の罪から守ってください。それらが私を支配しませんようにというふうに、主の御前にへりくだって、心から祈りながら信仰の歩みをすすめていきたいと切に願う次第であります。最後にみことばをお読みして終わります。

> イザヤ書 66:2
> 2 わたしが目を留める者は、へりくだって心砕かれ、
> わたしのことばにおののく者だ。

どうもありがとうございました。

霊の渇き

2004 年 3 月 28 日、小松福音集会
重田定義

詩篇 42 篇 1 節-2 節
1 鹿が谷川の流れを慕いあえぐように、神よ。私のたましいはあなたを慕いあえぎます。
2 私のたましいは、神を、生ける神を求めて渇いています。

それではこれから、今読んでいただきましたこの詩篇 42 篇 1 節、2 節のみことばにあります「霊の渇き」ということ、たましいの渇きと言ってもいいんですが、霊の渇きというのは何か、そしてまた、たましいを本当に、たましいの渇きを本当に満たすことのできるものは何か、そしてまた、わたしたちはどうしてたましいの満たされる必要があるかということについてご一緒に考えてみたいと思います。

私たち人間は、健康であれば一日一回、食事を抜いたら、空腹を覚えます。そしてまたもし、一日、水を飲まなければ、本当に喉が渇いて我慢できないと思うんですね。このように私たちの健康な体は、食べ物や水が不足すると、自然と飢え渇きを覚えます。もし私たちが、病気になってしまいますと、もう食欲が無くなってきますね。あるいは、あまり喉も渇かないようなことになります。要するに、私たちは健康だから飢え渇きを覚えますが、体が覚える飢え渇きのほかに、実はもう一つ、別の飢え渇きがあるんです。

それは何かと言いますと、私たち人間を造ってくださった神さまが、私たち人間の霊に与えられる飢え渇きであります。たましいに与えてくださる飢え渇きであります。では、霊の飢え渇きというのはいったい何でありましょうか。それは、私たち人間の霊が永遠のいのちの泉であり、私たちを造ってくださったまことの神さまを求める。これが霊的な霊の飢え渇きですね。

いったいなぜ人間は霊の飢え渇きを覚えて、まことの神さまを求めるのでありましょうか。それは、天地万物をお造りになったときに、神さまはご自分の御心を求め、御心に聞き従うことができるようにと、人間のからだに霊を吹き込まれましたけれども、その神さまに造られた最初の人間は、これはアダムですけれども、神さまにそむいてしまった。そのためにアダムの霊が衰えたんですね。

アダムだけではなくて、私たちは人間ですから、みんな最初の人間アダムの子孫なんです。そのアダムの霊を、私たちも一人残らず受け継いでおります。ですから、アダムの霊が神さまに罪を犯して、衰えてしまったということは、アダムの子孫である私たちすべての人間の霊がもう衰えてしまってるんですね。ですから、体が病気のときに空腹感を覚えないのと同じように、霊が衰えてしまった私たちは、霊の飢え渇きを覚えなくなってしまった。

そしてまた、たとえ霊の飢え渇きを覚えても、いったいそれを何で満たしたらいいかということが分からない。分からないんですね。それで、何とかこう、自分の肉の思いを、ということで、自分の心を満たそうとしたり、あるいは、偶像を拝むような宗教に走ってしまったりするんですね。けれども神さまは、そのように罪のために霊が衰えて、霊の飢え渇きを覚えなくなった人間を愛してくださいました。そして、ご自分にそむいている人間の霊に飢え渇きを起して、ご自分を求めるように導いてくださっているのであります。

そして、この霊的な飢え渇きというのは、私たちが苦しみとか、悲しみ、患難、苦難と呼んでおりますけれども、具体的にはいろいろな身体的な苦痛、あるいは、精神的な苦痛を神さまから与えられて、心が悲しみ、苦しんで、そして神さまの前に心が砕かれて、へりくだったときに、特に、その霊的な飢え渇きを覚えます。神さまが、神ご自分の民としてお選びになったイスラエルの民の場合にどうであったか、ということをちょっと見てみたいと思いますけれども、申命記 28 章 47 節から 48 節。これは、イスラエル民族の指導者のモーセが、イスラエルの民に向かって警告した言葉であります。モーセは、イスラエルの民に対して、次のように仰いました。

申命記 28:47-48
47 あなたがすべてのものに豊かになっても、あなたの神、主に、心から喜び楽しんで仕えようとしないので、
48 あなたは、飢えて渇き、裸となって、あらゆるものに欠乏して、主があなたに差し向ける敵に仕えることになる。

こういうふうにモーセは、イスラエルの民に言ったんですね。かつてイスラエルの民は、神さまから選ばれた民であるにも関わらず、神さまから心が離れて、偶像の神に仕えるという罪を犯したために、神さまは、バビロニアという強大な国を使ってイスラエルを治めになったんです。

そしてイスラエルの王さまをはじめ、おもだった民を、捕虜としてバビロニアの首都のバビロンに連れ去るという苦難を、神さまがイスラエルのために与えられました。彼らは捕囚となった地で、バビロンの地でたましいが衰え果てるほどの苦しみを体験しました。それは、彼らの苦しみをとおして、神さまを離れたその彼らに霊的な飢え渇きを起こさせて神さまを求めさせるためであったんですね。詩篇の 107 篇の 4 節から 6 節。この詩篇 107 篇は、そのときの彼らの苦しみを詩（うた）にしたものです。

詩篇 107:4-6
4 彼らは荒野や荒れ地をさまよい、住むべき町へ行く道を見つけなかった。
5 飢えと渇きに彼らのたましいは衰え果てた。
6 この苦しみのときに、彼らが主に向かって叫ぶと、主は彼らを苦悩から救い出された。

彼らも、自分たちが大変な苦しみに合ったときに、「助けてください。」と主に向かって叫んで、その結果、これは飢え渇きを彼らが主に対して覚えたときに、主はその彼らの飢え渇きを満たされたんですね。苦悩から救い出されて、満たされたわけであります。霊的な飢え渇きがここで満たされたわけですけれども、神さまの愛と関心というのは、このイスラエルの民にだけに向けられていたのではないんですね。

神さまは、まったく公平な方です。全き公平な方ですから、最初はイスラエルの民に対して、そして次には、神さまがご自分にそむいて闇の中をさまよっているすべての人間をも選んでくださった。愛してくださり、そしてご自分に立ち返らせるために、神さまの御子であるイエス様を、十字架に架けるという考えられないような方法によって、神さまは私たちとの和解の道を備えてくださったのであります。それについて聖書は次のように書いてあります。

コロサイ人への手紙 1:22
22 今は神は、御子の肉のからだにおいて、しかもその死によって、あなたがたをご自分と和解させてくださいました。それはあなたがたを、聖く、傷なく、非難されるところのない者として御前に立たせてくださるためでした。

神さまはそのために、ただ、からだの飢え渇きを満たすことしか心が向かなくなっている私たちをも、イスラエルの民と同じようにご自分の愛とあわれみによって苦しみを与えて、私たちの自我を砕いて、そして霊の飢え渇きを起こして、ご自分を求めるように、神さまをもとめるようにしてくださるのであります。私たちに与えられている色々な苦しみ、それは病気であったり、あるいは、仕事がうまくいかなくなったり、あるいは、家族が病気になったり、いろいろなことを私たちのうえに起こしてくださるのはそのためなんです。

人間は神さまから与えられたそのような患難、あるいは苦難によって徹底的に自我が砕かれた結果、死んだようになっていた霊が目覚めて、そして霊の飢え渇きを覚えたときに、心から私たちの造り主であるまことの神さまを慕い求め、そして私たちの霊的な飢え渇きをいやしてくださいと、祈らないではいられなくなるのであります。
それについて、次の、詩篇 63 篇 1 節に、詩篇の作家がそのように祈っております。

詩篇 63:1
1 神よ。あなたは私の神。私はあなたを切に求めます。水のない、砂漠の衰え果てた地で、私のたましいは、あなたに渇き、私の身も、あなたを慕って気を失うばかりです。

神さまはまさに、私たち人間のこのような祈りを待っておられるのであります。神さまは、私たち人間の心が砕かれて、そして自我が砕かれて、ご自分を慕い求める祈りを待っていてくださる。その祈りに喜んで応えてくださる。そして霊的な飢え渇きを満たしてくださいます。神さまは、預言者のイザヤを通して次のように仰せられました。

イザヤ書 55:1
1 ああ。渇いている者はみな、水を求めて出て来い。

これは言うまでもなく、渇いているというのは、霊的に渇いているのですね。霊が渇いている。水というのは、霊の水なんです。あとでお話しますけれども、

イザヤ書 55:1-2
1 金のない者も。さあ、穀物を買って食べよ。さあ、金を払わないで、穀物を買い、代価を払わないで、ぶどう酒と乳を買え。
2 なぜ、あなたがたは、食糧にもならない物のために金を払い、腹を満たさない物のために労するのか。わたしに聞き従い、良い物を食べよ。そうすれば、あなたがたは脂肪で元気づこう。

ここで神さまが仰せになっている水、あるいは穀物、ぶどう酒、そして乳というのは、ちょっとさき申しましたけど、物質的な飲み物、食べ物ではないんです。神さまが備えてくださる霊的な飲み物であり、食べ物であり、神さまがそれらを良い物と仰せになっています。しかも神さまは、霊的な飢え渇きを覚えて、ご自分を求める者にこれらの良い物を代価を払わないで与えようというふうに言ってくださっているのであります。

では、心が砕かれて、自我が砕かれて、霊の飢え渇きを覚え、神さまを慕い求める者の霊を代価を払わないで、神さまが満たしてくださる良い物とはいったいどんなものでありましょうか。それは、神の御子イエス・キリストご自身であります。神さまは、霊が飢え渇く者をご自分の御子、イエス・キリストのところに導いてくださいます。人間の霊の飢え渇きを永遠に満たすことのできる霊的な永遠のいのちのパンである、あるいは、いのちの水とはいったい何か、それはイエス・キリストご自身であります。これについて、預言者のイザヤは、次のように言っております。

イザヤ書 49:10
10 彼らは飢えず、渇かず、熱も太陽も彼らを打たない。彼らをあわれむ者（・・・・すなわち、神さま・・・・）が彼らを導き、水のわく所に連れて行くからだ。

ここに、水のわく所とあります。これは、永遠のいのちの水であるイエス様の所であります。いのちの水であるイエス様について、ヨハネの福音書 6 章をまずお読みします。

ヨハネの福音書 6:32-35
32 イエスは彼らに言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。モーセはあなたがたに天からのパンを与えたのではありません。しかし、わたしの父は、あなたがたに天からまことのパンをお与えになります。
33 というのは、神のパンは、天から下って来て、世にいのちを与えるものだからです。」
34 そこで彼らはイエスに言った。「主よ。いつもそのパンを私たちにお与えください。」
35 イエスは言われた。「わたしがいのちのパンです。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渇くことがありません。

ヨハネの黙示録 21:6
6「事は成就した。わたし（・・・・すなわちイエス様、イエス・キリスト・・・・）はアルファであり、オメガである。最初であり、最後である。わたしは、渇く者には、いのちの水の泉から、価なしに飲ませる。

代価を払うことなく、「飲ませる。」、「いのちの水の泉から

飲ませる。」とイエス様が仰っていますね。イエス様はこのように、霊の飢え渇きを完全に満たすことがおできになる霊的なパンであり、霊的な水である。ご自分のいのちを信じる者に与えられるためにこの世においでになり、そして御自身が、永遠のいのちというパンと水になってくださったのであります。

そして、十字架と復活による救いのみわざによって、このことは、ここにありますように、「事は成就した。」、成就されたのであります。で、この霊的なパンと霊的な水をいただくために、私たちは自分で何の代価も払う必要はありません。イエス様は私たちに代わってすでに、ご自分のいのちで私たちを救うための代価を支払ってくださったからであります。

ですから私たちはただ、心から自分の罪、自分の罪というのは、わがままの罪であり、自我を中心として自分勝手に生きてきたということであり、そういうことが罪。神さまのことなんか全然考えないで、自分の思いをただ遂げるために、生きているのが聖書で云っている罪なんですが、そういう、罪を悔い改めて、神さま、イエス様を信じ、そして、みもとにいくことだけでよいのであります。そうすれば、神さまはイエス様によって、このいのちの水、霊的な水を私たちに与えてくださいます。本当に大きな神さまの愛の計画であります。

私たちキリスト者が礼拝のたびに、今日もあとで礼拝をご一緒にいたしますけれども、そのときにパンとぶどう液をいただくのも、ご自分の、ご自身のいのちに代えて、信じる者に永遠のいのちを与え、霊的な飢え渇きを満たしてくださるイエス様を覚えて、感謝をするために行なうものであります。では、イエス様を信じれば、もうまったく霊の飢え渇きを覚えなくなるのでありましょうか。私たちが信仰を持てば、霊の飢え渇きはもうなくなるのでありましょうか。いや、むしろその反対であります。

いったいどうしてでありましょうか。それは、私たちイエス様を信じる者が、喜びと感謝と希望に満ちた信仰の歩みを築こうとすれば、もっともっと深く、神さまの御心を知りたいという霊の飢え渇きを覚えざる得ないのであります。そして、この霊の飢え渇きは、みことばを、聖書のみことばを私たちが食べることによって満たされるのであります。
預言者のエレミヤは次のように言っております。

> エレミヤ書 15:16
> 16 私は（・・・・これはエレミヤですね。預言者エレミヤは・・・・）あなたのみことばを見つけ出し、それを食べました。あなたの（・・・・あなたというのは神さま・・・・）みことばは、私にとって楽しみとなり、心の喜びとなりました。万軍の神、主よ。私にはあなたの名がつけられているからです。

エレミヤが言っておりますように、聖書のみことばというのは、すべて神さまのみことばであります。そしてこの神のみことばは、イエス様を信じる者にとって霊の血となり、肉となり、大変大切な霊的なたべもの。霊の糧であります。したがいまして、キリスト者が、エレミヤのように喜んで信仰の歩みを続けるためにも、またキリスト者の信仰の成長を続けるためにも、必要なみことばをエレミヤのように飢え渇きを持って、常に求めるならば、神さまはいつも豊かにそれを与えてくださいます。

そして私たちがそれを食べることによって、私たちの霊は満たされて、元気になります。ですから私たちはいつも、肉的なものによって、私たちの目に見えるこの世のものによって、心を満たすのではなく、霊的な飢え渇きの心を与えていただけるように神さま、イエス様に祈り求める必要があります。神さまはさらに、イエス様の御霊である聖霊によって、私たち信じる者の霊の飢え渇きを満たしてくださいます。イエス様は、ユダヤの収穫感謝祭である仮庵の祭りというのがありますけれども、そのいちばん最後の日に、ユダヤ人に対して、ご自分を信じる者には霊の渇きをいやす水を与えるというふうに約束なさっております。

この水というのは、イエス様が私たちの罪を贖ってくださったみわざ、すなわち、すべての人々の罪を身代わりによって十字架の上で死んで、三日目に復活してくださったという、人類の救いのためのみわざが成し遂げられたあとに、私たち信じる者、イエス様を信じる者に与えられる聖霊のことであります。イエス様の御霊のことであります。そして、心が砕かれて、自分の罪を悔い改め、そしてイエス様のもとに来る者はすべて、このイエス様の約束通り、御霊によって、霊の飢え渇きが満たされます。

> ヨハネの福音書 7:37
> 37 さて、祭りの終わりの大いなる日（・・・・先ほども言いました、ユダヤ人のお祭りですが、大いなる日・・・・）に、イエスは立って、大声で言われた。「だれでも渇いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。
> 38 わたしを信じる者は、聖書が言っているとおりに、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。」
> 39 これは、イエスを信じる者が後になってから受ける御霊のことを言われたのである。

このように、イエス様を信じる信仰によってイエス様のものとされた者、神さまの子どもとされた私たちキリスト者に対して、神さまは、神の子どもとして霊的に成長させて、そしてご自分のご栄光を現わすために用いようとなさって、主の御心をもっともっと求めたいという霊的な飢え渇きを与えてくださいます。その結果、イエス様を信じる者が、霊的な飢え渇きを覚えてイエス様に祈り求めるたびに、みことばに満たされ、そしてまた今申しました、イエス様の御霊に満たされて、私たちの信仰は、成長していくのであります。

そしてこの霊的な飢え渇きの完全な満たしというのはいつか。それはイエス様が私たち信じる者を空中まで迎えに来てくださり、イエス様を信じて、先に天国に召された者と、そしてまだそのときに地上に残されているキリスト者がともに、イエス様と同じ、復活のイエス様と同じ、朽ちない、よみがえりのからだを私たちがいただいて、天に携え上げられる。そして神さま、イエス様とともに、天の御国に住むことを許される、その約束が叶えられるときであります。

私たちがそのようにして、イエス様が迎えに来てくださって、天に引き上げられるとき、私たちはもう霊の飢え渇き

を覚えることはなくなるんですね。もう永遠に、すべてに満ち足りて、霊的に満ち足りて、もう完全に幸せな日々を送ることができるから、もうそのときには霊の飢え渇きは覚える必要はないんです。ヨハネの黙示録の７章の 16 節から 17 節。いちばん最後ですね、

ヨハネの黙示録 7:16-17
16 彼らはもはや、飢えることもなく、渇くこともなく、太陽もどんな炎熱も彼らを打つことはありません。
17 なぜなら、御座の正面におられる小羊（・・・・これはイエス様のことですね。御座の正面におられるイエス様・・・・）が、彼らの牧者となり、いのちの水の泉に導いてくださるからです。また、神は彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださるのです。」

こういうふうな、すばらしい約束が神さまから私たちに与えられておりますから、本当のキリスト者、心からイエス様を信じている者は、イエス様がご自分を信じる者を天の御国に携え上げるために、もう一度来ると約束してくださったこの空中再臨、空中まで、信じる者を迎えに来てくださると、そこに私たちが引き上げられる空中再臨と申しますが、その日を心から待ち望むわけですね。そういう理由からなんです。イエス様のご再臨をキリスト者は待ち望む。そういうわけなんです。同じく、

ヨハネの黙示録 22:17
17 御霊も花嫁も言う。・・・・

この花嫁というのは、イエス様が花婿で、イエス様を信じる者は花嫁。イエス様の花嫁という意味ですが、花嫁も言う。

ヨハネの黙示録 22:17
17 ・・・・「来てください。」これを聞く者は、「来てください。」と言いなさい。渇く者は来なさい。いのちの水がほしい者は、それをただで受けなさい。

このようにヨハネの黙示録には書いてあります。しかしながら、一方ではそのイエス様のご再臨の日には、神さまは霊的な、今度はききんを送るというふうに聖書に預言しておられます。それは、イエス様のご再臨までのとき、すなわち、今申しました、信じるものはだれでも救われるという、その恵みのときのうちに、イエス様を信じなかった人々の上に、今度は霊的なききんを神さまは起こすというふうに仰ってますね。で、その日が来たら、もう救いも、そして霊の満たしも与えられません。いくらそのときに霊の飢え渇きを覚えても、いくら神さまを求めても、もはや手遅れであるというふうに神さまは仰っております。

アモス書 8:11-13
11 見よ。その日が来る。――神である主の御告げ。――その日、わたしは、この地にききんを送る。パンのききんではない。水に渇くのでもない。実に、主のことばを聞くことのききんである。
12 彼らは海から海へとさまよい歩き、北から東へと、主のことばを捜し求めて、行き巡る。しかしこれを見いだせない。
13 その日には、美しい若い女も、若い男も、渇きのために衰え果てる。

私たちは、この神さまの預言、仰せを、警告を厳粛に受け止めなければなりません。ですから、まだ神さまの救いにあずかっておられない方は、その日の来るまでに、聖書のコリント人への手紙第二の６章２節に、「確かに、今は恵みの時、今は救いの日です。」と書いてありますけれども、そのように、神さまのあわれみと恵み、そして神さまの赦しと祝福が与えられる今の恵みの時のうちに、霊の飢え渇きを満たしてくださろうと、神さまがこの世に遣わしてくださった永遠のいのちのパンであり、永遠のいのちの水であるイエス様を受け入れる必要があるんですね。

ですからすでに、イエス様のいのちのパン、いのちの水にあずかって、霊の本当の喜びをもうすでに味わった、イエス様を信じた私たちは、今は恵みの時、今は救いの日と言われている、この今のうちに、まだその喜びをご存知なくて、この世のものだけを追い求めている、そこに満足を得たい、喜びを得ようと空虚を探し求めている、そういう方をイエス様のところに導かなくてはいけないと思いますね。そのためにも私たち信者は、救われたときの赤ん坊のような、乳飲み子のような、幼い、霊的な状態に留まることなく、信仰が成長することをイエス様が心から望んでおられます。イエス様は、先に救われた者をそのように用いようとしておられる。そのためには私たちの信仰は成長していなければいけない。大人の信仰を持っていなければいけないわけであります。ヨハネの黙示録３章の 17 節。うっかりすると私たちは、もうイエス様を信じていて、それで満足しちゃっていることがあります。そうではない、自分が信仰の幼子でもあるにも関わらず、もう救われたっていうんで、それでいいと思ってしまっている場合がありますけれども、そういうキリスト者に向かって、イエス様はここで次のように仰っています。

ヨハネの黙示録 3:17
17 あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、乏しいものは何もないと言って、実は自分がみじめで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸の者であることを知らない。

このように仰ってます。すでにイエス様を信じるという恵みにあずかった者は、もし自分がイエス様の仰っているように、信仰的に、あるいはこの世的にもう自分の現状に満足して、それ以上の霊の成長を望まないのであれば、それは霊の飢え渇きのない状態、あるいは霊が眠った状態になっている。そのような状態のキリスト者は、イエス様を心から閉め出しているということになるんです。

けれども、イエス様はそのような、眠ってしまっているようなキリスト者に対しても、愛をもって、呼びかけておられるのであります。

ヨハネの黙示録 3:20
20 見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところにはいって、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。

これは、まだ信じてない方にイエス様が仰ってるんじゃないんです。イエス様を信じているけれども、イエス様を心

から閉め出してしまっているような信者に対して、イエス様は仰っているのであります。ですからもし私たちが、自分の霊が衰えたために、虚しいこの世のものに思いが奪われてしまったということに少しでも気が付いて、そして、心の外に閉め出されたイエス様が、なお愛をもって、私たちの心を外からたたき続けてくださってる。その音が、じーっと耳をすまして、かすかにでも聞こえたならば、それは大変な恵みなんです。

そのときはただし、悔い改めて、何においても、扉のところへとんで行って、心の扉をイエス様に開けなければいけないと思います。そうしたときに、イエス様は喜んで、私たちの悔い改めを喜んでくださって、そして私たちの心にまた入ってくださるのであります。そして私たちは、イエス様との親しい交わりを再び、取り戻すことができ、そのときに私たちの霊は満ち足りて、心からイエス様に感謝をささげ、そしてイエス様に従うことができるのであります。

最後にもう一度、いちばん最初に読んでいただいたみことばをお読みして終わりたいと思います。

詩篇 42:1-2
1 鹿が谷川の流れを慕いあえぐように、神よ。私のたましいはあなたを慕いあえぎます。
2 私のたましいは、神を、生ける神を求めて渇いています。

倫理と真理

2005 年 7 月 16 日、御代田よろこびの集い
重田定義

箴言
16:25 人の目にはまっすぐに見える道がある。その道の終わりは死の道である。

20:24 人の歩みは主によって定められる。人間はどうして自分の道を理解できようか。

今日は今、読んでいただきましたみことばから、人間が人生を正しく歩むには倫理、あるいは道徳ではなくて、天地万物をお造りになった主なる生ける神様を知って、そしてみこころに従うことが是非とも必要であるということを、ごいっしょに考えてみたいと思います。

今も兄弟からありましたように倫理、あるいは、道徳というのは、人の踏み行なうべき正しい道という意味であります。倫理、道徳、これらは同じように使われます。すなわち、人間が人生を歩む間には、これは正しいことなのか悪いことなのか、さらにもっと前向きに申しますと、これは成すべきことであるのか、あるいはしてはならないことなのかというような判断に迫られることが数多く起きます。

人間には生まれつき神様から与えられた善悪を判断する心、言い換えますと、平たく言いますと道徳心、あるいは良心とも呼ばれるものを持っております。もし、この道徳心、良心が完全に働いて、人間がそれに従うことができれば、その人は人生を正しく歩むこと、すなわち倫理的、あるいは道徳的な生き方ができるはずであります。しかしながら、はたしてそのように生きることがいったい人間にはできるのでありましょうか。その実例を私自身 50 年余りにわたって医学の道を歩んでまいりましたけれども、私は臨床医でございませんけれども、私なりに体験したこの医の倫理を例にとって考えてみたいと思います。

かつては医の倫理は医の道、「医道」という言葉で私たちは学生のときから習ってまいりました。さっきも出ました「ヒポクラテスの誓い」、これは本当に医学を学ぶ者すべてがよく教えられた誓いであります。平たく言いますと、医師たる者の心構えとしてどんな病人も分け隔てをすることなしに、誠意をもって治療すべし。それが医師としての正しい道であると。これが「ヒポクラテスの誓い」の中身であります。

けれども最近はそのような、もちろん日常的な医療行為の倫理もたいへん大切であり、それを逸脱した行為が起こっておるがゆえに、兄弟姉妹皆さま、耳にするようないろんな事件が起こっているわけでありますけれども、もう一つ大きな医の倫理の問題というのは、ここ 20 年以上になりますか。その間に急速に進歩した生物科学の技術、これを医学が手にしたことによって生じた問題なのであります。すなわち、生物科学の技術を人のいのちに応用することによって出てきた、倫理的、あるいは道徳的な問題であります。

具体的な例を挙げますと、先ほどもちょっと兄弟が触れられましたけれども、脳死の問題とか臓器移植、あるいは体外受精の問題。こういうふうな、例えば体外受精なんかが行なわれるようになりますと、代理母なんていうのが出て来るのです。要するに、本当の母親を代理する女性、あるいは精子銀行なんていうのも実際にあるわけです。それから遺伝子操作。こういうふうな、かつては考えられなかったような医療上の問題が出てまいりました。これらはいずれも今まで人間が神聖視してまいりました生と死、あるいはセックスですね、性。それから結婚、家族、そのような人間の存在、あるいは、社会秩序に関わる事がらの根源を揺さぶるような問題を起こす。そのような危険が起こってくるのであります。

もう少し具体的に例を挙げますと、これはもうほとんどの病院で導入されております人工呼吸器、あるいは、生命維持機器。こういうものがどんどん普及して発達してまいりますと、人間の命が人工的にある期間操作されるということが可能になります。その結果、それまで誰も疑問を持たなかった生と死の境がぼんやりしてくるのです。

かつては、医者が臨終を迎える間際の患者さんの脈をとって、家族の前で脈を診て、脈が触れなくなって、そしてその時にまた瞼を開いて診て瞳孔が開いてしまう。そういうサインと言いますか、それを見極めて家族に「ご臨終です。」というふうに告げるわけです。それでみんな家族は納得するわけです。愛する者の命がここで終わったということは誰も疑問を持ちません。ところが今のような道具と言いますか、器械によって人工的に人間の命が操作されるようになりますと、いったい人間の死をどこで決めるか。どう決めるかというような大きな倫理的な問題が起こってくるのであります。

それから、先ほどもちょっと申しました、臓器移植。この技術の発達というのは、これは臓器を提供する側と、それから、臓器を受ける側との間の倫理的な問題が起こってくるのです。今は臓器を受ける病人は、その臓器を下さる、提供する方の名前も知らないように、伏せていることになっていますけれども、うっかりするとそれが判ってしまう。そこでいろんな悩みが出てくるわけであります。

それから、かつてはお母さんが妊娠しますと、段々その胎児が成長してきて、そしてお腹の中で動くようになるのです。胎動と言いますが。そうするとお母さんはその胎動によって、実感によって、その子どもの命、自分の子どもの存在を確かめることができました。胎児の命というものは、そういうふうに母親が実感することができたのですけれども、現在では胎児の体が形成されていく過程、受精卵の時から詳細に、客観的に観察できるようになった結果、いったいどの段階から人として、あるいは人の命として扱ったらよいかという、これもたいへん重大な倫理的な問題も起こっております。

また、精子や卵子を凍結して試験管の中で何十年も、あるいは理論的には何百年も生かすことができるという技術が開発された結果、何世紀もあとで、その精子の提供者と卵子の提供者の子どもが産まれるという可能性も可能になってまいりました。そうなりますと、そうして産まれた子どもの両親との間には何百年もの時間の隔たりが生じるということになるわけです。今までのような、親子間にいわゆる「血が通う」というような交流はもう、そうなると全く不可能になってしまいます。

あるいは、娘夫婦の受精卵をまだ受胎能力のある、その娘さんの母親が自分の体内で育てて出産するということも可能になります。何か事故があってその娘さんが亡くなった場合に、その母親が自分の胎内で娘の受精卵を育てて出産するということです。そうなりますと、その母親にとって産んだ子どもは子でもあり、同時に孫でもあるということになります。このように、今の進んだ科学技術を深く考えもしないで安易に医療に使いますと、親子、夫婦、家族という人間関係の基本、社会構成の根本を覆す事態が起こるという重大な倫理的な問題が出てくるのであります。

ご存知の方も多いと思いますが、アメリカには精子銀行というのがあって、既に営業しております。かつてあるアメリカの雑誌に次のようなこの精子銀行の広告が出ておりました。それは、「当銀行は未来のあなたの子どものために優秀な遺伝子を持つ男性の精子を提供します。精子の提供者は肉体的、精神的健康と健全で社交的な性格。優れた思考力と知的想像力を備えた、IQ の高い人たちです。」というような広告なのです。

もう少しこのことを調べていきますとこの銀行では、IQ が、知能指数ですね、IQ が 200 以上の男子の精子を集めている。データーには一人一人、その人種、家系、目と髪の色、身長、体重、年齢、学歴、職業、宗教、血液型、趣味、健康度などが詳細に記録されているそうであります。アメリカではこのような精子銀行が商売として成立するほど、自分の好みのタイプの男性の精子を未婚の女性が選んで買って、そして自分の子どもを産むという、多くの独身女性がいるということであります。いったいしかしこれは、倫理的に考えて許されることでありましょうか。

さらに大きな倫理的な問題は、先ほどもちょっと申しましたけれども、遺伝子操作であります。この遺伝子操作というのは、医学の中で発達したのではなくて、分子生物学の中で発展してまいりました。応用されたのは、おもに植物や何かの優秀な植物と言いますか、優良な植物を作るために考えられた技術なのですけれど、その遺伝子操作の技術を医学に導入してきたわけです。

そして、人間がこのように生物の遺伝子の構造、そしてその制御の機構を解明して、そして遺伝子を自由に組み換えるという技術を手にした結果、これまで治すことのできなかった遺伝病の治療というものが可能になった。これは本当に大きな成果であると思います。医学の成果であると思いますけれども、この技術を使った結果、これは植物の品種改良と同じように、人間の品質改良と言ってはおかしいですけれど、人間を改良するということも技術的に可能になるのであります。今までは自然の中で神様の御手によって行なわれてきた遺伝子組み換えというものを今度は人間が行なう。これは人間が神の役割を演じることになります。いったいこれが許されることでありましょうか。

人間には生まれつき、もっと知りたい、そして知ったらそれを使って結果を見たいという、これは貪りの欲です。貪りの欲の性質というのが生まれつきあるのです。医者が、あるいは研究者がこのような衝動に駆られて、新しい生物科学の技術を深く考えもしないで人間に適用すれば、以上に述べたような恐ろしい結果を招くことになります。このことに一番不安を感じているのは実はこの技術を手に入れた医師、あるいは研究者、医学研究者自身なのであります。

そうした危機感から医学部、あるいは、医学研究所に倫理委員会、あるいは生命倫理委員会、名前はいろいろありますが、そういうものが設けられてきたのであります。世界医師会という組織があります。そこでは総会を開いて、新しく色々な技術が、あるいは医学研究、あるいは医療に導入されたとき、はたしてそれが倫理的にそれをしていいのか。研究をしていいのか。治療していいのかということをチェックするための色々な掟と言いますか、ルールが発表されます。有名なのはヘルシンキ宣言という医の倫理の宣言ですけれども。そのほかぞくぞくと毎年のように新しい医の倫理の宣言が出されております。

けれどもこのようなことでこの問題は片付くはずがないのです。悲しいことに、いくら人間が知恵を出し合って倫理的なガイドラインを作っても、問題の根本的な解決は望めないのです。その訳は先ほども申しましたように、人間にはだれにでも貪りの欲という欲望があるからであります。聖書には貪りの欲というのはたいへん大きな罪のひとつであると言っております。

かつて原子爆弾の原理を考えた、アメリカの有名な物理学者は次のように言い放っております。「われわれは新技術を手に入れた。技術を発展、進歩させるのは人間の本性である。原子爆弾はどれぐらいの力をもっているか、まだ不明である。人類はその力を知っているのがよく、そのためには使ってみるほかない。たとえその代価を支払わなければならないとしても。」こういう恐ろしい、今考えれば恐ろしいことを彼は言っております。使ってみた結果はご存知の通り、恐ろしいものでありました。

これは科学技術が悪いのではないのです。この学者に限らず、科学技術を開発して、使用する人間の本性に問題があるからなのであります。今日、医の倫理だけではなくて、政治倫理、あるいは企業倫理など、多くの場で倫理の欠如が大きな問題となっております。しかし残念ながら問題にはなりますけれども、一向によくならない。よくならないどころか、ますます悪くなっているのはご承知の通りであります。

どうしてでありましょうか。それは、いくら立派な倫理規定や道徳律を作っても、それに人間が従わないからであります。道徳心の欠如ということを聞きますけれど、今日いかに道徳心の欠如した人間が多いことでありましょう。しかし、人間に道徳心が無いのではないのです。有るのですけれども、人間の貪りという欲望が道徳心を曇らせ、抑えつけて、働けなくさせているために欠如しているように見えるのであります。

神様が人間をお造りになった時、そのからだに吹き込まれたご自分の聖い息が人間の霊であり、これは道徳心とも良心とも呼ばれるものであります。ところが、この人間の道徳心、良心は神様がお造りになった最初の人、アダムが欲に負けて、神様の御言いつけに背いて、食べてはならない禁断の木の実を食べるという貪りの罪を犯して以来、すべての人間に受け継がれたこの罪の性質が良心を働かせないようにしてしまったのであります。こ

れが道徳心の欠如として現われているのであります。

昔、神様はイスラエルの民に、神の民としての正しい生活と行為に関する戒めとして律法をお与えになりました。その中心が有名な十戒であります。しかし十戒を知らないイスラエル人以外のすべての人間にもこの戒めは生まれながら心に刻み込まれているとパウロは言っております。ローマ人への手紙の２章に彼はこのように記しております。

ローマ人への手紙 2:14-15
14 ――律法を持たない異邦人が、生まれつきのままで律法の命じる行ないをするばあいは、律法を持たなくても、自分自身が自分に対する律法なのです。
15 彼らはこのようにして、律法の命じる行ないが彼らの心に書かれていることを示しています。

パウロはこのように言っております。確かに十戒の中にあります、「父母を敬いなさい。人を殺してはいけない。姦淫をしてはいけない。盗んではいけない。偽証してはいけない。人のものを欲しがってはいけない。」などの戒めは、これはイスラエル人でなくても、人間ならばだれでも知っていることであります。しかし、イスラエルの民のみならず、全ての人間はこの神の戒めである律法の命じる行ないを一生懸命に、真剣に実行しようとすればするほど、それができないという自分に気付くのであります。いったいどうしてでありましょうか。パウロはその原因を次のように解き明かしております。

ローマ人への手紙 7:18-21
18 私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。
19 私は、自分でしたいと思う善を行なわないで、かえって、したくない悪を行なっています。
20 もし私が自分でしたくないことをしているのであれば、それを行なっているのは、もはや私ではなくて、私のうちに住む罪です。
21 そういうわけで、私は、善をしたいと願っているのですが、その私に悪が宿っているという原理を見いだすのです。

すなわち、アダムの子孫であるすべての人間に受け継がれているところの欲望を満たしたいという生まれつきの自己中心の性質というものが、神のみこころに従いたいという願いを阻んでいるのであります。ではどうしたら自分の中に宿っている悪を取り除いて、善を行なうことができるようになるのでありましょうか。それは自分の力では決してできません。不可能であります。

また聖書を読み、そこに書いてある神様の言われたこと、神のなさったことを知れば、それでよいのでありましょうか。それではダメなのであります。いくら私たちが聖書についての知識を増やしても、それで自分の性質を変えることはできないからであります。自分の中に宿っている悪を取り除くためには、私たち人間を造られた全知全能なる生ける神様に取り除いていただく以外に方法はありません。

その方法とは、まず自分が正しくない者であるということを素直に認めることであります。すなわち、自分は今まで自分の判断で考えたり、あるいは行動して来たけれども、全くそれは間違っていた。あるいは、自分は目が見えると思っていたけれども、何も見えない者であった。あるいは、自分は知識があるとか、知恵があるとかいうように考えていたということは、これは全く傲慢であった。あるいは、自分は自分の欲望をコントロールすることができないような本当に無力な者であった。

（イエス様は、）自分の身代わりに神様の怒りを引き受けて、十字架の死という罰を受けて、神様から背き離れていた自分の罪を赦して、神様のもとに立ち返るようにしてくださるためであったということを信じることができるようにされるのであります。

イエス様を信じ、イエス様の十字架の贖いによって罪が聖められた者は、今度はイエス様にしっかりと結びつくことによって、救われる以前は自分の力ではどうしても歩むことができなかった正しい道を歩むことができるようになります。それは、私が道であり真理でありいのちなのです。と仰ったそのイエス様ご自身が信じる者に正しい道を示してくださり、自分の力によってではなく、イエス様を信じる者の中に住んでくださる御霊の力によって、主のみこころに従う歩みができるようになるからであります。

パウロはローマ人への手紙の中で次のように記しております。

ローマ人への手紙 8:3-4
3 肉によって無力になったため、律法にはできなくなっていることを、神はしてくださいました。神はご自分の御子を、罪のために、罪深い肉と同じような形でお遣わしになり、肉において罪を処罰されたのです。
4 それは、肉に従って歩まず、御霊に従って歩む私たちの中に、律法の要求が全うされるためなのです。

ローマ人への手紙 8:9-10
9 けれども、もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら、あなたがたは肉の中にではなく、御霊の中にいるのです。キリストの御霊を持たない人は、キリストのものではありません。
10 もしキリストがあなたがたのうちにおられるなら、からだは罪のゆえに死んでいても、霊が、義のゆえに（・・・・これはイエス様を信じる信仰によって神様から与えられる義のことです。義のゆえに・・・・）生きています。
11 もしイエスを死者の中からよみがえらせた方の御霊が、あなたがたのうちに住んでおられるなら、キリスト・イエスを死者の中からよみがえらせた方は、（・・・・すなわち神様・・・・）は、あなたがたのうちに住んでおられる御霊によって、あなたがたの死ぬべきからだをも生かしてくださるのです。

ローマ人への手紙 8:13
13 もし肉に従って生きるなら、あなたがたは死ぬのです。しかし、もし御霊によって、からだの行ないを殺すなら、あなたがたは生きるのです。

ここでは主の御霊の力に拠り頼むことによって、自分の欲を抑えて、正しい道、信仰の道を歩むことの大切さというものが示されております。パウロは、イエス様を信じる者は神様がイエス様によって良い行ない、すなわち神様のみこころに従う正しい行ないをするために造られた者とされるというふうに言っております。エペソ人への手紙の 2 章 10 節にそれが書かれております。

> エペソ人への手紙 2:10
> 10 私たちは（・・・・私たち信者は・・・・）神の作品であって、良い行ないをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行ないに歩むように、その良い行ないをもあらかじめ備えてくださったのです。

とあるとおりであります。最初に読んでいただいた二つのみことば。初めに、

> 箴言 16:25
> 25 人の目にはまっすぐに見える道がある。その道の終わりは死の道である。

二番目のみことばは、

> 箴言 20:24
> 24 人の歩みは主によって定められる。人間はどうして自分の道を理解できようか。

とありました。その通りです。人間には自分の知恵や力で何が正しい道か、間違った道かということを判断できません。イエス様こそ道であり、真理であり、いのちであることを知って、心から自分の傲慢を認め、へりくだって、イエス様を信じたときに、神様はその人をご自分の子どもとして扱ってくださり、それからの歩みは神様が私たちに正しい道を歩むように定めてくださるのであります。預言者イザヤは次のように言っております。イザヤ書の 30 章 20 節から 21 節。

> イザヤ書 30:20-21
> 20 たとい主があなたがたに、乏しいパンとわずかな水とを賜わっても、あなたの教師はもう隠れることなく、あなたの目はあなたの教師を見続けよう。
> 21 あなたが右に行くにも左に行くにも、あなたの耳はうしろから「これが道だ。これに歩め。」と言うことばを聞く。

ここにある教師とは、いうまでもなく真理そのものである御子イエス・キリストであります。神の子どもとされた信者が、開かれた霊の目と耳をイエス様に向け続けてさえいれば、イエス様は私たちの歩むべき正しい道を聖書のみことばから示してくださいます。そして、天の御国に真っ直ぐに通じるその道を、私たちは信じる者に与えられた御霊に導かれながら喜びと希望をもって一歩一歩、歩みを進めるのであります。

最後に、真理そのものであるイエス様に従って歩む者の幸いを祝福してくださっているみことばを読んで終わりたいと思います。詩篇 1 篇の 1 節から 3 節をお読みして終わりたいと思います。

> 詩篇 1:1-3
> 1 幸いなことよ。悪者のはかりごとに歩まず、罪人の道に立たず、あざける者の座に着かなかった、その人。
> 2 まことに、その人は主のおしえを喜びとし、昼も夜もそのおしえを口ずさむ。
> 3 その人は、水路のそばに植わった木のようだ。時が来ると実がなり、その葉は枯れない。その人は、何をしても栄える。

どうもありがとございました。

主の前に静まる

2005 年 8 月 6 日、御代田喜びの集い
重田定義

イザヤ書 30 章 15 節
15 神である主、イスラエルの聖なる方は、こう仰せられる。「立ち返って静かにすれば、あなたがたは救われ、落ち着いて、信頼すれば、あなたがたは力を得る。」しかし、あなたがたは、これを望まなかった。

今日は、兄弟に読んでいただいた御言葉から、信仰にとって最も大切なことのひとつ、主の前に静まることについてご一緒に考えさせていただきたいと思います。

今の御言葉は、強国のアッシリアの攻撃を恐れたイスラエルの民が、エジプトの力に頼ろうとした時に神様が、預言者のイザヤを通して仰せになった御言葉であります。イスラエルの民は、神様の恵みによって神の民とされた後も、周りの国々から絶えず侵略されるという脅威にさらされていました。イスラエルの民が、それが自分たちの信仰を試みる神のご計画であることも知らずに、その都度動揺し、恐れおののき、自分たちの主なる神に頼らないで人間の知恵に頼って何とかして、危機を乗り越えようとする過ちをたびたび犯したのであります。

そのような彼らに向かって神さまは次のように教え諭されました。

イザヤ書 41:8-13
8 しかし、わたしのしもべ、イスラエルよ。わたしが選んだヤコブ、わたしの友、アブラハムのすえよ。
9 わたしは、あなたを地の果てから連れ出し、地のはるかな所からあなたを呼び出して言った。「あなたは、わたしのしもべ。わたしはあなたを選んで、捨てなかった。」
10 恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。
11 見よ。あなたに向かっていきりたつ者はみな、恥を見、はずかしめを受け、あなたと争う者たちは、無いもののようになって滅びる。
12 あなたと言い争いをする者を捜しても、あなたは見つけることはできず、あなたと戦う者たちは、全くなくなってしまう。
13 あなたの神、主であるわたしが、あなたの右の手を堅く握り、「恐れるな。わたしがあなたを助ける。」と言っているのだから。

神様はここでイスラエルの民に対して、「あたなは私のしもべ。」と仰せになっています。主のしもべとは主の奴隷と言うよりは、主が用いるために選ばれた器と言う意味が強くあります。神様はご自分が器として用いようと選ばれたイスラエルの民に対して、いつも主が共におられて守り助けるから、いかなる大敵をも恐れることなくたじろぐことなくただ堅く信頼して主に従うようにと、心から望んでおられたのであります。このように主のしもべが主に用いられる器であるためには、どんなときにも堅く主に信頼して、主の御業に自分自身をゆだねることが最も大切であり、そのような器を主が用いられてご栄光を現されるのであります。

主のしもべには絶えず戦いがあります。それは、日々の生活の中での信仰の戦いであります。信仰の戦いの相手は、主なる神に敵対するものすべてであります。それはサタンであり、またその支配下にあるこの世のもの全て、自分の肉の目を惑わすもの全てであります。これらの敵は非常に強力であり、もし主のしもべが主の器であることを忘れて、主により頼まず自分の知恵や力に頼って戦ったのであれば、到底勝てる相手ではありません。

イスラエルがダビデに統一されてひとつになりましたが、しかしながらその子供のソロモンが死んだ後に分裂しました。北のイスラエル王国と南のユダ王国に別れてしまいました。その南のユダ王国の王様にヨシャパテがいました。モアブ人とアモン人の攻撃を受けました。その時に主は預言者のヤハジエルと言う人の口を通して、この戦いはあなた方の戦いではなく、主なる神の戦いであると仰せになったのであります。

歴代誌第二、20:15-17
15 彼は言った。「ユダのすべての人々とエルサレムの住民およびヨシャパテ王よ。よく聞きなさい。主はあなたがたにこう仰せられます。『あなたがたはこのおびただしい大軍のゆえに恐れてはならない。気落ちしてはならない。この戦いはあなたがたの戦いではなく、神の戦いであるから。
16 あす、彼らのところに攻め下れ。見よ。彼らはツィツの上り道から上って来る。あなたがたはエルエルの荒野の前の谷のはずれで、彼らに会う。
17 この戦いではあなたがたが戦うのではない。しっかり立って動かずにいよ。あなたがたとともにいる主の救いを見よ。ユダおよびエルサレムよ。恐れてはならない。気落ちしてはならない。あす、彼らに向かって出陣せよ。主はあなたがたとともにいる。』」

この神様の仰せを聞いた彼らはどのような態度をとったのでありましょうか。聖書は次のように記しております。

歴代誌第二、20:18-24
18 それで、ヨシャパテは地にひれ伏した。ユダのすべての人々とエルサレムの住民も主の前にひれ伏して主を礼拝し、
19 ケハテ族、コラ族のレビ人たちが立ち上がり、大声を張り上げてイスラエルの神、主を賛美した。
20 こうして、彼らは翌朝早く、テコアの荒野へ出陣した。出陣のとき、ヨシャパテは立ち上がって言った。「ユダおよびエルサレムの住民よ。私の言うことを聞きなさい。あなたがたの神、主を信じ、忠誠を示しなさい。その預言者を信じ、勝利を得なさい。」
21 それから、彼は民と相談し、主に向かって歌う者たち、聖なる飾り物を着けて賛美する者たちを任命した。彼らが武装した者の前に出て行って、こう歌うためであった。「主に感謝せよ。その恵みはとこしえまで。」
22 彼らが喜びの声、賛美の声をあげ始めたとき、主は伏兵を設けて、ユダに攻めて来たアモン人、モアブ人、セイル山の人々を襲わせたので、彼らは打ち負

かされた。
23 アモン人とモアブ人はセイル山の住民に立ち向かい、これを聖絶し、根絶やしにしたが、セイルの住民を全滅させると、互いに力を出して滅ぼし合った。
24 ユダが荒野に面した物見の塔に上ってその大軍のほうを見渡すと、なんと、死体が野にころがっている。のがれた者はひとりもない。

神様から、この戦いはあなた方の戦いではなく神の戦いであるから、あなたがたはしっかり立って動かずにいなさい、そしてあなた方と共にいる主の救いを見なさいと言う命令を聞いたヨシャパテ王と、ユダおよびエルサレムの住民のとった行動は一見不可解としか思えない行動でありました。すなわち、この御言葉にありますように、彼らは武装した敵の前面に聖なる飾り物をつけた、そして主を賛美するものを配置して、「主に感謝せよ、その恵みはとこしえまで。」と賛美の歌を合唱させたのであります。彼らが賛美の歌を喜び歌い始めたその時に、主は攻めてきたアモン人、モアブ人、セイル人たちを同士討ちさせ全滅させられたのであります。

まさに先ほどのイザヤ書の 41 章 11 節 12 節の、「あなたと言い争いをする者を捜しても、あなたは見つけることはできず、あなたと戦う者たちは、全くなくなってしまう。」とあった通りになってしまったのであります。彼らは、主が「あなたがたはしっかりと立って動かずにいなさい。そして、あなたがたと共にいる主の救いを見なさい。」と仰せになった、この主の戦いを言われた通り、ただ立って見ていただけでありました。

ただ立って見ていることはたいへん簡単なように思われるかもしれませんけど、しかし、これはスポーツの試合の観戦とは訳が違います。自分たちに向かって攻め寄せてくる敵の大軍を前にして動揺せずに立って見ていることなど、私たちには容易にできることではありません。ですからこの「立つ」ということは、主のお約束の御言葉に堅くたつということなどであって、これは主に堅く信頼していなければできないことなのであります。

ですからしっかり立って動揺しないでいることは、外見的には何もしていないように見えますが、彼らは何もしなかったのでは決してなかった。主に堅く信頼して立つと言う主の命令に忠実に従う勇気ある行動を、そのような形で取っていたのであります。主はこのように、ご自分の命令に忠実に従って、敵の目の前で恐れずに主を賛美しつつ、主に堅く信頼して動揺することなく、主の御業を見守っていたヨシャパテ王と、ユダ、エルサレムの民に勝利をお与えになって、そしてこの戦いによって主ご自身のご栄光を現されたのであります。このように主のしもべに最も必要なことは、主に対する絶対的な信頼であります。信仰生活においては、主に堅く信頼し、主の前に静まって、主に自分自身をおゆだねして、主のなさる御業を待つと言う態度が非常に大切であります。

しかしこれは言うに安く、実行するのは大変難しいことであります。私たちは目の前に迫った敵を見ると、目前に迫った困難な問題に直面するとすぐに動揺してしまい、静まって主がしてくださるまで、辛抱して待つことができないで、自分の思いに従って行動してしまうことがなんと多いことでありましょうか。もしそうであるなら、それは主に心から信頼していない、心から主に従っていないことになります。それはまた主よりも、自分に、肉の目に見えない主よりも目に見えるこの世のものに頼ろうとする、肉の思いが強いことから起こってくるのであります。

そして、主は、このような者をご自身の栄光を現す器として用いるにはふさわしくないと思われるのであります。ダビデは、自らの体験を通して次のように主を賛美いたしました。

詩篇 138:7-8
7 私が苦しみの中を歩いても、あなたは私を生かしてくださいます。私の敵の怒りに向かって御手を伸ばし、あなたの右の手が私を救ってくださいます。
8 主は私にかかわるすべてのことを、成し遂げてくださいます。主よ。あなたの恵みはとこしえにあります。あなたの御手のわざを捨てないでください。

「主は私にかかわるすべてのことを、成し遂げてくださいます。」、主はこのように苦難の時に自分の力で戦うのではなく、主の御手に自分をゆだねて、主に信頼したダビデをご自分の器として大いに用いられて御栄光を現されたのであります。そして、神様は、イスラエルの民だけではなくて、神様に背を向け偶像の神々や、自分の肉に仕える罪を犯して神様の御怒りを受けて当然の異邦人の私たちをも、憐れみと御愛によって救いの対象にお選びになり、御子イエス様を救い主として信じる信仰によって、そのような私たちをも、主のしもべとしてくださいました。そのようにして、主は、しもべとされた異邦人の私たちをも、ご自分の器として用いようと思っておられるのであります。これについて、パウロはローマ人への手紙の中で次のように言っておられます。

ローマ人への手紙 15:8-12
8 私は言います。キリストは、神の真理を現わすために、割礼のある者のしもべとなられました。それは先祖たちに与えられた約束を保証するためであり、
9 また異邦人も、あわれみのゆえに、神をあがめるようになるためです。こう書かれているとおりです。「それゆえ、私は異邦人の中で、あなたをほめたたえ、あなたの御名をほめ歌おう。」
10 また、こうも言われています。「異邦人よ。主の民とともに喜べ。」
11 さらにまた、「すべての異邦人よ。主をほめよ。もろもろの国民よ。主をたたえよ。」
12 さらにまた、イザヤがこう言っています。「エッサイの根が起こる。異邦人を治めるために立ち上がる方である。異邦人はこの方に望みをかける。」

旧約の時代には主は、主のしもべとされたイスラエルの民を直接ご自分の器としてお用いになられ、ご自身のご栄光を現されました。二千年前に、御子イエス様が十字架の上で死んでくださり、私たちの罪の贖いの御業を成し遂げられ、甦って天に昇られてから後は主の御霊が、イエス様を主と認める人々のうちに住んでくださって、そのものを主の器として用いて、御霊が自ら、お働きになって御栄光を現そうとされるのであります。では、御霊をお入れした器のなすべきこととはなんでしょう。それは、自我によって主の御霊の働きを妨げないことであり、ともすれば先走って主のために何かしようとする自分を抑えて、

肉の自分を抑えて、御霊におゆだねし、御霊の働くことを静まって待つことであります。

パウロはコリント人への手紙第一の 6 章 19 節、20 節で次のように言っています。

> コリント人への手紙第一、6:19-20
> 19 あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。
> 20 あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい。

このようにパウロは言っております。パウロの言う通りに私たち信者の体は、イエス様が尊い代価を払ってくださったことによって、罪の奴隷から神様に買い取られて主のものされています。そして、主の御霊をお入れする器とされているのであります。主の器である以上、もはや自分のものではないはずであります。では、パウロはなぜ自分の体を持って神の栄光を現しなさいとここで言っているのでしょう？

私たち信者はともすればこの言葉を、信者自身が働いて神様の栄光を現さなければならないのではないかと受け取って、がんばってしまいます。しかし、いくら私たち信者が肉の力で頑張っても神様のご栄光を現すことはできません。どうしてでしょうか？それは私たちの肉の思いが、たとえどんなに良いものであるかのように見えても、しょせん、肉から出た思いは、肉に属するものに過ぎないからであります。

したがって、信者がいくら勇んで肉に属する性質を使って信仰のために戦っても、それでは決して主の喜ばれる実を結ぶことができないのであります。たとえ良い結果を生んだように見えても、それは自分に栄光を帰することになり、結局自らを誇るというサタンが喜ぶ傲慢の罪を、主の前に犯す結果になるのであります。

パウロが先ほどの御言葉で強調しているのは、イエス様を信じた者は自分の体を主の器としてささげて、主に自分をゆだねなさいということであると思います。もし私たち信者に、自分の体は主が所有される器に過ぎない、自分のものではないと言うはっきりした自覚があれば、自分のものではない体を、自分が使って、信仰の戦いをするはずがありません。神様のご栄光は信者自身が戦うことによってではなく、信者のうちに住まわれる御霊自らが戦うことによってのみ現されるのであります。

前にも申しましたように、主の器である信者は、御霊が働かれるのを妨げないように、主のご命令どおりにただ堅く信頼し、主の前に静まって、主が御霊によって命じられることを霊の耳でしっかり聞き取って、主によって動かされるまで待つということが大切なのであります。

> コリント人への手紙第二、4:7
> 7 私たちは、この宝を、土の器の中に入れているのです。それは、この測り知れない力が神のものであって、私たちから出たものでないことが明らかにされるためです。

パウロが言うように、私たち信者は主の器と言っても金や銀のような立派な器ではなくて、何の価値もない、落とせば直ぐに割れてしまうようなもろい土の器にしか過ぎません。ですからその自分がそのような者にしか過ぎないとはっきり自覚していれば、自分の力でサタンと戦って勝てるなどとは考えるはずがありません。私たちがサタンと戦って勝てるのは、このようにもろくて弱い土の器を通して働かれる、御霊ご自身の大いなる力と知恵によるのであります。イエス様は、このことを有名なぶどうの樹と枝のたとえでお話になられています。

> ヨハネの福音書 15:6-7
> 6 だれでも、もしわたしにとどまっていなければ、枝のように投げ捨てられて、枯れます。人々はそれを寄せ集めて火に投げ込むので、それは燃えてしまいます。
> 7 あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまるなら、何でもあなたがたのほしいものを求めなさい。そうすれば、あなたがたのためにそれがかなえられます。

ここでは信者は枝にたとえられています。枝の役割は実を実らせることでありますが、それは枝の力によるのではありません。枝が樹につながっているから可能なのであります。枝はただ樹にしっかりつながっている、それだけで良いのであります。枝が樹につながっていさえすれば、樹から樹液が自然に流れて枝は生き、その枝は、自然と実を結ぶことができるのであります。

そのように信者は自分の力で働くのではなくて、主の御霊にしっかりと結びついてさえいれば、御霊の力が信者を通して働かれてなすべきことを命じてくださり、結果として、自然と実を結ぶようになるのであります。また反対に樹から離れた枝がたちまち枯れるのと同じように、御霊が離れた信者の信仰は、御霊を失って実を結ぶどころか衰えてしまい、やがては枯れてしまうのであります。

今までご一緒に考えて参りましたように、主は、主のしもべを器としてお用いになって、その器を通してご自身の栄光を現そうとお考えになって、その対象にイスラエルの民、そして私たち異邦人のキリスト者をお選びになったのであります。主がしもべに命じておられるのは、主の器としての役割を守って、自分の力に頼らず主にゆだね、主だけに頼りなさいということであります。

あなたがたは自分の力で信仰の戦いをしてはならない、この戦いは私の戦いであるからであると。あなたがたは私に堅く信頼して、私の前に静まっていなさい。そして、私が戦いに勝利するのをしっかり見ていなさい。これが、主の器とされた私たち信者に、主が求めておられる生き方、信仰の戦い方なのであります。

ご再臨の間近い今、混乱と悪の増大する地上で生きる私たちの直面する戦いはいろいろあります。福音伝道のための戦い。そのほかにも、実に様々なものがあります。身近なものをあげてみますと、夫婦間の問題にしても、親子間の問題にしても、あるいは、子供の結婚にまつわる問題、そしてまた子供の養育、教育の問題。歪められ

た性の問題。あるいは、私たちの集会の一致を乱そうとするサタンによって起こされた問題など、いろいろございます。

兄弟姉妹の中にも、これらの問題に直面している方がおありのことと思います。そしてこれらの問題は、自分の力では解決不可能のように思われるかもしれません。しかし、これらの問題は、すべて信仰の戦いなのであります。そのような戦いに直面した時こそ、騒ぎ立とうとする肉の思いを捨てて、悔い改めと祈りを持って主に堅く信頼して、御前に静まり主の御業を待ち望むことこそ主は期待しておられるのであります。そして、この生き方、この戦い方は私たちが自分の無力さ愚かさを徹底して知って、自我が砕かれ主に自分を明け渡したときにこそ、はじめて可能となるのであります。

主はかつてご自分の民に次のように仰せになりました。

> 申命記 20:1-4
> 1 あなたが敵と戦うために出て行くとき、馬や戦車や、あなたよりも多い軍勢を見ても、彼らを恐れてはならない。あなたをエジプトの地から導き上られたあなたの神、主が、あなたとともにおられる。
> 2 あなたがたが戦いに臨む場合は、祭司は進み出て民に告げ、
> 3 彼らに言いなさい。「聞け。イスラエルよ。あなたがたは、きょう、敵と戦おうとしている。弱気になってはならない。恐れてはならない。うろたえてはならない。彼らのことでおじけてはならない。
> 4 共に行って、あなたがたのために、あなたがたの敵と戦い、勝利を得させてくださるのは、あなたがたの神、主である。」

主のおいでくださる日を待ち望む今の時にあたって私たち信者は、このご再臨に備えて、御霊の働きを妨げる私たちの自我がさらに砕かれ、御前に静まり、主の器として自分自身を明け渡し、御霊が私たち、器を通して、私たちの直面する全ての戦いを通して、成し遂げられる勝利の御業をしっかりと見届け、生きて働かれる主を心から褒め称えることができるように、切に祈りたいと願う次第であります。

どうもありがとうございました。

葬儀メッセージ

2005 年 8 月 27 日、前山信雄兄葬儀
重田定義

エレミヤ書 29 章 11 節
11 わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。――主の御告げ。――それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。

まず敬愛する兄弟のご葬儀に際しまして、ご遺族、ご親族、ご友人のみなさまにとって、愛する兄弟との地上でのお別れ、さぞお寂しいことと心からお察し申し上げます。しかしながら、決して悲しまれる必要はございません。イエス様を信じておられない方々にとってはなぜだろうと不思議に思われるかもしれませんけれども、これからその理由についてお話ししたいと思います。

私たちは日頃、忙しさに紛れて、人は死んだらいったいどこに行くのだろうという大問題について、深く考える余裕がありません。けれども愛する方、親しい方の死に出会えばどなたでもこの問題を考えざるを得ないと思うのであります。では私たちの敬愛する兄弟はいったいどこに行かれたのでありましょうか。この問題を考えるにあたってまず知っておかなければならないのは、人には二通りのタイプがあるということであります。

一つのタイプは、私たち人間を愛し、私たち人間を含めて天地万物をお造りになり、そしてこれらを支配しておられる神さま――この神さまは完全に正しく、完全に聖い神さまでありますが、そしてまたその神さまは私たちの心の中まで見通される神さま。今、永遠に生きておられ、そしてただひとりのまことの神さま。この神さまの前に私たち人間はだれひとりとして正しいとは言えないのです。それにも関わらず、「自分は正しいのだ。」と、「自分は今まで悪いことは何一つしていない。」と言い張る人間がおられるのです。

もう一つのタイプの方、この方は今、申しました神さまに背を向けて、自分の思うままに生きてきた。これは聖書で罪ということばをよく使いますけれども、罪というのは犯罪ではないのです。神さまに背いて自分勝手に生きていることが聖書で言う罪であります。そういう罪にハッと気が付いて、その神さまを恐れ、その神さまに心から悔い改めて赦しを乞う人間であります。この二通りの人間がいるのです。

前のタイプの人間が死にますと、その行き先は神さまの刑罰を受けるところ、すなわち、地獄であります。そして、また後のタイプの人間が死にますと、その行き先は神さまから永遠のいのちを与えられた者だけがはいることが許されるところ、すなわち天国であります。どんな人間も例外なく死後の行き先は神さまによってこのどちらかに決められます。私たちは死んだらこのどちらかに行くほかないのであります。中間というのはありません。こういうわけで私たちはこの二つの行き先についてよく知っておくことが大変に大切であると思います。

まず天国について考えてみたいと思います。聖書に記されている天国とはいったいどんなところでありましょうか。天国とは万物の創造主、造り主なる生ける神さま、唯一の神さまと、そしてその神さまの御子であるイエス様を中心として、先ほど読んでいただきました天国の国籍という恵みを神さまから与えられた方だけが住むところであります。

イエス様を信じた者は神の子どもとされますが、その神の子どもとはいったいどういう人のことを指しているのでありましょうか。それは生けるまことの神さまを恐れないで、わがままま勝手に生きてきたその自分の罪を身代わりに負って、十字架の上で死んでくださったイエス様を救い主と信じた人々であります。聖書に、「自分の着物を洗って、いのちの木の実を食べる権利を与えられて、天国の門を通って天の都にはいれるようになる者は幸いである。」と書いてあります。

けれども私たち人間が生まれながらに着ている罪という真っ黒に染まった着物は、私たちがどんなに良き行ないという石鹸で洗っても、あるいはどんなに熱心に宗教という石鹸で洗っても、これを白くすることはできないのです。この罪という黒いしみは、ただイエス様、十字架の上にかかって、そして尊いご自分の血を流してくださったそのイエス様の聖い血潮で洗われることによって初めて完全に白くなるのであります。そして神さまは御子イエス様の尊い血によって真っ白にされた着物を着ている者だけを正しい者と認めてくださって、永遠の木の実を食べる権利を与えてくださり、天の御国の門をくぐることを許してくださるのであります。

このようにして神の子どもとされた者は、もはや死の恐怖に怯えることなく、苦しみや涙から完全に解放されて、天の都で神さまそして神の御子イエス様のお側近くで永遠に安らかな日々を過ごすことができるのであります。聖書に、

ヨハネの黙示録 21:3
3「見よ。神の幕屋（・・・・神さまのお住まいですが、・・・・）が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、
4 彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。」

と書かれている通りであります。聖書には私たちの想像をはるかに超えたすばらしい天の都の光景が詳しく記されておりますけれども、神の子どもとされた者は死んでからこのすばらしい天の都で神さま、そして御子イエス様のもとで永遠に喜びと平安の日々を過ごすのであります。

次に、お聞きになりたくないかもしれませんけれども、地獄のことをこれから少しお話ししたいと思います。いったい地獄とはどんなところでありましょうか。また、なぜ地獄があるのでありましょうか。聖書には地獄とは神さまにさばかれた者が永遠の滅びの刑に服するところであると記されています。

生きている間に神さまを恐れず、神さまの愛を拒んで神さまに逆らい続けた者は神さまから見捨てられ、そして滅びの宣告を受けて、永遠の苦しみの刑に服さなけれ

ばなりません。聖書によればこの永遠の滅びの刑罰とは今、申しましたように、神さまから見捨てられた者が火と硫黄の燃える池に投げ込まれて、永遠に苦しむという肉体の死よりもはるかに恐ろしいものであって、肉体の死を聖書では第一の死と言うのに対しまして、今申しました永遠の滅びの苦しみの刑、これを第二の死と言っております。この恐ろしい刑罰を受ける者は先ほども申しましたように、神さまを恐れず、自分の罪を認めないで悔い改めないという人であります。

地獄は人間が考え出したもので、そのようなところは実際に存在しないと、あり得ないと考えておられる人はたくさんいらっしゃいます。しかしながら万物の支配者である全き聖、完全に聖く正しい、その生ける神さまがおられる以上、この地獄というのは現前として実在しているのであります。

ある人は、聖書の神さまは愛の神と言われているのに、その神さまが人をさばいて地獄に送るというのはおかしいではないかと仰います。けれども今も申しましたように、神さまは愛の方であると同時に、完全に聖く正しい方であります。ですから神さまはご自分が義である、正しいということをはっきりお示しになるために決して妥協はなさいません。神さまの招きに耳を傾けずに、「神など必要ない。自分は悔い改めるような悪いことはしていない。」、そのようにあくまで言い張る者に地獄を設けて、さばきの刑を実行されるのであります。

こういうわけで、罪に汚れた人間が地獄の存在とその必要性を疑うのはまさに神さまを侮る者と言わざるを得ないのであります。もし地獄がなければ神の御子イエス様はいったい何のためにわざわざ人となってこの世に来られて、十字架の上で死の苦しみを味わわれたのか。イエス様の尊いいのちによる罪の赦しの救いのみわざは、これは全く無意味なものになってしまいます。しかしながらイエス様は、私たちを自分ではどうしようもない、自分では聖くすることもできない、その罪から救い出してくださるために自ら進んでご自分の尊いいのちを捨ててくださったのであります。

これまでごいっしょに私たち人間の死後の行き先である天国と地獄について、神さまのみことばである聖書から考えてまいりました。その結果私たちの前には天国への道を選ぶか地獄への道を選ぶか、この二つに一つの選択しかないということがおわかりになったと思います。私たちはどちらを選ぶべきか。これらを自分自身に問わなければなりません。もし天国への道をお選びになりたいのであれば、イエス様のところに行くほか道はありません。イエス様ご自身がこう仰っておられるからであります。

> ヨハネの福音書 14:6
> 6「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもと（・・・・すなわち天国・・・・）に来ることはありません。

このように仰っておりますように、私たちが天国に行くためには自分の努力によってではなく、先ほど申しました宗教を信じること、この宗教の中にキリスト教ももちろん含まれております、宗教を信じるのでもなく、私たちを救うために十字架に架かってくださった神の御子イエス様という道を通る以外に、天国にはいる方法はないのであります。そしてこの道を通ることができるのは、いわゆる立派な人、あるいは人格高潔な人である必要はない。むしろそういう人はなかなかはいれません。そうではなくて、自分は良いことをしたくてもできないような無力な者である、みじめな者であるということを素直に認めて、聖い、正しい神さまの前にへりくだって、救いを求めた者だけであります。聖書に、

> 使徒の働き 4:12
> 12 この方（・・・・すなわちイエス様・・・・）以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名（・・・・イエス様の御名・・・・）のほかには、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。

と書かれておりますとおり、神の御子イエス様を信じて罪から救い出された者だけがイエス様という道を通って天国にはいることができるのであります。

イエス様を信じた者にはもうひとつ神さまからのすばらしい約束があります。それは信じる者のからだのよみがえり、復活ということであります。イエス様を救い主と信じた者の霊、たましいはこの世のいのちが終わった瞬間に、もうその瞬間に天の御国に引き上げられます。ですから今、兄弟の霊は天国におられるわけです。ではいったいからだはどうなるのか。からだはお墓の中に骨として永遠に納められなければならないのでしょうか。そうではないのです。

肉体の死もイエス様を信じることによって取り除かれます。イエス様は肉体のよみがえりをご自分の復活によって私たちに証明してくださり、ここに掲げてある掛け軸にありますように、

> ヨハネの福音書 11:25
> 25「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。

という約束をしてくださいました。このイエス様のお約束どおり、イエス様を信じる者の肉体は、イエス様の復活のからだのように朽ちない、聖い、完全なからだによみがえります。

しかしながらいったいいつでしょうか。その時はいつなのでありましょうか。それは復活なさって、天にお戻りになったイエス様がご自分を信じる者を迎えに再び来られる、その時であります。その時イエス様は天の御国でご自分の傍らに置かれていた、すでに天に召された信者ひとりひとり、兄弟もそうですが、その霊を連れて、空中まで降りて来られて、そして箱の中に納められていた遺骨を朽ちない、聖い、完全な肉体によみがえらせ、そして連れて来られた霊とひとつに合わせて、イエス様に似た完全な人として、もう決して死ぬこともない、障害もない、そういう完全な者として再び天に携え上げてくださるのであります。

聖書はこれについて次のように言っております。先ほどお読みいただいた聖書のみことばでありますけれども、

ピリピ人への手紙 3:20
20 私たちの国籍（・・・・私たちイエス様を信じる者の国・・・・）は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。
21 キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。

と、あるとおりであります。また次のようにも書かれております。

テサロニケ人への手紙第一
4:16 主（・・・・イエス・キリスト・・・・）は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者（・・・・これはイエス様を信じた死者であります・・・・）が、まず初めによみがえり、
17 次に、生き残っている私たち（・・・・その時にまだ生き残っている私たち信者・・・・）が、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で（・・・・イエス様・・・・）主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。

と書かれております。こうしてイエス様を信じる者は、神の御子イエス様の尊いいのちの犠牲という大いなる救いのみわざによって、神さまに対する罪の報いとして私たち人間に科せられている、死という恐ろしい敵に完全に勝利し、永遠に神さまとともに生きる者となることができるのであります。何というありがたくも、またすばらしい神さまの恵みでありましょうか。

兄弟は、先ほど司会の兄弟が仰ったように、ハンディを背負って人生を歩んで来られました。その間、どんなに苦しいこと、つらいことが多かったことかとお察しいたします。しかし、その多くの苦しい、つらい試練を奥さまの姉妹とともに、イエス様を素直に信じる信仰によって乗り越え、これまでの生涯を、召される日までずっとイエス様に信頼し、イエス様におゆだねになって生きて来られました。さらに手術後、大変な苦しみの中にあっても、いつも天国への希望を抱いておられ、お見舞いにうかがって筆談で天国のお話をしますと、いつも兄弟のお顔は輝いておられました。

その兄弟の純粋な信仰の姿勢を、深い愛を持って見守り続けておられたイエス様は、8 月 25 日を定めの時として、兄弟の霊を兄弟のご希望どおり、天の御国に迎え入れてくださったのであります。こうして兄弟はイエス様を信じる信仰によって、恐ろしい死に超じて天国に凱旋されたのであります。私が初めに、「兄弟の死を悲しむ必要はない。」と申しましたわけ、その理由は、まさにここにあるということがおわかりいただけたことと存じます。

みなさまもご承知のように、今日、私たちはたいへんな世の中に置かれております。見ること、聞くこと全て異常であります。自分の身にいつ何が起きてもおかしくないような世の中であります。そのような中にあって、私たちはいったい何に頼ったら安心なのでしょうか。いったい何が私たちを守ってくれるのでありましょうか。お金でしょうか、健康でしょうか、政治や行政でしょうか、宗教でしょうか。それらのものが私たちを保障してくれないことは、みなさま十分おわかりのことと存じます。私たちが自分の全てをおゆだねすることができるお方は、私たちひとりひとりのためにご自身のいのちを犠牲にしてまで、私たちを愛してくださった神の御子イエス様ただおひとりだけであります。兄弟はそのイエス様にご自分をおゆだねになり、その結果、目に見えるこの世のものによっては決して手にすることができないまことの幸せをご自分のものとされたのであります。

どうか、本日ここにご列席されたみなさまも、兄弟のように、この幸せをご自分のものとしてイエス様を信じ、永遠のいのちにあずかる者となっていただきたいと心からお願いする次第であります。天の御国に憩っておられる兄弟が、今もっとも望んでおられるのは、そのことであると信じるからであります。

古いパン種を取り除きなさい

2005 年 9 月 6 日、吉祥寺学び会
重田定義

> コリント人への手紙第一、5 章 6 節-8 節
> 6 あなたがたの高慢は、よくないことです。あなたがたは、ほんのわずかのパン種が、粉のかたまり全体をふくらませることを知らないのですか。
> 7 新しい粉のかたまりのままでいるために、古いパン種を取り除きなさい。あなたがたはパン種のないものだからです。私たちの過越の小羊キリストが、すでにほふられたからです。
> 8 ですから、私たちは、古いパン種を用いたり、悪意と不正のパン種を用いたりしないで、パン種のはいらない、純粋で真実なパンで、祭りをしようではありませんか。

司会の兄弟に読んでいただきましたこのみことばから今日は、「信仰におけるパン種とは何か」ということにつきまして、ごいっしょに考えたいと思います。

どなたもご承知のように、パン種というのはパンを作る際に、練った小麦粉を発酵させてふくらませるために用いる酵母、イーストのことであります。パン種はパンをふくらませるとともにこの発酵が進み過ぎますと、パンを腐敗させてしまいます。イエス様はこのだれでも知っているパン種を例にとって、弟子たちやイエス様の話を聞きに集まった人々に、信仰を正しく守る上でどんなことに気を付けなければならないかを教えさとされました。イエス様は次のように仰っています。

> マタイの福音書 16:6
> 6「パリサイ人やサドカイ人たちのパン種には注意して気をつけなさい。」

同じような注意をイエス様はマルコの福音書の 8 章 15 節でも仰っています。

> マルコの福音書 8:15
> 15「パリサイ人のパン種とヘロデのパン種とに十分気をつけなさい。」

ご存知のように、パリサイ人というのはユダヤ教の一派であり、律法の実践に熱心なことを自負している人々であります。そして多くの律法学者はこの派に属しておりました。しかしながら彼ら自身の律法の守り方は実際には全く外面的、形式的であり、イエス様はそのような彼らを偽善者と次のように激しく非難されました。「彼らの行ないをまねてはいけない。」、弟子たちや群衆に命じられたのであります。

> マタイの福音書 23:3、5、23
> 3 彼らの行ないをまねてはいけません。彼らは言うことは言うが、実行しないからです。
>
> 5 彼らのしていることはみな、人に見せるためです。
>
> 23 忌わしいものだ。偽善の律法学者、パリサイ人たち。あなたがたは、はっか、いのんど、クミンなどの（・・・・これはいずれも香味料です。あるいは薬剤に使う貴重な植物であります。・・・・）十分の一を納めているが、（・・・・これは神さまへの供え物として納めているという意味です。・・・・）律法の中ではるかに重要なもの、すなわち正義もあわれみも誠実もおろそかにしているのです。
>
> 25 忌わしいものだ。偽善の律法学者、パリサイ人たち。あなたがたは、杯や皿の外側はきよめるが、その中は強奪と放縦でいっぱいです。

このように厳しく彼らをイエス様は非難されております。また、ここに出ているサドカイ人というのは、祭司階級、あるいは上流階級に属しまして、合理主義的、現実主義的な考えによって律法を解釈し、その結果肉体の復活、あるいは神さまによる審判、神さまによる報いというものを認めない人たちなのです。

そしてヘロデのパン種と言われているヘロデとは、これもご存知のように当時ユダヤの領主であったヘロデ・アンテパスのことを指しております。彼は異母兄弟の妻のヘロデヤを自分の妻としたというような、近親相姦の罪をバプテスマのヨハネに指摘されたことをたいへん怒って、ヨハネを殺した人物です。飽食かつ放縦な人間であります。

イエス様は彼らの教えや生き方をパン種に例えて、信仰というパンの中にそのような間違った教えや悪い生き方がはいると、たちまちふくれ上がって、信仰が腐敗してしまうから気をつけなさいというように警告されたのであります。パウロは、今、読んでいただきましたコリントの教会の信者に宛てた手紙で、「イエス様を信じる信者はパン種のはいらない純粋なパンでなければならない。」と書いています。そしてその理由についてパウロは、「私たちの過越の小羊が、すでにほふられたから。」と言っております。

過越とは、神さまのさばきが通り過ぎるという意味でありまして、神さまはかつてイスラエルの民をエジプトから脱出させられたときに、神さまが命じられたとおり、傷のない小羊をほふって、その血を家の入り口と鴨居に塗ってあるイスラエル人の家は神さまがその血をご覧になって、その家の者をさばかずに通り過ごされた。けれども小羊の血を塗っていないエジプトの家の初子は全て打たれたということを彼は知っております。そのとき神さまがイスラエルの民に仰せられたみことばは次のようなものでありました。

> 出エジプト記 12:12
> 12 その夜、わたしはエジプトの地を巡り、人をはじめ、家畜に至るまで、エジプトの地のすべての初子を打ち、また、エジプトのすべての神々（・・・・これは当然偶像の神々ですが、・・・・）にさばきを下そう。わたしは主である。
> 13 あなたがたのいる家々の血は、あなたがたのためにしるしとなる。わたしはその血を見て、あなたがたの所を通り越そう。わたしがエジプトの地を打つとき、あなたがたには滅びのわざわいは起こらない。
> 14 この日は、あなたがたにとって記念すべき日となる。あなたがたはこれを主への祭りとして祝い、代々

守るべき永遠のおきてとしてこれを祝わなければならない。
15 あなたがたは七日間種を入れないパンを食べなければならない。その第一日目に、あなたがたの家から確かにパン種を取り除かなければならない。第一日から第七日までの間に種を入れたパンを食べる者は、だれでもイスラエルから断ち切られるからである。

こうしてイスラエルの民は毎年、神さまの救いの恵みのしるしである過越の祭りを守って、その度に神さまの仰せに従って、過越の小羊をほふり、種なしのパンを食べて祝ってきたのであります。この小羊のいけにえは、人間を罪の束縛から贖い出すために身代わりとして十字架の上で血を流し、肉を裂かれた主イエス・キリストを象徴するものであり、またイエス様が十字架に架かられる前に、弟子たちと晩餐をとられたときに仰ったみことばです。

「取って食べなさい。これはわたしのからだです。」このようにパンをイエス様は取って仰せになった。そしてまた、杯をお取りになって、感謝をささげて後に、こう彼らに言ってお渡しになりました。「みな、この杯から飲みなさい。これはわたしの契約の血です。罪を赦すために多くの人のために流されるものです。」今のみことばはマタイの福音書の 26 章の 26 節から 28 節に記されているみことばでありますけれども、こういうふうにイエス様が言われたことを記念して、キリスト者が守り行なうことになった主の聖餐の原型であります。イエス様がまことの過越の小羊であると言われたのは、こうしたところから来ているのであります。

イエス様を信じる者が、パン種の入らない純粋なパンとなることができたのは、このように過越の小羊としてのイエス様が十字架の上で流された血によって、尊い、聖い血潮によって自分自身に生きていた、あるいは今まで間違った信仰に陥っていた、こういうふうな神さまのみこころにそむく罪のパン種が取り除かれたからにほかなりません。しかしながら、このように神さまの大いなるあわれみと恵みによって、聖められたパンとされた私たちキリスト者に再びパン種が入れば、そのパン種はキリスト者の中でふくらんで、私たちの信仰を腐敗させ、堕落させてしまうのであります。パウロが先ほどのコリント人への手紙で、

コリント人への手紙第一、5:6-7
6 あなたがたは、ほんのわずかのパン種が、粉のかたまり全体をふくらませることを知らないのですか。
7 新しい粉のかたまりのままでいるために、古いパン種を取り除きなさい。

と警告されているのはそのためであります。この古いパン種とは、律法のことであり、また律法的な考え、すなわち行ないによって義とされるという考えを指しております。これについてパウロはガラテヤの教会の信者に宛てた手紙で次のように注意をしております。

ガラテヤ人への手紙 5:2-9
2 よく聞いてください。このパウロがあなたがたに言います。もし、あなたがたが割礼を受けるなら、キリストは、あなたがたにとって、何の益もないのです。
3 割礼を受けるすべての人に、私は再びあかしします。その人は律法の全体を行なう義務があります。
4 律法によって義と認められようとしているあなたがたは、キリストから離れ、恵みから落ちてしまったのです。
5 私たちは、信仰により、御霊によって、義をいただく望みを熱心に抱いているのです。
6 キリスト・イエスにあっては、割礼を受ける受けないは大事なことではなく、愛によって働く信仰だけが大事なのです。
7 あなたがたはよく走っていたのに、だれがあなたがたを妨げて、真理に従わなくさせたのですか。
8 そのような勧めは、あなたがたを召してくださった方から出たものではありません。
9 わずかのパン種が、こねた粉の全体を発酵させるのです。

このようにパウロは言っております。パウロはガラテヤの教会の中に、イエス様を信じた者でも割礼を受けなければ救われない、割礼を受けなければ神様から義と認められないという律法的な間違った教えが広まり進むのを心配して、これを正しい信仰の妨げとなるパン種の弊害として以上のように信者に注意を促したのであります。イエス様を信じる者は聖徒と呼ばれます。聖徒とは聖別された者という意味であって、イエス・キリストの贖いのみわざによって、この世に属する者から聖め別たれて、聖なる神に属する者とされた者であります。パウロはこのように、主の愛とあわれみによって聖徒とされた者はどのように歩むべきか、何に注意しなければならないかをエペソの教会の信者に宛てた手紙の中で次のように書いております。

エペソ人への手紙 5:1
1 ですから、愛されている子どもらしく、(・・・・主に愛されている子どもらしく、・・・・)神にならう者となりなさい。
2 また、愛のうちに歩みなさい。キリストもあなたがたを愛して、私たちのために、ご自身を神へのささげ物、また供え物とし、香ばしいかおりをおささげになりました。
3 あなたがたの間では、聖徒にふさわしく、不品行も、どんな汚れも、またむさぼりも、口にすることさえいけません。
4 また、みだらなことや、愚かな話や、下品な冗談を避けなさい。そのようなことは良くないことです。むしろ、感謝しなさい。
5 あなたがたがよく見て知っているとおり、不品行な者や、汚れた者や、むさぼる者――これが偶像礼拝者です。――こういう人はだれも、キリストと神との御国を相続することができません。
6 むなしいことばに、だまされてはいけません。こういう行ないのゆえに、神の怒りは不従順な子らに下るのです。
7 ですから、彼らの仲間になってはいけません。

このようにパウロは、聖別されて神に属する者となった聖徒が、悪いパン種によってその信仰が腐敗しないように細々とした注意を、指示を与えております。またパウロ

はコリントの教会の信者に宛てた手紙には、聖別されて神様の民とされた信者が、神さまの命令を守って、不信仰な者と交わらず、汚れたものに触れないようにすれば信者は神さまの息子、神さまの娘となるというように約束してくださっているのですから、一切の汚れから自分をきよめて、主なる神さまを恐れかしこんで、聖きを全うしようではないかというように信者に勧めております。この個所はコリント人への手紙第二の 6 章の 14 節から 7 章の 1 節にわたって記されております。

コリント人への手紙第二
6:14 不信者と、つり合わぬくびきをいっしょにつけてはいけません。正義と不法とに、どんなつながりがあるでしょう。光と暗やみとに、どんな交わりがあるでしょう。
6:15 キリストとベリアルとに、(・・・・ベリアルとはサタンのことですが、・・・・)何の調和があるでしょう。信者と不信者とに、何のかかわりがあるでしょう。
6:16 神の宮と偶像とに、何の一致があるでしょう。私たちは生ける神の宮なのです。神はこう言われました。「わたしは彼らの間に住み、また歩む。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。
6:17 それゆえ、彼らの中から(・・・・これは不信者です、・・・・)出て行き、彼らと分離せよ、と主は言われる。汚れたものに触れないようにせよ。そうすれば、わたしはあなたがたを受け入れ、
6:18 わたしはあなたがたの父となり、あなたがたはわたしの息子、娘となる、と全能の主が言われる。」

7:1 愛する者たち。私たちはこのような約束を与えられているのですから、いっさいの霊肉の汚れから自分をきよめ、神を恐れかしこんで聖きを全うしようではありませんか。

またペテロは、私たちキリスト者が聖くあらねばならないのは、召してくださった神さまがわたしが聖いから、あなたがたも聖くならなければならないと仰せになった。その主の仰せに従うためであるというように言っております。

ペテロの手紙第一、1:13-16
13 ですから、あなたがたは、心を引き締め、身を慎み、イエス・キリストの現われのときあなたがたにもたらされる恵みを、ひたすら待ち望みなさい。
14 従順な子どもとなり、以前あなたがたが無知であったときのさまざまな欲望に従わず、
15 あなたがたを召してくださった聖なる方にならって、あなたがた自身も、あらゆる行ないにおいて聖なるものとされなさい。
16 それは、「わたしが聖であるから、あなたがたも、聖でなければならない。」と書いてあるからです。

私たちキリスト者が、パン種を入れない純粋なパンであることを求められるのは、以上のような理由からであります。またパン種はキリスト者、個々人の信仰を腐敗させ、聖徒を生きた信仰から死んだ信仰に堕落させるだけではありません。教会全体をも、集会全体をもキリストの生けるからだの教会から死んだ教会に堕落させる働きがあるということに、私たちは信者は注意をしなければならないのであります。パウロはコロサイの教会に宛てた手紙で次のように戒めております。

コロサイ人への手紙 2:6-8
6 あなたがたは、このように主キリスト・イエスを受け入れたのですから、彼にあって歩みなさい。
7 キリストの中に根ざし、また建てられ、また、教えられたとおり信仰を堅くし、あふれるばかり感謝しなさい。
8 あのむなしい、だましごとの哲学(・・・・これは当時、コロサイにありました異端的な思想を指しておりますが、それ・・・・)によってだれのとりこにもならぬよう、注意しなさい。そのようなものは、人の言い伝えによるものであり、この世に属する幼稚な教えによるものであって、キリストに基づくものではありません。

16 こういうわけですから、食べ物と飲み物について、あるいは、祭り(・・・・ここの祭りというの、この異端の教えに基づく祭りですが、祭り・・・・)や新月や安息日のことについて、だれにもあなたがたを批評させてはなりません。

20 もしあなたがたが、キリストとともに死んで、この世の幼稚な教えから離れたのなら、どうして、まだこの世の生き方をしているかのように、
21「すがるな。味わうな。さわるな。」というような定めに縛られるのですか。
22 そのようなものはすべて、用いれば滅びるもの(・・・・これは地位的なものです。・・・・)についてであって、人間の戒めと教えによるものです。

このように当時コロサイの教会にはいり込んで、信者たちを惑わしていたパン種であるところの異端の教えから離れて、教会のかしらなるイエス様に堅く立つようにと信者たちを戒めております。さらにパウロは愛する弟子のテモテに宛てた手紙の中で、教会に近づきつつある危険について警告するようにと、次のように言っております。

テモテへの手紙第一、4:1
1 しかし、御霊が明らかに言われるように、後の時代になると、ある人たちは惑わす霊と悪霊の教えとに心を奪われ、信仰から離れるようになります。

テモテへの手紙第一、6:3-5
3 違ったことを教え、私たちの主イエス・キリストの健全なことばと敬虔にかなう教えとに同意しない人がいるなら、
4 その人は高慢になっており、何一つ悟らず、疑いをかけたり、ことばの争いをしたりする病気にかかっているのです。そこから、ねたみ、争い、そしり、悪意の疑りが生じ、
5 また、知性が腐ってしまって真理を失った人々、すなわち敬虔を利得の手段と考えている人たちの間には、絶え間のない紛争が生じるのです。

これは教会の中にこういうことが起こっているということです。

主イエス・キリストの健全なことばと敬虔にかなう教えと

に同意しない人とはいったいどういう人でありましょうか。どういう信者でありましょうか。それはイエス様のみこころに反して、自分の肉の思いにとらわれ、主にある兄弟姉妹の心を動揺させて、そのような言動によって主の御からだなる教会、すなわち集会の中の霊的な不一致をもたらす、一致を乱す、そういう信者のことであります。そのような心ない信者の言動というのは、たちまちサタンによって用いられて、お互いの間に、信者のあいだに信頼ではなくて不信感、あるいは不一致のパン種をもたらすようになってしまうのであります。

このように教会は、あるいは、集会はいつもさまざまなパン種が入り込む危険があります。そして主の御からだなる生きた教会をそれによって腐敗させ、死んだ教会、死んだ集会に堕落させてしまう一因ともなりうるのであります。主のご再臨が間近い終わりの時代にあって、私たち信者は常に自分の信仰にパン種が入り込まないように警戒し、新しい純粋な粉のかたまりであり続けるために絶えず御霊に拠り頼み、肉の思いが取り去られるように祈る必要があります。それとともに私たちは主の御からだなる私たちの集会が、このパン種によって汚染され、汚され、そして主のご栄光が損なわれないようにパン種のない、聖い、生きた教会としてますます主の光を輝かせ続けることができるように心を合わせて、ともに祈らなければならないと切に願う次第であります。

最後に一ヶ所みことばをお読みして終わりたいと思います。

> ペテロの手紙第一、4:7-11
> 7 万物の終わりが近づきました。ですから、祈りのために、心を整え身を慎みなさい。
> 8 何よりもまず、互いに熱心に愛し合いなさい。愛は多くの罪をおおうからです。
> 9 つぶやかないで、互いに親切にもてなし合いなさい。
> 10 それぞれが賜物を受けているのですから、神のさまざまな恵みの良い管理者として、その賜物を用いて、互いに仕え合いなさい。
> 11 語る人があれば、神のことばにふさわしく語り、奉仕する人があれば、神が豊かに備えてくださる力によって、それにふさわしく奉仕しなさい。それは、すべてのことにおいて、イエス・キリストを通して神があがめられるためです。栄光と支配が世々限りなくキリストにありますように。アーメン。

どうもありがとうございました。

悔い改めて福音を信じなさい

2005 年 10 月 9 日、テープ聞き取り
重田定義

> マルコの福音書 1 章 15 節
> 15「時が満ち、神の国は近くなった。悔い改めて福音を信じなさい。」

おはようございます。今、兄弟に読んでいただきましたみことば、これはイエス様がガリラヤで福音伝道の第一声を上げられたときのメッセージであります。イエス様はここで、「時が満ち、」と仰っておられます。この時とは、主なる神様のみこころが成る時、成就する時であります。

神様は人間の罪のために汚されたこの世界を終わらせて、そして罪の無い聖い人間だけがはいることのできる新しい世界を創造すると聖書の中ではっきりと仰せになっておられます。したがいまして「時が満ち、」というのは、この神様のご計画が成る時が熟したということであります。私たちは今、世界やまた我が国で起こっておりますさまざまな出来事を見るときに、それらがすべて私たち人間の自己中心的な考えや行動によって、言い換えますと人間の罪によって引き起こされているということがわかります。

そして多くの方々が、このように急速に我が国が、そして世界が悪い方向に向かって動いていますと、いったいこの先どうなってしまうのだろうと大きな不安を覚えておられるのではないかと思うのであります。私たちはこのような状況にある今こそ、イエス様が仰ったこのみことばに心を留めて、神様に悔い改めることを真剣に考えなければならないのではないかと思うのであります。

私たちは日々の生活の中で後悔したり、あるいは反省したりすることが少なくありません。けれども「悔い改め」ということはあんまりしないのではないでしょうか。こう申しますと、「何だ。」と、「後悔だって、悔い改めだって同じではないか。」と反論される方がおられるかもしれませんけれども、悔い改めと後悔とは違うのです。どこが違うか。後悔というのは、「あんなことをしなければよかった。」、あるいは、「あんなことを言わなければよかった。」というように、自分の言動を顧みて悔いることであります。それにとどまると言ってもいいと思いますが。

悔い改めるということになりますと、ただ自分のしたことを悔いるだけではなくて、それを正に字の通り、改める。悔いて改めることであります。もしある人が刑法上の罪を犯して、法律によって罰せられたときに、あるいは法律には触れるような罪でなくても、人を裏切ったり、その人の心を傷つけたりするようなことをしたときに、その人が「もう二度とそのようなことはしません。」と誓ったときに私たちは、「あっ、これはあの人は悔い改めたのだな。」と認めるのです。世間では。そして、「これはこれで終わりだ。」と、「この件は終わった。」というふうにするのが私たちの理解している人間社会における悔い改めではないかと思うのですけれども、これはイエス様は「そのような悔い改めをしなさい。」と言っておられるのではないのです。

みことばにありますように、「悔い改めて、福音を信じなさい。」と仰っているのです。ここにこの世的な悔い改めと聖書で言うところの悔い改めとの違いというものがあります。聖書で言うところの悔い改めというのは、ただ悔い改めるのではなくて、神様のもとに立ち返って、神様から罪を赦していただくための前段階なのです。前段階としてぜひともこの悔い改めが必要であるということであります。預言者のイザヤは次のように言っております。

> イザヤ書 55:7
> 7 悪者はおのれの道を捨て、不法者はおのれのはかりごとを捨て去れ。主に帰れ。そうすれば、主はあわれんでくださる。私たちの神に帰れ。豊かに赦してくださるから。

ここで言うところの悪者というのは、ご存知のように神様に背を向けて、自分の考えを第一として、自分の考えを中心にして生きる人間のことであります。聖書で言う罪人とはこのような人間を指しております。ですからイザヤはここで、神様を第一とするのではなくて、自分を第一として生きるという罪を犯している私たち人間に対して、「悔い改めて、万物の創造者にして、生けるまことの神様のもとに立ち返りなさい。そうすれば、神様はあわれんでくださる。」と言っているのであります。このように聖書で言う悔い改めというのは、神様に対してそむきの罪を犯した人間は、神様と関係を回復するためにまず成されなければならない最も大切な行為なのであります。

この神様に対する悔い改めについて、さらにごいっしょに考えを進めてみたいと思います。まず神様に対する悔い改めは、ご自分にそむいている、罪に汚れた人間をなお愛してくださる神様の大きなあわれみの上に成り立つものであるということを私たちは知る必要があります。このことは預言者たちを通して、神様ご自身がご自分の思いを次のようにはっきりと示しておられることからもよくわかるのであります。エゼキエル書の 33 章の 10 節から 11 節。ここで神様はエゼキエルに次のように仰せになっています。

> エゼキエル書 33:10
> 10 人の子よ。(‥‥これはエゼキエルを指しておられるのですが、‥‥)イスラエルの家に言え。

このイスラエルの家というのは、もっと言い換えますと、神様にそむいて、罪を重ねているイスラエルの民なのですが、その民に言えと。

> エゼキエル書 33:10-11
> 10 あなたがたはこう言っている。『私たちのそむきと罪は私たちの上にのしかかり、そのため、私たちは朽ち果てた。私たちはどうして生きられよう。』と。
> 11 彼らにこう言え。『わたしは誓って言う。――神である主の御告げ。――わたしは決して悪者の死を喜ばない。かえって、悪者がその態度を悔い改めて、生きることを喜ぶ。悔い改めよ。悪の道から立ち返れ。イスラエルの家よ。なぜ、あなたがたは死のうとするのか。』

もう一ヶ所お読みします。神様は預言者のエレミヤにも次のように語られております。

エレミヤ書 31:20
20 エフライムは、わたしの大事な子なのだろうか。それとも、喜びの子なのだろうか。わたしは彼のことを語るたびに、いつも必ず彼のことを思い出す。それゆえ、わたしのはらわたは彼のためにわななき、わたしは彼をあわれまずにはいられない。

このエフライムというのは当時、偶像礼拝をしておりました北イスラエルの国のことであります。神様は偶像の神を拝むという罪を犯したイスラエルの神さえも愛してあわれみ、そして「はらわたがわななく」という表現をなさっているほどに悲しんでくださっておられます。また、私たちを滅びに至る罪から救い出してくださるために神の座から下りて、この世に来てくださった神の御子イエス様も次のように言われました。

マタイの福音書 9:12-13
12 イエスはこれを聞いて言われた。「医者を必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。
13『わたしはあわれみは好むが、いけにえは好まない。』とはどういう意味か、行って学んで来なさい。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。」

これでお分かりになりますように、悔い改めというのは、聖書で言う悔い改めは、ご自分にそむき、ご自分に敵対している悪者である私たちをもなお愛し、あわれんで、滅びないようにと呼びかけてくださるその神様の深いあわれみが、まず基本にあるということを私たちは心に刻んでおく必要があります。次に、神様に対する悔い改めには自分が犯した罪の強い自覚と、それに対する深い悲しみが必要であります。主なる神様は預言者のヨエルの口を通して私たちに、「心を引き裂き、嘆きと、涙をもって悔い改めなさい。」と命じておられます。

ヨエル書 2:12-13
12「しかし、今、――主の御告げ。――心を尽くし、断食と、涙と、嘆きとをもって、わたしに立ち返れ。」
13 あなたがたの着物ではなく、あなたがたの心を引き裂け。あなたがたの神、主に立ち返れ。主は情け深く、あわれみ深く、怒るのにおそく、恵み豊かで、わざわいを思い直してくださるからだ。

神様は私たちの悔い改めが心の底からのものであるかどうかをご覧になっておられます。ヨナ書には、神様が異邦人のニネベの人たちの悔い改めが心からのものであるということをご覧になって、彼らを赦されたという記事がございます。

ヨナ書 3:4-7
4 ヨナは初め、その町にはいると、一日中歩き回って叫び、「もう四十日すると、ニネベは滅ぼされる。」と言った。
5 そこで、ニネベの人々は神を信じ、断食を呼びかけ、身分の高い者から低い者まで荒布を着た。
6 このことがニネベの王の耳にはいると、彼は王座から立って、王服を脱ぎ、荒布をまとい、灰の中にすわった。
7 王と大臣たちの命令によって、次のような布告がニネベに出された。「人も、獣も、牛も、羊もみな、何も味わってはならない。

食べてはならない。

ヨナ書 3:7-10
7 草をはんだり、水を飲んだりしてはならない。
8 人も、家畜も、荒布を身にまとい、ひたすら神にお願いし、おのおの悪の道と、暴虐な行ないとを悔い改めよ。
9 もしかすると、神が思い直してあわれみ、その燃える怒りをおさめ、私たちは滅びないですむかもしれない。」
10 神は、彼らが悪の道から立ち返るために努力していることをご覧になった。それで、神は彼らに下すと言っておられたわざわいを思い直し、そうされなかった。

このように、神様に対する悔い改めは心の底からのものでなければならないのであります。そのような心の底からの悔い新ためを神様はよしとされるのであります。旧約の時代には悔い改めて神様に立ち返ることは、神様から人間に与えられた律法を守ることによって証しとされておりました。しかしながら神様が最初に造られたアダムのそむきの罪によって、すべての人間の中にはいってしまったこの罪の性質のゆえに、神様から与えられた律法を完全に守ることができなくなった人間をあわれまれた神様は、そのような私たちの罪を赦すために律法を守ることによってではなくて、私たちの罪の代価としてこの世に遣わされた御子イエス様を自分の救い主として信じ、受け入れることによって神様に立ち返ることのできるようにしてくださったのであります。

エレミヤ書 31:31
31 見よ。その日が来る。――主の御告げ。――その日、わたしは、イスラエルの家とユダの家

これは霊的な意味で、神様の民を意味しておりますが、

エレミヤ書 31:31-32
31 とユダの家とに、新しい契約を結ぶ。
32 その契約は、わたしが彼らの先祖の手を握って、エジプトの国から連れ出した日に、彼らと結んだ契約（・・・・すなわち律法・・・・）のようではない。

このように仰せになりました。この新しい契約というのは、イエス様ご自身が最後の晩餐の時に仰ったように、イエス様が十字架の上で私たちのために流された血による完全な罪の赦しによって私たちと結ばれた契約であります。このことがルカの福音書の 22 章の 20 節にはっきりと記されております。

ルカの福音書 22:20
20 食事の後、（・・・・これは最後の晩餐の食事です。・・・・）杯も同じようにして言われた。「この杯は、あなたがたのために流されるわたしの血による新しい契約です。

冒頭のみことばの中の、「悔い改めて福音を信ぜよ。」というイエス様のメッセージというのは、このことを意味しているのであります。私たちがどんなに正しい行ないをしようと思ってもできない、このどうしようもない私たちにとって、イエス様の十字架上での贖いのみわざを信じることによって罪が赦されるというこの新しい契約というのは、本当に私たちにとってはかり知れない恵みであります。しかしここでちょっと注意をしなければいけないことがあります。それは、「悔い改めて福音を信ぜよ。」ということは裏を返せば、「悔い改め無しには福音を信じることはできない。」ということです。もう一つ別のことばで言いますと、悔い改めを伴わない福音信仰は無いということなのです。

イエス様を信じる方々の中に、「自分は十字架がわからない。」と仰る方がおられます。事実おられます。けれども、イエス様の十字架の贖いのみわざこそが福音なのです。ですから、イエス様の十字架がわからない、おわかりにならないというのは、それはまだご自分の罪の大きさ、深さがおわかりになっていないということです。したがいまして、そういう方は主に対する悔い改めも知っておられないのではないかと思います。ですから、そういう方の信仰には感謝も無ければ、喜びも無ければ、希望も無いのです。こんなことを申しますと、何か人をさばいているようですけれども、実はこれは私自身がかつてそうだったのであります。20 数年前まではそのような全く名ばかりの信者でありました。このように、「悔い改めて福音を信ぜよ。」というこの主のみことばは、未信者に対してだけではなくて、名ばかりの信者にも主から与えられているみことばだというふうに私たちは受け取るべきであります。

三番目に、この神様に対する悔い改めに戻りますが、この神様に対する悔い改めは、神様に直接、人にではなくて、神様に直接、しかも全て隠さずに心からすることが大切であります。その意味で次に掲げるダビデの悔い改めの祈りは、私たちの良き手本であります。よくご存知でありますが、詩篇 51 篇の 1 節から 4 節までお読みいたします。

> 詩篇 51:1-4
> 1 神よ。御恵みによって、私に情けをかけ、あなたの豊かなあわれみによって、私のそむきの罪をぬぐい去ってください。
> 2 どうか私の咎を、私から全く洗い去り、私の罪から、私をきよめてください。
> 3 まことに、私は自分のそむきの罪を知っています。私の罪は、いつも私の目の前にあります。
> 4 私はあなたに、ただあなたに、罪を犯し、あなたの御目に悪であることを行ないました。それゆえ、あなたが宣告されるとき、あなたは正しく、さばかれるとき、あなたはきよくあられます。

私たちが心からの悔い改めをもって、イエス様の十字架による贖いのみわざが自分の、他人事ではなくて、自分のためであったということを信じたときに、それまでの死んでいたような私たちの霊は完全なものとされて生き返ります。しかしながら肉体のほうはどうか。肉体のほうは、私たちがイエス様を信じてからのちも天に召されるまでは、この世にあって不完全な肉と、そして肉の心をもって生きるために、悲しいことにイエス様を信じてのちもしばしば、罪を犯してしまいます。しかしながら罪に気が付いて、それをすぐに、気が付いたときにすぐに正直にイエス様の前にそれを言い表わして悔い改めれば、イエス様は父なる神様にとりなしてくださるというふうに約束しておられます。

> ローマ人への手紙 8:34
> 34 罪に定めようとするのはだれですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、私たちのためにとりなしていてくださるのです。

とあるとおりであります。またもう一ヶ所お読みしますが、ヘブル人への手紙の 7 章 24 節、25 節。ここに次のように書かれております。

> ヘブル人への手紙 7:24-25
> 24 しかし、キリストは永遠に存在されるのであって、変わることのない祭司の務めを持っておられます。
> 25 したがって、ご自分によって神に近づく人々を、完全に救うことがおできになります。キリストはいつも生きていて、彼らのために、とりなしをしておられるからです。

何という主の限りない恵みであり、またあわれみでありましょうか。

しかしここでこういうことをお考えになる方がおありではないかと思うのです。もし、けれどももし神様に対する悔い改めが手遅れになった場合に、いったい私たちはどうなのだろうかということです。これは私たちにとって大問題であります。神に対する悔い改めが手遅れになってしまったとき、どのような場合が考えられるでしょうか。その一つは、悔い改めることなしに死んだ場合であります。というのは、死んだあとで悔い改めをしようとしても死後に救いの機会は、チャンスはないからであります。イエス様は悔い改めうることなしに死んで、黄泉に落とされた金持ちにアブラハムの口を通して次のように宣告されておられます。

> ルカの福音書 16:26
> 26 私たち・・・・

これはアブラハムを含めて、救われて、もう天の御国にいれられた人々のことです。私たちとおまえたちというのは、悔い改めないで、黄泉に落とされた金持ちのような人たち

> ルカの福音書 16:26
> 26 私たちとおまえたちの間には、大きな淵があります。ここからそちらへ渡ろうとしても、渡れないし、そこからこちらへ越えて来ることもできないのです。

このみことばからも、死んでから神様に悔い改めをしようとしてももはや手遅れであるということがわかります。それならば死ぬ間際に神様に悔い改めればよいのではないか。生きている間は自分の思いのままに自由に生き

たい。そういうふうに考える方もおられるかもしれません。けれども私たちは、では自分の死の時を正確に予測できるのでありましょうか。できません。神様はそのような人間の自分中心の高ぶりを決してお赦しになっておられません。ですから神様は人間に、自分の死の時を予測することをどんなに、これは医学がどんなに進歩しようと、それをお許しにはならない。またそのような自分勝手な思いで、神様のあわれみを利用しようとするのはまさに神様に対する冒涜以外の何ものでもありません。イエス様は次のような例えを話されております。

ルカの福音書 12:16-20
16「ある金持ちの畑が豊作であった。
17 そこで彼は、心の中でこう言いながら考えた。『どうしよう。作物をたくわえておく場所がない。』
18 そして言った。『こうしよう。あの倉を取りこわして、もっと大きいのを建て、穀物や財産はみなそこにしまっておこう。
19 そして、自分のたましいにこう言おう。「たましいよ。これから先何年分もいっぱい物がためられた。さあ、安心して、食べて、飲んで、楽しめ。」』
20 しかし神は彼に言われた。『愚か者。おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。

またヤコブは手紙の中で次のように記しております。

ヤコブの手紙 4:14
14 あなたがたには、あすのことはわからないのです。あなたがたのいのちは、いったいどのようなものですか。あなたがたは、しばらくの間現われて、それから消えてしまう霧にすぎません。

このように、私たちにはあすのいのちすらどうなるかわからないのであります。ですから手遅れにならないうちに悔い改めて福音を信ぜよと呼びかけてくださる御声を聞いたならば、直ちに自分の罪の深さに気付いて、永遠の滅びから救い出そうと声をかけてくださったその神様のあわれみを心から感謝して、素直に悔い改めて福音を信じるという、その態度が必要であります。手遅れになるもう一つの場合を考えてみたいと思いますが、それは悔い改める前に終わりの日が来てしまいます。

ヨハネの福音書 12:48
48 わたしを拒み、わたしの言うことを受け入れない者には、その人をさばくものがあります。わたしが話したことばが、終わりの日にその人をさばくのです。

では、イエス様が仰っている終わりの日、あるいは神様のさばきの日はいつ来るのでありましょうか。この問いに対してイエス様は次のように言っておられます。

マタイの福音書 24:37-39
37 人の子が来るのは、ちょうど、ノアの日のようだからです。
38 洪水前の日々は、ノアが箱舟にはいるその日まで、人々は、飲んだり、食べたり、めとったり、とついだりしていました。
39 そして、洪水が来てすべての物をさらってしまうまで、彼らはわからなかったのです。人の子が来るのも、そのとおりです。

このように、終わりの日は私たち人間にそれはいつかということを正確に予測することは不可能であります。しかしながら今、終わりの日が近いということはその前兆として、次のようにイエス様が言われたことがすでに現実に私たちの周りに起こっていることからも察知することは可能であります。

マタイの福音書 24:3-8
3 イエスがオリーブ山ですわっておられると、弟子たちが、ひそかにみもとに来て言った。「お話しください。いつ、そのようなことが起こるのでしょう。あなたの来られる時や世の終わりには、どんな前兆があるのでしょう。」
4 そこで、イエスは彼らに答えて言われた。「人に惑わされないように気をつけなさい。
5 わたしの名を名のる者が大ぜい現われ、『私こそキリストだ。』と言って、多くの人を惑わすでしょう。
6 また、戦争のことや、戦争のうわさを聞くでしょうが、気をつけて、あわてないようにしなさい。これらは必ず起こることです。しかし、終わりが来たのではありません。
7 民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、
方々にききんと地震が起こります。
8 しかし、そのようなことはみな、産みの苦しみの初めなのです。

これは終わりの日の前兆だと仰っているのです。何と今の世界の状況に、私たちのおかれている世界の状況によく当てはまることではないでしょうか。

イエス様は冒頭のみことばの中で、「神の国は近くなった。」と仰せになりました。これには二つの意味が含まれております。一つは、神の御子イエス様が神様と、そして神様にそむいた罪人である私たち人間との和解の仲介者としてこの世に来てくださり、そして十字架による罪の贖いを成し遂げてくださったことによって、私たちが神の国にはいる道が整えられたという意味であります。イエス様が仰っているとおり、ご自身が神の国への道そのものとなってくださったのであります。よく知られているみことば。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」と仰っているとおりです。神の国への道がイエス様によって整えられた。イエス様ご自身が道となってくださったために神の国が私たちにとって近くなりました。

もう一つの意味は、イエス様はこの世に来られたことによって、人間の罪に汚れきったこの世界を滅ぼして、新しい、聖い神の国を想像されるという神様のご計画がさらに近くなったということです。神様は預言者イザヤを通して次のように約束しておられます。

イザヤ書 65:17-18
17 見よ。まことにわたしは新しい天と新しい地を創造する。先の事は思い出されず、心に上ることもない。
18 だから、わたしの創造するものを、いついつまでも楽しみ喜べ。

愛とあわれみに満ち給う神様は、私たちがさばかれて滅びることを悲しまれ、ひとりでも滅びることなく悔い改めて、ご自分のもとに立ち返り、朽ちることのない新たなるいのちをいただいて永遠に生きて、そして新しい天と地に、神様が創造された新しい天と地にはいることを望んでおられます。これについてペテロは次のように記しております。

> ペテロの手紙第 II、3:9
> 9 主は、ある人たちがおそいと思っているように、その約束（・・・・すなわち汚れた滅ぼして新しい聖い世界を創造されるという約束・・・・）のことを遅らせておられるのではありません。かえって、あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。

この主なる神様の限りない愛とあわれみと忍耐を私たちは心から感謝して、時が満ちた今、手遅れにならないように、ひとりでも多くの方が神様の呼びかけに素直に従って、悔い改めて神様に立ち返られるように心からお祈りをする次第であります。

どうもありがとうございました。

もものつがいをはずされる

2006 年 7 月 22 日、御代田よろこびの集い
重田定義

> 創世記 32 章 24 節-25 節
> 24 ヤコブはひとりだけ、あとに残った。すると、ある人が夜明けまで彼と格闘した。
> 25 ところが、その人は、ヤコブに勝てないのを見てとって、ヤコブのももの つがいを打ったので、その人と格闘しているうちに、ヤコブのももの つがいがはずれた。

今、読んでいただきました、このみことばから今日は、「もものつがい」、すなわち、人間の股関節をはずされたヤコブについて、いったいなぜ彼がももの つがいをはずされたのかという問題、この問題を私たちキリスト者の信仰の歩みに照らしながら、ごいっしょに考えてみたいと思います。

ご存知のように、ヤコブはイスラエルの民の指導者アブラハムの子のイサクとその妻リベカとの間に生まれた双子のうちの弟のほうです。お兄さんはエサウと言います。ヤコブというのは、「押しのける者」という意味をもっていると言われていますが、その名のとおり、彼はたいへん自我の強い男でありました。彼はお兄さんのエサウよりも、自分を愛してくれる母親のリベカと共謀しまして、年老いて死も間近い父親のイサクを欺いて、策略を用いて、長子の権利を意味する祝福を受けてしまったのであります。

かつて我が国でも、長男の権利というのはたいへん大きかったのですけれども、イスラエルではそれよりもはるかに大きくて、財産に対する権利だけではなくて、神様がアブラハムと結ばれた契約に基づく特別な祝福、すなわち、イスラエルの民の指導者となる権利もそこに含まれておりました。父親のイサクから長子の祝福を受けたことを知った兄のエサウは、弟ヤコブを恨んで、殺そうとします。それを知ったヤコブは、お兄さんの手を逃れて、遠く離れた国に住むおじさんのラバンのところに身を寄せまして、そこで二十年間、働きました。その間におじさんの二人の娘をめとり、多くの子どもをもうけ、そして財産を増やした彼は、神様から父の家に帰るように命じられたのであります。そこで彼は神様の仰せに従って二人の妻とそして多くの子どもたち、それに多くの奴隷や家畜、そして全ての財産を伴って帰国する決心をいたしました。

しかしながらヤコブが父の家に帰るためには、どうしても解決しておかなければならないことがあったのであります。それは、兄のエサウとの和解でありました。そこで彼は、途中から、家に帰る途中からお兄さんエサウに使いの者を送って、自分が和解したいと思っていることを伝えました。創世記 32 章にそのことが記されております。

> 創世記 32:3-8
> 3 ヤコブはセイルの地、エドムの野にいる兄のエサウに、前もって使者を送った。
> 4 そして彼らに命じてこう言った。「あなたがたは私の主人エサウにこう伝えなさい。『あなたのしもべヤコブはこう申しました。私はラバンのもとに寄留し、今までとどまっていました。
> 5 私は牛、ろば、羊、男女の奴隷を持っています。それでご主人にお知らせして、あなたのご好意を得ようと使いを送ったのです。』」
> 6 使者はヤコブのもとに帰って言った。「私たちはあなたの兄上エサウのもとに行って来ました。あの方も、あなたを迎えに四百人を引き連れてやって来られます。」
> 7 そこでヤコブは非常に恐れ、心配した。それで彼はいっしょにいる人々や、羊や牛やらくだを二つの宿営に分けて、
> 8 「たといエサウが来て、一つの宿営を打っても、残りの一つの宿営はのがれられよう。」と言った。

このように書かれております。ここには、兄のエサウのところから戻って来た使いの者から報告を受けたヤコブが、非常に恐れ、心配したと書かれております。なぜでありましょうか。それは、彼がお兄さんに対して、「あなたのしもべヤコブ」と、卑屈なまでにへりくだって、恭順の気持ちを示したのにも関わらず、お兄さんエサウが何の返事も使いの者に託さなかったばかりか、多くの部下を引き連れてこちらに向かって来るということを知ったからであります。ヤコブは優男であったようでありますけれども、一方、お兄さんのエサウは全身が赤く、毛におおわれた男で、たいへん荒々しい性格でありました。ヤコブは、その恐ろしい兄エサウが、長子の権利を騙し取られた怒りを、今もって燃やし続けていて、そして自分を殺しに来るのではないかということを恐れたのであります。

そこでヤコブはどうしたか。神様に祈ったのです。32 章の 9 節から 11 節にそのことが書かれております。

> 創世記 32:9-11
> 9 そうしてヤコブは言った。「私の父アブラハムの神、私の父イサクの神よ。かつて私に『あなたの生まれ故郷に帰れ。わたしはあなたをしあわせにする。』と仰せられた主よ。
> 10 私はあなたがしもべに賜わったすべての恵みとまことを受けるに足りない者です。私は自分の杖一本だけを持って、このヨルダンを渡りましたが、今は、二つの宿営を持つようになったのです。
> 11 どうか私の兄、エサウの手から私を救い出してください。彼が来て、私をはじめ母や子どもたちまでも打ちはしないかと、私は彼を恐れているのです。

これは一見、たいへんへりくだった祈りのように思われます。しかし、この祈りは神様に対する揺るぎない信頼に基づく祈りではないのです。この祈りには、神様は「あなたが生まれ故郷に帰りなさい。しあわせにしよう。」と仰ったから、私はあなたのそのおことばを信じて、ここまで帰って来たのに、兄に殺されそうになっています。ですから、この私をあなたが守ってくださるのは当然ではありませんかという、その神様に対する自己中心的な、傲慢な、思い上がった思いがありありと見えております。もし、神様が自分を救ってくださると本当に確信しているのなら、彼は自分を神様の御手にゆだねて恐れることなく、兄のエサウと会ったでありましょう。しかしながら、彼は神様に助けを祈る一方で、いかにして恐ろしい兄のエサウから逃れられるかというふうに知恵を絞りました。その策というのは次のようなものでありました。

創世記 32:16-20
16 彼は、一群れずつをそれぞれしもべたちの手に渡し、しもべたちに言った。「私の先に進め。群れと群れとの間には距離をおけ。」
17 また先頭の者には次のように命じた。「もし私の兄エサウがあなたに会い、『あなたはだれのものか。どこへ行くのか。あなたの前のこれらのものはだれのものか。』と言って尋ねたら、
18『あなたのしもべヤコブのものです。私のご主人エサウに贈る贈り物です。彼もまた、私たちのうしろにおります。』と答えなければならない。」
19 彼は第二の者にも、第三の者にも、また群れ群れについて行くすべての者にも命じて言った。「あなたがたがエサウに出会ったときには、これと同じことを告げ、
20 そしてまた、『あなたのしもべヤコブは、私たちのうしろにおります。』と言え。」ヤコブは、私より先に行く贈り物によって彼をなだめ、そうして後、彼の顔を見よう。もしや、彼は私を快く受け入れてくれるかもわからない、と思ったからである。

このように記されております。これらのことから見ても、彼がたいへんに自己中心的な人間であるとともに、人を恐れ、死を恐れる小心者であり、また大層な策士家であったことが察せられるのであります。ヤコブは、家族や財産、全てを夜の間にヨルダン川の向こう岸に渡らせてからひとりヤボクという名の渡しに残りました。そして最初に読んでいただいたみことばにありますように、ある人と夜が明けるまでその人を離さずに、格闘したのであります。最初のみことばに続く個所にはこう書かれております。

創世記 32:26
26 その人は言った。「わたしを去らせよ。夜が明けるから。」しかし、ヤコブは答えた。「私はあなたを去らせません。私を祝福してくださらなければ。」

何とも強引な男であります。この格闘は単なる格闘ではなくて、神様との祈りの格闘を意味するものと考えてもよいと思います。彼は先ほどのように、神様に助けを求めて祈りましたけれども、それでもまだ、殺されるのではないかという不安は去りません。そこで彼は、神様から確かな答えをいただくまでは祈りをやめないという、まさに格闘する勢いで、夜明けまで祈り続けたのだと思います。けれども、私を祝福してくださいという願いは、彼のいのちと家族と財産を、兄エサウから守っていただくことであり、言い換えれば、自分の自我を、自分の肉を満足させる願いでありました。

神様は彼の執拗な祈りに辟易されて、彼に答えをお出しになりました。しかしそれは彼が望んでいたような祝福ではなくて、彼のもものつがいをはずすというものでありました。もものつがい、すなわち股関節は、ご存知のように、人間の関節の中で最も大きく、簡単にはずれるようなものではありません。もし無理にはずすとなれば、非常な力と、そして、たいへんな痛みがその人に伴います。もものつがいをはずすというのは、霊的に言いますならば、自我を砕くことを意味しております。もものつがいがはずれれば、いったいどうなるでしょうか。自分の足で立つことも、歩くこともできなくなります。杖にすがって、びっこを引き引きしてやっと歩けるのであります。それと同じように、自我が砕かれれば、もはや自分の力に頼って歩むことができなくなり、神様に頼らざるを得なくなります。

また、自我が砕かれたときに人間は初めて心に自分の罪が示され、神様を恐れるようになります。神様は次のように仰せになっております。イザヤ書 66 章 2 節。有名なみことばでありますが。

イザヤ書 66:2
2 わたしが目を留める者は、へりくだって心砕かれ、わたしのことばにおののく者だ。

自我が砕かれ、神様のみことばに恐れおののく者を神様は祝福されます。このように、神様がヤコブに与えられた祝福は、彼の肉の願いを叶えるというのではなくて、彼の自我を砕くという、最もすばらしい祝福だったのであります。神様によって自我を砕かれたヤコブはどう変わったでありましょうか。創世記の 33 章にそれが記されております。

創世記 33:1-4
1 ヤコブが目を上げて見ると、見よ、エサウが四百人の者を引き連れてやって来ていた。ヤコブは子どもたちをそれぞれレアとラケルとふたりの女奴隷とに分け、
2 女奴隷たちとその子どもたちを先頭に、レアとその子どもたちをそのあとに、ラケルとヨセフを最後に置いた。
3 ヤコブ自身は、彼らの先に立って進んだ。彼は、兄に近づくまで、七回も地に伏しておじぎをした。
4 エサウは彼を迎えに走って来て、彼をいだき、首に抱きついて口づけし、ふたりは泣いた。

このように記されております。自我が砕かれたヤコブの心からは、もはや兄エサウに対する恐れは全く消え失せました。その結果、彼は杖に支えられ、びっこを引きながらも家族の先頭に立って進み、エサウに会って、心から自分の罪を謝罪することができたのであります。こうして二人は和解することができました。神様はその後、ヤコブのはずれたもものつがいを修復された、治されたということは聖書のどこにも見当たりません。彼は一生涯、はずれたもものつがいのまま生き続けなければなりませんでした。神様のみこころは、上からも彼が杖に頼って、すなわち、主なる神様に頼って歩むことを彼に求めておられたからであります。

このヤコブのエピソードは、イエス様を信じた私たちに信仰の歩みについて大切なことを示唆しているのではないかと思います。まず第一に、神様の選びという問題であります。神様の選びとは、神様が主権者としてご自分の権威によって永遠のご計画の中で、あるものを特別な恵みの対象としてお選びになることであります。私たちは率直に言って、このヤコブにはあまり好感は持てません。彼は策略をもって親を欺くような、たいへん卑劣な男であり、また、自分の利益しか考えないような男であり、兄の仕打ちを恐れて先頭に出られず、贈り物や家族を先に行かせて、一番あとから、恐る恐るついて行くほど気が小さい男であり、まさに男の風上にも置けないような人

物であります。

しかし神様は、このようなヤコブを愛し、もものつがいをはずされた上で、父イサクの後継者として、神の選びの民、イスラエルの指導者として彼をお選びになったのです。パウロはローマ人への手紙の中で次のように言っております。

> ローマ人への手紙 9:10-11
> 10 私たちの先祖イサクひとりによってみごもったリベカのこともあります。
> 11 その子どもたちは、まだ生まれてもおらず、善も悪も行なわないうちに、神の選びの計画の確かさが、行ないにはよらず、召してくださる方(・・・・すなわち主なる神・・・・)によるようにと、
> 12「兄は弟に仕える。」と彼女に告げられたのです。
> 13「わたしはヤコブを愛し、エサウを憎んだ。」と書いてあるとおりです。
> 14 それでは、どういうことになりますか。神に不正があるのですか。絶対にそんなことはありません。
> 15 神はモーセに、「わたしは自分のあわれむ者をあわれみ、自分のいつくしむ者をいつくしむ。」と言われました。
> 16 したがって、事は人間の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によるのです。

「わたしはヤコブを愛し、エサウを憎んだ。」、「わたしは自分のあわれむ者をあわれみ、自分のいつくしむ者をいつくしむ。」ということは、取りも直さず、神様の選びは神様ご自身の意思によって、一方的になされるのであって、まさに、

> ローマ人への手紙 9:16
> 16 事は人間の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によるのです。

ということであります。そしてこの主の選びは、イエス様を信じる私たちにも適用されるということをここで改めて覚える必要があります。私たちもヤコブと似たような自己中心的で、いつも自分のことを第一に考えるような、生まれながらのわがままな性質を持つ者であります。どうしてこのような者を神様が尊い御子イエス様のいのちによる救いの対象にお選びになったのか。全く理解できません。けれども神様は、私たちがまだ生まれてもおらず、したがって、私たちが善も悪も行なわないうちに、ご自身の主権をもって、永遠のご計画の中で、私たちを特別な恵みの対象としてお選びになっていたのであります。

> ヨハネの手紙第一、4:10
> 10 私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。

とありますけれども、まことに神様の御愛とあわれみは、私たち人間の考えを絶する、大きく深いものであり、私たちはただ一方的に神様に選ばれたという、この大いなる恵みを心から感謝するだけであります。

今は神の選びということについてお話しました。次にこのエピソードから示されますのは、信仰における自我の問題であります。ヤコブは、確かに信仰をもってはおりました。ことあるごとに神様に祈るような人でありました。しかしながらその信仰は、自己中心的なものであり、全てを神様にゆだねるというように、もう心から神様に信頼することは、悲しいことにできておりませんでした。彼が強い自我をもっていたからであります。そのために神様は、彼のももものつがいをはずされ、自我を砕かれたのであります。

ヤコブのエピソードから私たちは、もうひとつのエピソードとして、パウロに与えられたとげを思い起こします。パウロはこれについて、コリント人への手紙第二の中で次のように言っております。12 章の 7 節から 9 節。これもよく知られているみことばであります。

> コリント人への手紙第二、12:7-9
> 7 また、その啓示があまりにもすばらしいからです。そのために私は、高ぶることのないようにと、肉体に一つのとげを与えられました。それは私が高ぶることのないように、私を打つための、サタンの使いです。
> 8 このことについては、これを私から去らせてくださるようにと、三度も主に願いました。
> 9 しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。

私たちの信仰はどうでしょうか。自分や家族の上に何か問題が起こったときに、パウロのように言うことができるでしょうか。それともヤコブと同じように、イエス様に祈りながらも、一方では自分の力で、自分の知恵で何とか目の前の問題を解決しようとあれこれ考え、動き回るのではないでしょうか。もしそうであれば、私たちの生来の性質である自我が、まだ信じたあとも強く残っていると言えましょう。パウロはローマ人への手紙の 6 章の 6 節から 8 節の中で、これも有名なみことばでありますけれども、

> ローマ人への手紙 6:6-8
> 6 私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが滅びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。
> 7 死んでしまった者は、罪から解放されているのです。
> 8 もし私たちがキリストとともに死んだのであれば、キリストとともに生きることにもなる、と信じます。

と言っておりますけれども、自分の古い人がイエス様とともに十字架で死なないで、そのため、自我がまだ生き残っているために、あれこれと自分で考え、自分に力が無いのを知っていながらもまだ、そのちっぽけな力に頼ろうとするのではないでしょうか。イエス様はご自分を信じる者を、イエス様の御霊を入れる器としてくださり、その器を通して、ご自身がお働きになり、栄光を現わされます。パウロが、コリント人への手紙第二の 4 章で、

> コリント人への手紙第二、4:6-7
> 6「光が、やみの中から輝き出よ。」と言われた神は、

> 私たちの心を照らし、キリストの御顔にある神の栄光を知る知識を輝かせてくださったのです。
> 7 私たちは、この宝を、土の器の中に入れているのです。それは、この測り知れない力が神のものであって、私たちから出たものでないことが明らかにされるためです。

と言っておりますが、全くそのとおりであります。けれども、私たちがもし、この器を自我で塞いでしまえば、イエス様はご栄光を現わす器としてはお用いになりません。ではイエス様は、どのような方法で私たちキリスト者を、イエス様の御霊という宝を入れる器として用いようとされるのでありましょうか。それは、私たちが自分の力に頼ることができないように、私たちの自我を砕くこと。すなわち、もものつがいをはずすことによってであります。

> 箴言 3:5-6
> 5 心を尽くして主に拠り頼め。自分の悟りにたよるな。
> 6 あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。

前にも申しましたように、自我が砕かれるときには、たいへんな痛みを伴います。どなたでも自我が砕かれるときには、その痛みを体験されたと思います。しかしその痛みも、私たちを心からご自分に拠り頼ませよう。そして砕かれた私たちを用いて、信仰の実を結ばせようという、イエス様の愛に満ちたみこころによるものであることがわかれば、その痛みも感謝して耐えることができるのではないでしょうか。

> ヘブル人への手紙 12:10-11
> 10 なぜなら、肉の父親は、短い期間、自分が良いと思うままに私たちを懲らしめるのですが、霊の父は、私たちの益のため、私たちをご自分の聖さにあずからせようとして、懲らしめるのです。
> 11 すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。

と、あるとおりであります。たいへんに自己主張の強い男、押しのける者という名前のヤコブは、神様にももものつがいをはずされてから、それまでの、押しのける者を意味する「ヤコブ」という名から、「イスラエル」、すなわち、神の戦士という名に変えられました。ご再臨が近い今の時に、イエス様に選ばれた私たちも、ヤコブのような、自我の信仰にとどまるのではなくて、パウロのように、自我を砕いていただいて、主の戦士としてイエス様にしっかりと拠り頼んで、信仰の戦いに勝利し、そして、実を結ぶことができるようにと、心から祈りたいと思う次第であります。

ありがとうございました。

あなたがたはまだ、相続の安住地にはいっていない

2007 年 1 月 16 日、吉祥寺学び会
重田定義

申命記 11 章 31 節
31 あなたがたは、ヨルダンを渡り、あなたがたの神、主があなたがたに与えようとしておられる地にはいって、それを所有しようとしている。あなたがたがそこを所有し、そこに住みつくとき、

申命記 12:8-9
8 あなたがたは、私たちがきょう、ここでしているようにしてはならない。おのおのが自分の正しいと見ることを何でもしている。
9 あなたがたがまだ、あなたの神、主のあなたに与えようとしておられる相続の安住地に行っていないからである。

今、兄弟に読んでいただきましたみことばの中から今日は、主が約束された安住地にまだはいっていない、私たち信者の信仰の歩みについて、当時のイスラエルの民と比較しながらごいっしょに考えたいと思います。

天地万物の造り主にして支配者なる生ける神様は、アブラハムを選んで、アブラハムに多くの子孫を与え、全人類の祝福の基とするという契約を結ばれました。そしてその中に、乳と蜜の流れる豊かなカナンの地を与えるという約束も含まれておりました。

これについてダビデは次のようにイスラエルの民に言っております。

歴代誌第一、16:15-18
15 覚えよ。主の契約をとこしえに。お命じになったみことばは千代にも及ぶ。
16 その契約はアブラハムと結んだもの、イサクへの誓い。
17 主はヤコブのためにそれをおきてとして立て、イスラエルに対する永遠の契約とされた。
18 そのとき主は仰せられた。「わたしはあなたがたの相続地としてあなたに、カナンの地を与える。」

しかし、実際にイスラエルの民がカナンの地に永住するようになるのは、アブラハムの孫のヤコブと家族が、大飢饉を逃れて移り住んだエジプトで、その地で一族の数がおびただしく増えて、それを脅威としたエジプトから長い年月、奴隷として働かされ、苦しんでいたのをあわれまれた神様が、彼らを、イスラエルの民を、その苦役から解放させるためにモーセを召し、モーセに命じて、エジプトから脱出させられることによって起こったのであります。

エジプトを脱出してからカナンの地境にあるヨルダン川の岸に達するまで、これは簡単な旅ではありませんでした。実に 40 年間に及ぶ荒野の旅をしなければなりませんでした。

その間に神様はシナイ山でモーセを通して十戒を授けられ、この戒めを守り行なうなら、カナンの地で長く幸せに生きることができるという契約を、改めてイスラエルの民と結ばれたのであります。

しかしどうしてイスラエルの民は 40 年もの間、荒野の旅を続けなければならなかったのでありましょうか。それは神様が、彼らが選ばれた神の民として契約をどれだけ守るか、どれだけご自分の命令に従順に従うかを試みられたからでありました。旅のあいだ、モーセは、度々イスラエルの民に訓戒し、警告をしております。そのひとつをお読みしますと、申命記 8 章の 1 節から 5 節になります。

申命記 8:1
1 私が、きょう、あなたに命じるすべての命令（・・・・これは主が与えられた戒めです・・・・）をあなたがたは守り行なわなければならない。そうすれば、あなたがたは生き、その数はふえ、主があなたがたの先祖たちに誓われた地を所有することができる。
2 あなたの神、主が、この四十年の間、荒野であなたを歩ませられた全行程を覚えていなければならない。それは、あなたを苦しめて、あなたを試み、あなたがその命令を守るかどうか、あなたの心のうちにあるものを知るためであった。
3 それで主は、あなたを苦しめ、飢えさせて、あなたも知らず、あなたの先祖たちも知らなかったマナを食べさせられた。それは、人はパンだけで生きるのではない、人は主の口から出るすべてのもので生きる、ということを、あなたにわからせるためであった。
4 この四十年の間、あなたの着物はすり切れず、あなたの足は、はれなかった。
5 あなたは、人がその子を訓練するように、あなたの神、主があなたを訓練されることを、知らなければならない。

彼らは初めのうちこそ、長いこと苦しんでいた自分たちをエジプトから脱出させ、紅海の海を開いて渡らせるというようなすばらしい奇蹟によって救い出してくださった、その神様の恵みを感謝しておりました。

しかし、主の訓練によって荒野をさまよい、飢えさまよい、飢え渇きに苦しんだときに、彼らは神様の恵みを忘れ、こんなことならエジプトにいたほうがマシだったというように神様をうらみ、そしてまた契約を破って金の子牛を作って拝むという、神様がもっとも嫌われる偶像礼拝の罪を犯すなどの背信を重ね、モーセの度々の警告にも耳を傾けなかったのであります。

このため神様は彼らを怒られ、憤られ、その結果、エジプトを脱出してきた 20 歳以上の男子、この数が民数記において 60 万人に余る大変な数なのですけれども、その人たちはヨルダン川を渡る前に死んでしまいます。こうして主の厳しい訓練を受けながら、ようやくヨルダン川の岸辺に到着した残りのイスラエルの民に対して、モーセは冒頭のような訓戒を行なったのであります。

申命記 11:31-32
31 あなたがたは、ヨルダンを渡り、あなたがたの神、主があなたがたに与えようとしておられる地にはいって、それを所有しようとしている。あなたがたがそこを

所有し、そこに住みつくとき、
32 私がきょう、あなたがたの前に与えるすべてのおきてと定めを守り行なわなければならない。

申命記 12:8
8 あなたがたは、私たちがきょう、(・・・・きょう、というのは、この今の時点です。ヨルダン川を渡る時点です・・・・)ここでしているようにしてはならない。

それまで彼らは勝手な場所で礼拝していたようですが、そういうことをしてはならない。

申命記 12:8-12
8 ・・・・おのおのが自分の正しいと見ることを何でもしている。
9 あなたがたがまだ、あなたの神、主のあなたに与えようとしておられる相続の安住地に行っていないからである。
10 あなたがたは、ヨルダンを渡り、あなたがたの神、主があなたがたに受け継がせようとしておられる地に住み、主があなたがたの回りの敵をことごとく取り除いてあなたがたを休ませ、あなたがたが安らかに住むようになるなら、
11 あなたがたの神、主が、御名を住まわせるために選ぶ場所へ、私があなたがたに命じるすべての物を持って行かなければならない。あなたがたの全焼のいけにえとそのほかのいけにえ、十分の一と、あなたがたの奉納物、それにあなたがたが主に誓う最良の誓願のささげ物とである。
12 あなたがたは、息子、娘、男奴隷、女奴隷とともに、あなたがたの神、主の前で喜び楽しみなさい。

モーセはイスラエルの民が約束の地にはいるにあたって、改めてシナイ山で与えられた十戒による契約を守らなければならないというように、このように民に説き明かしをしなければなりませんでした。

それは今まさに、ヨルダン川を渡って、カナンにはいろうとする人々のほとんどが、主にそむきの罪を犯したために、先ほど申しました大変たくさんのイスラエルの民が、イスラエルの人たちが旅の途中で死ななければならなかったのです。

今、モーセがヨルダン川を目の前にしてイスラエルの民にメッセージを与えたわけですけれど、そういう、与えた相手の者たちは、イスラエル人は第一世の子どもたちなのです。二世なのです。第二世代の者たちに対してモーセは訓戒をこのように与えたのです。

ですから、この若い世代の人たちはエジプト脱出の経験も知らない。そしてまた、シナイ山での十戒を与えられた、その経験も知らない人たちであります。ですから神様はイスラエルの民がカナンの地に安住するために必要な心構えを、ここで改めてモーセを通して啓示されたのであります。

しかし主は大変、厳しいお方であります。モーセ自身はカナンの地にはいることを主が許されなかったのです。ピスガの峰の頂からはるかに、このカナンの地を望みながら死にました。なぜモーセはカナンの地にはいることができなかったのでありましょうか。それは、荒野で水が無くて、民からしつこくせがまれて、彼らが飢え渇きに苦しんで、そのことをあわれまれた神様がモーセに命じて、岩を杖で打って水を出させた、そのときに、彼は岩を二度打ってしまったのです。一度で良かったのです。このとき神様はモーセに次のように仰せになりました。

民数記 20:12
12 主はモーセとアロンに言われた。「あなたがたはわたしを信ぜず、わたしをイスラエルの人々の前に聖なる者としなかった。それゆえ、あなたがたは、この集会を、わたしが彼らに与えた地に導き入れることはできない。」

モーセが、今、申しましたように、岩を一度でなくて二度打った。二度も打ったということは、ご自分を信頼しないからだというのがその理由でありました。そして、主はモーセに代わって、モーセの後継者として若いヨシュアを選ばれました。こうしてヨシュアはイスラエルの民を率いてヨルダン川を渡り、約束の安住地カナンにはいったのであります。ヨシュア記の 21 章の 43 節から 45 節になります。

ヨシュア記 21:43-45
43 こうして主は、イスラエルの先祖たちに与えると誓った地をすべて、イスラエルに与えられたので、彼らはそれを占領して、そこに住んだ。
44 主は、彼らの先祖たちに誓ったように、周囲の者から守って、彼らに安住を許された。すべての敵の中で、ひとりも彼らの前に立ちはだかる者はいなかった。主はすべての敵を彼らの手に渡された。
45 主がイスラエルの家に約束されたすべての良いことは、一つもたがわず、みな実現した。

とあるとおりであります。しかし、先ほども申しましたように、旅の途中で主のおきてにそむいた多くのイスラエルの人々は、約束の地にはいることができませんでした。これはイスラエルの民だけに言えることではありません。

ガラテヤ人への手紙 3:29
29 もしあなたがたがキリストのものであれば、それによってアブラハムの子孫であり、約束による相続人なのです。

とありますように、イエス様を救い主として信じる信仰によってアブラハムの子孫とされた私たち信者にも当てはまることであります。イスラエル人だけではなく、私たちイエス様を信じた者にも当てはまる。私たちもイエス様を信じる信仰によってアブラハムの子孫とされているからであります。ヘブル人への手紙に次のように記されてあります。

ヘブル人への手紙 3:16
16 聞いていながら、(・・・・これは何を？主の御声です。主の御声を聞いていながら ・・・・)御怒りを引き起こしたのはだれでしたか。モーセに率いられてエジプトを出た人々の全部ではありませんか。
17 神は四十年の間だれを怒っておられたのですか。

罪を犯した人々、しかばねを荒野にさらした、あの人たちをではありませんか。
18 また、わたしの安息にはいらせないと神が誓われたのは、ほかでもない、従おうとしなかった人たちのことではありませんか。
19 それゆえ、彼らが安息にはいれなかったのは、不信仰のためであったことがわかります。

ヘブル人への手紙４章の６節以降をお読みします。

ヘブル人への手紙 4:6-8
6 こういうわけで、その安息にはいる人々がまだ残っており、前に福音を説き聞かされた人々は、不従順のゆえにはいれなかったのですから、
7 神は再びある日を「きょう。」と定めて、長い年月の後に、前に言われたと同じように、ダビデを通して、「きょう、もし御声を聞くならば、あなたがたの心をかたくなにしてはならない。」と語られたのです。
8 もしヨシュアが彼らに（・・・・イスラエルの民に・・・・）安息を与えたのであったら、神はそのあとで別の日のことを話されることはなかったでしょう。
9 したがって、安息日の休みは、神の民のためにまだ残っているのです。

ヘブル人への手紙 4:11
11 ですから、私たちは、この安息にはいるよう力を尽くして努め、あの不従順の例にならって落後する者が、ひとりもいないようにしようではありませんか。

ヨシュアはイスラエルの民を率いて約束の地にはいりました。しかしそれは地上における安息地であります。神様から与えられる霊的な、天的な安息地、安住地ではありませんでした。では、天的な安住地とはいったいどこでありましょうか。言うまでもなくそれは、主なる神様と御子イエス様が住まわれる天の御国であります。そこがどんなにすばらしいところかを幻によって啓示されたヨハネが証ししておりますので、ヨハネの黙示録からその一部をお読みしたいと思います。

ヨハネの黙示録 22:1
1 御使いはまた、私に水晶のように光るいのちの水の川を見せた。それは神と小羊（・・・・すなわちイエス様・・・・）との御座から出て、
2 都の大通りの中央を流れていた。川の両岸には、いのちの木があって、十二種の実がなり、毎月、実ができた。また、その木の葉は諸国の民をいやした。
3 もはや、のろわれるものは何もない。神と小羊との御座が都の中にあって、そのしもべたちは神に仕え、
4 神の御顔を仰ぎ見る。また、彼らの額には神の名がついている。
5 もはや夜がない。神である主が彼らを照らされるので、彼らにはともしびの光も太陽の光もいらない。彼らは永遠に王である。

アブラハムも故郷を出て約束の相続地に移り住みました。けれども彼は、そこでは旅人のように天幕生活をして暮らしたとあります。まことの安住の地は地上にあるのではなくて、天の都こそが安住の地であるということを彼は知っていたからであります。

ヘブル人への手紙 11:8-9
8 信仰によって、アブラハムは、相続財産として受け取るべき地に出て行けとの召しを受けたとき、これに従い、どこに行くのかを知らないで、出て行きました。
9 信仰によって、彼（・・・・アブラハム・・・・）は約束された地に他国人のようにして住み、同じ約束をともに相続するイサクやヤコブとともに天幕生活をしました。
10 彼は、堅い基礎の上に建てられた都（・・・・すなわち、天の都のエルサレム・・・・）を待ち望んでいたからです。その都を設計し建設されたのは神です。

私たち信者もアブラハムのように、イエス様によって与えられる天における霊的なまことの安息地を待ち望み、自分の思いを第一にして、主をないがしろにしたために絶ち滅ぼされ、安息の地にはいれなかったイスラエルの民のように、主に対して不従順にならぬように、日々心がけなければなりません。信者であっても、それが形だけの信仰にとどまっていることにも気が付かないで、相変わらず自分の思いを第一として生活していても、それを何ら良心の痛みとも苦痛とも感じない。そのような名ばかりの信者は約束の安住地、すなわち、天の御国にはいれないということをイエス様は例えをもって警告をしてくださっております。

ルカの福音書 13:25-28
25 家の主人が、立ち上がって、戸をしめてしまってからでは、外に立って、『ご主人さま。あけてください。』と言って、戸をいくらたたいても、もう主人は、『あなたがたがどこの者か、私は知らない。』と答えるでしょう。
26 すると、あなたがたは、こう言い始めるでしょう。『私たちは、ごいっしょに、食べたり飲んだりいたしましたし、私たちの大通りで教えていただきました。』
27 だが、主人はこう言うでしょう。『私はあなたがたがどこの者だか知りません。不正を行なう者たち。みな出て行きなさい。』
28 神の国にアブラハムやイサクやヤコブや、すべての預言者たちがはいっているのに、あなたがたは外に投げ出されることになったとき、そこで泣き叫んだり、歯ぎしりしたりするのです。

こうイエス様は警告をしておられます。またパウロはコリントの教会の信者に対して、荒野で滅ぼされたイスラエルの民のようにならないようにと、次のように諭しております。

コリント人への手紙第一、10:1
1 兄弟たち。私はあなたがたにぜひ次のことを知ってもらいたいのです。私たちの先祖はみな、雲の下におり、（・・・・雲の下にいたということは、雲が彼らを導いたということですが、・・・・）みな海を通って（・・・・この海はもちろん紅海です。葦の海。紅海を渡って・・・・）行きました。
2 そしてみな、雲と海とで、モーセにつくバプテスマを受け、
3 みな同じ御霊の食べ物（・・・・これはマナのことです。・・・・）を食べ、

4 みな同じ御霊の飲み物を飲みました。というのは、彼らについて来た御霊の岩から飲んだからです。その岩とはキリストです。
5 にもかかわらず、彼らの大部分は神のみこころにかなわず、荒野で滅ぼされました。
6 これらのことが起こったのは、私たちへの戒めのためです。それは、彼らがむさぼったように(・・・・むさぼったというのは、彼らが荒野でマナよりもエジプトの食べ物を食べたいと言ったことです・・・・)私たちが悪をむさぼることのないためです。

コリント人への手紙第一、10:10
10 また、彼らの中のある人たちがつぶやいたのにならって(・・・・何をつぶやいたか。主に対して不平不満を言ったのです。つぶやいたのにならって・・・・)つぶやいてはいけません。彼らは滅ぼす者に滅ぼされました。

滅ぼす者というのは言うまでもなく主なる神様であります。

コリント人への手紙第一、10:11
11 これらのことが彼らに起こったのは、戒めのためであり、それが書かれたのは、世の終わりに臨んでいる私たちへの教訓とするためです。

終わりの日が間近い今の時に、私たちはこのイスラエルの民のようにならないために、十字架による、尊い十字架による贖いの恵みに、ただ甘えることなく、安住の地、相続の安住地である天の御国にはいれるように、今しばらくの残されたこの地上の日々を心から主を恐れ、主を愛し、主の選びにいれていただいたことを心から感謝しながら、主のみこころを第一として歩むことができますように、御霊の導きを真剣に祈る必要があると思う次第であります。最後にもう一度、ヘブル人への手紙の 4 章 9 節、11 節をお読みして終わります。

ヘブル人への手紙 4:9、11
9 安息日の休みは、神の民のためにまだ残っているのです。

11 ですから、私たちは、この安息にはいるよう力を尽くして努め、あの不従順の例にならって落後する者が、ひとりもいないようにしようではありませんか。

どうもありがとうございました。

主を信じる者の証し

2007 年 7 月 21 日、御代田よろこびの集い
重田定義

> テモテへの手紙第 I、1 章 15 節-16 節
> 15「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた。」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。
> 16 しかし、そのような私があわれみを受けたのは、イエス・キリストが、今後彼を信じて永遠のいのちを得ようとしている人々の見本にしようと、まず私に対してこの上ない寛容を示してくださったからです。

今、兄弟に読んでいただきましたこの手紙。パウロの手紙です。愛する弟子のテモテに送った手紙ですけれども、このところから今日は主を信じる者、イエス様を信じる信者の証しということにつきましてご一緒に考えてみたいと思います。イエス様を信じる者、すなわち、キリスト者の証しというのはいったいどんなものでありましょうか。どのように証しをしたらいいのでありましょうか。

それはまだイエス様を知らない方に、イエス様とはどんな方か、どのような方か、どのように自分がイエス様の、主のあわれみを受けてイエス様を信じるようになったか、また信じてから自分はどのように変わったか、どのように生き方が変わったかというような、自分自身の体験を通してイエス様のすばらしさ、イエス様のご愛のすばらしさを証言することではないかと思います。それと同時に、この信者の証しというのは自分自身の証し、信仰告白であるとともに、イエス様の福音を今、兄弟が詳しく述べられたような、イエス様の福音を人に伝える上で大変に重要なものなのであります。

イエス様を信じて救われた私たちは、ただ自分が救われて喜ぶだけではなくて、ひとりひとりが、信者のひとりひとりがイエス様の救いの恵みをまだご存じない多くの方々に、自分を罪から救い出してくださったそのイエス様を紹介する役割を、主から与えられているのであります。しかしながら、そのことをまだはっきりと自覚しておられない方、あるいは証しをしなければと思っても、恐れて、たじろいでしまってそれができない方も、中にはおられるのではないかと思うのです。あるいは、証しというのは自分が立派な信仰を持っていることを、あるいは教会や社会のためにこんなに熱心に奉仕をしているというようなことを話すのが証しであるというように、誤解しておられる方も中にはおられるのではないかと思います。

こういうわけで、私たちキリスト者の証しとはいったいどういうようなものかということを改めて考えてみることは、信仰の歩みを進める上においても大切ではないかと思う次第であります。もちろん、キリスト者の証しには何も決まった形式があるわけではありません。しかしながら、今読んでいただいたテモテへの手紙第一の中にあるパウロのことばは、私たちキリスト者の証しに必要なことがすべて含まれているという点で、証しのひとつのお手本と言ってもいいのではないかと思います。ここでパウロは初めに、私は罪人のかしらです、と自分が主に対して大変な罪を犯したことを認めております。そしてそのような自分が救われたのは、ただ一方的な主のあわれみ以外にはないと言っております。

そして次に、そのようなあわれみを受けた理由について、主が自分をあわれみの見本、また慈しみの見本として神様の救いを求める人々にお示しになるためである。そしてそのために罪人のかしらのような罪深い自分が救いの対象に選ばれたのだというふうに言っております。本当にすばらしいパウロの証しではないかと思います。聖書で言う罪人とは、ご存知のように一言で申しますと、自分の考えをいつも中心に置いて生きている者、自分の考えを尺度としてすべてのことを判断している者であります。

パウロもかつてはそのような者でありました。彼は次のように告白しております。

> テモテへの手紙第一、1:13
> 13 私は以前は、神をけがす者、迫害する者、暴力をふるう者でした。それでも、信じていないとき(・・・・もちろん、これはイエス様を、主イエス様を信じていないとき・・・・)に知らないでしたことなので、あわれみを受けたのです。

このように言っております。パウロは熱心なユダヤ教の信者の一派であるところのパリサイ派に属しており、復活されたイエス様に出会うまではキリスト者をユダヤ教に敵対する者と考えて、彼らを迫害することこそ神様のみこころにかなう正しいことだと確信をしておりました。しかし、それが大変な間違いであり、自分が信じてきた神と自分が憎んだナザレのイエスとが実は同じ神であったということを、復活のイエス様に出会って霊の目が開かれたときに、初めてはっきりと知ったのであります。

パウロは先ほどのみことばの中で、自分は罪人のかしらであると言っておりますけれども、それはただ謙遜して言っているのではない。自分の考えが正しいと思い込んで、イエス様を信じる人々を神様の敵として、死に至らしめるほどに迫害してきたことが実はとんでもない恐ろしい間違いであり、神様に対して大変な罪を犯していたのだということを知ったから出たことばであります。ですから、自分は本当に罪人のかしらであるということを心から悔い改めを込めて言うことができたのであります。

そして彼は、自分は知らないでしたとはいえ、神様に対してこのような大きな罪を犯した者が、イエス様の十字架の贖いによってその罪が赦され救われたのは、まだ神様のご愛を知らずに滅びに至る道を歩んでいる多くのこの世の人々に対して、神様が自分をあわれみの見本、救いのサンプルとしてお示しになるためであったということを彼は知ったのであります。

> 箴言 14:12
> 12 人の目にはまっすぐに見える道がある。その道の終わりは死の道である。

というみことばがあります。私たちキリスト者も、かつては自分の考えに基づいて、自分勝手に滅びに至る道を突き進んでいたような罪深い者でありました。けれども、そのような私たちが救われたのは、パウロと同じように、主のあわれみの見本とされるためであることを私たちははっきり認識する必要があると思います。そして、そのよ

うな愚かな私たちが、イエス様の十字架の上で流された尊い血が自分の恐ろしい罪を贖うためであるということを知ったときに、私たちは主の大いなるあわれみと主のご愛を証しせざるを得ない思いになるのではないかと思います。

聖書の中には主のあわれみの見本がたくさん見られます。そのひとつの例をマルコの福音書の５章の１節から20節に記されております、汚れた霊につかれた人に見ることができます。これは有名な聖書の個所でありますけれども。全部お読みいたしませんけれども、ここには次のような内容が記されております。

汚れた霊につかれた男がおりました。彼は墓場に住みついていて、裸で、夜昼となく、墓場や山で叫び続け、石で自分のからだを傷つけておりました。彼はイエス様を遠くから見つけて、駆け寄って来てイエス様を拝しました。イエス様はこの男を見て、深くあわれまれて、男にとりついている悪霊に、「汚れた霊よ。この人から出て行け。」と言われました。悪霊どもは出て行って、豚に乗り移り、その豚の群れは崖を駆け降り、湖へなだれ落ちて、おぼれ死んでしまいました。

これを見て驚いた豚を飼っていた者たちが、町や村々でこの出来事を知らせましたので、多くの人々がやってまいりました。そして、悪霊につかれていた男が、裸であった男が着物を着て、正気に返って、イエス様の傍らに座っているのを見てびっくりしました。イエス様はこの男にこう言われました。「あなたの家、あなたの家族のところに帰り、主があなたに、どんなに大きなことをしてくださったか、どんなにあわれんでくださったかを、知らせなさい。」

そこで彼は立ち上がって、イエスに言われた通り、イエス様が自分にどんなに大きなことをしてくださったか、どんなに自分をあわれんでくださったかを、家族に、そして郷里の人々に言い広め始めました。これを聞いた人々はみな驚いた。というのがここに記されている記事であります。ここに出て来る汚れた霊につかれた人とは、実はイエス様に救われる以前の罪に汚れた私たちの姿そのものであり、また、まだ救われていないこの世の人のすべてを指し示しているのであります。

汚れた霊につかれた人は、何も特別に異常な人ではなく、サタンの支配下にあるこの世に生きて、サタンの思うがままに操られているこの世の人すべてを指していると理解しますと、ここに書かれていることは他人事ではなくなります。イエス様を知らないこの世の人々は、悪魔につかれたこの人のように、自分が何をしているのか、何のために生きているのか、その本当の意味でそのことが分からない人たちであります。もちろん、自分がサタンの支配下にあることなど分かるはずがありません。

ここに、墓場に住みついていると書かれておりますけれども、サタンに操られている人たちは、この世的にはどんなに立派な家に住んでいても、霊的には墓場に住んでいるようなものであります。また、自分のからだを傷つけていたとありますけれども、まことの神様を知らずにサタンに操られている人は、自分では気付いていませんけれども、自分で自分の霊を傷つけるようなことをしているのであります。神様からいのちの息として与えられた自分の霊を痛めつけて、主の前に自我むき出しで言いたい放題、やりたい放題に生きているのであります。これがサタンに支配されているこの世の人の姿なのであります。イエス様は、神様から離れてそのような姿で滅びに向かっているあわれな者に目を留めてくださり、心からあわれんでくださって、その人がイエス様に助けを呼び求めるときに、すぐさま御手を差し伸べて、サタンの束縛から解放してくださるのであります。

イエス様のあわれみによって悪霊から解放されたときに、この男はどうしたでしょうか。彼は着物を着て、正気に返ってすわったとあります。彼はそこで初めて、自分を悪霊から解放してくださったイエス様を正気に返った霊の目で見ることができ、イエス様の御前に静まることができたのであります。彼はこの方のあわれみによって目が開かれ、自分がサタンの束縛から、罪の束縛から救い出されたことを知り、改めて今まで自分が裸で、墓場に住み、自分のからだを痛めつけて、大声でわめきながら生きていたことが分かったのであります。そして、イエス様に言われた通り、イエス様が自分にどんなに大きなことをしてくださったか、どんなにあわれんでくださったかを、みなに言い広め始めたのであります。

これがイエス様に出会ったこの男の証しであります。そしてまた、これがイエス様に出会った信者の証しでもあります。生きる本当の意味も目的も分からずに、あわれな自分の姿も知らずに、悩み苦しみながら生きていた私たちが、主のあわれみによって霊の目を開かれ、主に出会ってどんなに自分が変えられたか、どんなに生きる本当の目的と希望が与えられて喜ぶようになったか、そのことをこの男のように正気に返って、愛する家族や親しい者に証ししないではおられない。これが私たち信者の証しではないでしょうか。

> ペテロの手紙第一、3:15
> 15 あなたがたのうちにある希望について説明を求める人には、だれにでもいつでも弁明できる用意をしていなさい。

とあります。ペテロは信者の証しについてこのように言っているわけです。ここに、『あなたがたのうちにある希望』とありますけれども、私たち信者にとっての希望というのはいったい何でありましょうか。それは私たちを滅びの罪から贖い出してくださっただけではなく、死に勝利するご自分の、ご自身の復活のいのち、永遠のいのちをも与えてくださり、天の御国にまで伴ってくださるイエス様ご自身、これが私たちの希望であります。ですから、私たちキリスト者は自分のうちに住んでくださる希望そのものであるイエス様について説明を求める人には、だれにでも、いつでも弁明する用意、すなわち、イエス様を証しすることができるように、用意をしていなさいとペテロは言っているのであります。

このように私たち信者は、人に「どうしてあなたはイエス・キリストを信じるようになったのか。」と聞かれたときには、いつでも、ご自分のいのちを捨ててまで罪から救い出してくださったイエス様を喜んで証しできるように、日ごろから心の備えをしておく必要があります。また、よくキリスト者は誤解を人から招くことなのですが、それはキリスト

者になれるような人は元々清廉な人、敬虔な人、人格者である、というようにみなされることがままあります。実際そうでないのでつまずきを与えてしまうわけですけれども。そういうようなことを考えている、そのような目で見ているこの世の人たちに対しては、「私を見てください。私は人格者どころか自分勝手で愚かな罪人にすぎませんでした。けれどもそのような私にイエス様はあわれみの目を留めてくださり、ただ一方的なイエス様のあわれみをいただいて、そしてイエス様の十字架の贖いの恵みによってこの恐ろしい罪から私たちは解放されました。このように、私はただ主のあわれみの見本にすぎません。」と証しすればよいのではないでしょうか。

パウロは次のようにも証しをしております。

> エペソ人への手紙 2:3
> 3 私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行ない、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを（・・・・神の御怒りを・・・・）受けるべき子らでした。
> 4 しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、
> 5 罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、――あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。――
> 6 キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました。
> 7 それは、あとに来る世々において、このすぐれて豊かな御恵みを、キリスト・イエスにおいて私たちに賜わる慈愛によって明らかにお示しになるためでした。

私たちキリスト者は、ひとり残らず一方的な主のあわれみとご愛を受けて救われた、かつての罪人にしかすぎない者であります。そしてイエス様はその私たちに望んでおられるのは、私たちを主のあわれみの見本としてお用いになって、すべての人を罪の暗やみの中からご自分の聖い光の中に救い出してくださるために、十字架の上で尊いいのちを捨ててくださった、その主の驚くべきご愛とあわれみの贖いのみわざを人々に伝えること。証しをすることなのであります。ところが悲しいことに、キリスト者の中には「証しができません。」と尻込みをする方も中にはおられます。特に自分の家族や親しい方々に、自分に近い者に対してその思いが強く表われるものであります。私もかつてはそういう者でありました。

その理由は、「人に何と思われるか恐い。」、あるいは、「はっきりと主を証ししたことによってそれまでの人間関係が損なわれてしまうのではないか。」というような、色々な思惑がそこにあります。けれどもそのような思いはすべて自我から来る、肉の、自分の肉の思いであります。このようなキリスト者にイエス様は次のように戒めておられます。

> ルカの福音書 12:8
> 8 あなたがたに言います。だれでも、わたしを人の前で認める者は、人の子（・・・・すなわちイエス様・・・・）もまた、その人を神の御使いたちの前で認めます。
> 9 しかし、わたしを人の前で知らないと言う者は、神の御使いたちの前で知らないと言われます。

確かに私たちは自分の力で証しをしようとすれば、恐れたり、たじろいだり、あるいは怯んだりする思いが強くなって、証しする気持ちを鈍らせてしまいます。しかし、イエス様の大いなるあわれみとご愛によって、しかもそのためにイエス様が十字架の上で尊い血を流し、自分の罪を、私の罪を身代わりに受けて死んで罪を救ってくださったことを、大きな喜びをもって心から確信すれば、私たち信じる者の中に住んでくださっている主の御霊が必ず私たちに証しをする力を与えてくださり、そしてまた私たちの心から恐れを取り去ってくださり、主はその証しを主のあわれみの見本として用いてくださり、ご栄光を現わしてくださるのであります。

イエス様を信じている私たちと、まだ信じておられない人とはどこが違うのでありましょうか。その違いは主のあわれみを先に受けたかどうかの違いにすぎないのであります。主のあわれみの順番が私たちのほうが少し先であったにすぎないのであります。世の終わりが迫っているこの今の時代にあって、恵みを受けた私たちが先に主にあわれまれた。その私たちに対する主の使命、主に対する使命というのは、主が次にあわれんで救おうとしておられる方に対していつでも自分自身を神様のあわれみの見本として示すことであります。最後に、主のあわれみに満ちたみことばを一つお読みして終わりたいと思います。

> 詩篇 103:8-13
> 8 主は、あわれみ深く、情け深い。怒るのにおそく、恵み豊かである。
> 9 主は、絶えず争ってはおられない。いつまでも、怒ってはおられない。
> 10 私たちの罪にしたがって私たちを扱うことをせず、私たちの咎にしたがって私たちに報いることもない。
> 11 天が地上はるかに高いように、御恵みは、主を恐れる者の上に大きい。
> 12 東が西から遠く離れているように、私たちのそむきの罪を私たちから遠く離される。
> 13 父がその子をあわれむように、主は、ご自分を恐れる者をあわれまれる。

どうもありがとうございました。

わたしが与える水

2007 年 7 月 28 日、御代田よろこびの集い
重田定義

> ヨハネの福音書 4 章 14 節
> 14 しかし、わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渇くことがありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます。

今日は、今、兄弟に読んでいただきましたヨハネの福音書の 4 章の 14 節から「わたしが与える水」とイエス様が仰った、その水とは何か、どんな水かということにつきましてご一緒に考えたいと思います。人間の体重の 6 割以上は水で占められているということをみなさんご存知でありましょうか。私たち人間が生きるには、それほどたくさんの水が必要なのであります。このようにたくさんの水、大量の水はいったい私たちの体の中でどのように役に立っているのでありましょうか。少しそのことを初めに考えてみたいと思います。

水は私たちの体を形成しておりますおびただしい数の細胞の形と、そして働きを保つために必要、無くてはならないものであります。体の中の水と言いますと、私たちはすぐにそれは血液だろう、あるいはリンパ液だろうというふうに思いますけれども、これらの液体は体の全体の水の約 2 割にすぎないのであります。体の水の大部分は細胞の中にあります。細胞のいのちを維持するのに水は無くてはならないものなのであります。

血液や体液に含まれる水というのは、どんな役割をしているかと言いますと、この細胞、あるいは組織、あるいは臓器に私たちが生きるのに必要な物質を溶かして運び込んだり、あるいはまたそこから要らなくなった分解産物を運び出すという大切な働きをしております。また私たちが健康で生きるためには、暑いときも、あるいは寒いときも、私たちの体温を一定に保たなければなりません。そのために体内に存在する大量の水は私たちの体温の上昇を、あるいは下降を防ぐ大切な体温調節の役割を果たしているのであります。このように私たちの生命のためにたいへん大切な水でありますから、もし体に水が不足しますと、当然色々な反応や障害が起こってまいります。私たちが喉の渇きを覚えます。これは脱水症状が起きないようにという警告なのです。

1%体の水分が不足しますと、私たちは喉の渇きを覚えます。さらに進んで 2%足りなくなりますと、もう血液の濃縮が始まります。ご存知のように血液が濃くなりますと、脳血栓とか心筋梗塞とか、そういうたいへん恐ろしい命に危険な病気が起こりますが、その引き金となるのは血液の濃縮であります。さらに水分が足りなくなってくると、例えば 8%も不足してきますと、脳に障害が怒ります。幻覚症状が起こってまいります。12%不足しますと、腎機能が停止します。これは死です。

私たちは食べ物を取らなくても一週間、二週間は生きていられます。ところがもし水を全然、取らなければ、だいたいの人は数日で死んでしまいます。先ごろ地震がありまして、震源地に近い町周辺、ガスが止まり、電気が止まり、水道も止まりました。いずれも私たちの生活にぜひとも無くてはならないライフラインなのですけれども。電気やガスが一週間、無くても何とか人間は生きられますけれども、水が――、今、申しましたように――一週間私たちが摂取できないとすれば、たいへんなことになるのです。被災者の方々が異口同音に仰っているのが、水が出なくなってたいへん困ったわけですけれども、やっと水道が直って蛇口から水が出るようになった。その水を飲んで、これほど水が大切なものだとは思わなかったと仰っています。

それほど私たちにとって水というのは大切なものであります。けれども私たちは気付かないでおりますけれども、実は私たち人間が生きる上でもっともっと大切な水があります。これまで考えてまいりました水というのは、私たちの肉体の命が生きるために必要な物質です。H2O という物質としての水でありました。けれども、もっと大切な水とは物質ではなくて、霊的な水なのであります。神様は私たち人間をお造りになったときに、創世記の 2 章の 7 節にありますように、

> 創世記 2:7
> 7 神である主は、土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで、人は、生きものとなった。

このように記されております通りに、神様は人間のからだを土地のちり、これは言い換えますと、物質です、有機物、無機物からなる物質でお造りになった。そのあとでそのからだの中に神様の息であるところの霊を吹き入れてくださったのであります。人間以外の動物はこの霊を持っておりませんから、本能的に生きております。生きるしかありません。人間だけに神様は霊を入れてくださったのであります。何のために人間だけに神様は霊を入れてくださったのでありましょうか。それは私たち人間が神様に造られた者として正しく生きるためにもっとも神様に近い者として私たち人間を神様は子どものように愛してくださる。その神様のみこころに正しく応答して生きるためでありました。これが実は神様のみこころにかなう人間本来の生き方なのであります。

しかしながらこのようにして神様がお造りになった最初の人間であるところのアダムはご存知のようにサタンのいざないに乗って、自分の欲に目がくらみ、神様のみこころに背くという罪を犯してしまいました。その結果、アダムはエデンの園から追われ、また罪の結果として、死ななければならなくなったのであります。そして私たち人間もみなアダムの子孫である以上、生まれながらにしてアダムの罪の性質を受け継いで、神様から離れて、自分の肉の思いにしたがって生きるようになってしまったのであります。神様を知ろうともせず、自分の思いで、自分の力に頼って生きる人間には、神様の祝福はありません。

> ローマ人への手紙 5:12
> 12 そういうわけで、ちょうどひとりの人（・・・・すなわちアダム・・・・）によって罪が世界にはいり、罪によって死がはいり、こうして死が全人類に広がった

とありますけれども、このようにアダムの子孫である人間に死があり、また人生にさまざまな苦しみ、悩み、悲しみ

があるのは、元を正せば、罪のために神様から与えていただいた霊が衰えて死んだようになった結果であります。そのような、衰えて死んだようになった霊を生き返らせて再び神様のみこころに従って正しく生きるためには、この霊の水というのがぜひとも必要になってまいります。では、霊に必要な霊の水とはいったい何でありましょうか。イエス様はサマリヤの女との対話の中で次のようにこの水について仰っております。

ヨハネの福音書 4:7-11
7 ひとりのサマリヤの女が水をくみに来た。イエスは「わたしに水を飲ませてください。」と言われた。
8 弟子たちは食物を買いに、町へ出かけていた。
9 そこで、そのサマリヤの女は言った。「あなたはユダヤ人なのに、どうしてサマリヤの女の私に、飲み水をお求めになるのですか。」――ユダヤ人はサマリヤ人とつきあいをしなかったからである。――
10 イエスは答えて言われた。「もしあなたが神の賜物を知り、また、あなたに水を飲ませてくれと言う者がだれであるかを知っていたなら、あなたのほうでその人に求めたことでしょう。そしてその人はあなたに生ける水を与えたことでしょう。」
11 彼女は言った。「先生。あなたはくむ物を持っておいでにならず、この井戸は深いのです。その生ける水をどこから手にお入れになるのですか。

イエス様がこのサマリヤの女にお求めになったのは、ここにありますように、からだの渇きを潤す飲み水でありました。しかしサマリヤの女とのやり取りが進むうちに、話題はからだの渇きを潤す水から生ける水にと変わりました。けれどもサマリヤの女は生ける水がどんなものか分かりません。ですからイエス様に今、頓珍漢な質問をしたのであります。イエス様はこの女の見当外れの問いにも優しくお答えになり、生ける水について、いちばん先に読んでいただきましたみことばのように説明をなさいました。もう一度その個所をお読みいたします。

ヨハネの福音書 4:13-14
13 イエスは答えて言われた。「この水を飲む者はだれでも、また渇きます。
14 しかし、わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渇くことがありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます。」

サマリヤの女は、イエス様の仰る意味がまだよく分からなかったのですけれども、生ける水という水は、彼女がいつも苦労して井戸から汲み上げなければならない水、飲んでもまた喉が渇いてしまう水とはどうやら違う水らしいということは見当がつきました。そこで彼女はイエス様に素直にお願いしております。

ヨハネの福音書 4:15
15 女はイエスに言った。「先生。私が渇くことがなく、もうここまでくみに来なくてもよいように、その水を私に下さい。」

このエピソードでイエス様は、生ける水がどんな水か、またその水をどうしたら手に入れられるかということを私たちに示唆をしておられるのであります。サマリヤの女と同じように私たちも、生ける水が私たちが毎日、飲んでいる体の渇きをいやす水ではないということがすぐに分かります。では、この霊の水にはどんな効用があるのでありましょうか。この水には私たちの霊の渇きをいやして、衰え死んだようになった霊が生き返って神様と応答して生き生きと働くことができるようにする効果があるのであります。

生ける水。そのようにイエス様が仰った。

ヨハネの福音書 4:14
14 わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渇くことがありません。

その渇きというのは、体の渇きを指しておられるのではなくて、霊の渇きを指しておられるのであります。では、霊の渇きとはいったい何でありましょうか。私たちの体は、先ほども申しましたように、水が不足しますと渇きを覚えます。しかし霊も渇きを覚えるのであります。いったい霊の渇きはどんなときに起こるのでありましょうか。例えば、私たちの心に何かぽっかり穴が開いたような、むなしい感じがするとき。あるいは、この世のものでは何をもってしても心が満たされないという思いになったとき。あるいは、この世のものには何も頼れないということを知って、絶望したときなどなどに霊の渇きは起こります。

世界一の知恵者と言われたソロモン王は次のように言いました。

伝道者の書 2:20-23
20 私は日の下で骨折ったいっさいの労苦を思い返して絶望した。
21 どんなに人が知恵と知識と才能をもって労苦しても、何の労苦もしなかった者に、自分の分け前を譲らなければならない。これもまた、むなしく、非常に悪いことだ。
22 実に、日の下で骨折ったいっさいの労苦と思い煩いは、人に何になろう。
23 その一生は悲しみであり、その仕事には悩みがあり、その心は夜も休まらない。これもまた、むなしい。

富にも権力にも才能にもこの上なく恵まれたソロモン王ですら、それらのものによっては彼の霊は満たされることがありませんでした。彼の霊はこのように渇いていたのであります。しかしながらソロモンだけではありません。人間は真剣に人生を考えるとき、あるいは人生の中で大きな嵐や、つらい悲しい出来事に出会ったときなどに、深刻な霊的な渇きを覚えることが多いのであります。そしてその渇いた霊を潤し、満たすことができるのは生ける水、永遠のいのちへの水しかありません。

では生ける水、永遠のいのちへの水とはいったい何でありましょうか。それは神様からこの世に遣わされた神の御子イエス・キリストご自身であり、そしてまた、そのイエス様が復活されて天に戻られてからあとは、見えないイエス様として信じる者の中に宿られるイエス様の霊であるところの御霊であります。神の御子イエス様が人としてこの世においでになった目的を聖書は次のように言って

おります。有名なヨハネの福音書３章 16 節、

ヨハネの福音書 3:16
16 神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

そしてまたイエス様は、ご自分が天に戻られてからあとは、代わりにご自分の御霊が信じる者のうちに住んで助けてくださると次のように約束なさっておられます。これも有名な個所です。

ヨハネの福音書 14:16-17
16 わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。
17 その方は、真理の御霊です。世はその方を受け入れることができません。世はその方を見もせず、知りもしないからです。しかし、あなたがた（・・・・信じる者・・・・）はその方を知っています。・・・・

わたしを信じる者はその方を知っています。

ヨハネの福音書 14:17
17 ・・・・その方はあなたがたとともに住み、あなたがたのうちにおられるからです。

御霊が私たち信じる者のうちに住んで、私たちを助けてくださるということをイエス様はこのように約束してくださいました。イエス様の説明を聞いた、そのサマリヤの女はすばらしい生ける水をぜひ欲しいと願いました。そしてまた、このような水ならばサマリヤの女でなくてもだれでも欲しいのではないでしょうか。けれどもいったいどうしたらこの水を手に入れることができるのでありましょうか。

私たちが安全な美味しい飲み水を手に入れるためには、お金が必要であります。水道の水にも私たちは料金を払っております。しかし生ける水は神様からいただくほかありません。ではそのために私たちは神様に何をしたらよいのでありましょうか。神様にたくさん料金をお払いすれば、その水を手に入れることができるのでありましょうか。あるいは、良き行ないをしたり、修行をしたり、立派な教養や学問を身につけたりして、神様から生ける水を与える資格があると認めていただけるように努力をすることが必要なのでありましょうか。

その答えは、イエス様が先ほどのサマリヤの女に言われたみことばにあります。

ヨハネの福音書 4:10
10「もしあなたが神の賜物を知り、また、あなたに水を飲ませてくれと言う者が（・・・・すなわちイエス様ご自身が・・・・）だれであるかを知っていたなら、あなたのほうでその人に求めたことでしょう。そしてその人はあなたに生ける水を与えたことでしょう。」

というみことばであります。イエス様は生ける水を手に入れるには善行でも献金でも努力でもなく、まず生ける水が神様の賜物であることを知ること。また、ご自分がだれかを知ることが必要であるとここで仰っております。神様の賜物とは神様の賜物を知ることというのはどういうことでしょうか。

イエス様がどのような方であるかを知ることとはどういうことでしょう。これは両方とも裏腹の関係であると言ってもいいと思います。すなわち、イエス様がどんな方であるかを知れば、イエス様とイエス様の御霊が私たちへの神様からの賜物であるということが分かるからであります。では、イエス様とはどんな方でありましょうか。イエス様は弟子たちに次のように仰っております。

ヨハネの福音書 6:32-35
32「まことに、まことに、あなたがたに告げます。モーセはあなたがたに天からのパンを与えたのではありません。しかし、わたしの父は、あなたがたに天からまことのパンをお与えになります。
33 というのは、神のパンは、天から下って来て、世にいのちを与えるものだからです。」
34 そこで彼らはイエスに言った。「主よ。いつもそのパンを私たちにお与えください。」
35 イエスは言われた。「わたしがいのちのパンです。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渇くことがありません。

ここでイエス様は天から下って来られたご自分こそが、神様が私たちにお与えになるいのちのパンであると仰っておりますけれども、その通り、イエス様こそがいのちのパンであり、またいのちの水なのであります。さらにイエス様がいのちのパン、いのちの水として天から下って来られた目的について、少しあとの６章 51 節で、

ヨハネの福音書 6:51
51 わたしは、天から下って来た生けるパンです。だれでもこのパンを食べるなら、永遠に生きます。

と仰いました。すなわちイエス様は私たちが生けるパンを食べて、イエス様を心から信じて、永遠に生きるために、天の御国から下って来たと仰っているのであります。しかしイエス様はどのようにしてご自身をパンとして、水として私たちにお与えになるのでありましょうか。言うまでもなくそれは、十字架にはりつけにされたご自身のいのちを私たちにお与えくださることによってであります。そして、イエス様という生けるパンを食べること、イエス様という生ける水を飲むこととは、十字架の上で自分の罪を贖ってくださるために死んでくださった、そのイエス様を救い主として信じ、受け入れることなのであります。

そして私たちが、自分が神様に背いて自分中心に生きていたことを心から悔い改め、イエス様を救い主として心から信じ、受け入れたときに、私たちの悲しみは喜びに、絶望は希望に変わるという奇蹟が起こります。それは衰えて死にそうになっていた私たちの霊がイエス様の御霊であるところの生けるいのちの水を飲んで生き返った証拠なのであります。さらにイエス様はご自分を信じた者には生けるいのちの水である御霊を与え続けて、夜も昼も

絶えず守ってくださいます。主はご自分を信じた者をぶどう畑に例えて、次のように約束してくださっておられるからであります。

イザヤ書 27:2-3
2 その日、麗しいぶどう畑、これについて歌え。
3 わたし、主は、それを見守る者。絶えずこれに水を注ぎ、(・・・・これはいのちの水です。・・・・)だれも、それをそこなわないように、夜も昼もこれを見守っている。

霊の水、いのちの水を信じる者に絶えず注ぎ続けてくださって、守ってくださっているということであります。神の御子イエス様は、ご自分を信じる者がこれからのちも、人生の嵐にあっても倒れることのないように、試練や患難の中にあってもくじけずに希望を持って生きるようにと、昼も夜も絶えず生ける水、いのちの水である御霊を注いで、守ってくださっていると約束してくださっておられます。ですからその水を与えられた者は、渇くことがありません。そのように守られている私たち信者は何という幸せ者でありましょうか。

先ほど、私たちの体重の 6 割以上は水だと申しましたけれども、そうなるとまさに私たちの体は水を運ぶ器のようなものであります。しかしその水は自分の体が生きるために、働くために使われるにすぎません。けれども、イエス様が与えてくださる生ける水、いのちの水である御霊は、それとは違います。

イエス様を救い主と心から信じた者にイエス様は約束どおり、生ける水、いのちの水である御霊によってその人の霊の渇きをいやして、平安と希望と喜びを与えてくださるばかりではない。その御霊を絶えず注ぎ続けて泉のように、その人の心の中から外にわき出るようにしてくださるのであります。いちばん最初に読んでいただいたみことばの中に、イエス様が、わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渇くことがなく、わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ますと仰った意味は、このことであります。

このわき出る水、あふれ出る生ける水、永遠のいのちへの水であり、御霊をいったい私たちはどうしたらいいのでありましょうか。自分だけがその生ける水をいただいて、あとは、あふれた水はあふれるままに放っておいてよいのでありましょうか。そんなもったいないことはできない。イエス様は次のようにも仰っています。

ヨハネの福音書 7:37-39
37 さて、祭りの終わりの大いなる日に、イエスは立って、大声で言われた。「だれでも渇いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。
38 わたしを信じる者は、聖書が言っているとおりに、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。」
39 これは、イエスを信じる者が後になってから受ける御霊のことを言われたのである。

信じる者の中に御霊として住んでくださっておられるイエス様は、信じた者を御霊を運ぶ器とされるのであります。

そして、あのサマリヤの女のように渇くことのない水を求める、この世の多くの人々、不安や悲しみや絶望に打ちひしがれている人々に私たち信じる者を通して、こんこんとわき出る生けるいのちの水であるご自身の御霊をお与えになろうと思っておられるのであります。ですから、先にイエス様を信じて霊の渇きをいやされた私たちは、自分だけが悲しみや絶望や不安や恐れから解放されて喜ぶのではなく、イエス様が自分を生ける永遠のいのちの水である御霊を霊が飢え乾いている人々に運ぶ器として用いようと思っておられる。そのことをしっかり覚える必要があります。

復活して天に戻られたイエス様は、罪に汚れた今のこの古い天地を滅ぼされて、新しい天地をお造りになるという、壮大な救いのご計画の最終段階が記されているヨハネの黙示録の中で、次のように仰っております。

ヨハネの黙示録 22:7
7「見よ。わたしはすぐに来る。

ヨハネの黙示録 22:17
17 渇く者は来なさい。いのちの水がほしい者は、それをただで受けなさい。

イエス様はこのお約束どおり、まもなく再びおいでになります。最初にイエス様が地上に来てくださったのは、約 2,000 年前でしたけれども、それは滅びに至る罪の中から私たちを救い出し、永遠のいのちを与えてくださるためでした。そしてまもなく、再びイエス様がおいでになるのは、やがて起こると主が約束しておられる人類が今まで経験したことのないような恐ろしい患難が来る前に信じた者を天の御国に引き上げてくださるためであり、そしてまた、さばき主として神様に逆らい続けた者をさばかれるためであります。

その日がいつかは神様だけがご存知ですけれども、昨今の世の中の状況を見ると、その日が間近に迫っていることをさまざまな兆候から私たちも知ることができます。そしてそのときが来てからは、いくら生ける永遠のいのちの水がほしいと望んでも、もう手遅れなのであります。ですから霊の渇きを覚えながら、まだ生ける水、永遠のいのちへの水をご存じなくて、悲しみ、悩み、苦しんでおられる方はどうかイエス様が価なしにいのちの水を飲ませようと手を差し伸べておられる今の間に、あのサマリヤの女のように素直にイエス様のもとにおいでになって、イエス様を救い主と信じ、お受け入れになって、渇くことのない永遠のいのちへの水をイエス様ご自身から直接お受け取りくださるように、心からお祈りいたします。

ありがとうございました。

残された命の日数を正しく数える

2007 年 8 月 25 日、御代田よろこびの集い
重田定義

> 詩篇 90 篇 12 節
> 12 それゆえ、私たちに自分の日を正しく数えることを教えてください。そうして私たちに知恵の心を得させてください。

司会の兄弟に読んでいただきました聖書の個所から今日は、自分の日を正しく数えるということにつきまして、ごいっしょに考えていきたいと思います。

自分の日とは自分の人生に残された時間、言い換えますと、この世に残されている自分の命のことであります。では、自分の人生に残された時間を正しく数えるということは、一体どういうことなのでありましょうか。これに関してずっと前に読んだアメリカ医師会雑誌――これはたいへん権威のあるアメリカの医師会の会員すべてに毎月、送られる、これは全世界に送られておりますけれども、そういうジャーナルなのですけれども――そのある巻に次のようなエッセイが載っておりました。そのことをまずご紹介したいと思いますが、それは 74 歳の医者が書いたものであります。次のような内容であります。エッセイですから、たいへん砕いた調子で書いてありますが。

> 「私は 80 歳の友人 2 人と」、(‥‥これも医者の友人のようですが、‥‥)「レストランに行く途中で、車の中で話をしているうちに、どうしたら楽に死ねるかという話題になった。私は考えた。私はこの友人たちと違って酒も飲まないし、タバコも吸わない。血圧も正常だし、コレステロールの値も高くはない。だから心筋梗塞や脳梗塞で死ぬことはなさそうである。すると私の死ぬ病気は何か考えると、苦痛が長く続く癌しか考えられない。これは大変である。友人たちが羨ましい。」

この二人の友人は、どうもタバコも酒も飲んで、血圧も高いし、コレステロールも高い人らしいのですが、その彼らが羨ましい。

> 「そこで私は自分の運命にもっと積極的に介入する決心をした。どういう決心をしたか。レストランの席についてメニューに目を通し、ウェイターに一番厚いレアのローストビーフを注文し、山盛りのフレンチフライを添えてもらった。また、これまでブラックで飲んでいたコーヒーに砂糖と生クリームをたっぷり入れた。そしてウェイターに言った。『すまないがバターをたくさんこっちに回してくれないか。』」

こういう内容のエッセイなのです。この年老いた医者は半ばやけっぱちで、いっそ苦痛の長く続く癌になるくらいなら、ダイエットなんかもやめてしまって、コレステロールも血圧も高くして、苦しみの時間が短くて済む病気で死ぬ道を選ぼうと考えたのであります。彼はこれからも癌と死の恐怖におののきながら、いつまで生きていられるかと心配しながらこの世を生きていかなければならない、大変気の毒な医者であります。さて、この医者は自分に残された命の日数を正しく数えていると言えるでありましょうか。

いつ、どんな病気で死ぬかとビクビクしながら毎日生きているような人間が、どうして自分に残された命の日数を正しく数えていると言えましょう。しかしながら、自分に残された命の日数を正しく数えられなければ、だれでもこの医者に似た思いを持つのではないでしょうか。ではたして私たち人間は、自分に残されたこの世の命の日数がどれくらいかを自分で予知することがいったいできるでありましょうか。もうこれはみなさんご存知のように、それはできないのであります。

日本人の平均余命は大変長くなりまして、今、世界一であります。世界最長になりました。男性が 79 年、女性は 85 年を超えております。けれどもこれはあくまでも統計的な予測値でありまして、個々の人々に当てはめることはできません。医者なら、ある人の命があとどれくらいか調べることはできるのでしょうか。例えば、癌と診断された人が医者から「あなたの命はあと半年です。」と言い渡されましても、その通りにならなかった例がたくさんあるということを私たちは知っております。このように、ある人の命があとどれくらいかということは、人間だれにも予知はできないのであります。ただ神様だけがその人の命をお決めになることがおできになります。

詩篇の 90 篇 3 節に、次のように書かれております。

> 詩篇 90:3
> 3 あなたは(‥‥神様は‥‥)人をちりに帰らせて言われます。「人の子らよ、帰れ。」

神様が私たち人間に「人の子らよ、帰れ。」と仰ったその時が、私たちがこの世を去る時なのであります。ですから、もし私たちがもっとこの世に生きていたいといくら望んでも、あるいはそれと反対に、早くこの世を去りたいといくら願っても、神様の定められた時が来なければ、この世を去ることはできないのであります。世界一の知恵者と言われたソロモン王は聖書の中で次のように言っております。これもよく知られている個所であります。

> 伝道者の書 3:1-2
> 1 天の下では、何事にも定まった時期があり、すべての営みには時がある。
> 2 生まれるのに時があり、死ぬのに時がある。

このようにソロモンは言っております。この時というのは、神様に定められた時という意味であります。すなわち、私たちのこの世の命は神様によって定められているのであって、人間が決めることではないのであります。医学の大きな目標は、人間の命をいかに長くするかということでありますけれども、そのために老化というものがどうして起こるかという研究が進んでおります。しかしながらそれらの研究から、今日多くの研究者は、老化は人間の力では制御できないというふうに考え始めております。

その根拠というのは、老化というのは遺伝子の中に時間のプログラム、分かりやすく申しますと、一種の時限装置が遺伝子の中に組み込まれておりますために起こってくる。そして、生まれたときからその時限装置が始動し始

める。ですからこれは人間の力ではそれを止めたり、あるいは元に戻すことはできないというのであります。聖書には、人間のこの世の命の上限がはっきりと記されております。120 年というふうにはっきりと記されております。

> 創世記 6:3
> 3 そこで、主は、(・・・・主なる神様は、・・・・)「わたしの霊は、永久には人のうちにとどまらないであろう。それは人が肉にすぎないからだ。それで人の齢は、百二十年にしよう。」と仰せられた。

こうして神様は、人間のこの世の命はどんなに長生きをしても 120 年までとされたのであります。ここに、人が肉にすぎない、と書かれておりますけれども、これは神様の仰せに背いた結果、神様からいただいた、人間だけにいただいたこの霊、いのちの息として、神のいのちの息として人間に吹き込まれたこの霊が、神様の仰せを背いたその罪によって死んだようになってしまった。これはアダムです。

しかしそれはアダムだけではなくて、その子孫であるすべての人間にこれが当てはまりますけれども。そのようにすべての人間が神様に背いたために、せっかく神様からいただいた霊が衰えて、正しく働かなくなってしまった。その結果、肉の思いだけで生きている。こういうすべての人間を指して、人は肉にすぎないとここにあるのです。肉にすぎない人間というのは、われわれすべての人間がそうですが、どんなに環境を良くしても、あるいは、どんなに食べ物、栄養を理想的なものにしても、今までの長い人間の歴史の中で罪を犯した結果、私たちの知る限り、この記録に残っている限り、120 年、生きた人はおりません。

この頃、いろいろ世界記録ということで何歳まで生きた人というのがよくテレビにも出ますけれども、120 歳以上の人はいないのです。これは老化という、先ほど申しました時限装置が神様によって設定されているためであります。ですから、そして神様はさらに細かく、細かくひとりひとりの命の時限装置をも設定されておられる。100 歳まで生きる人もあれば、生まれてすぐに死ぬ赤ちゃんもいます。神様がその人の命を決めておられる。ですから私たち人間は自分の力で生きていると思ったり、あるいは、その進歩した医学に頼って医者が、医学が命を延ばしてくれるというふうに思いがちですけれども、それはまったくの間違いであります。

実は神様によってひとりひとりが生かされているのであります。そして神様が定められた時が来なければ、だれも死ぬことはできないのであります。そのようにして神様によって造られ、神様によって生かされている私たちのこの世の命をいったいどのように使ったら、それが正しい、良い生き方になるのか。あるいは、どのように生きるのが正しくない生き方なのかということを知ることが、最初に読んでいただきましたみことばの自分の命の日数を正しく数えるということの意味であります。

自分に与えられた命なら、これは自分のものなのだから、自由に使っても良いではないか、というふうに考える方も多いと思います。しかし、神様によって生かされているこの世の命を、自分の楽しみを追い求めるために使うということが、あるいは自分の欲望を満たすために使うということがはたして自分の命を正しく数えることになるのかどうか、ここでもう一度よく考えてみる必要があるのではないでしょうか。前にもご紹介したソロモンはまた次のようにも言っております。

> 伝道者の書 11:8-9
> 8 人は長年生きて、ずっと楽しむがよい。だが、やみの日も数多くあることを忘れてはならない。すべて起こることはみな、むなしい。
> 9 若い男よ。若いうちに楽しめ。若い日にあなたの心を喜ばせよ。あなたの心のおもむくまま、あなたの目の望むままに歩め。しかし、(・・・・ここからが彼の言いたいところです。・・・・)これらすべての事において、あなたは神のさばきを受けることを知っておけ。

ここに私たちに与えられたこの世の命を自分のために、自分の目的のために使う者に対する神様の警告が示されております。では、自分に残された時間を正しく数えるという生き方というのは、いったいどんな生き方なのでありましょうか。そのことを考えるにはまず、人間が生きるということは何か。人間が生きるのと動物が生きるのとはどう違うかということを知っておく必要があります。その違いは聖書にはっきりと記されております。

聖書は、人間のいのちは、天地万物の創造主にして支配者であられる生けるまことの神様によって造られた、というふうに記しております。創世記 1 章 26 節。大変有名な個所であります。

> 創世記 1:26
> 26 そして神は、「われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう。

と仰せられたとあります。同じく創世記の少しあと、

> 創世記 2:7
> 7 その後、神である主は、土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで、人は、生きものとなった。

この二つのみことばから言えることは、第一に、神様は人間をわれわれという複数になっておりますが、複数形であるのは神様と御子イエス様を指しております。すなわち、神様と御子イエス様に似る者として私たち人間をお造りになったということがほかの動物とまったく違う点であります。第二に、ご自分との等しい交わりができるように、私たち人間だけにいのちの息、すなわち、霊を入れてくださったという点であります。これが今、申しましたように、ほかの動物とまったく違う点なのであります。これによっていかに神様が私たちを特別な被造物として愛しておられるかが分かるのであります。

このように、私たち人間を愛してくださる神様に、私たちが心から信頼して、おゆだねして従うときにこそ、神様に造られた、神様に似る者として造られた、神様のいのちの息を吹き入れてくださったその人間の本当の幸せがあるのでありまして、人間の生きる意味というのはここにあるのであります。神様が最初に造られた人間のアダム、

そしてその妻、エバも初めはエデンの園で神様に愛された幸せの日々を過ごしておりました。そしてそのときのアダムとエバのいのちには死は無かったのであります。

ところがそのアダムとエバが、「この木の実を食べれば神のように賢くなれる。」というサタンの誘惑にかかって、神のように賢くなりたいという欲望に負けてしまい、神様から「この木の実だけは食べてはならない。食べるとかならず死ぬ。」と言われた、その戒めを破るという大きな罪を犯してしまいました。神様はなぜ人間にこの木の実を食べることを禁じられたのでありましょうか。それは人間が神様のように賢くなれば、自分を神と錯覚しておごり高ぶり、創造主でありすべての主権者である神様を無視してわがまま勝手に生き、その結果、神様がお造りになった調和の取れた美しい世界を破壊して、ついには人間自身をも破滅するということを知っておられたからであります。

まさに現在の世界がその通りになっていることはご承知の通りだと思います。人間はただ神様のみもとで、神様の仰せに従ってさえいれば、神様は喜んで人間を守ってくださるのであり、それが人間にとって最も幸せなことなのであります。しかしアダムとエバは神様の仰せに背いてしまいました。これが原罪という罪であります。その結果、神様は彼らをエデンの園から追放され、約束どおり彼らのいのちに死が与えられたのであります。神様はご自分の戒めに背いたアダムに次のように仰せになりました。

> 創世記 3:17
> 17 「あなたが、妻の声（・・・・これはサタンのいざないに乗った妻エバの声・・・・）に聞き従い、食べてはならないとわたしが命じておいた木から食べたので、土地は、あなたのゆえにのろわれてしまった。あなたは、一生、苦しんで食を得なければならない。

> 創世記 3:19
> 19 あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついに、あなたは土に帰る。あなたはそこから取られたのだから。

これはしかしアダムとエバだけの問題ではありませんでした。パウロはローマ人への手紙において次のように言っております。

> ローマ人への手紙 5:12
> 12 そういうわけで、ちょうどひとりの人（・・・・すなわちアダム・・・・）によって罪が世界にはいり、罪によって死がはいり、こうして死が全人類に広がったのと同様に、――それというのも全人類が罪を犯したからです。

このようにアダムの罪の性質を受け継いだすべての人間は、生まれながらに神様を第一として生きるのではなくて、自分の欲するままに生きるという罪を犯すようになってしまいました。神様から離れた人間はその報いとして人生の間に生じる様々な労苦を味わわなければならず、また人間がもっとも恐れる死をも味わわなければならなくなったのであります。人間の不幸の源はこの生まれながらに神様に対する背きの罪、先ほど申しました原罪にあるのであります。

しかしながら、そのような私たち人間を神様はなおも愛し、あわれんでくださっている。私たちの力ではどうすることもできない、この神様に対する背きの罪をご自分のひとり子の神、御子に身代わりに負わせて十字架に架けられるために、人としてこの汚れた世にお遣わしになって、私たちの罪を救い出し、そしてさらにそのみわざを信じる者に永遠のいのちをもお与えになるために、この御子を死からよみがえらせてくださったのであります。その神の御子こそがイエス・キリストであります。

そして私たち人間が、御子イエス様の十字架による救いのみわざを、自分の罪のためであったと心から悔い改めて信じ、受け入れたときに、神様は私たちの罪をイエス様の十字架の上での贖いのみわざのゆえに完全に赦してくださるばかりか、さらにイエス様のよみがえりの永遠のいのちをも与えてくださるのであります。本当に何という神様の大きな愛とあわれみでありましょうか。これについて聖書ははっきりと次のように記しております。ヨハネの福音書 3 章 16 節。よく読まれる個所であります。

> ヨハネの福音書 3:16
> 16 神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。

世というのは、このやみの世に住んでいる人間ひとりひとりを愛された。

> ヨハネの福音書 3:16
> 16 それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

そのように記されておりますし、イエス様ご自身も次のように約束してくださっています。

> ヨハネの福音書 6:47
> 47 まことに、まことに、あなたがたに告げます。信じる者（・・・・これはわたしを、イエス様を信じる者・・・・）は永遠のいのちを持ちます。

イエス様ご自身の約束であります。

かつてイエス様に敵対して、イエス様を信じる者を迫害しておりましたパウロ。彼は復活されたイエス様に出会って、目が開かれ、自分の罪を示され、一転してイエス様に従う者に生まれ変わりました。そのパウロはイエス様を信じた者がどうして新しいいのちに生きるようになることができるか。その理由について次のようにローマ人への手紙で説き明かしをしております。

> ローマ人への手紙 6:4
> 4 私たちは、（・・・・私たちイエス様を信じる者は、・・・・）キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのち（・・・・これはイエス様、イエス・キリストのよみがえりのいのち・・・・）にあって新しい歩みをするためです。
> 5 もし私たちが、キリストにつぎ合わされて、キリスト

の死と同じようになっているのなら、必ずキリストの復活とも同じようになるからです。
6 私たちの古い人（・・・・すなわち、かつて罪に支配されていた自分・・・・）がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが滅びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。
7 死んでしまった者は、罪から解放されているのです。
8 もし私たちがキリストとともに死んだのであれば、キリストとともに生きることにもなる、と信じます。

このようにパウロは言っております。そして、この彼の言葉は次のようにパウロ自身の信仰の確信として証しをされております。ガラテヤ人への手紙の 2 章 20 節。これも大変よく引用される個所でありますが、パウロは、これは自分自身の信仰の確信なのです。

ガラテヤ人への手紙 2:20
20 私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。

このパウロのように、自分のために、私自身のために十字架の上で死んでくださったほどに私を愛してくださったそのイエス様のために、そのイエス様に喜んでいただくために、地上に残されたいのちを生きる。これこそが人間の正しい本当の生き方なのであります。そしてこのような知恵を与えられた人の人生は、本当の喜びにここで満たされるのであります。イエス様はこういうような本当の喜びに満ちた人生を送ることができるように、すべての人に「わたしに求めなさい。」と仰っておられるのです。

ヨハネの福音書 16:24
24 求めなさい。そうすれば受けるのです。それはあなたがたの喜びが満ち満ちたものとなるためです。

ここで最初のみことば、読んでいただきましたみことばの少し前にさかのぼったところからお読みしたいと思います。

詩篇 90:10-11
10 私たちの齢は七十年。健やかであっても八十年。しかも、その誇りとするところは労苦とわざわいです。それは早く過ぎ去り、私たちも飛び去るのです。
11 だれが御怒りの力を知っているでしょう。だれがあなた（・・・・あなたというのは言うまでもなく万物の創造者にして支配者であり、そして生きる唯一のまことの神様であるそのあなた・・・・）の激しい怒りを知っているでしょう。その恐れにふさわしく。
12 それゆえ、私たちに自分の日を正しく数えることを教えてください。そうして私たちに知恵の心を得させてください。

生まれながらの人間はどんなに知恵を絞って考えても、自分に残されたこの世の命の日数を正しく数えることも、そしてまた、まことの知恵の心を持つこともできません。もし私たちが神様によって生かされている、この自分のこの世の命を自分の肉の望むままに使い続けるならば、ここにありますように最後にはその人の上に神様の激しい怒りが、さばきがくだります。ですから、その日が来る前に一日でも早く神様の前に、御前にへりくだって、どうか自分に残された命の日数を正しく数えることを教えてください。

そして、「私に知恵の心を得させてください。」と心から祈り求める必要があります。神様は必ずその祈りに応えてくださり、御霊によって知恵を与えてくださり、御子イエス様を信じて、イエス様のものとされ、自分に関わるすべてのことをイエス様におゆだねして、イエス様とともに歩むことこそが自分に残された命の日数を正しく数えることであるということを私たちの霊に教えてくださいます。どうかひとりでも多くの方がイエス様を救い主と信じ受け入れられて、残されたご自分の命の日数を正しく数えながら人生を歩む幸せを、幸いを得られますようにと心からお祈りする次第であります。

どうもありがとうございました。

私はあなたとともにいる旅人です

2008 年 7 月 26 日、御代田喜びの集い
重田定義

> 詩篇 39 篇 12 節
> 12 私の祈りを聞いてください。主よ。私の叫びを耳に入れてください。私の涙に、黙っていないでください。私はあなたとともにいる旅人で、私のすべての先祖たちのように、寄留の者なのです。

今読んでいただきました 12 節の後半のほうですが、ここでダビデは「私はあなたと共にいる旅人。」と言っています。「あなた」とは、もちろん主なる神であります。このことについて私たちも、実はダビデと同じように主とともにいる旅人です。その問題について、みことばをひきながら、ご一緒に考えてみたいと思います。

旅人という言葉は、なつかしさを覚える言葉ですね。今はあまり使わなくなりましたが、良い言葉だなと思います。旅をする人。「旅」という言葉も、この頃余り使われなくなりました。代わって「旅行」とこの頃は言われます。しかしながら、旅と、旅行とは、こんなことはうるさいなと思いになるかもしれませんが、やはり違うのじゃないかなと思います。意味がちょっと違うのじゃないかと。ニュアンスと言いますか。

旅行、旅行と言いますと、修学旅行や、観光旅行や、あるいは温泉旅行。海外旅行。なにか楽しい感じを私たちは受けます。旅だって同じじゃないかとおっしゃるかもしれませんが、ある辞書をひきますとね、旅というのをこういう風に定義しているのです。旅、旅とは、住んでいる所から離れてよその土地へ行くこと。

そういうふうに書いてありました。ちょっと、私もこれを見まして、随分、旅行とは違うな。何か気楽な旅行とは違う少し厳しさを感じるのではないかと思うのです。昔の人は、今の私たちがしている旅行じゃなくて、旅をしていたのです。住んでいる所から離れてよその土地へ行くということになると、これは相当の覚悟がいるのじゃないかと思います。

昔はよく旅をする前に、水杯をかわして旅に出た。やくざ者みたいですけど、そういうふうな覚悟をして旅に出たのですね。結局、もしかしたら帰って来れないかもしれない。その可能性もあったのです。いろんな危険が旅の間あります。旅にでかける方も、見送る方も、それなりの覚悟があったのではないかと思います。

昔は、本当に歩いて、あるいはかごに乗って、馬に乗って旅をしました。いろいろな道があります。平坦な道ばかりではなくて、高い山もあれば険しい谷もありました。流れの急な川を渡ることもあるでしょう。たいへんな苦労があったと思います。途中で病気をしたりけがをしたり、あるいは強盗に遭うような危険もあったことでありましょう。

そういうふうな苦しい目に遭いながら、時には命の危険に遭いながらも、目的に向かってよその土地に向かって一歩一歩進んでいく。これが、旅であります。しかしながらそういうふうな旅を、私たちは今でもしているのです。

その旅というのは、人生の旅であります。

人生の旅というのはどこで始まるのか、どこで終わるのか。言うまでもなく、人生の旅の始まりは私たちがこの世に生まれた時であります。そして、人生の旅の終わりは私たちが死ぬときであります。しかしながら、私たちの人生にはこの旅のほかに、もうひとつの旅があります。それは、天地万物をお造りになり、それらを支配しておられる生けるまことの神様、そしてイエス様に信じ従う信仰者の旅であります。

今読んで頂いた詩篇 39 篇は、ダビデの作と言われています。まことの神を主と仰ぎ、主と共に旅をした信仰者であるダビデの詩であります。そしてこの詩は、先ほど申し上げましたように、イエス様を主として従う私たち信者の旅である、思いであるということも言えると思います。

そこで、これから私たちイエス様を主と信じる信仰者の旅について、いろいろ考えてみたいと思いますが、まずイエス様を主と仰ぐ信仰者の旅はいったいどこから始まるのか。イエス様を信じる者も信じる前は、この世のほかの人と同じように生まれた時から始まるこの世の人生の旅をしていました。けれどもイエス様を信じてからは、私たちの旅は、キリスト者として生まれ変わった時から、新たに始まるのであります。

そして、私たち信者の旅はいったいどこで終わるのか。それは、この世の人の人生の旅が死で終わる。死という真っ暗闇の、恐ろしい何かよくわからない恐怖と不安で終わるのと全く違う。私たちイエス様を信じる者の旅の終わりは、神様のまばゆい光に包まれた天の御国と言う目的に入るところで終わるのであります。ヘブル人への手紙 11 章 8 節から 10 節をみますと、そこには主なる神に従って信仰の旅に出た多くの人々についての記事が載っております。ここには、アブラハムについて記されいます。

> ヘブル人への手紙 11:8-10
> 8 信仰によって、アブラハムは、相続財産として受け取るべき地に出て行けとの召しを受けたとき、これに従い、どこに行くのかを知らないで、出て行きました。
> 9 信仰によって、彼は約束された地に他国人のようにして住み、同じ約束をともに相続するイサクやヤコブとともに天幕生活をしました。
> 10 彼は、堅い基礎の上に建てられた都を待ち望んでいたからです。その都を設計し建設されたのは神です。

このように記されております。主なる神様がアブラハムに、「あなたは生まれ故郷を出て、示す地に行きなさい。」とおっしゃった時に、彼はすでに 75 歳でありました。しかしながら年老いた彼は、神の仰せに素直に従って、住み慣れた生まれ故郷を出て、主から示された土地、カナンに旅立ったのであります。そして、彼は約束の地カナンに着いてからもその地で他国人、旅人として、家族たちと共に天幕生活を続けました。

なぜでしょう。目的地に着いたのですから、自分でもっとしっかりした家を建てなかったのでしょうか。なぜ、天幕

生活を続けたのでしょうか。それは、カナンの地もアブラハムにとって最終の目的地ではなかったからであります。アバラハムたちは、地上には本当の故郷はない、この世にある間は、どこに居ても旅人であるということを自覚していました。そして、目に見えない天の都をまことの故郷として、目で見ているように確信して、日々主なる神様に信頼しながらこの世の旅路を歩んでいたのであります。今、お読みしましたヘブル人の手紙の 11 章の 8－10 節の後に、次のように書いてあります。

ヘブル人への手紙 11:13-16
13 これらの人々はみな、信仰の人々として死にました。約束のものを手に入れることはありませんでしたが、はるかにそれを見て喜び迎え、地上では旅人であり寄留者であることを告白していたのです。
14 彼らはこのように言うことによって、自分の故郷を求めていることを示しています。
15 もし、出て来た故郷のことを思っていたのであれば、帰る機会はあったでしょう。
16 しかし、事実、彼らは、さらにすぐれた故郷、すなわち天の故郷にあこがれていたのです。それゆえ、神は彼らの神と呼ばれることを恥となさいませんでした。事実、神は彼らのために都を用意しておられました。

このようにあります。こうして主なる神様に信頼して主の仰せに従って信仰の旅をした私たちの信仰の先輩者たちは、地上における旅路の終わりに、主が用意されたまことの故郷である天の都に入ることができたのであります。しかしその道程と申しますが、旅路は決して平坦な楽なものではありません。天の御国への旅を妨げるものは、たくさんあります。中でも、サタンは、いろいろな手段を使って信仰者の旅を妨げてきます。かつては自分の支配下にあった私たちが、イエス様を信じてこの世に属する者、サタンの支配下にあった立場から神に属する者に生まれ変わったことをサタンが腹を立てて憎んでいるからであります。

信仰者の旅人がこの世の人から嘲られたり、疎まれたり、あるいは場合によっては迫害されることがあるのも、このサタンの仕業であります。けれどもどうして、この世の人々はどうして、私たち信仰者の旅人を迫害するのでありましょうか。それは、イエス様を信じている私たち旅人が、この世の人たちと違うからであります。いったいどこが違うのか。まず、私たちが身につけている衣服が違います。ちょっと肉の目で見ても、この世の人々と私たちの違いはわかりませんが、それは目に見える衣服ではなくて、私たちの霊が着ている霊的な衣服であります。この服についてゼカリヤ書には次のように記されています。

ゼカリヤ書 3:3-4
3 ヨシュアは、よごれた服を着て、御使いの前に立っていた。
4 御使いは、自分の前に立っている者たちに答えてこう言った。「彼のよごれた服を脱がせよ。」そして彼はヨシュアに言った。「見よ。わたしは、あなたの不義を除いた。あなたに礼服を着せよう。」

何でヨシュアは汚れた服を着ていたのでしょう。これは罪に汚れた服であります。彼は、罪に汚れた服を着て御使いの前に立っていました。このヨシュアは、バビロンに捕らわれていたユダヤの民の指導者の大祭司ヨシュアです。けれども大祭司ヨシュアも、そしてまたイエス様を主と信じた私たち信者も、イエス様によって罪に汚れた不義と言う服を脱がせて頂いて、罪なく、真っ白な礼服を着せて頂いた者であります。

この服は、イエス様を救い主として信じる信仰によって与えられた礼服、神様の義の礼服であります。そして、イエス様を信じた者はみな、この礼服を着て天の御国に向かって出発するのであります。旅立つのであります。そして、天の御国に着くまではずっとこの礼服を着て、旅を続けているのであります。この世の人たちはそれを見て、あなたがたは私たちと違う服だな。なんで、こんな服を着るのか。そう言うのです。

イエス様を信じる旅人がこの世から迫害される 2 つ目の理由。それは、わたしたちの話す言葉が違うからであります。私たちはどんな言葉を話しているのでありましょうか。パウロは、コリントの手紙第 I の 1 章 18 節で次のように言っています。

コリント人への手紙第 I、1:18
18 十字架のことばは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちには、神の力です。

私たちが話す言葉は、この十字架の言葉であります。十字架の言葉というのは、イエス・キリストの十字架上の贖いによって、人間が神様に犯したそむきの罪の刑罰から救われという、良き知らせ福音の言葉であります。イエス様を信じた者は、主の一方的な恵みによって御霊を与えられております。そして私たちは、その主の御霊によって、この十字架の言葉、みことばを味わうたびに、喜びと慰めと希望と元気が与えられます。

先ほどのメッセージにもありました。みことばによって私たちは慰められ、希望を与えられ、喜びを与えられ、そして、元気が与えられます。けれどもこの世人は、この世の知恵のことばには耳を傾けますが、この世の賢者と言われる人たちのいうことは耳を傾けます。ところが、彼らは、御霊を持っておりませんから、みことばがわかならいのです。十字架の言葉が愚かに聞こえるのであります。

イエス様を信じて歩む旅人が、この世から迫害される 3 つ目の理由は、私たちが、違う価値観を持っているからであります。これについてパウロは、ピリピ人への手紙 3 章 7 節から 9 節で次のように言っています。

ピリピ人への手紙 3:7-9
7 しかし、私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。
8 それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています。それは、私には、キリストを得、また、
9 キリストの中にある者と認められ、律法による自分の義ではなくて、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基づいて、神から与えられる義を持つこ

とができる、という望みがあるからです。

このように書いております。イエス様を信じる私たちは、とてもまだパウロのように、この世のいっさいのものをちりあくたと思う程に信仰は強くありませんが、そのような私たちでも、イエス様を信じる前と後では、この世についての価値観が知らず知らずに変わっていることに気がつきます。イエス様を知った素晴らしさの故に、それまで大切に思っていたこの世的には価値があったものをむなしいと思うようになった自分に気がついて、「おや、どうしてこんなに変わってしまったのだろうか。」と驚くのではないでしょうか。それと同時にこの価値観の変化が自分の意志の力によって起ったものではないこと、そうではなくて、私たち信者の中に住んでくださっている主の御霊の働きによるものであることを知って、これまた改めて驚きます。驚くだけではなくて、主の恵みに感謝するのであります。

このようにイエス様を信じる私たち旅人というのは、この世の旅人とは、着ているものも、言葉も価値観も、違うのです。しかしながら、そういうこの世の人たちが旅をする道筋と、私たちは同じ道筋を歩いていることも確かなのです。私たちのたどる道も、この世の人のたどる道も、ある所まではこの世を通っておりますから、いろいろな場合にこの世の旅人と旅の途中で出会うことがあります。そうした時に、私たちを見てこの世の人たちは、「あなたがたは私たちと違うね。着てるものも、言葉も、価値観も違うじゃないか。」と、言って責めたり、疎んじたり、迫害したりするのであります。そういう時に、サタンが私たちにささやきかけます。

「そんなにあながたたは、無理しなくていいのじゃないの？」「たまには、世の中の人たちと妥協しなさいよ。」「たまには、イエス・キリストの義と言うその礼服を脱いだらそうですか？」「この世の人たちも着てる同じ着物を着たらいかがですか？」「あなたが、話してるみことばをたまには捨てて、替りに、この世の人たちが使ってる言葉を使ったらどうですか？」

そして、一番サタンが私たちにささやきかけるのは、この世の人たちが使う人間愛という言葉です。それは、世の中の人たちが喜びうれしがるのです。主の愛、十字架の愛の言葉は、この世の人たちは嫌いますが、人間愛は、この世の人たちは好きなのです。

そしてまたサタンは、イエス様を信じる者の価値観を捨てて、この世の人と同じような道徳や倫理に基づく、価値観をあなたがたは持ったらどうですかと。そうして、世の中の人たちと仲良く調子をあわせれば、彼らもあなたがたを受け入れて、一緒に楽しい旅ができますよと、こう言うふうにサタンは、私たちにささやきます。けれども、これこそがサタンの落とし穴。私たちを、天の御国への旅を妨げようとするサタンの落とし穴であります。

イエス様を信じる旅人である私たちは、悲しいことにと言いますか、信仰がまだ弱くて、時には天国への旅に疲れて、足がふらついてしまうことがあります。そしてまた、今のようなサタンのささやきに惑わされて、サタンの仕掛けた穴に押し込むことがあります。泥沼にはまり込むことがあります。けれども、その時どうしたら良いでしょうか。

幸いなことに、私たちはその術を、そこから脱出する方法を知っております。私たちが穴や泥沼に落ちたと気がついたら、すぐにイエス様に、「助けてください。」と、叫べばいいのであります。ご自分を求める叫び声をお聞きになったイエス様は、すぐに私たちが落ち込んだ穴から泥沼から引き上げて安全な所に置いてくださり、そしてまた、私たちは天の御国への旅を続けることができるのであります。こういうふうな体験を味わったダビデは、次のように主なる神様に感謝の祈りを捧げております。

詩篇 40:1-2
1 私は切なる思いで主を待ち望んだ。主は、私のほうに身を傾け、私の叫びをお聞きになり、
2 私を滅びの穴から、泥沼から、引き上げてくださった。そして私の足を巌の上に置き、私の歩みを確かにされた。

私たちもダビデのように主に感謝しながら、感謝の祈りを捧げながら旅を続けたいものであります。天の御国への旅には、もうひとつの大問題があります。それは、死の川を渡らなければならないということであります。死の川は、天の御国への旅路の中で最大の難所であるということができます。しかしながら、この最大の難所も、イエス様が共にいてくださるという確信を私たちがしっかり持ってさえいれば、私たちはイエス様にすがって死の川も恐れることなく渡ることができるのであります。主なる神様は次のように私たちを励ましてくださるからであります。

イザヤ書 43:1-2
1 だが、今、ヤコブよ。あなたを造り出した方、主はこう仰せられる。イスラエルよ。あなたを形造った方、主はこう仰せられる。「恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。
2 あなたが水の中を過ぎるときも、わたしはあなたとともにおり、川を渡るときも、あなたは押し流されない。火の中を歩いても、あなたは焼かれず、炎はあなたに燃えつかない。

死の川の水の中を私たちが過ぎるときも、死の川を渡る時も、あなたは溺れない。それは、私があなたと共にいるから、あなたを支えているからだ。これが、主の私たちに対するお約束であります。そのみことばを確信して死の川を渡れば決して恐れることはないのであります。

イエス様を信じる旅人である私たちにとって大切なことは何か。それは、昼も夜もいつも共にいて導いてくださるイエス様を見失わないように祈りながら旅をすることであります。天の御国に入る日は、もう間近に迫っております。険しい長い旅で、足腰が弱いよろめきながらの歩みの私たちにとって天の御国が近いと言うことは、たいへんな希望であります。そして、その希望によって私たちはふらついた足も、元気を取り戻して旅を続けることができるのであります。

さて、最後に、天の御国を目指して旅をする私たち、イエス様を信じる者には、主からたいへん重要な任務が与えられていることを忘れてはならないと思います。それは、主のしもべである私たちに託されたイエス様を証しする任務であります。天の御国への旅路は先ほども申しまし

たように、この世を通っています。ですから、旅の途中でたくさんの旅人に会います。

先ほど、これらの人々の中には、私たちを疎んじたり、迫害したりする人がいると申しましたけれど、そのような人ばかりいるわけではありません。人生の旅の中で苦難にあって、悲しみ苦しんでいる旅人もいます。人生に絶望した旅人もいます。自分の無力さ愚かさを痛感している旅人にも出会います。そして、そのような旅人の中には、彼らから見て私たちが変わった衣服を着て、変わった言葉を使い、変わった価値観を持っている、そういう私たちも苦しみに遭ったり、よろめいたりしても倒れないで、希望を持って旅を続けている、そういう私たちを見て不思議に思いなぜですかと心を開いて聞いてくる人もいます。

それは神様がその旅人の心を砕いて導いておられるからであります。その時こそ、イエス様を証しするチャンスであります。もしかしたら、その旅人にとってイエス様を知る機会は、この時しかないかもしれない。ですから、その機会を逃さないように、イエス様を信じる私たちは、いつも目を覚ましていることが大切であります。ペテロは、天の御国を目指して旅を続ける私たちに次のようにすすめております。

> ペテロの手紙第 I、2:11-12
> 11 愛する者たちよ。あなたがたにお勧めします。旅人であり寄留者であるあなたがたは、たましいに戦いをいどむ肉の欲を遠ざけなさい。
> 12 異邦人の中にあって、りっぱにふるまいなさい。そうすれば、彼らは、何かのことであなたがたを悪人呼ばわりしていても、あなたがたのそのりっぱな行ないを見て、おとずれの日に神をほめたたえるようになります。

私たちイエス様を信じる旅人は、ここに書かれているように「たましいに戦いをいどむ肉の欲を遠ざける」と言うことも、この世の人々の中にあって「りっぱな」行いをすることも、決して自分の意志や力でできないことを痛いほど知っています。ただひたすら、共にいてくださるイエス様に信頼して、祈りながら毎日毎日の旅を歩み続ける時に、私たちの中で御霊が働いてくださって、自ずとこの世の旅人への証しとなるような歩みができるのではないでしょうか。こうして、天の御国への旅の間に、つぎつぎと新しいキリスト者が誕生して共に手を携えて御国を目指して旅をすることができるのは、なんと幸せなことではないかと思います。

イエス様が、私たち信じる者を空中で迎えに来てくださる日も、間近であることを覚えます。それを示すあらゆる出来事が世界中で、加速度的に増し加わっていることを切実に覚えます。そういう時に、ひとりでも多くの方が天の御国で、天の旅人の群れに増し加えられるように、私たちひとりひとりの祈りが、御霊により強められるように、心から祈る次第であります。

ありがとうございました。

主が強くしてくださる

2010 年 11 月 16 日、吉祥寺学び会
重田定義

ピリピ人への手紙 4 章 13 節
13 私は、私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできるのです。

今、司会者に読んでいただきましたこのみことばの意味、これを、今日は聖書に記されているいくつかの例からご一緒に考えてみたいと思います。パウロは、ここで私を強くされる方によって、どんなことでもできると言っております。そして、自分が強くされた証拠として、その前の節で、「自分が飽くことにも飢えることにも、富むことにも乏しいことにも、あらゆる境遇に対処する秘訣を心得ています。」と言っているのですね。

そして、そのようにどんなことにも対処することができるのは、自分の力や努力によるのではない。イエス様を信じる信仰によって、イエス様が自分を強めてくださるからなのであるというふうに、ここで証しをしているのですね。人間は誰でも、自分が強くなることを望んでいるのではないでしょうか。それは、例えばスポーツに限らないですね。この世を生きていく上で、何事においても、弱いよりも強い方が有利だということを私たちが、知っているからであります。強者が弱者に勝つというのが、この世の常識だからであります。ですから、どうすれば自分が強くなれるのかと、人間があらゆる知恵をしぼり、また努力を尽くしてがんばります。

けれどもパウロはここで、自分の力や意思によって、自分が強くなるのではなくて、イエス様が自分を強くしてくださるのだと言っているのですね。しかもパウロが強くなるのは、それは自分のためではない、主のためである、神様のためである。そして、それによって、主がご栄光を現されるためである。そして強くされたことによって、自分は主のために、どんなことでもできるというふうに言っています。この点が、パウロが強くなりたいと思う理由と目的と、そしてこの世の人々が強くなりたいと思う理由と目的との、全く違うところであります。

旧約聖書には、信仰によって主に強められた人々の事例が、数多く記されております。その内のいくつかをこれから見ていきたいと思います。まず、サムエル記第一の 17 章には、少年ダビデが、ペリシテ人の巨人ゴリヤテを倒した記事が載っております。

サムエル記第一、17:42-50
42 ペリシテ人はあたりを見おろして、ダビデに目を留めたとき、彼をさげすんだ。ダビデが若くて、紅顔の美少年だったからである。
43 ペリシテ人はダビデに言った。「おれは犬なのか。杖を持って向かって来るが。」ペリシテ人は自分の神々によってダビデをのろった。
44 ペリシテ人はダビデに言った。「さあ、来い。おまえの肉を空の鳥や野の獣にくれてやろう。」
45 ダビデはペリシテ人に言った。「おまえは、剣と、槍と、投げ槍を持って、私に向かって来るが、私は、おまえがなぶったイスラエルの戦陣の神、万軍の主の御名によって、おまえに立ち向かうのだ。
46 きょう、主はおまえを私の手に渡される。私はおまえを打って、おまえの頭を胴体から離し、きょう、ペリシテ人の陣営のしかばねを、空の鳥、地の獣に与える。すべての国は、イスラエルに神がおられることを知るであろう。
47 この全集団も、主が剣や槍を使わずに救うことを知るであろう。この戦いは主の戦いだ。主はお前たちをわれわれの手に渡される。」
48 そのペリシテ人は、立ち上がり、ダビデを迎え撃とうと近づいて来た。ダビデもすばやく戦場を走って行き、ペリシテ人に立ち向かった。
49 ダビデは袋の中に手を差し入れ、石を一つ取り、石投げでそれを放ち、ペリシテ人の額を打った。石は額に食い込み、彼はうつぶせに倒れた。
50 こうしてダビデは、石投げと一つの石で、このペリシテ人に勝った。ダビデの手には、一振りの剣もなかったが、このペリシテ人を打ち殺してしまった。

ダビデはここで、この戦いは自分のための戦いではなくて、主の戦いであると言っております。主の戦いであるがゆえに彼は、主は弱く小さい自分を強くされて、この恐ろしい敵に勝つことができると確信して、戦ったのであります。そして彼のこの信仰を良しとされた主は、ダビデを通してご栄光を現されたのであります。次にダニエル書の 6 章から、獅子の穴に投げ込まれたダニエルについて書かれてるところを見てみたいと思います。

ダニエルは、ご存知のように、捕囚の一人としてバビロンに連れて行かれました。そして、そこでバビロン王の信頼を受けて、大臣に取り立てられるまでに出世しましたけれども、その地でも、異教の民の中にあって、生ける真の神様に対する信仰を守り続けたのであります。そして、そのダニエルを妬んだ王の家来たちは、ダニエルを陥れようとして、バビロン王だけに祈ること、さもなければ、獅子の穴に投げ込むという禁令を作ったんですね。

それでも、主なる神様に祈ることを止めなかったダニエルは、禁令を犯した罪によって、ついに獅子の穴に投げ込まれてしまいます。しかし、この禁令がダニエルを陥れるものであると知った王は、翌朝、ダニエルの様子を見に獅子の穴に急いで行きます。

ダニエル書 6:20-23
20 その穴に近づくと、王は悲痛な声でダニエルに呼びかけ、ダニエルに言った。「生ける神のしもべダニエル。あなたがいつも仕えている神は、あなたを獅子から救うことができたか。」
21 すると、ダニエルは王に答えた。「王さま。永遠に生きられますように。
22 私の神は御使いを送り、獅子の口をふさいでくださったので、獅子は私に何の害も加えませんでした。それは私に罪のないことが神の前に認められたからです。王よ。私はあなたにも、何も悪いことをしていません。」
23 そこで王は非常に喜び、ダニエルをその穴から出せと命じた。ダニエルは穴から出されたが、彼に何の傷も認められなかった。彼が神に信頼していたからである。

このように、囚われの弱い身でありながら、主なる神様にどこまでも信頼したダニエルを主が強めてくださり、そのダニエルを通して、主は、異邦人の王に対しても、ご栄光を現されたのであります。預言者のエレミヤについてはいったいどうだったでしょうか。エレミヤが、主の預言者として召し出された時の様子は、次のようなものでありました。

エレミヤ書 1:4-8
4 次のような主のことばが私にあった。
5「わたしは、あなたを胎内に形造る前から、あなたを知り、あなたが腹から出る前から、あなたを聖別し、あなたを国々への預言者と定めていた。」
6 そこで、私は言った。「ああ、神、主よ。ご覧のとおり、私はまだ若くて、どう語っていいかわかりません。」
7 すると、主は私に仰せられた。「まだ若い、と言うな。わたしがあなたを遣わすどんな所へでも行き、わたしがあなたに命じるすべての事を語れ。
8 彼らの顔を恐れるな。わたしはあなたとともにいて、あなたを救い出すからだ。――主の御告げ。――」

エレミヤという人は、たいへん弱い性格の人であったようです。けれども、主はこの弱いエレミヤを、主の預言者に選ばれました。そして主によって強められたエレミヤは、主に信頼しながら、激しい迫害を受けられながらも、恐れることなく、生涯主のみことばを伝え続けたのであります。そして主はそのエレミヤを通して、ご栄光を現されました。ヘブル人への手紙 11 章には、このようにして、主によって強められた人々について、次のように書かれております。

ヘブル人への手紙 11:32-34
32 これ以上、何を言いましょうか。もし、ギデオン、バラク、サムソン、エフタ、またダビデ、サムエル、預言者たちについても話すならば、時が足りないでしょう。
33 彼らは、信仰によって、国々を征服し、正しいことを行ない、約束のものを得、ししの口をふさぎ、
34 火の勢いを消し、剣の刃をのがれ、弱い者なのに強くされ、戦いの勇士となり、他国の陣営を陥れました。

主は、生まれつき強い者をそのままではお用いになりません。それはなぜかと言いますと、生まれつき強い者は何事も、信仰でさえも、自分の強さによって実行できるという、高ぶった自我の思いを持っているからであります。ですから主はまず、用いようとされる者の自我を砕いて、弱められるのですね。その実例を 2 つあげてみたいと思います。

ひとつは、イエス様の弟子ペテロであります。彼は生まれつき強い性質の持ち主であったようであります。そしてその性質のゆえに、イエス様が弟子たちに「今夜、わたしが捕らえられたら、あなたがたは皆、わたしにつまづき、ちりじりになる」と仰った時に、ペテロは何とイエス様に言ったか。

マタイの福音書 26:33-35
33 すると、ペテロがイエスに答えて言った。「たとい全部の者があなたのゆえにつまずいても、私は決してつまずきません。」
34 イエスは彼に言われた。「まことに、あなたに告げます。今夜、鶏が鳴く前に、あなたは三度、わたしを知らないと言います。」
35 ペテロは言った。「たとい、ごいっしょに死ななければならないとしても、私は、あなたを知らないなどとは決して申しません。」弟子たちはみなそう言った。

こういうふうに言い張ったんですね。それにもかかわらず、ペテロは自分がイエス様に預言された通りに、イエス様を裏切ってしまったことによって、彼の自我は粉々に砕かれたのであります。そのようにして砕かれ、弱められたペテロを、主は御霊によって強めてくださり、その結果、彼は主の器として用いられ、迫害にあいながら、殉教の死を遂げるまで主の福音を述べ伝え続けたのであります。次の人は、パウロであります。彼は次のように証しております。

コリント人への手紙第二、12:7-10
7 また、その啓示があまりにもすばらしいからです。そのために私は、高ぶることのないようにと、肉体に一つのとげを与えられました。それは私が高ぶることのないように、私を打つための、サタンの使いです。
8 このことについては、これを私から去らせてくださるようにと、三度も主に願いました。
9 しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。
10 ですから、私は、キリストのために、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです。

パウロは、かつては自我の強い、誇りの高い人でありました。これについて彼は次のように告白しております。

ピリピ人への手紙 3:4-6
4 ただし、私は、人間的なものにおいても頼むところがあります。もし、ほかの人が人間的なものに頼むところがあると思うなら、私は、それ以上です。
5 私は八日目の割礼を受け、イスラエル民族に属し、ベニヤミンの分かれの者です。きっすいのヘブル人で、律法についてはパリサイ人、
6 その熱心は教会を迫害したほどで、律法による義についてならば非難されるところのない者です。

かつての彼の誇り高さ、これは今の彼の告白からよく解かると思います。しかし彼の告白と言いますか、証しにある通り、イエス様はパウロの自我を砕いて弱くされた後で、パウロを御霊によって強められて、主の器として大いに用いられたのであります。主の器とされたパウロは、コリント教会の信者にあてた手紙の中で、自分は弱い者であることをよく知っている。だから福音伝道の成果は、自分の人間的な知恵や力によってではなくて、御霊の力に支えられて行われた結果であるというふうに証ししております。

コリント人への手紙第一、2:3-4
3 あなたがたといっしょにいたときの私は、弱く、恐れおののいていました。
4 そして、私のことばと私の宣教とは、説得力のある知恵のことばによって行なわれたものではなく、御霊と御力の現われでした。

コリント人への手紙第一、9:19-22
19 私はだれに対しても自由ですが、より多くの人を獲得するために、すべての人の奴隷となりました。
20 ユダヤ人にはユダヤ人のようになりました。それはユダヤ人を獲得するためです。律法の下にある人々には、私自身は律法の下にはいませんが、律法の下にある者のようになりました。それは律法の下にある人々を獲得するためです。
21 律法を持たない人々に対しては、――私は神の律法の外にある者ではなく、キリストの律法を守る者ですが、――律法を持たない者のようになりました。それは律法を持たない人々を獲得するためです。
22 弱い人々には、弱い者になりました。弱い人々を獲得するためです。すべての人に、すべてのものとなりました。それは、何とかして、幾人かでも救うためです。

これこそパウロが「私は、私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできるのです。」、「私が弱いときにこそ、私は強いからです。」と証ししていることの、具体的な現れであると思います。

これまでご一緒に、主の器として用いられた人々について考えてまいりましたけれども、これらの人々はすべて、自分の弱さを知って、あるいは強かった自分が、主に弱められた結果として、自我が砕かれ、自分自身を主に委ねることによって、主に自分を明け渡すことによって、主から力をいただいて、強くされた人たちであります。そしてこのように、主によって強められた人々を通してのみ、主はご自信のご栄光を現されたのであります。イエス様は、私たちすべての信者に対しても、これらの人々と同じように、ご自分の救いを伝える者として用いたいと心から望んでおられます。

そして、主が私たちをご自分の尊い血潮によって、罪から救い出してくださったのは、ただ罪から救い出すだけではなくて、そのような者を主のしもべとして、主の器として用いようというのが御心なのであります。そして、そのためには、何回も申し上げたように、主によって強めていただかなければなりません。そして、主によって強められるためには、まず自分が弱められ、自分の自我を主に明け渡す必要があるのであります。

バプテスマのヨハネは、ヨハネの福音書 3 章 30 節で、「あの方は盛んになり私は衰えなければなりません。」と言っているのは、まさにこのことであります。私たちはどうでしょうか。私たちも、心からヨハネのように言うことができるのでありましょうか。それとも信じた後も相変わらず、強い自我のままで、日々過ごしているのでありましょうか。それでは主が、私たちを主のご用のためにお用いになれないことは、すでにお解かりだと思います。

信仰においては、自分を強いと言うことは何の益にもなりません。むしろ自分を義とする誤った道に突き進む結果に陥ってしまいます。イエス様のご再臨の近い今、私たちは自分の中になお根強く残っている自我を主によって砕いていただき、弱められて、自分を主に明け渡し、主の御前にへりくだり、みことばを確信し、御霊に満たしていただくことによって、強められ、パウロが言っていますように「私が弱いときにこそ、私は強いからです。」と、私たちも証することができるように、主の器として用いていただけるよう、そしてそのことを通して、主がご栄光を現して下さることができるように心から祈りたいと思うしだいであります。

最後に、私たちを強くしてくださる主に、約束のみことばをお読みして終わります。

イザヤ書 41:10
10 恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。

エペソ人への手紙 6:10
10 終わりに言います。主にあって、その大能の力によって強められなさい。

神の聖さにあずかる者

2011 年 3 月 29 日、吉祥寺学び会
重田定義

> 第一テサロニケ
> 4:3 神のみこころは、あなたがたが聖くなることです。あなたがたが不品行を避け、
> 4:4 各自わきまえて、自分のからだを、聖く、また尊く保ち、
> 4:5 神を知らない異邦人のように情欲におぼれず、
> 4:6 また、このようなことで、兄弟を踏みつけたり、欺いたりしないことです。なぜなら、主はこれらすべてのことについて正しくさばかれるからです。これは、私たちが前もってあなたがたに話し、きびしく警告しておいたところです。
> 4:7 神が私たちを召されたのは、汚れを行なわせるためではなく、聖潔を得させるためです。

おはようございます。司会の兄に読んでいただきましたこのみことばから今日は、神の御心は、あなたがた、このあなたがたというのは、未信者を指しているのではなくて、テサロニケ教会の信者、ひいてはイエス様を主と信じる私たちを指しておりますが、そのあなたがたが、聖くなることです、ということにつきまして、ご一緒に考えてみたいと思います。

ここで言われております聖さというのは、最高の聖さ、崇められるべき聖さといいますか、すなわち神の聖さのことであります。神の聖さというのは、いったいどれほどの聖さなのかですね。考えても私たちには見当もつきません。けれども、この聖さこそ神様のご性質そのものであり、神様の尊厳性、完全性を示す言葉でもあります。

したがって、人間が自分でどんなに頑張っても、どんなに努力しても、到底この聖さに到達することはできないのであります。

しかしながら、神様は、神の聖さどころか、それとは対極にある罪の汚れに染まりきった、私たち人間に対して、ご自分の聖さにあずからせたいとお考えになったのであります。いったいどうしてでありましょうか。それは、ご自分の子供のように愛し、親しい交わりをなさろうとお考えになって、お創りになった人間が、ご自分に背くという罪を犯し、滅びに定められているのも知らないでいるのを哀れに思われた神様が、私たち人間をもう一度、ご自分の元に立ち返らせ、滅びから救い出し、親しい交わりを回復しようとお考えになったからであります。

しかし、罪に汚れた人間が、そのままで聖い神様の御許に立ち返ることは赦されません。そのためにはまず、罪が清められることが絶対に必要であります。けれども、この罪は私たち人間の身に、生まれながらに深く染み込んだ性質そのものでありますから、人間がいくら努力しても決して清めることはできません。

ただ一つ、神様の御子イエス様の聖い血によってのみ、この罪を清めることが可能なのであります。神様は、そのためにイエス様を人として、私たちのところにお遣わしになり、十字架にお架けになったのであります。そして、イエス様が十字架の上で流された尊い聖い血潮が、自分の罪を清めてくださるためであったと、心から信じた者を神様は、良しとされて、聖く、傷なき者と認めてくださり、ご自分との交わりを回復してくださるのであります。

これについてパウロは、コロサイの信者宛の手紙の 1 章 21 節から 22 節に次のように書いております。

> 1:21 あなたがたも、かつては神を離れ、心において敵（これは言うまでもなく、神様の敵ですが）となって、悪い行ない（この悪いというのも神の御心に反する行いを指しています）の中にあったのですが、
> 1:22 今は神は、御子の肉のからだにおいて、しかもその死によって、あなたがたをご自分と和解させてくださいました。それはあなたがたを、聖く、傷なく、非難されるところのない者として御前に立たせてくださるためでした。

イエス様を信じた私たち信者は、聖徒と呼ばれます。これは、御子イエス様の尊い血によって、聖め分かたれた者という意味であります。しかしながら、神様の御心はこれで充分とはなさいません。罪と汚れから聖め分かたれた者を、さらに神様のご自分のご性質であるところの聖さにあずからせる者として、成長させようとなさいます。なぜでしょうか。

ヨハネ黙示録 22 章 10 節～11 節にその理由が記されております。

> 22:10 また、彼は私に言った。「この書の預言のことばを封じてはいけない。時が近づいているからである。
> 22:11 不正を行なう者はますます不正を行ない、汚れた者はますます汚れを行ないなさい。正しい者はいよいよ正しいことを行ない、聖徒はいよいよ聖なるものとされなさい。」

ここで言われている時というのは、言うまでもなくご再臨の時であります。2000 年前にイエス様が、人となってこの世に来られた目的は、先ほどのみことばにありますように、神様に背いている人間をご自分の尊い血によって聖め、神様と和解させるためでありました。

しかし、今度は、イエス様を信じた聖徒を天に携え上げるために、空中まで迎えに来てくださる、そのため、そしてまた、その後にはイエス様の救いの御手を、最後まで拒み続ける人々を裁くために、地上までおいでになるのであります。これが 2 度のご再臨と言ってもいいと思いますが、空中再臨と地上再臨ですね。そして、御使いはその時が近づいていると言っているのであります。

そして、聖徒が天に携え上げられるためには、ご自分のご性質である聖さにあずからせ、ますます聖なる者とされること、すなわち聖化が必要であると御使いは言っているのであります。

今の世界は、このみことばの通り、不正を行なう者はますます不正を行なっており、罪に汚れた者はますます罪の汚れを増し加えております。私たちの目や耳に毎日入ってくるニュースを通しても、何という汚れに満ちた暗黒

の世の中であるかを、嫌というほど思い知らされます。

しかし、聖徒とされた私たち信者は、神様がこれらのことを通して、聖書に預言されているところの、世の終わりに起こるご再臨の時が、いよいよ近づいているという証拠を、私たち信者に示してくださっているのだと知ることができます。

ですから、この時にあって、私たち聖徒は、今のみことばにありますように、御使いの勧告を真剣に受け止めて、いよいよ聖なる者とされるようにと切に祈る必要があります。しかしながら、聖徒がいよいよ聖なる者とされるということ、すなわち聖化とは、具体的にはいったいどんな状態になることなのでありましょうか。

一言でいえば、それはイエス様に似る者、言い換えますと、イエス様のようなご性質を持つ者とされるということであります。この世に人として来られたイエス様は、神の御子として父なる神様とともに、天地万物をお創りになったほどの偉大な力をお持ちであり、どんなことでもお出来になる全知全能のお方でありますのに、人としてこの世にお生まれになって、ご自分を無にして、父なる神様の御心に従われ、神様に背いて自分勝手な生き方をしてはばからない私たち人間を、罪から贖い出すために、十字架の死にまでも従われました。

ピリピ 2 章 6 節～8 節
2:6 キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、
2:7 ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。
2:8 キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。

神様に対する全き従順、神様の御心に忠実に死にまでも従うほどの従順、このイエス様のご自分を無にしてまでも神様に、そして私たちのような、神様に背きわがまま勝手に生きている人間に仕えるという、この主のご性質に似るように、私たちが成長すること、これが聖徒が聖化するということであります。

したがって、さきほどのヨハネの黙示録のみことばは、ご再臨の迫っている今、この時に、主によって聖めていただいた私たち信者は、ますます主の御心に忠実に従って、さらに聖なる者、聖化へと成長しなさいという意味であります。これこそ主が、今私たち信者に望んでおられることなのであります。

しかし、どのようにして、聖徒がますます聖なる者へと成長することが出来るのでありましょうか。この世に置かれている私たち信者は、恵みによって聖徒とされておりましても、なお肉の衣を着ておりますがために、自我の思いがまだまだ根強く残っており、そのために、主によって聖められた私たちの霊は、主の御心に従いたいと思ってはいても、私たちの肉は、肉がそれに逆らい、悪と汚れに満ちたこの世に大変惑わされやすい、罪を犯しやすい、そのような弱い者であることは、私たち自身が痛いほど知っております。パウロも自分の中に生じる霊と肉との葛藤について、苦しんで次のように嘆いております。

ローマ書 7 章 18 節
7:18 私は、私のうち、すなわち、私の肉のうち（肉というのは自我のうちと言ってもいいでしょうね）に善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。

善というのは、これも言うまでもなく、神様の御心に従うことでありますが、このように、私たち聖徒に残っている肉の性質であるところの自我こそが、聖化を阻む最大の原因なのではないかと思います。

しかし、主は私たち信者の弱さをよーくご存知であります。そして、その弱い者をイエス様に似るように聖化へと成長させるために、2 つのすばらしい恵みを、私たち信者に与えてくださいました。その一つは、イエス様の御霊であります。もう一つは、試練であります。

まず御霊の恵みを考えてみますと、主は、私たち信者のうちに御霊として宿ってくださり、私たちを日々導いてくださいます。そのことは、私たちが日々体験しているところではないでしょうか。イエス様は、生前、御霊について、弟子たちに次のように約束なさいました。

ヨハネ伝 15 章 26 節
15:26 わたしが父のもとから遣わす助け主、すなわち父から出る真理の御霊が来るとき、その御霊がわたしについてあかしします。

ヨハネ伝 16 章 13 節、14 節
16:13 しかし、その方、すなわち真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導き入れます。御霊は自分から語るのではなく、聞くままを話し、また、やがて起ころうとしていることをあなたがたに示すからです。
16:14 御霊はわたしの栄光を現わします。わたしのものを受けて、あなたがたに知らせるからです。

このようにイエス様が約束しておられます。

また、パウロは、ガラテヤ書 5 章 16 節から 17 節で、次のように言っております。

5:16 私は言います。御霊によって歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。
5:17 なぜなら、肉の願うことは御霊に逆らい、御霊は肉に逆らうからです。この二つは互いに対立していて、そのためあなたがたは、自分のしたい(自分の霊がしたい）と思うことをすることができないのです。

このようにパウロは、私たち聖徒がますます聖なる者に成長するには、どうしても御霊の導きが必要であるということを強調しております。

もし私たち聖徒が、日々の信仰生活において、御霊に満たされ、御霊のお導きにしっかりと従って、信仰の歩みを

続けるならば、このみことばのように、肉の思いを抑えて、聖なる者へと成長することができるでありましょう。しかし、現実にはどうでしょうか。それがいかに困難であるかを、私たち聖徒は、思い知らされております。

しかし、どんなに肉に負けてしまうような弱い自分自身であっても、それでは仕方がないやと諦めることはありません。諦めてしまってはいけないのであります。自分のような者でも、主の一方的な恵みと憐れみによって、主のものとされ、やがてこの汚れた世から、苦しみも涙もない聖い天の御国に、携え上げていただける幸いな者であることを、もう一度私たちは、しっかりと認識して、そしてその自分を主にお委ねすれば、必ず御霊が働いてくださり、徐々に私たちの思いや行いを聖め、導いてくださると信じます。

2つ目の恵みは、私たちに与えられる試練であります。しかし、試練がどうして恵みなのでありましょうか。これについて、ヘブル書には次のようにあります。これもよく読まれる箇所であります。

ヘブル書 12 章 4 節～10 節
12:4 あなたがたはまだ、罪と戦って、血を流すまで抵抗したことがありません。
12:5 そして、あなたがたに向かって子どもに対するように語られたこの勧めを忘れています。「わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。
12:6 主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。」
12:7 訓練と思って耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです。父が懲らしめることをしない子がいるでしょうか。
12:8 もしあなたがたが、だれでも受ける懲らしめを受けていないとすれば、私生子であって、ほんとうの子ではないのです。
12:9 さらにまた、私たちには肉の父がいて、私たちを懲らしめたのですが、しかも私たちは彼らを敬ったのであれば、なおさらのこと、私たちはすべての霊の父に服従して生きるべきではないでしょうか。
12:10 なぜなら、肉の父親は、短い期間、自分が良いと思うままに私たちを懲らしめるのですが、霊の父は、私たちの益のため、私たちをご自分の聖さにあずからせようとして、懲らしめるのです。

主の懲らしめは、御心に従うことを拒み、自分の肉の思いを満たしたいという、私たち聖徒に根強く残っている頑なな自我を砕き、主に自分を明け渡すために必要な訓練であり、主の愛の鞭であり、これはまさに恵みなのであります。試練によって、自我が砕かれ、自分を主に完全に明け渡したパウロは、次のように証することができました。

ガラテヤ書 2 章 20 節
2:20 私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

こうして私たち聖徒が、自我が砕かれ、自分を主に明け渡した時に、私たち聖徒のうちに住んでくださっている主の御霊が働いてくださり、私たちをさらに聖なる者へ、イエス様に似た者へと成長させてくださるのであります。

第 2 コリント 3 章 18 節
3:18 私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。

では、私たち聖徒の聖化は、いつ完成するのでありましょうか。それは、イエス様のご再臨の時であります。

第一ヨハネ 3 章 2 節
3:2 愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現われたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。

ご再臨の時にイエス様がおいでになった時に、私たちは、キリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。

このようにですね、イエス様のご再臨の時に、イエス様に完全に似た者、すなわちイエス様と同じような聖さを持つようになった私たちは、聖なるイエス様に直接、顔と顔とをあわせてお会いすることができるのであります。なんというすばらしいことではないでしょうか。

そして、その時が間近かに迫っている今、私たち聖徒は、さらに自我が砕かれ、日々、御霊に満たされ、導かれて、ご再臨を待ち望む備えを、霊肉ともにしっかりと整えることこそが、今、私たち聖徒に最も求められていることではないかと思います。最後にテサロニケ第一 5 章 23 節から 24 節をお読みして終わりたいと思います。

5:23 平和の神ご自身が、あなたがたを全く聖なるものとしてくださいますように。主イエス・キリストの来臨のとき、責められるところのないように、あなたがたの霊、たましい、からだが完全に守られますように。
5:24 あなたがたを召された方は真実ですから、きっとそのことをしてくださいます。

汚れた唇と清められた唇

2011 年 6 月 28 日、吉祥寺学び会
重田定義

イザヤ
6:1 ウジヤ王が死んだ年に、私は、高くあげられた王座に座しておられる主を見た。そのすそは神殿に満ち、
6:2 セラフィムがその上に立っていた。彼らはそれぞれ六つの翼があり、おのおのその二つで顔をおおい、二つで両足をおおい、二つで飛んでおり、
6:3 互いに呼びかわして言っていた。「聖なる、聖なる、聖なる、万軍の主。その栄光は全地に満つ。」
6:4 その叫ぶ者の声のために、敷居の基はゆるぎ、宮は煙で満たされた。
6:5 そこで、私は言った。「ああ。私は、もうだめだ。私はくちびるの汚れた者で、くちびるの汚れた民の間に住んでいる。しかも万軍の主である王を、この目で見たのだから。」
6:6 すると、私のもとに、セラフィムのひとりが飛んで来たが、その手には、祭壇の上から火ばさみで取った燃えさかる炭があった。
6:7 彼は、私の口に触れて言った。「見よ。これがあなたのくちびるに触れたので、あなたの不義は取り去られ、あなたの罪も贖われた。」

おはようございます。今、読んでいただきましたイザヤ書の箇所から、今日は「汚れた唇と聖められた唇」というテーマにつきましてご一緒に学んでみたいと思います。イザヤは、紀元前 8 世紀に北イスラエルの偉大な預言者であります。

今のみことばで、イザヤが言っておりますように、彼は神様を自分の目で見てしまいました。その時に彼がまず思ったことは、自分のような唇の汚れた者が神様を見てしまった。だからもう自分は死ぬということでありました。神様を見た者は死ぬということは、すでにずーと昔、神様がモーセに仰せになっております。

出エジプト記
33:20 また仰せられた。「あなたはわたしの顔を見ることはできない。人はわたしを見て、なお生きていることはできないからである。」

このようにあります。ですから、イスラエルの民は神様を見るということが、たいそう恐れておりました。見たら死んでしまう。人間が神様を見たら生きていることができません。

なぜならば、私たち人間は誰ひとり、神様の前に正しくなく、清くない者だからであります。正しくなく、清くない者が完全に正しい聖い神様をこの目で見ることを、神様はお許しにならないのであります。

イザヤは、唇が汚れていると言いました。唇が汚れるとはいったいどういうことでありましょうか。それは唇から出る言葉が汚れているからであり、そして言葉が汚れているのは、その言葉が汚れた心から出てくるからであります。すなわち、心が汚れていれば、その汚れた心を表す言葉によって、唇も舌も口も汚れるのであります。イエス様はこれについて、次のように仰っておられます。

マタイ伝
15:18 しかし、口から出るものは、心から出て来ます。それは人を汚します。
15:19 悪い考え、殺人、姦淫、不品行、盗み、偽証、ののしりは心から出て来るからです。

この心の汚れは、神様に対する罪の結果として生じたものであります。そして、私たち人間はすべて神様の仰せに背いてエデンの園から追放された最初の人であるところのアダムの子孫として、アダムの遺伝子を受け継いでおり、従っていやおうなくアダムの罪の性質を持って生まれておりますために、たとえ表面は取り繕っておりましても、生まれつきの口、生まれつきの心は悲しいことに汚れた言葉しか出すことが出来なくなってしまったのであります。

このように神様に従わず、自分を主張し、自我によって生きる者となってしまった人間の唇から出る言葉が、どのようなものであるかを聖書から見てみたいと思います。

詩篇
17:10 彼らは、(神様に対して)鈍い心を堅く閉ざし、そのロをもって高慢に語ります。

12:2 人は互いにうそを話し、へつらいのくちびると、二心で話します。
12:3 主が、へつらいのくちびると傲慢の舌とを、ことごとく断ち切ってくださいますように。
12:4 彼らはこう言うのです。「われらはこの舌で勝つことができる。われらのくちびるはわれらのものだ。だれが、われらの支配者なのか。」

10:7 彼の口は、のろいと欺きとしいたげに満ち、彼の舌の裏には害毒と悪意がある。

私たちが素直に自分の心を省みた時に、自分の唇から出る言葉は、みことばで言われている通り、呪いやへつらいや欺瞞や虚偽や悪意や高慢によって汚されたものがいかに多いかということを、認めざるを得ないのではないでしょうか。

このような言葉が私たちの唇から出てくる訳は、先ほども申しましたように、私たちがそのような言葉を出してしまう、生まれつき心が汚れた人間だからなのであります。どんなに自分は清い、どんなに自分は善良であると思っている人であっても、自分の心の中をよく見つめた時、そこに一点の汚れもないと言いきれる方はおられないと思います。

さて、私たち人間の口や舌や唇にはいったいどんな働きがあるでしょうか。医学的には、言うまでもありませんけど、それらは食べ物を食べる働き、あるいは言葉を話す働きであります。しかしながら、神様はこれらの器官を医学的な目的以上に、大切なことのためにお用いになろうと、私たち人間をお造りになったのであります。

それは、ご自分と交わるためであります。神様と交わるために使うことが、私たち人間の口、舌、唇の霊的な本来の正しい働きなのであります。ところが、創世記に記されておりますように、アダムとエバはサタンに誘惑されて、神様からエデンの園の中でこの木の実だけは食べてはいけないと言われた禁断の木の実を神の仰せに背いて食べてしまい、その時から人間の心に罪が入った結果、神様と交わるべき口、舌、唇を自分の欲を満たすために、自分の考えを主張するために、そして人と争ったり、人を裁いたりするために使うようになってしまったのであります。

こうして私たちの口、舌、唇はそのような肉的な目的に用いる、汚れた言葉を出すようになってしまいました。しかも私たち人間は、イエス様の光に照らされるまでは、それを特に悪いともおかしいとも思いません。どうしてでしょうか。それは私たちの霊の目が神様への背きの罪のために閉ざされてしまっていたからであります。

こういうわけで、肉の目は見えても霊的に盲目である私たち人間は、自分が罪に汚れていることが見えません。ですから、汚れた人間の口から汚れた言葉が出てくるのは当然でありましょう。しかしこのような霊的盲目の私たちが神様の光に照らされますと、自分の唇が汚れていることに、言い換えますと自分の罪に気づいて神様を恐れるようになります。

最初に読んでいただきましたみことばにあるイザヤは、まさにこの体験をしたんですね。ではイザヤの恐れたように神様はイザヤを滅ぼされたのでありましょうか。そうではありませんでした。最初に読んでいただいたみことばを見ますと、セラフィムすなわち天使が火を彼の唇にあてたとあります。

この火は、汚れを焼き清めるものであり、この火は神様の御手の力であるところの御霊の火であります。私たち人間は、自分の罪を自分で聖めることは決して出来ません。人間の側からどうすることもできないこの汚れと背きの罪は、神様の側から一方的なあわれみと恵みによって、神様の御手によってのみ清められるのであります。

イザヤも神様の御手によって、罪が清められ、同時に彼の唇も清められました。ではなぜ、神様はイザヤの唇を清められたのでありましょうか。イザヤの唇を清められた神様の御心とはいったい何でありましょうか。それは、冒頭のみことばに続くイザヤ書 6 章 8 節に記されております神様とイザヤの問答によって知ることができます。

> イザヤ
> 6:8 私は、「だれを遣わそう。だれが、われわれのために行くだろう。」と言っておられる主の声を聞いたので、言った。「ここに、私がおります。私を遣わしてください。」

神様がイザヤの唇を清められたのは、罪から人間を救うために、神の御子をこの世に遣わすというメッセージをイスラエルの民に、ひいては世界のすべての人間に告げるのにふさわしい唇とするためでありました。

そこで神様はイザヤに「私は、だれを遣わそう。だれが、われわれのために行くだろう。」と仰せになったのであります。もちろん我々とは主なる神様と神の御子であるイエス様を指しておられます。イザヤは清められた唇によって、さっそく神様に「私を遣わしてください。」と答えました。

そして、それからの彼の唇は、神様のメッセージを正しく伝えることに使われるようになったのであります。こうしてイザヤの清められた唇は、神様に対する私たち人間の背きの罪を身代わりに負って、神様から罰を受けてくださるために人となって、この世に来てくださるイエス様について、神様に命じられるままに、次のように預言をいたしました。

> イザヤ
> 9:6 ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。
> 9:7 その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に着いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これをささえる。今より、とこしえまで。万軍の主の熱心がこれを成し遂げる。
>
> 53:1 私たちの聞いたことを、だれが信じたか。主の御腕は、だれに現われたのか。
> 53:2 彼は主の前に若枝のように芽生え、砂漠の地から出る根のように育った。彼には、私たちが見とれるような姿もなく、輝きもなく、私たちが慕うような見ばえもない。
> 53:3 彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。人が顔をそむけるほどさげすまれ、私たちも彼を尊ばなかった。
> 53:4 まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。
> 53:5 しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。
> 53:6 私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。

神様がイザヤの清められた唇を用いて、このように約束して下さったとおり、神の御子イエス様は約 2000 年前に、この世に人としておいでくださり、十字架と復活による救いの御業を成就してくださったのであります。

幸いなことに、私たちキリスト者もイザヤと同じように一方的な神様のあわれみによって救いの対象に選ばれ、イエス様を信じる者となさせていただきました。では、イエス様の十字架の贖いの御業を信じることによって、罪が清められてから私たちの唇から出る言葉は、それまでとはどのように違うようになったのでありましょうか。いくつか考えてみたいと思いますが、一つは、私たちの清められた唇はイエス様を救い主と告白する言葉を出すことができるようになったということであります。

ローマ
10:9 なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。
10:10 人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。

このみことばの通り、聖霊によって清められた私たちの霊が、イエス様を救い主として信じ、それを私たちの唇から告白することができたのであります。

2 番目に、私たちの清められた唇から、神様、イエス様を賛美する言葉がでるようになりました。

ヘブル
13:15 ですから、私たちはキリストを通して、賛美のいけにえ、すなわち御名をたたえるくちびるの果実を、神に絶えずささげようではありませんか。

私たちの清められた唇は、イエス様が自分のためにしてくださった十字架の贖いの御業を始めとする、数々の身にあまる恵みをいただいて、感謝と賛美を捧げる言葉を出すことが出来るようになったのであります。

3 番目、私たちの清められた唇は、神様、イエス様に祈る言葉を出すことが出来るようになりました。

詩篇
17:1 主よ。聞いてください、正しい訴えを。耳に留めてください、私の叫びを。耳に入れてください、欺きのくちびるからでない私の祈りを。

このように私たちは、神様、イエス様に向かって自分の心の内にある思い、苦しみ、悩み、悲しみ、あるいは喜びを隠すことなく、素直に唇から出して祈ることができるようになりました。

4 番めに、私たちの清められた唇は、聖書のみことばを口ずさむようになりました。

詩篇
1:1 幸いなことよ。悪者のはかりごとに歩まず、罪人の道に立たず、あざける者の座に着かなかった、その人。
1:2 まことに、その人は主のおしえを喜びとし、昼も夜もそのおしえを口ずさむ。

5 番目に、私たちの清められた唇は、イエス様の福音の良きしらせ、福音を証をする言葉を出すことができるようになりました。

詩篇
40:9 私は大きな会衆の中で、義の良い知らせを告げました。ご覧ください。私は私のくちびるを押えません。主よ。あなたはご存じです。

神様は、イザヤだけではなく、神様の御手すなわちイエス様ご自身のいのちによって、罪が清められ、神様との交わりが回復され、唇が清められたすべての者に対して、その唇をもって、神の救いのメッセージ、福音のメッセージを語り伝えるように心から望んでおられます。

イザヤは、ここに私がおります。私を遣わしてくださいと神様に答えました。しかし、イエス様を信じた私たちは、はたしてイザヤのように言えるでありましょうか。「自分にはとてもできない。自分にはそのような知識も力もない。」としりごみされる方もあるいはおられるのではないでしょうか。けれども、それは違います。

モーセの例を見てみましょう。彼は、神様から「わたしのことばをイスラエルの民に伝えよ。」と言われた時に、彼は「私は舌が重く、ことばの人ではないから。」としり込みをしております。しかし、神様は次のようにモーセに仰せになりました。

出エジプト記
4:11 主は彼に仰せられた。「だれが人に口をつけたのか。だれがおしにしたり、耳しいにしたり、あるいは、目をあけたり、盲目にしたりするのか。それはこのわたし、主ではないか。
4:12 さあ行け。わたしがあなたの口とともにあって、あなたの言うべきことを教えよう。」

このように神様が、清められ開かれたモーセの口に語るべき言葉を主が、神様が教えてくださるのであります。預言者エレミヤの場合もそうでありました。

エレミヤ
1:5 「わたしは、あなたを胎内に形造る前から、あなたを知り、あなたが腹から出る前から、あなたを聖別し、あなたを国々への預言者と定めていた。」
1:6 そこで、私は言った。「ああ、神、主よ。ご覧のとおり、私はまだ若くて、どう語っていいかわかりません。」
1:7 すると、主は私に仰せられた。「まだ若い、と言うな。わたしがあなたを遣わすどんな所へでも行き、わたしがあなたに命じるすべての事を語れ。
1:8 彼らの顔を恐れるな。わたしはあなたとともにいて、あなたを救い出すからだ。――主の御告げ。――」
1:9 そのとき、主は御手を伸ばして、私の口に触れ、主は私に仰せられた。「今、わたしのことばをあなたの口に授けた。

ここでも神様は、エレミヤの口に御手を触れて、彼の口を清められ、神様のメッセージを語れるようにしてくださったのであります。このように、神様は、年齢や舌のなめらかさや聖書の知識の有無や資格や信仰歴の長さなどに関係なく、清めてくださった者の口を神様のメッセージを伝えるために用いられるのであります。

しかし、イエス様によって清められた私たちキリスト者は、いつも自分の口から出す言葉に注意していなければなりません。そのわけは、私たちの唇から出る言葉が、私たちの霊的状態の良し悪しを表すサインとなるからであります。霊がイエス様としっかり結びついていれば、私たちの唇からは清い言葉が出てきます。

けれども、イエス様から少しでも離れますと、たちまち汚れた言葉が出るようになります。これは私自身のことを言っているのです。ヤコブの手紙には次のように記されています。

ヤコブ
3:8 しかし、舌を制御することは、だれにもできません。それは少しもじっとしていない悪であり、死の毒に満ちています。
3:9 私たちは、舌をもって、主であり父である方をほめたたえ、同じ舌をもって、神にかたどって造られた人をのろいます。
3:10 賛美とのろいが同じ口から出て来るのです。私の兄弟たち。このようなことは、あってはなりません。

ヤコブはこのように、イエス様を信じる私たちを戒めております。ここには、嘆かわしいことに、神様を賛美する舌で、主にある兄弟姉妹を裁くキリスト者がいると、ヤコブの手紙に記されているのです。

確かに私たちには、自分の力で舌や唇を制御することはできません。けれども、イエス様にしっかり結びついてさえいれば、御霊が私たちの中に住んでくださっている御霊が働いて、私たちの唇を制御してくださいます。

せっかくイエス様によって清められた私たち信者の唇が、神様を悲しませるような言葉を出して汚されないために、イエス様を信じる私たちは、心して意識してイエス様から離れないようにしっかりと霊の目をイエス様に向け続け、真近に迫ったイエス様のご再臨の日を待ち望みながら、御霊のお導きに従って、日々清められた唇をもって、主を証し、主を賛美し信仰の歩みを歩みたいと切に思うしだいであります。

最後にみことばをお読みして、終わりにいたします。

詩篇
141:3 主よ。私の口に見張りを置き、私のくちびるの戸を守ってください。

63:3 あなたの恵みは、いのちにもまさるゆえ、私のくちびるは、あなたを賛美します。

キリストの花嫁に求められること

2011 年 11 月 29 日、吉祥寺学び会
重田定義

第 2 コリント
11:2 というのも、私は神の熱心をもって、熱心にあなたがたのことを思っているからです。私はあなたがたを、清純な処女として、ひとりの人の花嫁に定め、キリストにささげることにしたからです。
11:3 しかし、蛇が悪巧みによってエバを欺いたように、万一にもあなたがたの思いが汚されて、キリストに対する真実と貞潔を失うことがあってはと、私は心配しています。

おはようございます。

今日は、はからずも、頭の髪の毛の数がだいたい同じくらい程度の兄弟 3 人によって、学びをさせていただく事は大変不思議なことでございます。今、水渡兄に読んでいただきましたこの聖書の箇所は、パウロがコリントの教会の信者に宛てた手紙の中の一節であります。これは、キリストと教会の関係を指しているのと同時に、キリストのみからだなる教会を構成しているひとりひとりの信者と主イエス様との関係を思って、彼が言っているわけであります。

パウロはエペソ人への手紙の 5 章 22 節から 27 節、29 節から 32 節でも、これと同様のことをさらに詳しく解き明かしております。

エペソ
5:22 妻たちよ。あなたがたは、主に従うように、自分の夫に従いなさい。
5:23 なぜなら、キリストは教会のかしらであって、ご自身がそのからだの救い主であられるように、夫は妻のかしらであるからです。
5:24 教会がキリストに従うように、妻も、すべてのことにおいて、夫に従うべきです。
5:25 夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、あなたがたも、自分の妻を愛しなさい。
5:26 キリストがそうされたのは、みことばにより、水の洗いをもって、教会をきよめて聖なるものとするためであり、
5:27 ご自身で、しみや、しわや、そのようなものの何一つない、聖く傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためです。

5:29 だれも自分の身を憎んだ者はいません。かえって、これを養い育てます。それはキリストが教会をそうされたのと同じです。
5:30 私たちはキリストのからだの部分だからです。
5:31「それゆえ、人はその父と母を離れ、妻と結ばれ、ふたりは一心同体となる。」
5:32 この奥義は偉大です。私は、キリストと教会とをさして言っているのです。

このようにですね聖書では、教会と信者との関係を、花婿がキリストであり、花嫁が信者という関係に、あるいはキリストが夫であり、信者が妻であるという夫婦にたとえられております。人と人との交わりの中で、最も親密なものは夫婦でありましょう。したがって、信者がキリストの花嫁にたとえられているということは、信者が主イエス様との最も親しい、人格的な交わりの対象として選ばれているということであります。

しかしながら、私たち信者は、いったいそれにふさわしい者でありましょうか。そうではなくて、私たちは長い間、偶像に、また自分の欲に仕えていたような、霊的に汚れ果てて死んだ者であったと告白せざるを得ません。

エペソ
2:1 あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、
2:2 そのころは、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。
2:3 私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行ない、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。

とある通りであります。しかし、そのような私たちを主は花嫁として、救いの対象に選んでくださり、愛とあわれみをいただき、霊の目が開かれ、神様に対する不従順の罪が示されて、神様の前に心から悔い改めることができました。

その結果、私たちは、十字架の上で流されたイエス様の聖い血潮によって、汚れた罪が洗い清められ、イエス様のよみがえりの命も与えられて、イエス様と共に霊的に新しく生きる者とされるという、考えられないような恵みをいただいたのであります。

エペソ
2:4 しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、
2:5 罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、――あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。――
2:6 キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました。

このようにイエス様は、ご自分の命を捨ててまで私たちを愛してくださって、罪の中に死んでいた私たちをご自分の命によって、霊的に新しく生まれ変わらせて、最も親しい交わりの関係を結んでくださったのであります。

そして、その私たちに、イザヤ書 54 章 10 節にありますように、「たとい山々が移り、丘が動いても、わたしの変わらぬ愛はあなたから移らず、わたしの平和の契約は動かない。」というように、どんな事があっても、わたしの愛は変わらないとイエス様は、約束してくださっておられるのです。

ではイエス様のこのような大きな深いご愛によって、花

嫁とされ妻とされた私たち信者は、はたしてイエス様の良き妻、良き花嫁でありましょうか。自分の信仰を吟味した時に、誰ひとりとして「はい」と答えることはできないのではないでしょうか。

私たちは、相変わらず弱い者であります。悪の誘惑には、心では夫であるイエス様に従いたいと思ってはいても、つい弱さに負けて誘惑に負けて、罪を犯してしまうことを認めざるを得ないのではないでしょうか。

ローマ
7:18 私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が（この善というのは神様の御心に従うこと）住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。
7:19 私は、自分でしたいと思う善を行なわないで、かえって、したくない悪（神様の御心に従わないこと）を行なっています。

7:21 そういうわけで、私は、善をしたいと願っているのですが、その私に悪が宿っているという原理を見いだすのです。
7:22 すなわち、私は、内なる人としては、神の律法を喜んでいるのに、
7:23 私のからだの中には異なった律法(自我と言ってもいいと思います）があって、それが私の心の律法に対して戦いをいどみ、私を、からだの中にある罪の律法のとりこにしているのを見いだすのです。
7:24 私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。

このようにパウロは嘆いておりますけれども、これは私たち信者の嘆きでもあります。けれども、私たちの霊が死んでいた時は、このようなことで、苦しみ悩むことすらなかったということも言えると思うのですね。その時は、私たちは何が悪かということも解からなかった。

従いまして、悪をしたくないという思いすら、当時は浮かんでこなかったのではないでしょうか。しかしながら、十字架の上で流された血によって清められ、生まれ変わった私たちの霊は、何が善か何が悪かを見分けることができるようになりました。そして、悪に誘惑されたと気づいた時にも、夫であるイエス様に助けを求めれば、すぐに助け出してくださるという確信を与えられて、そのように導いてくださるイエス様に心から感謝することができるようになったのではないでしょうか。

先ほど、「私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死のからだから、私を救い出してくれるのでしょうか。」と嘆いたパウロがすぐそれに続いて、「私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。」と感謝しているとおりではないかと思います。

夫であるイエス様は、妻である信者が、弱く愚かであることを、ただお責めにはなりません。それはこの世に置かれている間、私たち信者がなお不完全な弱い肉の体を持っていることを、主はよくご存知だからであります。

しかし、夫である主が、妻である私たち信者に求めておられる事があります。それはご自分に対する真実さ、誠実さ、真実な心であります。詩篇 51 編 6 節に「ああ、あなたは心のうちの真実を喜ばれます。」とあるとおりであります。イエス様は、真実そのもののお方であります。

テモテ第 2 の手紙
2:13 私たちは真実でなくても、彼は（・・・・主イエス様・・・・）常に真実である。彼にはご自身を否むことができないからである。

第 2 コリント
1:19 あなたがたに宣べ伝えた神の子キリスト・イエスは、「しかり。」と同時に「否。」であるような方ではありません。この方には「しかり。」だけがあるのです。

常に変わらない真実なお方、それがイエス様であります。そのイエス様に対して、妻である信者は、不誠実であってはなりません。不真実であってはなりません。裏表があってはなりません。偽善があってはなりません。うわべだけの善行、口先だけの祈りをするような者であってはならないと思います。イエス様は、私たち信者に次のように仰っておられます。

マタイ
6:1 人に見せるために人前で善行をしないように気をつけなさい。そうでないと、天におられるあなたがたの父から、報いが受けられません。
6:2 だから、施しをするときには、人にほめられたくて会堂や通りで施しをする偽善者たちのように、自分の前でラッパを吹いてはいけません。まことに、あなたがたに告げます。彼らはすでに自分の報いを受け取っているのです。

6:5 また、祈るときには、偽善者たちのようであってはいけません。彼らは、人に見られたくて会堂や通りの四つ角に立って祈るのが好きだからです。まことに、あなたがたに告げます。彼らはすでに自分の報いを受け取っているのです。
6:6 あなたは、祈るときには自分の奥まった部屋にはいりなさい。そして、戸をしめて、隠れた所におられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れた所で見ておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。

またイエス様は次のようにも仰っております。

マタイ
6:24 だれも、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません。

夫であるイエス様は、妻である私たち信者にこのように仰っているにもかかわらず、裏表を使い分けしても、イエス様とこの世という二人の夫に仕えても、心に何の痛みをも感じないとすれば、それは夫イエス様に対して、真実な心を失っている証拠であり、夫イエス様に対して、貞潔を失っている証拠であります。

イエス様は、そのような不真実な妻、貞潔を失った妻である信者に対して、「人の子よ。いつまでわたしの栄光を辱め、空しいものを愛し、まやかし物を慕い求めるのか」と嘆かれるのであります。これは詩篇 4 編 2 節にあります。

ずいぶん前になりますけれども、東海大学病院に入院しておられた、一人の老齢の兄弟をお見舞いしたことがあります。この兄弟はすでに天に召されましたけれども、その兄弟が次のようなことを私に話してくださいました。

「自分は若い頃から、父に福音を伝えられていたにもかかわらず、イエス様に対してずっと偽善者であった。主に仕えるふりをして、この世のものを追い求め続けていた。自分は本当に偽善者であった。」とこのように告白をされました。

そして続けて「これから自分がしたい事はただ一つ、主の前に幼子のようになりたいということだけだ。」ということを仰いました。私はこの時、この兄弟の姿にルカの福音書 18 章 13 節にしるされている取税人が胸をたたいて、「神様こんな罪人の私をあわれんでください。」と天を見上げようともしないで、胸をたたいて祈った姿を、そしてまた、同じくルカの福音書 15 章 18 節にしるされている、放蕩息子が「お父さん、私は天に対し罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。もう私はあなたの子と呼ばれる資格はありません。」と言った姿を重ね合わせたことを思いだしました。この兄弟の姿こそ、イエス様の花嫁にふさわしく、整えられた姿ではないでしょうか。

> ホセア
> 14:1 イスラエルよ。あなたの神、主に立ち返れ。あなたの不義がつまずきのもとであったからだ。
> 14:2 あなたがたはことばを用意して、主に立ち返り、そして言え。「すべての不義を赦して、良いものを受け入れてください。私たちはくちびるの果実をささげます。
> 14:3 アッシリヤは私たちを救えません。私たちはもう、馬にも乗らず、自分たちの手で造った物に『私たちの神』とは言いません。みなしごが愛されるのはあなたによってだけです。」

この兄弟は、病気を通して心が砕かれ、悔い改めて、夫イエス様に立ち返ることができ、イエス様に対する、誠実さ、真実な心を回復することができたのだと思います。主は、真実をもって私たち信者を愛してくださいます。

そして主は、私たち信者にも真実な心でご自分を愛することを求めておられます。私たち信者は、自我の思いが砕かれ、御霊によって強められ、清められて、その主イエス様に「はい。私はあなたを心から愛しています。」といつも答えられるような真実と貞潔をもって、夫であるイエス様にお従いできる花嫁、良き妻にしていただけるように、心から祈るしだいであります。

また世の終わりの真近い今の時にあって、主のみからだなる教会を構成する兄弟姉妹、おひとりおひとりがサタンの悪だくみに惑わされることなく、御霊に満たされ清められることによって、私たちの集会が、キリストの花嫁にふさわしく整えられて、まもなくおいでになる花婿イエス様を喜んでお迎えし、天に上げていただくことができるように、そして清く傷のないものとなった集会によって、主のご栄光が輝かされるように、ご一緒にこれからも祈っていきたいと切に思うしだいであります。どうもありがとうございました。

いつも喜んでいなさい

2012 年 3 月 27 日、吉祥寺学び会
重田定義

テサロニケ人への手紙第 I、5 章 16 節-18 節
16 いつも喜んでいなさい。
17 絶えず祈りなさい。
18 すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。

おはようございます。今、司会の兄に読んでいただきましたこのみことば、とくにこの前半の部分ですね、「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべてのことについて、感謝しなさい。」というみことばは、集会の日めくりカレンダーにも載っております。ですから、集会の兄弟姉妹ならば、どなたでもご存知のすばらしいみことばであります。

さて、このことばはパウロがテサロニケ教会に宛てて、主のご再臨に備えて信者はどのような心がまえで日々過ごすべきかを、懇切丁寧にしたためた手紙の中の一節であります。主を信じておられない方でも、このみことばに心を動かされる方がいらっしゃいます。

と同時にですね、いつも喜ぶことなんて、あるいは絶えず祈るなんて、すべてのことに感謝するなんて、そんなことができるのだろうかと疑われる方も多いのではないかと思うのですね。私たち信者であっても、このみことばのすばらしさに感動するとともに、またこれを実践することが容易でないことをも、思い知らされます。

しかし、主はこれを実践するようにと、御自分の尊いいのちをもって救い出された、私たち信者に命じて、望んでおられるのであります。では、私たち信者はどうしたら主のご期待にお応えすることができるのでありましょうか。一つ一つ考えていきたいと思います。

まず、「いつも喜んでいなさい」というみことばでありますが、いつも喜んでいるということは、どんな時にも、それが苦しい時であっても、悲しい時であっても常に喜んでいるということであります。いったいそんなことが出来るのでありましょうか。

そのことを考えるにあたっては、いつも喜ぶことができる喜びとは、いったいどんな喜びであるかということを考えてみる必要があります。

パウロは、キリスト者は何を喜びとするか、イエス様を信じる私たちは、何を喜びとするか、またどうして喜べるのかということについて、ローマ人への手紙 5 章 2 節から 5 節で、次のように言っております。

ローマ人への手紙 5:2-5
2 またキリストによって、いま私たちの立っているこの恵みに信仰によって導き入れられた私たちは、神の栄光を望んで大いに喜んでいます。
3 そればかりではなく、患難さえも喜んでいます。それは、患難が忍耐を生み出し、
4 忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。
5 この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。

このように言っております。パウロはキリスト者は患難さえも喜ぶことができる。それはキリスト者に与えられた聖霊によって、神の愛が注がれ、将来、神の栄光にあずかることが出来るという、確かな希望を持っているからだとここで説明をしているのであります。

このパウロの説明によって、信者の喜びは、この世の人の喜びのような肉的な喜びではなく、霊的な喜びであるということが解かります。パウロはコリント人への手紙第 II、7 章 4 節で「私は慰めに満たされ、どんな苦しみの中にあっても喜びに満ちあふれています。」と言っております。また同じくコリント人への手紙第 II、6 章 10 節では、「悲しんでいるようでも、いつも喜んでおり」と言っています。

パウロは、イエス様に愛され慰められ、支えられている自らの体験を通して、たとえどんなに肉の悲しみ、苦しみがあっても、霊的な喜びはそれをはるかに超えたものであることを、ここで証しをしているのであります。そして彼は、自分だけではなくてすべての信者が主にあって、このようにいつも喜んでいることを主が望んでおられると言っているのであります。

また、パウロはピリピ人への手紙 4 章 4 節で「いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。」とも言っていますけれど、この霊的な喜びは、いつも主にあって、すなわちいつも主とともにいることによって、いつも霊的に主と結びついていることによって、御霊をとおして与えられるものであります。ですから、主から離れていては決して得られない喜びなのであります。そして主は、私たち信者がイザヤ書 43 章 1 節から 3 節において、

イザヤ書 43:1-3
1 だが、今、ヤコブよ。あなたを造り出した方、主はこう仰せられる。イスラエルよ。あなたを形造った方、主はこう仰せられる。「恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。
2 あなたが水の中を過ぎるときも、わたしはあなたとともにおり、川を渡るときも、あなたは押し流されない。火の中を歩いても、あなたは焼かれず、炎はあなたに燃えつかない。
3 わたしが、あなたの神、主、イスラエルの聖なる者、あなたの救い主であるからだ。わたしは、エジプトをあなたの身代金とし、クシュとセバをあなたの代わりとする。

このように主が約束しておられるお約束、すなわち苦しい時にも悲しい時にも、どんな時にも自分を愛してくださる主が守ってくださり、支えてくださるというこの主のお約束を確信して、いつも喜んでいる私たちの姿を、未信者が見ることを通して、主ご自身のご栄光が現される。

私たちの霊的な喜びを通して、主ご自身が栄光を現される。ですから、主は私たちにいつも喜んでいなさいとご命じになっておられるのであります。

次に２番目の「絶えず祈りなさい」というみことばについて、考えたいと思います。

私たちが祈る相手とは、いったい誰でありましょうか。主がどんな方か知らない未信者の人たちは、手当たりしだいに空しい偶像の神に祈ります。けれども私たち信者は違います。

私たちは、信仰によって主から与えられた恵みによって与えられた信仰によって、全知全能の生けるまことの神様、そして私たちの罪をいのちをもって贖ってくださった、御子イエス様を知ることができました。その主なる神様、その主イエス様に祈ることができるということを、私たちが本当に思う時にそれは何と幸いなことではないかと思います。

けれども私たちは、主にいったい何を祈るのでありましょうか。本当の祈りとは何かということについて、ベック兄は、「絶えず祈れ」という本の中で次のように述べておられます。

> 「多くの人々は、祈りとは主に何かを願い求めることであると言います。しかし、本当の祈りとは、主との交わりを持つことなのです。
>
> 多くの人は、祈りとはただ苦しい時だけのものと思っています。たとえば、危険に直面した時とか、重い病気にかかっている時とか、困難に陥っている時とか、全く望みのない状態にいる時、そのような時にだけ祈りが必要だと思っています。
>
> しかし、祈りとは、それ以上のものです。祈りとは、主に拠り頼むこと、主から離れては何もできないと知ること、そして主に信頼することを意味しています。
>
> 祈りとは主との交わりです。つまり祈りとは、主に対して一方的に語るのではなく、主とともに語る。つまり主と語り合うことなのです。
>
> 祈りとは、私たちが欲しい物を主に強制することではなく、私たちが主の御心を知り、私たち自身を主に明け渡し、主の御心が成就することです。」

このようにベック兄は述べておられます。

サムエル記第Ⅰ、３章９節では、サムエルが主に次のように祈っております。「主よ。お話しください。しもべは聞いております。」、主に祈るには、この態度が必要であります。

しかし、私たち信者が絶えず祈らなければならない、主が命じておられる、それはいったいどういう理由でありましょうか。それは、先ほどもベック兄が仰っているように、祈りを通して信者は主と絶えず霊的な交わりをしなければならないからであります。

ある兄弟が、メッセージの中で次のように言われました。「祈りは霊的な呼吸のようなものである。人間は呼吸をしないと窒息して死んでしまうのと同じように、絶えず祈らないと私たちの霊は、窒息して死んでしまうのです。」とこのように言われました。全くそのとおりだと思います。

主に救われ、サタンに属する者から主に属する者と変えられた私たち信者の肉のからだは、天の御国に入ることを許されるまでは、サタンに支配されているこの世に置かれております。サタンは、主に属する者とされた信者をイエス様から引き離して、再び自分の支配下に置こうとさまざまな手を用いて、絶えず誘惑してきます。

このサタンに勝つ唯一の方法は、絶えず主と霊的な交わりを持つこと、絶えず霊において主に祈ることであります。また、サタンは地上に置かれた生ける主のみからだなる教会を憎み、教会が主のご栄光を輝かすことを阻止しようと必死で攻撃してきます。そして、その攻撃の的は、主のみからだを構成している一人ひとりの信者に向けられます。

そのためにも私たち信者は、絶えず主と交わり、絶えず主に祈り、霊的な力に満たされている必要があります。そしてパウロは、エペソ人への手紙６章 18 節で

> エペソ人への手紙 6:18
> 18 すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい。そのためには絶えず目をさましていて、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい。

と勧めておりますが、そのとおり私たちは、自分のためだけではなくて、主のみからだなる集会を構成している、愛するすべての兄弟姉妹が守られるように、一つになるようにと絶えず霊の目を覚まし、忍耐の限りを尽くし、御霊によって祈り続けなければなりません。

３番目は、「すべてのことについて感謝しなさい」ということについて、少し考えてみたいと思います。

すべてのことについて感謝するとは、いったいどういうことなのでありましょうか。また誰に対して感謝するのでありましょうか。

すべてのこととは、良いことも悪いこともすべてであります。人間は、良いことすなわち自分にとって良いことがあった時、たとえば苦しんでいた自分やあるいは家族の病気が直った時、働きたくても仕事が見つからないで困っていたのが、やっと就職できた時などに心に感謝の思いが生じます。

今回の東日本大震災でも、愛する家族を失い、家を失い、仕事を失って悲しんでいる被災者の人たちは、全国からまた世界中から多くの支援の手が伸べられたことを、口々に感謝しておられます。

このように、感謝というのは、一般的に自分に良くしてく

れた人、自分を助けてくれた人、励ましてくれた人、支えてくれた人、そういう方々に対して向けられるのが普通であります。

では人間は、自分にとって嫌なこと、自分にとって悪いと思われることや自分を苦しい目に辛い目に悲しい目に合わせた人に、いったい感謝できるでありましょうか。そんなことはとうてい常識では考えられません。考えることはできません。

一方、信者にとって感謝する相手とは、人間ではない。主なる神様、イエス様であります。では信者は主に何を感謝するのでありましょうか。

信者は、主の愛と恵みに感謝するのであります。主の愛と恵みによって救われたことを感謝します。主の愛と恵みによって死に打ち勝つ永遠のいのちを与えられたことを感謝します。主の愛と恵みによって、天国の国籍が与えられていることを感謝します。主の愛と恵みによって、日々守られていることを感謝します。

このように私たち信者は、主が良くしてくださったことを感謝します。けれども、私たちは自分にとって、自分の肉にとって悪いことでもあるいは不幸せと思われた時でも、苦しい時でも悲しい時でも主に感謝するでしょうか。

しかし、なかなかこれはできません。それが現実であります。けれども、主はすべてのことについて、すなわち苦しい時にも悲しい時にも感謝するようにと、私たちに望んでおられるのであります。

これは、私たちの肉が砕かれ、霊の目が開かれていなければ、霊の目がいつも主にしっかりと注ぎ続けていなければ、あるいは主に自分をすべて明け渡していなければ、主に全き信頼をおいていなければ、そして主を心から愛していなければできないことであります。パウロは、ローマ人への手紙 8 章 28 節で

> ローマ人への手紙 8:28
> 28 神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。

と彼が言っておりますように、私たち信者が主を心から愛するならば、主はすべてのことを益と変えてくださると、確信することができます。

私たちがすべてのこと、苦しみも痛みも、私を愛してくださる主からくる、患難をも働かせて益としてくださると主に心から信頼するからこそ主に感謝できるのであります。そして主は、信者がそのようにご自分に感謝ができるようにと、信者に試練を与えて信者の頑なな自我を砕いてくださるのであります。

> ヘブル人への手紙 12:5-7、10-11
> 5 そして、あなたがたに向かって子どもに対するように語られたこの勧めを忘れています。「わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。
> 6 主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。」
> 7 訓練と思って耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです。父が懲らしめることをしない子がいるでしょうか。
> 10 なぜなら、肉の父親は、短い期間、自分が良いと思うままに私たちを懲らしめるのですが、霊の父は、私たちの益のため、私たちをご自分の聖さにあずからせようとして、懲らしめるのです。
> 11 すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。

このように主の懲らしめは、主から来る試練は、主が信者を愛するがゆえに与えられるものであって、ご自分の聖さにあずからせるためのものであると、試練の意味を信者に説明しております。

> 詩篇 119:71
> 71 苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。

このように苦しみに会ったことを主に感謝しております。

> イザヤ書 38:17
> 17 ああ、私の苦しんだ苦しみは平安のためでした。あなたは、滅びの穴から、私のたましいを引き戻されました。あなたは私のすべての罪を、あなたのうしろに投げやられました。

と主に感謝しております。

> 詩篇 66:10-12
> 10 神よ。まことに、あなたは私たちを調べ、銀を精練するように、私たちを練られました。
> 11 あなたは私たちを網に引き入れ、私たちの腰に重荷を着けられました。
> 12 あなたは人々に、私たちの頭の上を乗り越えさせられました。私たちは、火の中を通り、水の中を通りました。しかし、あなたは豊かな所へ私たちを連れ出されました。

このように主に感謝しております。これらのように、苦しみをも感謝できるというのは、試練という主の訓練によって、私たちの肉の心が自我が砕かれて、どんな場合にも主が自分を愛してくださっているという確信を持つことができた結果、主を無条件に信頼することができ、自分のすべてを主に委ねることができたからであります。

しかし、このように感謝できるのは、この詩篇の作者やイザヤだけではありません。私たちは、この詩篇の作者やイザヤと同じように大きな患難にあっても、それを感謝して受け入れておられる集会の多くの兄弟姉妹方の証しを知っております。

このようにすべてのことを感謝することができる信者を通して、主はご自身のご栄光を現されるのであります。

主のご再臨の真近いことが、ますます明らかになっております今の時にあって、私たち信者は、「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべてのことについて感謝しなさい」と強く私たちに望んでおられるその主のご期待にそえるように、御霊によって満たされ、強められ、支えられていつも喜び、絶えず祈り、すべてのことを感謝するそのような信仰生活を通して、まだイエス様をご存知ない多くの方々に、主を証しすることができ、これによって、主ご自身がご栄光を現されるようにと切に祈るしだいであります。

主に信頼することは信仰生活のすべて

2012 年 4 月 10 日、吉祥寺学び会
重田定義

エレミヤ
17:5 主はこう仰せられる。「人間に信頼し、肉を自分の腕とし、心が主から離れる者はのろわれよ。
17:6 そのような者は荒地のむろの木のように、しあわせが訪れても会うことはなく、荒野の溶岩地帯、住む者のない塩地に住む。
17:7 主に信頼し、主を頼みとする者に祝福があるように。
17:8 その人は、水のほとりに植わった木のように、流れのほとりに根を伸ばし、暑さが来ても暑さを知らず、葉は茂って、日照りの年にも心配なく、いつまでも実をみのらせる。

おはようございます。今、和田兄が読んでいただきましたみことばから、今日は、私たち信者にとって主に信頼することは、信仰生活のすべてと言ってもよいほど大切だということを、聖書からご一緒に考えてみたいと思います。

私たち信者は、私たちを愛してくださる主なる真の神様に背いて生きてきたことが、神様に犯した大変恐ろしい滅びに至る罪であり、そして自分の力ではその罪を決して拭い去ることはできないということを知って、心から悔い改め、その罪を身代わりに負って十字架にかかってくださった神の御子のイエス様を、救い主として信じ救われた者であります。これが主を信じるということであります。

けれども主を信じた者がすべて主に信頼しているでありましょうか。本当はそうでなければならないし、主もそれを望んでおられるのですけれども、必ずしもそうとは言い切れないのが現実の私たちの姿ではないかと思うんですね。これに関してよく知られたエピソードを挙げてみたいと思います。

マタイ
14:22 それからすぐ、イエスは弟子たちを強いて舟に乗り込ませて、自分より先に向こう岸へ行かせ、その間に群衆を帰してしまわれた。
14:23 群衆を帰したあとで、祈るために、ひとりで山に登られた。夕方になったが、まだそこに、ひとりでおられた。
14:24 しかし、舟は、陸からもう何キロメートルも離れていたが、風が向かい風なので、波に悩まされていた。
14:25 すると、夜中の三時ごろ、イエスは湖の上を歩いて、彼らのところに行かれた。
14:26 弟子たちは、イエスが湖の上を歩いておられるのを見て、「あれは幽霊だ。」と言って、おびえてしまい、恐ろしさのあまり、叫び声を上げた。
14:27 しかし、イエスはすぐに彼らに話しかけ、「しっかりしなさい。わたしだ。恐れることはない。」と言われた。
14:28 すると、ペテロが答えて言った。「主よ。もし、あなたでしたら、私に、水の上を歩いてここまで来い、とお命じになってください。」
14:29 イエスは「来なさい。」と言われた。そこで、ペテロは舟から出て、水の上を歩いてイエスのほうに行った。
14:30 ところが、風を見て、こわくなり、沈みかけたので叫び出し、「主よ。助けてください。」と言った。
14:31 そこで、イエスはすぐに手を伸ばして、彼をつかんで言われた。「信仰の薄い人だな。なぜ疑うのか。」
14:32 そして、ふたりが舟に乗り移ると、風がやんだ。
14:33 そこで、舟の中にいた者たちは、イエスを拝んで、「確かにあなたは神の子です。」と言った。

ペテロをはじめとしたこの弟子たちの船の中にいた弟子たちの姿は、まさに私たち信者の姿そのものではないかと思うのですね。弟子たちは、それまでイエス様がなさった数々の癒しの奇跡や、5 つのパンと 2 匹の魚で 5000 人に食事を与えられた奇跡を、目の当たりに見て、イエス様が人にはできない偉大な力を持っておられるということは知っておりました。

しかしながら彼らはまだ、このイエス様に信頼しお委ねはしていなかったのですね。イエス様が強いて弟子たちだけを船に乗せて先に行かせたのは、彼らが試練に会った時にどれほどご自分を信頼していのかを試そうとお考えになったのではないかと思います。またイエス様が一人山に登って祈られたのは、弟子たちが試練に会っても、ご自分を信頼することができるようにという切なる祈りではなかったでしょうか。しかしながら、弟子たちはそのイエス様の期待を裏切ってしまったのであります。

神様に選ばれたイスラエルの民もそうでありました。彼らは、エジプトを脱出する時からカナンの地に入るまで、そしてその後も何度となく、奇跡的な神様の救いの御業を体験しましたけれども、それにもかかわらず、その神様に信頼しておりませんでした。神様は預言者イザヤを通して彼らに次のように警告を与えました。

イザヤ
30:15 神である主、イスラエルの聖なる方は、こう仰せられる。「立ち返って静かにすれば、あなたがたは救われ、落ち着いて、信頼すれば、あなたがたは力を得る。」しかし、あなたがたは、これを望まなかった。
30:16 あなたがたは言った。「いや、私たちは馬に乗って逃げよう。」それなら、あなたがたは逃げてみよ。

冒頭に読んでいただきましたエレミヤ書 17 書 5 節から 8 節に挙げたみことばは、主がそのようなイスラエルの民に、預言者エレミヤを通して与えられた戒めのみことばでありました。私たち信者も同じではないでしょうか。

イエス様を信じたと言っても、いざ自分の上に何か困難や災難が起こると、イエス様に信頼しイエス様に委ねて、その困難に立ち向かうのではなくて、自分の肉によって解決しようとして失敗し、結局はイエス様に助けを求めるような信仰の薄い者なのではないでしょうか。このように信仰の歩みの失敗は、主に信頼しない事から、主に祈らないことから、主を少しでも疑うことから生じると言ってもいいのではないかと思います。

イエス様は、主に信頼していない者の信仰の姿を、岩の上に落ちた種のたとえで仰っておられます。

ルカ
8:11 このたとえの意味はこうです。種は神のことばです。

8:13 岩の上に落ちるとは、こういう人たちのことです。聞いたときには喜んでみことばを受け入れるが、根がないので、しばらくは信じていても、試練のときになると、身を引いてしまうのです。

一方、主に信頼した信仰の人の記事は聖書にたくさん見られます。その中のいくつかの例を挙げたいと思います。まずアブラハムについてであります。

ローマ
4:19 アブラハムは、およそ百歳になって、自分のからだが死んだも同然であることと、サラの胎の死んでいることとを認めても、その信仰は弱りませんでした。
4:20 彼は、不信仰によって神の約束を疑うようなことをせず、反対に、信仰がますます強くなって、神に栄光を帰し、
4:21 神には約束されたことを成就する力があることを堅く信じました。

このようにして与えられた息子がイサクでありました。しかし、さらにアブラハムの信仰は、主によって試されます。神様は、アブラハムにそのイサクを生贄として捧げよと命じられたのですね。それを聞いた時、彼はどんなに驚いたのでありましょう。けれども彼は、神様を疑うことなく、従順に神様の命令に従って、息子を生贄として捧げようとしました。それは彼が、徹底的に主に信頼していたからであります。

ヘブル
11:17 信仰によって、アブラハムは、試みられたときイサクをささげました。彼は約束を与えられていましたが、自分のただひとりの子をささげたのです。
11:18 神はアブラハムに対して、「イサクから出る者があなたの子孫と呼ばれる。」と言われたのですが、
11:19 彼は、神には人を死者の中からよみがえらせることもできる、と考えました。それで彼は、死者の中からイサクを取り戻したのです。

イスラエルの王のダビデもサウル王や自分の息子にさえも、命をねらわれるなどの波乱に満ちた人生でありましたけれども、生涯、主に信頼し続けた人であります。彼の賛美の歌に次のようなものがあります。

詩篇
62:5 私のたましいは黙って、ただ神を待ち望む。私の望みは神から来るからだ。
62:6 神こそ、わが岩。わが救い。わがやぐら。私はゆるがされることはない。
62:7 私の救いと、私の栄光は、神にかかっている。私の力の岩と避け所は、神のうちにある。
62:8 民よ。どんなときにも、神に信頼せよ。あなたがたの心を神の御前に注ぎ出せ。神は、われらの避け所である。

そしてまた、有名なダビデの詩篇 23 篇

23:1 主は私の羊飼い。私は、乏しいことがありません。

23:4 たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。あなたが私とともにおられますから。

このようにダビデは、主に信頼し自分の命を主に委ねております。しかし、どうしてこのように主に信頼することができるのでありましょうか。パウロは、テモテ第 2 の手紙 1 章 12 節で次のように言っております。「自分の信じて来た方をよく知っており、また、その方は私のお任せしたものを、かの日のために守ってくださることができると確信しているからです。」とこのように証しをしております。パウロがイエス様を心から信頼していることが、この証しからよーく解かります。そして、パウロがこのように主を信頼するに至ったことを理解するためには、パウロの次の告白が役に立つのではないかと思うのですね。

第 1 テモテ 1 章
1:13 私は以前は、神をけがす者、迫害する者、暴力をふるう者でした。それでも、信じていないときに知らないでしたことなので、あわれみを受けたのです。

1:15 「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた。」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。

パウロが言っておりますように、彼がキリスト者を迫害していた時に、主の御霊によって霊の目が開かれ、主との霊的な劇的な出会いをした結果、彼の自我が粉々に砕かれて、自分は罪人のかしらであるということを心から知って、悔い改めることができました。そして、その自分の罪を救うために十字架にかかって、いのちを捨ててまで愛してくださった、そのイエス様に心から信頼し、それから殉教の死を遂げるまでの生涯をイエス様にお委ねして生きたのであります。

イエス様に霊的な出会いをする前の彼は、すでに秀でた律法学者として世間に知られた人であり、もちろん聖書の知識に精通しておりました。しかし、主はその彼をそのままで器としてお用いになることはなさらなかった。彼の自我を砕いて弱めてからお用いになったのであります。パウロには、苦しみを伴う持病があって、彼を悩ませ続けましたけれども、彼はその苦しみを主が自分の自我を砕いて主に信頼し、自分を主に明け渡すために、主から与えられたものと受け止めて主に感謝することができたのであります。こ

れについてパウロは次のように言っております。

第 2 コリント
12:7 そのために私は、高ぶることのないようにと、肉体に一つのとげを与えられました。それは私が高ぶ

ることのないように、私を打つための、サタンの使いです。
12:8 このことについては、これを私から去らせてくださるようにと、三度も主に願いました。
12:9 しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。
12:10 ですから、私は、キリストのために、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです。

このように彼は自分に与えられた試練を受け止めたのであります。そしてその通りに彼は、自分の知恵を用いて主の福音を述べ伝えることをせず、主にお委ねし御霊に導かれるままに、イエス様を証ししました。

これについてパウロは次のように言っています。

第 1 コリント
2:1 さて兄弟たち。私があなたがたのところへ行ったとき、私は、すぐれたことば、すぐれた知恵を用いて、神のあかしを宣べ伝えることはしませんでした。
2:2 なぜなら私は、あなたがたの間で、イエス・キリスト、すなわち十字架につけられた方のほかは、何も知らないことに決心したからです。

イエス様は、ご自分を信じた者を、弟子として福音を伝えるようにと望んでおられます。しかし、主の御名を使いながら、イエス様に信頼せずに自分の知恵や力により頼み、福音を伝えたり、人を導いたりして、それを自分の功績としてひそかに誇り、高ぶるような信者に対しては、主はまことに厳しい態度をお取りになります。

なぜならば、そのような救いの業は、導く人自身に栄光を帰することになり、主ご自身がご栄光を表されないからであります。ですからそのような信者に対しては、主はマタイ伝 7 章 21 節から 23 節で

7:21 わたしに向かって、『主よ、主よ。』と言う者がみな天の御国にはいるのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行なう者がはいるのです。
7:22 その日には、大ぜいの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行なったではありませんか。』
7:23 しかし、その時、わたしは彼らにこう宣告します。『わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。』

このように大変厳しい態度をお取りになるのであります。ベック兄はよく救われるためには、イエス様に「ごめんなさい」「ありがとう」「よろしく」と言えばいいんだよと仰います。たしかにその通りであります。

けれども、大変簡単なだけに、うっかすると私たちは、その意味を軽く考えることがないでしょうか。私たちは、パウロのようにイエス様に心の底から「ごめんなさい」と自分の犯した主に対する罪を知って、主の前に心砕かれて悔い改めたのでありましょうか。そしてパウロのように自分の罪を身代わりに負って十字架にかかって死んでくださるほどに、自分を愛してくださったイエス様に心の底から「ありがとうございます」と感謝を捧げたでありましょうか。

もしそうであれば、それ以後の歩み、信仰の歩みは「すべて主にお委ねしますから、どうかよろしくお導きください」と自分の人生をすべて主に信頼し、お任せしお捧げして主に従って歩むことができます。しかしながら、もし口先だけで、あるいはうわべだけの「ごめんなさい、よろしく、ありがとう」であれば、先ほど申しましたように、岩の上に落ちた種のように、何か自分の上に困難が起こると、たちまちイエス様に「よろしく」と言ったことも忘れて、恐れおののいたり、あわてふためいたりしてしまうのではないのでしょうか。

「ごめんなさい、ありがとう、よろしく」には、このように重い意味があるという事を、私たちは知っていなければならないと思います。主は、救われた私たちをご自分の器として用いようと考えておられます。しかし、主の器としてふさわしいのは、立派な器でもない、形の良い器でもありません。器の大きさや形ではなくて、欠け多き土の器であっても空の器こそが、イエス様の望んでおられる器なのであります。中に詰まっている自分自身の思いを捨てた空の器でなければ、御霊なるイエス様をお入れすることができないから、そしてその器を主がお用いになって、主がお働きになる事ができないからであります。

主がパウロの自我をお砕きになるために取られた処置も、そのためであったのであります。自我が砕かれたパウロは、次のように証しをしております。

ガラテヤ
2:20 私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる（信頼する）信仰によっているのです。

このように証しをしておりますけれども、ご再臨の真近い今の時にあって、私たち信者の罪にまみれた古き人を、ご自身の十字架の御業によって、葬り去ってくださり、よみがえりのいのちによって新しい歩みをするように、生まれ変わらせてくださった主に全き信頼を置いて、すべてをお委ねする事によって、主が私たちをご自分の器として用いてくださり、ご栄光を表されるようにと切に望むしだいであります。

最後に冒頭の読んでいただいたみことばの後半をもう一度お読みして終わりたいと思います。

エレミヤ
17:7 主に信頼し、主を頼みとする者に祝福があるように。
17:8 その人は、水のほとりに植わった木のように、流れのほとりに根を伸ばし、暑さが来ても暑さを知らず、葉は茂って、日照りの年にも心配なく、いつまで

も実をみのらせる。

御心を知るに鈍くならにように

2012 年 6 月 12 日、吉祥寺学び会
重田定義

> マラキ書 1 章 2 節
> 2「わたしはあなたがたを愛している。」と主は仰せられる。あなたがたは言う。「どのように、あなたが私たちを愛されたのですか。」と。「エサウはヤコブの兄ではなかったか。――主の御告げ。――わたしはヤコブを愛した。

司会者に読んでいただきましたみことばに記されているマラキ書というのは、預言者のマラキを通して主がイスラエルの民に啓示されたメッセージが記されている、旧約聖書の最後の書であります。この書に記されている神様とイスラエルの民との間に交わされた対話によりまして、私たちはイザヤ書 55 章の 9 節に「天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。」とありますように、神様の深い御心を知るのにうとい鈍感な人間と、その人間に対する神様の愛と戒めというものを身近に、マラキ書から感じることができるのであります。そこで今日は、マラキ書からこのことについてさらにご一緒に学んでいきたいと思います。

まず第一に、神様の愛についてのイスラエルの民のにぶさ、鈍感さであります。マラキ書 1 章 2 節に、神様が「わたしはあなたがたを愛している」と仰いました。それに対してイスラエルの民はにぶかったのですね。「どのように愛してくださっているのか」と、神様の御心を理解できなかったのですね。そして今申しましたように「どのように、あなたが私たちを愛されたのですか。」と聞きかえしております。それに対して神様は、「エサウはヤコブの兄ではなかったか。わたしはヤコブを愛した。」、兄のエサウではなくて、弟のヤコブを愛したということを、はっきりとお話になったのですね。そして、神様の選びによる愛が、人間の思いを超えたものであるということを、ここでお告げになりました。

エサウとヤコブについては、創世記 25 章、27 章に詳しく記されておりますので、ちょっとお話いたしますと、イサクと妻のリベカの祈りに応えられた神様は、不妊の彼女に二人の子を身ごもるようになさったんですね。そして、お腹の中でぶつかり合う子供を心配した彼女の祈りに応えられた神様は、「二つの国があなたの胎内にあり、二つの国民があなたから分かれ出る。一つの国民は他の国民より強く、兄が弟に仕える。」と仰せになったのであります。そして最初に生まれた子は、赤くて全身が毛に覆われていたエサウでありました。エサウというのは、赤く毛深いという意味なのですが、そういう名前をつけられた。後から出てきた子は、手でエサウの兄のかかとをつかんで出てきたので、ヤコブと名づけられた。ヤコブというのは、かかとをつかむという意味だそうであります。二人は性格も異なり、兄のエサウは、粗野で単純であり、弟のヤコブは、気が弱く、ずる賢い人間に成長しました。

弟のヤコブは、ある時、狩猟からお腹をすかせて帰ってきた兄のエサウが、食べ物を要求した時に、長子の権利をすぐに自分に譲るなら、食物をあげようと言って、その長子の権利をエサウから奪って行ってしまいます。また、ヤコブは年老いて目が見えなくなった父のイサクを騙して、兄のエサウのふりをして、長子としての祝福をお父さんから受けてしまいます。長子の権利と祝福というのは、神の民とされたイスラエルの民にとって、たいへん大きな特権なんですね。そのような特権を与えられているにもかかわらず、その価値よりもお腹がすいて食物の方に価値を認めた兄のエサウにも、大変な問題がありますけれども、そういう権利を騙して奪い取るというヤコブにも、我々は頭をかしげてしまうんですが、どうしてそういうふうなヤコブをお母様は、イサクの跡継ぎ、言い換えますと、イスラエル民族のリーダーに選ばれたのでありましょうか。

それは、二人がまだ母リベカの胎内にいる時から、兄は弟に仕えると神様が定めておられた。そのように一方的な神様のお考えによる選びなのであります。イスラエルの民に対する神様の選びについて、神様がイスラエルを愛して、ご自分の民として選ばれたということは、申命記 7 章 7 節にもあります。「主があなたがたを恋い慕って、あなたがたを選ばれたのは、あなたがたがどの民よりも数が多かったからではない。事実、あなたがたは、すべての国々の民のうちで最も数が少なかった。」とこのように書かれたいます通りに、神様のお考えに基づいた選びによるご愛というのは、イスラエルの民だけではなくて、御子イエス様において、私たちすべての人間にあまねく示されているのであります。

> ヨハネの手紙第一、4:9-10
> 9 神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。
> 10 私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。

けれども、イスラエルの民ばかりではなく、私たち信者でも、信仰の歩みにおいて、何か自分にとって不都合な問題が生じた時、あるいは苦難に出会った時などには、その主の御心を理解することができないで、鈍感にも「どのように、あなたが私たちを愛されたのですか。」と言うように主のご愛を疑うことがありはしないでしょうか。けれどもヘブル人への手紙 12 章 5 節から 7 節

> ヘブル人への手紙 12:5-7
> 5 そして、あなたがたに向かって子どもに対するように語られたこの勧めを忘れています。「わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。
> 6 主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。」
> 7 訓練と思って耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです。父が懲らしめることをしない子がいるでしょうか。

みことばを通して、そしてまた御霊の導きによって、私たちの霊の目が覚まされ、私たちのような愚かな者をも救いの対象に、一方的に選んでくださっていたということを、私たちは知って本当に私たちの思いをはるかに超えた主のご愛が、自分に注がれているんだなということを知

って、私たちは主のご愛を疑った自分の鈍感さを悔い改めて、心から主に感謝して、改めてどんな時にも主に信頼して、自分に与えられた信仰の道を歩んで行こうと決意を新たにするのではないかと思います。次に、主に対する捧げ物について、イスラエルの民の鈍感さであります。

マラキ書 1:6-8
6「子は父を敬い、しもべはその主人を敬う。もし、わたしが父であるなら、どこに、わたしへの尊敬があるのか。もし、わたしが主人であるなら、どこに、わたしへの恐れがあるのか。――万軍の主は、あなたがたに仰せられる。――わたしの名をさげすむ祭司たち。あなたがたは言う。『どのようにして、私たちがあなたの名をさげすみましたか。』と。
7 あなたがたは、わたしの祭壇の上に汚れたパンをささげて、『どのようにして、私たちがあなたを汚しましたか。』と言う。『主の食卓はさげすまれてもよい。』とあなたがたは思っている。
8 あなたがたは、盲の獣をいけにえにささげるが、それは悪いことではないのか。足なえや病気のものをささげるのは、悪いことではないのか。さあ、あなたの総督のところにそれを差し出してみよ。彼はあなたをよみし、あなたを受け入れるだろうか。――万軍の主は仰せられる。――

では主が喜ばれるような捧げ物とは、いったいどんな捧げ物でしょうか。主は、どのような捧げ物を私たちに求めておられるのでしょうか。その例を聖書から見てみたいと思います。

創世記 4:1-5
1 人は、その妻エバを知った。彼女はみごもってカインを産み、「私は、主によってひとりの男子を得た。」と言った。
2 彼女は、それからまた、弟アベルを産んだ。アベルは羊を飼う者となり、カインは土を耕す者となった。
3 ある時期になって、カインは、地の作物から主へのささげ物を持って来た。
4 また、アベルは彼の羊の初子の中から、それも最良のものを、それも自分自身で、持って来た。主は、アベルとそのささげ物とに目を留められた。
5 だが、カインとそのささげ物には目を留められなかった。それで、カインはひどく怒り、顔を伏せた。

ここで注目すべきは、アベルは最良のささげ物を自分自身で持ってきたのであります。

創世記 22:1-2
1 これらの出来事の後、神はアブラハムを試練に会わせられた。神は彼に、「アブラハムよ。」と呼びかけられると、彼は、「はい。ここにおります。」と答えた。
2 神は仰せられた。「あなたの子、あなたの愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。そしてわたしがあなたに示す一つの山の上で、全焼のいけにえとしてイサクをわたしにささげなさい。」

アブラハムは、ひとり子のイサクを主にささげたのであります。

ミカ書 6:6-7
6 私は何をもって主の前に進み行き、いと高き神の前にひれ伏そうか。全焼のいけにえ、一歳の子牛をもって御前に進み行くべきだろうか。
7 主は幾千の雄羊、幾万の油を喜ばれるだろうか。私の犯したそむきの罪のために、私の長子をささげるべきだろうか。私のたましいの罪のために、私に生まれた子をささげるべきだろうか。

このように問いかけております。これらのみことばによりまして、私たちは、主の御心が自分にとって一番大切なもの、自分にとって最も価値のあるものをささげるようにと、私たちに求めておられるということを知るのであります。すなわち、主が喜ばれるささげものとは、私たちが心から主を第一としているということを示すものでなければならないのであります。ところが、イスラエルの祭司は、鈍感にも総督でさえも喜んで受け取らないような、傷物をささげ、しかも『どのようにして、私たちがあなたの名をさげすみましたか。』『どのようにして、私たちがあなたを汚しましたか。』と神様に反論いたしました。聖なる主なる神に対する何という鈍感さでありましょうか。あきれ果てるばかりであります。

しかし、私たち信者もこれと似たように、主の御心をないがしろにしているようなささげものをしていることがありはしないでしょうか。創世記に出てくるカインのように、またルカの福音書の 18 章のパリサイ人のように、主の御心にかなわないささげものをただ形式的に習慣的に、主にささげているのに、鈍感にも気がつかないのではないでしょうか。パウロは、主にささげるささげ物について、ローマ人への手紙 12 章 1 節で次のように言っております。

ローマ人への手紙 12:1
1 そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。

ローマ人への手紙 6:13
13 また、あなたがたの手足を不義の器として罪にささげてはいけません。むしろ、死者の中から生かされた者として、あなたがた自身とその手足を義の器として神にささげなさい。

これらのみことばによって、主が喜ばれる私たちのささげ物、主の御心にかなう私たちのささげ物とは、霊的な礼拝であり、それは主によって聖められ、義の器とされた私たち自身であることを知るのであります。次に偶像礼拝についての、イスラエルの民の鈍感さであります。

マラキ書 2:13-16
13 あなたがたはもう一つのことをしている。あなたがたは、涙と、悲鳴と、嘆きで主の祭壇をおおっている。主がもうささげ物を顧みず、あなたがたの手から、それを喜んで受け取らないからだ。
14「なぜなのか。」とあなたがたは言う。それは主が、あなたとあなたの若い時の妻との証人であり、あなた

がその妻を裏切ったからだ。彼女はあなたの伴侶であり、あなたの契約の妻であるのに。
15 神は人を一体に造られたのではないか。彼には、霊の残りがある。その一体の人は何を求めるのか。神の子孫ではないか。あなたがたは、あなたがたの霊に注意せよ。あなたの若い時の妻を裏切ってはならない。
16「わたしは、離婚を憎む。」とイスラエルの神、主は仰せられる。「わたしは、暴力でその着物をおおう。」と万軍の主は仰せられる。あなたがたは、あなたがたの霊に注意せよ。裏切ってはならない。

イスラエルの民は、何度となく偶像と結婚してしまっているのですね。

申命記 5:7-9
7 あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。
8 あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の下の水の中にあるものでも、どんな形をも造ってはならない。
9 それらを拝んではならない。それらに仕えてはならない。あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神、わたしを憎む者には、父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし、

この神様の戒めを破って偶像に仕え、偶像と結びあうという罪を犯し重ねてまいりました。マラキ書で主は、結婚を例にとって、神様が建てられた結婚の秩序を乱す離婚は許されないと、イスラエルの民が神様の戒めを破って、異教の神に仕える、異教の神と結婚するというようないわゆる偶像礼拝を厳しく非難されて、そのような者からのささげ物は、どんなに懇願しても受け取らないと拒まれました。けれどもイスラエルの民は、鈍感にもその御心が解からないで、何故なのかと首をかしげるのであります。イスラエルの民の霊的な鈍感さがここにも見られます。しかし、私たちも似たような事をしているのではないでしょうか。

エペソ人への手紙 5 章 5 節で、パウロは、エペソの教会の信者に対して「あなたがたがよく見て知っているとおり、不品行な者や、汚れた者や、むさぼる者――これが偶像礼拝者です。」と書いておりますけれども、偶像とは、形のあるものに限らず、むさぼりや貪欲など、私たちが心を奪われるこの世の物すべてが含まれてまいります。そしてパウロは、そのような物に心を奪われる者を、偶像礼拝者と言っているのであります。そして、私たち信者もまだ残っている肉の性質のゆえに、気を緩めると知らず知らずにこのような偶像礼拝に陥る危険があるのであります。次に主なる神様のご支配を疑い、神様に仕えることの意義を疑うイスラエルの民の鈍感さについてであります。

マラキ書 2:17
17 あなたがたは、あなたがたのことばで主を煩わした。しかし、あなたがたは言う。「どのようにして、私たちは煩わしたのか。」「悪を行なう者もみな主の心にかなっている。主は彼らを喜ばれる。さばきの神はどこにいるのか。」とあなたがたは言っているのだ。

このように非難を神様はしておられます。

マラキ書 3:13-15
13「あなたがたはわたしにかたくななことを言う。」と主は仰せられる。あなたがたは言う。「私たちはあなたに対して、何を言いましたか。」
14 あなたがたは言う。「神に仕えるのはむなしいことだ。神の戒めを守っても、万軍の主の前で悲しんで歩いても、何の益になろう。
15 今、私たちは、高ぶる者をしあわせ者と言おう。悪を行なっても栄え、神を試みても罰を免れる。」と。

このようなとんでもないことを言っております。ヨブにも似た記事があるのですね。

ヨブ記 21:14-15
14 しかし、彼らは神に向かって言う。「私たちから離れよ。私たちは、あなたの道を知りたくない。
15 全能者が何者なので、私たちは彼に仕えなければならないのか。私たちが彼に祈って、どんな利益があるのか。」と。

このようなことをつぶやいているのです。イスラエルの民は、全能者にしてすべての被造物の主権者であられる神様に対して、鈍感にもそのご支配を疑うという神様を無視した、無神経きわまる態度を示しました。これに対して主は次のようにお応えになりました。

マラキ書 3:1-2
1「見よ。わたしは、わたしの使者を遣わす。彼はわたしの前に道を整える。あなたがたが尋ね求めている主が、突然、その神殿に来る。あなたがたが望んでいる契約の使者が、見よ、来ている。」と万軍の主は仰せられる。
2 だれが、この方の来られる日に耐えられよう。だれが、この方の現われるとき立っていられよう。まことに、この方は、精練する者の火、布をさらす者の灰汁のようだ。

マラキ書 3:6-7
6 主であるわたしは変わることがない。ヤコブの子らよ。あなたがたは、滅ぼし尽くされない。
7 あなたがたの先祖の時代から、あなたがたは、わたしのおきてを離れ、それを守らなかった。わたしのところに帰れ。そうすれば、わたしもあなたがたのところに帰ろう。

このように仰っておられます。ここで、主なる神様は、イスラエルの民に対して、やがてご自分の使者、これは後にバプテスマのヨハネにおいて成就されますけど、その使者を自分の道を整えるために遣わしている。その後、あなた方が尋ね求めている主、あなた方がのぞんでいる契約の使者、すなわちイエス様ですね。イエス・キリストが神様にたいする不義を清める火としておいでになる、それは誰も耐えられないような激しいものである。しかし、イスラエルの民の全てを滅ぼし尽くすことが自分はしない。主の掟を離れ、それを守らなかったことを悔い改めて、自分に立ち返れば、赦そうとここで仰せになったので

あります。一方、主なる神様は、イスラエルの民のうちで、ご自分を恐れ尊ぶ人々の声に耳を傾けられて、その声を聞かれて次のように祝福を約束なさっておられます。

マラキ書 3:16-18
16 そのとき、主を恐れる者たちが、互いに語り合った。主は耳を傾けて、これを聞かれた。主を恐れ、主の御名を尊ぶ者たちのために、主の前で、記憶の書がしるされた。
17「彼らは、わたしのものとなる。――万軍の主は仰せられる。――わたしが事を行なう日に、わたしの宝となる。人が自分に仕える子をあわれむように、わたしは彼らをあわれむ。
18 あなたがたは再び、正しい人と悪者、神に仕える者と仕えない者との違いを見るようになる。

マラキ書 4:1-2
1 見よ。その日が来る。かまどのように燃えながら。その日、すべて高ぶる者、すべて悪を行なう者は、わらとなる。来ようとしているその日は、彼らを焼き尽くし、根も枝も残さない。――万軍の主は仰せられる。――
2 しかし、わたしの名を恐れるあなたがたには、義の太陽が上り、その翼には、癒しがある。あなたがたは外に出て、牛舎の子牛のようにはね回る。

このように仰っておられますね。主を恐れ尊ぶ者に対する何という希望に満ちた、ありがたい主のお約束でありましょうか。

以上、ご一緒にマラキ書から、神様の御心ににぶいイスラエルの民と、それに対する神様の愛とあわれみに満ちた戒めを学んでまいりました。そしてこの学びは、自分の罪を贖うために十字架にかかってくださったイエス様を主として、心から信じた結果、恵みとしてイエス様の僕とされた私たちの信仰にも生かされなければならないのであります。それはイエス様が、御心に鈍感な弟子のペテロに対して厳しく戒められたことからも解かります。よく知られている箇所ですが、マタイの福音書 16 章、

マタイの福音書 16:21-23
21 その時から、イエス・キリストは、ご自分がエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、そして三日目によみがえらなければならないことを弟子たちに示し始められた。
22 するとペテロは、イエスを引き寄せて、いさめ始めた。「主よ。神の御恵みがありますように。そんなことが、あなたに起こるはずはありません。」
23 しかし、イエスは振り向いて、ペテロに言われた。「下がれ。サタン。あなたはわたしの邪魔をするものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」

ペテロに与えられたこの叱責は、主の御心に鈍感な、主の御心を知るのににぶい私たち信者に与えられたものでもある、というふうに受け止める必要があります。ご再臨が間近い今の時にあって、私たちはこの主のご愛に満ちた叱責を心から感謝し、御心に鈍感になって主を悲しませ、嘆かせることのないように、そのためにいつも御心に敏感にお応えしながら、忠実に主に従って行くことができますように、霊の目と耳を常に主に向け続けて、御霊に満たされ導かれて主を証しする信仰の歩みを力強く続けていきたいと、心から念願するしだいであります。最後にみことばをお読みして終わります。

エペソ人への手紙 5:15-17
15 そういうわけですから、賢くない人のようにではなく、賢い人のように歩んでいるかどうか、よくよく注意し、
16 機会を十分に生かして用いなさい。悪い時代だからです。
17 ですから、愚かにならないで、主のみこころは何であるかを、よく悟りなさい。

コロサイ人への手紙 1:9
9 どうか、あなたがたがあらゆる霊的な知恵と理解力によって、神のみこころに関する真の知識に満たされますように。

神の役に立つ帯、立たぬ帯

2012 年 11 月 27 日、吉祥寺学び会
重田定義

エレミヤ書 13 章
13:1 主は私にこう仰せられた。「行って、亜麻布の帯を買い、それを腰に締めよ。水に浸してはならない。」
13:2 私は主のことばのとおり、帯を買って、腰に締めた。
13:3 すると、私に次のような主のことばがあった。
13:4 「あなたが買って腰に着けているその帯を取り、すぐ、ユーフラテス川へ行き、それをそこの岩の割れ目に隠せ。」
13:5 そこで、主が私に命じられたように、私は行って、それをユーフラテス川のほとりに隠した。
13:6 多くの日を経て、主は私に仰せられた。「すぐ、ユーフラテス川へ行き、わたしが隠せとあなたに命じたあの帯を取り出せ。」
13:7 私はユーフラテス川に行って、掘り、隠した所から帯を取り出したが、なんと、その帯は腐って、何の役にも立たなくなっていた。
13:8 すると、私に次のような主のことばがあった。
13:9 「主はこう仰せられる。わたしはユダとエルサレムの大きな誇りを腐らせる。
13:10 わたしのことばを聞こうともせず、自分たちのかたくなな心のままに歩み、ほかの神々に従って、それに仕え、それを拝むこの悪い民は、何の役にも立たないこの帯のようになる。
13:11 なぜなら、帯が人の腰に結びつくように、わたしは、イスラエルの全家とユダの全家をわたしに結びつけた。——主の御告げ。——それは、彼らがわたしの民となり、名となり、栄誉となり、栄えとなるためだったのに、彼らがわたしに聞き従わなかったからだ。

今日は、兄弟に読んでいただきましたこの箇所から、「神の役に立つ帯、立たない帯」とはどういうものかということにつきまして、ご一緒に考えてみたいと思います。

イスラエル民族は自分たちが、天地万物をお造りになり、そしてお造りになったものをすべて所有しておられる全能者にして、生ける唯一のまことの神に選ばれた民であるという誇りを持っております。その根拠は、神様が多くの民族の中から、自分たちを選んで契約を結んでくださったというところから来ております。

この契約とは、神様のお仰せに従って、イスラエルの民を率いてエジプトを脱出した指導者のモーセを通して、神様がイスラエルの民と結ばれた契約であります。これについて、出エジプト記 19 章には次のように記しております。

出エジプト記 19 章
19:1 エジプトの地を出たイスラエル人は、第三の月の新月のその日に、シナイの荒野にはいった。
19:2 彼らはレフィディムを旅立って、シナイの荒野にはいり、その荒野で宿営した。イスラエルはそこで、山のすぐ前に宿営した。
19:3 モーセは神のみもとに上って行った。主は山から彼を呼んで仰せられた。「あなたは、このように、ヤコブの家に言い、イスラエルの人々に告げよ。
19:4 あなたがたは、わたしがエジプトにしたこと、また、あなたがたをわしの翼に載せ、わたしのもとに連れて来たことを見た。
19:5 今、もしあなたがたが、まことにわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るなら、あなたがたはすべての国々の民の中にあって、わたしの宝となる。全世界はわたしのものであるから。
19:6 あなたがたはわたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる。これが、イスラエル人にあなたの語るべきことばである。」
19:7 モーセは行って、民の長老たちを呼び寄せ、主が命じられたこれらのことばをみな、彼らの前に述べた。
19:8 すると民はみな口をそろえて答えた。「私たちは主が仰せられたことを、みな行ないます。」それでモーセは民のことばを主に持って帰った。

神様とイスラエルの民との間に交わされた契約とは、具体的には神様がモーセに授けられた「わたしだけを神として仕えよ。」で始まる十戒に基づいております。そして、これを契約のしるしとしてイスラエルの民にお与えになりました。けれども、神様がイスラエルの民と結ばれた契約には、「あなたがたが、まことにわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るなら」という条件がはっきりと示されていたのであります。

神様と契約を結ぶということは大変な名誉なことであります。と同時に契約にありますように、神様の仰せに従順に従わなければならないという、大変な責任をも負うことになります。しかしながら、イスラエルの民は、「私たちは主が仰せられたことを、みな行ないます。」と誓ったことなど忘れ果てて、この契約を破り続けてしまいました。このため神様は、預言者のエレミヤを通して次のように仰せになりました。

エレミヤ書 11 章
11:9 ついで、主は私に仰せられた。「ユダの人、エルサレムの住民の間に、謀反がある。
11:10 彼らは、わたしのことばを聞こうとしなかった彼らの先祖たちの咎をくり返し、彼ら自身も、ほかの神々に従って、これに仕えた。イスラエルの家とユダの家は、わたしが彼らの先祖たちと結んだわたしの契約を破った。」

このようにイスラエルの民は、神様と交わした契約を破って、頑なな心で自分たちが作った偶像の神々を拝み、これに仕えるという罪を犯し続けたのであります。それゆえに神様は、冒頭のみことばのように、イスラエルの民を腐った帯、役に立たない帯と厳しく糾弾なさいました。

帯というのは、腰に締めている時にこそ役に立ちます。帯が体から離れていれば、その帯がどんなに美しくても、またどんなに丈夫でも、帯としての用は全く役に立ちません。神様は、イスラエルの民がご自分にしっかり結びついていれば、役に立つ帯として、ご自分の栄光を現すように御用に用いられたんですけれども、彼らが神様から離れたために、神様から腐った帯としか評価されなくなってしまったのであります。

その後、神様はかつてモーセを通してイスラエルの民と結ばれた契約とは別に、さらに優れた契約を、イスラエルの民を含むすべての人間に対してお立てになりました。これについて、ヘブル書 8 章 6 節～13 節に次のように記してあります。

8:6 しかし今、キリストはさらにすぐれた務めを得られました。それは彼が、さらにすぐれた約束に基づいて制定された、さらにすぐれた契約の仲介者であるからです。
8:7 もしあの初めの契約が欠けのないものであったなら、後のものが必要になる余地はなかったでしょう。
8:8 しかし、神は、それに欠けがあるとして、こう言われたのです。「主が、言われる。見よ。日が来る。わたしが、イスラエルの家やユダの家と新しい契約を結ぶ日が。
8:9 それは、わたしが彼らの先祖たちの手を引いて、彼らをエジプトの地から導き出した日に彼らと結んだ契約のようなものではない。彼らがわたしの契約を守り通さないので、わたしも、彼らを顧みなかったと、主は言われる。
8:10 それらの日の後、わたしが、イスラエルの家と結ぶ契約は、これであると、主が言われる。わたしは、わたしの律法を彼らの思いの中に入れ、彼らの心に書きつける。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。
8:11 また彼らが、おのおのその町の者に、また、おのおのその兄弟に教えて、『主を知れ。』と言うことは決してない。小さい者から大きい者に至るまで、彼らはみな、わたしを知るようになるからである。
8:12 なぜなら、わたしは彼らの不義にあわれみをかけ、もはや、彼らの罪を思い出さないからである。」
8:13 神が新しい契約と言われたときには、初めのものを古いとされたのです。年を経て古びたものは、すぐに消えて行きます。

このようにヘブル書には書いてあります。

初めの契約とは、神からいただいた掟である律法を守るなら、神様は、義すなわち正しいと認めるけれども、守らないなら罪と認めて滅びに定めるというものでありました。しかし、自分の行ないによっては神様の与えてくださった律法を、正しく守り通すことができない、そのような人間を憐れまれた神様は、御子のイエス様を仲介者として、新しい契約をお立てになったのであります。

この新しい契約は、律法を行なうことによってではなく、仲介者であるイエス・キリストを信じる信仰によって、神様が義としてくださるという神の一方的な恵みによる契約であります。その意味で初めの古い契約と全く異なる、それよりもはるかに優れたものと言えるのではないかと思います。けれども、この新しい契約を神様と結ぶには、神様に対する罪を清めなければなりません。そのためには、神の御子イエス様の尊い血潮が必要でありました。

イエス様は、十字架にかかられる直前に、弟子たちに次のように仰っています。

マタイ伝 26 章
26:26 また、彼らが食事をしているとき、イエスはパンを取り、祝福して後、これを裂き、弟子たちに与えて言われた。「取って食べなさい。これはわたしのからだです。」
26:27 また杯を取り、感謝をささげて後、こう言って彼らにお与えになった。「みな、この杯から飲みなさい。
26:28 これは、わたしの契約の血です。罪を赦すために多くの人のために流されるものです。

神様は、2000 年前にこのイエス様の尊い血による新しい契約を、イスラエルの民だけではなく、すべての民すべての人と結ぶご契約をお立てになりました。したがって、自分の罪が赦されるために、神の御子のイエス様が、十字架にかかって血を流して死んでくださったと、心から信じた者は一人残らず、この契約に基づいて、神の民、神の子とされるのであります。

このようにして、新しい契約によって、神の民とされた者は、誰にでも最初に読んでいただいたみことばが適用されます。すなわち、父なる神様と御子イエス様は、イエス様を信じる者をもご自分の帯として用いようとされるのであります。しかしながら、イエス様はご自分の帯としてどのような帯をお選びになったのでありましょうか。それは神様が、イスラエルの民をご自分の帯にお選びになったのと、全く同じ基準でありました。

神様がイスラエルの民をお選びになったのは、彼らが強い民であり、また優れた民であったからではなく、むしろその逆でありました。申命記 7 章 7 節に「主があなたがたを恋い慕って、あなたがたを選ばれたのは、あなたがたがどの民よりも数が多かったからではない。事実、あなたがたは、すべての国々の民のうちで最も数が少なかった。」とあるとおりであります。

では私たち信者はどうでしょうか。これについてパウロは、次のように言っております。

第 1 コリント
1:26 兄弟たち、あなたがたの召しのことを考えてごらんなさい。この世の知者は多くはなく、権力者も多くはなく、身分の高い者も多くはありません。
1:27 しかし神は、知恵ある者をはずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者をはずかしめるために、この世の弱い者を選ばれたのです。
1:28 また、この世の取るに足りない者や見下されている者を、神は選ばれました。すなわち、有るものをない者のようにするため、無に等しいものを選ばれたのです。
1:29 これは、神の御前でだれをも誇らせないためです。

イエス様は、ご自分の帯を選ばれるのに、外観や強度を問題にはなさいませんでした。すなわち、人間の能力、知力、権力、財力、努力などを選びの基準とはなさいませんでした。その理由は、ここにありますように、「神の御前でだれをも誇らせないため。」であります。イエス様がご自分の帯として選ばれた私たち信者に求められることは、ただ一つ、「わたしに結びついていなさい。」という

ことだけであります。イエス様は、ぶどうの木のたとえでもこのことを、私たちに教えてくださっています。

ヨハネ伝
15:4 わたしにとどまりなさい。わたしも、あなたがたの中にとどまります。枝がぶどうの木についていなければ、枝だけでは実を結ぶことができません。同様にあなたがたも、わたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。
15:5 わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わ
たしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わ
たしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。
15:6 だれでも、もしわたしにとどまっていなければ、枝のように投げ捨てられて、枯れます。人々はそれを寄せ集めて火に投げ込むので、それは燃えてしまいます。

イエス様は、「わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。だれでも、もしわたしにとどまっていなければ（言い換えますと、イエス様に結びついていなければ）枝のように投げ捨てられて、枯れます。」と仰っています。

イエス様は、神様から遠く離れていた愚かな私たちに目を留めてくださって、一人ひとりをお選びになって、十字架の血によってご自分と結びあわせてくださいました。こうして私たち信者は、イエス様の枝とされ帯とされたのであります。枝も帯も自分では主人公になることはできません。

帯は自分では何もすることができないからであり、また主人から離れれば、帯はやがて腐ってしまうようなものにすぎないのであります。もし、私たち信者がイエス様の帯であることを忘れて、イエス様から離れて何かをしようとすれば、それは自分が主人公となって、自分の考えや自分の知恵で動くことになり、そのような行ないは決して実を結ぶものとはならないのであります。

岩の割れ目に隠した帯が、腐って役に立たなくなったこのエピソードは、マタイの福音書の 25 章にある旅に出る時に、主人から預かったお金を、地の中に隠しておいた僕のたとえを思い出させるものであります。

マタイ伝
25:24 ところが、一タラント預かっていた者も来て、言った。『ご主人さま。あなたは、蒔かない所から刈り取り、散らさない所から集めるひどい方だとわかっていました。
25:25 私はこわくなり、出て行って、あなたの一タラントを地の中に隠しておきました。さあどうぞ、これがあなたの物です。』
25:26 ところが、主人は彼に答えて言った。『悪いなまけ者のしもべだ。私が蒔かない所から刈り取り、散らさない所から集めることを知っていたというのか。
25:27 だったら、おまえはその私の金を、銀行に預けておくべきだった。そうすれば私は帰って来たときに、利息がついて返してもらえたのだ。
25:28 だから、そのタラントを彼から取り上げて、それを十タラント持っている者にやりなさい。』
25:29 だれでも持っている者は、与えられて豊かになり、持たない者は、持っているものまでも取り上げられるのです。
25:30 役に立たぬしもべは、外の暗やみに追い出しなさい。そこで泣いて歯ぎしりするのです。

この僕は、主人の心を理解していなかったために、言い換えますと主人の心と結びついていなかったために、自分勝手な考えでお金を地面の中に隠すという愚かな行為をして、そのために主人から役に立たない僕というふうに叱責されてしまったのであります。

冒頭に読んでいただいたみことばで、ユーフラテスの川岸の岩の間に、長いこと隠した帯が腐って、役に立たなくなってしまっているのを、エレミヤにお見せになった神様は、13 章 9 節から 10 節ですね。「わたしはユダとエルサレムの大きな誇りを（すなわちこわたしのことばを聞こうともせず、自分たちのかたくなな心のままに歩み、ほかの神々に従って、それに仕え、それを拝むこの悪い民は、何の役にも立たないこの帯のようになる。」と仰せになりました。

これは、私たち信者に与えられた主の警告でもあります。私たち信者は、主の僕として主のために、奉仕や伝道に励みます。しかし、私たちの奉仕も伝道も、もし自分の知恵や自分の力でするならば、イエス様からご覧になれば、実を結ばないもの、役に立たないものとなってしまうのであります。

なぜならば、それは意識するしないにかかわらず、結果的に自分を誇るようになり、イエス様にご栄光を帰することにならないからであります。イエス様の帯とされた私たち信者は、ただイエス様にしっかり結びついていればよいのであります。そうすれば、たとえその人が、重い病気で寝たきりで動くこともできない、あるいは口をきくこともできなくても、帯のご主人であるイエス様が働いてくださり、その人を通してイエス様のご栄光が現され、イエス様からその帯は大いに役立っていると、喜んでいただけるのであります。

私たち信者は、イエス様から罪の赦しと永遠のいのちという考えられないような恵みをいただいております。その上イエス様は、私たち信者をご自分の大切な帯として用いようとしておられるのであります。何と光栄なことではありませんか。それなのに、私たちはともすればそれを忘れて、イエス様から離れて一人歩きしてしまうような愚かな者ではないでしょうか。

主のご再臨の真近い終わりの世にあって、私たち信者は、腐った帯、あるいは枯れた枝とならないために、イエス様から決して離れないように、しっかりとイエス様に結びつき、御心に従い、主のお役に立つ帯としての歩みができるように、いつも御霊によって祈ることが大切であると思わされたしだいであります。

キリスト者の戦い

2013 年 7 月 20 日、御代田よろこびの集い
重田定義

エペソ 6 章 12 節
「私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。」

今、読んでいただきましたエペソの手紙 6 章 12 節「私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。」こういうパウロのエペソ人への手紙の一節から「キリスト者の戦い」「信仰の戦い」と言ってもいいですが、それについてご一緒に考えて見たいと思います。

同じくエペソ 2 章 1 節から 3 節においてパウロは、イエス様を信じる以前の私たちがそうであったように、この世に住む人々はすべて知らずにサタンに支配されて、神様に背を向けて自分の思いのままに生きている、それがすべての人間の生き方であると言うふうに書いてあります。お読みします。

エペソ 2 章 1～3 節
「あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、そのころは、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子ら（即ち、神様に従わない子ら）の中に働いている霊（悪霊、悪魔）に従って、歩んでいました。私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行ない、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。」

サタンはかつてはこのように自分の支配下にあった私たち信者が、イエス様を信じてからは、主に属する者とされていることを非常に怒りまして、私たちを憎んでおります。なぜならば、サタンは自分を裁くために、サタンを裁くために来られたイエス様を憎んでおられるからです。ですから、私たちを、神様（イエス様）から何とか引き離して、再び自分の支配下に置こうというふうに思って、あの手この手を使って、私たちの隙をねらって日々攻撃をしかけてまいります。イエス様は弟子たちに次のようにおっしゃいました。

ヨハネの福音書 15 章 18～19 節
「もし世が‥‥

この世というのは、この世の支配者であるサタンとその支配下にあるこの世の人々を指しています。

‥‥あなたがたを憎むなら、世はあなたがたよりもわたしを先に憎んだことを知っておきなさい。もしあなたがたがこの世のものであったなら、世は自分のものを愛したでしょう。しかし、あなたがたは世のものではなく、かえってわたしが世からあなたがたを選び出したのです。それで世はあなたがたを憎むのです。」

これはもちろん弟子たちのみならず、イエス様を信じた私たちに対するみことばでもあります。私たちキリスト者の霊は、イエス様を信じる以前は、罪に汚れて死んだようになっておりましたために正しく働くことはできませんでした。けれども、イエス様を信じた瞬間にイエス様が十字架の上で流された清い血潮によって清められ、そして新しく生まれ変わったことによって正しく働くようになりました。その結果、私たちを愛していのちを捨ててくださったそのイエス様に心から従いたい、お仕えしたい、と願うようになったのであります。けれども、このように生きている私たちキリスト者は霊だけで生きていく訳には参りません。

パウロがローマ書 7 章 18～19 節
「私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。（‥‥この善というのは、神様を第一として生きる、生きて従うということでありますけれど‥‥）私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。私は、自分でしたいと思う善を行わないで、かえってしたくない悪（‥‥自分を第一にして自分の欲に従うこと‥‥）を行なっています。」

と嘆いております。

そのように、この世に生きている間は、なお私たちは肉の思いに振り回されることが多くて、その弱点をサタンは突いてくるのであります。以上のことから、この世に生きるキリスト者の敵というのは、この世とそしてこの世を支配するサタンであり、また、私たち自身の肉の思い、肉の欲望であると言うことができると思います。そして、私たちキリスト者は、私たちをイエス様から離れさせ、堕落させ、再び自分の奴隷にしようと攻撃してくるこれらの敵と戦うのであります。

私たちキリスト者にとって、最大の敵、最も恐ろしい敵であるサタンについて、ペテロは初代教会の信者に宛てた手紙の中で、キリスト者の敵であるサタン悪魔が、襲いかかる隙をねらって私たちの回りを歩き回っているから、サタンに襲われないために、いつも目を覚ましていなさい、目を覚ましてガードを固めていなさい、と私たちを励ましております。

1 ペテロ 5 章 8～9 節
「身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたえけるししのように、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。堅く信仰に立って、この悪魔に立ち向かいなさい。ご承知のように、世にあるあなたがたの兄弟である人人は同じ苦しみを通って来たのです。」

悪魔は、誰もが悪魔と気づくような姿、形や方法で私たちキリスト者に近づいてくるわけではりません。光の天使をよそおったり、聖書のみことばを逆用するなど、様々な策略を用いて攻撃してくる恐ろしい敵なのです。ですから、私たちキリスト者は、つかの間も油断することはできません。

また、ヨハネはキリスト者の敵であるこの世と自分の肉とについてヨハネ第 1 の手紙 2 章 15 節から 16 節で次の

ように警告しています。

1ヨハネ2章15～16節
「世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません。すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです。」

と警告しております。

先ほども申し上げましたように、この世は悪魔の支配下にあり、肉の欲望を満たすことを第一に考えて生きている人を、権力や富や名誉という肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などのえさで誘惑するばかりで、人々が互いに争ったり、憎しみあったりして、苦しみ悲しむことを自分の喜びとしております。

けれども、また私たちキリスト者も又この世に生きている間はまだ不完全な肉の衣を着ているが為に、悪魔はキリスト者のこの弱い肉の部分を突いてより激しく攻撃をしてくるのであります。ヤコブが国外に散っていたユダヤ人のキリスト者に書いた手紙には次のように書かれています。

ヤコブ4章1～4節
「何が原因で、あなたがたの間に戦いや争いがあるのでしょう。あなたがたのからだの中で、戦う欲望が原因ではありませんか。あなたがたが、ほしがっても自分のものにならないと、人殺しをするのです。うらやんでも手にいれることができないと、争ったり、戦ったりするのです。あなたがたのものにならないのは、あなたがたが願わないからです。願っても受けられないのは、自分の快楽のために使おうとして、悪い動機で願うからです。貞操のない人たち。世を愛することは神に敵することであることがわからないのですか。世の友となりたいと思ったら、その人は自分を神の敵としているのです。」

このように言っております。

このようにヤコブはキリスト者が自分たちの敵である悪魔と戦うのではなく、逆に悪魔の策略に惑わされてキリスト者同士が互いに憎み合い、争い合うという悲劇が起こるということを、彼は手紙で戒めているのです。

よく私たちキリスト者は、未信者からキリスト者同士が争うのはどういうわけですか？キリスト者の国同士が戦いをするのはどういうわけですか？何故、愛と平和を信条にしているキリスト者が互いに殺し合い、争い合うのですか？という質問をよく受けます。

このような争いこそキリスト者の心の中にある肉の欲に働く悪魔の惑わしによるものであり、この世の人々に、キリスト者同士の争い合い、憎しみ合う姿を見せつけることによって人々をつまずかせ、神様から引き離そうとする悪魔の策略なのです。

また、まだ救われていない私たちキリスト者の家族も、又、悪魔の支配化にあって、この世の目に見えるものだけを求めて生きている人々に彼らも属しております。ですから、悪魔はこれらのキリスト者の家族がイエス様を信じないように必死になって私たちが家族に福音を伝えることを妨害します。これも、私たちキリスト者に課せられた大変大きな、そして、重要な戦いなのではないでしょうか。イエス様はこのことについて次のようにおっしゃっておられます。

マタイ10章34～36節
「わたしが来たのは地に平和をもたらすためだと思ってはなりません。わたしは、平和をもたらすために来たのではなく、剣をもたらすために来たのです。なぜなら、わたしは人をその父に、娘をその母に、嫁をそのしゅうとめに逆らわせるために来たからです。さらに、家族の者がその人の敵になります。」

大変厳しいみことばであります。ここで「平和」とおっしゃっているのは、神様からもたらされた神様からいただく「平和」ではなくて、この世の一時的な表面的な「平和」であります。

私たちキリスト者は心情的には自分の愛する家族が敵だと決して思いたくないんですね。ですから、イエス様の福音を伝えること、イエス様を証しすることによって、家族のこの世的な平和が乱されること、家族が破壊されることを恐れます。そして、つい、この世に属する、また、この世に属している者である家族と妥協してしまうということも少なくはないのではないでしょうか。

この世に属している家族と妥協すると一口でいってもいろいろな場合があると思います。

たとえば、福音を伝えようとしても耳をかさない夫や子供の態度に出会うと諦めてしまってイエス様に真剣に家族の救いを祈らなくなってしまうこともあるでしょう。あるいは、日々の生活の中で、主からの知恵をいただいて御霊に導かれて家族に福音を伝えるという努力を怠ってしまうということもあるでしょう。

また具体的には、親族の葬儀の時に親族に妥協してしまって焼香してしまったり、あるいは家族に同調して仏壇や神棚を拝んでしまったり、あるいは未信者との結婚を承諾してしまう、そういう風な具体的な様々な問題、主のみこころに反する問題はいろいろあると思います。

けれども、はっきりと主の側に立つことをしないで、家族とのこの世的な平和を壊さないように、そのために福音を伝える大切なこの戦いを恐れて家族と妥協を続けている限り、家族は救われません。

まず、聖書に「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」（使徒16章31節）という有名なみことばがあります。けれども、うっかりしますと、このみことばを私たちは思い違いして受け取ってしまうことがあるのではないでしょうか。

「自分が信じているのだから、自然に家族も救われる。戦わないでただ待っていればいいんだ。」もしそういう風に思っておられるキリスト者があれば、それは思い違い

であります。このみことばの真意はそうではない。

このみことばは家族が救われるためには、まず、まずですね、自分がイエス様を心から信頼すること、イエス様のお約束を心から信頼すること、ここから始まるのであります。そして、家族の救いを信じて真剣に祈り続ける、その真剣な祈りを、主がみこころにかなうものとして聞き入れて下さるから家族が救われるのであります。

自分が信じれば、自然に何もしなくても自動的に家族が救われるということではないのではないと思います。もし、愛する家族が救われなければ一体どうなるでしょう。主の救いの御手を拒み続ければ永遠の滅びに行くしかないのであります。ですから、愛する家族が救われるために、たとえ信仰のゆえに家族との間に一時的に戦いが起こっても妥協することなくイエス様の側にしっかりと立って御霊により頼んで家族に臨むことが必要であるということ、またそれが家族に対する本当の愛であることを、イエス様は、家族の間に剣を投げ込むために来たということばでおっしゃっているのであります。

パウロは不信者との妥協を戒めて、コリントの信者宛ての手紙の中で次のように書いております。

2コリント6章14～17節
「不信者と、つり合わぬくびきをいっしょにつけてはいけません。正義と不法とに、どんなつながりがあるでしょう。光と暗やみとに、どんな交わりがあるでしょう。キリストとベリアル（即ち悪魔）とに、何の調和があるでしょう。信者と不信者とに、何のかかわりがあるでしょう。神の宮と偶像とに、何の一致があるでしょう。私たちは生ける神の宮なのです。神はこう言われました。『わたしは彼らの間に住み、また歩む。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。それゆえ、彼らの中から出て行き、彼らと分離せよ、と主は言われる。』」

この中で主がキリスト者に、彼らの中から出て行き（未信者の中から出て行き）、彼らと分離せよ、（未信者というのは不信者、不信仰な者といっていいかも知れませんが）とおっしゃっているのは、いうまでもなく、救われていない家族と一緒に住んではいけないという意味ではないですね。未信者の家族と霊的に妥協してはいけないとおしゃっているのであります。

先程も申し上げましたが、救われていない家族はサタン悪魔の支配化にあります。自分ではそれと気がつかないで悪魔にそそのかされ、あやつられて、私たちキリスト者に反抗したり、敵対するまことに気の毒な人たちなのであります。ですから、神様は私たちの救われていない家族を憐れんでくださって、先に恵みによって救われた私たちを用いて救おうとしておられるのであります。

そういう意味で、救われていない家族が私たちキリスト者の敵なのではなくて、本当の敵は、一番先にお読みしたみことばにありますように、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊であることを、私たちキリスト者はしっかりわきまえていることが大切であります。

愛するが故にこそ、私たちキリスト者は、救われていない家族に対して安易に妥協せずにその背後にいる悪魔に対して毅然とした態度をとるのであります。このことを私たちは常にしっかりと覚えて家族の救いを確信しつつ、日々真剣に主に祈ることを主は望んでおられるのではないでしょうか。では、私たちはどんな方法で、敵であるこの世の支配者サタンや自分の欲望と戦ったらよいのでありましょうか。パウロはこれについてエペソの手紙の中で具体的に次のように書いております。エペソ6章11節と14節から18節までお読みいたします。エペソ6章11節「悪魔の策略に対して立ち向かうことができるために、神のすべての武具を身に着けなさい。」

エペソ6章14～18節
「腰には真理の帯を締め、胸には正義の胸当てを着け、足には平和の福音の備えをはきなさい。これらすべてのものの上に、信仰の大盾を取りなさい。それによって、悪い者（悪魔）が放つ火矢を、みな消すことができます。救いのかぶとをかぶり、また御霊の与える剣である、神のことばを受け取りなさい。すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい。」

これこそが、私たちキリスト者に与えられている武具であり、私たちはこの武具を身に着けて戦うのであります。これらの武具はいずれもこの世の武具とは全く異なりますけれども、パウロが2コリント10章4節「私たちの戦いの武器は、肉の物ではなく、神の御前で、要塞をも破るほどに力のあるものです。」

と言っておりますように、これらの神様から与えられた武具こそ信仰の戦いによる不可欠な力ある武器、武具であります。けれども、この武具を身に着ける前に私たちが敵と戦うためになすべき大切なことがあります。それは私たち自身の心構えであります。

その心構えとはいったい何でありましょうか。ひとつは、私たちがイエス様とともに信仰の戦いを戦う兵士であるという心構えであります。パウロは愛する同労者のテモテに宛てた手紙の中で次のように書いております。

2テモテ2章3～4節
「キリストイエスのりっぱな兵士として、私と苦しみをともにしてください。兵役についていながら、日常生活のことに掛かり合っている者はだれもありません。それは徴募した者（イエス様）を喜ばせるためです。」

私たちは果たしてイエス様への心構えができているでありましょうか。もし私たちがイエス様の兵士ならば、戦いの最中にこの世に心を向けている暇がある筈がありません。そんなことをしていれば戦いに負けてしまいます。従って私たちはイエス様の兵士として信仰の戦いに臨むからには日常生活のことなど決して思い煩うまいという堅い心構えが必要であります。第1コリント9章27節で次のようにパウロは言っております。

第1コリント9章27節
「私は自分のからだを打ちたたいて従わせます。」

これが私たちの日常生活を決して思い煩わないための心構えではないでしょうか。私たちが意識して自分の肉の思い、欲望を抑えるという心構え、これは、自分のからだを打ちたたいて従わせるほどの覚悟が必要であります。

しかしながら、これも悲しいことに自分の意思で出来ないということも痛いほど経験しております。一体どうしたら自分の欲望を抑えることができるのでありましょうか。それには秘訣があります。パウロはガラテヤ人の２章 20 節に次のように書いております。

ガラテヤ２章 20 節
「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。」

このようにですね、私たちはまず自分の古い人、古い自分というのはすでにイエス様とともに十字架に架けられて死んだというこの事実をしっかり自覚することであります。そして、次に、じゃ、今の自分はどうなのか、今の自分は、自分の中に住んでくださっているイエス様の御霊によって生きているんだ、自分ではなく、イエス様の御霊によって生かされているんだという確信と決意をしっかり持つこと、これが必要であります。

これは自分を主に明け渡すという決意でもあります。この決意をもって、どうか私の欲望が抑えられますようにと心から切に祈れば、必ず、私たちの中に住まわれる主の御霊ご自身が働いてくださって、御霊によって自分では成し得ない欲望の抑制が可能となるのであります。

これまで、私たちキリスト者が何故戦わなければならないのか、そして、また、誰と戦うのかということにつきまして、ご一緒に考えてまいりました。そして私たちの敵は、悪魔と、悪魔に支配されているこの世の人、および、自分の肉の欲望など、大変手ごわい相手であることを知りました。

しかしながら、いかに手ごわい敵であっても私たちは勝利を確信することができます。それはイエス様ご自身が次のように私たちを励ましてくださるからです。

ヨハネ 16 章 33 節
「あなたがたは、世にあっては患難があります。しかし、勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝ったのです。」また、１ヨハネ５章４～５節「私たちの信仰、これこそ、世に打ち勝った勝利です。世に勝つ者とはだれでしょう。イエスを神の御子を信じる者ではありませんか。」

このようにありますように、私たちが堅くイエス様の側に立って、常にともにいてくださる勝利の主イエス様を心から信頼し、その主により頼む時に、どんな手ごわい敵に対しても勝利することができるのであります。

すでにイエス様がおっしゃっているように、またヨハネが言っているように、すでに私たちは世に勝っています。このイエス様のみことばを信じて従う時に、私たちの勝利は決まっているのであります。ご再臨がまじかに迫っている今の時にあって、私たちキリスト者もパウロと同じように、イエス様の兵士として与えられた神の武具をしっかりと身に着けて、恐れることなく、たじろぐことなく、信仰の戦いを勇敢に戦い抜いて、やがて天の御国でイエス様にお会いした時に「あなたがたはよく戦った。」と誉めていただくことができればどんなにか幸せなことではないでしょうか。

信仰を増し強めてください

2013 年 12 月 3 日、吉祥寺学び会
重田定義

ルカ
17:3 気をつけていなさい。もし兄弟が罪を犯したなら、彼を戒めなさい。そして悔い改めれば、赦しなさい。
17:4 かりに、あなたに対して一日に七度罪を犯しても、『悔い改めます。』と言って七度あなたのところに来るなら、赦してやりなさい。」
17:5 使徒たちは主に言った。「私たちの信仰を増してください。」

おはようございます。司会の兄に読んでいただいたこのみことば、皆さん方よく何回もお読みになっている箇所だと思いますが、改めてこの箇所から、信仰を増すという事の必要性につきまして、ご一緒に考えたいと思います。この御言葉によく似た御言葉があります。

マタイ
18:21 そのとき、ペテロがみもとに来て言った。「主よ。兄弟が私に対して罪を犯したばあい、何度まで赦すべきでしょうか。七度まででしょうか。」
18:22 イエスは言われた。「七度まで、などとはわたしは言いません。七度を七十倍するまでと言います。

このようにイエス様は、弟子たちに罪を犯す兄弟を戒めて、悔い改めに導くためには、7 度とは言わないでその 70 倍も赦しなさい、つまり徹底的に赦しきりなさいと仰っています。弟子たちは、このイエス様のみことばに、さぞ驚いたことでありましょう。そして自分たちは、そんな事はとうてい出来ないと思ったのではないでしょうか。そして彼らは、そのように徹底的に赦しきることが出来るためには、信仰を増し強められるしかないという事を悟ったのではないかと思うのですね。

彼らはイエス様にお願いしました。「私たちの信仰を増してください。」この彼らの願いというのは、主の御心にかなったものでありました。イエス様は、弟子たちさらには私たち信者に対して、しばしば不可能と思われるような事を命じられます。たとえば、ルカの福音書 6 章 27 から 31 節には、次のようにイエス様が私たちに命じておられるのですね。

ルカの福音書
6:27 しかし、いま聞いているあなたがたに、わたしはこう言います。あなたの敵を愛しなさい。あなたを憎む者に善を行ないなさい。
6:28 あなたをのろう者を祝福しなさい。あなたを侮辱する者のために祈りなさい。
6:29 あなたの片方の頬を打つ者には、ほかの頬をも向けなさい。上着を奪い取る者には、下着も拒んではいけません。
6:30 すべて求める者には与えなさい。奪い取る者からは取り戻してはいけません。
6:31 自分にしてもらいたいと望むとおり、人にもそのようにしなさい。

このように命じておられます。しかしながら、これらはすべて生半可な信仰ではとうてい出来ない事であります。改めて信仰とはどういうものでありましょうか。聖書で言うところの信仰とは、私たちを愛してくださる真実なるお方である、生ける神様に全人格的に信頼すること、具体的にはみことばに全き信頼をもって従順に従うことであります。

旧約時代において、信仰の人と呼ばれたアブラハムは、まさにその良き例であります。

ヘブル
11:17 信仰によって、アブラハムは、試みられたときイサクをささげました。彼は約束を与えられていましたが、自分のただひとりの子をささげたのです。
11:18 神はアブラハムに対して、「イサクから出る者があなたの子孫と呼ばれる。」と言われたのですが、
11:19 彼は、神には人を死者の中からよみがえらせることもできる、と考えました。それで彼は、死者の中からイサクを取り戻したのです。

ご存知のように、アブラハムと妻のサラとの間には子がありませんでした。彼と女奴隷との間にイシュマエルという男の子がいましたけれども、神様は当時 100 歳のアブラハムと 99 歳のサラとの間に男の子を与えると、そしてその子イサクをあなたの継承者として、その子孫を増やそうという約束をお与えになりました。

ですから、そのイサクを生贄として捧げよと言われるならば、いったい神様の約束とは何なのだろうかと思ってしまうのは、むしろ当然ではないでしょうか。けれども、アブラハムは神様の約束を疑うことなく、神様の仰せに素直に従って、躊躇することなくイサクをほふろうといたしました。

創世記
22:10 アブラハムは手を伸ばし、刀を取って自分の子をほふろうとした。
22:11 そのとき、主の使いが天から彼を呼び、「アブラハム。アブラハム。」と仰せられた。彼は答えた。「はい。ここにおります。」
22:12 御使いは仰せられた。「あなたの手を、その子に下してはならない。その子に何もしてはならない。今、わたしは、あなたが神を恐れることがよくわかった。あなたは、自分の子、自分のひとり子さえ惜しまないでわたしにささげた。」

神様は、アブラハムの信仰の堅さを強さを試みられたのであります。アブラハムは、この厳しい試練を神様に対する全き信頼、全き従順という信仰の力によって乗り越えました。アブラハムが信仰の父と仰がれる由縁であります。パウロは、ローマ書の 4 章 16 節に次のようにこれについて記しております。

ローマ
4:16 そのようなわけで、世界の相続人となることは、信仰によるのです。それは、恵みによるためであり、こうして約束がすべての子孫に、すなわち、律法を持っている人々にだけでなく、アブラハムの信仰にもら

う人々にも保証されるためなのです。「わたしは、あなたをあらゆる国の人々の父とした。」と書いてあるとおりに、アブラハムは私たちすべての者の父なのです。

このように言っておりますが、全くそのとおりであります。しかし、何といっても私たち信者の信仰のお手本は、父なる神様に対する御子イエス様の全き信頼と全き従順の姿勢ではないでしょうか。

コロサイ
1:15 御子は、見えない神のかたちであり、造られたすべてのものより先に生まれた方です。
1:16 なぜなら、万物は御子にあって造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によって造られたのです。万物は、御子によって造られ、御子のために造られたのです。
1:17 御子は、万物よりも先に存在し、万物は御子にあって成り立っています。

このようにイエス様は、父なる神様と共に天地万物をお創りになり、それらすべてを支配しておられる偉大なお方であります。そのような権威を持った方であるのに、私たち人間を父なる神様に対する背きの罪から救い出すために、父なる神様からこの世に遣わされました。そしてそのイエス様は、ご自分を無にしてすべて父なる神様の御心に従われて、まさに十字架の死にまで従われたのであります。

ピリピ
2:6 キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、
2:7 ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。
2:8 キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。

とあるとおりであります。これについてイエス様ご自身も次のように弟子たちに仰っておられます。

ヨハネ
5:19 そこで、イエスは彼らに答えて言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。子は、父がしておられることを見て行なう以外には、自分からは何事も行なうことができません。父がなさることは何でも、子も同様に行なうのです。

5:30 わたしは、自分からは何事も行なうことができません。ただ聞くとおりにさばくのです。そして、わたしのさばきは正しいのです。わたし自身の望むことを求めず、わたしを遣わした方のみこころを求めるからです。

6:38 わたしが天から下って来たのは、自分のこころを行なうためではなく、わたしを遣わした方のみこころを行なうためです。

これらのみことばは、御子イエス様の完全な自己否定と父なる神様への全き従順を表すものでなくて何でありましょうか。そしてイエス様は、ご自分のいのちに代えて罪から贖い出して下さった私たち信者に対しても、ご自分の従順に習うように求めておられるのであります。それは私たちを愛し、私たちの信仰を増し強め、ご自分の性質にあずかる者となるように、ご自分に似た者となるように成長させてくださるという、イエス様の深い御心だからであります。

ローマ
8:28 神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。
8:29 なぜなら、神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。それは、御子が多くの兄弟たちの中で長子となられるためです。

このようにパウロは言っております。しかしながら、主に似た者にされるためには、私たちの霊はイエス様を信じた瞬間に、まさに清められそして新しく生まれ変わりました。けれども、私たちの肉のからだの方はどうでしょうか。残念ながら、私たちはこの肉のからだを着て、この世に生きて今しばらく生きていなければならないのですけれど、その私たち信者には依然として根強く自我が残っていることを認めざるを得ません。

この自我が砕かれなければ、主に対する全き従順、信頼をすることが難しいのですね。イエス様のような父なる神様に対する全き従順の信仰に習うためには、私たちの自我が砕かれて、自分を主に明け渡すという事がどうしても必要となってまいります。主はそのために、私たち信者に試練をお与えになるのであります。

第 1 ペテロ
1:5 あなたがたは、信仰により、神の御力によって守られており、終わりのときに現わされるように用意されている救いをいただくのです。
1:6 そういうわけで、あなたがたは大いに喜んでいます。いまは、しばらくの間、さまざまの試練の中で、悲しまなければならないのですが、
1:7 信仰の試練は、火を通して精練されてもなお朽ちて行く金よりも尊いのであって、イエス・キリストの現われのときに称賛と光栄と栄誉に至るものであることがわかります。

試練によって、私たちの自我が砕かれ、自分をイエス様に明け渡したパウロは、次のように証しすることができました。彼の有名な証しであります。

第 2 コリント
12:7 また、その啓示があまりにもすばらしいからです。そのために私は、高ぶることのないようにと、肉体に一つのとげを与えられました。それは私が高ぶることのないように、私を打つための、サタンの使いです。
12:8 このことについては、これを私から去らせてくださるようにと、三度も主に願いました。
12:9 しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全

に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。

彼はこのように証しをしております。私たち信者の肉が砕かれ、自分を主に明け渡した時に初めて、私たち信者の中に住んでおられる御霊がお働きになることができ、そしてパウロがガラテヤの 5 章 16 から 17 節、あるいは 22 から 25 節で言っております。

ガラテヤ
5:16 私は言います。御霊によって歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。
5:17 なぜなら、肉の願うことは御霊に逆らい、御霊は肉に逆らうからです。この二つは互いに対立していて、そのためあなたがたは、自分のしたいと思うことをすることができないのです。

5:22 しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、
5:23 柔和、自制です。このようなものを禁ずる律法はありません。
5:24 キリスト・イエスにつく者は、自分の肉を、さまざまの情欲や欲望とともに、十字架につけてしまったのです。
5:25 もし私たちが御霊によって生きるのなら、御霊に導かれて、進もうではありませんか。

このように言っておりますように、私たちが自我が砕かれた時に初めて、私たちの中に住んでくださっている御霊が、私たちの中で働いてくださり、御霊に導かれて御心にかなう信仰の生き方ができるようになるのであります。さらに、これについて有名なガラテヤ書 2 章 20 節で、主に自分を明け渡してからは、もはや自分が生きているのではない。自分の中に住んでくださるイエス様の御霊のご支配の下に、御霊に導かれて生きているというふうに証しをしております。

ガラテヤ
2:20 私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

自我が砕かれ、私たちの内に住んでくださる御霊の働きにお委ねする時に、私たち信者は始めてイエス様が命じておられる、人を赦しきることがそして人を自分自身のように愛することができるようになるのであります。これがイエス様に似るような神の子にふさわしく成長した信者の信仰者の姿と言えるのではないかと思います。

主は、十字架の贖いの御業が、自分のためであったと信じる信仰によって救われた私たちを、さらにご自分に似る者に成長させることを通して、ご自身に栄光が現されるということを、切に望んでおられます。しかしながら、私自身振り返りますと、自分の信仰がそのような主のご期待にはとうてい添い得ない者であることを痛感せざるを得ません。一番最初のみことばルカの福音書の中で、使徒たちがイエス様に「私たちの信仰を増してください」とお願いした時、イエス様がこう仰いました。

ルカ伝
17:6 しかし主は言われた。「もしあなたがたに、からし種ほどの信仰があったなら、この桑の木に、『根こそぎ海の中に植われ。』と言えば、言いつけどおりになるのです。

イエス様は、桑の木は根が強く張られていて、抜くことが難しいことを知っておられて、こう仰ったのです。主のご再臨の近いことを覚える時にあって、私自身、改めて自分にからし種ほどの信仰さえないような信仰の弱い者であることを痛感いたします。そして使徒たちのように「信仰を増し強めてください」と主に真剣に祈り求めざるを得ません。

このように、自分の信仰を顧みて主の御前に心から祈るなら、主はこの私たちの祈りを御心にかなう祈りと認めてくださり、私たちの中に内に住んでくださる主の御霊のお働きによって、信仰を増し強めてくださり、愛することができない人をも、しだい次第に愛することができるように、また赦すことができない人をも赦すことができるようにしてくださると、私たちは堅く信じたいと思います。最後にエペソ書 3 章 16 から 21 節のみことばをお読みいたします。

エペソ
3:16 どうか父が、その栄光の豊かさに従い、御霊により、力をもって、あなたがたの内なる人を強くしてくださいますように。
3:17 こうしてキリストが、あなたがたの信仰によって、あなたがたの心のうちに住んでいてくださいますように。また、愛に根ざし、愛に基礎を置いているあなたがたが、
3:18 すべての聖徒とともに、その広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解する力を持つようになり、
3:19 人知をはるかに越えたキリストの愛を知ることができますように。こうして、神ご自身の満ち満ちたさまにまで、あなたがたが満たされますように。
3:20 どうか、私たちのうちに働く力によって、私たちの願うところ、思うところのすべてを越えて豊かに施すことのできる方に、
3:21 教会により、またキリスト・イエスにより、栄光が、世々にわたって、とこしえまでありますように。アーメン。

この祈り、「あなたがた」という所を「私たち」あるいは「私」と読み代えて、私たちの祈りとして祈り続けたいと切に願うしだいであります。

汚れた唇と聖められた唇

2014 年 1 月 28 日、吉祥寺学び会
重田定義

> イザヤ
> 6:1 ウジヤ王が死んだ年に、私は、高くあげられた王座に座しておられる主を見た。そのすそは神殿に満ち、
> 6:2 セラフィムがその上に立っていた。彼らはそれぞれ六つの翼があり、おのおのその二つで顔をおおい、二つで両足をおおい、二つで飛んでおり、
> 6:3 互いに呼びかわして言っていた。「聖なる、聖なる、聖なる、万軍の主。その栄光は全地に満つ。」
> 6:4 その叫ぶ者の声のために、敷居の基はゆるぎ、宮は煙で満たされた。
> 6:5 そこで、私は言った。「ああ。私は、もうだめだ。私はくちびるの汚れた者で、くちびるの汚れた民の間に住んでいる。しかも万軍の主である王を、この目で見たのだから。」
> 6:6 すると、私のもとに、セラフィムのひとりが飛んで来たが、その手には、祭壇の上から火ばさみで取った燃えさかる炭があった。
> 6:7 彼は、私の口に触れて言った。「見よ。これがあなたのくちびるに触れたので、あなたの不義は取り去られ、あなたの罪も贖われた。」

おはようございます。ご一緒にしばらく、聖書から学んでいきたいと思います。イザヤという預言者、大預言者と言われておりますが、紀元前 8 世紀にイスラエルに生きていた預言者であります。今、読んでいただいたみことばで、イザヤが言っておりますように、彼は神様を自分の目で見てしまいました。

その時に、彼がまず思ったことは、自分のような唇の汚れた者が、神様を見てしまった。だから、もう自分は死ぬのだというふうに思いました。神様を見た者は死ぬということは、ずっと昔に神様がモーセに仰せになっておられます。

> 出エジプト記
> 33:20 また仰せられた。「あなたはわたしの顔を見ることはできない。人はわたしを見て、なお生きていることはできないからである。」

このように神様はモーセに仰っておられるのですね。ですからイスラエルの民は、神様を見ることをたいそう恐れておりました。人間が神様を見たら、生きていることはできません。なぜならば、私たち人間は誰一人、神様の前に正しくなく、聖くない者だからであります。正しくなく、聖くない者が完全に正しく、完全に聖い神様をこの目で見ることを、神様はお赦しにならないのであります。

イザヤは、唇が汚れていると言いました。唇が汚れているとは、いったいどういうことでありましょうか。それは、唇から出る言葉が汚れているからであり、言葉が汚れているというのは、その言葉が汚れた心から出てくるからであります。すなわち、心が汚れていれば、その汚れた心を表す言葉によって、唇も舌も口も汚れるのであります。イエス様は、これについて次のように仰っておられます。

> マタイ伝
> 15:18 しかし、口から出るものは、心から出て来ます。それは人を汚します。
> 15:19 悪い考え、殺人、姦淫、不品行、盗み、偽証、ののしりは心から出て来るからです。

この心の汚れというのは、これは神様に対する罪の結果として生じたものであります。そして、私たち人間はすべて神様の仰せに背いて、エデンの園から追放された最初の人間であるアダムの子孫として、アダムの遺伝子を受け継いでおります。したがって、いやおう無く私たちは、アダムの罪の性質を持って生まれ出てきましたために、たとえ表面は取り繕っていても、生まれつきの口、そして生まれつきの心は、悲しいことに汚れた言葉しか出すことが出来なくなってしまったのであります。

このように、神様に従わないで、自分を主張し、自我によって生きる者となってしまった人間の唇から出る言葉が、どのようなものであるか聖書には、いろいろ書いてありますけれども、その一つとして詩篇 17 篇 10 節に「彼らは、鈍い心を（神様に対して）堅く閉ざし、そのロをもって高慢に語ります。」と、生まれつきの私たちの唇は、高慢に語る。それから詩篇 12 篇 2 節から 4 節、ここにもつぎのように書いてあります。

> 詩篇
> 12:2 人は互いにうそを話し、へつらいのくちびると、二心で話します。
> 12:3 主が、へつらいのくちびると傲慢の舌とを、ことごとく断ち切ってくださいますように。
> 12:4 彼らはこう言うのです。「われらはこの舌で勝つことができる。われらのくちびるはわれらのものだ。だれが、われらの支配者なのか。」

> 詩篇
> 10:7 彼の口は、のろいと欺きとしいたげに満ち、彼の舌の裏には害毒と悪意がある。

それぞれたいへん厳しいなと思われるみことばですけれども、私たちが素直に、自分の心を顧みた時に、自分の唇から出る言葉は、聖書で言われているとおり、呪いとかへつらいとか、欺きとか、あるいは悪意、高慢によって汚されたものがいかに多いかということを認めざるを得ないのではないでしょうか。そのような言葉が、私たちの唇から出て来るわけは、先ほども申しましたように、私たちがそのような言葉を出してしまう、生まれつきの心が汚れた人間だからなのでであります。

どんなに自分は、清い善良な人間であると思っているそのような人でも、自分の心の中をよく見つめた時に、そこに一点の汚れもないと言える人はないはずであります。改めて私たち人間の舌や口や唇には、いったいどんな働きがあるのでしょうか。まず肉的に言えば、これはご存知のように私たちは、食べ物を食べるためにそれらを使います。あるいは言葉を話す時にこれらを使います。けれども、神様はこれらの器官を肉的な目的以上に大切な事のためにお用いになろうとして、私たちをお造りにな

ったのであります。

それは、ご自分と交わるためのものであります。神様と交わるために使うことが、私たち人間の口や舌や唇の霊的な本来の正しい働きなのであります。ところが創世記に記されておりますように、アダムとエバはサタンに誘惑されて、神様からエデンの園の中で「この木の実だけは、食べてはいけない。」と言われた禁断の木の実を仰せに背いて食べてしまって、その時から人間の心に罪が入った結果、神様と交わるべき口や舌や唇を、自分の欲を満たすために、自分の考えを主張するために、あるいは人と争ったり、人を裁いたりするために使うようになってしまったのであります。

こうして、私たちの口や舌や唇は、そのような肉的な目的に用いる、汚れた言葉を出すようになってしまいました。しかも、私たち人間は、イエス様の光に照らされるまでは、それを特に悪いともおかしいとも思いません。いったいどうしてでしょうか。それは、私たちに霊の目が、神様への背きの罪のために閉ざされてしまっているからであります。

こういうわけで、肉の目は見えても、霊的に盲目である私たち人間は、自分が罪に汚れていることが見えません。ですから、汚れた人間の口から汚れた言葉が出てくるのは、これは当然でありましょう。しかしながら、このような霊的に盲目の私たちも、神様の光に照らされますと、自分の唇が汚れていることに、言い換えますと、自分の罪に気づいて神様を恐れるようになります。

最初に読んでいただいたみことばにあるイザヤは、まさにこの体験をいたしました。では、イザヤが恐れたように、神様はイザヤを滅ぼされたでありましょうか。そうではありませんでした。読んでいただいたみことばを見ますと、セラフィムすなわち天使が、火を彼の唇にあてたとあります。この火は、汚れを焼き聖めるものであり、この火は、神様の御手の力であるところの御霊の聖霊の火であります。

私たち人間は、自分の罪を自分で聖めることは決して出来ません。人間の側からは、どうする事も出来ないこの汚れと背きの罪は、神様の側からの一方的なあわれみと恵みによって、神様の御手によってのみ聖められるのであります。イザヤは、神様の御手によって、罪が聖められ同時に、唇も聖められました。

では、なぜ神様はイザヤの唇を聖められたのでありましょうか。イザヤの唇を聖められた神様のご目的、お考えはいったい何なのでありましょうか。それは、最初に読んでいただいたみことばに続く、イザヤ書６章８節に記されている、神様とイザヤの問答によって知ることができます。

> イザヤ
> 6:8 私は、「だれを遣わそう。だれが、われわれのために行くだろう。」と言っておられる主の声を聞いたので、言った。「ここに、私がおります。私を遣わしてください。」

神様がイザヤの唇を聖められたのは、罪から人間を救うために、神の御子をこの世に遣わすというメッセージを、イスラエルの民、ひいては世界のすべての人間に告げるのにふさわしい唇とするためでありました。

そこで神様は、イザヤに「わたしは、だれを遣わそう。だれが、われわれのために行くだろう。」と仰せになったのであります。言うまでもなく我々とは、主なる神様と御子イエス様をさしておられます。

イザヤは、聖められた唇によって、さっそく神様に「私を遣わしてください。」と答え、それからの彼の唇は、神様のメッセージを正しく伝えることに使われるようになりました。こうして、イザヤの聖められた唇は、神様に対する私たち人間の背きの罪を身代わりに負って、神様から罰を受けてくださるために、人となってこの世に来てくださったイエス様について、神様に命じられるままに預言をしたのであります。

> イザヤ
> 9:6 ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。
> 9:7 その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に着いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これをささえる。今より、とこしえまで。万軍の主の熱心がこれを成し遂げる。

> イザヤ
> 53:1 私たちの聞いたことを、だれが信じたか。主の御腕は、だれに現われたのか。
> 53:2 彼は主の前に若枝のように芽生え、砂漠の地から出る根のように育った。彼には、私たちが見とれるような姿もなく、輝きもなく、私たちが慕うような見ばえもない。
> 53:3 彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。人が顔をそむけるほどさげすまれ、私たちも彼を尊ばなかった。
> 53:4 まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。
> 53:5 しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。
> 53:6 私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。

神様が、イザヤの聖められた唇を用いて、このように約束してくださった通り、神の御子のイエス様は、2000 年前にこの世に人としておいでくださり、十字架と復活による救いの御業を成就してくださったのであります。

幸いなことに、私たちキリスト者も、イザヤと同じように一方的な神様のあわれみによって、救いの対象として選ばれ、イエス様を信じる者とさせていただきました。

では、イエス様の十字架の贖いの御業を信じることによ

って、罪が聖められた私たちの唇から出る言葉は、それまでとはどのように違う言葉が出せるようになったのでありましょうか。

一つは、私たちの聖められた唇は、イエス様を救い主と告白する言葉を出すことができるようになったのであります。

ローマ
10:9 なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。
10:10 人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。

このみことばの通り、聖霊によって聖められた私たちの唇が、イエス様を救い主として信じて、それを唇から告白することができるようになりました。

2 番目に、私たちの聖められた唇から、神様、イエス様を賛美する言葉が出るようになりました。

ヘブル
13:15 ですから、私たちはキリストを通して、賛美のいけにえ、すなわち御名をたたえるくちびるの果実を、神に絶えずささげようではありませんか。

私たちの聖められた唇は、イエス様が自分のためにしてくださった十字架の贖いの御業を初めとする数々の身に余る恵みをいただいて、感謝と賛美を捧げる言葉を出すことができるようになりました。

3 番目、私たちの聖められた唇は、神様やイエス様に祈る言葉を出すことができるようになりました。

詩篇
17:1 主よ。聞いてください、正しい訴えを。耳に留めてください、私の叫びを。耳に入れてください、欺きのくちびるからでない私の祈りを。

このように私たちは、神様やイエス様に向かって、自分の心の内にある思い、悩み、苦しみ、悲しみを隠すことなく、素直に唇から出して、主に祈ることができるようになりました。

4 番目、私たちの聖められた唇は、聖書のみことばを口ずさむようになりました。

詩篇
1:1 幸いなことよ。悪者のはかりごとに歩まず、罪人の道に立たず、あざける者の座に着かなかった、その人。
1:2 まことに、その人は主のおしえを喜びとし、昼も夜もそのおしえを口ずさむ。

5 番目に、私たちの聖められた唇は、イエス様の救いの良き知らせ、すなわち福音を証しする言葉を出すことができるようになりました。

詩篇
40:9 私は大きな会衆の中で、義の良い知らせを告げました。ご覧ください。私は私のくちびるを押えません。主よ。あなたはご存じです。

神様は、イザヤだけではなくて、神の御手すなわちイエス様ご自身のいのちによって、罪が聖められ、神様との交わりが回復され、唇が聖められたすべての者に対して、その唇をもって神の救いのメッセージ、福音のメッセージを語り伝えるようにと望んでおられます。

イザヤは「ここに、私がおります。私を遣わしてください。」と神様に答えました。しかし、自分にはとても出来ない、自分にはそのような知識も力もないと、しり込みをなさる信者も少なくないでしょう。

実はモーセもそうでした。彼は、神様から「わたしのことばを、イスラエルの民に伝えよ。」と言われた時に、彼はどう言ったか。「私は、舌が重く、言葉の人ではないから。」としり込みをしました。しかし、神様は次のように仰せになられました。

出エジプト記
4:11 主は彼に仰せられた。「だれが人に口をつけたのか。だれがおしにしたり、耳しいにしたり、あるいは、目をあけたり、盲目にしたりするのか。それはこのわたし、主ではないか。
4:12 さあ行け。わたしがあなたの口とともにあって、あなたの言うべきことを教えよう。」

このように神様は聖められ、開かれたモーセの口に、語るべき言葉を教えてくださったのであります。預言者エレミヤの場合も、そうでありました。

エレミヤ
1:4 次のような主のことばが私にあった。
1:5 「わたしは、あなたを胎内に形造る前から、あなたを知り、あなたが腹から出る前から、あなたを聖別し、あなたを国々への預言者と定めていた。」
1:6 そこで、私は言った。「ああ、神、主よ。ご覧のとおり、私はまだ若くて、どう語っていいかわかりません。」
1:7 すると、主は私に仰せられた。「まだ若い、と言うな。わたしがあなたを遣わすどんな所へでも行き、わたしがあなたに命じるすべての事を語れ。
1:8 彼らの顔を恐れるな。わたしはあなたとともにいて、あなたを救い出すからだ。――主の御告げ。――」
1:9 そのとき、主は御手を伸ばして、私の口に触れ、主は私に仰せられた。「今、わたしのことばをあなたの口に授けた。

ここでも、神様はエレミヤの口に御手を触れて、口を聖められ、神様のメッセージを語れるようにしてくださったのであります。このように、神様は、年齢やあるいは舌の滑らかさや、聖書の知識の有無や、資格や信仰暦の長さなどに関係なく、聖めてくださった者の口を、神様のメッ

セージを伝えるためにお用いになるのであります。

しかしながら、イエス様によって聖められた私たちキリスト者は、いつも自分の唇から出る言葉に注意していなければなりません。その訳は、私たちの唇から出る言葉が、私たちの霊的状態の良し悪しを表すサインとなるからであります。霊がイエス様と結びついていれば、私たちの唇からは聖い言葉が出てきますけれども、イエス様から少しでも離れると、たちまち汚れた言葉が出るようになります。

それは、私自身の経験からも痛いほど思い知らされる事であります。確かに私たちは、自分の意思の力で、舌や唇を制御することはできません。けれども失望することはないのであります。私たちが、内に住んでくださる御霊に自分自身をお委ねして、御霊により頼んでさえいれば、御霊の力で私たちの唇を制御してくださるのであります。

せっかくイエス様によって聖められた私たち信者の唇が、神様を悲しませるような言葉を出して汚されないために、意識して私たちは、イエス様から離れることがないように、いつも霊の目をイエス様に向け続けて、間近に迫ったイエス様のご再臨の日を、待ち望みながら御霊のお導きに従って、日々聖められた唇をもって、主を証しする信仰の歩みを続けたいと切に思います。最後にみことばをお読みして終わりたいと思います。

詩篇
141:3 主よ。私の口に見張りを置き、私のくちびるの戸を守ってください。

何が本当の幸せか

2014 年 2 月 11 日、吉祥寺学び会
重田定義

詩篇
16:2「あなたこそ、私の主。私の幸いは、あなたのほかにはありません。」

私たち人間が、普通幸せと感じる時は、いったいどういう時でありましょうか。

この世的に価値があるもの、例えば財産とか地位とか権力とか、あるいは健康、長寿、それらのものがあれば備わっていれば人は幸せに感じるのでありましょうか。けれども、いくら財産があっても、いくら地位が高くても、いくら健康であっても、いくら長寿であっても、その人が幸せに感じているかといえば、決してそうでないという実例を私たちはたくさん見ております。

一方、集会の兄弟姉妹が、証しの中で、異口同音に言っておられる事があります。それは、自分が導かれて集会に初めて来た時、一番強く感じたのは、皆さんの明るい美しい笑顔だったと。どうしてこんな笑顔ができるのだろうと驚いたという事であります。

笑顔にもいろいろな笑顔があると思うのですね。私たちが一番、目にするのは、営業用の笑顔であります。では、集会の兄弟姉妹の笑顔は、営業用のものなのでありましょうか。そうではなくて、心から自分が幸せと感じているところから、自然に出てくる笑顔なのであります。

けれども、集会の兄弟姉妹は、皆何の問題もなく、順風満帆の楽しい日々を過ごしておられるかと言えば、むしろその反対に様々な苦しい困難な状況の中に置かれておられる方が多いのではないでしょうか。にもかかわらず、どうして幸せな笑顔ができるのでありましょうか。それは、イエス様を主と信じることによって、初めて得ることのできた本当の幸せから生まれたものだと思います。

改めてイエス様を主と信じた者の幸せとは、いったい何でありましょうか。それは、まず神の子供とされたという幸せではないでしょうか。

ヨハネ伝
1:12 しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。
1:13 この人々は、血によってではなく、肉の欲求や人の意欲によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである。

イエス様を主と信じた者は、その信仰ゆえに、神様の恵みによって神の子供とされ、この世に属する者から神に属する者に変えられます。そうなりますと、価値基準も自ずと、この世の人間の価値基準から神の子供の価値基準へと変えられるのであります。

そして、イエス様を信じる者であることを明らかにすることによって、人々からそしられたり、敬遠されたり、非難されたり、あるいは迫害されたりするような事が起こるとしても、それは不幸な事ではなく、幸いな事と受け止められるようになるのであります。ペテロはその訳を次のように言っております。

第 1 ペテロ
4:14 もしキリストの名のために非難を受けるなら、あなたがたは幸いです。なぜなら、栄光の御霊、すなわち神の御霊が、あなたがたの上にとどまってくださるからです。

このように説明しております。私たち信者が恐れずに、イエス様を証ししたために、世の人々から非難されても、その時には信じる者の中に宿ってくださっている主の御霊が守ってくださる、支えてくださるという事を私たちは体験できるから、本当に幸せなのではないでしょうか。

引き続いて、主を信じる者の幸せを聖書から見ていきたいと思います。

順不同になりますが、一つは、神様に選ばれているという幸せでありましょう。パウロは、エペソ人への手紙の中で次のように言っております。

エペソ
1:4 すなわち、神は私たちを世界の基の置かれる前からキリストのうちに選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。
1:5 神は、ただみこころのままに、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられたのです。

ここで私たちが、ぜひ知っておかなければならない事があります。それは、神様の選びは、私たち人間が立派であるとか、善行したからということに関係なく、もっぱら神様の愛とあわれみに基づく、ご自身の意思によるものであるということであります。パウロは、神様に選ばれた者が、どのような者かということを次のように言っております。

第 1 コリント
1:26 兄弟たち、あなたがたの召しのことを考えてごらんなさい。この世の知者は多くはなく、権力者も多くはなく、身分の高い者も多くはありません。
1:27 しかし神は、知恵ある者をはずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者をはずかしめるために、この世の弱い者を選ばれたのです。
1:28 また、この世の取るに足りない者や見下されている者を、神は選ばれました。すなわち、有るものをない者のようにするため、無に等しいものを選ばれたのです。

このように、信じる者の幸せは、愚かな弱い、取るに足りない、無に等しいような私たちを神様は、ただ恵みによって一方的に目を留めてくださり、しかも生まれるはるか前から、御子イエス様によって、神の子供として選んでくださったという、驚くべき幸せなのであります。

次に、主を信じる者の大きな幸せは、神様に義、すなわ

ち正しいと認められているという幸せであります。パウロは、ローマ書の中で次のように言っております。

ローマ
4:5 何の働きもない者が、不敬虔な者を義と認めてくださる方を信じるなら、その信仰が義とみなされるのです。
4:6 ダビデもまた、行ないとは別の道で神によって義と認められる人の幸いを、こう言っています。
4:7「不法を赦され、罪をおおわれた人たちは、幸いである。
4:8 主が罪を認めない人は幸いである。」

このように言っております。かつて、私たちは、神様を恐れ敬うどころか、その逆を行くような生き方をしていたような者でありました。しかしながら、そのような者が神様に対する背きの罪に気づいて悔い改めをすれば、神様はその信仰を喜んでくださり、ご自分に対する私たちの不義を、御子イエス様にあって赦してくださり、義すなわち正しいと認めてくださるのであります。

義そのものである神様から義と認められるほど、私たち信者にとって幸せな事はありません。

また、信じる者の大きな幸せは、主に愛されているという幸せであります。イザヤ書には次のように記してあります。

イザヤ
43:1 だが、今、ヤコブよ。あなたを造り出した方、主はこう仰せられる。イスラエルよ。あなたを形造った方、主はこう仰せられる。「恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。
43:2 あなたが水の中を過ぎるときも、わたしはあなたとともにおり、川を渡るときも、あなたは押し流されない。火の中を歩いても、あなたは焼かれず、炎はあなたに燃えつかない。
43:3 わたしが、あなたの神、主、イスラエルの聖なる者、あなたの救い主であるからだ。わたしは、エジプトをあなたの身代金とし、クシュとセバをあなたの代わりとする。
43:4 わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。

このようにあります。「わたしの目には、あなたは高価で尊い。」とまで仰ってくださる神様は、いったいどのように私たちを愛してくださっているのでありましょうか。それは「わたしがあなたを贖ったのだ。」というみことばにあると思います。

第１ヨハネ
4:9 神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。
4:10 私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。

とあります。神様は、私たちに対する愛を、実に、神の一人子であるイエス様の十字架の死によってという形でお示しになったのであります。神様は、神様を愛するどころか、神様に背き、神様から滅ぼされても当然な私たちの罪を、愛する御子イエス様を身代わりにして、十字架にかけて、贖ってくださっただけではなくて、信じる私たちに、イエス様のよみがえりの命をも与えてくださり、永遠に生きることができるようにしてくださったのであります。これほどに神様から愛されている私たちは、何と幸せでありましょうか。

また、信じる者の幸せには、主に戒められるという幸せがあります。詩篇の作者は次のように言っております。

詩篇
94:12 主よ。なんと幸いなことでしょう。あなたに、戒められ、あなたのみおしえを教えられる、その人は。

このように主に戒められる者の幸いを賛美しております。イエス様を信じた者は、主から戒めを受けます。それは、主がご自分の子供として愛してくださっている証拠であります。このことをよく表しているヘブル人への手紙を拝読いたします。

ヘブル人への手紙
12:5 そして、あなたがたに向かって子どもに対するように語られたこの勧めを忘れています。「わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。
12:6 主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。」
12:7 訓練と思って耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです。父が懲らしめることをしない子がいるでしょうか。
12:8 もしあなたがたが、だれでも受ける懲らしめを受けていないとすれば、私生子であって、ほんとうの子ではないのです。
12:9 さらにまた、私たちには肉の父がいて、私たちを懲らしめたのですが、しかも私たちは彼らを敬ったのであれば、なおさらのこと、私たちはすべての霊の父に服従して生きるべきではないでしょうか。
12:10 なぜなら、肉の父親は、短い期間、自分が良いと思うままに私たちを懲らしめるのですが、霊の父は、私たちの益のため、私たちをご自分の聖さにあずからせようとして、懲らしめるのです。
12:11 すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。

このように、主が信じる者を懲らしめる理由を説明しております。確かに、主の鞭は、私たち信者の肉には痛くありますけれども、その懲らしめは、私たちをご自分の聖さにあずからせるため、そして神の子供の霊を成長させるための愛ゆえであることが解かれば、懲らしめをも私たちは幸せと思うことができます。

また、イエス様を主と信じる者の大きな幸せは、主がいつも共にいてくださるという幸せであります。イザヤ書には次のような主の約束が記されております。

イザヤ
41:10 恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。

主を信じる者は、罪のために閉ざされていた霊の目が開かれて、その開かれた霊の目で、主がいつも共にいてくださり、何が起こっても動揺することのないように守ってくださり、導いてくださるということを知ることができます。これについて、ダビデは次のように言っております。

詩篇
16:8 私はいつも、私の前に主を置いた。主が私の右におられるので、私はゆるぐことがない。
16:9 それゆえ、私の心は喜び、私のたましいは楽しんでいる。私の身もまた安らかに住まおう。

ダビデのように、私たちが主がいつも共に居てくださることを確信し、主に拠り頼んでさえいれば、どんなに自分の身の回りに嵐が吹き荒れても、心はいつも平安であり、喜びに満たされるのであります。これもまた、主を信じる者の大きな幸せであります。

また、信じる者の幸いは、キリストのからだの一部として生かされているという幸せであります。

第 1 コリント
12:27 あなたがたはキリストのからだであって、ひとりひとりは各器官なのです。

キリストのからだというのは、イエス様を頭として有機的に結びついて、一つのからだを形成している信者の群れ、教会のことであります。主は、信じた者をご自分のからだの一部として用いようとなさいます。自分には、何の能力もないからと、しり込みをするそのような信者をも、主はからだの一部として用いてくださるのであります。

第 1 コリント 12 章 18 節から 27 節までお読みしたいと思います。これは、今申し上げたその理由ですね。私たち信者が、キリストのからだの一部として用いられている理由を、詳しく説明しております。

第 1 コリント
12:18 しかしこのとおり、神はみこころに従って、からだの中にそれぞれの器官を備えてくださったのです。
12:19 もし、全部がただ一つの器官であったら、からだはいったいどこにあるのでしょう。
12:20 しかしこういうわけで、器官は多くありますが、からだは一つなのです。
12:21 そこで、目が手に向かって、「私はあなたを必要としない。」と言うことはできないし、頭が足に向かって、「私はあなたを必要としない。」と言うこともできません。
12:22 それどころか、からだの中で比較的に弱いと見られる器官が、かえってなくてはならないものなのです。
12:23 また、私たちは、からだの中で比較的に尊くないとみなす器官を、ことさらに尊びます。こうして、私たちの見ばえのしない器官は、ことさらに良いかっこうになりますが、
12:24 かっこうの良い器官にはその必要がありません。しかし神は、劣ったところをことさらに尊んで、からだをこのように調和させてくださったのです。
12:25 それは、からだの中に分裂がなく、各部分が互いにいたわり合うためです。
12:26 もし一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、もし一つの部分が尊ばれれば、すべての部分がともに喜ぶのです。
12:27 あなたがたはキリストのからだであって、ひとりひとりは各器官なのです。

こうして、力ある信者も弱い信者も皆、イエス様を頭として御霊によって、一つとされて主のみからだなる生ける教会の部分部分として用いられ、組み合わされ、そして互いに祈り合い、支え合い、助け合い、励まし合い、愛し合う、そういう事ができるのは、信者だけが味わうことのできる幸せではないでしょうか。

最後になりますが、主を信じる者の大きな幸せは、御再臨を信じて、その日を待ち望む幸せであります。ヨハネ黙示録の 22 章 12 節から 14 節で、イエス様は次のように仰いました。

黙示録
22:12「見よ。わたしはすぐに来る。わたしはそれぞれのしわざに応じて報いるために、わたしの報いを携えて来る。
22:13 わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である。初めであり、終わりである。」
22:14 自分の着物を洗って、いのちの木の実を食べる権利を与えられ、門を通って都にはいれるようになる者は、幸いである。

このように仰いました。イエス様の御再臨は、イエス様の救いを拒み続ける者にとっては、恐ろしい裁きの時ですけれども、十字架の上で流されたイエス様の尊い血によって、罪を洗い清められた信者にとっては、イエス様が信者を天の御国にたづさえ上げてくださるために、空中まで迎えに来てくださるという、大きな喜びの時であります。そのことについて、第 1 ヨハネ 3 章 2 節には次のようにあります。

第 1 ヨハネ
3:2 愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現われたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。

このようにあります。この地上にある間は、私たち信者は、血肉のからだをまだ着ておりますけれども、御再臨の時、イエス様が迎えにお出でになった時は、私たちは清い朽ちないイエス様のからだに似たからだに変えられて、空中でイエス様に直接お会いすることができ、それからは、永遠に天の御国でイエス様とお交わりをすることが出来

ます。こんな幸せは他にあるでしょうか。

これまでご一緒に考えてまいりましたように、まことの幸せとは、目に見える空しい幸せではなくて、目には見えなくても、主から恵みとして与えられる幸せなのであります。そして、その幸せは、すべて私たちの主イエス様ご自身から発している事を、改めて覚え、ご一緒に最初に読んでいただいた詩篇 16 篇 2 節のみことばを、もう一度お読みして、心から主に感謝して終わりたいと思います。

詩篇
16:2「あなたこそ、私の主。私の幸いは、あなたのほかにはありません。」

二人の息子の例えから知る主のみこころ

2014 年 3 月 25 日、吉祥寺学び会
重田定義

引用聖句
マタイ伝
21:28 ところで、あなたがたは、どう思いますか。ある人にふたりの息子がいた。その人は兄のところに来て、『きょう、ぶどう園に行って働いてくれ。』と言った。
21:29 兄は答えて『行きます。おとうさん。』と言ったが、行かなかった。
21:30 それから、弟のところに来て、同じように言った。ところが、弟は答えて『行きたくありません。』と言ったが、あとから悪かったと思って出かけて行った。
21:31 ふたりのうちどちらが、父の願ったとおりにしたのでしょう。」彼らは言った。「あとの者です。」イエスは彼らに言われた。「まことに、あなたがたに告げます。取税人や遊女たちのほうが、あなたがたより先に神の国にはいっているのです。

おはようございます。和田兄に読んでいただいたこのみことば、イエス様が語られたこの例えから、私たちが、父親の命令に対する二人の息子のとった態度を通して、主が私たち信者に何を言おうとなさっておられるのか、そのことをご一緒に考えてみたいと思います。

今読んでいただいたみことばの少し前を見ますと、イエス様は、この例え話を一般の群衆にではなく、いろいろな、特に信仰に深い熱い人たちにではなく、一般の人たちにではなくて、祭司長あるいは、ユダヤの長老たちに、この例え話を話されているということがわかります。

したがいまして、ここでイエス様が、「あなたがた」と呼びかけておられるのは、「彼ら」すなわちイスラエルの信仰の指導者を自認している、そういう人たちに対して仰っているのであります。

今日、ぶどう畑に行って働いてくれという父親の命令を聞いて、まず長男は何と言ったか。「はい、行きます。おとうさん。」と大変調子よく返事をしております。けれども、彼は結局行かなかったんですね。一方、弟はどうでしたかと言いますと、弟は父親の命令に対して、初めは「いやです。」と断っておりました。ところが後で、悪かったなと後悔して、そしてぶどう園に出かけました。

この二人の兄弟の答えと、その後の態度とが全く正反対であるということが、この例えの山と言ってもいいのではないかと思うのですね。この二人のうち、いったいどちらの方が父親の心にかなったかと言えば、もちろん口先だけで行きますと言いながら、父親の言いつけに従わないで、ぶどう畑に行かなかった長男よりも、最初は父親の命令に背いたけれども、後で悪かったと悔い改めて、父親の言いつけに従った弟の方であるということは、誰でもわかることであります。

イエス様のこの問いに対して、祭司長や長老たちも「弟の方です。」と答えました。そこでイエス様は、その答えを彼ら自身の上に適用なさいました。そして口先だけで、いかにも神様に忠実なような態度を示しながら、結局神様の命令に背いて、自分の信仰を正しいと誇っているような偽善者的な祭司たちよりも、初めは神様の言いつけに背いて、自分勝手に生きてきたけれども、後になって自分の罪を知って悔い改めて、バプテスマのヨハネが言った福音を信じた取税人や遊女たちの方が、先に神の御国に入ると仰ったのであります。

さらに続けてイエス様は、バプテスマのヨハネが神の国が近づいたから、今までの罪を悔い改めて神様に立ち返るようにと言った時に、取税人や遊女たちは、素直に彼の言葉を信じて、言われたとおりにした。

けれどもあなたがた祭司長や長老たちは、それを目の当たりにしながら、なおもヨハネの言葉を信じないで、自分の罪を認めて悔い改めようとしなかったと言って、彼らを非難されたのであります。これと似た記事が、ルカの福音書の 7 章にもあります。

ルカ
7:29 ヨハネの教えを聞いたすべての民は、取税人たちさえ、ヨハネのバプテスマを受けて、神の正しいことを認めたのです。
7:30 これに反して、パリサイ人、律法の専門家たちは、彼からバプテスマを受けないで、神の自分たちに対するみこころを拒みました。

このようにイエス様は仰っています。前に申しましたように、二人の息子の例えにある長男とは、直接には祭司やユダヤの指導者たちを指しており、また弟とは、取税人や遊女を指しておりますけれども、同時にこの長男とは、神様から与えられた掟である律法を守り行なうという契約を、神様と結ぶことによって神の民という恵みを与えられたにもかかわらず、神様の御心に背いて、律法を遵守しないユダヤ人たちであり、一方弟とは、初めは神様の招きに背を向けて、自分の手で作った偶像の神に仕えるような、自分の思いを中心に生きていたことが間違っていたと気づいて、悔い改めてイエス様を信じて神の御心に従うようになった異邦人を指すとも考えられます。

さらにまた、この長男とは、口先だけでイエス様、イエス様と言っているだけで、その実、相変わらず自分を義として、自分の考えで自分に頼って生活していても、それが主の御心にかなわぬことに気がつかないような、名ばかりの信者のことを指しているのであり、弟とは、イエス様を拒み続けていた不信者が、心からそのことが罪であったと悔い改めて、イエス様を信じ、イエス様の御心に従うようになった者を示唆すると言ってもよいと思います。イエス様は、名ばかりの信者に対して、マタイの福音書 7 章 21 節から 23 節で、次のように警告なさいました。

マタイ
7:21 わたしに向かって、『主よ、主よ。』と言う者がみな天の御国にはいるのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行なう者がはいるのです。
7:22 その日には、大ぜいの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行なったではありませんか。』

7:23 しかし、その時、わたしは彼らにこう宣告します。『わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。』

このように信仰においては、先に信じた者が後から信じた者よりも優位に立つということは限らない、そういうことは言えません。イエス様が、マタイの福音書 19 章 30 節で「先の者があとになり、あとの者が先になることが多いのです。」と仰っているように、信仰の歩みにおいては、先にイエス様を信じていても、それが形だけ上辺だけの信仰にすぎないような名ばかりの信者は、初めは主の御心を拒んでいてもその後で、心から悔い改めてイエス様を主と信じ、素直に御心に従う信者に追い越されてしまうことが多いのであります。

けれども、この例えから示される教訓は、それだけに留まりません。エゼキエル書 33 章 12 節から 16 節で、主は、預言者エゼキエルに次のように仰せになっています。

エゼキエル
33:12 人の子よ。あなたの民の者たちに言え。正しい人の正しさも、彼がそむきの罪を犯したら、それは彼を救うことはできない。悪者の悪も、彼がその悪から立ち返るとき、その悪は彼を倒すことはできない。正しい人でも、罪を犯すとき、彼は自分の正しさによって生きることはできない。
33:13 わたしが正しい人に、『あなたは必ず生きる。』と言っても、もし彼が自分の正しさに拠り頼み、不正をするなら、彼の正しい行ないは何一つ覚えられず、彼は自分の行なった不正によって死ななければならない。
33:14 わたしが悪者に、『あなたは必ず死ぬ。』と言っても、もし彼が自分の罪を悔い改め、公義と正義とを行ない、
33:15 その悪者が質物を返し、かすめた物を償い、不正をせず、いのちのおきてに従って歩むなら、彼は必ず生き、死ぬことはない。
33:16 彼が犯した罪は何一つ覚えられず、公義と正義とを行なった彼は必ず生きる。

すなわち、言いかえますと主から心が離れて、罪を行ない続けるならば、それより前に行なった義でそれを贖うことはできない。一方、いかなる悪人であっても心から神様の前に悔い改めれば、前に行なった悪によって滅びることはないというのであります。これは神様の全き義と愛の御心を示すみことばではないでしょうか。

つまり問題は、現在にあるのであって過去にはないのであります。義人といえどもその後の行ない次第では滅びる危険があり、一方いかなる悪人にも心からの悔い改めによって、救いの希望があるということであります。

しかしここで、誤解してはならないのは、だからといって人生の最後に死の間際に悔い改めさえすればよいのだから、それまでは、どんなに自分中心に勝手気ままなふるまいをして生きてもよいということではないのであります。

自分の好き勝手な生き方を楽しんでも、最後に悔い改めさえすれば救われるから、何をしてもいいというような、神様の大いなるあわれみとご愛を、御心を踏みにじるような傲慢不遜な人間に対しては、人の心の奥まで見通される神様は、愛の神様であると同時に、全き義であるそのご人格のゆえに、断固としてそのような不遜な人間の救いを拒まれるのであります。このような者について、神様は次のように仰せになっておられます。

イザヤ
59:1 見よ。主の御手が短くて救えないのではない。その耳が遠くて、聞こえないのではない。
59:2 あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。

初めに申しましたように、イエス様が祭司長やユダヤの長老たちに、この例えを話された意図は、イエス様の福音を信ぜず、律法についての知識はどんなにあってもそれを守らないばかりか、いかにも守っているかのように装い、自分の信仰が正しいとおごり高ぶり、他人を裁いている彼らの偽善的な信仰を戒められただけではありません。

イエス様を信じても、その信仰が形だけの信者、信仰が死んでいるような名ばかりの信者に対しても、同様にイエス様が戒められたのだと受けとめる必要があるのではないかと思います。このような名ばかりの信者に対して、主は次のように警告しておられます。

黙示録
3:15 「わたしは、あなたの行ないを知っている。あなたは、冷たくもなく、熱くもない。わたしはむしろ、あなたが冷たいか、熱いかであってほしい。
3:16 このように、あなたはなまぬるく、熱くも冷たくもないので、わたしの口からあなたを吐き出そう。
3:17 あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、乏しいものは何もないと言って、実は自分がみじめで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸の者であることを知らない。
3:18 わたしはあなたに忠告する。豊かな者となるために、火で精練された金をわたしから買いなさい。また、あなたの裸の恥を現わさないために着る白い衣を買いなさい。また、目が見えるようになるため、目に塗る目薬を買いなさい。
3:19 わたしは、愛する者をしかったり、懲らしめたりする。だから、熱心になって、悔い改めなさい。

何という主のあわれみとご愛に満ちた、しかも厳しい戒めのみことばではないでしょうか。さて、私たちは、二人の息子の例えの兄のような者なのでありましょうか。あるいは、弟のような者なのでありましょうか。イエス様を信じたと言いながら、聖書のみことばを知っていると言いながら、自分勝手な生き方を続けていてもいっこうにはばからない、生ぬるい名ばかりの信仰の持ち主なのでありましょうか。

あるいは、自分が神様に背いていたことに気づき、神様を恐れて心から悔い改めて、自分のような汚れた無に等しい者のために、十字架に架かってくださったイエス様に感謝し、それからの歩みを純粋にイエス様だけを主とし

て信頼し、みことばに頼り、イエス様につき従って行きたいと心から祈る信者なのでありましょうか。

私たちは、この二人の息子の例えを通して、自分の自らの信仰を改めて問い直す必要があるのではないかと思います。

神の御子イエス様が、十字架の上で尊いご自分のいのちをお捨てになり、信じる者にご自分のよみがえりのいのちを与えてくださるほどに、私たちを愛してくださったのは、救われた私たちが名ばかりの信者になるためでないのは言うまでもありません。

救われた私たちを子として愛し、ご自分に仕えるように、信じる者に恵みとして与えられた御霊に満たされ、導かれて御心に従うようにと、そしてそのような信者を通して、ご自分がご栄光を現そうとお考えになっているからではないでしょうか。

私たちを愛してくださる主は、それが罪赦された私たちにとって、一番の幸せであり、栄誉であるとお考えになっているのではないかと思います。

ダビデは、主に信頼する者の幸せについて次のように賛美しております。

詩篇
34:8 主のすばらしさを味わい、これを見つめよ。幸いなことよ。彼に身を避ける者は。
34:9 主を恐れよ。その聖徒たちよ。彼を恐れる者には乏しいことはないからだ。

また、パウロもイエス様を信じたことが、どんなに幸せであり、どんなに名誉なことであるかを次のように言い表しております。

ピリピ
3:7 しかし、私にとって得であったこのようなもの（この世の誇るべき様々な価値あるもの）をみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。
3:8 それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています。それは、私には、キリストを得、また、
3:9 キリストの中にある者と認められ、律法による自分の義ではなくて、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基づいて、神から与えられる義を持つことができる、という望みがあるからです。

このような何ものにも比べられない、すばらしい望みを与えられた私たちは、これからの残された地上での日々を、どのように歩んだらよいのでありましょうか。ご再臨の真近い時にあって、サタンはあらゆる方法で、私たちの信仰を揺るがそうと隙を伺っております。

このような時こそ、私たちはイエス様の恵みとあわれみによって与えられた信仰による義を、決して揺るがされることのないように、いつも霊の目を覚まし、自分の霊的な状態を御心に従って、最善に保って行けるように、そしてご再臨の日に備えられるように、御霊の助けを切に求めていく必要があるのではないかと思います。最後にコロサイ人への手紙から、みことばをお読みして終わりにいたします。

コロサイ
3:1 こういうわけで、もしあなたがたが、キリストとともによみがえらされたのなら、上にあるものを求めなさい。そこにはキリストが、神の右に座を占めておられます。
3:2 あなたがたは、地上のものを思わず、天にあるものを思いなさい。
3:3 あなたがたはすでに死んでおり、あなたがたのいのちは、キリストとともに、神のうちに隠されてあるからです。
3:4 私たちのいのちであるキリストが現われると、そのときあなたがたも、キリストとともに、栄光のうちに現われます。

信仰の妨げになる古い自分

2014 年 5 月 6 日、吉祥寺学び会
重田定義

ルカ
9:23 イエスは、みなの者に言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。

おはようございます。今、ご紹介にありましたように、今日は、私たち信者の信仰を妨げる最も大きなものは自分であるということにつきまして、ご一緒に考えてみたいと思います。

私たちは、イエス様を主と信じた時に、自分の知恵や意思によって、あるいは自分の判断によって信じたのでありましょうか。そうではなくて、様々な人生の嵐、例えば重い病気やあるいは辛い仕事や、あるいは人間関係、そういうものと自分が戦って、その挙句に自分の無力さとか愚かさとかを思い知らされまして、その結果疲れ果てて、イエス様が呼びかけである「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」と、このみことばに答えて、主の御許に行って、主の差し出された御手にすがって、そしてイエス様を救い主と信じて救われたのではないかと、これは皆様がそうではないかと思います。

救われた時に、私たちはもうこれからは自分に頼らない、自分のために十字架に架かって死んでくださったほどに、愛してくださったイエス様だけに信頼して、そのイエス様だけに従って生きようと決心したのではないでしょうか。

パウロは、ローマ人への手紙の中で次のように言っております。

ローマ人への手紙
6:6 私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが滅びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。
6:7 死んでしまった者は、罪から解放されているのです。
6:8 もし私たちがキリストとともに死んだのであれば、キリストとともに生きることにもなる、と信じます。

このように言っております。古い人とは、救われる前の自分であります。救われる前の古い自分は、イエス様とともに十字架に架かって死んで、そして罪のからだから解放されたのだから、これからはよみがえられたイエス様とともに、新しく生きると信じようではないかと、このようにパウロは言っております。

このように信仰生活とは、生けるまことの神様、そしてその神の御子のイエス様を主と信じ、救われる前のように自分の力に頼って生きるのではなくて、それからの人生を主にのみ信頼し、すべてを主に委ねて御心に従って歩むこと、これが救われた者の生き方ではないでしょうか。

しかし、イエス様は、先ほど読んでいただいたみことばのように仰いました。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」どうしてイエス様は、このようなことを弟子たちに、そしてイエス様を信じる私たちに仰っているのでありましょうか。

私たちは、主を信じた時に、すでに自分が信頼できない、自分自身を信頼できないこと、自分の力は全く頼りにならないことが、痛いほど解かったはずであります。ですから、私たちはイエス様とともに十字架に架かった時に、古い自分、すなわち自我と決別したのではないでしょうか。

ところが、現実には私たちはそう簡単に自分を捨てることができないのであります。なぜでしょうか。それは、信じた後も私たちがこの地上に置かれている間は、霊は主を信じた瞬間に新しくされても、からだの方は前の状態のままなので、そのからだに古い自分、自我が生き残っているからであります。イエス様は、その事をよーくご存知なので、このように仰ったのです。

ですから、私たちが本当にイエス様にお従いするためには、この自分のからだに残っている古い自分、自我を意識的に捨てなければならないのであります。主に信頼し、主に従う信仰の妨げとなるのは、まさにこの古い自分だからなのであります。

しかし、その事をいったい私たちはどれほど真剣に心を痛めているのでありましょうか。自分を捨てずに信仰生活を過ごしていても、それが自我による自力の信仰であり、そのような信仰は御心にかなわないということに、気づいていない信者がいかに多いことでありましょうか。

ここで聖書から自分の力、自分の知恵に信頼した結果、不信仰を招いた例をご一緒に見てみたいと思います。まず、ヨブであります。ヨブは、自分が優れた指導者として、また義人としてその力を発揮して、人々に尊敬されていることを、人だけではなく自分自身もそれを認めておりました。彼自身、次のように言っていることからも解かります。

ヨブ記
29:11 私について聞いた耳は、私を賞賛し、私を見た目は、それをあかしした。
29:12 それは私が、助けを叫び求める貧しい者を助け出し、身寄りのないみなしごを助け出したからだ。
29:13 死にかかっている者の祝福が私に届き、やもめの心を私は喜ばせた。
29:14 私は義をまとい、義は私をおおった。私の公義は上着であり、かぶり物であった。
29:15 私は盲人の目となり、足なえの足となった。
29:16 私は貧しい者の父であり、見知らぬ者の訴訟を調べてやった。
29:17 私はまた、不正をする者のあごを砕き、その歯の間から獲物を引き抜いた。

このようにですね、自分がいかに貧しい者、弱り果てた悩んでいる者の見方であり、支えとなっていたか、その事を自分自身もこのように認めて、ある意味で誇っていたのですね、自分の義を。ところが、彼はサタンの挑戦によって、神の許したもう試練に会いました。

その結果、家族や財産すべてを失い、彼自身も大変な苦痛を伴う皮膚病にかかってしまいました。それでもなお、彼は自分の力による義を主張して、とうとう神様に対して大変不遜なことを言ってしまったのですね。

ヨブ記
31:4 神は私の道を見られないのだろうか。私の歩みをことごとく数えられないのだろうか。
31:5 もし私がうそとともに歩み、この足が欺きに急いだのなら、
31:6 正しいはかりで私を量るがよい。そうすれば神に私の潔白がわかるだろう。

このような主を恐れぬ不遜なことを言ってしまったのであります。しかし、神様はそのヨブをあわれまれて、ヨブに直接お語りになりました。神ご自身が、いかに偉大な主権者であるかを、創造の御業とすべての被造物を、その御手にすべ治められるというその力によって、お示しになったのであります。

ヨブ記
40:8 あなたはわたしのさばきを無効にするつもりか。自分を義とするために、わたしを罪に定めるのか。

このようにですね、神様は彼に、無条件で主の御前にひれ伏すようにと求められたのであります。自分を捨て、主の御前に無条件で従う、これが信仰であります。ヨブは、依然として神様から与えられた自分の苦悩の原因については知ることはできませんでしたけれども、主なる神様の権威の前に、自我を砕かれて御前に自分をさげすんで、ちりと灰の中で心から悔い改めました。

ヨブ記
42:5 私はあなたのうわさを耳で聞いていました。しかし、今、この目であなたを見ました。

このように彼は、告白することができたのであります。

ルカの福音書 18 章にも、自分を義人と自認してはばからない不信仰なパリサイ人のたとえが記されていることは、皆様はよくご存知のことでありましょう。

イザヤは、６４章6節で「私たちの義はみな、不潔な着物のようです。」と言っておりますけれども、私たち信者もまた、自分の義が、不潔な着物のようなものであることに全く気づかないで、自分の義を神様に訴えるような、無意識のように自分を誇り主張するという、不遜な態度をとっているような者なのではないでしょうか。

イエス様の筆頭弟子として自認しておりましたペテロも、幾度となく自分の力、自分の判断に基づいて不信仰に陥るという過ちを重ねました。その中の２つの例を、ご存知だと思いますが挙げてみたいと思います。

マタイ
16:21 その時から、イエス・キリストは、ご自分がエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、そして三日目によみがえらなければならないことを弟子たちに示し始められた。
16:22 するとペテロは、イエスを引き寄せて、いさめ始めた。「主よ。神の御恵みがありますように。そんなことが、あなたに起こるはずはありません。」
16:23 しかし、イエスは振り向いて、ペテロに言われた。「下がれ。サタン。あなたはわたしの邪魔をするものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」

ペテロは、イエス様の御心が全く理解できないで、ただ浅はかな自分の判断だけに基づいて、イエス様がこの世に来てくださった最大の目的である、救いのご計画を妨げるようなことを言ってしまったのであります。またペテロは、イエス様がご自分が捕らえられることを弟子たちに予告された時に、次のように言ってしまいました。

マタイ
26:33 「たとい全部の者があなたのゆえにつまずいても、私は決してつまずきません。」
26:34 イエスは彼に言われた。「まことに、あなたに告げます。今夜、鶏が鳴く前に、あなたは三度、わたしを知らないと言います。」
26:35 ペテロは言った。「たとい、ごいっしょに死ななければならないとしても、私は、あなたを知らないなどとは決して申しません。」

ペテロは、自分の信仰の力を過信していたのですね。その結果、どうだったでしょうか。イエス様が捕らえられた時に、彼は人々に「お前は、イエスの仲間だ。」と言われた時に、それを大変恐れました。

そして、主が予告されたとおり、３度も主を否むという不信仰な態度をとってしまったのであります。こうして彼は、自分の信仰の力がいかに無力かを思い知って、心砕かれて、涙を流して悔い改めました。

そしてイエス様が、天に昇られた後、御霊によって霊の目が開かれてから殉教の死を遂げるまで、主の御心に従い続け、主を証しし続ける主の僕と変わったのであります。後になってペテロが、生まれつきの足なえを立たせた時、彼は「これは自分の信仰の力によってではなく、イエス様の御名、すなわちイエス様の権威によってである。」というように人々に証しをいたしました。

使徒の働き
3:12 ペテロはこれを見て、人々に向かってこう言った。「イスラエル人たち。なぜこのことに驚いているのですか。なぜ、私たちが自分の力とか信仰深さとかによって彼を歩かせたかのように、私たちを見つめるのですか。

3:16 そして、このイエスの御名が、その御名を信じる信仰のゆえに、あなたがたがいま見ており知っているこの人を強くしたのです。イエスによって与えられる信仰が、この人を皆さんの目の前で完全なからだにしたのです。

このようにですね、自分の信仰の力ではなくて、イエス様の権威によって、この足なえが癒されたのだという事を

証しいたしました。このように言うことができたのは、ペテロがもはや自分は全く無力であり、イエス様の力が自分の内に働かれているということを、その時にこのような奇跡が起こったのだということが、はっきり彼自身、自覚したのであります。私たち信者は、どうでしょうか。ペテロは、次のように証ししました。

第 2 ペテロ
1:16 私たちは、あなたがたに、私たちの主イエス・キリストの力と来臨とを知らせましたが、それは、うまく考え出した作り話に従ったのではありません。この私たちは、キリストの威光の目撃者なのです。
1:17 キリストが父なる神から誉れと栄光をお受けになったとき、おごそかな、栄光の神から、こういう御声がかかりました。「これはわたしの愛する子、わたしの喜ぶ者である。」
1:18 私たちは聖なる山で主イエスとともにいたので、天からかかったこの御声を、自分自身で聞いたのです。
1:19 また、私たちは、さらに確かな預言のみことばを持っています。夜明けとなって、明けの明星があなたがたの心の中に上るまでは（すなわち主のご再臨の時までは）、暗い所を照らすともしびとして、それに目を留めているとよいのです。
1:20 それには何よりも次のことを知っていなければいけません。すなわち、聖書の預言はみな、人の私的解釈を施してはならない、ということです。
1:21 なぜなら、預言は決して人間の意志によってもたらされたのではなく、聖霊に動かされた人たちが、神からのことばを語ったのだからです。

このようにはっきりペテロは証しをしております。

このように神様の御霊によって書かれた聖書のみことばは、すべて御霊に導かれることによってのみ、正しく理解できるものであるにもかかわらず、私たちは、私的解釈すなわち自分の力で、自分の判断で聖書を読み、自分勝手にみことばを取捨選択したり、自分勝手な解釈をするという過ちを犯してはいないでしょうか。

また私たちは、主の僕として熱心に福音を宣べ伝えようとします。この事自体は御心にかなう事ですけれど、一歩誤りますと、主に拠り頼むことなく、無意識的に自分の思い、自分の力で伝道し、結果として自分を誇るという危険に陥ることに注意しなければなりません。

このように、私たち信者に残っている古い人、自我は、主の御心に従うまことの信仰の大きな妨げとなり、そのような信者は、主の僕として用いられない者、役に立たない者になってしまうのであります。しかしながら、主の古き人、自我はそれだけではなくて、主の生けるみからだなる集会を構成する兄弟姉妹の不一致の大きな原因となります。パウロは、初代教会の中に生じた信者の間の不一致を嘆いて、次のように言っております。

第 1 コリント
3:1 さて、兄弟たちよ。私は、あなたがたに向かって、御霊に属する人に対するようには話すことができないで、肉に属する人、キリストにある幼子に対するように話しました。
3:2 私はあなたがたには乳を与えて、堅い食物を与えませんでした。あなたがたには、まだ無理だったからです。実は、今でもまだ無理なのです。
3:3 あなたがたは、まだ肉に属しているからです。あなたがたの間にねたみや争いがあることからすれば、あなたがたは肉に属しているのではありませんか。そして、ただの人のように歩んでいるのではありませんか。
3:4 ある人が、「私はパウロにつく。」と言えば、別の人は、「私はアポロに。」と言う。そういうことでは、あなたがたは、ただの人たちではありませんか。

肉に属する人とは、イエス様を信じてもなお、御霊の導きを求めず、御霊のお導きに従わず、古き人である自我に従っている信者のことであり、御霊に属する人とは、古き人が死んで御霊に従うようになった信者であります。

パウロは、有名なガラテヤ 2 章 20 節に「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。」と証ししておりますけれども、これこそ、御霊に属する信者なのであり、このような御霊に属する信者が、一つ御霊によって一致する集会こそが、主の生けるみからだなるまことの教会なのであります。

そしてそのような教会を通して、主はご栄光を現わされるのであります。したがいまして、御霊に属する信者とは、自分の信仰だけを大切にする信者ではなくて、主のみからだなる教会を構成する一つの器官としての自覚を、しっかりと保った信者であり、集会の信者同士の霊的な一致と集会を通して、主のご栄光が現されることを心から祈り求める信者なのであります。

では、どうしたら信仰の妨げとなる古き人である自我を捨てることができるのでありましょうか。

それにはただ一つの道しかありません。すなわち、この自我が砕かれることによってであります。しかし、それは決して自分の力でできる事ではありません。たとえ肉は痛んでも、ヨブやペテロのように、主によって砕いていただく他ないのであります。

そうすれば、バプテスマのヨハネが「あの方は盛んになり、私は衰えなければなりません。」とヨハネ伝 3 章 30 節で言っておりますように、御霊にへりくだって信者の内に住んでくださっている「あの方」すなわち主ご自身の御霊に拠り頼む者となることが、ここで初めて可能になります。

パウロは、ガラテヤの 5 章 16 節から 17 節で「私は言います。御霊によって歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。なぜなら、肉の願うことは御霊に逆らい、御霊は肉に逆らうからです。この二つは互いに対立していて、そのためあなたがたは、自分のしたいと思うことをすることができないのです。」と言っておりますように、私たちが、内に宿っておられる主の御霊にしっかり拠り頼んで歩めば、御霊ご自身が私たちの自我を押さえてくださいます。

しかし、そのためには私たちは、いつもせっかく開いてい

ただいた霊の目を覚まし続け、主に結びつき、御霊の満たしをいただけるように、真剣に祈り続けることが是非とも必要となってまいります。主のご再臨が真近い今の時にあって、私たちは信仰の妨げとなる古き人を捨てて、主の僕として少しでも御心にかなう歩みができるようにと、心からご一緒に祈りたいと思います。最後にみことばを一つお読みして終わりにいたします。

コロサイ
3:9 あなたがたは、古い人をその行ないといっしょに脱ぎ捨てて、
3:10 新しい人を着たのです。新しい人は、造り主のかたちに似せられてますます新しくされ、真の知識に至るのです。

福音を伝えるがゆえに起こる苦しみは喜び

2014 年 7 月 15 日、吉祥寺学び会
重田定義

第 1 ペテロ
4:12 愛する者たち。あなたがたを試みるためにあなたがたの間に燃えさかる火の試練を、何か思いがけないことが起こったかのように驚き怪しむことなく、
4:13 むしろ、キリストの苦しみにあずかれるのですから、喜んでいなさい。それは、キリストの栄光が現われるときにも、喜びおどる者となるためです。
4:14 もしキリストの名のために非難を受けるなら、あなたがたは幸いです。なぜなら、栄光の御霊、すなわち神の御霊が、あなたがたの上にとどまってくださるからです。

私たちキリスト者には、信仰ゆえの苦しみというのがあります。その苦しみのおもな原因は、3 つに分けられるのではないかと思います。

1 つは、主を信じて新しく生まれ変わった霊と、生まれつきの性質である肉的な罪の欲望との戦いから生じる苦しみであります。この苦しみをパウロは、ローマ書 7 章で言い表していることは皆様よくご存知のとおりであります。

ローマ
7:18 私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。

7:22 すなわち、私は、内なる人としては、神の律法を喜んでいるのに、
7:23 私のからだの中には異なった律法があって、それが私の心の律法に対して戦いをいどみ、私を、からだの中にある罪の律法のとりこにしているのを見いだすのです。
7:24 私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。

イエス様を信じる前は、罪のために霊が死んだようになっておりましたので、霊と肉との葛藤、霊と肉との戦いというのは私たちにはなかったのであります。けれども、イエス様を信じて十字架の上で流されたイエス様の血によって霊が聖められ、罪に対する感受性が高められた結果、こうした苦しみが生じてくるのではないかと思います。

2 つ目は、神の子にふさわしく聖め成長させようとしてくださる主のキリスト者に対する訓練によって生じる苦しみであります。この苦しみについては、これも有名なヘブル書 12 章に詳しく述べられております。

ヘブル
12:5「わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。
12:6 主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。」
12:7 訓練と思って耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです。父が懲らしめることをしない子がいるでしょうか。

12:9 さらにまた、私たちには肉の父がいて、私たちを懲らしめたのですが、しかも私たちは彼らを敬ったのであれば、なおさらのこと、私たちはすべての霊の父に服従して生きるべきではないでしょうか。
12:10 なぜなら、肉の父親は、短い期間、自分が良いと思うままに私たちを懲らしめるのですが、霊の父は、私たちの益のため、私たちをご自分の聖さにあずからせようとして、懲らしめるのです。

そして 3 番目が、本日の主題であるイエス様を宣べ伝えることによって迫害を受けるという苦しみであります。今日は、この迫害による苦しみは喜びであるということにつきまして、ご一緒に考えていきたいと思います。

イエス様を信じ、そのイエス様を宣べ伝えるがゆえに迫害を受けるということは、すでにイエス様がはっきり予告をしておられた事でありました。イエス様は早くから弟子たちにその事を仰っています。

マタイ
5:11 わたしのために、ののしられたり、迫害されたり、また、ありもしないことで悪口雑言を言われたりするとき、あなたがたは幸いです。
5:12 喜びなさい。喜びおどりなさい。天においてあなたがたの報いは大きいのだから。あなたがたより前に来た預言者たちも、そのように迫害されました。

そして何故迫害を受けるのか、イエス様を信じた者たちが迫害を受けるのか、その理由についても次のように仰っておられます。

ヨハネ
15:18 もし世があなたがたを憎むなら、世はあなたがたよりもわたしを先に憎んだことを知っておきなさい。
15:19 もしあなたがたがこの世のものであったなら、世は自分のものを愛したでしょう。しかし、あなたがたは世のものではなく、かえってわたしが世からあなたがたを選び出したのです。それで世はあなたがたを憎むのです。

イエス様は、捕らえられる前に弟子たちに心を打つ告別のメッセージをなさいましたけれども、その最後に次のように仰いました。

ヨハネ
16:33 わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがわたしにあって平安を持つためです。あなたがたは、世にあっては患難があります。しかし、勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝ったのです。」

以上のようにイエス様は、ご自分が世を去った後、弟子たちがこの世にあって主の福音を宣べ伝える生涯にお

いて、多くの患難に会うと予告なさいました。しかし同時にイエス様は、彼らがご自分と一つになっている限り、患難に会ってもイエス様が罪と死とに決定的な勝利を得られたという確信によって、平安と勇気を味わうことができ、天の御国において報いは大きいから、迫害に会っても勇敢であり、かつ喜びなさいと仰ったのであります。

その当時は、弟子たちにはイエス様が予告された事をまだよく理解できませんでしたけれども、イエス様が十字架に架けられ復活された後、御霊によって力を与えられた弟子たちは、イエス様こそがキリストであるということを、命がけで宣べ伝えたために、イエス様が仰ったとおり迫害に会いました。そして彼らは、イエス様が仰ったように、むしろ迫害に会ったことを喜ぶことができたのであります。弟子のペテロたちの例を聖書から見てみたいと思います。

使徒の働き
5:27 彼らが使徒たちを連れて来て議会の中に立たせると、大祭司は使徒たちを問いただして、
5:28 言った。「あの名によって教えてはならないときびしく命じておいたのに、何ということだ。エルサレム中にあなたがたの教えを広めてしまい、そのうえ、あの人の血の責任をわれわれに負わせようとしているではないか。」
5:29 ペテロをはじめ使徒たちは答えて言った。「人に従うより、神に従うべきです。
5:30 私たちの先祖の神は、あなたがたが十字架にかけて殺したイエスを、よみがえらせたのです。
5:31 そして神は、イスラエルに悔い改めと罪の赦しを与えるために、このイエスを君とし、救い主として、ご自分の右に上げられました。
5:32 私たちはそのことの証人です。神がご自分に従う者たちにお与えになった聖霊もそのことの証人です。」
5:33 彼らはこれを聞いて怒り狂い、使徒たちを殺そうと計った。

このようにあります。ところが使徒たちは、ガマリエルという人のとりなしによって、死を免れ鞭で打たれただけで、この時は釈放されました。これも主のお計らいによるものであります。その時彼らは、どういう態度を取ったのでありましょうか。

使徒の働き
5:41 そこで、使徒たちは、御名のためにはずかしめられるに値する者とされたことを喜びながら、議会から出て行った。

どうして使徒たちは、キリストのために迫害を受けたことを喜べたのでありましょうか。それは迫害を御名のためにはずかしめられるに値する者にされた、言い換えますと真のキリスト者として認められたからこそ、自分たちが迫害を受けた、このように確信できたからであります。パウロも何回となく死を覚悟するほどの苦しみに会いました。彼は第２コリントの手紙の中で次のように述べております。

第２コリントの手紙
1:8 兄弟たちよ。私たちがアジヤで会った苦しみについて、ぜひ知っておいてください。私たちは、非常に激しい、耐えられないほどの圧迫を受け、ついにいのちさえも危くなり、
1:9 ほんとうに、自分の心の中で死を覚悟しました。これは、もはや自分自身を頼まず、死者をよみがえらせてくださる神により頼む者となるためでした。

このように彼は言っております。こうして使徒たちの死をも恐れぬ働きによって、当時の世界中に福音が宣べ伝えられ、各地にイエス様を信じる信者の集いが生まれたのであります。これが初代教会であります。しかし、これらの初代教会もまた迫害を受けました。パウロは各地の初代教会の信者に宛てた手紙の中で、信者が迫害に会う理由について次のように述べております。

第１テサロニケ
2:14 兄弟たち。あなたがたはユダヤの、キリスト・イエスにある神の諸教会にならう者となったのです。彼らがユダヤ人に苦しめられたのと同じように、あなたがたも自分の国の人に苦しめられたのです。

3:3 このような苦難の中にあっても、動揺する者がひとりもないようにするためでした。あなたがた自身が知っているとおり、私たちはこのような苦難に会うように定められているのです。
3:4 あなたがたのところにいたとき、私たちは苦難に会うようになる、と前もって言っておいたのですが、それが、ご承知のとおり、はたして事実となったのです。

ピリピ
1:29 あなたがたは、キリストのために、キリストを信じる信仰だけでなく、キリストのための苦しみをも賜わったのです。
1:30 あなたがたは、私について先に見たこと、また、私についていま聞いているのと同じ戦いを経験しているのです。

第２テモテ
3:10 しかし、あなたは、私の教え、行動、計画、信仰、寛容、愛、忍耐に、
3:11 またアンテオケ、イコニオム、ルステラで私にふりかかった迫害や苦難にも、よくついて来てくれました。何というひどい迫害に私は耐えて来たことでしょう。しかし、主はいっさいのことから私を救い出してくださいました。
3:12 確かに、キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。

このようにパウロは、キリストにあって敬虔に生きようと願う者、それはとりもなおさず主の御心に従って福音を積極的に宣べ伝えようとする者のことを指しておりますが、そのような信者は皆迫害を受けると述べております。

また弟子のペテロも初代教会の信者に宛てた手紙で、次のように言っております。

第１ペテロ
2:20 罪を犯したために打ちたたかれて、それを耐え忍んだからといって、何の誉れになるでしょう。けれど

も、善を行なっていて苦しみを受け、それを耐え忍ぶとしたら、それは、神に喜ばれることです。
2:21 あなたがたが召されたのは、実にそのためです。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残されました。

善というのは、主の御心に忠実に従って生きること、言い換えますと福音を宣べ伝え続けて生きることです。

4:12 愛する者たち。あなたがたを試みるためにあなたがたの間に燃えさかる火の試練を、何か思いがけないことが起こったかのように驚き怪しむことなく、
4:13 むしろ、キリストの苦しみにあずかれるのですから、喜んでいなさい。それは、キリストの栄光が現われるときにも、喜びおどる者となるためです。

このように述べております。イエス様の御心に忠実に従って福音を宣べ伝える時、必ずといってよいほど敵意に基づく迫害を受ける事は、これは歴史が証明しております。有名な皇帝ネロによるローマの信者の大虐殺を初めとして、初代教会の信者はひどい迫害を受けました。

しかしそれでもなおかつ彼らは、その苦しみを主の苦しみに与れる者と受け取って、喜びつつ主の福音を宣べ伝え続けたのであります。こうした彼らの死をも恐れぬ献身的な伝道の実が実って、はるか遠いわが国にも主の福音が伝わりました。

しかし、わが国においても主を信じた信者は、かつては踏み絵を踏まされるなどの迫害に会って、殉教の死を遂げた信者がたくさん出たことはご承知のとおりであります。それればかりではありません。迫害は、第２次大戦中にもありました。投獄されたり、職を失った信者も多くいました。

このようにどの時代でも、どの国でも信者が主に忠実に従って生きようとすればするほど、迫害に出会います。今日、わが国では福音を述べ伝えたために、投獄されたり死ぬほどの迫害を受けるような事はありませんけれども、福音を伝えたために親、兄弟、親族、友人、隣人から非難されたり阻害されたり、白眼視されたり敬遠されるというような経験は、多くの兄弟姉妹がお持ちだと思います。

そのような時に私たちは、信仰の先輩たちに習って、それをキリストのための苦しみとして喜ぶことができるのでありましょうか。確かに迫害を恐れ、この世と妥協するような信者は迫害される事はありません。けれどもそのような信者の信仰は、生ぬるくなりしだいに衰えて、やがてはこの世の人と調子を合わせる事に何だ痛みを感じないような人間になってしまうおそれがあります。

もし、世を恐れて主の福音を宣べ伝える気持ちが萎えてしまっている自分に気づいたら、また主の御心を忘れてこの世と調子を合わせている自分に気づいたら、弟子たち、また主を信じる私たちのためにイエス様が、父なる神様になさったとりなしの祈りを思い出す必要があります。イエス様は次のように、私たちのために祈ってくださっています。

ヨハネ
17:14 わたしは彼らにあなたのみことばを与えました。しかし、世は彼らを憎みました。わたしがこの世のものでないように、彼らもこの世のものでないからです。
17:15 彼らをこの世から取り去ってくださるようにというのではなく、悪い者から守ってくださるようにお願いします。

17:18 あなたがわたしを世に遣わされたように、わたしも彼らを世に遣わしました。
17:19 わたしは、彼らのため、わたし自身を聖め別ちます。彼ら自身も真理によって聖め別たれるためです。
17:20 わたしは、ただこの人々のためだけでなく、彼らのことばによってわたしを信じる人々のためにもお願いします。
17:21 それは、父よ、あなたがわたしにおられ、わたしがあなたにいるように、彼らがみな一つとなるためです。また、彼らもわたしたちにおるようになるためです。そのことによって、あなたがわたしを遣わされたことを、世が信じるためなのです。
17:22 またわたしは、あなたがわたしに下さった栄光を、彼らに与えました。それは、わたしたちが一つであるように、彼らも一つであるためです。
17:23 わたしは彼らにおり、あなたはわたしにおられます。それは、彼らが全うされて一つとなるためです。それは、あなたがわたしを遣わされたことと、あなたがわたしを愛されたように彼らをも愛されたこととを、この世が知るためです。
17:24 父よ。お願いします。あなたがわたしに下さったものをわたしのいる所にわたしといっしょにおらせてください。あなたがわたしを世の始まる前から愛しておられたためにわたしに下さったわたしの栄光を、彼らが見るようになるためです。

イエス様はこのように、私たち信者がご自分と一つになることを父なる神様に祈っておられるのであります。私たちが主と一つになれば、主の御心を自分の思いとすることができ、主の喜びを自分の喜びとすることができ、主の苦しみをも自分の苦しみとすることができます。

しかし、私たちが主と一つであることを強く覚えるのは、いったいどんな時でありましょうか。平穏無事な時、順調な時、この世的な幸せの中にある時よりも、苦難患難の中にある時ではないでしょうか。

私たちが主の僕として、福音を伝えるために迫害に会った時に、主が迫害に会って苦しまれた事を改めて覚えて、この苦しみを主イエス様のための苦しみと思うことができた時に、私たちは主と一つになれた事を強く覚え、心から喜ぶことができるのではないでしょうか。主は福音の種を蒔いたために、迫害に会って流している私たちの涙を見過ごしにはなさいません。その涙を喜びに変えてくださいます。

詩篇
126:5 涙とともに種を蒔く者は、喜び叫びながら刈り取ろう。
126:6 種入れをかかえ、泣きながら出て行く者は、束

をかかえ、喜び叫びながら帰って来る。

とありますように、主の福音を携えて迫害に会いながらも福音を伝え続けた者は、実りの束をかかえて、喜び叫びながら天の御国に凱旋するのであります。ヘブル人への手紙の中では、信者に次のように勧めております。

ヘブル人への手紙
13:12 ですから、イエスも、ご自分の血によって民を聖なるものとするために、門の外で苦しみを受けられました。
13:13 ですから、私たちは、キリストのはずかしめを身に負って、宿営の外に出て、みもとに行こうではありませんか。

すなわち、イエス様がユダヤ人からはずかしめを受け、イスラエルの城門の外で、十字架につけられた事を思って、私たちキリスト者も迫害を覚悟の上で、身の安全のためにこの世という場所に留まることなく、恐れずに福音を宣べ伝えつつ、主のみもとに行こうではないかと、このように勧めているのであります。

主のご再臨がいよいよ近づいている今日、福音を宣べ伝える私たちには、これから先どんな迫害に会うかもしれません。けれども、いかなる迫害に会っても、私たちは使徒たちのように、これをキリストの御名のために、はずかしめを受けるに値する者とされたことを喜ぶことができるように、これをキリストのための苦しみとして喜ぶことができるように、私たちの信仰の歩みを御霊によって強めていただきたいと切に祈る次第であります。
最後に第 1 ペテロから一箇所、お読みして終わりたいと思います。

第 1 ペテロ
5:10 あらゆる恵みに満ちた神、すなわち、あなたがたをキリストにあってその永遠の栄光の中に招き入れてくださった神ご自身が、あなたがたをしばらくの苦しみのあとで完全にし、堅く立たせ、強くし、不動の者としてくださいます。

信仰におけるまことの悔い改めの大切さ

2014 年 9 月 9 日、吉祥寺学び会
重田定義

マタイ
3:5 さて、エルサレム、ユダヤ全土、ヨルダン川沿いの全地域の人々がヨハネのところへ出て行き、
3:6 自分の罪を告白して、ヨルダン川で彼からバプテスマを受けた。
3:7 しかし、パリサイ人やサドカイ人が大ぜいバプテスマを受けに来るのを見たとき、ヨハネは彼らに言った。「まむしのすえたち。だれが必ず来る御怒りをのがれるように教えたのか。
3:8 それなら、悔い改めにふさわしい実を結びなさい。
3:9『われわれの先祖はアブラハムだ。』と心の中で言うような考えではいけません。あなたがたに言っておくが、神は、この石ころからでも、アブラハムの子孫を起こすことがおできになるのです。
3:10 斧もすでに木の根元に置かれています。だから、良い実を結ばない木は、みな切り倒されて、火に投げ込まれます。
3:11 私は、あなたがたが悔い改めるために、水のバプテスマを授けていますが、私のあとから来られる方は、私よりもさらに力のある方です。私はその方のはきものを脱がせてあげる値うちもありません。その方は、あなたがたに聖霊と火とのバプテスマをお授けになります。
3:12 手に箕を持っておられ、ご自分の脱穀場をすみずみまできよめられます。麦を倉に納め、殻を消えない火で焼き尽くされます。」

今日は「信仰における真の悔い改めの大切さ」ということにつきましてご一緒に考えてみたいと思います。ユダヤ人は、世の終わりに神の怒り、神の裁きを免れて神の国に入ることができるのは、自分たちだけである、すなわち神に選ばれたアブラハムの子孫である自分たちだけであると信じ込んでおりました。

けれどもバプテスマのヨハネは、ここでそのようなユダヤ人の特に形式的、表面的な律法の守り方をしていても、それを良しとしているような偽善的なパリサイ人、サドカイ人の安易な考えを厳しく戒めて、そしてアブラハムの子孫なるがゆえに天国に入れるのではない、良い実を結ぶ者だけが入ることができる。

そしてすでにメシアが来られて麦と殻が選り分けられる裁きの日が近づいている。だから悔い改めにふさわしい実を結ぶように、このように薦めて洗礼をさずけていたのであります。一方イエス様は「時が満ち神の国が近くなった。悔い改めて福音を信じなさい。」と福音伝道の第一声をあげられました。

マルコ伝
1:14 ヨハネが捕えられて後、イエスはガリラヤに行き、神の福音を宣べて言われた。
1:15「時が満ち、神の国は近くなった。悔い改めて福音を信じなさい。」

このイエス様の仰ったみことばは、バプテスマのヨハネが言ったことと一見同じように見えますけれども、何のために、あるいはどのように悔い改めをするのかという点については、全く異なっております。

神の国が近いと説いたバプテスマのヨハネは、神の裁きの日が近づいているから、悔い改めにふさわしい良い実を結ぶようにという事でありました。これは言うなれば律法的悔い改めといっても良いのではないかと思うのですね。

けれどもイエス様は違うのですね。神の裁きの日は近いが、その神の裁きを免れる救いの福音が来ているのだから、神の国に入るためには、罪を悔い改めて福音を信じなさい。良い実を結ぶのではなくて、福音を信じなさいと言っておられるのですね。これは言うなれば福音的悔い改めとも言えるのではないかと思います。

アダムが神の言いつけに背いて以来、その性質を受け継いだ人間は、神の掟である律法を正しく守り行うことができなくなってしまいました。そのような人間をあわれまれた神様は、律法を守ることによってではなく、福音を信じることによって罪を赦すご計画をお立てになりました。

そしてそれを自ら実行なさったのであります。この福音とは、言うまでもなく罪に汚れた人間を救うために遣わされた神の御子であるイエス様ご自身であります。そしてこのイエス様の十字架の死と復活の御業が、自分のためであったことを知って悔い改め、イエス様を救い主として信じる者には、罪の赦しと永遠のいのちが与えられるということであります。

このように神の国に入るには、イエス様が仰ったように自分の罪を悔い改めて福音、すなわち今申し上げたように私たちの罪を身代わりに負って、十字架の上で死んでくださった神の御子イエス様を救い主と信じることが是非とも必要なのであります。パウロは、これについて次のように言っております。

ガラテヤ
2:16 しかし、人は律法の行ないによっては義と認められず、ただキリスト・イエスを信じる信仰によって義と認められる、ということを知ったからこそ、私たちもキリスト・イエスを信じたのです。これは、律法の行ないによってではなく、キリストを信じる信仰によって義と認められるためです。なぜなら、律法の行ないによって義と認められる者は、ひとりもいないからです。

神様は私たち人間に、この福音を信じることによって、今まで律法の行いによっては決して神様に義と認められない人間すべてを、義と認めるという恵みを私たちに与えられたのであります。これによって私たち人間は、初めて律法の束縛から解放されました。まさに言葉通り文字通り「福音」であります。

しかしこの福音を信じるためには、イエス様が仰ったようにまず悔い改めることが必要となります。悔い改めには、向き変わり、あるいは立ち戻り、あるいは心の転換という意味があります。

つまり悔い改めの要点は、自分たちが自分自身に向いていた思いから、神様への思いに向き変わること、自己中心の心を捨て去って神様中心の心に転換することなのであります。預言者や使徒たちが、人々に悔い改めを迫ったのは、まさにこの一点すなわち自分の罪を知って神様を恐れ、御前にひれ伏して真心からの悔い改めによって、神様に立ち戻るように立ち返るようにということでありました。

預言者サムエルも、そのようにイスラエルの民に悔い改めを迫っております。

第 1 サムエル
7:3 そのころ、サムエルはイスラエルの全家に次のように言った。「もし、あなたがたが心を尽くして主に帰り、あなたがたの間から外国の神々やアシュタロテを取り除き、心を主に向け、主にのみ仕えるなら、主はあなたがたをペリシテ人の手から救い出されます。」
7:4 そこでイスラエル人は、バアルやアシュタロテを取り除き、主にのみ仕えた。

こういうふうに記されておりますように、悔い改めるということと、主い立ち返るということは同じなのであります。神様は私たちに罪の赦しを提供される時に、それと引き換えにという言葉は適当かどうか解りませんけれども、悔い改めを主に立ち返ることを、私たちに望んでおられる要求しておられるのであります。これについてイザヤは次のように言っております。

イザヤ
55:6 主を求めよ。お会いできる間に。近くにおられるうちに、呼び求めよ。
55:7 悪者はおのれの道を捨て、不法者はおのれのはかりごとを捨て去れ。主に帰れ。そうすれば、主はあわれんでくださる。私たちの神に帰れ。豊かに赦してくださるから。

すなわちイザヤは、ここで神様はいつも私たちをあわれもうと待っておられる。しかしそのあわれみをいただくためには、私たちが悔い改めることが、すなわち神様に立ち返ることが是非とも必要であると言っているのであります。

神様に立ち返ることのない悔い改めはありません。ここで大切なことは、第 1 に、この悔い改めは、単に外見的な行いが変わるということではないのです。魂、霊そのものが変わらなければならないということであります。形だけの悔い改めは、悔い改めになりません。主なる神様は、人の心をご覧になる方だからであります。

第 1 サムエル
16:7 人はうわべを見るが、主は心を見る。

とあるとおりであります。したがいまして、口先だけのうわべだけの悔い改めではない、偽りのない真心からの悔い改めが、私たちに求められているのであります。

第 2 に、悔い改めには、天地万物の創造主にして支配者であり、全き聖にして義なる生ける神様に対する心からの恐れが先立つ必要があります。聖書は、悔い改めを薦める時に、しばしば神様の裁きについて言及しております。たとえば、パウロは偶像の神を拝んでいるアテネの人々に対して、次のように言っております。

使徒の働き
17:23 私が道を通りながら、あなたがたの拝むものをよく見ているうちに、『知られない神に。』と刻まれた祭壇があるのを見つけました。そこで、あなたがたが知らずに拝んでいるものを、教えましょう。
17:24 この世界とその中にあるすべてのものをお造りになった神は、天地の主ですから、手でこしらえた宮などにはお住みになりません。
17:25 また、何かに不自由なことでもあるかのように、人の手によって仕えられる必要はありません。神は、すべての人に、いのちと息と万物とをお与えになった方だからです。
17:26 神は、ひとりの人からすべての国の人々を造り出して、地の全面に住まわせ、それぞれに決められた時代と、その住まいの境界とをお定めになりました。
17:27 これは、神を求めさせるためであって、もし探り求めることでもあるなら、神を見いだすこともあるのです。確かに、神は、私たちひとりひとりから遠く離れてはおられません。
17:28 私たちは、神の中に生き、動き、また存在しているのです。あなたがたのある詩人たちも、『私たちもまたその子孫である。』と言ったとおりです。
17:29 そのように私たちは神の子孫ですから、神を、人間の技術や工夫で造った金や銀や石などの像と同じものと考えてはいけません。
17:30 神は、そのような無知の時代を見過ごしておられましたが、今は、どこででもすべての人に悔い改めを命じておられます。
17:31 なぜなら、神は、お立てになったひとりの人により義をもってこの世界をさばくため、日を決めておられるからです。そして、その方を死者の中からよみがえらせることによって、このことの確証をすべての人にお与えになったのです。」

このように言っております。ここでパウロは、神様は人間が無知なるがゆえに、偶像の神を拝むというような時代を、お見過ごしにはならない。御子イエス様の復活をもって裁きの日が近いことの確かな証拠とされている。だから時期を失わないように、時を失わないように悔い改めなさいと、このように呼びかけているのであります。

パウロはまた私たち人間が、罪の裁きを恐れるだけではなくて、自分の罪がどんなにか神様の御心を悲しませているかを知って、心から悲しみ悔い改めれば、この悔い改めは救いをもたらすとも言っております。

第 2 コリント
7:10 神のみこころに添った悲しみは、悔いのない、救いに至る悔い改めを生じさせますが、世の悲しみは死をもたらします。

心からの悔い改めには、私たちの肉が死んで御霊によ

って生きるということが、それに伴わなければなりません。パウロは、ローマ書の中で次のように言っております。

ローマ書
6:4 私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあって新しい歩みをするためです。
6:5 もし私たちが、キリストにつぎ合わされて、キリストの死と同じようになっているのなら、必ずキリストの復活とも同じようになるからです。
6:6 私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが滅びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。
6:7 死んでしまった者は、罪から解放されているのです。
6:8 もし私たちがキリストとともに死んだのであれば、キリストとともに生きることにもなる、と信じます。

パウロが言っておりますように、もし私たちがキリストの死に本当の意味で与かるならば、キリストの力によって、私たちの古き人は十字架につけられ、もはや私たちの生まれつきの肉の性質は、力をふるうことができなくなるはずであります。

またもし私たちが、キリストの復活に預かるならば、私たちは神様の義に応えうる新しいいのちによみがえらせられるのであります。したがいまして、悔い改めの目指す所は、アダムの罪によって失われてしまった神の形に似て造られた人間本来の形を、私たち信者の上に再び形成されることにあるということができるのではないでしょうか。

第２コリント
3:18 私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。

コロサイ書
3:9 あなたがたは、古い人をその行ないといっしょに脱ぎ捨てて、
3:10 新しい人を着たのです。新しい人は、造り主のかたちに似せられてますます新しくされ、真の知識に至るのです。

しかし、私たち信者が主に似た者に変えられるためには、信じた後も私たちの肉になお根深く残っております自我のゆえに犯してしまいがちな罪を、そのたびに心から悔い改める必要があります。そして私たち信者が、心から悔い改めるならば、その悔い改めをとりなしてくださる主の御霊の力によって、私たち信者は聖められながら、一歩一歩主の似姿に変えられて行くのであります。

ローマ書
8:34 罪に定めようとするのはだれですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、私たちのためにとりなしていてくださるのです。

8:26 御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてくださいます。

しかしここで私たちは、悔い改める余地のない罪について考えなければなりません。聖書では、次のような者は再び悔い改めに立ち返らせることはできないと言っております。

ヘブル書
6:4 一度光を受けて天からの賜物の味を知り、聖霊にあずかる者となり、
6:5 神のすばらしいみことばと、後にやがて来る世の力とを味わったうえで、
6:6 しかも堕落してしまうならば、そういう人々をもう一度悔い改めに立ち返らせることはできません。彼らは、自分で神の子をもう一度十字架にかけて、恥辱を与える人たちだからです。

大変厳しいことばですが、ここで言う堕落というのは、単にだらけた生活によって主に従わないという、そういう事ではなくて、意図的に意識して主の御心をはっきり拒絶する、拒むような人のことであります。このように、一旦聖霊に与かり救いの恵みを体験していながら、主に対して意識的に逆らう態度をとり続けるような者については、次のようなみことばがあります。

ヘブル書
10:26 もし私たちが、真理の知識を受けて後、ことさらに罪を犯し続けるならば、罪のためのいけにえは、もはや残されていません。
10:27 ただ、さばきと、逆らう人たちを焼き尽くす激しい火とを、恐れながら待つよりほかはないのです。
10:29 まして、神の御子を踏みつけ、自分を聖なるものとした契約の血を汚れたものとみなし、恵みの御霊を侮る者は、どんなに重い処罰に値するか、考えてみなさい。

このようにありますように、こういう信者に対しては悔い改めの余地は残されていないということであります。イエス様ご自身も次のように仰っておられます。

マタイ伝
12:31 だから、わたしはあなたがたに言います。人はどんな罪も冒涜も赦していただけます。しかし、聖霊に逆らう冒涜は赦されません。
12:32 また、人の子に逆らうことばを口にする者でも、赦されます。しかし、聖霊に逆らうことを言う者は、だれであっても、この世であろうと次に来る世であろうと、赦されません。

すなわち、人がまだ霊の目が開かれていない時に、イエス様を否定したり冒涜するような発言や行動をしても、それは無知なるがゆえに赦されます。けれども、御霊によ

って開かれた霊によってイエス様を信じた後になって、神様、イエス様を非難したり御心に逆らったりする事をはばかる事がないような者は、御霊を冒涜する者であって、そのような者は赦されることがないとここでイエス様は仰っているのであります。パウロは、これを主に出会う前の自分に当てはめて次のように告白しております。

第１テモテ
1:13 私は以前は、神をけがす者、迫害する者、暴力をふるう者でした。それでも、信じていないときに知らないでしたことなので、あわれみを受けたのです。

初めに申しましたように、悔い改めとは、自分中心の生き方から神中心の生き方に向き変わること、立ち返ることであります。それは自分の肉が死んで、御霊によって生まれ変わることによって初めて可能となります。私たち信者は、こうして自我が砕かれた自分をイエス様に明け渡し、御前にへりくだり、日々自分の思いを主に調べていただいて、もし悔い改めるべき罪が示されたならば、直ちに心から悔い改めて主に立ち返ることができるように、御霊の支えとお導きを絶えず祈る必要があります。

主のご再臨の近い今、私たち信者は悔い改めのない自己中心の信仰に生きる者ではなく、自分をかえりみて日々悔い改め、イエス様中心の信仰に生きる、主に喜ばれる僕としての歩みができるように、心から願うしだいであります。最後にみことばをお読みして終わります。

黙示録
3:19 わたしは、愛する者をしかったり、懲らしめたりする。だから、熱心になって、悔い改めなさい。

ノアの箱舟によって示された警告

2015 年 3 月 24 日、吉祥寺学び会
重田定義

> 創世記
> 7:13 ちょうどその同じ日に、ノアは、ノアの息子たち
> セム、ハム、ヤペテ、またノアの妻と息子たちの三人
> の妻といっしょに箱舟にはいった。
> 7:14 彼らといっしょにあらゆる種類の獣、あらゆる種
> 類の家畜、あらゆる種類の地をはうもの、あらゆる種
> 類の鳥、翼のあるすべてのものがみな、はいった。
> 7:15 こうして、いのちの息のあるすべての肉なるもの
> が、二匹ずつ箱舟の中のノアのところにはいった。
> 7:16 はいったものは、すべての肉なるものの雄と雌
> であって、神がノアに命じられたとおりであった。それ
> から、主は、彼のうしろの戸を閉ざされた。

ノアがどんな人か、また何故箱舟を作るようになったか、その事について今日はご一緒に考えてみたいと思います。

創世記には、今のところのちょっと前に次のように書いてあります。

> 創世記
> 6:9 これはノアの歴史である。ノアは、正しい人であっ
> て、その時代にあっても、全き人であった。ノアは神と
> ともに歩んだ。
> 6:10 ノアは三人の息子、セム、ハム、ヤペテを生ん
> だ。
> 6:11 地は、神の前に堕落し、地は、暴虐で満ちてい
> た。
> 6:12 神が地をご覧になると、実に、それは、堕落して
> いた。すべての肉なるものが、地上でその道を乱して
> いたからである。
> 6:13 そこで、神はノアに仰せられた。「すべての肉な
> るものの終わりが、わたしの前に来ている。地は、彼
> らのゆえに、暴虐で満ちているからだ。それで今わた
> しは、彼らを地とともに滅ぼそうとしている。
> 6:14 あなたは自分のために、ゴフェルの木の箱舟を
> 造りなさい。
>
> 7:1 主はノアに仰せられた。「あなたとあなたの全家
> 族とは、箱舟にはいりなさい。あなたがこの時代にあ
> って、わたしの前に正しいのを、わたしが見たからで
> ある。
> 7:2 あなたは、すべてのきよい動物の中から雄と雌、
> 七つがいずつ、きよくない動物の中から雄と雌、一つ
> がいずつ、
> 7:3 また空の鳥の中からも雄と雌、七つがいずつを
> 取りなさい。それはその種類が全地の面で生き残る
> ためである。
> 7:4 それは、あと七日たつと、わたしは、地の上に四
> 十日四十夜、雨を降らせ、わたしが造ったすべての
> 生き物を地の面から消し去るからである。」
> 7:5 ノアは、すべて主が命じられたとおりにした。

人間とは、天地万物の創造主にして聖なる神が、ご自分と親子のように親しく交わることができるように、ご自分に似た者として特別に愛してお造りになった被造物でございます。

ところが、そのようにして造られた最初の人間のアダムとエバが、サタンに誘惑されて神様の言いつけに背くという罪を犯してしまった。その結果アダムとエバは、神様との交わりを失い、聖い神様の前に堕落した状態に陥ってしまいました。

そしてこの堕落は、アダムの罪を遺伝子のように受け継いだ人間すべてに及び、そのためノアの時代に地上には悪と暴虐に満ちた様になってしまっていたのであります。

しかしながら、ノアだけは正しい人、全き人であったと記されております。これは、完全無欠という意味ではないのですね。神様の仰せに忠実に従う人、すなわち神様との関係において正しい人という意味であります。「ノアは、すべて主が命じられたとおりにした。」とありますように、ノアは洪水の兆しなど全く見られなかった時に、疑うことなくただ神様の仰せに従って、人々に馬鹿にされながら巨大な箱舟を作りました。

そのようなノアを神様は、ご自分の前に正しい者とお認めになったのであります。ノアたちが箱舟に入り、主がうしろの戸を閉ざされてから 7 日後に、神様が仰ったとおりの事が起きました。

雨が 40 日 40 夜降り続いた結果、大洪水が地の表を覆い、地のすべての生き物は死に絶えたのであります。聖書には、水が 150 日間も引かなかったと記しております。最近は、世界各地で大洪水が起こり、大きな被害が出たことはご存知のとおりですけど、ノアの洪水はそれらとはとうてい比較にならない地球規模の大きさだったのであります。

その間、箱舟の中の様子はどんなだったでしょうか。創世記 8 章 1 節には「神は、ノアと、箱舟の中に彼といっしょにいたすべての獣や、すべての家畜とを心に留めておられた」と書いてあります。

そのことからも解りますように、神様は箱舟の中のノアたちをずーと守っていてくださいました。ですから、150 日もの長い間も箱舟の中は主の平安に満ちていたのであります。

一方、箱舟の外には恐ろしい光景がありました。高い山々もすべて水没するほどの洪水の中で、避難する所はどこにもなく、人間を含めてすべての生き物は荒れ狂う大水に流され、助けを求めながら溺れ死んでいったのであります。

その違いは、どうして生じたのでありましょうか。それは、神様の仰せに従って生きていたか、神様の仰せに背き自分の思いに従って生きていたかの違いであります。その違いが生きるか死ぬかという大きな差になったのであります。

ノアの箱舟の時代からはるかに下った今日、世界の状態はどうでありましょうか。私たちが目にする世界の状態は、まさにノアの時代と同じように、いやそれ以上に悪と暴虐が満ち満ちていると言えるのではないでしょうか。

世界中で戦争やテロ、殺人、暴行、詐欺、裏切りなど数え上げればきりがないほどの事件が、毎日毎日起こっております。それは、相変わらず人間が神様に背を向けて、自分の思いを満たす事だけしか考えないような勝手放題な生き方をしているためであります。

自分はそのような事はしていないと思う人も少なくないと思いますけれども、神様は人の心の中をご覧になります。ですから、行為として外に現れなくても心に思うだけで行為をしたのと同じと見なされるのであります。イエス様は次のように仰っています。

マルコ伝
7:20 また言われた。「人から出るもの、これが、人を汚すのです。
7:21 内側から、すなわち、人の心から出て来るものは、悪い考え、不品行、盗み、殺人、
7:22 姦淫、貪欲、よこしま、欺き、好色、ねたみ、そしり、高ぶり、愚かさであり、
7:23 これらの悪はみな、内側から出て、人を汚すのです。」

私たちが、謙虚に自分の心をかえりみる時に、誰でもイエス様が心の中から悪として挙げられたうち、いくつかは思い当たるのではないでしょうか。では、神様はこのような悪に汚れた人間、この世を滅ぼされるために再びノアの時のような大洪水を起こされるのでありましょうか。

もし、起こされるとすればその時はいつであり、またその時ノアのように救われる人は、いったいいるのでありましょうか。この大変気になる疑問に、聖書は次のように答えております。

第 2 ペテロ
3:3 まず第一に、次のことを知っておきなさい。終わりの日に、あざける者どもがやって来てあざけり、自分たちの欲望に従って生活し、
3:4 次のように言うでしょう。「キリストの来臨の約束はどこにあるのか。先祖たちが眠った時からこのかた、何事も創造の初めからのままではないか。」
3:5 こう言い張る彼らは、次のことを見落としています。すなわち、天は古い昔からあり、地は神のことばによって水から出て、水によって成ったのであって、
3:6 当時の世界は、その水により、洪水におおわれて滅びました。
3:7 しかし、今の天と地は、同じみことばによって、火に焼かれるためにとっておかれ、不敬虔な者どものさばきと滅びとの日まで、保たれているのです。

このみことばによって、神様はノアの時代には洪水によって、不敬虔な者を滅ぼされましたけれども、今度は洪水ではなく火によって滅ぼされるということが解ります。具体的に火が何を指すのかは私たちには解りませんけれども、洪水よりもさらに恐ろしいものであることは、容易に想像がつきます。そしてその滅びの日がいつであるかにつきましては、イエス様は次のように仰っておられます。

マタイ伝
24:32 いちじくの木から、たとえを学びなさい。枝が柔らかになって、葉が出て来ると、夏の近いことがわかります。
24:33 そのように、これらのことのすべてを見たら、あなたがたは、人の子が戸口まで近づいていると知りなさい。
24:34 まことに、あなたがたに告げます。これらのことが全部起こってしまうまでは、この時代は過ぎ去りません。
24:35 この天地は滅び去ります。しかし、わたしのことばは決して滅びることがありません。
24:36 ただし、その日、その時がいつであるかは、だれも知りません。天の御使いたちも子も知りません。ただ父だけが知っておられます。
24:37 人の子が来るのは、ちょうど、ノアの日のようだからです。
24:38 洪水前の日々は、ノアが箱舟にはいるその日まで、人々は、飲んだり、食べたり、めとったり、とついだりしていました。
24:39 そして、洪水が来てすべての物をさらってしまうまで、彼らはわからなかったのです。人の子が来るのも、そのとおりです。

イエス様が仰った「これらのこと」とは、滅びの日の前兆としていろいろな現象が明らかになってまいりますけれども、たとえば、にせキリストが現れて人を惑わす、あるいは人々が互いに憎しみ合い、不法がはびこり、愛が冷たくなり、飢饉や大地震が起こる、民族間の争いが起こる、そういうふうな様々な事が起こってきている。

これをイエス様は、夏が近くなった時のいちじくの木の枝と葉の変化にたとえて、説明をなさっているのであります。まさに今の世の中の有様は、そのとおりの状況となっております。そして 2000 年前に、私たちの罪を贖うために貧しい人の姿をとって、この世に来てくださったイエス様は、今度は神様に逆らい続ける罪と悪に満ちたこの世を滅ぼされる裁き主としての栄光のお姿で、ノアの日と同様にこの地上に突然来ると、はっきり仰っているのであります。

ではこのような恐ろしい事態から脱出するには、いったいどうしたらよいでしょうか。その時が来てからではもはや手遅れなのは、これまでご一緒に見てきたとおりであります。イエス様は、先ほどのみことばに続いて、不思議な事を仰いました。

マタイ伝
24:40 そのとき、畑にふたりいると、ひとりは取られ、ひとりは残されます。
24:41 ふたりの女が臼をひいていると、ひとりは取られ、ひとりは残されます。

これはどういう事なのでしょうか。それは世の終わりに起こる、今だかつて経験したことのないような苦難が起こる

前に、すなわちイエス様が裁き主としてこの地上にお出でになる、ご再臨なさる前に、イエス様を信じた者は空中まで迎えに来てくださったイエス様によって、天の御国に一挙に携え上げられ、その時にまだイエス様を信じていない者、イエス様を拒んでいた者は地上に残されるということであります。

パウロは第１テサロニケ４章 16 節から 17 節で、この主のご再臨の様子について次のように言っています。裁きのためにこの地上に来られるのが、これが地上再臨と申しますけれども、イエス様を信じた者を空中に迎えに来てくださって、携え上げてくださるのを、それに対して空中再臨と申します。第１テサロニケの手紙には、その空中再臨の様子について次のように言っております。

第１テサロニケの手紙
4:16 主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、
4:17 次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。

ノアの箱舟から私たちが学ぶことは、いったい何でありましょうか。一つは、聖にして義なる神様は、そのご性質ゆえにご自分の義を曲げることは、決してなさらない。ご自分に似た者として造られたほどに愛する人間が犯す罪を、そのまま見過ごすことは決してなさらない。厳しく罰せられるということ、これが一つであります。

そして二つ目は、その義そのものの神様は、同時に愛に満ちた神様でもあるということであります。ですから、ご自分が造られた人間が一人でも滅びることを望まれず、すべての人間が悔い改めて天の御国に携え上げられることを望んで、終わりの日、裁きの日を忍耐をもって伸ばしておられるということ、これが二つ目であります。

そのために、神様はノアの箱舟とは比べものにならない、すばらしい救いの箱舟をすでに 2000 年前に提供してくださっておられるのであります。その箱舟こそ、私たちを滅びから救い出してくださるために、神様がこの世にお遣わしになった神のひとり子のイエス様であります。

ヨハネ伝
3:16 神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。
3:17 神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。

第２コリント
5:21 神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方にあって、神の義となるためです。

ではこの救いの箱舟に入るには、いったいどうすればよいでしょうか。そのために、もう一度ノアがどうして箱舟に入ることができたかという事を考えてみたいと思います。ノアが箱舟に入ることができたのは、神様から正しいと認められたからでありました。ということは私たちも、神様から正しいと認められればよいのであります。

しかし、いったどうすれば神様から正しいと認められるのでありましょうか。これからは真面目に正しく清く生きる努力をしますと、神様に誓えば、神様はそれを認めてくださるのでありましょうか。あるいは、一生懸命世の中に役立つ行いや、良き行いを積み重ねて、その成果を神様に認めていただく事でありましょうか。

そのいずれでも駄目なのであります。なぜなら、人の心の中まで見抜かれる神様は、私たちの心の中に聖い生き方をしたとか、良い行いをしたとかいう、これは誇りであります。自負であります。それらが少しでもあれば、そのような私たちを正しいとはお認めにならないのであります。

ではいったいどうすれば良いのでしょうか。イエス様は、パリサイ人と取税人のたとえによって、それに答えてくださっています。有名なルカの福音書 18 章９節から 14 節にあります。パリサイ人は、自分は神様の掟を正しく守っていると自負しておりました。一方、取税人は自分の胸をたたいて「神様、こんな罪人の私をあわれんでください」と神様にあわれみを乞いました。

イエス様は、この取税人こそが正しいと認め、自分を高くする者は低くされる、自分を低くする者は高くされると仰っておられたのですね。私たちも、この取税人のように自分が神様の前に、正しいことなど何一つできない者である。自分の欲を満たすことを第一として生きた者でしかすぎないということを認めて、神の前にへりくだり、心砕かれて神様に許しを乞い願う時に、御子イエス様が十字架の上で流された聖い血潮によって、私たちの罪を聖め、私たちを義と認めてくださるのであります。

すなわち、自分の罪を認めて神様の御前に悔い改めること、これがイエス様の救いの箱舟に乗る条件なのであります。けれども、こういうふうに考える方がおられるかもしれない。イエス様という箱舟に乗るには、どうしたらよいか解った。でもちょっと待ってほしい。もう少し自分のやりたい事があるから。

やり終えたらイエス様の箱舟に入りますと考える方があるかもしれません。けれども、その人はいつイエス様が救いの箱舟の扉をお閉めになるのかが全く解っていない方であります。最初に読んでいただいたみことばの中にこういうみことばがありました。「それから、主は、彼のうしろの戸を閉ざされた。」すなわち、ノアたちが箱舟に入った後、箱舟の扉はノアが中から閉めたのではなくて、神様の手で外から閉められたのであります。

いったん神様によって閉められた扉は、もう決して開かれることはなく、閉ざされてからでは、いくら中に入りたいと望んでも、決して入ることはできないのであります。それと同様にイエス様も、時が来れば救いの扉をご自身の手で閉ざされます。そして一旦閉ざされた扉は、二度と開かれません。

イエス様は、やがて来る恐ろしい永遠の滅びから、一人でも多くの人々を救おうと、愛と忍耐を持って扉を閉ざす時を伸ばしておられますけれども、それにも限度があります。第２コリント２章６節には「確かに、今は恵みの時、今は救いの日です。」とあります。

そのとおり、今こそがその恵みの日、救いの日なのであります。この恵みの時、救いの日が終わる前に一日も早く、イエス様の御前に出て、「イエス様、私の罪、私のわがままを身代わりに負ってくださって、死んでくださったことを心から感謝します。これからすべて、イエス様にお委ねします。」と祈ることのできる人は、何と幸いな人でありましょうか。

なぜなら、その人は裁かれることなく、滅びることなく、終わりの日が来る前に空中まで迎えに来てくださるイエス様という箱舟によって、天の御国に携え上げられるからであります。そしてまた、イエス様を信じている私たちは、イエス様がいつご再臨があってもよいように、霊の目を覚まし、心を整え、身を慎んでご再臨を待ち望む日々を過ごすことができるように、さらに祈り続けたいと切に思うしだいであります。最後に黙示録からみことばをお読みして終わりにいたします。

黙示録
22:12「見よ。わたしはすぐに来る。わたしはそれぞれのしわざに応じて報いるために、わたしの報いを携えて来る。
22:13 わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である。初めであり、終わりである。」
22:14 自分の着物を洗って、いのちの木の実を食べる権利を与えられ、門を通って都にはいれるようになる者は、幸いである。

死んだ霊が甦る

2015 年 5 月 12 日、吉祥寺学び会
重田定義

エペソ
2:1 あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、
2:2 そのころは、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。
2:3 私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行ない、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。
2:4 しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、
2:5 罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、――あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。――
2:6 キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました。

おはようございます。私たちは、普通は「死」と言いますと体の死のことを考えるのが一般的ではないかと思います。ですから、イエス様を信じていない人が、このみことばを読みますと、罪の中に死んでいるという、いったいその死とはどんなものだろう。何の死だろう、体が生きているのに死んでると言っているのは、いったいどういうことなのだろうかと困惑するのも当然のことだと思います。

けれども、ここで言っております死とは、私たち人間の体の死ではない、霊の死、霊的な死のことであります。霊とはいったい何でしょうか。多くの方はご存知だと思いますけれども、私たち人間はすべての被造物の中で、特別に神様に愛されて、神様との親しい交わりを持ち、御心に従って生きるように造られた特別な被造物であります。

ですからそのために、他の被造物にはないものを私たちに与えてくださったのですね。それが私たちの体を造ってくださった後で、神様がご自分の息を私たちの体の中に吹き込まれた、それが霊であります。

このように神様から特別に愛されている者であるのに、神様によって最初に造られたところの最初の人間、アダムそしてその妻のエバは、エデンの園で神様の御心に背いてしまいました。悪魔にそそのかされて、神のように賢くなりたいという欲望に負けてしまいました。そして、食べてはいけないと命じられていた善悪を知る木の実を取って食べてしまうという罪を犯してしまったのであります。

その時以来、アダムとエバの子孫であるすべての人間に、彼らの性質が受け継がれました。人間は生まれながらにして、神様に背を向けて肉の欲、自我の欲を満たすことだけを求めて生きるようになってしまったのであります。聖書で言うところの罪というのは、アダムのように神様の御心に従わないで、肉の欲、自我の欲を満たすことだけを第一として、自分中心に生きることであります。

人間がこの罪を犯した報いとして、神様との交わりに欠かすことのできない大切な役割を果たす霊は死んでしまいました。霊が死ぬということは、霊本来の働きが全く機能しなくなる、全くできなくなることを意味しております。霊が死んだ者は一人残らず、肉の欲の中に生き、自我の望むままに生きております。肉の行いとはいったいどんなものか、それはパウロがガラテヤ書 5 章 19 節から 21 節に記してあります。

ガラテヤ
5:19 肉の行ないは明白であって、次のようなものです。不品行、汚れ、好色、
5:20 偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、
5:21 ねたみ、酩酊、遊興、そういった類のものです。前にもあらかじめ言ったように、私は今もあなたがたにあらかじめ言っておきます。こんなことをしている者たちが神の国を相続することはありません。

今の世の中の有様を見ますと、あらゆる職業、あらゆる立場の人々が皆、このように肉の欲の中に生き自我の望むままを行って生きているということが解るのであります。こうした人々は皆、霊が死んでいて肉だけで生きているのであります。そしてこのような人間に対して主は、ヨハネの黙示録 3 章 1 節で「わたしは、あなたの行ないを知っている。あなたは、生きているとされているが、実は死んでいる。」と仰っているのであります。ところが、実はこのみことばは、私たち信者に対して言われているみことばなのであります。

信者でも霊が死んでいる者がいるということであります。自堕落な生活をしている信者、肉の欲に心を奪われている信者、御霊により頼まないで人間に頼っている信者、神を恐れず人間を恐れている信者、神の栄光を求めないで自分の栄誉を求めている信者、これらの者はここに言われている、生きているとされているが、実は死んでいる信者なのであります。霊的に死んでいる者は、そのままの状態では神の国に入ることはできないと、先ほどのみことばにありました。神様の怒りを受けて裁かれ、滅びの刑罰を受けなければならないのであります。

第 2 テサロニケ
1:9 そのような人々は、主の御顔の前とその御力の栄光から退けられて、永遠の滅びの刑罰を受けるのです。

とありますように、神様に見捨てられ、神様から永遠に引き離されて苦しむという永遠の滅びの刑罰を受けなければならないのであります。私たち人間は、体の死は恐れます。そして知恵を絞ってあらゆる方法で、一日でも長く生きようといたします。けれども、体の死よりも恐ろしいのは、霊の死の結果、神様から永遠に見捨てられるということなのであります。

では、どうしたらこの恐ろしい刑罰を免れることができるのでしょうか。どうしたら恐ろしい滅びの刑罰を受けないで、神の国に入ることができるのでありましょうか。イエス様は、ユダヤ人の議会の議員であり、そして優れた教師でもあるニコデモという老人と対話をなさいました。その

中でその答えを出しておられます。

ヨハネ
3:3 イエスは答えて言われた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」
3:4 ニコデモは言った。「人は、老年になっていて、どのようにして生まれることができるのですか。もう一度、母の胎にはいって生まれることができましょうか。」
3:5 イエスは答えられた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国にはいることができません。
3:6 肉によって生まれた者は肉です。御霊によって生まれた者は霊です。

ご存知のように御霊は、神の霊であります。聖霊とも申します。イエス様は、肉によって生まれた者、すなわち罪の性質を持って生まれた者は、どんなに努力してもその性質を自分では変えることができない。したがって、そのままでは神の国に入ることはできない、罪のために死んだ霊が御霊によって新しく生まれなければ、人は神の国に入ることができないと仰っているのであります。

恐ろしい滅びの刑罰を免れ、神の国に入るためには、どうしてもこの御霊による霊的な新生が必要なのであります。主なる神様は、霊が死んだ人間をお見捨てになることなく、あわれまれ、滅びに至る背きの罪から救い出そうと呼びかけてくださるのですけれども、悲しいことに霊が死んでいる人間には、神様のその呼びかけの御声が聞こえない。

そのために、神様の呼びかけに答えることができません。そこで神様は、御霊によって私たちの死んだ霊を、新しく生まれ変わらせ、ご自分の御心を知って悔い改め、ご自分に立ち返らせようという救いのご計画をお立てになりました。ご存知のようにそのご計画とは、御子イエス様を人としてこの世にお遣わしになり、御子の命を犠牲にして私たちに、罪の赦しと御霊を与えるという、そういうご計画だったのですね。

イエス様は、父なる神様のこのご計画に従って、十字架の上で私たちの罪を身代わりによって死んでくださり、そして甦って天に上られた後に、今度は御霊を私たちに与えてくださいました。復活されたイエス様が、天に上られたのは、霊が死んでいる世界中の人々に、時間と空間を越えていつでもどこでも、御霊を助け主としてお与えになるためでありました。

ヨハネ
16:7 しかし、わたしは真実を言います。わたしが去って行くことは、あなたがたにとって益なのです。それは、もしわたしが去って行かなければ、助け主があなたがたのところに来ないからです。しかし、もし行けば、わたしは助け主をあなたがたのところに遣わします。

事実イエス様は、そのようにしてくださいました。この御霊の働きについて、パウロは次のように書いております。

第１コリント
2:9 まさしく、聖書に書いてあるとおりです。「目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮かんだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである。」
2:10 神はこれを、御霊によって私たちに啓示されたのです。御霊はすべてのことを探り、神の深みにまで及ばれるからです。
2:11 いったい、人の心のことは、その人のうちにある霊のほかに、だれが知っているでしょう。同じように、神のみこころのことは、神の御霊のほかにはだれも知りません。
2:12 ところで、私たちは、この世の霊を受けたのではなく、神の御霊を受けました。それは、恵みによって神から私たちに賜わったものを、私たちが知るためです。

テトス
3:4 しかし、私たちの救い主なる神のいつくしみと人への愛とが現われたとき、
3:5 神は、私たちが行なった義のわざによってではなく、ご自分のあわれみのゆえに、聖霊による、新生と更新との洗いをもって私たちを救ってくださいました。
3:6 神は、この聖霊を、私たちの救い主なるイエス・キリストによって、私たちに豊かに注いでくださったのです。

このようにあります。御霊が注がれて、死んだ霊が生き返った者は、生き返ったその霊によって、初めてまことの神様とはどのような方か、その神様に背いた自分の罪がどんなに恐ろしいものかを知ることができます。

そして、霊的に死んでいた自分を、そのような者も愛して救ってくださり、生き返らせてくださるために、父なる神様の御心に従って、この世に遣わされ身代わりに罪を負って十字架の上で死んでくださった御子イエス様に、心から感謝することができ、そしてそのイエス様に悔い改めて、イエス様を救い主として信じ、イエス様に身も心も捧げて御霊のお導きによって生きることこそが、主のご愛に応える唯一の道であると示されます。

コロサイ
3:9 互いに偽りを言ってはいけません。あなたがたは、古い人をその行ないといっしょに脱ぎ捨てて、
3:10 新しい人を着たのです。新しい人は、造り主のかたちに似せられてますます新しくされ、真の知識に至るのです。

霊的新生によって、人は物の見方、考え方、あるいは物の価値、価値観が一変いたします。それまで、肉の目で見えるものだけに頼り、肉の目で見えるものだけを求めていたのが、肉の目で見ることはできないけれども、霊の目で見ることができるものに頼り、また求めるようになります。

肉の目で見えるものがいかに空しいか、それに反して生き返った霊の目で見えるものは、いかにすばらしいかを知ることができるようになるからであります。たくさんあると思いますけれども、その中ですばらしいものを挙げて

みたいと思います。

第１ヨハネ
3:2 愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現われたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。

これは、御霊によって霊が生き返り、神の子供とされたことを知った信者が、主のご再臨を喜ぶ喜びを表わした言葉であります。ご再臨を喜ぶ信者の喜びは二つあると思うのですね。

一つは、ここにありますように、今まで鏡に映るものを見るようにしか知ることのできなかったイエス様に、今度は直接、顔と顔とを合わせてお会いすることができるという喜びでありましょう。

二つ目は、ご再臨の時には、私たちの罪を犯しやすいこの汚れた肉の体を、イエス様の聖い朽ちないからだと同じからだに変えてくださるという喜びであります。このすばらしい喜びの時を、ご再臨の時を霊が新生した信者は、希望を持って待ち望むことができ、しかもヨハネ黙示録22章12節に主が「見よ。わたしはすぐに来る。わたしはそれぞれのしわざに応じて報いるために、わたしの報いを携えて来る。」と約束されたその日が、まもなく来るということも、これもまた、御霊によって確信することができるというのは、何という喜びではないでしょうか。

また、生き返った霊によって、私たちは自分が救われたのは、神様が自分に、御子イエス様による救いの福音を宣べ伝える務めを委ねよと、お考えになっておられるということも知ることができます。

第２コリント
5:17 だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。
5:18 これらのことはすべて、神から出ているのです。神は、キリストによって、私たちをご自分と和解させ、また和解の務めを私たちに与えてくださいました。
5:19 すなわち、神は、キリストにあって、この世をご自分と和解させ、違反行為の責めを人々に負わせないで、和解のことばを私たちにゆだねられたのです。

けれども、霊的に新生した者が神様から任されたこの大切な務めを行うには、これは自分の力によっては不可能ですね。自分の中に住んでくださっている御霊の満たしと働きにお委ねしなければ出来ないということも、これもまた霊的に目覚めた者が知ることができます。

肉には何一つ良きものはなく、何の益ももたらされないということを、新生した私たちの霊がよく知っているからであります。優れた聖書学者であり、知識も知恵も豊かなパウロは次のように言いました。

第１コリント
2:4 そして、私のことばと私の宣教とは、説得力のある知恵のことばによって行なわれたものではなく、御霊と御力の現われでした。
2:5 それは、あなたがたの持つ信仰が、人間の知恵にささえられず、神の力にささえられるためでした。

ご再臨の日が真近いことを強く覚える今こそ、霊的に新生した私たちは、霊が死んでいるために神の裁きの時が迫っていることも知らないで、肉の思いを満たすことだけを求めて生きているこの世の人々に、主から委ねられている使命であるところの主の恵みの福音を、臆することなく宣べ伝えなければならないのではないでしょうか。

そのためにパウロが、ガラテヤ書２章20節「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。」と言っておりますように、肉に従って生きていた古い自分は、イエス様とともに十字架にかけられて死んだ。

そしてイエス様の御霊が、新しく生まれた自分の中に生きておられ、支配してくださっているということを確信して、自分をすべてイエス様に明け渡して、御霊の満たしと導きによって、人々に福音を宣べ伝えることができるように、これからも切に祈り続けなければならないと思う次第であります。

最後にローマ書６章４節をお読みして終わりたいと思います。

ローマ
6:4 私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあって新しい歩みをするためです。

まもなく起こる時に備えて

2015 年 12 月 29 日、吉祥寺学び会
重田定義

創世記
6:11 地は、神の前に堕落し、地は、暴虐で満ちていた。
6:12 神が地をご覧になると、実に、それは、堕落していた。すべての肉なるものが、地上でその道を乱していたからである。
6:13 そこで、神はノアに仰せられた。「すべての肉なるものの終わりが、わたしの前に来ている。地は、彼らのゆえに、暴虐で満ちているからだ。それで今わたしは、彼らを地とともに滅ぼそうとしている。

おはようございます。今、読んでいただいたこの箇所は、神様がご自分の前に堕落した世界をご覧になって、この地上のいっさいのものを滅ぼそうと決心して、ノアに仰せになったみことばであります。昨今の世の中の有様は、まさにこのように地上に人の悪が増大している、ここに記されているノアの時代とそっくりではないでありましょうか。

創世記
6:5 主は、地上に人の悪が増大し、その心に計ることがみな、いつも悪いことだけに傾くのをご覧になった。

まったくそのまま当てはまるような昨今の世の中であると思わされます。世の中が、ノアの時代のように、いやそれ以上に悪と暴虐に満ちた世の中になってしまったのは、元を正せば私たち人間を愛してくださる生けるまことの神様から、人間の心が離れ去ったことの結果であります。

人々が世の中の悪に鈍感になったのは、神様から心が離れたためにせっかく神様から与えられた良心が衰え果てて、悪に鈍感になってしまったことの表れだと思います。けれども、イエス様を信じる私たちは、信仰によって与えられて御霊によって、開かれた霊の目で今の世がまさに、最初に読んでいただいたみことばのような状態にあることを見分けることができるのは、本当に幸いであります。

と申しますのは、神様がノアに「「すべての肉なるものの終わりが、わたしの前に来ている。地は、彼らのゆえに、暴虐で満ちているからだ。それで今わたしは、彼らを地とともに滅ぼそうとしている。」と仰せになったように、今の世こそ主が腐敗堕落した世界を裁くために、再び来られる時がいよいよ近いことの前兆であると知ることができるからであります。ヨハネは黙示録の中で次のように記しております。

黙示録
22:10 また、彼は私に言った。「この書の預言のことばを封じてはいけない。時が近づいているからである。
22:11 不正を行なう者はますます不正を行ない、汚れた者はますます汚れを行ないなさい。正しい者はいよいよ正しいことを行ない、聖徒はいよいよ聖なるものとされなさい。」
22:12「見よ。わたしはすぐに来る。わたしはそれぞれのしわざに応じて報いるために、わたしの報いを携えて来る。
22:13 わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である。初めであり、終わりである。」
22:14 自分の着物を洗って、いのちの木の実を食べる権利を与えられ、門を通って都にはいれるようになる者は、幸いである。

このように彼は言っております。私たちは、これからもますます悪が増大する大変な世の中になっていくことを、このヨハネの黙示録のみことばによっても、知ることができることは本当に幸いです。

けれどもそれは同時に、イエス様が信じる私たちを天に携え上げるために空中まで迎えにきてくださるという、空中再臨の時がすぐ近くまで迫っている証拠であると知ることができるのは、本当に私たちに与えられた大きな恵みであり、また希望でもあります。そして、このような時こそ、改めてイエス様のご再臨を待ち望む信仰の歩みを、私たちが新たにする決意をしなければならないと強く思わされるのであります。

ペテロは、イエス様のご再臨を待ち望む信者の信仰生活について、初代教会のキリスト者にあてた手紙の中で次のように言っています。

第 1 ペテロ
4:7 万物の終わりが近づきました。ですから、祈りのために、心を整え身を慎みなさい。
4:8 何よりもまず、互いに熱心に愛し合いなさい。愛は多くの罪をおおうからです。
4:9 つぶやかないで、互いに親切にもてなし合いなさい。
4:10 それぞれが賜物を受けているのですから、神のさまざまな恵みの良い管理者として、その賜物を用いて、互いに仕え合いなさい。
4:11 語る人があれば、神のことばにふさわしく語り、奉仕する人があれば、神が豊かに備えてくださる力によって、それにふさわしく奉仕しなさい。それは、すべてのことにおいて、イエス・キリストを通して神があがめられるためです。栄光と支配が世々限りなくキリストにありますように。アーメン。

ペテロのこの手紙の箇所には、ご再臨を待ち望むための私たち信者の信仰生活の心得がいくつか含まれております。そこで、これからその一つづつをご一緒に考えていきたいと思います。

第 1 に、祈りの生活であります。パウロもテサロニケの信者に宛てた手紙の中で、「絶えず祈りなさい」と勧めております。絶えず祈るというのは、日々の生活の中で、絶えずイエス様の御心、御霊の導きを求めながら過ごすことではないでしょうか。そのような祈りの生活の中において、イエス様は私たちの霊に御心を示してくださるのであります。

ここで私たちが注意しなければならない事は、主が御心を示される時に、私たちは御心を聞き洩らすことがないようにしなければならないということであります。主は、大きな声で私たちにいつも聞こえるようには、ご自分の御心を示してくださいません。囁くような声で示してくださる

ことも多々あります。その主の声を私たちは、聞き洩らさないよういつも霊の目を覚まし、霊の耳を覚ましている必要があると思います。

マタイ
26:41 誘惑に陥らないように、目をさまして、祈っていなさい。心は燃えていても、肉体は弱いのです。

イエス様は、私たちの肉体が弱いことをよくご存知で、このように私たちに勧めてくださっています。終わりの世には、サタンが光の天使を装って主にある私たちキリスト者を、神様からイエス様から引き離そうと大いに活躍いたします。

私たちには、サタンの巧妙な変装を自分の力で見破ることはなかなかできません。ですから、世の終わりが近い今、主にある私たち信者は、サタンの変装を見破るためにもいよいよ霊の目を覚まして祈ることが大切であります。

2 番目に、ペテロは言っておりますように、心を整え身を慎む生活、これが必要だと思います。イエス様は、ご再臨に備える私たち信者の心構えを、次のようなたとえをもって教えてくださっています。

マタイ
25:1 そこで、天の御国は、たとえて言えば、それぞれがともしびを持って、花婿を出迎える十人の娘のようです。
25:2 そのうち五人は愚かで、五人は賢かった。
25:3 愚かな娘たちは、ともしびは持っていたが、油を用意しておかなかった。
25:4 賢い娘たちは、自分のともしびといっしょに、入れ物に油を入れて持っていた。
25:5 花婿が来るのが遅れたので、みな、うとうとして眠り始めた。
25:6 ところが、夜中になって、『そら、花婿だ。迎えに出よ。』と叫ぶ声がした。
25:7 娘たちは、みな起きて、自分のともしびを整えた。
25:8 ところが愚かな娘たちは、賢い娘たちに言った。『油を少し私たちに分けてください。私たちのともしびは消えそうです。』
25:9 しかし、賢い娘たちは答えて言った。『いいえ、あなたがたに分けてあげるにはとうてい足りません。それよりも店に行って、自分のをお買いなさい。』
25:10 そこで、買いに行くと、その間に花婿が来た。用意のできていた娘たちは、彼といっしょに婚礼の祝宴に行き、戸がしめられた。

申すまでもなく、ともしびとは信仰の歩みを照らす霊のともしびであり、油とは聖霊のことであります。イエス様は、信じた者を御霊、聖霊をお入れする器として御霊の油を注いでくださいますけれども、うっかりしておりますと、私たちはその器に自我という蓋をしてしまって、聖霊の油の注ぎを遮ってしまうおそれがあります。

ですから、御霊に満たされるために常に自己中心の思いに支配されがちな自分を、意識的に排除して自分の思いを取り除いていただくように御霊を満たしていただくための空の器とされるように祈る必要があると思います。これが、心を整え身を慎む生活をするために必要な心構えではないでしょうか。

3 番目に、信者が互いに愛し合う生活であります。世の終わりの前兆の一つとして、イエス様は人々の愛が冷たくなると仰っております。全くそのとおりであります。

マタイ
24:12 不法がはびこるので、多くの人たちの愛は冷たくなります。

まさに悪がそして不法がはびこる今の世には、人々の愛が全く感じられないような恐ろしい事件が、毎日のように起こっております。しかし、イエス様は世の人々だけではなくて、イエス様を信じる者の愛も冷めていると次のように仰っています。

黙示録
2:4 しかし、あなたには非難すべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。
2:5 それで、あなたは、どこから落ちたかを思い出し、悔い改めて、初めの行ないをしなさい。もしそうでなく、悔い改めることをしないならば、わたしは、あなたのところに行って、あなたの燭台をその置かれた所から取りはずしてしまおう。

終わりの世である今こそ、ヨハネが初代教会の信者に宛てたヨハネ第 1 の手紙 4 章 10 節から 12 節の中で

ヨハネ第 1 の手紙
4:10 私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。
4:11 愛する者たち。神がこれほどまでに私たちを愛してくださったのなら、私たちもまた互いに愛し合うべきです。

このように言っておりますように、主にあるキリスト者は、初めの愛に立ち返ってイエス様を愛し、また肉の思いによって左右されることなく、共に一つの御霊をいただき共に天の御国を持つ者として、信者同士が互いに愛し合う、そのような生活をすることが大切であります。そして、このような愛こそが、まだ救われていない世の人々に対しての証しになることを、私たちは覚えなければなりません。

4 番目に、つぶやきを言わない生活であります。つぶやきは、私たちの思いが肉によって支配された場合に出てくるものであります。

ピリピ
2:13 神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行なわせてくださるのです。
2:14 すべてのことを、つぶやかず、疑わずに行ないなさい。
2:15 それは、あなたがたが、非難されるところのない純真な者となり、また、曲がった邪悪な世代の中にあって傷のない神の子どもとなり、

2:16 いのちのことばをしっかり握って、彼らの間で世の光として輝くためです。

そのように、世の終わりが近いこの曲がった時代の中に置かれた、私たちキリスト者には神の子供として、イエス様の福音の光を輝かす使命が与えられております。神様は、私たち信者の日々の生活の中で私たちの内に住まわれる御霊を通して、成すべきことを示してくださいます。

ですから、自分がどんなに肉に支配されやすいかをしっかりとわきまえて、自分の肉にとっては意に添わない事であっても、意識して肉の思いを排除して、御霊に導かれて過ごす日々であるように、常に祈る必要があると思います。

5 番目に、神様から受けた賜物を用いて奉仕する生活であります。イエス様を信じる者は、一人ひとりが神様から様々に異なる賜物をいただいておりますけれども、その賜物をそれぞれがどのように管理し、またその賜物をどのように主のために用いるかということを、私たちは考える必要があります。パウロはローマの信者に次のように勧めております。

ローマ
12:6 私たちは、与えられた恵みに従って、異なった賜物を持っているので、もしそれが預言であれば、その信仰に応じて預言しなさい。
12:7 奉仕であれば奉仕し、教える人であれば教えなさい。
12:8 勧めをする人であれば勧め、分け与える人は惜しまずに分け与え、指導する人は熱心に指導し、慈善を行なう人は喜んでそれをしなさい。

イエス様は、神様から受けた賜物は、一人ひとり人によって異なるけれども、大切なのは賜物の種類や大きさではなくて、自分に与えられた賜物を主のためにいかに生かして用いるかであるということを仰っています。タラントのたとえをちょって見てみたいとおもいます。

マタイ
25:14 天の御国は、しもべたちを呼んで、自分の財産を預け、旅に出て行く人のようです。
25:15 彼は、おのおのその能力に応じて、ひとりには五タラント、ひとりには二タラント、もうひとりには一タラントを渡し、それから旅に出かけた。
25:16 五タラント預かった者は、すぐに行って、それで商売をして、さらに五タラントもうけた。
25:17 同様に、二タラント預かった者も、さらに二タラントもうけた。
25:18 ところが、一タラント預かった者は、出て行くと、地を掘って、その主人の金を隠した。
25:19 さて、よほどたってから、しもべたちの主人が帰って来て、彼らと清算をした。
25:20 すると、五タラント預かった者が来て、もう五タラント差し出して言った。『ご主人さま。私に五タラント預けてくださいましたが、ご覧ください。私はさらに五タラントもうけました。』
25:21 その主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』

その後、お読みいたしませんけれど、2 タラント儲けた人、1 タラント隠した人に対して主は何と仰ったか。主人は 5 タラント儲けた僕にも 2 タラント儲けた僕にも、5 タラント儲けた僕と同じ祝福をお与えになったのです。けれども、預かった 1 タラントを地に埋めて全く活用しなかった怠け者の僕は、主人から厳しく叱られた。

これがこのたとえであります。私たちも、主からそれぞれに与えられた賜物を、その大きさを人と比べるのではなくて、自分に与えられた賜物を主に仕えるために、本当に生かして用いているかどうか、そのことを主の光に照らしていただいて、主によって吟味していただきながら、日々の生活を歩む必要があると思います。

6 番目に、恐れずに主を証しするという生活であります。復活されたイエス様は、弟子たちに次のように仰いました。

使徒行伝
1:8 聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」

このように仰って、天に昇られました。そしてイエス様が仰ったように、聖霊の力を受けたペテロ、ヨハネ、パウロをはじめ弟子たちは、イスラエルのみならず、世界各地に出かけて行ってイエス様こそ、人となられた神であり、十字架にかかられ 3 日目によみがえられた、私たちの罪の贖い主であることを自分の命をかけて証しいたしました。パウロはテサロニケの信者に宛てた手紙の中で次のように言っています。

第 1 テサロニケ
2:4 私たちは神に認められて福音をゆだねられた者ですから、それにふさわしく、人を喜ばせようとしてではなく、私たちの心をお調べになる神を喜ばせようとして語るのです。

このように言っております。終わりの世に置かれた私たちキリスト者は、滅び行く人たちにイエス様を証しするために、自分の力や自分の知恵に、知識によってではなくて、自分の中に住んでくださっている主の御霊に導かれて証しするようにと選ばれた者であります。

私たちは、自分のような者も主の重大なご用のために召し出してくださった、そのイエス様の御心を深く覚えて、常に御霊の満たしを祈り求めながら、御霊の導きを祈り求めながら、いつでもイエス様を証しすることができるように整えられる必要があります。最初に申しましたように、昨今の世相は、すべての肉なる者が地上でその道を乱しているという聖書のみことばがそのまま当てはまります。

そして、そのような乱れた世界の現象がますます加速し

ていることを、日々私たちは覚えます。歴史はどんどん加速しているとある人は申しましたけれども、ただ単に加速しているのではなくて、世の終わりに向かって加速しているということに、世の人々もそろそろ気づき始めているのではないでしょうか。

そして私たちキリスト者は、歴史がこのように加速しているのは、主が信じる私たちを天に携え上げてくださる、その空中再臨の時が本当に近いという証拠であると知ることができますのは、本当に幸せであります。

このような大切な時に生かされている私たち信者は、希望を持って一人ひとりがはっきりと、霊の目を覚まし、ますますイエス様から御霊の油を満たしていただいて、御霊によって導かれ、絶えず祈り、心を整え、身を慎み、兄弟姉妹が互いに愛し合い、そして自分に与えられた主からの賜物を活用して、人々の救いのためにイエス様の福音を証ししながら、ご再臨の１日も早いことを待ち望む日々を送りたいと思うものであります。

残された命の日数を正しく数える

2015 年 7 月 14 日、吉祥寺学び会
重田定義

> 詩篇
> 90:10 私たちの齢は七十年。健やかであっても八十年。しかも、その誇りとするところは労苦とわざわいです。それは早く過ぎ去り、私たちも飛び去るのです。
> 90:11 だれが御怒りの力を知っているでしょう。だれがあなたの激しい怒りを知っているでしょう。その恐れにふさわしく。
> 90:12 それゆえ、私たちに自分の日を正しく数えることを教えてください。そうして私たちに知恵の心を得させてください。

おはようございます。短く学びをさせていただきます。今日は、今読んでいただいたこの聖書のみことばから、自分の日を正しく数えるということとは、どういうことか、この事について考えたいと思います。

自分の日とは、自分の人生に残された時間、この世に残された自分の命のことであります。けれども私たちは、はたして自分の人生に残された命の時間を、正しく数えることが、正しく予測することがいったい出来るのでありましょうか。これについてイエス様は、次のようなたとえを話しておられます。

> ルカの福音書
> 12:16 それから人々にたとえを話された。「ある金持ちの畑が豊作であった。
> 12:17 そこで彼は、心の中でこう言いながら考えた。『どうしよう。作物をたくわえておく場所がない。』
> 12:18 そして言った。『こうしよう。あの倉を取りこわして、もっと大きいのを建て、穀物や財産はみなそこにしまっておこう。
> 12:19 そして、自分のたましいにこう言おう。「たましいよ。これから先何年分もいっぱい物がためられた。さあ、安心して、食べて、飲んで、楽しめ。」』
> 12:20 しかし神は彼に言われた。『愚か者。おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。そうしたら、おまえが用意した物は、いったいだれのものになるのか。』

この金持ちは、自分に残された命の日数を正しく数えることができたでしょうか。可哀想にできませんでした。しかし、この金持ちのように、目に見えるこの世のものに頼って、自分に残された命の日数を予測して生きている人の何と多いことでありましょうか。

けれども、この金持ちに限らず、私たち人間は誰でも、自分に残された命の日数を正しく予測することはできません。たとえば、医者が癌にかかった人を診察して「あなたの命は、あと半年です」と宣告しても、その通りにならなかった例が少なからずあることを、私たちは知っております。

イエス様は、ルカ伝 12 章 25 節で「あなたがたのうちのだれが、心配したからといって、自分のいのちを少しでも延ばすことができますか。」と仰っているとおりであります。ただ神様だけが、その人の命をお決めになることができるのであります。詩篇 90 篇 3 節に「あなたは人をちりに帰らせて言われます。「人の子らよ、帰れ。」」

あなたというのは神様をさしています。「帰れ」というのは、土に帰れということでありますけれども。神様が、私たち人間に「人の子よ、帰れ」と仰った時が、私たちがこの世を去る時であります。

私たちが、もっとこの世に長く生きたいと望んでも、あるいは反対に早くこの世を去りたいと願っても、神様の定められた時が来なければ、この世を去ることはできません。世界一の知恵者と呼ばれたソロモンは、伝道者の書の 3 章 1 節、2 節で「天の下では、何事にも定まった時期があり、すべての営みには時がある。生まれるのに時があり、死ぬのに時がある。」と言っておりますけれども、その時とは神様に定められた時という意味であります。

医学の大きな目標は、人間の命をいかに長くするかということであります。そのために、老化はどうして起こるのかというような研究が、どんどん進んでおります。けれども、最近の研究で解ったことは、老化は人間の力や知恵では阻止することは出来ないということでありました。

> 創世記
> 6:3 そこで、主は、「わたしの霊は、永久には人のうちにとどまらないであろう。それは人が肉にすぎないからだ。それで人の齢は、百二十年にしよう。」と仰せられた。

神様は、人間のこの世の命を、どんなに長生きしても 120 年までとされたのであります。肉にすぎない人間とは、いったいどんな人間でありましょうか。それは、神様の仰せに背いた結果、神様からいただいた霊が正しく働かなくなり、肉の思い、言いかえれば自分の欲望を満たすことだけを考えて生きることになった、最初の人間のアダム、そしてそのアダムの性質を受け継いだ私たちすべての人間のことであります。

神様によって、肉にすぎない人間のこの世の命が 120 年と定められているので、どんなに医学が進歩しても人間はこれ以上生きられません。さらに神様は、一人ひとりの命をも定めておられます。

ですから、100 歳まで生きる人もいれば、生まれてすぐに亡くなる赤ちゃんもいるのであります。私たち人間は、自分の意思や知恵で生きていると思ったり、あるいは、医学の進歩が命を伸ばしてくれると思いがちですけれども、実は神様によって一人ひとりが生かされているのであり、神様が定められた時が来た時に私たちは死ぬのであります。

このように、神様によって造られ、神様によって生かされている私たち人間のこの世の命を、いったいどのように使ったら正しい良い生き方ができるのか、それを知ることが最初に読んでいただいた箇所の「自分の命の日を正しく数える」ということなのであります。

自分の命なら自分のものだから、自由に使ってもよいの

ではないかと、そういうふうに考える人も多いのでありましょう。けれども神様によって生かされているこの世の命を、自分の楽しみを追い求めることだけに使うことが、はたして自分の命の日を正しく数えることになるのか、よく考えてみる必要があるのではないでしょうか。

ソロモン王は次のように言っております。

> 伝道者の書
> 11:8 人は長年生きて、ずっと楽しむがよい。だが、やみの日も数多くあることを忘れてはならない。すべて起こることはみな、むなしい。
> 11:9 若い男よ。若いうちに楽しめ。若い日にあなたの心を喜ばせよ。あなたの心のおもむくまま、あなたの目の望むままに歩め。しかし、これらすべての事において、あなたは神のさばきを受けることを知っておけ。

ここに神様から私たち人間に与えられた、この世の命を自分の楽しみに使う者に対する神様の警告が示されております。では、自分に残された時間を正しく数える生き方とは、いったいどんな生き方なのでありましょうか。結論を先に申しましょう。

それは、私たちの我儘、身勝手のために身代わりに十字架の上で死んでくださったほどに、私たちを愛してくださった神の御子イエス様に心から感謝し、イエス様に自分の命を委ねて生きること、これこそが人間の正しい生き方なのであります。しかしそれにはまず、神様がどのように人間をお造りになったかを知る必要があります。

> 創世記
> 1:26 そして神は、「われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう。
>
> 2:7 その後、神である主は、土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで、人は、生きものとなった。

そのように記しております。ここで神様が「われわれ」と仰っているのは、申すまでもなく父なる神と御子イエス様であります。そして、そのようにご自分たちと親しい交わりができるように、人間だけにいのちの息、すなわち霊を入れて私たちを、神様、イエス様は造ってくださいました。これによって、神様、イエス様がいかに私たち人間を愛してくださっているかを知ることができます。

この神様、イエス様に私たち人間が心から信頼し、心からお従いすることこそ、人間の本当の幸せであり、人間の生きる本当の意味があるのであります。神様が、最初に造られた人間アダムとエバは、初めはエデンの園で、神様に愛された幸せの日々を過ごしておりました。

ところが、この木の実を食べれば神のように賢くなれるという、悪魔の蛇の誘いにのって、神のように自分たちが賢くなりたいという、その欲望に負けて神様から「この木の実だけは、食べてはならない。食べると必ず死ぬ」と言われた戒めを破るという大きな罪を犯してしまいました。

神様はなぜ人間に、その木の実を食べることを禁じられたのでありましょうか。それは、人間が神のように賢くなれば、自分を神としておごり高ぶり、創造主であり全知全能の真の神様を無視して、我儘勝手に生き、その結果、神様がお造りになった調和のとれた美しい世界を破壊し、ついには人間自身も破滅するのを、神様は知っておられたからであります。そしてまさに、現在の世界は、その通りになりつつあります。神様は、ご自分の戒めに背いたアダムに仰いました。

> 創世記
> 3:17 また、アダムに仰せられた。「あなたが、妻（サタンの誘惑にのった妻）の声に聞き従い、食べてはならないとわたしが命じておいた木から食べたので、土地は、あなたのゆえにのろわれてしまった。あなたは、一生、苦しんで食を得なければならない。
> 3:18 土地は、あなたのために、いばらとあざみを生えさせ、あなたは、野の草を食べなければならない。
> 3:19 あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついに、あなたは土に帰る。あなたはそこから取られたのだから。あなたはちりだから、ちりに帰らなければならない。」

しかし、これはアダムとエバだけの問題ではありませんでした。

> ローマ書
> 5:12 そういうわけで、ちょうどひとりの人によって罪が世界にはいり、罪によって死がはいり、こうして死が全人類に広がったのと同様に、――それというのも全人類が罪を犯したからです。

このように神様から心が離れ、自分の欲望を満たすために生きるようになった人間は、その報いとして人生に生じる様々な労苦のみならず、最も恐ろしい死をも味わわなければならなくなったのであります。

人間の不幸の源は、この生まれながらの神様に対する背きの罪にありました。ご存知のようにこの罪を原罪と申します。しかし、そのような私たち人間を神様は、なおも愛しあわれまれ、私たち人間がいかに努力しても消すことができない、この恐ろしい罪を御子イエス様に身代わりに負わせて、十字架にかけるために人としてこの世にお遣わしになったのであります。

そして、イエス様が自分の罪を贖うために、十字架にかかってくださったことを信じる者に、死に打ち勝つ永遠のいのちを与えてくださるために、イエス様を父なる神様は死からよみがえらせてくださいました。何という大きな主の御愛でありましょう。

このことがヨハネ伝３章 16 節に記されております。「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世（この世に住む人々）を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」

かつてイエス様を、私たち人間を救うためにこの世に来てくださった神の御子として信じられないで、イエス様を信じる者を敵として迫害していたパウロがおりました。このパウロは、復活されたイエス様に出会って、神様に背

いていた自分の罪を示されて、一心に悔い改めてイエス様に従う者に生まれ変わりました。そのパウロは次のように証しをしております。

ローマ書
6:6 私たちの古い人（救われる前の罪に振り回されていた自分）がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが滅びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。

6:8 もし私たちがキリストとともに死んだのであれば、キリストとともに生きることにもなる、と信じます。

キリストとともに生きるとは、自分のために十字架にかかって死んでくださり、自分に永遠のいのちを与えるためによみがえってくださったイエス様に、これからの人生を委ねて生きるということであります。

イエス様に、自分自身を委ねていれば、ダビデが詩篇の23篇で言っておりますように、すなわち「主は私の羊飼い。私は、乏しいことがありません。主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。あなたが私とともにおられますから。」とこのように証ししておりますように、どんな事があっても、たとえ死の危険にさらされるような事があっても、イエス様が守ってくださり、導いてくださるという確信を持って、恐れることなく平安な心で希望を持って日々を過ごすことができるのであります。

このようにイエス様にお委ねして日々を生きることこそが、私たちが自分に残された命の日を正しく数える生き方なのであります。生まれながらの人間は、どんなに知恵をしぼっても自分に残されたこの世の命の日数を正しく憶測することはできません。

もし私たちが、神様によって生かされている自分の命を、自分の肉の望むままに使い続けるならば、最後にはその人の上に神の裁きが下ります。そうならないように、神様の前にへりくだって、どうか自分に残された命の日を正しく数えることのできる知恵の心をお与えくださいと、お祈りすれば神様は必ずその祈りに答えて、その知恵を与えてくださり、イエス様を信じ、イエス様に委ねて、イエス様とともに日々歩むことこそが、自分に残された命の日を正しく数えることであると、教えてくださるだけではなく、イエス様は、そのように歩むことのできる力をも私たちに与えてくださいます。

実はこれは、私が今住んでおります老人マンションで、毎月1回、聖書のお話を聞きたいという方が集われ、今10人ぐらい、その方々にお話しをする予定の原稿でございます。ちょっと難しいかなと思いますけれども、是非、御霊によって聞いてくださる高齢者の方々が、心が開かれるようにお祈りいただければ感謝であります。

私たちはこの方によって神の義とされた

2015 年 12 月 1 日、吉祥寺学び会
重田定義

第 2 コリント
5:21 神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方にあって、神の義となるためです。

義と言いますと、一般には倫理的な意味での個人的な正しさ、あるいは社会的な正義を指します。けれども問題なのは、その正しさや正義が何を基準としているのか、いったい何に対して正しいのかということではないかと思うのですね。

私たち人間は、争う時いつもお互いに自分の正しさを主張して争います。それぞれが自分の正義を振りかざして争います。そのような事は、個人と個人の間にも、また、国と国との間にも見られるのを、私たちはよく知っております。ということは、人間の義はすべて自分を中心としたもの、自分の立場を正当化するための、自我による義に基づいているからであると言わざるを得ません。

これは人間の義が、永遠に揺るぐことのない絶対的な規準に立っていないからであります。これに対して、聖書で言うところの義とは、生けるまことの神様の絶対的な義、神の義を基準としており、この義こそが本当の義なのであります。

神様は、全き義なる方であり、その義を全うされる真実な方であります。聖書には、神様が義そのものの方であることを表わしているみことばが多く記されています。その内のいくつかを挙げてみたいと思います。

詩篇
89:14 義と公正は、あなたの王座の基。

申命記
32:4 主は岩。主のみわざは完全。まことに、主の道はみな正しい。主は真実の神で、偽りがなく、正しい方、直ぐな方である。

イザヤ
45:22 わたしが神である。ほかにはいない。
45:23 わたしは自分にかけて誓った。わたしの口から出ることばは正しく、取り消すことはできない。

では、私たち人間がこの全き義なる神様の前に、義と認められるにはいったいどうしたらよいのでありましょうか。もし、自分の行いによって神様に義と認められようとするならば、その生き方が義なる神様の前に、義と呼ばれるに値するほどに正しいとみなされる者、自分の行いが義なる神様の裁きに応え得るほどに完全に正しい者でなければなりません。

けれども、いったい私たち人間にそのような生き方ができるのでありましょうか。神様は、私たち人間に対して、自分が神様に認められるような義を行い得ない事を思い知らせるために、まず、ご自分の民として選ばれたイスラエルの民に、ご自分の義を示す律法、掟を与えてそれを守り行うように、イスラエルの指導者のモーセを通じて命じられました。モーセは神様の仰せに従って、神様がイスラエルの民に約束されたカナンの地に入るにあたって、次のようにイスラエルの民に告げました。

申命記
6:24 それで、主は、私たちがこのすべてのおきてを行ない、私たちの神、主を恐れるように命じられた。それは、今日のように、いつまでも私たちがしあわせであり、生き残るためである。
6:25 私たちの神、主が命じられたように、御前でこのすべての命令を守り行なうことは、私たちの義となるのである。」

神様はこのように、もしご自分の掟とさとしをすべて守り行うことができるなら、それがイスラエルの民の義となる、すなわちイスラエルの民は正しいと認めようと仰せになりました。

しかしながらイスラエルの民は、主の命令である律法に従うことができませんでした。かえって主に背いて偶像に仕え、自分を第一とし、おごり、妬み、むさぼり、不品行など、数々の罪を犯し、しばしば主から厳しい裁きを受けました。けれどもこれは、イスラエルの民ばかりではなく、すべての人間にも同様に言えることなのであります。これについてパウロは、次のよう言っております。

ローマ
3:9 では、どうなのでしょう。私たちは他の者にまさっているのでしょうか。決してそうではありません。私たちは前に、ユダヤ人もギリシヤ人も、すべての人が罪の下にあると責めたのです。
3:10 それは、次のように書いてあるとおりです。「義人はいない。ひとりもいない。
3:11 悟りのある人はいない。神を求める人はいない。
3:12 すべての人が迷い出て、みな、ともに無益な者となった。善を行なう人はいない。ひとりもいない。」

3:19 さて、私たちは、律法の言うことはみな、律法の下にある人々に対して言われていることを知っています。それは、すべての口がふさがれて、全世界が神のさばきに服するためです。
3:20 なぜなら、律法を行なうことによっては、だれひとり神の前に義と認められないからです。律法によっては、かえって罪の意識が生じるのです。

このようにパウロは言っております。神様は、すべての被造物の中で人間をご自分に似て造られるほどに、愛しておられます。

創世記
1:25 神は、その種類にしたがって野の獣、その種類にしたがって家畜、その種類にしたがって地のすべてのはうものを造られた。神は見て、それをよしとされた。
1:26 そして神は、「われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう。そして彼らに、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのも

のを支配させよう。」と仰せられた。
1:27 神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。
1:28 神はまた、彼らを祝福し、このように神は彼らに仰せられた。「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。」

けれどもそのように神様に愛されて造られた最初の人間のアダムが、神様の御心に背くという罪を犯してしまったために、その罪の性質を受け継いだすべての人間は、生まれながらにして神様の戒めに従うことができなくなってしまったのであります。そして義なる神様は、ご自分の義を示す律法に、自分の力では従い得ないことによって、かえって罪の意識を生じた私たちを憐れまれて、御子イエス様を信じる者を義と認めると約束され、それを実行なさいました。

ローマ
3:21 しかし、今は、律法とは別に、しかも律法と預言者によってあかしされて、神の義が示されました。
3:22 すなわち、イエス・キリストを信じる信仰による神の義であって、それはすべての信じる人に与えられ、何の差別もありません。
3:23 すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず、
3:24 ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。
3:25 神は、キリスト・イエスを、その血による、また信仰による、なだめの供え物として、公にお示しになりました。それは、ご自身の義を現わすためです。

神様は、律法の戒めを守り行えない人間をあわれんでくださって、ご自分の義を曲げることなく、その義を全うされるために、ひとり子のイエス様をこの世にお遣わしになって、十字架にかけて私たちの罪の贖いの供え物とするという、考えられないような大きな犠牲を払ってくださって、そのイエス様を救い主と信じる者を、イエス様のその贖いの御業のゆえに値なしに義と認めてくださったのであります。

すなわち私たち人間は、神の御子イエス様の義を信仰によって与えられ、そしてまた、神様の御前に罪人としてではなくて、イエス様の義を着ることによって、義なる人として主の御前に立つことができる、そのような恵みを与えられたのであります。ルカの福音書には、義と認められる人とは、いったいどんな人かそのことについて、イエス様が語られた有名なたとえ話が記されております。

ルカ
18:10「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりはパリサイ人で、もうひとりは取税人であった。
18:11 パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。
18:12 私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』
18:13 ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』
18:14 あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」

この取税人が義とされたのは、彼が自分は神様の御前に不義である者にすぎないと認めて、心から嘆いて御前にあわれみを乞うて出たことによって、罪の赦しを受けた結果、神様の前に値なしに義なる者とみなされたからであって、ローマ書 3 章 24 節に「ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。」このようになったのであります。

またパウロは、ローマ書 5 章 19 節「すなわち、ちょうどひとりの人の不従順によって多くの人が罪人とされたのと同様に、ひとりの従順によって多くの人が義人とされるのです。」と言っておりますけれども、その通り御子イエス様が父なる神様の御心に従順に従われて、十字架による罪の贖いの御業を成し遂げてくださったがゆえにこそ、私たちは値なしに神様の前に義と認められることができるのであります。

そういうわけで、パウロは、ピリピ 3 章 8 節「私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています。

それは、私には、キリストを得、また、キリストの中にある者と認められ、律法による自分の義ではなくて、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基づいて、神から与えられる義を持つことができる、という望みがあるからです。」とイエス様を信じる信仰によって、値なしに神様に義とされるという恵みのすばらしさというのは、この世のどんな価値のあるものにも代えられないほどに、価値があると心から証しをしております。

では、値なしにそのような恵みをいただいた、私たち信者は、いったいこれからどのように生きたらよいのでありましょうか。神様から値なしに義と認められた者の生き方とは、いったいどのようにあるべきでしょうか。私たちはただ義とされた事を喜んでいれば、それで良いのでありましょうか。ペテロは、イエス様を義と信じた者に宛てた手紙に次のように書いております。

第一ペテロ
2:24 そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。

すなわち、信仰によって値なしに神様に義と認められた者は、それからの人生を、ペテロが言っておりますように、義のために生きる、言い換えますと義なるイエス様を主として、信頼しイエス様に心から従順に従って生き通すこと、これが義のために生きるということであります。

ローマ

6:16 あなたがたはこのことを知らないのですか。あなたがたが自分の身をささげて奴隷として服従すれば、その服従する相手の奴隷であって、あるいは罪の奴隷となって死に至り、あるいは従順の奴隷となって義に至るのです。
6:17 神に感謝すべきことには、あなたがたは、もとは罪の奴隷でしたが、伝えられた教えの規準に心から服従し、
6:18 罪から解放されて、義の奴隷となったのです。
6:19 あなたがたにある肉の弱さのために、私は人間的な言い方をしています。あなたがたは、以前は自分の手足を汚れと不法の奴隷としてささげて、不法に進みましたが、今は、その手足を義の奴隷としてささげて、聖潔に進みなさい。

このように、神に義と認められた者は、かつてのように罪の奴隷として肉にあって生きるのではなく、義の奴隷、すなわちイエス様の奴隷として、主にあって生きること、これこそが主が私たちに求めておられる生き方なのであります。しかしながら、そのように生きることは、とうてい自分の肉の力では出来ない。

自分の力では出来ないということは私たちは身に染みて知っております。ではいったいどうしたら良いのでしょうか。それは、私たち信じる者の中に宿ってくださる主の御霊に、全面的により頼み、御霊に従って生きることであります。パウロは次のように言っております。

ガラテヤ
5:16 私は言います。御霊によって歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。
5:17 なぜなら、肉の願うことは御霊に逆らい、御霊は肉に逆らうからです。この二つは互いに対立していて、そのためあなたがたは、自分のしたいと思うことをすることができないのです。

けれども私たち信者は、霊においては私たちの生まれ変わった、聖められた霊においては、御霊に従いたいと願っておりますが、生来の肉の性質である自我が、私たちの中に住んでくださっている御霊に逆らってしまうことが、何と多いことでありましょうか。私自身をかえりみても、肉によって考え、肉によって行動してしまう事の多いことを告白せざるを得ません。

主は、そのような私たちをあわれまれて、様々な懲らしめ、その多くは痛み、苦しみ、悩みを伴っておりますけれども、そのような懲らしめを与えることによって、私たちの頑な自我を砕いてくださり、主の御霊に従うことができるように、また主の聖さに与かることができるように、そして主の御心に従う私たち信者の生き方を通して、主ご自身がご栄光を現してくださるようにと、日々導いてくださっています。主によって自我が砕かれたパウロは、次のように証しすることができました。

ローマ
14:7 私たちの中でだれひとりとして、自分のために生きている者はなく、また自分のために死ぬ者もありません。
14:8 もし生きるなら、主のために生き、もし死ぬなら、主のために死ぬのです。ですから、生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のものです。

ガラテヤ
2:20 私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

主は、自我が砕かれたこのパウロをご自身のご栄光を現す器として、大いに用いられたのであります。主の御再臨の間近い今の時にあたって、私たち信者も義の奴隷として、主から訓練を受け、自我が砕かれて自分の内に住んでくださっている御霊に明け渡し、パウロのように生きるにしても死ぬにしても、私たちは主のものです。

もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのですというふうに、心から確信をもって証しできるようになりたいと切に思います。もう一度、最初のみことばをお読みして終わりたいと思います。

第２コリント
5:21 神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方にあって、神の義となるためです。

復活の主との出会いの大切さ

2016 年 3 月 29 日、吉祥寺学び会
重田定義

ヨハネ
20:11 しかし、マリヤは外で墓のところにたたずんで泣いていた。そして、泣きながら、からだをかがめて墓の中をのぞき込んだ。
20:12 すると、ふたりの御使いが、イエスのからだが置かれていた場所に、ひとりは頭のところに、ひとりは足のところに、白い衣をまとってすわっているのが見えた。
20:13 彼らは彼女に言った。「なぜ泣いているのですか。」彼女は言った。「だれかが私の主を取って行きました。どこに置いたのか、私にはわからないのです。」
20:14 彼女はこう言ってから、うしろを振り向いた。すると、イエスが立っておられるのを見た。しかし、彼女にはイエスであることがわからなかった。
20:15 イエスは彼女に言われた。「なぜ泣いているのですか。だれを捜しているのですか。」彼女は、それを園の管理人だと思って言った。「あなたが、あの方を運んだのでしたら、どこに置いたのか言ってください。そうすれば私が引き取ります。」
20:16 イエスは彼女に言われた。「マリヤ。」彼女は振り向いて、ヘブル語で、「ラボニ（すなわち、先生）。」とイエスに言った。
20:17 イエスは彼女に言われた。「わたしにすがりついていてはいけません。わたしはまだ父のもとに上っていないからです。わたしの兄弟たちのところに行って、彼らに『わたしは、わたしの父またあなたがたの父、わたしの神またあなたがたの神のもとに上る。』と告げなさい。」
20:18 マグダラのマリヤは、行って、「私は主にお目にかかりました。」と言い、また、主が彼女にこれらのことを話されたと弟子たちに告げた。

今年は一昨日の 27 日が復活日に当たります。そこで今日は、聖書の今読んでいただきました箇所から、信者が復活の甦りの主に出会うことの大切さについて、ご一緒に考えていきたいと思います。

なぜ、甦りの主に出会うことが大切なのでありましょうか。それは、甦りの主に出会った信者にして初めて主の御心に従う者として、主に用いていただける器となるのであります。

マグダラのマリヤとは、ご存知のようにガリラヤ湖の西岸の町のマグダラの出であることからそう呼ばれておりました。かつて、7 つの悪霊に悩まされておりましたけれども、イエス様に悪霊を追い出していただいてから後、イエス様が十字架にお架かりになり、墓に埋葬されるまでずっとイエス様につき従てきた女性であります。

イエス様が墓に葬られて 3 日目の朝、まだ暗いうちに彼女は、イエス様が葬られている墓に来て、墓から石が取り除けてあるのを見て、すぐにペテロとヨハネに知らせました。二人の弟子は、そこに来て墓の中にイエス様の体に巻かれていた布きれだけが残っていて、御遺体がないのを確かめて帰りました。

その後の出来事が、今読んでいただいた箇所に記されているのであります。あとに残って墓の中を覗き込んだマリヤは、イエス様の体を誰かが持ち去ったのだと思ってしまいました。それは、墓の中に立っていた二人の天使たちと彼女とのやりとりによっても、知ることができます。

けれども、その時彼女は、甦られたイエス様が後ろに立たれて「なぜ泣いているのですか。だれを捜しているのですか。」と聞かれて、振り返ってそのイエス様を見ても、それがイエス様とは解らなかったのですね。

園の管理人だと思ったとあります。彼女がイエス様だとやっと解ったのは、そのすぐ後でイエス様が「マリヤ」と彼女の名をお呼びになった時でありました。悪霊をイエス様に追い出していただいてから、イエス様が十字架に架かられるまで、ずっとイエス様の身近に居たのに何故彼女は解らなかったのでありましょうか。

それは、その時はまだ彼女の霊の目が開かれていなかったからであります。イエス様が、人としてこの世に生きておられた時は、彼女は他の弟子たちと同じように、肉の目でイエス様を見ていたのであります。

けれども、甦られたイエス様は肉の目では見わけられません。霊の目でしかイエス様と知ることができません。私たち人間は、霊の目が閉ざされていても、肉の目さえ開いていれば、この世を生きる上で何の差支えもありません。

けれども、主なる神様、そして主なるイエス様の御心を知るというような、人間にとって最も大切なことは霊の目が開かれていなければ決して解らないのであります。マリヤの霊の目は、イエス様に「マリヤ」と名を呼ばれた時に初めて開かれました。霊の目が開かれたことによって、甦りの主に出会うことができた彼女は、それまでの悲しみ、嘆きがいっぺんに吹き飛んでしまいました。喜びに変えられました。

そして彼女は、その喜びに心を躍らせつつ、弟子たちに「私は、主にお目にかかった」と報告して、イエス様が自分に命じられた事をそのまま弟子たちに伝えたのであります。

エマオという村に行く途中で復活の主に出会った二人の弟子たちも、またマグダラのマリヤと同じ経験をいたしました。この出来事は、ルカの福音書 24 章に詳しく記されております。彼らは、近頃エルサレムに起こった大事件、すなわち葬られたイエス様の遺体が墓から無くなっており、墓に行った女たちの話では、主が甦られたという噂を聞いて、気が動転しその事を夢中になって話合って論じ合って歩いていました。

その彼らに、復活されたイエス様が近づいて来られたのであります。けれども霊の目が閉ざされている彼らには、その方がイエス様だとは気づきません。イエス様がご一緒に道を歩きながら、彼らの疑問に対して聖書の中に書かれているご自分に関する事柄を説き明かされても、ま

だ彼らは気づきません。

エマオの村に着き、一緒に泊まっていただくようにお願いして、夕食になって食卓に着かれたイエス様が、パンを取って祝福し裂いて彼らに渡された時、やっと彼らの霊の目が開かれて、その方がどなたかということが解ったのであります。

イエス様は、その後で彼らの肉の目では見えなくなりましたけれども、霊の目が開かれた彼らは、道を歩きながら聖書を説明してくださった間、自分の心が燃えていったのは復活された主に出会ってからだったと、喜びに心を躍らせながら、さっそくエルサレムに戻って他の弟子たちにこの事を報告したとあります。

甦られたイエス様が、今自分の前に立っておられるのに、霊が開かれていないマリヤが、そしてまた二人の弟子たちが、それに気づかないで絶望し、嘆き悲しみおろおろしているその姿は、復活の主にまだ出会っていない霊の目が開かれていないキリスト者の姿そのものでもあると言ってもよいと思います。

私たち信者はみな、神様に背いていた罪を認めて悔い改め、十字架に架かって自分の罪を身代わりに負って死んでくださったイエス様を主と信じて、罪赦され救われた者であります。

けれども、こうしてイエス様を信じた者のすべてが、復活の主に出会ったかと言えば、悲しいことにそうとは言えないのであります。

では、復活のイエス様に出会ったかどうかは、どうして知ることができるのでありましょうか。それは、イエス様を救い主と信じていると言いながら、自分の肉の思いを第一として歩んでいるか、いないかによって解るのであります。

パウロは信者に対して、「この世と調子を合わせてはいけません」ローマ書 12 章 2 節にありますが、あるいはコリント第 2 の手紙 6 章 14 節で「不信者と、つり合わぬくびきをいっしょにつけてはいけません。」と戒めております。

もしイエス様を主と信じていると言いながら、この世と妥協しているならば、あるいは、もしイエス様を主と信じていると言いながら、この世の肉的なものに依存しているならば、あるいは、もしイエス様を主と信じていると言いながら、この世の肉的なものに執着、執心、愛しているなら、もしイエス様を主と信じていると言いながら、心に喜びや平安がないのなら、もしイエス様を主と信じていると言いながら、自分の身に何か起こるとすぐに動揺してしまうならば、あるいは、もしイエス様を主と信じていると言いながら、御前に静まって祈り御心を問う前に、自分の思いによって何かをしてしまうような者であるならば、それはまだ、復活のイエス様に出会っているとは言えないのであります。

そしてその原因は、主に出会う前のマグダラのマリヤや二人の弟子のように、まだ霊の目が開かれていないからであります。

かつての私自身も、全くそのような者でありました。若い時から聖書に触れ洗礼まで受けておりながらも、長い間この世にどっぷり浸かっておりました。それでもいっこうに心の痛みを感じることがなかったような、本当にイエス様を信じているとも言えないような者でありました。

そのような私が、復活のイエス様に出会ったということができたのは、私の一人娘の死という私にとって人生最大の出来事を通してでありました。その時、イエス様は私のような愚か者をも憐れんでくださり、この大きな痛みを通して私の頑なな自我を砕いて、霊の目を開いてご自身と出会わせてくださったのです。

そして、それによって娘が主の憐れみによって御許に迎え入れられたという確信を与えてくださったのみならず、イエス様を信じるとしながらも主にイエス様に信頼するよりもこの世のものに頼るというような、大きな過ちを犯していたようなそのような私をも赦してくださったという確信を与えてくださったのであります。

それによって、私の心は悲しみから主に対する感謝と信頼と、そして天の御国への希望へと変えられました。

ヨブは、ヨブ記の中で「私はあなたのうわさを耳で聞いていました。しかし、今、この目であなたを見ました。それで私は自分をさげすみ、ちりと灰の中で悔い改めます。」と言っておりますけれども、これはそのまま私自身に当てはまる悔い改めと感謝の祈りでありました。

またパウロは、第 1 テモテ 1 章 15 節から 16 節で「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた。」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。しかし、そのような私があわれみを受けたのは、イエス・キリストが、今後彼を信じて永遠のいのちを得ようとしている人々の見本にしようと、まず私に対してこの上ない寛容を示してくださったからです。」と証ししておりますけれども、それはそのまま私自身の証しとなりました。

甦りの主との出会いは、人によって様々であります。ある人は大病を通して、ある人は家族の問題を通して、ある人は仕事の失敗を通して、ある人は人間関係の破たんを通して、ある人は人生に絶望したことを通してなど、様々の事によって悩み苦しみ、自我が砕かれ、そして霊の目が開かれて復活の主に出会うのであります。

しかし、そのような試練に会わなくても、心静かに聖書を読んでいる時に、あるいは一人で祈っている時に、突然霊の目が開かれて主に出会うこともあります。このように、主との出会いは様々でありますけれども、それは一人ひとりに対して主ご自身が、その人に最もふさわしい方法によって御計画されたものなのであります。

しかしながら、どのような出会い方をするにしても、一度甦りの主に霊的な出会いをした経験をした者は、主との人格的な交わりが与えられて、心から主を愛するようになり、主がいつも自分と共におられ、自分を内から導いてくださることを覚えて喜ぶのであります。

そして、それまでの自分を中心としてイエス様を信じてい

たような自己中心、自己本位の信仰から一変して主を中心とした信仰、すなわちイエス様を生涯の主としてすべてをお委ねし、御心に従う信仰こそが、一番の喜び、一番の幸せであることを知って、そのように歩みたいと切に願うようになるのであります。

パウロは自らの体験を通して、ピリピの３章８節で「私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのこと（いっさいの人間的なこの世的なこと）を損と思っています。私はキリストのためにすべてのもの（この世的なもの）を捨てて、それらをちりあくたと思っています。」

このように、イエス様に出会ってイエス様を自分の主と知った喜びのすばらしさ、この世の何ものにも代えがたい、まさに天と地との違いであると証ししております。

パウロには、はるかに及びませんけれども私自身も、気が付いてみますとイエス様に出会ってから、この世的に価値あるものとされている様々なものがみな、色あせて見えるようになってまいりました。それらのものに大きく心を動かされることがなくなってまいりました。

これは本当に我ながら不思議な思いがいたします。けれども、霊の目が開かれて甦りの主に出会ったからといって、喜んでばかりはおられません。信者がこの世に置かれている間は、まだ肉の衣を着ていなければならないがゆえに、絶えず霊と肉とのせめぎ合い、争い合いが起こり、油断をしておりますとサタンにそそのかされた肉が、霊に打ち勝って、イエス様から離れてしまうことも起こり得るからであります。

このためイエス様は、ご自分と信者との霊的な堅い結びつきの大切さを、ご存知のようにぶどうの木と枝にたとえて警告してくださっておられます。「わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。だれでも、もしわたしにとどまっていなければ、枝のように投げ捨てられて、枯れます。」

マグダラのマリヤは「私は甦られた主に出会った」と喜んで証しをいたしました。これこそ真の福音伝道ではないでしょうか。世の終わりが間近い時にあたって、私たちも同じように喜んで「私は復活のイエス様に出会いました。主は生きておられます。」と証しすることができるようになれば幸いであります。

主は大いに喜ばれて、その信者を弟子として用いてご自分の御栄光を現されるのであります。前にも申しましたように、人は復活の主に出会わなくても、神様の前に自分の罪を認めて心から悔い改めて、神様に救いを祈り求めるならば、イエス様の十字架の贖いの御業のゆえに救われます。

「主の御名を呼ぶ者は、みな救われる」というみことばの通りであります。けれども、イエス様は私たちが主を信じて罪が赦されるだけでは充分だとはお考えになっておられません。イエス様は、御自分を信じた人々が、信者としていつまでも生まれたばかりの信仰に留まっているのを決して喜ばれません。

主の救いに与かった信者がみな、さらに御自分と霊的な人格的な交わりを通して、主の御心に叶う信仰の成長した信者になって、主の器として用いられるようになってほしいと切に望んでおられます。そのためイエス様は次のように、まだ御自分に出会っていない信者の心の扉を外からたたき続けておられるのであります。

> 黙示録
> 3:20 見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところにはいって、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。

何という愛に満ちたみことばでありましょうか。まもなくイエス様は、信じる者を迎えに天から下って来られます。その時は、第１コリント 13 章 12 節に「今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ていますが、その時には顔と顔とを合わせて見ることになります。今、私は一部分しか知りませんが、その時には、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知ることになります。」

そのように、その時はイエス様と直接、顔と顔とを合わせてお会いすることができ、またその時は、主の御心を今まで私たちがはっきりとは解らなかった、その主の御心を完全に私たちも知ることができるようになるのであります。私たちはその日を待ち望みながら、甦られた主を力強く証しして行くことができますように、さらなる御霊の満たしとお導きを祈らなければならないのではないでしょうか。

わたしから学びなさい

2017 年 4 月 18 日、吉祥寺学び会
重田定義

マタイ
11:29 わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。
11:30 わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。

イエス様はどうして、私たちを救いの対象にお選びになったのでありましょうか、どうして、尊いご自分のいのちを犠牲になさってまで罪から救い出そうと私たちを選んでくださったのでありましょうか。

それは、ただ救うことだけはなく、選んで救い出してくださった私たち一人一人を、ご自分の僕としてご自分の弟子として、父なる神様が立てられた救いのご計画を進めるために用いようとお考えになったからであります。イエス様は、救われた私たちが僕として弟子として、ご自分を主と仰ぎ従うことによって、ご自分の御栄光を現そうとお考えになっておられるのであります。

しかし、そのためには私たちが主が良しとされる御心に叶う主の僕、主の弟子とならなければなりません。しかし、どうしたら主の御心に叶うことができるのでありましょうか。主の御心に叶う僕とはいったいどのような僕なのでありましょうか。

イエス様は、わたしから学びなさいと仰っておられるのです。わたしを手本にしなさいと仰っているのであります。イエス様は、ご自分にふさわし僕とは、自分に似た者でなければならない、だからわたしを自分を手本として、わたしから学びなさいと仰っているのであります。そこで、これから私たちはイエス様の僕、主の僕の手本をイエス様から学んでみたいと思います。

主の御心にかなう僕にまず求められるのは、全き従順、イエス様が従われたような全き従順であります。イエス様は弟子たちに仰いました。

ヨハネ
5:19 そこで、イエスは彼らに答えて言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。子は、父がしておられることを見て行なう以外には、自分からは何事も行なうことができません。父がなさることは何でも、子も同様に行なうのです。

6:38 わたしが天から下って来たのは、自分のこころを行なうためではなく、わたしを遣わした方（父なる神様）のみこころを行なうためです。

ピリピ
2:6 キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、
2:7 ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。
2:8 キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。

神の御子であるイエス様は、父なる神様と共に天地万物をお造りになったほどの偉大な力をお持ちの方ですから、人として地上に来られてからも、ご自分の力でしようと思われれば、何でもおできになるのであります。

しかし、イエス様は私たち人間を救うご計画を立てられた父なる神様のお考えを実行されるために、卑しい人間としてこの世に生まれてくださっただけではなく、すべて父なる神様の御心のままに、ご自分を無にして十字架の死にまで従われたのであります。

これほどの従順があるでしょうか。主の僕には全き従順が求められます。そして、イエス様ご自身がその手本を自らお示しになったのであります。けれども、全き従順は自分を主に明け渡さなければできない事であります。そして、その姿を私たちはパウロの中に見ることができます。彼は次のように証ししております。

ガラテヤ
2:20 私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

第 1 テサロニケ
5:10 主が私たちのために死んでくださったのは、私たちが、目ざめていても、眠っていても、主とともに生きるためです。

しかしながら、このパウロのように自分を明け渡すには、どうしても自我が砕かれる必要があります。しかしそれは、決して自分の力ではできないのであります。そのような弱い私たちを、よくご存知の主は、愛の鞭によって私たちの自我を砕いてくださるのであります。

主によって与えられる愛の鞭というのは様々ですけれども、たとえば、不治の病、不治の障害、愛する者との死別、血肉の争い、人から受ける耐えがたい差別、迫害、あるいは経済的な破たんなど、いずれも私たちの肉にとっては大きな痛みを伴うものであります。

けれども、私たちはそのような苦しみを通して弱められ、心が砕かれるのであります。そして、イエス様は、その私たちに「わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。」と優しく励ましてくださっています。

こうして、主の僕とされた私たちは、共にいて励ましてくださるイエス様に支えられて、自我が砕かれしだいしだいに、主が自ら模範を示された全き従順にならう者と変えられ、パウロのように自分を主に明け渡すことができるようになるのであります。また、主の僕にはイエス様の愛が求められます。イエス様は弟子たちに仰いました。

ヨハネ

15:12 わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合うこと、これがわたしの戒めです。

イエス様の愛それは申すまでもなく、私たちの罪の身代わりによって、十字架にかかって死んでくださったことによって現された自己犠牲の愛であります。

第１ヨハネ
3:16 キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。

かつての私たちは、愛と言えば人間的な愛、自己中心的な愛しか知りませんでした。自分の愛したい者を愛するけれども、自分を嫌う者、自分を憎む者を愛することなどは決してできないと考えておりました。しかし、イエス様はルカ伝６章２７節から 29 節で「あなたの敵を愛しなさい。あなたを憎む者に善を行ないなさい。あなたをのろう者を祝福しなさい。あなたを侮辱する者のために祈りなさい。あなたの片方の頬を打つ者には、ほかの頬をも向けなさい。」と仰いました。

そして、最高の愛とは、ヨハネ伝 15 章 13 節「人がその友のためにいのちを捨てるという、これよりも大きな愛はだれも持っていません。」と仰いました。そして、その最高の愛を自分の命さえ惜しまない自己犠牲の愛を、イエス様は自らお示しになったのであります。

そして、イエス様はその愛を主の僕も持ちなさいと命じておられるのであります。しかし、これもまた自己否定なしにはかなわぬ事であります。その私たちをイエス様は「わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。」と励ましてくださっておられるのであります。

こうして、主の僕とされた私たちは、共にいてくびきを負ってくださるイエス様に支えられて、しだいしだいに、自分を憎む者、自分を迫害する者のためにとりなして祈る者と変えられていくのであります。

また、御心にかなう主の僕には、イエス様の忍耐が求められております。パウロは第２テサロニケ３章５節で「どうか、主があなたがたの心を導いて、神の愛とキリストの忍耐とを持たせてくださいますように。」と言っております。

イエス様の忍耐、それは神様に背いている人間を救う父なる神様のご計画に従って、この世に来られた御子イエス様が 33 年のご生涯の間に、人々から侮辱され迫害され、最後には十字架にかけられるという辱めをも耐え忍ばれたことによって示された忍耐であります。

イザヤ
53:3 彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。人が顔をそむけるほどさげすまれ、私たちも彼を尊ばなかった。
53:4 まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。
53:5 しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。
53:6 私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。
53:7 彼は痛めつけられた。彼は苦しんだが、口を開かない。ほふり場に引かれて行く小羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない。

ヘブル
12:2 信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをものともせずに十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。
12:3 あなたがたは、罪人たちのこのような反抗を忍ばれた方のことを考えなさい。それは、あなたがたの心が元気を失い、疲れ果ててしまわないためです。

主の僕の忍耐は、何のために必要なのでありましょうか。それは、主に忠実に従って歩む僕が、サタンに属するこの世からの迫害を耐え忍ぶために必要なのであります。なぜ主の僕は迫害されるのでしょうか。これについて、イエス様は次のように仰いました。

ヨハネ
15:18 もし世があなたがたを憎むなら、世はあなたがたよりもわたしを先に憎んだことを知っておきなさい。
15:19 もしあなたがたがこの世のものであったなら、世は自分のものを愛したでしょう。しかし、あなたがたは世のものではなく、かえってわたしが世からあなたがたを選び出したのです。それで世はあなたがたを憎むのです。

そして、迫害を耐え忍んでいる主の僕に対して、イエス様は次のように励ましておられます。

ルカ
21:17 わたしの名のために、みなの者に憎まれます。
21:18 しかし、あなたがたの髪の毛一筋も失われることはありません。
21:19 あなたがたは、忍耐によって、自分のいのちを勝ち取ることができます。

ペテロは主の僕は、イエス様の忍耐に学ぶようにと次のように言っております。

第１ペテロ
2:20 罪を犯したために打ちたたかれて、それを耐え忍んだからといって、何の誉れになるでしょう。けれども、善を行なっていて苦しみを受け、それを耐え忍ぶとしたら、それは、神に喜ばれることです。
2:21 あなたがたが召されたのは、実にそのためです。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残されました。

ここに善を行うとありますが、善を行うということは、主の

御心に従って福音を伝えると言うことができます。主の僕が主に従って、まだその事をご存知ないで滅び行く人々に悔い改めてイエス様を信じれば救われますという福音を宣べ伝えたために、そのために迫害にあった時には、主を手本にして耐え忍べば、その私たちを主は御心にかなう僕と喜んでくださるのであります。主は福音の種を蒔いたいたために、迫害にあって流している私たちの涙を見過ごしになさいません。その涙を喜びに変えてくださいます。

詩篇
126:5 涙とともに種を蒔く者は、喜び叫びながら刈り取ろう。
126:6 種入れをかかえ、泣きながら出て行く者は、束をかかえ、喜び叫びながら帰って来る。

ここにあります通りに、主の福音を伝えて迫害にあいながらも耐え忍んで福音を伝え続けた主の僕は、主に祝福されて実りの束をかかえて、喜び叫びながら天の御国に凱旋するのであります。私たちの肉は、忍耐を嫌いますけれども、イエス様は「わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。」と私たちを励ましてくださっておられます。こうして、主の僕とされた私たちは、共にくびきを負ってくださるイエス様に支えられることによって、迫害をも耐え忍ぶことができるようになるのであります。

また、主の御心にかなう僕には、イエス様のへりくだりが求められます。自分を高くする者は、主の僕にふさわしくありません。人に仕えられることを望むのではなくて、へりくだって人に仕えることを喜ぶ、これが主の御心にかなう僕であります。イエス様はその模範を示されました。イエス様はこう言われました。

マタイ
20:28 人の子が来たのが、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、

神の御子として、天地万物の支配者としての偉大な権威を持っておられるイエス様は、人間すべてがお仕えすべきお方であります。けれども、イエス様はその私たちに仕えるためと仰いました。そして、ご生涯をとおして自らその模範をお示しになりました。イエス様は次のように仰いました。

ルカ
22:25 すると、イエスは彼らに言われた。「異邦人の王たちは人々を支配し、また人々の上に権威を持つ者は守護者と呼ばれています。
22:26 だが、あなたがたは、それではいけません。あなたがたの間で一番偉い人は一番年の若い者のようになりなさい。また、治める人は仕える人のようでありなさい。
22:27 食卓に着く人と給仕する者と、どちらが偉いでしょう。むろん、食卓に着く人でしょう。しかしわたしは、あなたがたのうちにあって給仕する者のようにしています。

ヨハネ
13:14 それで、主であり師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのですから、あなたがたもまた互いに足を洗い合うべきです。
13:15 わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするように、わたしはあなたがたに模範を示したのです。

僕の給仕をしてくださるイエス様、僕の足を洗ってくださるイエス様、何というもったいないありがたい事ではないでしょうか。イエス様は「わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。」と私たちを優しく励ましてくださっておられます。

私たちは、このイエス様のへりくだりを手本として、心砕かれへりくだって主にお仕えし、また人々に仕え、主の御心にかなう僕となれるように、御霊の導きを祈らなければならないと思います。

これまで考えてまいりましたように、主の御心を行う僕に求められる従順、愛、忍耐、へりくだりは、重いくびきのように私たちは感じます。しかし、イエス様は「わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。」と仰っておられるのであります。

このみことばに従って、共にいて優しく励ましてくださるイエス様に支えられながら、イエス様に学び、御霊に導かれながら少しづつ、主の御心にかなう僕にふさわしく整えられるならば、私たちはやがて主に似た者へと変えられていくのであります。

私たちはこの事に希望をおいて、ご自身を模範として示してくださったイエス様に従いつつ、まもなくイエス様にお会いするその日まで、信仰の歩みを進めていきたいと心から願うしだいであります。ありがとうございました。

神のご性質にあずかる者

2017 年 6 月 20 日、吉祥寺学び会
重田定義

第 2 ペテロ
1:1 イエス・キリストのしもべであり使徒であるシモン・ペテロから、私たちの神であり救い主であるイエス・キリストの義によって私たちと同じ尊い信仰を受けた方々へ。
1:2 神と私たちの主イエスを知ることによって、恵みと平安が、あなたがたの上にますます豊かにされますように。
1:3 というのは、私たちをご自身の栄光と徳によってお召しになった方を私たちが知ったことによって、主イエスの、神としての御力は、いのちと敬虔に関するすべてのことを私たちに与えるからです。
1:4 その栄光と徳によって、尊い、すばらしい約束が私たちに与えられました。それは、あなたがたが、その約束のゆえに、世にある欲のもたらす滅びを免れ、神のご性質にあずかる者となるためです。

私たち人間が心から神とお呼びして崇め、恐れ敬い礼拝すべきそのような神は、人間が考え作り出した偶像の神様ではなくて、私たち人間をはじめ天地万物を創造され、すべての被造物を御心のままに支配しておられる主権者にして、全知全能なる生ける唯一まことの神様であります。

けれども、その神様は霊的なご存在であるがために、私たちがいったい神様がどんなご性質のお方かということを知りたくても、直接、人間の肉の目で見ること、人間の肉の耳でその御声を聞くこともできません。けれども、神様は私たち人間をご自分に似た者としてお造りになったほどに愛してくださがゆえに、ご自分がどんな性質を持つものかを私たちに知らせようと、恵みとして見える形をとってこの世に来てくださいました。

そのお方こそが、神の一人子のイエス様であります。かつて、イエス様の弟子の一人ピリポがイエス様に、神様を見せてくださいとせがんだ時に、イエス様はこう答えられました。「ピリポ、こんなに長い間あなた方と一緒にいるのに、あなたはわたしを知らなかったのですか。わたしを見た者は父を見たのです。」(ヨハネ 14:9)。

ヘブル
1:3 御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現われであり

コロサイ
2:9 キリストのうちにこそ、神の満ち満ちたご性質が形をとって宿っています。

したがいまして、私たち人間が神のご性質がどんなかを知ろうと思えば、神が人となられたイエス様を見れば、そしてまた、イエス様のなさったことを知れば解るはずであります。では、イエス様のご性質はいったいどのようなものなのでありましょうか。聖書から挙げてみたいと思います。まず、イエス様は父なる神の御心に背くという罪を犯している私たち人間のその罪から救い出して、神様と和解させるために、ご自身の命を捨ててまで愛してくださったほどの大きな自己犠牲の愛をお持ちの方であります。

第 1 ヨハネ
3:16 キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。

また、イエス様はご自分の口から出された言葉は決して否定されない、取り消されない。そのような真実な全き真実な誠実なお方であります。

第 2 テモテ
2:13 私たちは真実でなくても、彼は常に真実である。彼にはご自身を否むことができないからである。

またイエス様は、ご自分を無にして命を捨ててまで父なる神に従われたほどの従順なお方であります。

ピリピ
2:6 キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、
2:7 ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。
2:8 キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。

そしてまた、イエス様は一度も罪を犯されたことのない聖にして義なるお方であります。

第 2 コリント
5:21 神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方にあって、神の義となるためです。

いずれも、生まれつきの人間には絶対に見ることのできない性質であり、また人間がいかに努力しても決して得ることのできない性質であります。けれども、最初に読んでいただいたみことばの中に、「あなたがたが、神のご性質にあずかる者となる」とあります。ということは、私たち人間も神のご性質にあずかることができるということであります。

いったいそのような事が可能なのでありましょうか。人間を軽んじたり、憎んだり、羨んだり、見下したり、立派でもない自分を誇ったりするような、そのような生まれつきの性質を持った私たち人間が、どうして神のご性質にあずかることができるのでありましょうか。もし可能なら、いったいそのために私たち人間は、どうするばよいのでありましょうか。

それには、まず第一に、私たちが神様から罪を赦していただくということが絶対に必要になります。ご存知のように、聖書でいう所の罪は、私たち人間が作った法律を犯すそのような犯罪ではない。神様を第一としない、今述べましたように自分を誇ったり、自分の考えを第一として生きる、そのような事が罪であります。

そして、この罪は私たち人間の生まれつきの性質に由来しておりますので、人間の努力ではどうすることできない。神様に赦していただくほかないのであります。そのために、私たちが成すべきことは、まず自分の今までの生き方が間違っていたこと、そして、生きて働かれるまことの神様を認めずに自分を第一とすることばかり考えて生きてきたことが、神様の御心に逆らう死罪にあたる罪であり、この罪は自分がいかに努力しても消し去ることができない、取り去ることができないということを素直に認め、神様の御前に心から悔い改めることであります。

そして、次にこの自分の罪は、人となってこの世に来てくださった罪汚れの全くない聖い神の御子であるイエス様が身代わりになって、十字架にかかってくださったことによって取り除かれたと、ただ素直に信じることであります。

神様はこの信仰告白を喜んでくださり、イエス様を信じる信仰によって私たちを罪なき者と認めてくださるのであります。しかしながら、神様に背くという罪を認めることも、そしてその罪がイエス様の十字架の御業によって赦されたと信じることも、これは決して自分の頭で理解してできる事ではありません。

心からの信仰告白は、主なる神様、そして御子イエス様がご自分に背いて自分勝手な生き方をしている私たちをも、なおも愛してくださってご自分のご性質に与からせようと救いの対象に選んでくださり、約束の御霊を与えて私たちの霊の目を開いてくださったからこそできるのであります。

第 1 コリント
2:9 まさしく、聖書に書いてあるとおりです。「目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮かんだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである。」
2:10 神はこれを、御霊によって私たちに啓示されたのです。御霊はすべてのことを探り、神の深みにまで及ばれるからです。

ヨハネ
15:26 わたしが父のもとから遣わす助け主、すなわち父から出る真理の御霊が来るとき、その御霊がわたしについてあかしします。

けれども、主を信じてイエス様を信じて救われただけでは、主のご性質に与かる恵み、特権を得ることはできても、まだそれだけでは主のご性質に与かる所にまでには至っていないのですね。いつまでも生まれたままの幼い信仰の状態に留まっていては、主のご性質に与かることはまだできない。なぜならば、幼い信仰の状態では、まだ信者に根強く残っている肉の性質によって、肉の思いに振り回されることが多いからであります。パウロは、次のように言っております。

第 1 コリント
3:1 さて、兄弟たちよ。私は、あなたがたに向かって、御霊に属する人に対するようには話すことができないで、肉に属する人、キリストにある幼子に対するように話しました。
3:2 私はあなたがたには乳を与えて、堅い食物を与えませんでした。あなたがたには、まだ無理だったからです。実は、今でもまだ無理なのです。
3:3 あなたがたは、まだ肉に属しているからです。あなたがたの間にねたみや争いがあることからすれば、あなたがたは肉に属しているのではありませんか。そして、ただの人のように歩んでいるのではありませんか。

したがいまして、主のご性質に与かるためには、信じる者に恵みとして与えられた御霊に満たされ、御霊の働きによって肉の思いに打ち勝って生きるようになる必要があるのであります。これについて、パウロは次のように言っております。

ローマ
8:5 肉に従う者は肉的なことをもっぱら考えますが、御霊に従う者は御霊に属することをひたすら考えます。

8:13 もし肉に従って生きるなら、あなたがたは死ぬのです。しかし、もし御霊によって、からだの行ないを殺すなら、あなたがたは生きるのです。

けれども、パウロの言っておりますように御霊の働きによって肉の思いを、肉の行いを殺すことは容易ではありません。このことは、私たち信者も日々の信仰の歩みの中で、痛いほど味わっているのではないでしょうか。

それは、私たち信者の中に根強く残っている肉の思いの根源であるところの自我が、御霊の働きを妨げているからであります。したがいまして、御霊が働かれるためには、この私たちの自我が砕かれなければならないのであります。そして、その事をよくご存知の主は自我を砕くために、私たちの肉に様々な試練、あるいは苦難を与えてくださるのであります。これは恵みであります。これについてヘブル書 12 章 4 節から 10 節では次のように言っております。

ヘブル
12:4 あなたがたはまだ、罪と戦って、血を流すまで抵抗したことがありません。
12:5 そして、あなたがたに向かって子どもに対するように語られたこの勧めを忘れています。「わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。
12:6 主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。」

12:10 なぜなら、肉の父親は、短い期間、自分が良いと思うままに私たちを懲らしめるのですが、霊の父は、私たちの益のため、私たちをご自分の聖さにあずからせようとして、懲らしめるのです。
12:11 すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。

主から与えられる懲らしめは、私たち信者の頑なな自我

を砕き、主に従順に従うために、そして主の聖さに与かるために、そしてまた、御霊の実を結ぶため、一言で申しますと主のご性質に与かる者となるためにどうしても必要な訓練なのであります。

こうして、主の訓練を受けて、自我が砕かれて初めて私たち信者は、内に住んでくださっている御霊に、自分の主導権を明け渡すことができるようになります。パウロもその一人でした。彼は次のように証ししました。

第２コリント
12:7 私は、高ぶることのないようにと、肉体に一つのとげを与えられました。それは私が高ぶることのないように、私を打つための、サタンの使いです。
12:8 このことについては、これを私から去らせてくださるようにと、三度も主に願いました。
12:9 しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。

このように、主の懲らしめは自分の高ぶりを砕くためであり、御霊が働かれるための恵みを訓練として与えられたものと感謝することができたパウロは、次のように証ししました。

ガラテヤ
2:20 私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。

自分の主導権を完全に主に明け渡すことができた彼は、このように証しをしております。私たち信者も、自我が砕かれ、自分のすべてを御霊に明け渡して、これからは自分のためではなくて、命を捨ててまで自分を愛してくださった主のためイエス様のために生きよう、自分のすべてをイエス様にお委ねして生きようと心から決意することができるならば、それは信仰の幼子から主にイエス様に似る者へと成長しつつある証拠であり、主のご性質に与かりつつある証拠であると言えます。

主のために生きたいと心から願う信者は、御心を求め御心に従うことを切望いたします。すなわち、主が「わたしが、あなたがたを愛したようにそのようにあなたがたも愛し合いなさい」と、ヨハネ 13-34 で仰せになっているから、そのイエス様の仰せに従って人を愛することができるように、自我を砕いてくださり、御霊によって霊を強めてくださいとそのように祈るようになるのであります。

また、イエス様が「わたしが聖であるから、あなたがたも聖でなければならない」（第 1 ペテロ 1-16）そのように仰せになっているから、そのイエス様の仰せに従って、身を慎み汚れた行いから身を守ることができるように、御霊によって霊を強めてくださいと、そのように祈るようになります。

また、イエス様が「わたしが父のもとから遣わす助け主、すなわち父から出る真理の御霊が来るとき、その御霊がわたしについてあかしします。あなたがたもあかしするのです。」と仰せになっているから、その主の仰せに従って、御霊の力によって霊を強められて主をあかしすることができますようにと祈るようになります。

イエス様は、このような祈りを喜ばれ、私たちの自我を砕いてくださり、私たちの内に住んでおられる御霊の力によって人を愛することができるように、また御霊の力によって汚れた行いから身を守ることができるように、そしてまた、御霊の力によって主をあかしすることができるように、私たちを強めてくださり導いてくださるのであります。

こうして私たち信者は、次第しだいに、イエス様に似る者へとイエス様のご性質に与かる者へと成長させていただくのであります。けれども、私たち信者が完全にイエス様のご性質に与かる者に、イエス様に似る者になれるのは、私たち信者を天に携え挙げてくださるために空中まで迎えにきてくださる主のご再臨の時ではないでしょうか。

その時には、私たち信者が、主の復活のよみがえりの体と同じ朽ちない聖い完全な体を与えられるからであります。主のご再臨については、聖書に次のように記しております。

ピリピ
3:20 私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。
3:21 キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。

第１コリント
15:47 第一の人は地から出て、土で造られた者ですが、第二の人は天から出た者です。

15:49 私たちは土で造られた者のかたちを持っていたように、天上のかたちをも持つのです。
15:50 兄弟たちよ。私はこのことを言っておきます。血肉のからだは神の国を相続できません。朽ちるものは、朽ちないものを相続できません。
15:51 聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみなが眠ってしまうのではなく、みな変えられるのです。
15:52 終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。

イエス様は、ご再臨の近いことを自ら次のように約束しておられます。

黙示録
22:12 見よ。わたしはすぐに来る。わたしはそれぞれのしわざに応じて報いるために、わたしの報いを携えて来る。

ご再臨がいよいよ間近いことを、私たちは世界に起こっている様々な現象から強く覚えます。私たち信者は、主の性質に与かれるというすばらしい約束が、それによっ

て迫っているということも希望を持って待ち望むことができます。その日に備えて、御霊にしっかりより頼んで、心の備えをすることができるようにと切に祈るしだいであります。最後にみことばをお読みして終わりたいと思います。

第 1 ペテロ
1:13 ですから、あなたがたは、心を引き締め、身を慎み、イエス・キリストの現われのときあなたがたにもたらされる恵みを、ひたすら待ち望みなさい。

パン種の入らない純粋で真実なパンとは

2018 年 4 月 15 日、吉祥寺福音集会
重田定義

第 1 コリント
5:6 あなたがたの高慢は、よくないことです。あなたがたは、ほんのわずかのパン種が、粉のかたまり全体をふくらませることを知らないのですか。
5:7 新しい粉のかたまりのままでいるために、古いパン種を取り除きなさい。あなたがたはパン種のないものだからです。私たちの過越の小羊キリストが、すでにほふられたからです。
5:8 ですから、私たちは、古いパン種を用いたり、悪意と不正のパン種を用いたりしないで、パン種のはいらない、純粋で真実なパンで、祭りをしようではありませんか。

近森兄がおっしゃったように、今日は本来なら、近森兄がメッセージをしてくださるはずだったのですけど、私の当番の日に、私の住まいの前の道路で、マラソン大会が行われることになりまして、午前中は通行禁止となってしまったので、たいへんな近所迷惑で、近隣の人たちは迷惑をしているのですけど、そういうわけで、兄弟に代わっていただいたわけです。そのついでに司会もお願いしたということであります。

今日は、今、紹介していただいた、『パン種の入らない純粋で真実なパン』というのは、いったい何か、このことについて、ご一緒に考えたいと思います。

ご承知のように、パン種とは、パンを作るときに練った小麦粉を発酵させて膨らませるために用いる酵母のことであります。けれども、古いパン種や、悪いパン種は、パンの味を不味くして、ひいては、腐らせてしまうことになります。イエス様は、この誰でも知っているパン種を例にとって、弟子たちやイエス様のはなしを聞きに集まった人々に、信仰を守る上で、何に気をつけなければならないかを教え、諭されました。

マタイ
16:6 パリサイ人やサドカイ人たちのパン種には注意して気をつけなさい。

パリサイ人とは、ユダヤ教の一派であって、神様から与えられた掟である、律法の実践に熱心なことを自負している人々であります。そして、多くの律法学者は、この派に属しておりました。しかし、彼らの律法の守り方は、実際にはまったく、外面的な、形式的なものであって、イエス様は、そのような彼らを偽善者と、激しく非難されたのであります。

マタイ
23:23 忌わしいものだ。偽善の律法学者、パリサイ人たち。あなたがたは、はっか、いのんど、クミンなど（･･･これは、いずれも、香味料や薬剤に使われた貴重な植物です･･･）の十分の一を納めているが、（･･･『納めている』とは、神様への供え物として収めている･･･）律法の中ではるかに重要なもの、すなわち正義もあわれみも誠実もおろそかにしているのです。

23:25 忌わしいものだ。偽善の律法学者、パリサイ人たち。あなたがたは、杯や皿の外側はきよめるが、その中は強奪と放縦でいっぱいです。

このようにおっしゃいました。また、ここで言われているサドカイ人というのは、ユダヤの指導者階級のひとつでありまして、合理主義的、現実主義的な考えによって、律法を解釈しております。そして、その考えに基づいて、復活や神のさばきについて、否定的な人たちであります。イエス様は、彼らの教えや信仰の態度を、パン種にたとえ、信仰というパンの中に、このような間違った律法の解釈や、偽善的な守り方、生き方が入りますと、信仰が腐ってしまうから、気を付けなさいと、このように警告をなさったのであります。

パウロは、最初に読んでいただいたコリントの信者に宛てた手紙で、イエス様を信じる信者は、パン種のない純粋で真実なパンでなければならない、このように書いております。そして、その理由について、『私たちの過越（すぎこし）の小羊キリストが、すでにほふられたから』と、言っております。過越とは神様の裁きが通り過ぎるという意味であります。神様がかつて、イスラエルの民をエジプトから脱出させられたとき、神様から命じられたとうりに、傷のない子羊をほふり、その血を家の入り口と、かもいに塗っていたイスラエル人の家は、神様がその血をご覧になって、神様がその家のものを裁かずに通り過ぎられましたけれども、子羊の血を塗っていない、エジプト人の家のういごは、初穂はすべて、打たれました。その時に、神様がイスラエルの民に仰せられた御言葉は、次のようなものでありました。

出エジプト記
12:12 その夜、わたしはエジプトの地を巡り、人をはじめ、家畜に至るまで、エジプトの地のすべての初子を打ち、また、エジプトのすべての神々に（･･･これは偶像の神々です･･･）にさばきを下そう。わたしは主である。
12:13 あなたがたのいる家々の血は（･･･この家々の血というのはイスラエル人の家の入り口とかもいに塗られた子羊の血のことを意味しております･･･）、あなたがたのためにしるしとなる。わたしはその血を見て、あなたがたの所を通り越そう。わたしがエジプトの地を打つとき、あなたがたには滅びのわざわいは起こらない。
12:14 この日は、あなたがたにとって記念すべき日となる。あなたがたはこれを主への祭りとして祝い、代々守るべき永遠のおきてとしてこれを祝わなければならない。
12:15 あなたがたは七日間種を入れないパンを食べなければならない。その第一日目に、あなたがたの家から確かにパン種を取り除かなければならない。第一日から第七日までの間に種を入れたパンを食べる者は、だれでもイスラエルから断ち切られるからである。

このように仰ったのですね。こうして、イスラエルの民は、毎年、神様の救いの恵みのしるしである過ぎ越しの救いの祭りを守り、そのたびに神様の仰せに従って、過ぎ越

しの子羊をほふり、この子羊のいけにえというのは、私たち人間の罪を身代わりに負ってくださって、十字架の上で血を流し、肉を裂かれたイエス様をも象徴しておりますけれども、その過ぎ越しの子羊をほふり、パン種の入っていないパンを食べて、祝ってきたのです。

イエス様は、十字架にかかられる前に、弟子たちと晩餐を取られたときに次のように仰いました。

マタイ
26:26 イエスはパン(・・・これはパン種の入っていないパン・・・)を取り、祝福して後、これを裂き、弟子たちに与えて言われた。「取って食べなさい。これはわたしのからだです。」
26:27 また杯を取り、感謝をささげて後、こう言って彼らにお与えになった。「みな、この杯から飲みなさい。
26:28 これは、わたしの契約の血です。罪を赦すために多くの人のために流されるものです。

皆様もご承知のとおり、これが、私たちキリスト者が、イエス様のあがないの御業(みわざ)を感謝して、礼拝のつど、今日もそうでしたけど、守り行ってきた主の聖餐の原型であります。

イエス様を信じる者が、古いパン種や悪いパン種の入らない純粋で真実なパンとなることができたのは、過越しの小羊として、イエス様が十字架の上で流された清い尊い血によって、神様の御心に反する罪というパン種が、私たちの中から取り除かれたからにほかなりません。けれども、このように神様の多いなる恵みと哀れみによって、清められたパンとされた信者に再び、古いパン種や悪いパン種が入れば、そのパンのふくらみは、一人の信者の信仰を腐敗させ、堕落させるだけではなく、他の信者にも広がってしまうのであります。

パウロは、先ほどの第一コリントの５章６節で、『あなたがたは、ほんのわずかのパン種が、粉のかたまり全体をふくらませることを知らないのですか。新しい粉のかたまりのままでいるために、古いパン種を取り除きなさい』と、警告しているのは、そのためであります。そして、パウロは、ガラテヤの５章の４節と８節で

ガラテヤ
5:4 律法によって義と認められようとしているあなたがたは、キリストから離れ、恵みから落ちてしまったのです。

5:8 そのような勧めは、あなたがたを召してくださった方から出たものではありません。

要するにイエス様からのものではない。

5:9 わずかのパン種が、こねた粉の全体を発酵させるのです。

このように、ガラテヤの教会の中で、イエス様を信じる信仰によってのみ義とされるのではなくて、律法を行うことによらなければ、神様からは義と認められない、このような間違った教えが広まりつつあるのを心配しまして、パウロは正しい信仰の妨げとなるパン種には注意をするようにと言っております。

では、冒頭の御言葉にある『悪意と不正のパン種』とはいったい、何でありましょうか？それは、異端の教え、すなわち、私たちの信仰の根幹である、『イエス様が神様である』というイエス様の神性を否定する教え、聖書の真理を曲げた、聖書の真理を否定する誤った教えであります。イエス様の神性については、聖書のいたるところに記されておりますが、その例をいくつか挙げてみましょう。皆さんもご存知の箇所ばかりでございます。

イエス様は、私に父なる神を見せてほしいと乞われた弟子のピリポに、こう仰せになりました。

ヨハネ
14:9 わたしを見た者は、父を見たのです。・・・
14:10 わたしが父におり、父がわたしにおられることを、あなたは信じないのですか。

イエス様、御自身も仰いました。

ヨハネ
10:30 わたしと父とは一つです。

イエス様は、父なる神様と自分はひとつだと、強い口調で、ここで仰っております。コロサイ人への手紙には、このようにあります。

コロサイ
1:15 御子は、見えない神のかたちであり、造られたすべてのものより先に生まれた方です。
1:16 なぜなら、万物は御子にあって造られたからです。

イエス様は、父なる神様とともに、天地万物をお造りになったお方であります。ヘブル人への手紙にも、次のようにあります。

ヘブル
1:3 御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現われであり、そのみことばによって万物を保っておられます。

これらの御言葉によって、それ以外の数々の御言葉によって、万物をお造りになったイエス様が、私たちに見えるかたちを取って、この世においでになった神であることをはっきりと示しております。しかしながら、聖書を読みますと、すでに初代教会のことから、私たちの信仰の根幹でありますイエス様の神性を否定するような異端の教えが、悪いパン種、不正なパン種として、信者の中に入り込んで、信者の信仰を惑わせていたことが分かります。これも、例を挙げますと、ペテロの第二の手紙の一章でペテロは次のように言っております。

第二ペテロ
2:1 あなたがたの中にも、にせ教師が現われるようになります。彼らは、滅びをもたらす異端をひそかに持ち込み、自分たちを買い取ってくださった主を否定す

る(・・・イエス様を否定する・・・)ようなことさえして、
自分たちの身にすみやかな滅びを招いています。

また、パウロは、愛する弟子テモテに宛てた手紙の中で、次のように言っております。

第一テモテ
4:1 御霊が明らかに言われるように、後の時代になると、ある人たちは惑わす霊と悪霊の教えとに心を奪われ、信仰から離れるようになります。

主の御心、主のお考えは、私たち人間の理解をはるかに超えた、高く深いものであります。到底、そのお考え、御心を私たちの頭で、計り知ることはできません。ですから、私たちは、自分の浅はかな知恵によってではなくて、ただ信じるものに恵みとして与えられた御霊のお導きによって、正しく御言葉をわきまえ、受け入れ、従うこと、これこそが主が私たちに求めておられる信仰なのであります。

しかしながら、惑わす霊と悪霊の教えは、この主の御心に反して、御言葉に人間的な解釈を施し、人間が自分の頭で理解できるようにしてしまいます。たとえば、『イエス様は神様ではない、罪の性質は持っておられたけれども、生涯において、一度も罪を犯さなかったただ一人の方だ』というように、神であるイエス様を、人間のレベルにまで引き降ろすようなことを、言葉巧みに教え説きます。そして、このような異端の教えは、悪いパン種、不正なパン種として兄弟姉妹の心を惑わせ、信仰から離れさせるだけではなくて、主の御体なる教会に、霊的な不一致をもたらし、キリストの生ける御体なる教会から、死んだ教会に堕落させるように働きます。

私たちは、どのように対処したらよいのでありましょうか。パウロは、コロサイの教会の信者たちに宛てた手紙の中で、次のように言っております。

コロサイ
2:6 あなたがたは、このように主キリスト・イエスを受け入れたのですから、彼(…すなわち、イエス様・・・)にあって歩みなさい。
2:7 キリストの中に根ざし、また建てられ、また、教えられたとおり信仰を堅くし、あふれるばかり感謝しなさい。
2:8 あのむなしい、だましごとの哲学(・・・当時のコロサイの教会にあった異端的な教えのことをさしております・・・)によってだれのとりこにもならぬよう、注意しなさい。そのようなものは、人の言い伝えによるものであり、この世に属する幼稚な教えによるものであって、キリストに基づくものではありません。
2:9 キリストのうちにこそ、神の満ち満ちたご性質が形をとって宿っています。

このように、教会に入り込んで信者たちを惑わしていた、パン種である異端の教えに騙されないためには、イエス様に、イエス様だけに固く結びついて、信仰を守ることであると、このように信者たちに教え諭しております。もうひとつ、あげます。イエス様の弟のユダから、その当時の信者に宛てた手紙に次のようにあります。

ユダ
1:17 愛する人々よ。私たちの主イエス・キリストの使徒たちが、前もって語ったことばを思い起こしてください。
1:18 彼ら(・・・すなわち、使徒たち・・・)はあなたがたにこう言いました。「終わりの時には、自分の不敬虔な欲望のままにふるまう、あざける者どもが現われる。」
1:19 この人たちは、御霊を持たず、分裂を起こし、生まれつきのままの人間(・・・生まれつきのままの罪の性質を持った人間ということでしょう・・・)です。
1:20 しかし、愛する人々よ。あなたがたは、自分の持っている最も聖い信仰の上に自分自身を築き上げ、聖霊によって祈り、
1:21 神の愛のうちに自分自身を保ち、永遠のいのちに至らせる、私たちの主イエス・キリストのあわれみを待ち望みなさい。

このイエス・キリストの待ち望みとは、イエス様の御再臨をも意味していると思いますが・・・待ち望みなさい。このように、終わりのときに現れ、そして、信者の分裂を計るサタンの惑わしにかからないためには、イエス様という土台の上に固く立って、そして、信じる者に与えられた御霊によって、いつも祈る、そのような信仰を持つことである。こういうふうに信者に勧めております。

このように、教会には、いつの時代にもさまざまな悪いパン種が入り込む危険があります。そして、終わりの世にあって、私たちの愛する集会にも、サタンは悪いパン種、不正なパン種を送り込んできました。残念なことに、それによって苦しみ、惑わされた兄弟姉妹が出てしまいました。また、集会も苦しみました。けれども、主の助けをいただいて、パン種を取り除くことができたのです。そして、パン種によって、集会に生じた波紋も、主に示された兄弟たちによって語られる力強いメッセージ、そして、多くの主にある兄弟姉妹の熱い祈りが実を結んで、しだい次第に静まってまいります。そして、集会は元気を取り戻しつつあります。これも、主が私たちの集会をご自分のものとして愛し、哀れんでくださり、サタンから守ってくださった、そのように私たちは確信できますので、本当に主に感謝いたします。

けれども、サタンは、私たちの集会を、主のみからだなる教会ではなくて、死んだ教会に堕落させようとして、いつまた別の異なったかたちのパン種を送り込んで来るやも知れません。私たちは再び、サタンの惑わしに陥って、集会が乱されないように、純粋で真実なパンとして、集会がみからだなる生きた教会として、主の御栄光を輝かせることができるように、霊の目を覚まし、主から与えられた全ての武具をしっかり身に着けて、サタンと戦っていかなければなりません。

私たちは、毎週、火曜日の学びのはじめに、日々の歌の212番を賛美しております。ここで、ご一緒にその歌詞を詠んでみたいと思います。

世界のうちに選び出され、
主に立てられた小さな群れ、
主イエスひとりをかしらとして、
建てあげられた主のみからだ。

みことばだけを頼りとして、
御心求め共に祈る、
いのちあふれるこの集いを、
主は御手をもて造りたもう。

救いの民はひとつに群れ、
ひとつの心、ひとつの御名、
ひとつのからだ、ひとつの霊、
ひとつの祈り、ひとつの歌。

これが純粋で真実なパンとしての教会の姿ではないでしょうか。今、私たちは、あらためて、私たちの集会が、この歌詞のように、いのちあふれる主のみからだなる教会として機能するために、みからだなる教会の部分部分として組み入れられている私たち、一人ひとりがそのことをしっかりと自覚して、イエス様をかしらとして、ひとつになって、御心に従うことができるように、心を新たにして、この歌をうたう必要があると思います。

イエス様の御再臨が間近いこの世の終わりにあって、サタンの跳梁はますます、激しさを増しております。主に選ばれ、救われた私たち一人ひとりは、まことに、小さく弱いものですけれど、主の御心にかなうよう、パン種のない純粋で、真実なパンとして整えられ、かしらなるイエス様にしっかりと結びつき、いつも霊の目を覚まし、兄弟姉妹がひとつとなって、御言葉だけに頼り、御霊に満たされ、祈りあい、支えあい、助け合って、私たちの愛する集会が、主のみからだなる生きた教会として、サタンとの戦いに勝利し、主の御再臨をお迎えすることができるように、心から祈る次第であります。

ありがとうございました。

サタンに侵された病んだ集会、みからだなる集会を主が治療される

2019 年 5 月 12 日、町田福音集会
重田定義

エペソ
4:16 キリストによって、からだ全体は、一つ一つの部分がその力量にふさわしく働く力により、また、備えられたあらゆる結び目によって、しっかりと組み合わされ、結び合わされ、成長して、愛のうちに建てられるのです。

私たち、人間の体は研究すればするほど、実に巧妙にできております。ここで、人間の体の仕組みを、改めてみてみたいと思います。

人間の体には、何十億もの細胞があります。そして、これらの細胞は、各々の役割に応じて、例えば、心臓の細胞は、心臓が正常に機能するように、心臓を支えるために働きます。同じように、肝臓の細胞は、肝臓が正常に機能するよう、肝臓を支えるために働きます。このように、体の全ての臓器、器官は、それぞれの細胞の働きに支えられて、正しく働くことができるのです。さらに、細胞の働きに支えられた多くの臓器、器官は、身体全体が正常に働くために、それぞれの機能を用い、互いに密接に協力し合い、調和を保ち、秩序正しく働くことによって、人間は生きているのです。小さな細胞も、大きな臓器も皆、決して、自分だけのために生きているのではありません。ですから、もしある臓器や器官の細胞に異変が起これば、その臓器、器官も正常に働くことができなくなり、その影響は身体全体に及び、病気になってしまいます。

このように見てきたことからもわかりますように、いくら研究が進んでも、私たち人間が、人間と同じ体を作ることは、決して、できません。人間の体は、神様ご自身が、ご自分に似たものとして、特別にお造りになったからであります。創世記の一章の二十六節に、神が、『われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう』と、あるとおりであります。

使徒パウロは、この主の生ける御体なる教会を、人間の体を例にとって、実に上手に解説しております。第一コリントの一二章から、少し長いですけれども、お読みしたいと思います。

第一コリント
12:12 ですから、ちょうど、からだが一つでも、それに多くの部分があり、からだの部分はたとい多くあっても、その全部が一つのからだであるように、キリストもそれと同様です。

キリストの御体なる教会も、それと同様ですということですね。

第一コリント
12:14 確かに、からだはただ一つの器官ではなく、多くの器官から成っています。
12:15 たとい、足が、「私は手ではないから、からだに属さない。」と言ったところで、そんなことでからだに属さなくなるわけではありません。
12:16 たとい、耳が、「私は目ではないから、からだに属さない。」と言ったところで、そんなことでからだに属さなくなるわけではありません。
12:17 もし、からだ全体が目であったら、どこで聞くのでしょう。もし、からだ全体が聞くところ(・・・・すなわち、耳・・・・)であったら、どこで(・・・・匂いを・・・・)かぐのでしょう。
12:18 しかしこのとおり、神はみこころに従って、からだの中にそれぞれの器官を備えてくださったのです。
12:19 もし、全部がただ一つの器官であったら、からだはいったいどこにあるのでしょう。
12:20 しかしこういうわけで、器官は多くありますが、からだは一つなのです。
12:21 そこで、目が手に向かって、「私はあなたを必要としない。」と言うことはできないし、頭が足に向かって、「私はあなたを必要としない。」と言うこともできません。
12:22 それどころか、からだの中で比較的に弱いと見られる器官が、かえってなくてはならないものなのです。
12:23 また、私たちは、からだの中で比較的に尊くないとみなす器官を、ことさらに尊びます。こうして、私たちの見ばえのしない器官は、ことさらに良いかっこうになりますが、
12:24 かっこうの良い器官にはその必要がありません。しかし神は、劣ったところをことさらに尊んで、からだをこのように調和させてくださったのです。
12:25 それは、からだの中に分裂がなく、各部分が互いにいたわり合うためです。
12:26 もし一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、もし一つの部分が尊ばれれば、すべての部分がともに喜ぶのです。
12:27 あなたがたはキリストのからだであって、ひとりひとりは各器官なのです。

こういうふうにパウロは、私たち人間の体に例えて、教会は御体なる教会であって、ひとつひとつの器官が、一人一人の信者であると説明をしております。

小さい見栄えのしない細胞から、大きな立派な臓器まで、密接に協力し合い、完全な調和を保って生きている。これが、健康な体の特徴であるのと同様に、キリストの御身体を形成している信者一人一人が、力の弱いもの、強いものを問わず、互いに一致協力して助け合い、支え合い、ひとつとなって、頭なるイエス様にお従いする時に、御体なる教会は生きた教会として機能し、主の御栄光をあらわすことができるのです。

私はかつて、日本で最大の教派と言われる日本キリスト教団に属する教会に集っておりました。しかし、そこでは一度も牧師から――私が集っておりました時に、三人、牧師が変わったんですけども、その三人すべての牧師から――パウロが教会を人間の体に例えた、この聖書の箇所についての説教、あるいは、学びを聞いたことがありませんでした。このことは、この教会が、イエス様を頭とする生きた教会ではなくて、牧師を実質的に頭とした死んだ教会であるということを示しております。

また、皆さんご存知の内村鑑三さんは、聖職者による教会支配の弊害を指摘して、信仰に教会はいらない、イエス・キリストとの個人的な結びつきがあれば良いという考えを打ち出しまして、この考えに、東大総長の矢内原忠雄さんなどの多くの知識人が賛同いたしました。いわゆる無教会派がそれであります。けれども、無教会派は、ご存知のように、大きく伸びることはありませんでした。

信仰にとって、教会は必要なんです。しかしながら、それは死んだ教会ではなくて、主の御体なる生きた教会であります。私は、この集会に集うようになりまして、初めて、この集会が主の御体なる行ける教会であることを知りました。そして、自分がこの教会の部分に組み込まれ、兄妹姉妹と、主にあってひとつとなって、霊的な親しい交わりをすることができるということに感動し、喜びを覚えました。かつての教会では、喜びなどはなかったのであります。

ところで、体の健康を犯す病気というのは、たくさんありますけれども、何かでも命を奪う恐れのある恐ろしい病気のひとつはご存知の癌（がん）であります。ここで、癌という病気がなぜ恐ろしいか、その発癌メカニズムをお話しいたします。

癌という病気にかかるには、癌を引き起こす発癌因子というものが必要です。その発癌因子とは、例えば、タバコの煙に含まれている発癌物質、あるいは、原発事故などによって発生する放射性物質、お酒などの飲食物に含まれる発癌物質など、私たちの生活環境の中には、多くの発癌因子が存在しております。これらの発癌因子は、人間の体に侵入して、免疫力の弱い細胞に襲いかかり、細胞内の DNA の配列を破壊し、その結果、今まで全体の調和のもとに生きていた細胞が、癌細胞に変化して、突然、狂ったように増殖し始め、その細胞が形成している臓器や器官を破壊するだけではなくて、他の臓器や器官の細胞にも転移して、そこでも、同じように増殖と破壊を繰り返し、ついには、体に死をもたらす。これが、癌という病気であります。

この終わりの世にあって、サタンは今や、世界にも数少ないキリストの御体なる教会である私たちの集会に対して、生きた教会から死んだ教会にしようと、攻撃を仕掛けております。その攻撃方法は、今、お話しした癌と極めて似ております。

サタンは、発癌因子、発癌物質のようなものであります。その攻撃方法とは、集会の兄妹姉妹の霊に侵入して、霊を弱らせ、肉の思いを膨らまさせて、『主の御体なる集会を形成している細胞である、臓器である』という認識を失わせ、肉による考えを義として、集会を攻撃し、次々に同調者を増やして、集会の秩序、調和を乱させ、ついには、生きた教会を死んだ教会にしてしまうというものであります。

では、私たちは、このサタンの攻撃に対して、どう対処したら良いのでありましょうか。

その前に、体の癌治療について考えてみましょう。癌の治療には、大きく二つの方法があります。ひとつは、手術によって、癌にかかっている部分を取り除くというものであります。もう一つは、化学療法や放射線治療、最近では、体の免疫力を強める免疫療法があります。この免疫療法とは、リンパ球の中のひとつの種類であるＴ細胞という細胞に、癌に対する攻撃力を与えて、癌組織を攻撃し、破壊するという治療法であります。どの治療法を選ぶか、あるいは、どの複数の治療法を選ぶかは、癌の進み方や癌の種類によって、医師が判断します。

では、サタンに侵入され、病んだ集会に対して、私たちは、どう対処したら良いのでありましょうか。

まず、私たちが、自分は主の御体を構成している、形成している細胞であるという強い自覚を持つこと、これがもっとも大切であります。私たちに免疫力を与えるのは、この方法なんですね。そして、御体なる教会を構成している兄妹姉妹と心を合わせて、集会を守ろうと――御体なる集会を守ろうと――、固く決意することであります。

次に、病んだ御体なる集会の治療は、主御自身がしてくださるということを確信して、主の治療に従うことであります。では、主はどんな治療をしてくださるのでありましょうか。

私たちの集会は、主が愛し、この集会を通して、御自分の御栄光を表そうとしてお作りになった、主の御体なる教会であります。その教会を、サタンの跳梁（ちょうりょう）のままにしておかれるはずはありません。集会がサタンに犯されて、苦しみ、悲しむのをそのまま見ておられるはずはありません。主は必ず、最善の治療をしてくださるはずであります。なぜなら、人間の名医とは違って、主は、どんな難病でも癒される名医、死をもよみがえらせることのできる名医だからであります。

私たちのなすべきことは、サタンを恐れず、ただ主にのみ信頼し、主が施してくださる最善の治療法に従うこと、これこそ、主の御体なる教会を構成している部分部分として組み入れられた、私たちのなすべきことであります。主は必ず、病んだ御自分の愛する集会をサタンから解放してくださいます。

私たちは、病んでいる私たちの愛する集会が、こうして健康を回復し、再び、主の御体なる生ける教会として、主の御栄光をあらわすことができるように、心を合わせて、御言葉と御霊から力をいただき、知恵をいただき、なすべきことを主から示していただいて、それを行うことができるように、ご一緒に祈り続けたいと思います。

最後にみことばを三つ、お読みして終わります。

> 第一ペテロ
> 5:8 身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししのように、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。
> 5:9 堅く信仰に立って、この悪魔に立ち向かいなさい。・・・・
> 5:10 あらゆる恵みに満ちた神、すなわち、あなたがたをキリストにあってその永遠の栄光の中に招き入れてくださった神ご自身が、あなたがたをしばらくの苦しみのあとで完全にし、堅く立たせ、強くし、不動の者としてくださいます。

5:11 どうか、神のご支配が世々限りなくありますように。アーメン。

ユダ
1:17 愛する人々よ。私たちの主イエス・キリストの使徒たちが、前もって語ったことばを思い起こしてください。
1:18 彼らはあなたがたにこう言いました。「終わりの時には、自分の不敬虔な欲望のままにふるまう、あざける者どもが現われる。」
1:19 この人たちは、御霊を持たず、分裂を起こし、生まれつきのままの人間です。
1:20 しかし、愛する人々よ。あなたがたは、自分の持っている最も聖い信仰の上に自分自身を築き上げ、聖霊によって祈り、
1:21 神の愛のうちに自分自身を保ち、永遠のいのちに至らせる、私たちの主イエス・キリストのあわれみを待ち望みなさい。

エペソ
6:12 私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。
6:13 ですから、邪悪な日に際して対抗できるように、また、いっさいを成し遂げて、堅く立つことができるように、神のすべての武具をとりなさい。

サタンもみことばを利用する

2020 年 1 月 5 日、吉祥寺福音集会
重田定義

マタイ
4:5 すると、悪魔はイエスを聖なる都に連れて行き、神殿の頂に立たせて、
4:6 言った。「あなたが神の子なら、下に身を投げてみなさい。『神は御使いたちに命じて、その手にあなたをささえさせ、あなたの足が石に打ち当たることのないようにされる。』と書いてありますから。」
4:7 イエスは言われた。「『あなたの神である主を試みてはならない。』とも書いてある。」

新しい年を迎えました。私たちにとって、今年はどんな年になるのでありましょうか。たしかなことは、主の御再臨が間近に迫ることを示す、聖書に記されている通りの数々の世の終わりの前兆が、いよいよ明らかに、そして、その激しさを増す年となることであり、それはまた、私たちの集会に対するサタンの攻撃が、激しさを増す年となることだと思います。

なぜでしょうか？牧師制度の上に立つプロテスタントの教会や、司祭制度の上に立つカトリックの教会は、世界中にあります。しかし、サタンは問題にしません。なぜならば、これらの教会は、イエス様を単なる飾り物としているが、実際には、聖職者たちが、人間が支配する教会だからであります。

一方、聖書の真理に立つイエス様の御体なる教会は、欧米をはじめ、日本にもあります。しかしながら、その数は少なく、皆、小さな群れであります。私たちの集会も、はじめは小さな群れでした。しかし、主が遣わされた霊的な指導者、ベック兄の六十年にわたる献身的なお働きによって、現在のような大きな群れに成長しました。これは、サタンにとっては大きな問題であります。なぜならば、主の御体なる教会を衰えさせ、主の栄光を輝かせないようにすることが、サタンの役割だからであります。

そこで今日は、『サタンも御言葉を利用する』というテーマで、私たちが気をつけなければならない大切なことを、ご一緒に考えたいと思います。

私たち信者は、聖書の御言葉を信仰の道しるべとして歩んでおります。しかし、そのためには、私たちが注意しなければならないことがあります。それは、サタンも聖書の御言葉を利用するということであります。その良い例を挙げたいと思います。マタイ四章の一節から十一節――先ほど、読んでいただいたところも含まれます――ここに、次のようにあります。

マタイ
4:1 さて、イエスは、悪魔の試みを受けるため、御霊に導かれて荒野に上って行かれた。
4:2 そして、四十日四十夜断食したあとで、空腹を覚えられた。
4:3 すると、試みる者が近づいて来て言った。「あなたが神の子なら、この石がパンになるように、命じなさい。」
4:4 イエスは答えて言われた。「『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる。』（・・・・申命記八章三節からの引用・・・・）』と書いてある。」
4:5 すると、悪魔はイエスを聖なる都に連れて行き、神殿の頂に立たせて、
4:6 言った。「あなたが神の子なら、下に身を投げてみなさい。『神は御使いたちに命じて、その手にあなたをささえさせ、あなたの足が石に打ち当たることのないようにされる。』（・・・・詩篇九十篇、十一節、十二節の引用・・・・）』と書いてありますから。」
4:7 イエスは言われた。「『あなたの神である主を試みてはならない。』（・・・・申命記六章十六節・・・・）』とも書いてある。」
4:8 今度は悪魔は、イエスを非常に高い山に連れて行き、この世のすべての国々とその栄華を見せて、
4:9 言った。「もしひれ伏して私を拝むなら、これを全部あなたに差し上げましょう。」
4:10 イエスは言われた。「引き下がれ、サタンｈ。『あなたの神である主を拝み、主にだけ仕えよ。』（・・・・申命記六章十三節・・・・）と書いてある。」
4:11 すると悪魔はイエスを離れて行き、見よ、御使いたちが近づいて来て仕えた。

サタンは、イエス様に、人間がもっとも望む肉的な望みを示して、誘惑してきました。しかし、イエス様は、その誘惑を聖書の御言葉によって退けられました。そこで、今度は、サタンも聖書の御言葉を引用して、イエス様を承服させようとしました。しかし、それは自分の考えを正当化しようとして、聖書の御言葉を、肉的に利用したものでありました。

このように、聖書の御言葉を利用するというサタンの罠に、私たちは注意しなければならないと思うんです。私たちは、聖書のみことばを、霊的に正しく理解して、正しく用いなければならないと思います。イエス様はそのようになさったんですね。イエス様も御言葉によって、サタンを退けられたのですが、その聖書の御言葉というのは神の御子としての大いなる権威を示すものであって、それにはサタンも退散せざるを得ないほどの霊的な力を持っていたのであります。

さて、数々の御言葉のうちで、信仰にとって、もっとも大切な、そして、もっとも惑わされやすい聖書の御言葉があります。それは、『愛』という御言葉であります。なぜでしょうか。それは、愛という御言葉が、一般に広く使われているヒューマニズムの愛と混同されやすいからであります。では、ヒューマニズムの愛とは、どのような愛なのでありましょうか。聖書から、その良い例を見てみたいと思います。

マタイ
16:21 その時から、イエス・キリストは、ご自分がエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、そして三日目によみがえらなければならないことを弟子たちに示し始められた。
16:22 するとペテロは、イエスを引き寄せて、いさめ始めた。「主よ。神の御恵みがありますように。そんなことが、あなたに起こるはずはありません。」

16:23 しかし、イエスは振り向いて、ペテロに言われた。「下がれ。サタン。あなたはわたしの邪魔をするものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」

この時のペテロは、まだ聖霊を受けておらず、霊の目が開かれておりませんでした。ですから、彼はイエス様のおっしゃったことを、霊的に捉えることができないで、肉の思いでイエス様を愛し、このようにイエス様をいさめるというような態度を取ってしまったのであります。このペテロのイエス様に対する愛は、ヒューマニズムの愛であります。

ヒューマニズムという言葉は、たいへん美しく響きます。それは、世の中の人々にとっては、理想的な考えと思えるからであり、また、これをこの世のことに適用するのには何の問題もありません。しかし、私たちの信仰にとって、そして、主のみからなる集会にとって、ヒューマニズムは大敵です。なぜでしょうか。それは、神様を第一とする考えではなく、人間を第一とする人間尊重の考えに基づいているからです。

イエス様はここで、神のことを思わないで人のことを思う愛は、真の愛ではないと、おっしゃっておられます。これは、たいへん重要なことなんです。

私たちの集会は今、主の御体なる教会を混乱させ、御体なる部分として組み合わされている兄妹姉妹の一致を乱そうとするサタンの攻撃を受けております。そして、そのサタンの策略の一つが、聖書の御言葉を用いるという巧妙な方法であり、中でも、『愛』という信仰にとって、もっとも重要なみ言葉を引用して、自分たちをサタンに従わせようとしているのであります。

しかし、サタンが言う愛こそが、ヒューマニズムの愛なのであります。

私たちは、『愛』という御言葉が、神のことを思って、主の御心に基づいて、霊的に用いられているのか、あるいは、人のことを思って、肉の思いから出て、肉的に使われているのかを、しっかりに見分けなければなりません。というのは、真の愛、イエス様のおっしゃっている愛と、ヒューマニズムの愛との区別がつかないで、思い悩んでいる兄妹姉妹が少なくないからです。これこそ、サタンが主のみ体なる集会の一致を満たそうとする狙いなのであります。

ヒューマニズムの愛は、『人道愛』とも訳されておりますように、一般には、飢えや病気で苦しんでいる人、災害に遭って悲しんでいる人、虐待されている人、迫害されてる人などを支援する愛、人間どうしの愛であります。身近な例としては、難民支援活動、あるいは、災害時のボランティア活動などが挙げられるでしょう。

このように、ヒューマニズムの愛をこの世のことに用いるのは、大いに賛成であります。しかし、神様、イエス様の愛は違う。

第一ヨハネ
4:9 神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのち（・・・・これは永遠のいのちです・・・・）を得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。
4:10 私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。
4:11 愛する者たち。神がこれほどまでに私たちを愛してくださったのなら、私たちもまた互いに愛し合うべきです。

神様は、私たちに永遠のいのちを与えてくださるために、ひとり子の神のイエス様を罪のなだめの供え物とするという考えられないような大きな犠牲を払ってくださったほどに、私たちを愛してくださっているのであります。これが、神様の愛であります。そして、このヨハネは、その神様の愛のような大きな痛みを払う犠牲を払う覚悟で、あなたがたも互いに愛し合いなさい、愛し合うべきだと、言っているのであります。

イエス様も、ご自身、数々の愛についての御言葉をおっしゃっておられますが、ヨハネの福音書でこのようにおっしゃってます。

ヨハネ
15:12 わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合うこと、これがわたしの戒めです。
15:13 人がその友のためにいのちを捨てるという、これよりも大きな愛はだれも持っていません。

このようにおっしゃっております。イエス様は、父なる神様の御心に従って、神様から離れ、サタンの虜になっていた私たちを、ご自分のいのちを私たちの罪のなだめの供え物としてささげて、救い出してくださり、そして、再び迷い出すことのないように、あるときは、励ましてくださり、あるときは、試練という鞭をも与えてくださる。これが、イエス様の愛であります。

そして、そのようにあなたがた兄妹姉妹も、私から離れないように、また、サタンの虜になってしまった兄妹姉妹が主に立ち返るように、いのちがけで支えあい、励ましあい、助け合いなさいとおっしゃっているのであります。これが、『わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい』というイエス様の御心であります。

このイエス様の愛には、ですから、優しさだけではなくて、厳しさも含まれるということがわかります。イエス様が、ペテロを叱責されたのも、神のことを思わず、人のことを思うペテロの間違った、閉ざされた霊の目を開かせようとするイエス様の愛の鞭だったのであります。このように、人のことを思うヒューマニズムの愛と、イエス様が信仰者に求められている神のことを思う愛とは、その高さ、深さが、比較にならないほど違うのであります。

しかし、サタンは私たちをイエス様から引き離して、再び自分の支配下に置こうとして、イエス様だけを頭として仰ぎ、イエスの御体なる部分として組み合わされている兄妹姉妹の分裂を計って、このような罠を仕掛けてきているのであります。もし、ヒューマニズムの愛が私たちの集会を支配するようになれば、もはや、私たちの集会は、イエス様を頭とする主の御体なる生ける霊的な教会ではな

く、人間が支配する、ヒューマニズムの愛をモットーとする、人間的、肉的な教会に成り下がってしまい、主のご栄光を拝することができなくなってしまいます。

しかし、どうして神のことを思う愛と、人のことを思うヒューマニズムの愛との見分けがつかないようなことが生じるのでありましょうか。その原因は何でしょうか。それは、主の御言葉を人間の頭、人間の知恵、すなわち、肉によって判断しようとするからであります。主の御言葉は、肉的に正しく判断し、用いることはできません。御霊によって、聖霊によって、初めて御言葉の意味を、霊的に正しく理解し、正しく引用することができるのであります。なぜならば、御言葉は御霊に属するものだからであります。

これについて、パウロは次のように言っております。

> 第一コリント
> 2:9 まさしく、聖書に書いてあるとおりです。「目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮かんだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである。」
> 2:10 神はこれを、御霊によって私たちに啓示されたのです。御霊はすべてのことを探り、神の深みにまで及ばれるからです。
> 2:11 いったい、人の心のことは、その人のうちにある霊のほかに、だれが知っているでしょう。同じように、神のみこころのことは、神の御霊のほかにはだれも知りません。
> 2:12 ところで、私たちは（・・・・私たち信者は・・・・）、この世の霊を受けたのではなく、神の御霊を受けました。それは、恵みによって神から私たちに賜わったものを、私たちが知るためです。
> 2:13 この賜物について話すには、人の知恵に教えられたことばを用いず、御霊に教えられたことばを用います。その御霊のことばをもって御霊のことを解くのです。
> 2:14 生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらは彼には愚かなことだからです。また、それを悟ることができません。なぜなら、御霊のことは御霊によってわきまえるものだからです。

このように説き明かしをしております。

この中にある、『恵みによって神から私たち信者に賜ったもの』というのは、たくさんありますけれども、そのうちで、もっとも大切なのは、主の御言葉ではないでしょうか。詩篇百十九篇の百五節に、『あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です』とあります。また、同じく、百十九篇、百三十三節には、『あなたのみことばによって、私の歩みを確かにし、どんな罪にも私を支配させないでください』とあります。

このように、主の御言葉は、私たち信者が、信仰の道を、主に従って、正しく歩むためになくてはならないものであります。主の御言葉により頼み、主の御言葉に従って歩む。これが、救われてからの信者の正しい歩みであります。しかし、そのためには御霊の助けと導きが絶対に必要になります。というのは、イエス様を信じて、霊的に生まれ変わった私たちも、地上に生きるあいだは、肉の衣を着ているがために、サタンはその弱い肉の部分を突いて、主の御言葉を自分の肉にとって都合のよいように使うよう、誘惑をしてくるからであります。

では、どうしたら、愛をはじめとする主の御言葉を、人のことを思って肉的に用いるのではなくて、神のことを思って、霊的に用いることができるのでありましょうか。また、どうしたら、ある兄弟、あるいは、ある姉妹の用いる御言葉が、主の御心から出たものか、あるいは、肉の思いから、ヒューマニズム的な考えから出たものかを、区別することができるのでありましょうか。

それは、私たちの霊によるしかありません。そして、そのためには、まず、自分が主を第一にしているのか、あるいは、自分を第一にしているのかという自分の霊的状態をよく吟味して、自分の霊的状態を正しく整えるということが必要となります。

次に、私たちに与えられた御霊によって、私たちの霊の目が曇ることのないよう、いつもはっきりと主に向き続けることによって、主の御心を正しく、わきまえ知ることができるようにと、祈る必要があります。

新しい年を迎えるにあたって、私たちが心を新たに決意すべきことは、いったい何でありましょうか。それは、自分自身の信仰、そして、主の御体なる集会を固く守るために、サタンの惑わし、サタンの策略を排除し、主の御心に正しく立って、主に従い続けること、これではないでしょうか。

そのために、さらに主の御前にへりくだり、主から恵みとして信者に与えられた御霊の働きを、自分の肉の思いによって閉じ込めることなく、御霊に全てを明け渡し、御霊から知恵と力をいただいて、霊的に正しく御言葉を理解して、その御言葉に従い、主だけをかしらとした御体なる集会の部分部分として、兄妹姉妹がひとつとなって、互いに祈り合い、励ましあい、支え合って、信仰の戦いを続けること、これこそ、主の御心に適う、愛の信仰の歩みであり、このことを通して、主は必ず、御栄光を表してくださるものと、確信する次第であります。

最後に、ユダの手紙の十七節から二十五節をお読みして終わります。

> ユダ
> 1:17 愛する人々よ。私たちの主イエス・キリストの使徒たちが、前もって語ったことばを思い起こしてください。
> 1:18 彼らはあなたがたにこう言いました。「終わりの時には、自分の不敬虔な欲望のままにふるまう、あざける者どもが現われる。」
> 1:19 この人たちは、御霊を持たず、分裂を起こし、生まれつきのままの人間です。
> 1:20 しかし、愛する人々よ。あなたがたは、自分の持っている最も聖い信仰の上に自分自身を築き上げ、聖霊によって祈り、
> 1:21 神の愛のうちに自分自身を保ち、永遠のいのちに至らせる、私たちの主イエス・キリストのあわれみを待ち望みなさい。

1:22 疑いを抱く人々をあわれみ、
1:23 火の中からつかみ出して救い、またある人々を、恐れを感じながらあわれみ、肉によって汚されたその下着さえも忌みきらいなさい。
1:24 あなたがたを、つまずかないように守ることができ、傷のない者として、大きな喜びをもって栄光の御前に立たせることのできる方に、
1:25 すなわち、私たちの救い主である唯一の神に、栄光、尊厳、支配、権威が、私たちの主イエス・キリストを通して、永遠の先にも、今も、また世々限りなくありますように。アーメン。

主は生きておられる

2020 年 10 月 4 日、町田福音集会
重田定義

第一列王記
22:13 さて、ミカヤを呼びに行った使いの者はミカヤに告げて言った。「いいですか。お願いです。預言者たちは口をそろえて、王に対し良いことを述べています。お願いですから、あなたもみなと全く同じように語り、良いことを述べてください。」
22:14 すると、ミカヤは答えた。「主は生きておられる。主が私に告げられることを、そのまま述べよう。」

皆さん、こんにちわ。七ヶ月ぶりにこの集会に戻ってまいりました。本当に、今日は懐かしく、兄弟姉妹の歌を直接、拝することができまして、本当に、嬉しいですね、なんだか、天国で再会したような気がしております。

コロナが流行し始めてから、七、八ヶ月ですが経ちますけども、本当に私たちの生活は一変したという感じですね、本当にこれだけ、よく変わったなと思うくらい、日々の私たちの生活は変わってしまいました。それにともなって、私たちの信仰の生活も大変わりしたという感じがします。今日、初めて、この変わった集会で、礼拝をご一緒にさせていただきましたけども、驚きましたね。こんなにいろんな新兵器と言いますか、新しい装置があって、ズームと言うんですか、ここに集えない兄妹姉妹も、こういうかたちで礼拝に参加できる。驚きましたね。

私は、アナログ人間でございまして、全然、ズームの操作なんかはできないんですけども、それでも、家庭で毎週、聖日には、心は兄妹姉妹と共に・・・・という思いで、家内と一緒に、礼拝を捧げております。

私たちの生活は、もうご存知の通り、高齢者の施設に今、入居しておりまして、高齢者の平均年齢が、八十三歳ちょっとですかね。ですから、もし、コロナが入って来たら大変なことになりますので、入居者の方々も、それから、職員の方々も、本当にもう一生懸命に、コロナを防いでいるという、本当に戦いの毎日という感じです。もちろん、三密を避け、ソーシャル・ディスタンスを守っております。外出もですね、外出確認証と言うのを出さなければいけない。どこにあなたは行くんですかと言うことを、記入しないとダメなんですね。私もそういうことで、記入してまいりました。

コウジ兄弟も、今日は珍しくお出でくださっていますけど、本当に、館内にいるときですねも、自分の部屋にいるときは、もちろん、マスクはしなくていいんですけど、館内に出た時は、もう必ずマスク、もちろん、エレベーターなんかも人数制限、エレベーターの中では話をしていけないというふうなことで、食事も、今はお互いに接触しないように、いろいろな工夫をして、距離を保って、話をしないで食べなさいということで、なんだかもう本当に、入居者の方がも大変な忍耐をしていると思うんです。

考えてみますと、私たちの年代と言うのは、忍耐に慣れているんですね。戦前、戦中派が多いですから、戦時中の事を思えば、今のこの忍耐も、そういう意味ではしやすいと言っては何ですけど、皆さん、一生懸命、理解してくださって、そういうわけで、もちろん、一人も感染者は出ておりません。

ということで、今日、本当にこのようにして——やはり、しかし、直接こうやって、兄妹姉妹とともに礼拝を守ることができるの本当に素晴らしいことだなと、改めて思いました。また、コロナが収まって、全員がですね、ともに一つの会場に、主の御体なる会場で、礼拝を捧げることができる日が、一日も早く来るようにと、私たちはこれからも祈っていきたいと思います。

長くなりましたけども、これから、しばらくのあいだ、『主は生きておられる』というテーマで、ご一緒に考えてみたいと思います。

『主は生きておられる』という御言葉は、集会の定期刊行誌の題名にもなっておりますので、私たちにとって、とても身近に感じられます。しかし、それだけに、ともすれば、この御言葉がどんなに重いか、大きいかを忘れてしまいがちになっているのではないでしょうか。そこで今日は、この御言葉の深さ、重さ、大きさについて、あらためてご一緒に考えてみたいと思います。

聖書の神様、すなわち、私たちが信じ、主と仰ぎ、おゆだね、従う神様が、宗教の神々と異なる最大の点は何でしょうか？それは、主なる神様が生ける神であること、そして、私たち人間にご自身を現され、人間の歴史を、そして、私たち一人ひとりを、ご自分の意思によって、み心のままに導かれる、生きて働かれる神であるということであります。

しかしながら、愚かにも人間は、ご自分に似るように作ってくださったほどに愛してくださる創造主にして、全知全能なる唯一、真の生ける神様の御心に背いてしまって、自然に対する神秘感や恐怖心によって満たされた神々、あるいは、理性によって考え出された哲学的な神を、神として礼拝するという罪を犯し続け、それらの神々が、死んだ神、偶像の神であることに気付きません。これについて、生ける真の神様は、聖書の中で、次のように仰せになっています。

イザヤ
44:9 偶像を造る者はみな、むなしい。彼らの慕うものは何の役にも立たない。彼らの仕えるものは、見ることもできず、知ることもできない。彼らはただ恥を見るだけだ。

エレミヤ
10:2 主はこう仰せられる。「異邦人（・・・・異邦人とここにありますのは、真の神を知らない全ての人を指しておりますけれども・・・・）の道を見習うな。天のしるしにおののくな。異邦人がそれらにおののいていても。
10:3 国々の民のならわしはむなしいからだ。それは、林から切り出された木、木工が、なたで造った物にすぎない。
10:4 れは銀と金で飾られ、釘や、槌で、動かないように打ちつけられる。
10:5 それは、きゅうり畑のかかしのようで、ものも言えず、歩けないので、いちいち運んでやらなければならない。そんな物を恐れるな。わざわいも幸いも下せ

ないからだ。」

では、主なる生ける神は、どのようにして、ご自身が生きておられることを、私たち人間にお示しになり、そして、私たちと交わられるのでありましょうか。イエス様が、この世においでになる前には、神様は、ご自分が選ばれたイスラエルの民の預言者たち、あるいは、指導者たちに直接、働かれて、彼らに様々な体験を味あわせることを通して、ご自身が生ける神であることをお示しになりました。

さっき読んでもらった御言葉に出てくるミカヤという人は、紀元前の約八百年くらい前の北イスラエル王国のアハブ王時代の預言者であります。彼は、アハブ王に呼び出されて、大敵シリアとの戦いについて、意見を求められました。彼以外の預言者たちは皆、王を恐れて、イスラエルが勝利するという偽りの予言をしました。

ミカヤを迎えに来た王の使いのものは、ミカヤに、『あなたも他の預言者と同じように、王様の意に適うような、王様にとって心地よい、すなわち、イスラエルが勝利すると預言してください』と言うように頼みました。しかしながら、ミカヤは王を恐れず、主に告げられた通り、イスラエルの敗北を予言したために、王の怒りを被って投獄されてしまいます。そして、ミカヤの予言通り、イスラエルは、ラモテ・ギルアデの地で敗北をしてしまいました。何故、彼が王から迫害されるのも恐れずに、主に告げられた通りのことを予言できたのでありましょうか。それは、彼が主なる神は生きておられるということを、心から信じ、人間の王を恐れるのではなくて、生ける真の神を恐れたからであります。

モーセも、そのように選ばれた者の一人でありました。神様がモーセに仰せになったみ言葉に、次のような箇所があります。これは、イスラエルの民の指導者のモーセに、神さまが、エジプトの王に迫害されてる、いじめられているイスラエルの民を、エジプトから脱出させなさいというふうに命じたことでありますけれども、この箇所に次のように書かれております。

出エジプト記
3:10 今、行け。わたしはあなたをパロのもとに遣わそう。わたしの民イスラエル人をエジプトから連れ出せ。」
3:11 モーセは神に申し上げた。「私はいったい何者なのでしょう。パロのもとに行ってイスラエル人をエジプトから連れ出さなければならないとは。」
3:12 神は仰せられた。「わたしはあなたとともにいる。これがあなたのためのしるしである。わたしがあなたを遣わすのだ。あなたが民をエジプトから導き出すとき、あなたがたは、この山(・・・・ホレブ山という山です・・・・)で、神に仕えなければならない。」
3:13 モーセは神に申し上げた。「今、私はイスラエル人のところに行きます。私が彼らに『あなたがたの父祖の神が、私をあなたがたのもとに遣わされました。』と言えば、彼らは、『その名は何ですか。』と私に聞くでしょう。私は、何と答えたらよいのでしょうか。」

このように、神様にモーセは尋ねたんですね。

3:14 神はモーセに仰せられた。「わたしは、『わたしはある。』という者である。」

ここで神さまが、モーセに、わたしはあなたと共にいる、また、わたしはある、すなわち、永遠に存在していると仰せになっているのは、ご自分が生きておられる神であることを、このような形でお示しになったんですね。

そして、神様は、イスラエルの民をエジプトから脱出させて、約束の地のカナンに着くまでに、紅海の海を開いて、イスラエルの民をその中を通らせ、そして、後を追ってきたエジプトの軍隊がその道を通る時に、神様は海を閉ざして、エジプトの軍勢を溺れさせる、そういう奇蹟をなされた。あるいは、カナンの地に着くまでの荒野を旅してる時に、イスラエルの民が飢えて苦しんだときに、神様は天からマナという食べ物を降らせた。そういうふうな数々の大きな奇蹟を起こして、イスラエルの民を助けて、導かれて、ご自身が彼らと共におられる、生きた神であるということをお示しになりました。

この生ける神様の前に、私たち人間は何の隠し事もできません。私たちのなすこと、考えること全て、心の中まで、見通されるからであります。

エレミヤ
1617 わたし(・・・・これは、主なる神様ですね・・・・)の目は彼らのすべての行ないを見ているからだ。彼らはわたしの前から隠れることはできない。また、彼らの咎もわたしの目の前から隠されはしない。

第一コリント
4:5 ・・・・主は、やみの中に隠れた事も明るみに出し、心の中のはかりごとも明らかにされます。

ヘブル
4:13 造られたもので、神の前で隠れおおせるものは何一つなく、神の目には、すべてが裸であり、さらけ出されています。私たちはこの神に対して弁明をするのです。

では、今の世に生きる私たちは、どのようにして、この神様が生きておられるということを、知ることができるのでありましょうか。生まれつきの肉の目によってはできない。霊の目が開かれることによってのみ、それは可能になります。

かつて、神様は、ご自分のメッセージを伝えるように選ばれた者たちの霊の目を、直接、お開きになって、生けるご自身を現されました。その一人は、ヨブであります。

ヨブ
42:5 私はあなたのうわさを耳で聞いていました。(・・・・ヨブは、かつては、神様のうわさを耳で聞いていた・・・・)しかし、今、この目で(・・・・この私の開かれた霊の目で・・・・)あなたを見ました。
42:6 それで私は自分をさげすみ、ちりと灰の中で悔い改めます。

また、イザヤも霊の目で神様を見たとき、次のように主を恐れております。

イザヤ
6:5 ああ。私は、もうだめだ。私はくちびるの汚れた者で、くちびるの汚れた民の間に住んでいる。しかも万軍の主である王を、この目で見たのだから。

このように、イザヤは恐れました。

いちばん最初のみ言葉にありましたミカヤ、彼もまた、霊の目で神様を見た者の一人でありました。彼は、北イスラエル王国の王アハブ――この時のイスラエルはですね、かつて、あのダビデがイスラエルを統一して、大きな王国を建てましたけれども、その息子のソロモンの時代を終わった時、また、イスラエルは二つに分裂してしまい、北イスラエル王国と南ユダ王国の二つに分かれてしまいますが――その北イスラエル王国の王のアハブが、南ユダ王国の王のヨシャパテに、こういうふうに言っているんですね。『預言者ミカヤは、私について良いことは預言せず、悪いことばかりを預言する。』こういうふうに言った。その時、ミカヤは、どのように言ったか。『私は生きておられる主を見た』と答えました。第一列王記、二十二章の十九節、『主のことばを聞きなさい。』これは、ミカヤが王様に言っているんですね。『主のことばを聞きなさい。私は主が御座にすわり、天の万軍がその右左に立っているのを見ました。』

【参考】第一列王記
22:18 イスラエルの王はヨシャパテに言った。「彼は私について良いことを預言せず、悪いことばかりを預言すると、あなたに言っておいたではありませんか。」
22:19 すると、ミカヤは言った。「それゆえ主のことばを聞きなさい。私は主が御座にすわり、天の万軍がその右左に立っているのを見ました。」

ミカヤは、霊の目で主が生きておられるのを見たんですね。

二千年前に、神様はイスラエルの民のみならず、世界のすべての民に、ご自身が生きておられる神であることをお示しになろうと思いました。そして、神の御子であるイエス様を、人間の目に見える姿で、この世にお遣わしになったのであります。

イエス様は、神でなくてはおできにならない。数々の奇蹟――有名ないくつかの奇蹟があります――すなわち、湖の上を歩かれた、あるいは、権威あるお言葉で嵐をお静めになった、あるいは、五つのパンと二匹の魚で五千人の群衆の空腹を満たされた、あるいは、当時、不治の病であったらい病や足萎えやろうあや盲(めしい)などを癒された。そういう数々の御業を行われて、ご自分が生ける神であることをお示しになりました。しかし、それでも、霊の目が開かれない人には分かりません。イエス様の弟子たちもそうだですね。

ヨハネの福音書には、次のようなイエス様と弟子の問答が記されております。

ヨハネ
14:7 あなたがたは、もしわたしを知っていたなら、父をも知っていたはずです。(・・・・イエス様は、弟子たちに仰っているんですね・・・・)しかし、今や、あなたがたは父を知っており、また、すでに父を見たのです。」
14:8 ピリポはイエスに言った。「主よ。私たちに父を見せてください。そうすれば満足します。」
14:9 イエスは彼に言われた。「ピリポ。こんなに長い間あなたがたといっしょにいるのに、あなたはわたしを知らなかったのですか。わたしを見た者は、父を見たのです。どうしてあなたは、『私たちに父を見せてください。』と言うのですか。
14:10 わたしが父におり、父がわたしにおられることを、あなたは信じないのですか。わたしがあなたがたに言うことばは、わたしが自分から話しているのではありません。わたしのうちにおられる父が、ご自分のわざをしておられるのです。

霊の目がまだ開かれていなかった弟子たちは、この時は、人としてのイエス様しか、見ることができなかったんですね。人間の理性や感性によって、神を見よう、神を知ろうといくら努力しても、それはできません。神の御霊である聖霊の働きによって開かれた霊によってのみ、私たちは神様が生きておられることを知ることができるんですね。

ご存知のように、聖霊というのは、よみがえられて天に戻られた神の子イエス様に代わって、信者に霊的な知恵と力を与えてくださり、助け、導いてくださる助け主のことを指しております。イエス様ご自身、天に戻られる前に、聖霊について弟子たちに次のようにおっしゃっています。有名な箇所です。

ヨハネ
14:16 たしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。
14:17 その方は、真理の御霊です。

14:26 助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。

パウロもまた、御霊の啓示によってのみ、信者は、生きておられる神様、主を知ることができるというふうに言っております。

第一コリント
2:9 ・・・・「目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮かんだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである。」
2:10 神はこれを、御霊によって私たちに啓示されたのです。御霊はすべてのことを探り、神の深みにまで及ばれるからです。

2:14 生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらは彼には愚かなことだからです。また、それを悟ることができません。なぜなら、御霊のことは御霊によってわきまえるものだからです。

こういうふうに、パウロは言っております。

もし仮に、私たちが信じている神様が、生ける神でなかったら、死んだ神だったらどうでしょう？もし、そうだったら、そのような神に祈っても、そのような神に頼っても、何の意味もなく、私たちの信仰は全く空しいものになってしまいます。もし、私たちが信じている神が生きておられないのであれば、私たち、信者が生ける神の御言葉である聖書、いのちの書であると信じている聖書は、単なる道徳の書、思想のの書、古代文化史の書にとどまってしまう。他の宗教の教典と何ら変わらないものにとなってしまいます。

そんなものを信じて、何の意味があるでしょうか。もし、私たちが信じている神様が、生きていない死んだ神であるならば、そのような神を信じる私たち信者は、すべての人の中で、いちばん哀れな人間と言えるのではないでしょうか。しかし、私たち信者は、御霊の導きによって開かれた霊によって、父なる神、御子なる神イエス様が生きておられることを知ることができるのです。具体的には、ひとつは人類の歴史を通してであります。そして、また、今、世界に起こってる現象を通してであります。

多くの人間は、歴史というのは、人間の手で作り出すものと考えております。しかしながら、それは、とんでもない思い上がった傲慢な考えであります。すでに神様は、約二千八百年前に、イザヤ書の中で、次のように仰せになっています。

> イザヤ
> 46:9 遠い大昔の事を思い出せ。わたしが神である。ほかにはいない。わたしのような神はいない。
> 46:10 わたしは、終わりの事を初めから告げ、まだなされていない事を昔から告げ、『わたしのはかりごとは成就し、わたしの望む事をすべて成し遂げる。』と言う。

私たち信者は、開かれた霊の目によって、聖書において、生ける神様がこのように約束されている通りに、これまでの人類の歴史が、神様のご計画どおりに実現されたことを知ることができます。

そして、現在、世界で起こっております不安と恐れに満ちた様々な現象も、これもまた、そしてまた、これから先に人類の上に起こることも全て、生ける神様の御心によるものであって、人類の歴史が、聖書に預言されているみ言葉通り、生ける神様のご計画の完成に向かって、着々と進められていることを、私たちは開かれた霊の目で確信することができるであります。そしてまた、霊の目が閉ざされていた時には、全く気付かなかった、自分の人生に起こった様々な出来事、御霊の助けによって霊の目が開かれた時に、全てのことが生ける神様のご計画によってなされたものであることを知って、自分のようなものをも愛してくださり、いつも共にいてくださり、支えてくださり、そして、救いの完成と導いてくださる生ける神様に、心から感謝することができるのであります。

では、救いの完成の時は、いったいいつでしょうか。それは、主のご再臨の時であります。その時、信者はイエス様と同じ、聖い朽ちることのない完全な体に変えられて、空中まで迎えに来てくださったイエス様によって、天の御国にたずさえ上げられ、そこで生ける神様に直接、お会いすることができるのであります。そして、イエス様が黙示録の二十二章で三度も、『見よ、わたしはすぐに来る』と約束しておられるように、その日は、もう間近に迫っております。

こうして、私たち信者は、生ける神様、そして、生けるイエス様に守られて、慰められ、励まされ、導かれて、どんなことが起こっても恐れることなく、平安と希望と喜びに満たされて、ご再臨の時を待ち望む時を過ごすことができるのであります。何という幸いなことではないでしょうか。ただただ、主に感謝し、そして、詩篇の十八篇四十六節のダビデのように、『主は生きておられる。ほむべきかな。わが岩。あがむべきかな。わが救いの神』と、主のみ名をほめたたえるばかりであります。

みことばをたべる

2021 年 4 月 4 日、町田福音集会
重田定義

エレミヤ
15:16 私はあなたのみことばを見つけ出し、それを食べました。あなたのみことばは、私にとって楽しみとなり、心の喜びとなりました。万軍の神、主よ。私にはあなたの名がつけられているからです。

皆様、おはようございます。前回に引き続きまして、代読という形式を取らせていただきます。

今回は、集会が再開されたというメールをいただきまして、嬉しくてですね、最初の文章だけ読んで、すぐに定義兄に電話しまして、『開かれる』と言ったら、定義兄が、『どうしても行きたい！』とすぐに言ってくれて、私も嬉しかったんですけど、メールを最後まで読みましたら、『疾患のある方と、高齢者の方は来ないでください』って言うのに、後で気が付きまして、後から電話して、『では、やっぱりやめましょう』ということになりまして、失敗してしまいました。そんなことで、とても来たいという気持ちがあったんですけど・・・・申し訳ございません。前回、ただ棒読みしてしまったという気持ちがすごくありまして、今回こそは、心を込めて、お読みしたいと思います。よろしくお願いします、

『みことばを食べる』と言う題で、メッセージさせていただきます。

『私はあなたのみことばを見つけ、それを食べました。あなたのみことばは、私にとって楽しみとなり、心の喜びとなりました。』エレミヤ書 15 章の 16 節。今日は、聖書のこの箇所から、『みことばを食べる』ということについて、ご一緒に考えたいと思います。

ここで言っているみことばとは、神様の言葉、あるいは、聖書の言葉のことです。この世の常識では、言葉というのは、耳で聞くものです。また、食べるというのは、食物を食べることです。ですから、みことばを食べるという表現に、奇異な感じを持つ方がいても当然です。しかし、聖書の神のみことばは、耳で聞くものでもなければ、目で読むものでもありません。食べるべきものなのです。

冒頭のみことばで、『私はあなたのみことばを見つけ出し、それを食べました』と言っているエレミアという人は、紀元前 600 年代前半、イスラエルの南半分にあったユダ王国のヨシュア王の時代に生きた偉大な預言者の一人です。しかし、彼は、初めから偉大な預言者と言われるような人ではありませんでした。彼は、預言者になった時の様子を、次のように語っています。

エレミヤ
1:4 次のような主のことばが私にあった。
1:5「わたしは、あなたを胎内に形造る前から、あなたを知り、あなたが腹から出る前から、あなたを聖別し(・・・・聖く分かつこと・・・・)、あなたを国々への預言者と定めていた。」
1:6 そこで、私は言った。「ああ、神、主よ。ご覧のとおり、私はまだ若くて、どう語っていいかわかりません。」
1:7 すると、主は私に仰せられた。「まだ若い、と言うな。わたしがあなたを遣わすどんな所へでも行き、わたしがあなたに命じるすべての事を語れ。
1:8 彼らの顔を恐れるな。わたしはあなたとともにいて、あなたを救い出すからだ。」

このようにエレミアは、自分から進んで預言者になろうとした人ではありませんでした。むしろ、神様から命じられても、尻込みするような、気の小さい人でした。そのエレミアに、神様は、神に選ばれた民であるにも関わらず、神に従うどころか、神に背いて歩んでいたイスラエルの民に、悔い改めてご自分に立ち返るように、告げようと命じられたのです。

預言者として建てられたエレミヤは、神様から命じられたことを、そのまま、イスラエルの民に伝えました。しかし、エレミアの言ったことは、彼らにとって、たいへん耳の痛いこと、腹の立つことでした。怒った彼らは、エレミアを捕らえて、地下牢に入れたり、泥の中に沈めたりするなど、ひどい目にあわせました。彼は、嘆き、悲しみ、もう主の言葉を語るまいと、決心するのですが、自分の意に反して、その後も、神様のみことばを語り続けました。

どうして、そのようなことができたのでしょうか。それは、彼が、神のみことばを食べたからなのです。神様のみことばを食べることによって、彼の霊が燃え、強められたからなのです。この彼のエネルギーの原動力は、どこから来たのでしょうか。それは、神様のみことばを食べることによって与えられたのです。私たちの体を養う食べ物は、まず、口を開いて、食べなければなりません。では、聖書のみことばの場合は、どうでしょうか。

みことばは、私たちの霊を養う食べ物です。ですから、まず、霊の口を開かなければ、食べることはできません。しかし、霊の口を開けるとは、どういうことなのでしょうか。人間は、人の語る言葉を頭で理解することによって、その人が何を考え、何をしようとしてるのかが分かります。しかし、神様のみことば、聖書のみことばは、頭で理解しようとしても分かりません。聖書を、道徳の書として読んだり、歴史の書として読んだり、キリスト教を研究するために読んだりするのは、聖書を頭で理解しようとしているのです。しかし、そういう読み方をしている限り、神様の御心を知ることはできません。いくら人間の頭で、知恵で、聖書を分かろうとしても、神様の御心、神様のお考えを分かることはできません。どうしてでしょうか。

聖書のみことばは、人間の頭にではなく、人間の霊に与えられるものだからです。そして、霊に与えられるみことばは、霊の口を開けて食べなければならないのです。では、霊の口を開けるにはどうしたらよいのでしょうか。それには、神様の前にへりくだり、神様に向けて心を開くという、謙虚な態度をとることが必要なのです。エレミヤが神様のみことばを食べることができたのは、彼がそのような態度をとったからに他なりません。

さて、神様のみことばは、私たちが日常、食べているような、限りある体の生命を維持する食べ物とは全く異なります。神様のみことばは、永遠の命に生きるために、なく

てはならない食べ物なのです。私たち人間は、毎日、体を支える食べ物を得るために働きますが、イエス様は体の糧よりも、はるかに大切な永遠の命を支える霊の食べ物を得るために働きなさい。そして、その霊の食べ物は、イエス様が与えてくださると、次のようにおっしゃいました。

ヨハネ
6:27 なくなる食物のためではなく、いつまでも保ち、永遠のいのちに至る食物のために働きなさい。それこそ、人の子（・・・・イエス様・・・・）があなたがたに与えるものです。

そして、イエス様は、私たちが永遠の命に至るみことばを食べることができるために、すばらしい助け主を与えてくださいました。それが聖霊です。イエス様は、次のように弟子たちに約束されました。

ヨハネ
14:26 助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。

聖霊の働きについて、使徒パウロも、次のように言っています。

第一コリント
2:11 ・・・・神のみこころのことは、神の御霊のほかにはだれも知りません。
2:12 ところで、私たちは、この世の霊を受けたのではなく、神の御霊を受けました。それは、恵みによって神から私たちに賜わったものを、私たちが知るためです。
2:13 この賜物について話すには、人の知恵に教えられたことばを用いず、御霊に教えられたことばを用います。その御霊のことばをもって御霊のことを解くのです。

このように、聖霊を受けた者は、御霊の助けによって、神様から賜物として与えられた、数々の聖書のみことばを通して初めて、神様の深いご愛と恵みを味わい知って、よろこぶことができるのです。

ここで、みことばを食べるには、どうして聖霊の助けが必要なのかということを、食べ物と消化液の働きに例えて、考えてみましょう。私たちが食べ物を消化するためには、唾液、胃液、膵液、胆汁などの消化液の助けが必要です。これらの消化液の働きによって消化された食べ物が、体を生かすエネルギーになるのです。このように食べたみことばを消化するには、聖霊の働きによる助けが必要であり、聖霊の働きによって消化されたみことばが、私たち信仰者に、霊的なエネルギーやよろこびを与えてくれるのです。

しかし、ここでひとつ注意しなければならないことがあります。それは、考えごとや悩みごとに心が囚われながら食事をすると、消化液の分泌が妨げられ、不消化を起こすように、自分の知恵や力によってみことばを理解しようとすると、それが聖霊の働きを妨げて、みことばの深い意味を味わうことができないということです。ですから、みことばを食べる時は、みことばに心を集中し、心静かに、謙虚になって、食べなければなりません。また、食べ物が硬いと思った時には、よく咀嚼（そしゃく）すると、消化液がたくさん出てきて、硬い食べ物も消化できるようになるのと同じように、みことばが理解しにくいと思った時には、あきらめずに、何度も繰り返して読むうちに、聖霊が働いて、みことばの味が分かるようになります。

さて、私たち信者がみことばを食べて、その味を知ると、どのようなことが起こるのか、そのひとつの実例をご紹介します。

もう三十年ほど前のことになりますが、がんで天に召された主にある兄弟のお話です。私は、その兄弟が入院されている病院に、時々、お見舞いに行きましたが、その時にいつも、兄弟が言われた言葉は、『今日はどんなみことばをいただけますか』というものでした。ご自分がすでに、癌の末期であることを知っておられた兄弟は、その都度、『自分はもう何も食べられないけれども、みことばは食べられます。本当にごちそうです』と、言っておられました。そして、この兄弟は、みことばに支えられ、慰められ、励まされ、よろこんで安らかに、天の御国に召されたのです。

このように、私たち信者が、肉体的にはどんなに困難な状況の中にあっても、みことばを食べると、体が強められ、元気になって喜ぶことができるのです。パウロは、コリント人への手紙でこう言っています。

第二コリント
6:10 悲しんでいるようでも、いつも喜んでおり、貧しいようでも、多くの人を富ませ、何も持たないようでも、すべてのものを持っています。

これを、頭で読めば、全く理解できないでしょう。こんな矛盾したことは、常識では考えられないからです。しかし、みことばを食べ、その味を知った人ならば、『本当にその通りです、然り、アーメン』と、このみことばを心から受け入れて、喜ぶことができるのです。これが、聖書のみことばを食べるということです。

私たち人間は、日頃はこの世のことに忙殺されて、なかなか自分の心の中をのぞいてみる暇はありません。しかし、静まって、自分の心の中をのぞいてみる時に、この世のどんなものを持ってしても、心の不安や虚しさを、完全に除くことができないことが分かるのではないでしょうか。いかなるこの世のものを持ってきても、心に開いた穴を満たすことはできません。

ただひとつ、心の虚しさを生かし、心によろこびと幸いと希望を与えることのできるものは、聖書のみことばです。なぜなら、私たち人間は、聖書のみことばを通して、神様の、そして、御子イエス様の限りない深い愛にふれ、聖書のみことばの約束によって、死に打ち勝ち、永遠の命に生きるよろこびに満たされるからです。しかし、そのためには、みことばを聞くのではなく、食べて、味わうことが必要であることを、ぜひ知っていただきたいと思います。

詩篇 119 篇には、神のみことばに従うとき、人は初めて、正しい言い方、力と希望とよろこびにあふれた歩みがで

きると強調していますが、今日は、その中から、103 節、105 節、130 節のみことばをお読みして終わります。

詩篇
119:103 あなたのみことばは、私の上あごに、なんと甘いことでしょう。蜜よりも私の口に甘いのです。

119:105 あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です。

119:130 みことばの戸が開くと、光が差し込み、わきまえのない者に悟りを与えます。
119:131 私は口を大きくあけて、あえぎました。あなたの仰せを愛したからです。

三つのうめき

2021 年 5 月 30 日、吉祥寺（Zoom 礼拝）
重田定義

ローマ
8:22 私たちは、被造物全体が今に至るまで、ともにうめきともに産みの苦しみをしていることを知っています。
8:23 それればかりでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、心の中でうめきながら、子にしていただくこと、すなわち、私たちのからだの贖われることを待ち望んでいます。

8:26 御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてくださいます。

おはようございます。本日、定義兄弟は、入居している施設から出ることができず、また、家族であっても入ることができず、本人もパソコンを使ってない、利用しないことから――申し訳ございません――私の方で代読させていただきます。よろしくお願いいたします。

今日は、このローマ人への手紙のみ言葉の中にある三つのうめきということについて、ご一緒に学んでみたいと思います。

まず、被造物のうめきについてです。被造物とは、全能にして創造主なる神によって造られた全宇宙に存在するもの全てを指しています。創世記の 1 章から 2 章には、神様は、無からすべてのものをお造りになり、造られたものをご覧になって、よしとされた、すなわち、満足されたとあります。全てのものは、神様のみ心にかなった出来栄えだったからです。これらの被造物は、神様のご栄光の現れとして造られたのでした。その被造物が、『産みの苦しみ』と擬人化されて表現されている『被造物のうめき』とは、いったいどういうことなのでしょうか。

創世記、1 章 26 節に、神様は、ご自分のみ心にすなおに従うことを願われて、ご自分に似るものとして、人間をお造りになり、その人間に、ご自分がお造りになったすべての被造物を管理させようとお考えになったとあります。

【参考】創世記
1:26 そして神は、「われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう。そして彼らに、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配させよう。」と仰せられた。

その人間は、アダムとエバであります。しかし、二人は自分の欲望を満たすために、神様の御心に背いて、禁断の木の実を食べるという罪を犯してしまいました。その結果、アダムとエバの子孫である人類は、全て、生まれながらに、その罪の性質を受け継ぎ、罪あるものとなってしまったのです。それゆえ、その罪は原罪と呼ばれます。

それ以来、神様によって造られた被造物は、人間に管理されるどころか、人間によって痛めつけられてきました。罪を持った人間が、被造物を正しく管理できないのは、当然のことであり、人間はおのれの欲望を満たすために、勝手気ままに被造物を利用してきました。そのために被造物は、今に至るまで、うめいているのです。

具体的な例は、いくつも挙げられます。これまで、数多くの植物や動物が、人間のわがまま勝手な行動によって絶滅したり、絶滅の危機に瀕しています。また、アマゾンをはじめとする熱帯の緑の大密林は、光合成によって、地球の大気中の二酸化炭素を酸素に変えるという、生態系にとって大切な役割を果たしていますが、大規模な開発によって、その姿を、どんどん消しつつあります。

また、人間の生活に必要なエネルギーとして最良の化石燃料が燃やされ、大気中の二酸化炭素は、どんどん増加しています。大気中の二酸化炭素の増加は、地球の温暖化の大きな原因であり、その影響は、地球の気象の変化となって現れ、その結果、人間の生活に地球規模的な被害が起こっていることは、ご承知のとおりであります。人間はようやく、ことの重大性に気付き、世界各国の政治家や専門家たちが、何度も会議を開いて協議をしています。しかし、悲しいことに、その成果は、全くと言ってよいほど上がっていません。

どうしてでしょうか？それは、その根本原因が、自分たち人間の罪の性質、すなわち、自己中心という性質にあるからです。地球の環境を守ることは大切と気づいても、そのために自分の欲望を抑えることができない――それが、被造物を、ますます苦しめることになっている原因なのです。

では、いつ被造物はこの苦しみから解放されるのでしょうか。いつ、うめきが喜びに変わるのでしょうか。それが黙示録を始め、聖書の各書に、次のように記されています。すなわち、天に戻られたイエス様がサタンを縛り、イエス様を信じるものには永遠の祝福を、信じない者には、永遠の滅びを与えるために、地上においでになり、千年のあいだ、王として信じる者とともに、この世を支配されるという、いわゆる千年王国の時なのです。

その時、被造物は、人間の罪による束縛から解放され、神様が初めにお造りになった時の完全な姿、状態に回復されるのです。天にあるもの、地にあるもの、すべてが完全な姿に回復されるのです。

聖書は、これについて、次のように表現しています。

イザヤ
11:6 狼は子羊とともに宿り、ひょうは子やぎとともに伏し、子牛、若獅子、肥えた家畜が共にいて、小さい子どもがこれを追っていく。
11:7 雌牛と熊とは共に草を食べ、その子らは共に伏し、獅子も牛のようにわらを食う。
11:8 乳飲み子はコブラの穴の上で戯れ、乳離れした子はまむしの子に手を伸べる。
11:9 わたしの聖なる山のどこにおいても、これらは害を加えず、そこなわない。主を知ることが、海をおおう水のように、地を満たすからである。

これが、イエス様、ご再臨のときの被造物の姿なのです。ここには、完全にされたすべての被造物が、本当の平和の中で、神様を賛美し、神様の栄光を表すものとして生活する、美しい情景が描かれています。今はまだ、その前の産みの苦しみの時代です。今の被造物のうめきは、その苦しみから解放される細胞のうめきに他なりません。

次に、『御霊の初穂をいただいている私たち自身も、心の中でうめきながら、子にしていただくこと、すなわち、私たちのからだの贖われることを待ち望んでいます』という箇所について考えたいと思います。

御霊の初穂をいただいているものとは、イエス様を信じ、その保証として、御霊を与えられた私たち信者です。しかし、どうしてイエス様を信じたものが、うめかなければならないのでしょうか。

第一に考えられるのは、罪から解放されて、新しく生まれ変わった信者の霊は、イエス様の御心に従うことを望んでいますが、この世に生きている信者の体は、まだ古いままなので、そのために、霊と肉との葛藤が起こるからなのです。

次のパウロの言葉は、それをよく言い表しています。

ローマ
7:18 私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。
7:19 私は、自分でしたいと思う善を行なわないで、かえって、したくない悪を行なっています。

7:21 そういうわけで、私は、善をしたいと願っているのですが、その私に悪が宿っているという原理を見いだすのです。
7:22 すなわち、私は、内なる人(・・・・つまり、イエス様を信じて、新生した霊・・・・)としては、神の律法(・・・・すなわち、神様のみ心・・・・)を喜んでいるのに、
7:23 私のからだの中には異なった律法があって、それが私の心の律法に対して戦いをいどみ、私を、からだの中にある罪の律法のとりこにしているのを見いだすのです。
7:24 私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。

熱心なユダヤ教徒であり、優れた学者であったパウロは、初めは、イエス様が神の御子であることを認めず、イエス様を信じるものを迫害していました。しかし、復活のイエス様に出会って、霊の目が開かれてからのパウロは、ガラテヤ人への手紙、2章20節で、『私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです』と、証しするほどの強い信仰者に変わりました。そのパウロが、『私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか』と嘆くほどに、この世に置かれた信者には、霊と肉との葛藤が激しいのです。

しかし、信者が未信者と決定的に異なっていることがあります。それは、イエス様の十字架の贖いを信じた者は、もはや、決して、罪に問われないという事実であります。パウロは、こう断言しています。

ローマ
7:25 私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。・・・・

8:1 ・・・・今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。

8:34 罪に定めようとするのはだれですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、私たちのためにとりなしていてくださるのです。

このようにパウロは、イエス様を信じた者は、もはや決して、罪に問われることはないと、心から確信しつつ、心の中でうめきながら、『からだの贖われることを待ち望んでいる』と言っているのであります。『からだが贖われる』とは、イエス様のご再臨の時には、信者のいやしい朽ちるからだが、イエス様に似た、朽ちることのない強い栄光のからだに変えられるということです。

ピリピ
3:20 ・・・・私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。
3:21 キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。

では、その時はいつなのでしょうか。イエス様は、次のように約束されました。

黙示録
22:12「見よ。わたしはすぐに来る。わたしはそれぞれのしわざに応じて報いるために、わたしの報いを携えて来る。
22:13 わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である。初めであり、終わりである。」
22:14 自分の着物を洗って(・・・・すなわち、イエス様の十字架の血によって清められて、信者となり・・・・)、いのちの木の実を食べる権利を与えられ、門(・・・・すなわち、天の御国の門・・・・)を通って都(・・・・天の都・・・・)にはいれるようになる者は、幸いである。

なんとすばらしい約束でしょうか。私たち信者は、『主よ、早く来てください』と祈りつつ、その日を、今か今かと待ち望むのであります。

三番目の御霊のうめきについて。

ローマ

8:26 御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてくださいます。

イエス様を信じた私たちの心の中には、イエス様のお約束通り、御霊が住んでくださっています。そして、絶えず、私たちを支え、励まし、慰め、導いてくださっています。

先ほども申しましたように、私たち信者は、この世に生きているあいだは、自分の思いを制御できずに悩み、苦しむことが多々あります。しかし、ここで、『御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてくださっている』とあることに、あらためて深い感動を覚えます。

私たち人間は、人の苦しみ、悩みを我がことのように覚えて、同じようにうめくことは、なかなかできません。しかし、神様から背き離れた私たちを救うために、ご自身のいのちを捨ててくださったイエス様は、さらに御霊となって、私たちといつも共にいてくださり、私たちの痛み、苦しみを共に負い、共にうめいてくださるのです。なんというイエス様の深いご愛ではありませんか。私たちは、ただ感謝するばかりです。

今日は、三つのうめきについて、ご一緒に考えてまいりました。三つのうめきがやむとき、それは、先ほども述べました通り、イエス様のご再臨の時であります。その時が迫っていることは、イエス様ご自身がその前兆について、弟子たちに答えておられることから知ることができます。

ルカ
21:8 イエスは言われた。「惑わされないように気をつけなさい。わたしの名を名のる者が大ぜい現われ、『私がそれだ。』とか『時は近づいた。』とか言います。そんな人々のあとについて行ってはなりません。
21:9 戦争や暴動のことを聞いても、こわがってはいけません。それは、初めに必ず起こることです。だが、終わりは、すぐには来ません。」
21:10 それから、イエスは彼らに言われた。「民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、
21:11 大地震があり、方々に疫病やききんが起こり、恐ろしいことや天からのすさまじい前兆が現われます。」

世界の現状は、まさに、イエス様がおっしゃる通りに進んでいるのではないでしょうか。イエス様は、次の言葉で締めくくられました。

ルカ
21:36 しかし、あなたがたは、やがて起ころうとしているこれらすべてのことからのがれ、人の子（・・・・すなわち、イエス様・・・・）の前に立つことができるように、いつも油断せずに祈っていなさい。

イエス様が教えてくださったように、私たちは、うめきがよろこびに変わる時が、いつ来てもいいように、御霊に満たされ、身を慎み、心を整えて、祈りつつ、その日を待ち望もうではありませんか。

神を誇る人間と自分を誇る人間

2021 年 7 月 4 日、町田福音集会（Zoom）
重田定義

詩篇
20:7 ある者はいくさ車を誇り、ある者は馬を誇る。しかし、私たちは私たちの神、主の御名を誇ろう。

こんにちわ。あらためて、このようにして、本当に久しぶりに、皆さんと一緒に礼拝を守ることができたこと、心から感謝しております。一年六カ月ぶりくらいだと思うんです。普段は、家内と一緒に、家庭で礼拝を捧げ、聖餐にあずかっておりました。また、毎日、朝晩、賛美と祈りを二人でしておりました。

コロナが、こんなに長引くとは考えもしなかったんですけども、この新しいコロナ・ウイルスというのは、未だかつて全人類があったことがないウィルスだと思うんです。それは、変異がきわめて速い。新しい変異の株が出現したと思ったら、もうすぐにまた、その次の変異株が来る・・・・こういう経験はおそらく、全人類がしたことがないのではないかと思います。そういうコロナの禍（か）――わざわいといいますが――によって、私たちは、全人類がですね、大変な目に遭っておりますけれども、本当にそのコロナによって、私たちの生活が、大きく変わったことは事実なんです。

それで、ここで、私が申し上げたいのは、私の祈りも変わったんです。どこが変わったかというと、以前にも増して、以前よりも増して、集会のために、そしてまた、兄弟姉妹のために祈る祈りが強くなったということですね。これは、今では本当にこう、いつでも集会に行ける。いつでも兄弟姉妹にお会いできると思っていたのが、それができなくなったために、もうこれは祈りしかない。その祈りは必ず、主が聞いてくださるということで、家内と二人で、一生懸命、その集会のために、兄弟のために祈ることが強められた。このことは、ひとつの大きな特徴的な変化だと、私は思っております。

さて、今日は、今、ヒロシ兄弟に読んでもらいました。詩篇の 20 篇の 7 節から、この御言葉について、ご一緒に考えたいと思っております。

今の御言葉は、天と地ほどの異なる誇りを持つ人間がいると。そのひとつは、いくさ車や馬を誇る人間である。もうひとつは、主なる神を誇る人間であるということを言っております。ここに、いくさ車や馬を誇るという言葉がありますけれども、これはいったい、どういう意味でありましょうか？また、それを誇る人間というのは、どんな人間なのでありましょう？

いくさ車とは、当時、いくさのために使われていた二頭の馬に引かれた二輪馬車のことを言います。たいへん、快速な馬車だったんですね。その車に乗って、戦士たちが槍を持って、突き進んでいた、一人乗り、あるいは、二人の車でありますが、そのいくさ車を誇るというのは、戦いに強い強力ないくさ車を持っていると、自分を誇ろうということなんですね。そして、また、馬を誇るというのは、戦いに強い、足の速い、強靭な馬を持っていると、自分を誇ることであります。

このように昔から、強力ないくさ車を持つことや優れた馬を持つことは、自分の力を誇示するものであり、多くのいくさ車や優れた馬を持っている人間や国ほど、強力な支配者としての地位を保つことができたのであります。

これは、現代でも同じなんですね。国がその強さを誇るときに、いったい何をもって誇るでしょうか？いくさ車や馬は、核ミサイルや原子力潜水艦などの軍事力、あるいは、豊かな資源、強力な経済力、優れた科学技術力などと置き換えても良いと思います。そして、これらのものを多く持つことを誇る国ほど、強国として認められているのではないでしょうか？

ひとりひとりの人間についても、同じことが言えます。昔のいくさ車や馬は、現代では例えば、高級車、高級外車といいますか、あるいは、高い地位や身分、立派な経歴、豊かな財産などに置き換えられるでありましょう。そして、現代の人間は、これらを持っていることによって、自分を誇っているのではないでしょうか？

しかし、人間が誇りとするこれらのものは、いったい私たちにどんな保証を与えてくれるのでありましょう。

イザヤ
31:1 ああ。助けを求めてエジプトに下る者たち。彼らは馬にたより、多数の戦車と、非常に強い騎兵隊とに拠り頼み、イスラエルの聖なる方に目を向けず、主を求めない。

31:3 エジプト人は人間であって神ではなく、彼らの馬も、肉であって霊ではない。主が御手を伸ばすと、助ける者はつまずき、助けられる者は倒れて、みな共に滅び果てる。

これは、イスラエルが強国、アッシリアに攻められて、エジプトに助けを求めた時のことであります。

イスラエルが、エジプトに助けを求めた理由は、エジプトが多数の戦車と強力な騎兵隊とを持っている強国であったからであります。けれども、本当にイスラエルを助けることができるのは、イスラエルをご自分の民として選ばれた主なる神様なのであり、神様は、これまで何度となく、イスラエルの危機を救ってくださいました。けれども、イスラエルはそのことをすっかり忘れて、多数の戦車や強力な騎兵隊を持つエジプトに頼ってしまったのであります。そして、神様は、エジプトに頼っても無駄だ。わたしが手を伸ばせば、助けるエジプトも、また、助けられようとしているあなたがたイスラエルも、共に滅びに当ててしまうからだと、おっしゃっているのであります。

それに関連して、もう一か所、詩篇の 49 篇からお読みいたします。

詩篇
49:16 恐れるな。人が富を得ても、その人の家の栄誉が増し加わっても。
49:17 人は、死ぬとき、何一つ持って行くことができず、その栄誉も彼に従って下っては行かないのだ。

49:18 彼が生きている間、自分を祝福できても、また、あなたが幸いな暮らしをしているために、人々があなたをほめたたえても。
49:19 あなたは、自分の先祖の世代に行き、彼らは決して光を見ないであろう。
49:20 人はその栄華の中にあっても、悟りがなければ、滅びうせる獣に等しい。

このように言っています。ここに書かれている悟りというのは、どういうことかと言いますと、これは、神様がどういうお方かということを、正しく知っているということなんですね。自分の考えで、ただ、こう分かったというふうな軽い意味ではなくて、神様ってどういう方かということを、自分は正しく知っていることが、ここに出ている悟りということであります。

そして、この御言葉にありますように、私たち人間が誇りとしている富、あるいは、栄誉をいくら持っていても、それは、生きているほんの僅かなあいだ、長くても八十年、九十年という永遠の時から見れば、ほんの僅かなあいだの自己満足を満たすにすぎないものではないか。したがって、人間がこの世でどんなに栄華を誇っても、神様を知る真の知識がなければ、結局は、滅びうせる獣のように、はかないものに過ぎない。そういうことをここで、言っているのであります。

では、今度は、神を誇る人間とは、いったいどういう人間でありましょうか？そして、また、神を誇る人間となるためには、いったい、どうしたらよいのでありましょう？

エレミヤ
9:23 主はこう仰せられる。「知恵ある者は自分の知恵を誇るな。つわものは自分の強さを誇るな。富む者は自分の富を誇るな。
9:24 誇る者は、ただ、これを誇れ。悟りを得て、わたしを知っていることを。」

主なる神様は、誇る者は、自分の知恵や自分の強さを誇るのではなくて、ただ、悟りを得て、ご自分を知っていることを誇りなさい。そのようにおっしゃっているんですね。ここで大切なことは、神様を誇るには、ただ神さまを、知識として知っているということ、知るということではなくて、悟りを得て知るということなんですね。

では、悟りを得て知るということは、いったいどういうことなのでしょう？その例を、ピリピの三章のパウロの証しから、見てみたいと思います。

ピリピ
3:5 私は八日目の割礼を受け、イスラエル民族に属し、ベニヤミンの分かれの者です。きっすいのヘブル人で、律法についてはパリサイ人、
3:6 その熱心は教会を迫害したほどで、律法による義についてならば非難されるところのない者です。
3:7 しかし、私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。
3:8 それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。

パウロは混じりけのない生粋のユダヤ人でありました。そして、中でも、ベニヤミン族というイスラエルの民族の中でも誇り高い部族であり、律法、すなわち、神様からイスラエルの民に与えられた命令、おきてを忠実に守ろうとするパリサイ派というグループに属しておりました。

それゆえ、イエス様を救い主と信じる人たちを、彼は、律法に反する敵として迫害することが正しいと信じて、それを、実行しておりました。しかし、これらの誇るべきのパウロの血統や経歴も、彼が復活のイエス様に出会って、霊の目が開かれ、自我がこなごなに砕かれ、パウロの言葉をそのまま引用すれば、『私の主であるキリストイエスを知ったことのすばらしさのゆえに、私にとって得であったこれらのものを全て損と思うようになりました』と告白するまでに、彼が変えられたのであります。

そして、パウロは、それまで律法の敵と思い込んでいたイエス様を、私の主、私のキリスト・イエスと、お呼びするように一変いたしました。これが、悟りを得て、主を知るということであります。

悟りを得て、イエス様を主と信じたパウロは、エペソ人への手紙で、エペソの教会の信者に対して、こう言っております。

エペソ
2:8 あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。
2:9 行ない（・・・・行いというのは、よき行いですね・・・・）によるのではありません。だれも誇ることのないためです。

このように言っているんですね。すなわち、救いというのは、ただ神様の恵みによる賜物なのであって、それは、誰も自分の行いが良かったから救われたと、自分を誇ることのないためだ。そのように、信者を戒めております。

そして、さらに、ガラテアの教会の信者に送った手紙では、こう言っております。

ガラテア
6:14 私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に（・・・・すなわち、私たち人間の神様に対するそむきの罪を、身代わりになって、十字架にかかってくださった主イエス様以外に・・・・）誇りとするものが決してあってはなりません。

このように、はっきりと断言しております。

このように、主イエス様以外に誇れるものが、決してあってはならない。私たちには、決してあってはならないと断言したパウロは、今度は、コリントの教会の信者に宛てた手紙では、自分には誇るべきものがあるんだと、今度は、不思議なことを、ここで書いております。では、その誇りと、いったい、どんな誇りなのでありましょうか？

第二コリント

12:7 ・・・・私は、高ぶることのないようにと、肉体に一つのとげを与えられました。それは私が高ぶることのないように、私を打つための、サタンの使いです。
12:8 このことについては、これを私から去らせてくださるようにと、三度も主に願いました。
12:9 しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。

このように、彼は言っております。パウロは、病名ははっきりしませんけれども、周期的に起こる肉体的苦痛を伴う病を持っていたようであります。そして、イエス様に、その苦痛を取り去っていただくように、三度も願いました。しかし、イエス様のお答えは違いました。イエス様は、パウロの願いを聞いても、パウロのとげは取り去られませんでした。そして、その理由は、ご自分の力は、パウルの強さのうちにではなくて、パウロの弱さのうちに完全に働くからだと、おっしゃったんです。

パウロは、納得して、それならば、自分は大いに喜んで自分の弱さを誇ろうと、決心しました。彼は、自分の弱さを誇ることによって、イエス様を誇ることができたと言っても良いと思います。

私たちも、霊が閉ざされていたときは、自分を誇る高慢なものでありました。そんなことはない。自分には、誇るようなものはないし、自分を誇ることなどしたことはない・・・・とおっしゃる人もいるでしょう。しかし、どうでしょう？世の中には悪事を働く人、問題や障害を抱えている人、社会的弱者と言われている人がいます。そして、そのような人を自分と比較して、自分はあの人よりも、少しはマシだと思うならば、それは、自分を誇っているんです。

イエス様は、そのような私たちをも見捨てずに、愛してくださり、それぞれ、もっともふさわしい時に、もっともふさわしい方法で、霊の目を開いてくださり、イエス様を主と信じるようにしてくださったのであります。

そして、霊の目を開かれた私たちは、御霊の導きによって、自分には誇るべきものは何ひとつなく、塵にも等しい無価値な自分、神様に背いて、自分勝手に生きていたような罪ある自分をも、再びみもとに引き戻して、みそばに置くために、その隔ての壁となっている罪を、十字架にかかって、取り除いてくださったそのイエス様だけを、唯一の誇りとするように、変えられたのではないでしょうか。

そのように変えてくださったイエス様に、私たちは、心から感謝し、イエス様の力が、さらに大きく自分を覆うために、自分の弱さを誇ることができるように、祈ろうではありませんか。最後に、詩篇の五篇をお読みして終わります。

詩篇
5:11 こうして、あなたに身を避ける者がみな喜び、とこしえまでも喜び歌いますように。あなたが彼らをかばってくださり、御名を愛する者たちがあなたを誇りますように。
5:12 主よ。まことに、あなたは正しい者（・・・・正しい者というのは主を信じ従う者・・・・）を祝福し、大盾で囲むように愛で彼を囲まれます。

ありがとうございました。

わたしの思いはあなたがたの思いよりも高い

2021 年 10 月 3 日、町田福音集会
重田定義

> ヨシュア
> 55:8「わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、わたしの道は、あなたがたの道と異なるからだ。――主の御告げ。――
> 55:9 天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。

三ヶ月ぶりに、このようにして、町田の兄弟姉妹と共に礼拝をお捧げすることができたこと、本当に感謝しております。ご覧のようにですね、私も、それから――今日は、顔は見せておりませんけども――家内もみ言葉と御霊に支えられ、導かれて、守られて、そしてまた、兄弟姉妹の祈りに支えられて、元気に、無事に過ごしております。ありがとうございます。

それでは、これからしばらくの間、ご一緒にみ言葉から、主の大いなる恵みをいただきたいと思います。

イエス様を信じる私たちは、日々の歩みの中で、しばしば、主のみ心がわからない。いったい、主のお考えはなんだろうと、思い悩んでしまうことがあるのではないでしょうか？しかし、それは今、読んでいただいたみ言葉にありますように、主のお考えは目先のことしか見えない、わからない、私たち人間の考えの及ばないほどの高いものであって、人の頭では到底、主のご計画、お考えを知ることなどできないからなのであります。

このことについては、聖書に数多くの例が記されておりますけれども、今日は、新約聖書に載っている中から、三人の有名な人物――皆様がよくご存じの方々――の例を見てみたいと思います。

最初はバプテスマのヨハネの例であります。

イスラエルは、昔から、繰り返し周囲の強国に侵略されるという苦難の歴史を味わってきました。これは、イスラエルの民が、神様に選ばれた神の民であるにもかかわらず、度々、神様に背いて、偶像の神を拝するという罪を犯したために、神様から与えられた罰なのであります。しかしながら、神様がそのイスラエルの民をお見捨てにならないで、なおも、愛してくださって、預言者の口を通して、イスラエルを救うメシアを起こし、恒久的な王国をこの地に建てると言う約束をなさいました。

バプテスマのヨハネの時代には、イスラエルは、ローマ帝国に支配され、圧政に苦しんでおりましたので、人々は神様が約束されたメシアの現れを、今か今かと、待ち望んでおりました。

そのような時、神様からメシアの道を整える前触（さきぶれ）の使命を与えられたバプテスマのヨハネは、人々に神様に背いた罪を悔い改めるように勧め、ヨルダン川のほとりで、悔い改めのための洗礼を授けておりました。

バプテスマのヨハネの名の由来は、ここにあります。

そこに、イエス様がおいでになったのです。バステスマのヨハネは、イエス様を見た途端、御霊の啓示を受け、この方こそ自分たちが長いあいだ、待ち望んでいた救い主、メシヤであると証言いたしました。その彼は、捕らえられ、牢に入れられました。理由は、ユダヤでの領主が、その領主の兄弟の妻を妻としているという不道徳を、彼が攻めたからであります。

彼は、その後、首をはねられて死にましたけれども、獄中でも、イエス様の噂は、彼の耳に入ってきました。しかし、その噂を聞いた彼の心には、疑惑の想いが湧き上がってきたのです。それは、彼が期待していたようなメシヤのわざを、イエス様はいっこう、実行される気配がないからでした。そこで彼は、自分の弟子たちに、次のような質問を託して、イエス様のもとに遣わしました。

> マタイ
> 11:3 ・・・・「おいでになるはずの方は、あなたですか。それとも、私たちは別の方を待つべきでしょうか。」

ヨハネの質問に対して、イエス様は、ヨハネの弟子たちに、次のようにお答えになりました。

> マタイ
> 11:4 ・・・・「あなたがたは行って、自分たちの聞いたり見たりしていることをヨハネに報告しなさい。
> 11:5 盲人が見、足なえが歩き、らい病人がきよめられ、つんぼの人が聞こえ、死人が生き返り、貧しい者には福音が宣べ伝えられているのです。
> 11:6 だれでも、わたしにつまずかない者は幸いです。」

イエス様は、ヨハネに、『あなたはイスラエルを救う強いメシヤとしてのわたしを期待しているようだが、その思いは、わたしの思いとは違う。わたしはあなたの弟子たちが見たり、聞いたりしているとおり、苦しみ、悲しみ弱っている人、貧しい人を救うメシヤとして、わざを行うために来た。だれでも、わたしにつまずかないものは幸いだ。』このように、おっしゃっているのであります。

そして、冒頭のいちばん最初に読んでいただいた神様のみ言葉、すなわち、『わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。わたしの口から出るわたしの言葉は、必ずわたしが望むことを成し遂げ、私がいい送ったことを成就させる』というその神様のお約束通り、神の御子のイエス様は、父なる神のみことばを成就なさるために、この世に、人の姿を取って、来てくださったのであります。

しかも、それは、イスラエルの民のみならず、全ての民、全人類の神様に対するそむきの罪を神の御子、自らのいのちをもって贖うという到底、考えられないみわざによって、成就されたのであります。まさに、神様のお考えは、私たち人間の考えをはるかに超えた高く深いものでありました。

イエス様のお答えを、バプテスマのヨハネがどう受け取ったか、理解したか、聖書には書かれておりません。しかし、後にイエス様から、『女から生まれた者（・・・・すな

わち、全ての人間・・・・）の中で、バプテスマのヨハネよりすぐれた人は出ませんでした』と――マタイの 11 章 14 節に記されておりますが――、そのようにイエス様から称賛されたほどのヨハネですから、彼が、イエス様のお答えを聞いて、主のお考えは、小さな自分の頭では到底、計り知ることができないほど高く、深いものであることを悟り、イエス様につまずいたことを悔い改め、イエス様は必ず、神様のみこころ成し遂げてくださると確信して、よろこんで自分のいのちを主にお委ねして、死んでいったのではないでしょうか？

次に、ペテロの例を見てみましょう。

イエス様が弟子たちを従えて、ピリポ・カイザリア地方に行かれた時のことでした。イエス様は、弟子たちに、人々は、わたしのことを誰だと言っているのかと、お尋ねになりました。彼らは口々に、バプテスマのヨハネだとか、預言者エリヤ、あるいは、エレミアだとか、あるいは、その他の預言者だとか言っていると、答えました。そこで、イエス様は彼らに、あなたがたはわたしを誰だと思うかと、質問されました。

この質問に対して、ペテロは何と答えたか。あなたは、生ける神の御子キリストです。はっきりと答えました。それをお聞きなったイエス様は、『あなたは幸いです。このことをあなたに明らかに示したのは人間ではなく天にいますわたしの父です』と、彼を祝福されました。以上のことは、マタイの 16 章に記されております。

【参考】マタイ
16:13 さて、ピリポ・カイザリヤの地方に行かれたとき、イエスは弟子たちに尋ねて言われた。「人々は人の子をだれだと言っていますか。」
16:14 彼らは言った。「バプテスマのヨハネだと言う人もあり、エリヤだと言う人もあります。またほかの人たちはエレミヤだとか、また預言者のひとりだとも言っています。」
16:15 イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」
16:16 シモン・ペテロが答えて言った。「あなたは、生ける神の御子キリストです。」
16:17 するとイエスは、彼に答えて言われた。「バルヨナ・シモン。あなたは幸いです。このことをあなたに明らかに示したのは人間ではなく、天にいますわたしの父です。

そして、イエス様は、続いて弟子たちに驚くべきことを告げられました。それは、ご自分は、これからエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから、多くの苦しみを受け、殺され、そして、三日目によみがえらなければならないということでした。それを聞いた弟子たちは、どんなに驚いたことが想像できます。

そのひとり、ペテロの言ったことと、それに対するイエス様のお答えが、マタイの福音書 16 章にあります。

マタイ
16:22 するとペテロは、イエスを引き寄せて、いさめ始めた。「主よ。神の御恵みがありますように。そんなことが、あなたに起こるはずはありません。」
16:23 しかし、イエスは振り向いて、ペテロに言われた。「下がれ。サタン。あなたはわたしの邪魔をするものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」

イエス様が十字架にかかられることは、神様に対するそむきの罪に汚れた人間を救う、神様のご計画が成就するためには、絶対に必要なことでありました。必要不可欠なことでありました。しかし、『あなたは生ける神の子、神の御子キリストです』と、はっきり証ししたペテロ、彼の頭では、人類を救う神様の大いなるご計画を計り知ることはできませんでした。

イエス様のおっしゃったことを受け入れられなかったペテロの口から思わず出た言葉が、『そんなことが、あなたに起こるはずはありません』でした。ペテロは、自分は誰よりもイエス様を思っていると自負していたようであります。しかし、その思いは、全く人間的な思いだったのであります。また、同時に、イエス様を殺されたら、自分たちはどうなるだろうという、自分のことを心配する思いもあったでありましょう。

そして、『あなたは神のことを思わないで人のことを思っている』というペテロに対するこのイエスさまの叱責は、また、ともすれば、イエス様を霊的にではなくて、人間的に敬愛するという信仰、イエス様のお考えではなくて、自分の考えを中心とするような誤った信仰に陥りがちな、私たち信者に対する主の戒めと受け止めるべきでありましょう。

このことを通して、私たち信者は、いつもへりくだって、主のお考えは、私たちの考えをはるかに超えた、高く、深いものであることを、強く覚え、自分の思いではなくて、主のみ心だけがなるようにと、常に祈ることが大切だと思います。

三番目に、パウロの例を見てみたいと思います。

熱心なユダヤ教徒で、また、高名な律法学者でもあったパウロは、イエス様をキリスト、すなわち、救い主と信じる人々を、律法を軽んじているとして迫害することに、熱心でありました。しかし、キリスト教徒を迫害するために、ダマスコに向かう途上で、復活されたイエス様から、『なぜ私を迫害するのか』という声を聞いて、改心して、一変して、彼は、異邦人にイエス様を宣べ伝える伝道者となったのであります。

そのパウロは、殉教の死を遂げるまで、都合、三回、大きな伝道旅行をしておりますけれども、二回目の伝道旅行の時、主は、彼が行こうとしていた地方に行くことを、二度も、止められたのであります。

使徒の働き
16:6 それから彼らは（・・・・彼らというのはパウロとシラスのことですが・・・・）、アジヤでみことばを語ることを聖霊によって禁じられたので、フルギヤ・ガラテヤの地方を通った。
16:7 こうしてムシヤに面した所に来たとき、ビテニヤのほうに行こうとしたが、イエスの御霊がそれをお許

しにならなかった。
16:8 それでムシヤを通って、トロアスに下った。

彼らは、まず、現在、小アジヤと呼ばれているトルコ地方に福音を宣べ伝えるとしておりました。ところが、聖霊によって、とどめられたのであります。そこで、次に、北の方、すなわち、北海沿岸のビテニヤという地方に行こうとしましたけれども、またも、主の御霊がその計画を禁じられました。

いったい、主のために、自分たちがいのちをかけて福音を宣べ伝えに、その地に行こうとしているのに、なぜ、主は私たちを――自分たちを――とどめられるのか、そのことを彼らは、その時は、全く理解できなかったんですね。主のみ心は、まったく理解できませんでした。

その夜、パウロは幻を見ました。その結果、彼は、なぜ主が自分たちをとどめられたのか、主は、自分たちをどこに遣わそうとされるお考えなのかを、確信することができたのであります。

使徒の働き
16:9 ある夜、パウロは幻を見た。ひとりのマケドニヤ人が彼の前に立って、「マケドニヤ（・・・・これはギリシャの北方の地方ですが・・・・）に渡って来て、私たちを助けてください。」と懇願するのであった。
16:10 パウロがこの幻を見たとき、私たちはただちにマケドニヤに出かけることにした。神が私たちを招いて、彼らに福音を宣べさせるのだ、と確信したからである。

この伝道旅行の結果、多くの異邦人――ギリシャ人たち――が、福音を受け入れ、マケドニア地方の大都市、ピリピやテサロニケに聖書に知られた諸教会が建てられることになったのであります。

最初に申しましたように、私たち信者は、信仰の歩みの中で、理解できないような出来事、思いがけないような出来事にあったり、あるいは、祈っても、思うような結果が得られないと、主のみ心がわからなくなり、途方に暮れ、思い悩み、はては、主を疑ってしまうような信仰の弱い者であります。そのような疑いや迷いが起こる大きな原因は、私たちが、主に全き信頼を置いていないから、主に完全に自分を明け渡していないから、また、主を第一としていると言いながらも、自分の思いを中心に置いているからであります。

モーセの後継者で、イスラエルの指導者、ヨシュアは、イスラエルのために次のように言いました。

ヨシュア
23:14 ・・・・あなたがたは、心を尽くし、精神を尽くして知らなければならない。あなたがたの神、主が、あなたがたについて約束したすべての良いことが一つもたがわなかったことを。それは、一つもたがわず、みな、あなたがたのために実現した。

もう一回、読みます。『あなたがたは、心を尽くし、精神を尽くして知らなければならない。あなたがたの神、主が、あなたがたについて約束したすべての良いことが一つもたがわなかったことを。それは、一つもたがわず、みな、あなたがたのために実現した。』これは、私たちキリスト者、全てに言われていることなのであります。

キリスト者の信仰の原点であるところの神様のお約束、すなわち、父なる神様から遣わされ、すべての人間の罪を負って、十字架にかかってくださった神の御子、イエス様を救い主として信じ、受け入れただけで、神様から義、すなわち、正しいものとされ、罪の赦しと永遠のいのちが与えられ、神の子供として、天のみ国を相続するという、この神様のお約束は到底、人間の小さな頭では、理解することはできません。

しかし、自分には理解できなくても、私たちのために御子の尊いいのちを犠牲にしてくださるほど、私たちを愛してくださる、全能にして生けるまことの神様のお約束である以上、信じる者の上に、そのお約束は、すでに一つもたがわず、すべて実現したということを、私たちキリスト者は、与えられた御霊によって、心に固く確信しなければなりません。

そしてまた、このお約束は、これから私たちが将来に向かって、天のみ国まで歩む道のりの全てに与えられたお約束であり、また、やがて、まもなく、天のみ国で父なる神様、イエス様に直接、お会いして、そこで永遠に、楽しく、みもとで過ごすことができるというお約束も、既にもう成就したと、私たちは信じるべきであります。

第ニコリント
1:20 神の約束はことごとく、この方（・・・・すなわち、御子イエス・キリスト・・・・）において「しかり。」となりました。それで私たちは、この方によって「アーメン。」と言い、神に栄光を帰するのです。

1:22 神はまた、確認の印を私たちに押し、保証として、御霊を私たちの心に与えてくださいました。

私たち信者は、信仰の歩みの中で、たとえ、主のお考えが分からなくなるようなことが起こっても、疑うことなく、思いわずらうことなく、ご計画の全てをお考えどおりに成し遂げられる、大いなる全知全能の神様、そして、ご自分のいのちを捨てて、よみがえって永遠のいのちを与えてくださったばかりか、御霊として信じる者の中に住んでおり、日々、これが道だ、これに歩めと導いてくださるイエス様を、ただ無条件に信頼しましょう。そして、間もなく、私たち信者の身体を朽ちないきよい身体に変えて、天のみ国にたずさえ上げてくださるために迎えに来てくださるというご再臨のお約束を、確信と希望をもって待ち望みつつ、その日に備えて、御霊に導かれつつ、よろこびいさんで、信仰の歩みを続けようではありませんか。

ありがとうございました。

信者に残された最上にして最後のわざは祈り

2021 年 10 月 24 日、吉祥寺福音集会
重田定義

エペソ
2:10 私たちは神の作品であって、良い行ないをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行ないに歩むように、その良い行ないをもあらかじめ備えてくださったのです。

皆さん、こんにちは。最初に、このようなかたちで、私がメッセージを取りつぐことができるように配慮してくださり、司会も引き受けてくださった古田兄、そして、そのために準備を整えてくださった兄弟がたに、深く感謝、申し上げます。

だいぶ前になりますけれども、年老いたひとりのドイツのキリスト者が作った『最上のわざ』と題する詩を読んで、同じように年老いた私は、たいへん感動し、深い共感を覚えましたので、その詩を書き留めておきました。その詩とは、次のようなものであります。お読みします。

この世の最上のわざは何か？
楽しい心で年を取り、
働きたいけれども、休み、
しゃべりたいけれども、黙り、
失望しそうなときに、希望を持ち、
従順に、平静に、己の十字架を担う。
若者が元気いっぱいで、
神の道を歩むのを見ても妬まず、
人のために働くよりも、謙虚に人の世話になり、
弱って、もはや人のために役立たずとも、
親切で、柔和であること。
老いの重荷は、神の賜物。
古びた心に、これで最後のみがきをかける、
まことのふるさとへ行くために。
己をこの世につなぐくさりを、
少しずつ外して行くのは、まことにきびしい仕事。
こうして何もできなくなれば、
それを謙虚に受け入れるのだ。
神は、最後にいちばんよい仕事を残してくださる。
それは祈りだ。
手は、もう何もできない。
けれども、最後まで祈ることはできる。
愛するすべての人の上に、
神の恵みを求めるために。
すべて終えたら、臨終の床に、神の声を聞くだろう。
『来なさい、我が友よ、我、汝を見捨てじ』と。

長いので、もう一度、読ませていただきます。

この世の最上のわざは何か？
楽しい心で年を取り、
働きたいけれども、休み、
しゃべりたいけれども、黙り、
失望しそうなときに、希望を持ち、
従順に、平静に、己の十字架を担う。
若者が元気いっぱいで、
神の道を歩むのを見ても妬まず、
人のために働くよりも、謙虚に人の世話になり、
弱って、もはや人のために役立たずとも、
親切で、柔和であること。
老いの重荷は、神の賜物。
古びた心に、これで最後のみがきをかける、
まことのふるさとへ行くために。
己をこの世につなぐくさりを、
少しずつ外して行くのは、まことにきびしい仕事。
こうして何もできなくなれば、
それを謙虚に受け入れるのだ。
神は、最後にいちばんよい仕事を残してくださる。
それは祈りだ。
手は、もう何もできない。
けれども、最後まで祈ることはできる。
愛するすべての人の上に、
神の恵みを求めるために。
すべて終えたら、臨終の床に、神の声を聞くだろう。
『来なさい、我が友よ、我、汝を見捨てじ』と。

イエス様の十字架の御業を信じ、罪、赦された者は、神の恵みによって生まれかわり、この世に属するものから、神に属するものへと移されます。パウロは、いま読んでいただきましたエペソの 2 章 10 節で、このように、イエス・キリストを信じる信仰によって生まれかわり、神に属するものとなったものを、良いわざ、よい行いをするために、キリスト・イエスにあって造られた神の作品と呼んでいるのであります。

そして、さらにパウロは、その良い行い、良いわざに歩むように、神があらかじめ、その良いわざをも、神の作品である私たち、キリスト者に備えてくださったと言っているのであります。

一般に、良い行い、良いわざとは、道徳的な良い行い、倫理的な良い行い、あるいは、人道的な良い行いをさします。けれども、神の作品として作られたキリスト者の良い行いも、外見的には、これらの良いわざ、よい行いと、同じように見えるものが多くありますので、世の中の人には、世で言う良い行いと、神の作品として造られた私たち信者の良い行いの違いが分かりにくい、あるいは、分からないのですね。

そして、キリスト者であっても、霊の目が覚めていなければ、同じと思ってしまう方が多いのではないでしょうか。けれども、同じように見えても、その動機は、全く違います。それは、自分の思いから出た行いか、神のみ心から出た、愛に基づく行いかの違いであります。

自分の思いから出た良い行いには、意識するにせよ、しないにせよ、自分がしたという自己満足が、あるいは、自分を誇る思い、自分に栄光を帰す思いが伴います。これについてパウロは、コリント人へ手紙第一でこう言っています。

第一コリント
4:7 いったいだれが、あなたをすぐれた者と認めるのですか。あなたには、何か、もらったものでないものがあるのですか。もしもらったのなら、なぜ、もらっていないかのように誇るのですか。

『あなたには、何か、もらったものでないものがあるのですか。もしもらったのなら、なぜ、もらっていないかのように誇るのですか』というこのみ言葉は、あなたの持てる全てのもの、すなわち、富も能力も健康も、さらに、良き行いすらも、すべて神からの賜物として与えられているのだから、それを、自分のものとして、あるいは、自分の努力で獲得したものとして誇るのは心違いであると、パウロは言っているのであります。

こういうわけで、パウロは、ガラテヤ人への手紙の中で、信者に対して、自分は良い行いをした、自分が立派だとうぬぼれないように、次のように戒めております。

ガラテヤ
6:3 だれでも、りっぱでもない自分を何かりっぱでもあるかのように思うなら、自分を欺いているのです。
6:4 おのおの自分の行ないをよく調べてみなさい。そうすれば、誇れると思ったことも、ただ自分だけの誇りで、ほかの人に対して誇れることではないでしょう。

一方、神の作品として作られた私たち、キリスト者の良い行い、良きわざは、自分の思いから出た行いではない――神があらかじめ備えてくださった、神の愛に基づく行いであり、それを行うのは自分ではありません。

ガラテヤ
5:25 もし私たちが御霊によって生きるのなら、御霊に導かれて、進もうではありませんか。

こうありますように、それは、信じる者に与えられた御霊の導きに素直に従うことによって達成できる良い行いなのであって、そこには、自分を誇るべきものは全くなく、そのような善き行いを備えてくださり、行わせてくださった主を誇り、主に感謝し、主に栄光を帰するだけなのであります。御霊に導かれた行いは実を結びます。その実とは何でしょうか？

ガラテヤ
5:22 御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、
5:23 柔和、自制です。

しかし、私たち信者すべてが、このような実を結ぶことができるわけではありません。なぜなら、その理由は、信者の中に根強く残っている硬い肉の思い、すなわち、自我が御霊の導きを妨げているからであります。しかし、主は、そのような自我が強く、信仰の弱い信者を、なおも愛してくださり、体を衰えさせるような病や老いなどを与えて、自我を砕き、信者のうちに住んでくださる御霊が働かれるようにしてくださいます。

パウロは、これについて、コリント人の第二の手紙で次のように言っています。

第二コリント
4:15 すべてのことはあなたがたのためであり、それは、恵みがますます多くの人々に及んで感謝が満ちあふれ、神の栄光が現われるようになるためです。
4:16 ですから、私たちは勇気を失いません。たとい私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。

冒頭でご紹介しましたドイツの年老いたキリスト者も、まさに、そのように主に導かれたひとりではないかと思います。彼は、年老いて、肉体が衰え、それまでのように自力で主のために働くこともできない不自由な身となりました。しかし、そのことによって、彼のうちに住みたもう御霊が働き、霊が強められ、御霊の実を結ぶことができたのです。

彼は、話したいけれども、黙り、すなわち、忍耐することができ、失望しそうな時に、希望を持ち、従順に、平静に、自分の十字架をにない、若者が元気いっぱいに神の道を歩むのを見ても妬まず、人のために働かなくても、謙虚に人の世話になり、もはや、人のために役立たなくても、親切で、柔和であるように努め、老いの重荷を神の賜物として受け止め、何もできなくなっても、それを謙虚に受け入れることができたのであります。まさに、これこそ、御霊の実として表された善き行いでありましょう。

それだけではありません。続いて、彼は、すばらしいことを言っております。『神は、最後にいちばんよい仕事を残してくださる。それは祈りだ。手は何もできない。けれども、愛するすべての人の上に、神の恵みがあるように祈ることはできる』と。

肉体が衰え、手足も思うように動かすことができず、ただ、仰向けに寝たきりの状態になっても、信者には残された最上の良きわざをすることができる。それは、愛するすべての人に、神の恵みがあるようにという、とりなしの祈りだと、彼は証しをしているのであります。

このことに関連して、今からもう三十二年も前になりますけれども、八十八歳で天に召された私の父の上に残された奇蹟ともいうべき出来事を思い出します。父は、十九歳で、相次いで両親を失い、失意のどん底にあった時に、親友から聖書送られたことを機に、イエス様を信じ、それから、約七十年のあいだ、熱心に教会生活を送り、長老として、四代の牧師に仕えました。苦学しながら、東京大学の医学部を卒業して、小児科の医者になり、また、厚生省の官吏として、そして、後には、東京大学の教員として、貧しい家庭に置かれた体の弱い子供たちや心身障害児、あるいは、心を病んでいる青年たちの相談や支援に、一生を捧げた人でありました。

そのような父を、多くの方が慕ってくださいました。しかし、ほとんどの方は、父がキリスト者であったことを知りませんでした。晩年になってから、何度か、ベック兄や集会の兄弟がたとも、親しく交わっていただきましたけれども、父の信仰は、依然として、行いの信仰にとどまっておりました。

その父が、肺の線維症を病み、寝たきりの病人になってしまいました。そして、父の上に驚くべき霊的な変化が起こされました。ある日、家内が目も衰え、手の力も弱った父のために、紙に大きな字で書いて持って行った詩篇の二十三篇を、ベッドの上で手にとって、じっと読んでから、父は、急に大きな声を出して、『主よ、このみ言葉こそ、私の思いそのものです』に始まる賛美の祈りを祈ったの

です。

その後、父は、堰を切った水のように、見舞いに来てくださる方々のために、祈るようになりました。集会の兄弟姉妹が見舞いにしてくださると、たいへん、よろこんで、集会が主の生けるみ体として祝福されるように、そして、集会の兄弟がたの上に、主の恵みがあるように、主に大いに用いられるようにと祈り、『祈ろうと思ってきたのに、反対に祈られてしまった』と皆さん、驚かれました。病によって体が衰え、父のうちに住んでくださっている御霊によって、霊が目覚めて、生き生きと働いて、このような祈りができるようになったと思わざるを得ません。

まさに、主の憐れみによって、主の行いの信仰が、祈りの信仰へと変えられ、この世のいのちの終わりの時に、神の作品として作られた証しとして、主が父に残された最上のわざを、させてくださったのであります。

私たち、キリスト者は、パウロが言っておりますように、信じる前の古い人は、主イエス様と共に十字架の上で死に、主のよみがえりのいのちをいただいて、それからは、主と共に、新しいいのちに歩むようにされた者であります。

ローマ
6:4 私たち(・・・・信者・・・・)は、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあって(・・・・イエス様のいのちにあって・・・・)新しい歩みをするためです。

こうある通りであります。キリストのいのちにあって生きるとは、言い換えますと、神の作品として、造りかえられた私たちキリスト者が、主によって備えられた良きわざに生きるということでもありましょう。

パウロは、自由の身の時には、御霊に導かれるままに、当時の全世界に出かけて、福音を述べ伝えました。けれども、囚われて、不自由の身となってからは、獄中で、各地の主にある兄弟姉妹のために、たくさんの書簡を書き送りました。そして、その手紙の最後には、必ず、祈りが書かれておりました。それは、単なる形式的な挨拶の祈りではありません。自分の手紙を読んでくれた、愛する信者たちに恵みがあるようにという、熱い思いが込められた、とりなしの祈りなのであります。そのひとつをお読みいたします。

エペソ
6:23 どうか、父なる神と主イエス・キリストから、平安と信仰に伴う愛とが兄弟たちの上にありますように。
6:24 私たちの主イエス・キリストを朽ちぬ愛をもって愛するすべての人の上に、恵みがありますように。

パウロは、獄中にあって、不自由な身となっても、とりなしの祈りという最上の技をすることができたのであります。

私たち信者も、健康な時には、御霊の導きに従って、示されたところに自由に出向いて、福音のため種まきをしたり、あるいは、求める魂や、悩み苦しむ人と交わることができます。しかし、身体が衰えて、自由に動き回れなくなっても、あるいは、病のために寝たきりになっても、主は、祈りという信者に残された最上の仕事を、私たちに与えてくださっているのであります。なんというありがたい主のみ心ではないでしょうか。

世の終わりが近い時にあって、私たち信者は、どんな状態に置かれても、神の作品として造られたものとして、主が、来なさいと言われる時まで、霊の目を覚まし、御霊に導かれて、主が備えてくださった良きわざである、『愛するすべての人の上に、主の恵みが豊かにあるように』という祈りに、日々、励むことができるよう、心から祈る者でありたいと切に願います。

最後に、もうひとつ、エペソ人への手紙の六章のみ言葉をお読みして、終わらせていただきます。

エペソ
6:18 すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい。そのためには絶えず目をさましていて、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい。

ありがとうございました。

新しい歌を主に歌おう

2022 年 1 月 9 日、町田福音集会
重田定義

詩篇
96:1 新しい歌を主に歌え。全地よ。主に歌え。
96:2 主に歌え。御名をほめたたえよ。日から日へと、御救いの良い知らせを告げよ。

今日は、今、読んでいただいたみ言葉から、ご一緒に考えてみたいと思います。

ここで、この詩篇の作者は、『さあ、神様にむかって、新しい賛美の歌を歌おう！』と言うふうに呼びかけております。賛美の歌とは、言うまでもなく、神様のご栄光を褒め称える歌であり、それを歌う者は、すべて神のしもべたちであり、神の民であり、神の子供たちであります。その者たちが、自分たちの神をほめたたえ、自分たちにしてくださった大いなる恵みを感謝して、主に向かって、ハレルヤ！と賛美の歌を歌うのであり、そして、その賛美の歌を日々、新鮮な思いで歌おうと言うふうに、呼びかけているのであります。

詩篇の 113 篇も、そのような歌であります。

詩篇
113:1 ハレルヤ。主のしもべたちよ。ほめたたえよ。主の御名をほめたたえよ。
113:2 今よりとこしえまで、主の御名はほめられよ。
113:3 日の上る所から沈む所まで、主の御名がほめたたえられるように。
113:4 主はすべての国々の上に高くいまし、その栄光は天の上にある。
113:5 だれが、われらの神、主のようであろうか。主は高い御位に座し、
113:6 身を低くして天と地をご覧になる。
113:7 主は、弱い者をちりから起こし、貧しい人をあくたから引き上げ、
113:8 彼らを、君主たちとともに、御民の君主たちとともに、王座に着かせられる。
113:9 主は子を産まない女を、子をもって喜ぶ母として家に住まわせる。ハレルヤ。

この詩篇には、偉大なる創造主である神様が、私たちに何をしてくださったか、どんな恵みを与えてくださったが歌われております。

神様は、天よりも高い御座から、身を低くして、弱い者や貧しいものや子を産めない悲しみの女などに代表されるすべての心砕かれた者を顧みてくださり、哀れんでくださって、その者たちを、悲しみの泥沼から引き上げてくださるとあります。

『だれがわれらの神、主のようであろうか』と、この詩篇の作者が賛美しておりますように、私たちの主なる神様は、このような深い愛と恵みに富む神様なのであり、その神様の御名をほめたたえる歌を歌う時、私たちの心は、感謝と喜びにあふれるのであります。

神の御子、イエス様がこの世に来てくださる前は、神様は預言者を用いて、ご自分のみこころを知らせてくださいましたけれども、今、私たちは、更に幸いなことにイエス様が、『わたしを見た者は父を見たのです』とおっしゃっていますように、神様に背いて、わがまま勝手に生きるという罪を犯していた私たちを救い出すために、卑しい人の姿で、貧しい人の姿でこの世に来て、十字架にかかって死んでくださり、よみがってくださったその御子イエス様の中に、私たちは、父なる神の姿を見ることができるのであります。

ピリピ
2:6 キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、
2:7 ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。
2:8 キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。
2:9 それゆえ、神は、キリストを高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。
2:10 それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが、ひざをかがめ、
2:11 すべての口が、「イエス・キリストは主である。」と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。

こうあります通りに、救われた私たちは、開かれた霊の目で、神としてのイエス様を見ることができ、ほめたたえることができるのは、なんという喜びでありましょうか？幸せでありましょうか？

また、主に向かって、新しい思いで、賛美の歌を歌うときは、私たちの親しい人々が、救われた時ではないでしょうか？

私たちは、自分の家族や友人たち、あるいは、集会の兄弟姉妹の家族や友人たちが、実に奇しい方法で導かれ、イエス様を信じ、救いにあずかるの何度も見ております。しかし、私たちの目には、それが奇蹟と映っても、イエス様は、あらかじめ救おうと定められた人を、その人に、もっともふさわしい方法で、もっともふさわしい時に、お救いになるのであります。そのようにして選ばれ、救われたひとりひとりを見るたびに、私たちは、心おどる思いで、主に向かって、新しい賛美の歌を喜び歌うのであります。

詩篇
98:1 新しい歌を主に歌え。主は、奇しいわざをなさった。その右の御手と、その聖なる御腕とが、主に勝利をもたらしたのだ。
98:2 主は御救いを知らしめ、その義を国々の前に現わされた。
98:3 主はイスラエルの家への恵みと真実を覚えておられる。地の果て果てまでもが、みな、われらの神の救いを見ている。
98:4 全地よ。主に喜び叫べ。大声で叫び、喜び歌い、ほめ歌を歌え。

また、既に救われた私たち自身も、信仰の試練に会うたびに、新しい思いで、主に向かって賛美の歌を歌います。

私たちは救われても、この世におかれているあいだは、さまざまな試練があります。それは、主が私たちの信仰を鍛えて、神の子にふさわしく育ててくださるための愛のむちと、私たちは受け取っております。ペテロは、キリスト者の試練がどのような意味をもっているのかを、次のように述べております。

第一ペテロ
1:6 そういうわけで、あなたがたは大いに喜んでいます。いまは、しばらくの間、さまざまの試練の中で、悲しまなければならないのですが、
1:7 信仰の試練は、火を通して精練されてもなお朽ちて行く金よりも尊いのであって、イエス・キリストの現われのときに称賛と光栄と栄誉に至るものであることがわかります。
1:8 あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどっています。
1:9 これは、信仰の結果である、たましいの救いを得ているからです。

5:10 あらゆる恵みに満ちた神、すなわち、あなたがたをキリストにあってその永遠の栄光の中に招き入れてくださった神ご自身が、あなたがたをしばらくの苦しみのあとで完全にし、堅く立たせ、強くし、不動の者としてくださいます。

このように、イエス様にしっかりと結びついて、試練を通り抜けるという体験をした者は、その度に、御霊に満たされ、みことばの真実に感謝し、心から主に向かって、新しい思いで、賛美の歌を歌うのであります。

最後に、もうひとつ、私たちが主に向かって、新しい思いで賛美の歌を歌う大きな機会があります。

年の初めに、人々は、『新年おめでとう』と新しい年を喜ぶ挨拶をいたします。今年も、そういう挨拶が交わされたのではないでしょうか？しかし、本当に今年は、喜べるような良い年になるのでありましょうか？

数年前に、ある新聞の元旦の社説に、次のように書いてありました。その題は、『歴史は加速する』という題でありました。

『コンピューター革命が進んだこの世紀、歴史の加速は、この百年で何十倍にもなったと言っていいだろう。実際、最近の社会変動は加速が著しい。誰もがこの目まぐるしい変化に流され、溺れ、戸惑っている。政治も国民も、次から次に生じる事態に対応しきれないうちに、また、状況は変わる。そして、半年先さえ、誰も的確には見通せない。』

このような社説でありました。

昨年を振り返ってみても、まさにその通りではなかったでしょうか？人々は、世界や日本の中で、次々に起こる様々な政治的な、あるいは、経済的な、あるいは、社会的な事件を通して、また、急速に進んでおります地球環境の悪化によって起こる災害を通して、そして、さらに、これまで経験したことのない強力な感染力を持ったウィルスによる疫病の世界的な大流行を通して、歴史の進行が、人間の力では拒むことのできないほど急激な速度で、どこかの終点に向かって、地球の全ての人間を巻き込んで、どんどんと加速していると言うことを肌で感じ、誰もが不安や恐れを感じているのではないでしょうか？

しかし、イエス様を信じている私たちは、神様が人々に、罪に汚れたこの世が終りに近づいていることを知るようにと、そして、イエス様のご再臨の時が迫っていることを知るように、歴史を加速しておられる――そのことを、神様ご自身の言葉である聖書を通して、私たちは知っておりますから、なんの恐れも不安もありません。

ヨハネの黙示録には、次のようにあります。

黙示録
22:10 また、彼（・・・・すなわち御使い・・・・）は私（・・・・ヨハネ・・・・）に言った。「この書の預言のことばを封じてはいけない。時が近づいているからである。
22:11 不正を行なう者はますます不正を行ない、汚れた者はますます汚れを行ないなさい。正しい者は（・・・・すなわち、イエス様を信じた私たちは・・・・）いよいよ正しいことを行ない（・・・・イエス様に従った行いをすることですね・・・・）、聖徒はいよいよ（・・・・これも、私たちを指していると思いますが、信じた私たちは、いよいよ・・・・）聖なるものとされなさい。」
22:12 「見よ。わたし（・・・・すなわち、イエス様・・・・）はすぐに来る。わたしはそれぞれのしわざに応じて報いるために、わたしの報いを携えて来る。
22:13 わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である。初めであり、終わりである。」
22:14 自分の着物を洗って、いのちの木の実を食べる権利を与えられ、門（・・・・すなわち、天国の門・・・・）を通って都（・・・・天の都・・・・）にはいれるようになる者は、幸いである。

先ほどの賛美の歌にありました――ご再臨をほめたたえる賛美の歌を、ともに歌いましたけれども――このもう一箇所、184 番も、そのような歌詞が書かれております。

（一）ふたたび主が来られる時迫る。
その日空は輝き主を告げる。
待ち望むその時よ、我らは空に上げられ、
雲の中主とともに、御国に昇る喜び。

（二）「早く来てください」と祈る声、
地にあふれて御国にこだまする。
待ち望むその時よ、我らは空に上げられ、
雲の中主とともに、御国に昇る喜び。

いよいよ、主イエス様が、私たちを天の御国に携えあげてくださるために、空中まで迎えに来てくださる日が近づいている。この年にあたりまして、私たちは一日も早くと、その日を待ち望みながら、日々、新しい思いで、主に向かって、賛美の歌を歌い続けようではありませんか？

最後に、詩篇の 33 篇からお読みして終わります。

詩篇
33:1 正しい者（・・・・すなわちイエス様を信じた
者・・・・）たち。主にあって、喜び歌え。賛美は心の直
ぐな人たちにふさわしい。
33:2 立琴をもって主に感謝せよ。十弦の琴をもって、
ほめ歌を歌え。
33:3 新しい歌を主に向かって歌え。喜びの叫びとと
もに、巧みに弦をかき鳴らせ。

どうもありがとうございました。

信仰の妨げとなる信者の古い人

2022 年 7 月 10 日、町田福音集会
重田定義

> ローマ
> 6:6 私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが滅びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。
> 6:7 死んでしまった者は、罪から解放されているのです。
> 6:8 もし私たちがキリストとともに死んだのであれば、キリストとともに生きることにもなる、と信じます。

ありがとうございました。これから、それではご一緒にみことばから、学んでみたいと思います。

私たちは、イエス様を主と信じたとき、自分の知恵や意思によって、あるいは、自分の判断によって、信じたのでありましょうか？

そうではなくて、様々な人生の嵐、例えば、病気や仕事や人間関係などと戦ったあげく、自分の無力さ、愚かさを徹底的に思い知らされ、疲れ果て、自我が砕かれ、『すべて疲れた人。重荷を負っている人は私のところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。』（マタイ 11 章 28 節）というイエス様の呼びかけに応えてみもとに行き、イエス様から差し出された御手にすがって、イエス様を救い主として信じて救われたのではないでしょうか？

救われた時、私たちは、もう自分を信頼しない、これからは自分のために十字架にかかって死んでくださったほどに愛してくださったイエス様だけを信頼し、イエス様におゆだねして生きようと、決心したのではないでしょうか？

はじめに水渡兄が読んでくださったローマ人への手紙の中で、パウロが言っているのも、これと同様の意味であります。

> ローマ
> 6:6 私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが滅びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。
> 6:7 死んでしまった者は、罪から解放されているのです。
> 6:8 もし私たちがキリストとともに死んだのであれば、キリストとともに生きることにもなる、と信じます。

古い人とは、救われる前の自分であります。救われる前の古い自分は、イエス様と共に十字架にかかって死んで、罪の体から解放されたのだから、これからは、よみがえられたイエス様とともに、新しく生きると信じようではないか。このように、パウロは言っているのであります。

このように信仰とは生ける真の神様、そして、その神の御子イエス様を主と信じ、救われる前のように自分に信頼しているのではなくて、それからの人生を主にのみ信頼し、全てを主に委ねて、御心に従って歩むことであります。しかし、イエス様は次のように言われました。

> ルカ
> 9:23 ‥‥だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。

どうして、イエス様はこのようなことをおっしゃってたのでありましょうか？

私たちは、イエス様を信じたときに、すでに自分が信頼できないことが、すでに自分の力は全く頼りにならないことが痛いほどわかっていたはずであります。ですから、私たちはイエス様とともに十字架にかかった時に、古い自分、すなわち、私たちの自我と決別したはずであります。ところが、現実には、私たちは、そう簡単に自分を捨てることはできないのであります。なぜでしょうか？

それは、信じたあとも、体は、この地上に置かれておりますので、その体に古い自分、すなわち、自我が生き残っているからであります。イエス様はそのことをよくご存知なので、このようにおっしゃったのです。ですから、私たちが本当にイエス様にお従いするためには、古い自分、すなわち、自我を意識的に捨てなければなりません。

主に信頼し、主に従う信仰の妨げとなるのは、まさにこの古い自分なのであります。しかし、そのことにどれほど私たち信者が真剣に心を痛めているでありましょうか？古い自分を捨てずに信仰生活を過ごしているような信仰は、みこころにかなわないことに気づいていない信者が、いかに多いことでありましょうか？

ここで、聖書から自分の力、自分の知恵に信頼した結果、不信仰を招いた例を見てみたいと思います。

まず、ヨブであります。ヨブは自分が優れた指導者として、また、義人として、その力を発揮して、人々に尊敬されていることを、自他ともに認めておりました。

そこで、神さまはヨブの信仰をお試しになるために、サタンによって、彼に試練をお与えになりました。そのため、彼は家族や財産、すべてを一瞬に失い、彼自身も大変な苦痛を伴う皮膚病にかかってしまいました。それでもなお、彼は自分の力による義を主張し、とうとう、

> ヨブ
> 31:4 神は私の道を見られないのだろうか。私の歩みをことごとく数えられないのだろうか。
> 31:5 もし私がうそとともに歩み、この足が欺きに急いだのなら、
> 31:6 正しいはかりで私を量るがよい。そうすれば神に私の潔白がわかるだろう。

というような主を恐れぬ、不遜なことを言ってしまいました。しかし、神様がそのヨブを憐れまれ、ヨブに直接、語りかけられ、神ご自身が、いかに偉大な主権者であるかを、創造のみわざと全ての被造物をその御手におさめられる力によってお示しになり、

ヨブ
40:8 あなたはわたしのさばきを無効にするつもりか。自分を義とするために、わたしを罪に定めるのか。

と、彼に無条件で御前にひれ伏するように求められます。

自分を捨てて、主の御前に無条件で従う――これが信仰であります。ヨブは神様から与えられた自分の苦悩の原因については、まだ知ることができませんでしたけれども、主なる神様の権威の前に自我を砕かれ、御前に自分を蔑んで、塵と灰の中で心から悔い改め、

ヨブ
42:5 私はあなたのうわさを耳で聞いていました。しかし、今、この目であなたを見ました。

と、告白することができたのであります。

ルカの福音書の 18 章にも、自分を義人と自認してはばからない不信仰なパリサイ人の例えが記されていることは、多くの方々がご存知のことでありましょう。イザヤは、『私たちの義はみな、不潔な着物のようです』(イザヤ 64:6)と言っておりますけれども、私たちもまた、自分の義が不潔な着物のようなものであることを全く気付かず、自分の義を神様にうったえるような無意識のうちに自分を誇り、主張する不信な態度をとってしまうようなものなのではないでしょうか？

イエス様の筆頭弟子と自任していたペテロも、幾度となく、自分の力、自分の判断に基づいて、不信仰に陥るという過ちを重ねました。その中の二つの例をあげてみましょう。

マタイ
16:21 その時から、イエス・キリストは、ご自分がエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、そして三日目によみがえらなければならないことを弟子たちに示し始められた。
16:22 するとペテロは、イエスを引き寄せて、いさめ始めた。「主よ。神の御恵みがありますように。そんなことが、あなたに起こるはずはありません。」
16:23 しかし、イエスは振り向いて、ペテロに言われた。「下がれ。サタン。あなたはわたしの邪魔をするものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」

ペテロはイエス様のみこころが全く理解できず、ただあさはかな自分の判断だけで、イエス様がこの世に来てくださった最大の目的である救いのご計画を妨げるようなことを言ってしまったのであります。

また、イエス様がご自分が捕らえられることを弟子たちに予告された時に、ペテロは次のように言ってしまいました。

マタイ
26:33 ・・・・「たとい全部の者があなたのゆえにつまずいても、私は決してつまずきません。」
26:34 イエスは彼に言われた。「まことに、あなたに告げます。今夜、鶏が鳴く前に、あなたは三度、わたしを知らないと言います。」
26:35 ペテロは言った。「たとい、ごいっしょに死ななければならないとしても、私は、あなたを知らないなどとは決して申しません。」

彼は、自分の信仰の強さを過信しておりました。その結果、イエス様が捕らえられた時、彼は人々に、『お前はイエスの仲間だ』と言われて恐れ、イエス様が予告された通り、三度、主を否むという不信仰な態度をとってしまったのであります。

こうして彼は、自分の信仰がいかに弱いかを思い知って、心砕かれて、涙を流し、悔い改めました。そして、イエス様が天に昇られたのち、御霊によって霊の目が開かれてから、殉教の死を遂げるまで、主にすべてを明け渡し、主を証しし続ける主のしもべとなったのであります。

のちに、彼が生まれつきの足なえを歩かせたとき、これは自分の信仰の力や信仰深さによるものではなくて、イエス様の御名、すなわち、イエス様の権威を信じる信仰によるものであると、人々に証しをしました。このように言うことができたのは、彼がもはや、自分は全く無力であり、御霊の力が自分のうちで働かれていることを、はっきり自覚したからであります。

私たち信者はどうでしょうか？ペテロは、その手紙第二の一章で、

第二ペテロ
1:19 また、私たちは、さらに確かな預言のみことばを持っています。夜明けとなって、明けの明星があなたがたの心の中に上るまでは(・・・・すなわち、これは主のご再臨の時を示しておりますけれども・・・・)、暗い所を照らすともしびとして、それに目を留めているとよいのです。
1:20 それには何よりも次のことを知っていなければいけません。すなわち、聖書の預言はみな、人の私的解釈を施してはならない、ということです。
1:21 なぜなら、預言は決して人間の意志によってもたらされたのではなく、聖霊に動かされた人たちが、神からのことばを語ったのだからです。

と、はっきりと記しております。

このように、彼の御霊によって書かれた聖霊のみ言葉は、すべて御霊に導かれることによってのみ、正しく理解できるものなのであります。私たちは決して、私的解釈、すなわち、自分の力で、自分の判断で聖書を読み、自分勝手にみことばを取捨選択したり、自分勝手な解釈をするという過ちを犯してはなりません。

また、私たちは主のしもべとして、熱心に福音を宣べ伝えようとします。このこと自体は御心にかなうことですけれども、一歩誤ると、主により頼むことなく、意識的、無意識的に自分の力で自分の知恵で伝道し、結果として誤った福音を宣べ伝えるという危険に陥ることがあることに注意しなければなりません。

このように、私たち信者に残っている古い人――自我は、

主のみこころに従う信仰の大きな妨げとなり、そのような信者は、主のしもべとして用いられない者、役に立たない者になってしまうのであります。

また、信者の古い人――自我は、それだけではなくて、主の生けるみ体なる集会を構成する兄弟姉妹の不一致の大きな原因となります。パウロは初代教会の中に生じた信者の中の不一致を嘆いて、次のように言っております。

第一コリント
3:1 さて、兄弟たちよ。私は、あなたがたに向かって、御霊に属する人に対するようには話すことができないで、肉に属する人、キリストにある幼子に対するように話しました。
3:2 私はあなたがたには乳を与えて、堅い食物を与えませんでした。あなたがたには、まだ無理だったからです。実は、今でもまだ無理なのです。
3:3 あなたがたは、まだ肉に属しているからです。あなたがたの間にねたみや争いがあることからすれば、あなたがたは肉に属しているのではありませんか。そして、ただの人のように歩んでいるのではありませんか。
3:4 ある人が、「私はパウロにつく。」と言えば、別の人は、「私はアポロに。」と言う。そういうことでは、あなたがたは、ただの人たちではありませんか。

肉に属する人とは、イエス様を信じてもなお、御霊の導きを認めず、古い人である自我に従っている信者のことであり、御霊に属する人とは、古い人が死んで御霊に従うようになった信者であります。

パウロはガラテヤの 2 章 20 節――有名な箇所ですが――、『私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです』と証しをしておりますけれども、これこそ御霊に属するひとなのであり、このような御霊に属する信者が一つ御霊によって一致する集会こそが、主の生ける御体なる真の教会であります。そして、そのような教会を通して、主がご栄光を現わされるのであります。

したがって御霊に属する信者と主のみ体なる教会を構成する一つの器官としての自覚を固く保った信者であり、集会の信者同士の霊的な一致と集会を通して、主のご栄光が表されることを心から祈り求める信者なのであります。

では、いったいどうしたら信仰の妨げとなる古い人である自我を捨てることができるのでありましょうか？それは、ただひとつの道、すなわち、自我が砕かれることによってであります。しかし、それは決して自分の力でできることはありません。自分の意思でできることではありません。例え、苦痛を伴うにしても、ヨブやペテロのように主によって砕いていただくほかないのであります。

そうすれば、バプテスマのヨハネが、『あの方は盛んになり私は衰えなければなりません』と、ヨハネの 3 章 30 節で言っておりますように、私たち信者のうちに住んでくださっているあの方、すなわち、主の御霊に自分を明け渡し、より頼むものになることによって、初めてそれが可能になるのであります。

パウロがガラテヤの五章の 16 節から 17 節で、『私は言います。御霊によって歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。なぜなら、肉の願うことは御霊に逆らい、御霊は肉に逆らうからです。この二つは互いに対立していて、そのために、あなたがたは、自分のしたいと思うことをすることができないのです』と言っておりますように、私たちがうちに宿っておられる主の御霊にしっかりより頼んで歩めば、御霊ご自身が私たちの古い人自我を抑えてくださいませ。そのために私たちはいつも、霊の目を覚まして、主に結びつき、御霊により頼み、御霊の満たしをいただけるように、真剣に祈り続けることが必要であります。

最後に、みことばをお読みして終わりにいたします。

コロサイ
3:9 ・・・・あなたがたは、古い人をその行ないといっしょに脱ぎ捨てて、
3:10 新しい人を着たのです。新しい人は、造り主のかたちに似せられてますます新しくされ、真の知識に至るのです。

どうもありがとうございました。

あなたは救われていますか

2022 年 10 月 2 日、町田福音集会
重田定義

> 詩篇
> 13:5 私はあなたの恵みに拠り頼みました。私の心はあなたの救いを喜びます。
> 13:6 私は主に歌を歌います。主が私を豊かにあしらわれたゆえ。

実は今、水渡兄に読んでいただいた『あなたは救われていますか』というこのテーマ、この問いかけは、実は私がですね、四十数年前に私自身に、その問いかけがされたものなんですね。それは、私がそれまで集っておりました日本基督教団の教会から吉祥寺キリスト教会に移ってから間もなく、軽井沢のバイブルハウスで開かれました集会のキャンプに参加した時のことでありました。

集会に古くから作っておられたある兄弟が、私に突然、『あなたは救われていますか？』と話しかけてこられたのであります。その質問は、私が最近、他の教会から移ってきた信者であることを承知の上でされたということがすぐ分かったんですけれども、それだけに私は一瞬、なんと答えたらよいか、戸惑ってしまいました。その様子を見た兄弟は、すぐに話題を変えて、私は答えないままに終わってしまったのであります。

けれども、私は『あなたは救われていますか？』という問いが長い間、心から離れませんでした。

当時、私は、喜びのないまま教会の礼拝に出席し、教会の役員として、礼拝の司会をしたり、時には牧師に代わってメッセージを取り次ぐというような信仰生活を送っておりました。その私に、『あなたは救われていますか？』と言う問いかけをされた時、私は、主が私の喜びのない霊的状態を鋭く指摘されたような気がしたのです。

では、あなたは救われていますかという問いに対して、即座に『はい』と答えられる信者とは、いったいどのような信者なのでありましょうか？それは、主に愛され、救われたことを心から喜び、感謝し、イエス様に委ねている信者ではないでしょうか？

ダビデが賛美した、いちばん最初に読んでいただいた御言葉をもう一度、お読みいたします。

> 詩篇
> 13:5 私はあなたの恵みに拠り頼みました。私の心はあなたの救いを喜びます。
> 13:6 私は主に（・・・・賛美の・・・・）歌を歌います。主が私を豊かにあしらわれたゆえ。

また、詩篇 92 篇の作者は、次のように主を賛美しております。

> 詩篇
> 92:4 主よ。あなたは、あなたのなさったことで、私を喜ばせてくださいましたから、私は、あなたの御手のわざを、喜び歌います。
> 92:5 主よ。あなたのみわざはなんと大きいことでしょう。あなたの御計らいは、いとも深いのです。

このような信者こそが、救われている信者ではないでしょうか？では、そのような信仰持つためには何が、いったい必要なのでありましょうか？

まず、救われるにあたって、自分に強い罪の意識があったかどうか、これがたいへん重要なことになります。強い罪の意識がなければ、悔い改めの思いも起こらず、したがってイエス様の十字架の贖いのみわざが、自分自身のためであると受け入れることができないからであります。

神様に背いた罪の大きさ、恐ろしさの意識というのは、霊の目が開かれなければ起こりません。私たち人間は、生まれつき、自分の考えを中心に生きているものであります。そのような、私たちですから、自分の知恵や努力では、神様に対する罪を意識することはできないのです。

神様の御愛によって、霊の眼を閉ざされているこの自分の自我が砕かれ、霊の目が開かれた時に始めて、神様に背いた罪の恐ろしさを知ることができ、神様の御前に心からの罪の告白、悔い改めができるのであります。

ダビデ王もその一人でした。彼は王の権力によって自分の妻を奪い、部下を死に追いやるという十戒のうちの殺人、姦淫、むさぼりという三つの戒めを破りながら、それを王として当然のこととして、罪の意識を全く持っていませんでした。しかし、預言者ナタンによって、自分のしたことが神から与えられた戒めである律法を破るという、死罪に値する大きな罪を犯したことを知りました。彼は神様を恐れて御前に罪を告白し、心から悔い改め、罪の赦しを願いました。ダビデは、次のように祈りました。

> 詩篇
> 51:1 神よ。御恵みによって、私に情けをかけ、あなたの豊かなあわれみによって、私のそむきの罪をぬぐい去ってください。
> 51:2 どうか私の咎を、私から全く洗い去り、私の罪から、私をきよめてください。
> 51:3 まことに、私は自分のそむきの罪を知っています。私の罪は、いつも私の目の前にあります。
> 51:4 私はあなたに、ただあなたに、罪を犯し、あなたの御目に悪であることを行ないました。
>
> 51:14 神よ。私の救いの神よ。血の罪から私を救い出してください。

霊の目が開かれて、自分が神様に背いた罪がどんなに恐ろしいものであるかを知れば、誰でもダビデのように神様の御前に罪を悔い改めて、心から赦しを願わざるを得なくなります。心砕かれて、神様に罪の赦しを求める者に対して、神様は預言者イザヤの口を通して、次のように約束してくださいます。

> イザヤ
> 43:25 わたし、このわたしは、わたし自身のためにあなたのそむきの罪をぬぐい去り、もうあなたの罪を思

い出さない。

では、神様はこの約束をどのようにして私たちに与えてくださるのでありましょうか？それは、私たちの罪を赦すために、私たちと同じ血と肉を持った人のかたちを取って、遣わされた神の一人子、イエス様の十字架による罪の贖いの御業によってであります。パウロはこれについて、次のように言っております。

ローマ
8:1 こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。
8:2 なぜなら、キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。
8:3 肉によって無力になったため、律法にはできなくなっていることを、神はしてくださいました。神はご自分の御子を、罪のために、罪深い肉と同じような形でお遣わしになり、肉において罪を処罰されたのです。

パウロのように、イエス・キリストを信じるものが、罪に定められることは決してないという救いの確信は、神の御子イエス様の尊い死が他ならぬ自分の罪をあがなうためであったと、心から信じて受け入れた者だけが覚えるものなのであります。

けれども、この確信はいったいどこから得られるのでありましょうか？私たちの知恵によって理解したからでないことは、これまでお話したとおりであります。また、人間の感情とか、直感で確かめられるものでもありません。

感情は動揺するものであり、時事刻々変わるものであります。そのような、不安定な感情によって、救いの確信があるかないかを確かめようとしても、感情が高揚している時には救われていると思っても、感情が沈めば、とたんに救われていないと落ち込んでしまうことになるからであります。従って、感情によっては、揺るがぬ救いの確信は得られません。私たちに与えられる救いの確信は次のものによるのであります。

まず第一は、私たちを罪からあがない出すために、十字架にかかってくださった神の御子イエス様ご自身の約束であります。一番目は、イエス様のご自身の約束であります。イエス様は、次のように約束してくださっておられます。

ヨハネ
6:37 父が（・・・・父なる神が・・・・）わたしにお与えになる者はみな、わたしのところに来ます。そしてわたしのところに来る者を、わたしは決して捨てません。

10:27 わたしの羊は（・・・・すなわちイエス様を信じたものは・・・・）わたしの声を聞き分けます。またわたしは彼らを知っています。そして彼らはわたしについて来ます。
10:28 わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。
11:25 ・・・・「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。
11:26 また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことがありません。・・・・」

これらのイエス様の約束こそが、救いの確信を私たちに与えてくださるのであります。

二番目は、イエス様の御愛が、私たちの霊に救いの確信を与えてくださいます。イエス様の御愛が救いの確信を私たちに与えてくださいます。パウロは、ローマ書の中で次のように言っております。

ローマ
8:35 私たちをキリストの愛から引き離すのはだれですか。患難ですか、苦しみですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。

8:37 しかし、私たちは、私たちを愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。

私たちキリスト者は、この世にあっては、多くの誘惑や艱難にあいます。しかし、私たちは自分の罪を身代わりによって死んでくださるほどに愛してくださったイエス様の大きな御愛に守られ、支えられて、それらの誘惑や艱難に打ち勝つことができます。そして、その体験を通して、私たちは救われているという確信を持つことができるのであります。

三番目は、イエス様のとりなしであります。

先ほども申しましたけれども、イエス様は父なる神様と私たち信者との間に立つ唯一のとりなし手として、仲介者として、いつもとりなしていてくださっておられます。これについてパウロが、次のように言っております。

ローマ
8:33 神に選ばれた人々を訴えるのはだれですか。神が義と認めてくださるのです。
8:34 罪に定めようとするのはだれですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、私たちのためにとりなしていてくださるのです。

私たちは、救われてはいても、肉の衣を着ているがゆえに、しばしば、主の御心を悲しませるようなことをしてしまうような弱い愚かなものであります。そして、サタンはそのことを取り上げて、私たち信者を罪に定めようと、攻撃してまいります。しかし、イエス様は、私たちの信仰が弱いことをよく知っておられ、仲介者として、いつも父なる神様にとりなしてくださっておられます。私たちは、このイエス様のとりなしによって救われているという確信を持つことができるのであります。

四番目は、聖霊による保証であります。聖霊による保証であります。パウロは、次のように言っております。

エペソ

1:13 あなたがたも、キリストにあって、真理のことば、すなわちあなたがたの救いの福音を聞き、またそれを信じたことによって、約束の聖霊をもって証印を押されました。
1:14 聖霊は私たちが御国を受け継ぐことの保証であられます。これは神の民の贖いのためであり、神の栄光がほめたたえられるためです。

イエス様は、信じる私たちに、主の御霊を助け主として遣わすと約束してくださいました。

ヨハネ
14:16 わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。

信者の中に住んでくださる御霊による保証が、救われていることの確信を、私たちの霊に与えてくださるのであります。

以上、申しましたように、主は信者が救われていることを、ご自分の約束によって、ご自分の愛によって、ご自分の取りなしによって、そしてまた、内に住んでくださるご自身の御霊によって、私たちに保証してくださいます。

けれども、このことを確信をもって受け入れるには、前にも申しましたように、私たちの頑なな自我が砕かれて、霊の目が開かれることが必要になのであります。従いまして、もし、自分に救いの確信がないと思ったならば、主に自我を砕いて、霊の目を開いていただくように、一生懸命に祈ることが、ぜひとも必要になってまいります。

では、救われたという確信を与えられた信者の信仰の態度は、それ以前と、どのように変わるのでありましょうか？いくつかあると思いますけれども、ここでは、二つだけ取り上げたいと思います。

私自身のことなんですが、まず、礼拝に対する態度が変わります。集会の兄弟姉妹には考えられないことでしょうけれども、教会に行っていた頃の私は、礼拝を守ることを、信者の義務としか考えておりませんでした。喜びどころか、毎週、礼拝に行くことを、重荷とさえ思うこともありました。けれども、救いの確信が与えられてからは、礼拝が主なる神様とイエス様に対する心からの喜びと感謝の場へと変えられたのであります。

また、救われている確信を持つ信者は、自分がいかに愚かであり、いかに無力であるかを思い知ります。そして、そのような自分により頼むのではなくて、自分を愛してくださるイエス様にのみ、主にのみ、より頼み、イエス様の御心に従う歩みこそが喜びであり、幸せであると知って、主の御心を求め、御言葉にますます飢え渇くようになります。

詩篇
119:129 あなたのさとしは奇しく、それゆえ、私のたましいはそれを守ります。
119:130 みことばの戸が開くと、光が差し込み、わきまえのない者に悟りを与えます。
119:131 私は口を大きくあけて、あえぎました。あなたの仰せを愛したからです。

119:133 あなたのみことばによって、私の歩みを確かにし、どんな罪にも私を支配させないでください。

このように、自分を愛してくださる主に、自分を明け渡し、主に固く信頼して歩む信者を主はお用いになって、ご自身のご栄光を現されるのであります。

主のご再臨の間近い時に、私たちは救いの確信をもって信者として整えられ、御霊に満たされ、導かれて、主が迎えに来てくださるまでの日々を、主に感謝し、喜び、賛美しながら、信仰の歩みを進めていくことができますように、心から祈りたいと、切に願う次第であります。

ありがとうございました。

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。全ての事について感謝しなさい。

2022 年 10 月 23 日、吉祥寺福音集会
重田定義

> 第一テサロニケ
> 5:16 いつも喜んでいなさい。
> 5:17 絶えず祈りなさい。
> 5:18 すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。

重田でございます。ご無沙汰しております。御言葉を取り次がせていただく前に、ズームの操作もおぼつかないこの私が、無事にお役を果たすことができるようにと、祈ってくださり、準備を整えてくださった兄弟がたおひとりおひとりに、心から感謝もうし上げます。

今、古田公人兄に読んでいただきましたこの聖書の箇所は、すでにベック兄をはじめ、多くの兄弟がたによって学ばれておりますけれども、この中に、『これがイエス・キリストにあって、神があなたがたに望んでおられることです』とありますように、私たち信者にとって、ここはたいへん重要な箇所だと思われますので、あらためて今日、ご一緒に学びたいと思います。

この箇所は、パウロがテサロニケ教会にあてて、信者はどのような心構えで日々、過ごすべきかを懇切ていねいにしたためた手紙の一節であります。しかし、主を信じておられない方はもちろん、私たち信者であっても、このみことばを実践するのは、至難であるということを思い知らされます。

けれども、主は、これを行うように、実践するようにと、私たち信者に望んでおられるのであります。では、私たち信者はどうしたら、この主のご期待に応えられるのでありましょうか？ひとつひとつ考えていきたいと思います。

まず、『いつも喜んでいなさい』というみ言葉ですけれども、いつも喜んでいるとは、どんなときにも――苦しい時も、悲しいときも――、常に喜んでいるということであります。いったい、そんなことができるでしょうか？

そのことを考えるにあたっては、いつも喜ぶことができる喜びとは、いったいどんな喜びであるかを考えてみる必要があります。パウロは、キリスト者は何を喜びとするか、また、どうして喜べるかについて、ローマ書の 5 章で、次のように言っております。

> ローマ
> 5:2 キリストによって、いま私たちの立っているこの恵みに信仰によって導き入れられた私たちは、神の栄光を望んで大いに喜んでいます。
> 5:3 そればかりではなく、患難さえも喜んでいます。それは、患難が忍耐を生み出し、
> 5:4 忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。
> 5:5 この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。

パウロは、キリスト者は患難さえも喜ぶことができる。それは、キリスト者に与えられた聖霊によって――御霊によって――、神の愛が注がれ、将来、神の栄光にあずかることができるという確かな希望を持っているからだ。このように説明しているのであります。このパウロの説明によって、信者の喜びは、この世の人の喜びのような肉的な喜びとは全く違う霊的な喜びであることがわかります。

また、パウロはコリント第二の手紙の七章で、『私は慰めに満たされ、どんな苦しみの中にあっても喜びに満ちあふれています』と言っております。

> 【参考】第二コリント
> 7:4 私のあなたがたに対する信頼は大きいのであって、私はあなたがたを大いに誇りとしています。私は慰めに満たされ、どんな苦しみの中にあっても喜びに満ちあふれています。

そして、また同じ第二コリント六章では、自分は『悲しんでいるようでも、いつも喜んでいる』とも言っております。

> 【参考】第二コリント
> 6:10 悲しんでいるようでも、いつも喜んでおり、貧しいようでも、多くの人を富ませ、何も持たないようでも、すべてのものを持っています。

パウロは、イエス様に愛され、慰められ、支えられている自らの体験を通して、たとえどんなに肉の悲しみ、苦しみにあっても、霊的な喜びは、それを遥かに超えたものであるということを、ここで証しをしているのであります。そして、パウロは、それは自分だけではなくて、すべての信者がこのように、いつも喜んでいることを、主が望んでおられると、ここで、言っているのであります。

さらにパウロは、ピリピ人への手紙の四章四節で、『いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい』とも言っております。この霊的な喜びは、パウロが言っておりますように、いつも主にあって、すなわち、いつも主と共にいることによって、いつも霊的に主と結びついていることによって、御霊を通して与えられるものであり、主から離れていては決して得られない喜びなのであることを忘れてはなりません。

次に、二番目の『絶えず祈りなさい』という言葉について、考えたいと思います。

私たち人間は、何に祈るのでありましょうか？主がどんなお方なのかを知らない信者は、手当たり次第に、むなしい偶像の神に祈ります。けれども、私たち信者は違います。私たちは、感謝なことに、信仰によって全知全能の生ける真の神様、そして、私たちの恐ろしい罪をあがなってくださった御子イエス様を知る恵みにあずかることができました。その主なる神様、主イエス様に祈ることができるという私たちは、なんという幸せなことでありましょうか？

では、私たち信者は主に何を祈るのでしょうか？いったい本当の祈りとは何か？これについて、ベック兄は、『絶えず祈れ』の本の中で、次のように述べておられます。

『多くの人々は祈りとは主に何かを願い求めることであると言います。しかし、本当の祈りとは、主との交わりを持つことなのです。多くの人は、祈りとは、ただ苦しい時だけのものと思っています。例えば、危険に直面した時とか、重い病気にかかっている時とか、混乱に陥っている時とか、全く望みの無い状態にいる時、そのような時にだけ、祈りが必要だと思っています。しかし、祈りとは、それ以上のものです。祈りとは、主により頼むこと、主から離れては何もできないと知ること、そして、主に信頼することを意味しています。祈りとは、主との交わりです。つまり、祈りとは、主に対して一方的に語るのではなく、主とともに語る、つまり、主と語り合うことなのです。祈りとは、私たちが欲しいものを主に強制することではなく、私たちが主の御心を知り、私たち自身を主に明け渡し、主のみこころが成就することです。』

このようにベック兄は述べておられます。本当の祈りとは、まさにこの祈りであります。

私たち信者が絶えず祈らなければならないのは、いったいどうしてでしょうか？それは、この祈りを通して、信者は主と絶えず、霊的な交わりをしなければならないからなのであります。

ある兄弟がメッセージの中で、『祈りは霊的な呼吸のようなもので、人間は呼吸をしないと窒息して死んでしまうのと同じように、絶えず祈らないと霊は窒息してしまうのです』と言われました。全くそのとうりであります。

主に救われ、サタンに属する者から、主に属するものと変えられた私たち信者の肉の体は、天の御国に入ることを許されるまでは、まだ、サタンに支配されているこの世に置かれております。サタンは、主に属するものとされた信者を、イエス様から引き離して、再び自分の支配下に置こうと、さまざまな手を用いて、絶えず誘惑してまいります。サタンの誘惑は極めて巧妙で、私たちの弱い肉の部分を突いてまいります。このサタンに勝つ唯一の方法は、絶えず主と霊的な交わりを持ち、絶えず霊において主に祈ることであります。

また、サタンは、地上に置かれた生ける主のみ体なる教会を憎み、教会が主のご栄光を輝かすことを阻止しようと、必死で攻撃してきます。そして、その攻撃の的は、主の御体を構成しているひとりひとりの信者に向けられます。そのためにも、私たち信者は、絶えず主と交わり、主に祈り、霊的な力に満たされている必要があります。

そして、パウロが、エペソ人、六章十八節で、『すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい。そのためには絶えず目をさましていて、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい』と勧めているとおり、私たちは自分のためだけではなくて、キリストのみ体なる集会を構成している、愛するすべての兄弟姉妹が守られるように、絶えず霊の目を覚まし、忍耐の限りを尽くし、御霊によって祈り続けなければなりません。

三番目、『全ての事について感謝しなさい』ということについて考えたいと思います。

全ての事について感謝するとは、いったいどういうことなのでしょうか？また、誰に対して感謝するのでしょうか？全てのこととは、よいことでも悪いことでもすべてです。

人間はよいこと、すなわち、自分にとってよいことがあったとき、例えば、自分や家族の病気が治った時とか、働きたくても仕事がなくて困っていたけれども、やっと就職できた時などに、心に感謝の思いが生じます。また、災害で家族を失い、家を失い、仕事を失って悲しんでいる時に、多くの支援の手が差し伸べられたことを、私たちは感謝します。

このように感謝は、自分によくしてくれた人、あるいは、自分を助けてくれた人、励ましてくれた人、支えてくれた人に対して向けられるのが普通であります。増して、人間は自分にとって嫌なこと、悪いと思われることや、自分を苦しい目に合わせたり、辛い目に、悲しい目に合わせた人間に感謝できるでしょうか？そんなことは、なかなかできるものではありません。

一方、信者にとって感謝する相手は、人間ではないんです。主なる神様、イエス様であります。では信者は、いったい主に何を感謝するのでありましょうか？

信者は、主の愛と恵みに感謝します。主の愛と恵みによって救われたことを感謝します。主の愛と恵みによって、死に打ち勝つ永遠のいのちを与えられたことを感謝します。主の愛と恵みによって、天の御国の国籍が与えられていることを感謝します。主の愛と恵みによって、日々、守られていることを感謝します。

このように、私たち信者は、主がよくしてくださったことを感謝します。

では、自分にとって悪いことでも不幸せと思えたときでも、また、苦しい時でも悲しいときでも、私たちは主に感謝できるでしょうか？これはなかなかできないのが事実であります。けれども、主はすべてのことについて、すなわち、苦しい時にも悲しい時にも感謝するようにと、私たち信者に望んでおられるのであります。

しかし、これは私たちの肉が砕かれ、霊の目が開かれていなければ、主に自分の全てを明け渡していなければ、主に全き信頼を置いていなければ、そして、主を心から愛していなければできないことであります。

パウロは、ローマ書の 8 章の 28 節で、『神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています』と言っております。彼が言っておりますように、私たち信者が、主を心から愛するならば、主はすべてのこと、すなわち、苦しみも痛みも、私を愛してくださる主から来るんだ、そして、艱難をも働かせて益としてくださる――そのことを主に感謝できるのであります。

主は、信者がそのように感謝ができるように、信者に試練を与え、信者の頑なな自我を砕いてくださるのであります。

ヘブル
12:5 ・・・・「わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。
12:6 主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。」
12:7 訓練と思って耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです。

12:10 ・・・・霊の父は、私たちの益のため、私たちをご自分の聖さにあずからせようとして、懲らしめるのです。
12:11 すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。

主の懲らしめや試練は、主が信者を愛するがゆえに与えられるものであり、ご自分の聖さにあずからせるためにあると、この試練の意味を説明しております。

詩篇の 119 篇 71 節で、この詩篇の作者は、『苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました』と、苦しみにあったことを感謝しております。また、イザヤはイザヤ書の 38 章 17 節で、ああ、『私の苦しんだ苦しみは平安のためでした。あなたは、滅びの穴から、私のたましいを引き戻されました』と、主に感謝しております。また、詩篇の 66 篇の作者も、主に感謝をしております。

詩篇
66:10 神よ。まことに、あなたは私たちを調べ、銀を精練するように、私たちを練られました。
66:11 あなたは私たちを網に引き入れ、私たちの腰に重荷を着けられました。
66:12 あなたは人々に、私たちの頭の上を乗り越えさせられました。私たちは、火の中を通り、水の中を通りました。しかし、あなたは豊かな所へ私たちを連れ出されました。

このように、苦しみをも感謝できるのは、試練という主の訓練によって、私たちの心が、自我が砕かれ、どんな時にも主が自分を愛してくださっているという確信を持つことができた結果、主を無条件で信頼することができ、自分のすべてを主に委ねることができたからであります。

しかし、このように感謝できるのは、この詩篇の作者やイザヤだけではありません。私たちは、この詩篇の作者やイザヤと同じように、大きな艱難や試練にあっても、それを感謝しておられる集会の多くの兄弟姉妹がたの証しを知っております。このようにすべてのことを感謝することができる信者を通して、主はご自身のご栄光を現わされるのであります。

今日の世界は、吹き止まぬ嵐のような様相を呈し、人々は希望もなく、不安と恐れの日々を過ごしております。しかし、私たちは、信仰によって、それが主のご再臨の前兆であることを知ることができるのは、なんという幸いなことでありましょうか？

この時にあって、私たち信者は、『いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべてのことに感謝しなさい』と望んでおられる主のご期待に添えるように、御霊によって満たされ、強められ、支えられて、いつも喜び、絶えず祈り、すべてのことを感謝する信仰生活を通して、また、主なる神様、御子イエス様を御存じない方々に、主を証しすることができ、これによって、主がご栄光を現されることができるように、切にご一緒に祈りたいと思います。

ありがとうございました。

私たちキリスト者にとって、今年はどんな年になるか

2023 年 1 月 8 日、町田福音集会
重田定義

ローマ
5:2 またキリストによって、いま私たちの立っているこの恵みに信仰によって導き入れられた私たちは、神の栄光を望んで大いに喜んでいます。
5:3 それぱかりではなく、患難さえも喜んでいます。それは、患難が忍耐を生み出し、
5:4 忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。
5:5 この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。

新しい年になりますと、誰でも、今年はどんな年になるだろうかと考えるのではないでしょうか？とくに昨年は、前の年から続いているコロナの流行に加えて、ロシアのウクライナ侵攻が始まり、世界中に嵐のような軍事的緊張、そして、政治的、経済的混乱を引き起こしました。そして、この嵐は、一向に収まる気配もなく、今年も人々は、不安と恐れを抱きながら、望みのない思いで新しい年を迎えたのではないでしょうか？

私たちキリスト者も、この世界に生きている以上、この嵐の中で暮らさなければなりません。では、私たちもこの世の人々と同じような気持ちで、新年を迎えたのでありましょうか。そうではないでしょう。なぜなら、同じ嵐も、私たちはそれを信仰によって受けとめることができるからであります。

では、私たちキリスト者は、今年をどんな思いで受けとめることができるのでありましょうか？その答えは、読んでいただいたローマ人への手紙のみ言葉の中にあります。すなわち、今年は、私たちキリスト者にとって、患難の年であり、忍耐の年であり、そして、希望の年であるということであります。いったい、どうしてなのでしょうか？今日は、このみことばについて、さらに深く考えてみたいと思います。

イエス様は、捕らえられる前、弟子たちを励まして、次のようにおっしゃいました。

ヨハネ
16:33 ・・・・あなたがたは、世にあっては患難があります。しかし、勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝ったのです。

イエス様がおっしゃったように、イエス様を信じる者は、この世にあっては、さまざまな患難があります。この世に来られたイエス様も多くの患難をお受けになりました。その最たるものが十字架の死であります。

しかし、イエス様はその患難である死に勝利されました。そして、イエス様は弟子たちに、そして、また私たち信者に、ご自分を信頼する限り、人間にとってどんな患難も、最大の患難である死にさえも勝つことができると励ましてくださっているのであります。

また、私たち、キリスト者にとって、患難は信仰の試練と受けとめることもできます。信仰の試練について、ペテロは、その第一の手紙の一章の七節にこう言っています。

第一ペテロ
1:7 信仰の試練は、火を通して精練されてもなお朽ちて行く金よりも尊いのであって、イエス・キリストの現われのときに称賛と光栄と栄誉に至るものであることがわかります。

また、ヤコブはその手紙の一章で、こう私たちを励ましています。

ヤコブ
1:2 私の兄弟たち。さまざまな試練に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい。
1:3 信仰がためされると忍耐が生じるということを、あなたがたは知っているからです。
1:4 その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは、何一つ欠けたところのない、成長（・・・・これは信仰の成長ですね・・・・）を遂げた、完全な者となります。

これらの御言葉からわかりますように、私たちキリスト者にとって、患難という試練は、信仰の成長のためにたいへん大切なものなのであります。そういう意味で、ペテロは信仰にとって患難という試練は、金よりも尊い、だから、むしろ喜ぶべきことであると言っているのであります。

主イエス様は、親が愛する子の成長を望むように、私たちキリスト者がいつまでも、生まれた子供のままのような信仰にとどまっているのを喜ばれません。私たちの信仰が成長するのを心から望んでおられます。そのために、イエス様は、さまざまな訓練を私たちに与えてくださるのであります。

それが信仰の試練であり、私たちキリスト者には患難と言うかたちとなって現れるのであります。イエス様はその患難について、ルカの 22 章で、弟子のペテロに次のようにおっしゃいました。

ルカ
22:31 シモン、シモン。見なさい。サタンが、あなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って聞き届けられました。
22:32 しかし、わたしは、あなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈りました。・・・・

これは、すなわち、私たちキリスト者に襲いかかる激しい患難も、サタンが主なる神様に願って聞き届けられた信仰の試練であり、その試練によって、私たちの信仰が失われないように、イエス様は私たちのために祈ってくださっているということなのであります。

さらに信仰の試練については、ヘブル人への手紙の 12 章の五節にこうあります。

ヘブル
12:5 ・・・・あなたがたに向かって子どもに対するように語られたこの勧めを忘れています。「わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。
12:6 主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。」
12:7 訓練と思って耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです。・・・・

キリスト者が主から与えられた懲らしめを、親が愛する子に与える訓練と思って、感謝して、忍耐するように――このように記しております。

では、この忍耐を生み出すもっとも大きな原動力は何でしょうか？いろいろな忍耐を生み出す力もあると思いますけれども、その中でも最大の原動力は、いったい何でありましょうか？それは、イエス様が、間もなく再び来られる――すなわち、主のご再臨が間近いという確かな希望であります。イエス様は、弟子たちに別れを告げられるときに、次のようにおっしゃいました。

ヨハネ
14:2 ・・・・あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。
14:3 わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。

イエス様は、弟子たちをはじめ、イエス様を信じる私たちを、天の御国のご自分のみもとに置いてくださるために、いったん、この世を去られ、イエス様を信じるすべてのものの住む場所を用意されたら、再び迎えに来ると約束しておられます。

では、主はいつ私たち、キリスト者を迎えに来てくださるのでしょうか？

ヤコブ
5:7 こういうわけですから、兄弟たち。主が来られる時まで耐え忍びなさい。見なさい。農夫は、大地の貴重な実りを、秋の雨や春の雨が降るまで、耐え忍んで待っています。
5:8 あなたがたも耐え忍びなさい。心を強くしなさい。主の来られるのが近いからです。

また、ヘブル人への手紙 10 章には、こうあります。

ヘブル
10:37 もうしばらくすれば、来るべき方（・・・・すなわちイエス様・・・・）が来られる。おそくなることはない。

さらに、ヨハネの黙示録の 22 章には、イエス様ご自身が、『よ、わたしはすぐにくる』と三度も、ご再臨の近いことを約束しておられるのであります。このご再臨が近いという希望があるからこそ、私たちキリスト者は、喜んで患難を忍耐することができるのであります。

では、私たちキリスト者が、イエス様のご再臨に、大きな希望を置いている理由は、いったい何なのでありましょうか？それは、ピリピ人への手紙、三章の 20 節から 21 節にこうあります。

ピリピ
3:20 ・・・・私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。
3:21 キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。

ヨハネの手紙第一の三章にはこうあります。

第一ヨハネ
3:2 ・・・・キリストが現われたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。

このように、イエス様のご再臨の時、私たちのはかない朽ちる体を、イエス様に似た朽ちない清い栄光の体に変えてくださって、天の御国に携え挙げてくださるというイエス様のお約束があります。イエス様に似た体に変えられた私たちキリスト者が天の御国で、直接、父なる神様、そして、御子なるイエス様のお顔を拝して、礼拝を捧げる時に、大いなる救いの御業が完了いたします。

パウロは、ローマ書 8 章で、次のようにいっています。

ローマ
8:18 今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。

また第二コリントの四章でも、こう言っております。

第二コリント
4:16 ですから、私たちは勇気を失いません。たとい私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。
4:17 今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。

まさに近い将来に、私たちキリスト者に与えられるこの計り知れないほどの栄光に比べれば、今、私たちがあっている患難は取るに足りないと言えるのではないでしょうか。

私たちは、恵みによって与えられた御霊によって、このように主の限りない大きな御愛が、私たちひとりひとりにそそがれていることを深く覚え、心から主に感謝し、今年もいかなる患難が起ころうとも、喜んで、ご再臨が間近いことを、希望をもって待ち望み、忍耐しつつ、主にすべてをお委ねして、過ごそうではありませんか？

最後に、もう一度、最初に読んでいただいたみ言葉を読みして終わります。

ローマ
5:2 またキリストによって、いま私たちの立っているこ

の恵みに信仰によって導き入れられた私たちは、神の栄光を望んで大いに喜んでいます。
5:3 それればかりではなく、患難さえも喜んでいます。それは、患難が忍耐を生み出し、
5:4 忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。
5:5 この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。

ありがとうございました。

残された命の日数を正しく数える

2023 年 4 月 9 日、町田福音集会
重田定義

> 詩篇
> 90:10 私たちの齢は七十年。健やかであっても八十年。しかも、その誇りとするところは労苦とわざわいです。それは早く過ぎ去り、私たちも飛び去るのです。
> 90:11 だれが御怒りの力を知っているでしょう。だれがあなたの激しい怒りを知っているでしょう。その恐れにふさわしく。
> 90:12 それゆえ、私たちに自分の日を正しく数えることを教えてください。そうして私たちに知恵の心を得させてください。

それでは、この聖書の一節から、自分の日を正しく数えるということについて、ご一緒に考えてみたいと思います。

自分の日とはいったい、どういうことでありましょうか。それは、自分の人生に残された時間、言い換えれば、この世に残されている自分の命のことであります。しかし、人間は自分の人生に残された命の時間を正しく数えることが、いったいできるのでありましょうか？これに関して、イエス様は次のような例えを話しておられます。

> ルカ
> 12:16 それから人々にたとえを話された。「ある金持ちの畑が豊作であった。
> 12:17 そこで彼は、心の中でこう言いながら考えた。『どうしよう。作物をたくわえておく場所がない。』
> 12:18 そして言った。『こうしよう。あの倉を取りこわして、もっと大きいのを建て、穀物や財産はみなそこにしまっておこう。
> 12:19 そして、自分のたましいにこう言おう。「たましいよ。これから先何年分もいっぱい物がためられた。さあ、安心して、食べて、飲んで、楽しめ。」』
> 12:20 しかし神は彼に言われた。『愚か者。おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。そうしたら、おまえが用意した物は、いったいだれのものになるのか。』
> 12:21 自分のためにたくわえても、神の前に富まない者はこのとおりです。」

この金持ちは、自分に残された命の日数を正しく数えることができたといえるでしょうか。そうでないことは、よくわかります。しかし、この金持ちのように、目に見えるものに頼って、自分に残された命を数えて生きている人のなんと多いことでありましょう。

では、私たち人間は、自分に残されたこの世の命の日数を正しく予測することが、いったいできるのでありましょうか。できません。医者であれば、患者の命があとどれくらいかを予測することが、いったいできるでしょうか。医者でもできません。癌と診断された人が、医者からあなたの命はあと半年ですと言い渡されても、そのとおりにならなかった例がたくさんあることを、私たちは知っています。

このように、ある人の命があとどれくらいかは、誰にも予知できません。イエス様が、ルカの福音書 12 章 25 節で、『あなたがたのうちのだれが、心配したからといって、自分のいのちを少しでも延ばすことができますか』とおっしゃっている通りです。ただ神様だけが、その人の命をお決めになることができるのであります。

詩篇 90 篇 3 節に、『あなた（・・・・すなわち、神様・・・・）は人をちりに帰らせて言われます。「人の子らよ、帰れ。」』このようにありますが、神様が私たち人間に、『の子らよ、帰れ』とおっしゃったときが、私たちがこの世を去るときなのであります。

世界一の知恵者と言われたソロモンは、伝道者の書でこう言っております。

> 伝道者
> 3:1 天の下では、何事にも定まった時期があり、すべての営みには時がある。
> 3:2 生まれるのに時があり、死ぬのに時がある。

この時とは、神様が定められた時という意味であります。すなわち、私たちのこの世の命は神様によって定められているのであり、人間が決めることではないのであります。

医学の大きな目標は、人間の命をいかに長くするかということです。そして、そのために、老化を防ぐにはどうしたらいいかという研究が行われております。けれども、今日、多くの研究者が、老化は人間の力では制御できないと考えています。その根拠は、老化は遺伝子の中に、時間のプログラム、わかりやすく言えば、一種の時限装置が組み込まれているために起こり、生まれた時から、その時限装置が始動し始めるので、人間の力ではそれを阻止したり、元に戻すことはできないというのであります。

聖書には、人間のこの世のいのちの上限は百二十年と、はっきり記されております。

> 創世記
> 6:3 そこで、主は、「わたしの霊は、永久には人のうちにとどまらないであろう。それは人が肉にすぎないからだ。それで人の齢は、百二十年にしよう。」と仰せられた。

神様は、人間のこの世のいのちは、どんなに長生きしても百二十年までとされたのです。『人が肉に過ぎない』とは、神様の仰せに背いた結果、神様からいただいた霊が死んだようになってしまったアダムと、その子孫である私たちすべての人間、神様に罪を犯したために、霊が衰えて正しく働かなくなり、肉の思いだけで生きているすべての人間のことであります。

肉に過ぎない人間は、どんなに環境がよくても、どんなに栄養が理想的であっても、これまで百二十年以上、生きた人はおりません。これは老化という時限装置が、神様によって設定されているためであります。そして、神様はさらに細かく、一人一人の命の時限装置をも、設定されているのであります。ですから、百歳まで生きる人も、生まれてすぐに死ぬ赤ちゃんもいるのです。

私たち人間は、自分の力で生きていると思ったり、医者が命を伸ばしてくれると思いがちですけれども、それは間違いです。実は、神様によって、ひとりひとりが生かされているのであります。そして、神様が定められたときが来なければ、誰も死ぬことができないのであります。

このようにして、神様によって作られ、神様によって生かされている私たちが、この世の命をどのように使ったら正しい生き方なのか、それを知ることが、最初に読んでいただきました『自分の命の日数を正しく数える』ことの意味なのであります。

自分に与えられた命なら、自分のものなんだから自由に使ってもいいではないかと考える方も多いと思います。けれども、神様によって生かされているこの世の命を、自分の楽しみを追い求めるために使うことがいったい、自分の命を正しく数えることになるのでありましょうか？

では、自分に残された時間を正しく数えるという生き方とは、いったいどんな生き方なのでありましょうか？そのことを考えるには、まず人間が生きるとは何か、人間が生きるのと動物がいるのは、どこが違うのかということを知る必要があります。その違いは、聖書にはっきり記されております。

> 創世記
> 1:26 神は、「われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう。‥‥」と仰せられた。
>
> 2:7 その後、神である主は、土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで、人は、生きものとなった。

ここに記されておりますように、第一に神様は、人間をわれわれ、すなわち、神様と御子イエス様に似るものとしてお造りになったとあります。そして、二番目に、ご自分との親しい交わりができるように、人間だけに命の息、すなわち、霊を入れてくださったとあります。これが、他の動物と全く違う点なのであります。

これらのことによりまして、いかに神様が私たちを特別な被造物として愛しておられるかが分かるのであります。このように私たち人間を愛してくださる神様に、私たちが心から信頼して、おゆだねして従うときにこそ、人間の本当の幸せがあり、人間が生きる意味がそこにあるのであります。

神様が最初に作られた人間、アダムとその妻、エバも、初めは、エデンの園で神様に愛された幸せな日々を過ごしておりました。その時のアダムとエバのいのちには、死がありませんでした。ところが、そのアダムとエバが、この木の実を食べれば、神のように賢くなれるというサタンの誘いにかかって、神様から、この木の実だけは食べてはならない、食べると必ず死ぬと言われた戒めを破るという大きな罪を犯してしまいました。

神様は、なぜ人間に、その木の実を食べることを禁じられたのでありましょうか？それは、人間が、神様のように賢くなれば、自分を神と錯覚しておごり昂ぶり、創造主であり、全ての主権者である神様を無視して、わがまま勝手に生き、その結果、神様のお造りになった調和のとれた美しい世界を破壊し、ついには、人間自身も破滅するのを知っておられたからであります。

まさに現在の世界が、そのとおりになっております。人間はただ神さまのみもとで、神様の仰せに従ってさえいれば、神様が喜んで人間を守ってくださるのであり、それが人間にとって、もっとも幸せなことなのであります。しかし、アダムとエバは神様の仰せに背いてしまいました。これが原罪という罪であります。その結果、神様は、彼らをエデンの園から追放され、約束どおり、彼らの命に死が与えられたのであります。神様は、ご自分が戒めに背いたアダムに、次のように仰せになりました。

> 創世記
> 3:17 ‥‥「あなたが、妻の声に聞き従い（‥‥これはサタンの誘惑に乗った妻、エバのことです‥‥）、食べてはならないとわたしが命じておいた木から食べたので、土地は、あなたのゆえにのろわれてしまった。あなたは、一生、苦しんで食を得なければならない。
>
> 3:19 あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついに、あなたは土に帰る。あなたはそこから取られたのだから。」

しかし、これはアダムとエバだけの問題ではありませ んでした。

> ローマ
> 5:12 そういうわけで、ちょうどひとりの人（‥‥すなわちアダム‥‥）によって罪が世界にはいり、罪によって死がはいり、こうして死が全人類に広がったのと同様に、――それというのも全人類が罪を犯したからです。

こうありますように、アダムの罪の性質を受け継いだすべての人間は、生まれながらに、自分の欲、自分の欲するままに生きるという罪を犯すようになってしまったのであります。

神様から離れた人間は、その報いとして、さまざまな労苦を味わわなければならず、また、もっとも恐れる死をも味わわなければならなくなったのであります。人間の不幸の源は、この生まれながらに、神様に対するそむきの罪、原罪にあるのであります。

しかしそのような私たち人間を、神様はなお愛し、哀れまれ、人間の力ではどうすることもできない、神様に対するそむきの罪を、ご自分の独り子の神、イエス様に身代わりを負わせて、十字架にかけられるためにこの世にお遣わしになり、私たちを罪から救い出す、さらに、そのみわざを信じる者に永遠の命を与えるために、御子を死からよみがえらせてくださったのであります。

かつてイエス様に敵対し、イエス様を信じる者を迫害しておりましたパウロは、復活されたイエス様に出会って、自分の罪を示され、一転してイエス様に従うものに生まれ変わりました。そのパウロは、イエス様を信じた者がどうして新しい命に生きるようになることができるか、その理

由を次のように解き明かしております。

ローマ
6:4 私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあって（・・・・イエス様のよみがえりのいのちにあって・・・・）新しい歩みをするためです。
6:5 もし私たちが、キリストにつぎ合わされて、キリストの死と同じようになっているのなら、必ずキリストの復活とも同じようになるからです。
6:6 私たちの古い人（・・・・古い人というのは、かつて罪に支配されていた自分のことを言っております・・・・）がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが滅びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。
6:7 死んでしまった者は、罪から解放されているのです。
6:8 もし私たちがキリストとともに死んだのであれば、キリストとともに生きることにもなる、と信じます。

このように言っております。そして、このことは、次のようにパウロ自身の信仰の確信として証しをされました。

ガラテヤ
2:20 私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。

このように、自分のために十字架の上で死んでくださったほどに自分を愛してくださったイエス様のために、このイエス様に喜んでいただくために、地上に残された命を生きること、これこそが人間の正しい生き方なのであります。

そして、このような信仰の確信を与えられた者の人生は、まことの喜びに満たされるのであります。たとえ、不治の病気にかかって、余命いくばくもないと知られていても、死を恐れることなく、地上に残された人生を喜んで、希望を持って生きることができるのであります。パウロは、その理由を次のように述べております。

第二コリント
5:1 私たちの住まいである地上の幕屋（・・・・この地上の幕屋というのは、この世に生きている私たちの限られた命の体のことを言っておりますが・・・・）がこわれても、神の下さる建物（・・・・すなわち、イエス様のよみがえりの命に生きる新しい体のことを言っております・・・・）があることを、私たちは知っています。それは、人の手によらない、天にある永遠の家です。
5:2 私たちはこの（・・・・地上の・・・・）幕屋にあってうめき、この天から与えられる住まいを着たいと望んでいます。
5:3 それを着たなら、私たちは裸の状態になることはないからです。
5:4 確かにこの幕屋の中にいる間は、私たちは重荷を負って、うめいています。それは、この幕屋を脱ぎたいと思うからでなく、かえって天からの住まいを着たいからです。そのことによって、死ぬべきものがいのちにのまれてしまうためにです。
5:5 私たちをこのことにかなう者としてくださった方は神です。神は、その保証として御霊を下さいました。
5:6 そういうわけで、私たちはいつも心強いのです。

ここで、いちばん最初に読んでいただきました御言葉を、もう一度、お読みします。

詩篇
90:10 私たちの齢は七十年。健やかであっても八十年。しかも、その誇りとするところは労苦とわざわいです。それは早く過ぎ去り、私たちも飛び去るのです。
90:11 だれが御怒りの力を知っているでしょう。だれがあなたの激しい怒りを知っているでしょう。その恐れにふさわしく。
90:12 それゆえ、私たちに自分の日を正しく数えることを教えてください。そうして私たちに知恵の心を得させてください。

生まれながらの人間は、どんなに知恵をしぼって考えても、自分に残されたこの世の命の日数を正しく数えることも、真の知恵の心を持つこともできません。

もし私たち人間が、神様によって生かされている自分のこの世の命を、自分の肉の望むままに使い続けるならば、最後には、その人の上に神様の激しい怒りが、神様の激しい裁きがくだります。ですから、その日が来る前に、一日でも早く、神様の前にへりくだって、『どうか、自分に残された命の日数を正しく数えることを教えてください、そして、私に知恵の心得させてください』と、心から祈り求める必要があります。神様は、必ずその祈りに答えて、正しく知る知恵を与えてくださり、御子イエス様を信じて、イエス様のものとされ、自分に関わるすべてのことをイエス様におゆだねして、イエス様と共に歩むことこそが、自分に残された命の日数を正しく数えることであるということを、教えてくださいます。

どうか、一人でも多くの方が、イエス様を救い主と信じ、受け入れられて、残されたご自分の命の日数を正しく数えながら、希望と喜びに満ちた人生を歩む幸いを得られますように、心からお祈りする次第であります。

私の心はあなたの救いを喜びます

2023 年 5 月 28 日、吉祥寺福音集会
重田定義

詩篇
13:5 私はあなたの恵みに拠り頼みました。私の心はあなたの救いを喜びます。
13:6 私は主に歌を歌います。主が私を豊かにあしらわれたゆえ。

お久しぶりです。公人兄、どうも過分なお言葉を恐縮です。ありがとうございました。今はズームで、集会の様子が写されております。久しぶりに、兄弟がたのお顔、ひとりひとりが映されて、懐かしく思っております。今、公人兄がおっしゃった通り、私たちは体も衰えておりまして、吉祥寺集会にうかがうこともできない状態でありますので、今日もズームでもって、メッセージをさせていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

今から四十数年前、私がそれまで行っていた教会に決別し、吉祥寺キリスト集会に移る決心をして、既に吉祥寺集会に移っておりました家内と一緒に、初めて軽井沢のバイブル・キャンプ場で行われておりました集会のキャンプに参加した時のことでありました。

キャンプ場の中庭で、兄弟姉妹がたと昼食をしておりました時に、一人の吉祥寺集会、生抜きの兄弟が、私に突然、『あなたは救われていますか』と話しかけてこられたのです。私は一瞬、答えに詰まって、黙っていました。その様子を見た兄弟はすぐに話題を変え、私は答えないままに終わってしまいました。

その当時、私は喜びのないまま、教会の礼拝に出席し、役員として、礼拝の司会や時には牧師に代わってメッセージを取り次ぐというような信仰生活を送っておりました。その集会の兄弟から、あなたは救われていますか？と問いかけをされたその時、私は兄弟の口を通して、主が私の喜びのない信仰を鋭く指摘されたような気がいたしました。

では、救いの喜びはどこから来るのでしょうか？詩篇の作家は、次のように主を賛美しております。

詩篇
92:4 主よ。あなたは、あなたのなさったことで、私を喜ばせてくださいましたから、私は、あなたの御手のわざを、喜び歌います。
92:5 主よ。あなたのみわざはなんと大きいことでしょう。あなたの御計らいは、いとも深いのです。

このようにこの作家は、主の御手のみわざの大きさ、主のご計画の深さを知ったことを喜んでおります。では、その主の御手のわざ、主のご計画とはいったいどんなものでありましょうか？

私たち人間は、神様に愛され、神様と親しく交わるように造られたものにもかかわらず、神様の御心に背くという罪を犯したアダムとエバの子孫であり、生まれながらにして神様に対するそむきの罪を負い、その報いとして、死に定められ、滅びるしかないものでありました。けれども、神様は、そのような人間をも、お見捨てにならずに愛してくださり、哀れんでくださり、滅びの罪から救おうというご計画をお立てになり、そのみわざを実行に移されたのであります。

そして、その救いの御業というのは、具体的には、言うまでもなく、御子イエス様に全人類の罪を負わせて十字架に架け、そのあがないの御業を信じる者の罪を赦し、死ぬことのない永遠のいのちを与えようという私たち人間の理解をはるかに超えた大きく深いものでありました。まさに聖書の哀歌三章 22 節、『私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ』と、あるとおりであります。

神様から背き離れた人間は、自分の知恵や思いだけで生きております。そのような人間は、人間に対する罪は知っていても、神様に対する罪意識を持つことができません。したがって、神様に犯した罪がどんなに大きいか、どんなに恐ろしいかを知ることができません。

神様の御愛によって自我が砕かれ、閉ざされていた霊の目が開かれた時に始めて、神様に背いた罪の大きさ、恐ろしさを知ることができ、心から罪の告白と悔い改めができるのであります。

ダビデ王もその一人でした。彼は王の権力によって、自分の部下の妻を奪い、部下を死に追いやるという神様から与えられた十戒のうちの殺人、姦淫、貪りという三つの戒めを破りながらも、それを王として当然のこととし、罪の意識など全く持っておりませんでした。しかしながら、預言者ナタンによって自分のしたことが、神様の戒めを破る死罪に値する罪であることを知って、次のように祈りました。

詩篇
51:1 神よ。御恵みによって、私に情けをかけ、あなたの豊かなあわれみによって、私のそむきの罪をぬぐい去ってください。
51:2 どうか私の咎を、私から全く洗い去り、私の罪から、私をきよめてください。
51:3 まことに、私は自分のそむきの罪を知っています。私の罪は、いつも私の目の前にあります。
51:4 私はあなたに、ただあなたに、罪を犯し、あなたの御目に悪であることを行ないました。・・・・

51:14 神よ。私の救いの神よ。血の罪から私を救い出してください。・・・・

このようにダビデは、神様に罪を告白し、心から悔い改めて、罪の赦しを請い願いました。自我が砕かれ、霊の目が開かれて、自分が神に背いた罪の大きさ、恐ろしさを知れば、誰でも、どなたでも、ダビデと同じように神様に心から罪の赦しを乞うようになります。神様に心から罪の赦しを請い求める者に対して、次のように約束してくださいます。

イザヤ
43:25 わたし、このわたしは、わたし自身のためにあ

なたのそむきの罪をぬぐい去り、もうあなたの罪を思い出さない。

では、神様は、このお約束をどのようなかたちで私たちに与えてくださるのでありましょうか？神様は、預言者イザヤの口を通して、次のようにお告げになっております。

イザヤ
53:1 私たちの聞いたことを、だれが信じたか。主の御腕は、だれに現われたのか。
53:2 彼は主の前に若枝のように芽生え、砂漠の地から出る根のように育った。彼には、私たちが見とれるような姿もなく、輝きもなく、私たちが慕うような見ばえもない。
53:3 彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。人が顔をそむけるほどさげすまれ、私たちも彼を尊ばなかった。
53:4 まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。
53:5 しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。
53:6 私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。

彼とはもちろん、イエス様であります。イエス様は神の御子であられながら、父なる神様の御心に従い、私たち人間と同じ血と肉を持った人のかたちを取って、この世にお生まれになって、人々から蔑まれ、はげしい迫害をお受けになりながら、三十三年の御生涯をすごされ、最後には、十字架におかかりになり、全人類の罪の贖いのみわざを成し遂げられたのであります。

自我が砕かれ、霊の目が開かれて、このイエス様の十字架の贖（あがな）いの御業が、自分のような者にも及んだ恵みを覚え、イエス様を信じて救われた者ならば、その救いを心から感謝し、よろこびます。

では、その喜びは、信仰生活の上に、どのような変化をもたらすのでありましょうか？これについては、集会の多くの兄弟姉妹が証しをされております。そこで今日は、私自身について、思いつくままに挙げてみたいと思います。

一つ目は、礼拝に対する態度が変わります。かつて、喜びのなかったときは、礼拝は、信者の義務と考えておりました。時には、毎週、礼拝に行くことをさえも、重荷と思うことがありました。しかしながら、救われた喜びを与えられてからは、礼拝が主なる神様、主イエス様に心からの感謝と賛美をお捧げすることが、どんなに幸いなことか、また、礼拝を通して、神様、イエス様と霊的なお交わりができることがどんなに大きな喜びであるかを覚えるように変えられたのであります。

二つ目は、生活の軸が変わったことであります。喜びのなかったときは、まだイエス様により頼むこと、イエス様に自分を明け渡すことの恵みが、どんなに大きいのかが分からないで、実はイエス様が助けてくださっていたのにもかかわらず、愚かにも、自分の力で、自分の知恵で、生活上の問題をなんとか解決したと思い込んでいたような愚かな者でありました。しかしながら、救われた喜びを知ってからは、自分の過去、現在、将来の生活、一切はイエス様の御手の中にあり、いつもイエス様がともにいて導いてくださり、時には手を引いてくださり、時には背負ってまでして守ってくださるから、自分はただ、イエス様により頼み、お委ねし、明け渡し、導かれるままに歩めばよいと言うように、生活の軸を、イエス様に変えることができるようになりました。

三つ目は、とりなしの祈りの変化であります。喜びのなかったときは、心からではなく、形だけの祈りにすぎないような祈りをしておりました。けれども、救われた喜びを知ってからは、イエス様が私のような者を救うために、また、救われた後も、ご自分から離れないようにと、サタンの餌食にならないようにと、どんなに愛をもって祈ってくださっているかを覚えることができ、また、まだ救われていない親族、友人、知人の救いの祈りを、そして、艱難、試練の中にいる兄弟姉妹のための祈りを毎日、心から主に捧げるように変えられたのであります。

四つ目は、教会に対する姿勢であります。喜びのなかった時には、教会は主の御体であると、聖書にはっきり記してあるにもかかわらず、教会は礼拝を行う場所という思いが強くて、教会に対する親しみというものは、あまり感じられませんでした。けれども、救われた喜びを知ってからは、自分も主の御体なる教会であるキリスト集会に組み込まれたひとりとして、同じように教会の体の部分部分として集っておられる兄弟姉妹がたとともに、心を一つにして、教会を愛し、集会を愛し、集会がイエス様をかしらとする御体なる教会として、主のご栄光を現すようにと祈るように変えられました。

五つ目は、御再臨待望についての態度であります。喜びのなかった時でも、イエス様の御再臨が聖書のどこに何と記してあるか、知識としては知っておりました。信者が御再臨をもっとも大きな希望として待ち望む思いも、理解はできておりましたつもりであります。けれども、自分にとって、ご再臨を現実の問題として受け止め、真剣に待ち望む思いを持つまでには至っておりませんでした。しかしながら、救われた喜びを知ってからは、イエス様が間もなく、今のこの悪に満ちた、罪に穢れた闇の世界を滅ぼし、新しい聖い世界に作り替えられる時に、それまでお救いになった信者を、もうすでに骨になった信者まで聖い、朽ちない体に変えて、天の御国に携え上げてくださるために、再び天から迎えに来てくださるというすばらしいご再臨の約束が、一日も早く実現するように、毎日、『主イエス様、早く来てください』と、熱心に祈るようになりました。

以上、思い出すままに、救われた喜びが信仰生活にどのような変化を生じたかを、私自身の上に起こった変化としてお話しいたしました。けれども、この変化は、決して、私の意志によって、あるいは、私の働きによってなされたものではありません。私はただ、救いを喜んでいただけでありました。その喜んでいた私の心の中に住んでくださっている御霊の力、御霊の働きによって、自然に起こされたものであります。イエス様が私をこのように豊かに恵んでくださったことを、心から感謝するばかりであります。

最後に、もう一度、冒頭の御言葉をお読みいたします。

> 詩篇
> 13:5 私はあなたの恵みに拠り頼みました。私の心はあなたの救いを喜びます。
> 13:6 私は主に歌を歌います。主が私を豊かにあしらわれたゆえ。

ありがとうございました。

【古田兄のお祈り】重田兄、どうもありがとうございました。それでは一言、主に感謝をお捧げしたいと思います。愛するイエス様、尊い御名を褒め称えます。今日こうして、あなた様が、重田兄を通して、救いの喜びを具体的に語ってくださいましたことを感謝いたします。兄弟もお話くださったように、それはただ御霊様の働きによるものであること、本当に私たちも信仰生活を通して、それぞれに多く、あるいは、少なくですけれども、知らせていただき、経験させていただいていることを感謝いたします。どうぞ、私たちの歩みが、イエス様にますます喜んでいただけるものとなりますように、これからの歩みも、どうぞお導きください。この本当にあふれるばかりの恵みの時をいただきましたことを感謝いたします。尊い御名によって感謝して、この祈りを御前にお捧げいたします。アーメン。

霊の暗闇からの脱出

2023年7月2日、町田福音集会
重田定義

> マタイ
> 6:22 からだのあかりは目です。それで、もしあなたの目が健全なら、あなたの全身が明るいが、
> 6:23 もし、目が悪ければ、あなたの全身が暗いでしょう。それなら、もしあなたのうちの光が暗ければ、その暗さはどんなでしょう。

どうもありがとうございました。今日は、イエス様がおっしゃったこのみことばについて考えたいと思います。

昔の人は、目は体の窓で、そこから光が体内に差し込むと考えておりました。この考えによりますと、目が健全ならば、全身が明るく健康だけれども、目が悪ければ、全身は暗く、不健康ということになります。

イエス様がこのことを比喩的に取り上げて、霊の目が健全なら、体の中に差し込む光が、体全体を明るくするけれども、霊の目が悪ければ、光は体に差し込むことがなくなり、体全体は真っ暗になるとおっしゃっているのであります。これは、霊の目が悪ければ、いくら肉体の目が良くても、その人は、霊的な暗闇の中に置かれているという意味であります。

視力を失うことを失明、すなわち、明るさを失うと言います。この言葉のとおり、もし目が見えなくなれば、私たちは明るさを失って、昼間でも真っ暗闇の中に置かれるのと同じ状態になり、どの方向に進んだらよいかわからなくなり、まっすぐに歩いているつもりが、曲がった道に入り込んだり、障害物につまずいたり、ホームから転落して大けがをしたりして、命を落とすことにもなります。

しかし、暗闇には、肉眼の視力が失われることによって生じる暗闇の他に、霊の視力が失われることによって起こる暗闇、すなわち、霊的な暗闇があります。霊的な暗闇に置かれた人間は、肉眼が失明した人間の場合と同じように、霊的な意味で、自分がどこに向かっていったらよいのかわからなくなり、自分では正しい道を選んだつもりでも、滅びに至る道を、それとは知らず、つまずいたり、転んだりしながら歩むことになります。

その暗さは、イエス様が、『もしあなたのうちに光がなければ、その暗さどんなでしょう』とおっしゃったほどに恐ろしい暗さなのです。肉眼の失明に気が付かない人はありません。けれども、霊的な失明は、ほとんどの人が気づきません。そのために今、申しましたように、恐ろしい結果を招くことになるのです。

世界一の知恵者と言われたソロモン王は、彼の書いた箴言の中で言っています。

> 箴言
> 14:12 人の目にはまっすぐに見える道がある。その道の終わりは死の道である。

ここで言っている人の目とは、霊的に失明している人の目のことであり、霊的に失明している人は曲がった道も真っ直ぐに見えてしまって、その曲がった道は、死に至る道だと言うのであります。

では、この恐ろしい霊的な失明は誰に、また、どのようにして起こるのでありましょうか？

実は、霊的失明は、人間ならば、誰にでも起こるのであります。言い換えますと、すべての人間は、霊的盲人なのであります。どうしてなのでしょうか？それは、全ての人間は、神様がお造りになった最初の人間、アダムの子孫だからであります。アダムは、サタンの誘惑に負けて霊的盲目となり、神様のお言いつけに背き、禁断の木の実を食べるという罪を犯してしまいました。すべての人間は、アダムの子孫であるがゆえに、アダムの遺伝子を受け継ぎ、生まれながらに霊的盲人となってしまったのであります。

ソロモン王は、箴言の四章で言っております。

> 箴言
> 4:19 悪者の道は暗やみのようだ。彼らは何につまずくかを知らない。

ソロモンのいう悪者とは、霊的盲目のために、創造主であり、主権者である全知全能の生ける神様、人間をご自分に似たものとして造ってくださった上に愛してくださる神様が見えなくなって、神様から離れ、自分の欲望を満たすことだけを考えて、浅はかな自分のその知恵に頼って生きているすべての人間を指しております。預言者イザヤは、神様から離れた人間の霊的状態を次のように言い表しております。

> イザヤ
> 59:10 私たちは盲人のように壁を手さぐりし、目のない者のように手さぐりする。真昼でも、たそがれ時のようにつまずき、やみの中にいる死人のようだ。

しかし、神様は、このような哀れな人間をなおも愛し、お見捨てにならずに、ひとり子の神様を光として、この世にお遣わしになったのであります。イエスの弟子のヨハネは、次のように証言しました。

> ヨハネ
> 1:2 この方は、初めに神とともにおられた。
> 1:3 すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。
> 1:4 この方にいのちがあった。このいのちは人の光であった。
> 1:5 光はやみの中に輝いている。やみはこれに打ち勝たなかった。

イエス様ご自身も、ご自分について次のように言っておられます。

> ヨハネ
> 8:12 ・・・・「わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つ

のです。」

イエス様は、闇の中をさまよい歩いている霊的失明者の人間をあわれんでくださり、闇に打ち勝つ光として、この世においでになり、イエス様に霊の目を開いて欲しいと願うものの目を開いて、イエス様のいのちの光を与えてくださいました。

マルコの福音書の 10 章には、イエス様がバルテマイという盲人の乞食の願いをかなえて、目が見えるようにしてくださったエピソードがあります。

マルコ
10:46 彼らはエリコに来た。イエスが、弟子たちや多くの群衆といっしょにエリコを出られると、テマイの子のバルテマイという盲人のこじきが、道ばたにすわっていた。
10:47 ところが、ナザレのイエスだと聞くと、「ダビデの子のイエスさま。私をあわれんでください。」と叫び始めた。
10:48 そこで、彼を黙らせようと、大ぜいでたしなめたが、彼はますます、「ダビデの子よ。私をあわれんでください。」と叫び立てた。
10:49 すると、イエスは立ち止まって、「あの人を呼んで来なさい。」と言われた。そこで、彼らはその盲人を呼び、「心配しないでよい。さあ、立ちなさい。あなたをお呼びになっている。」と言った。
10:50 すると、盲人は上着を脱ぎ捨て、すぐ立ち上がって、イエスのところに来た。
10:51 そこでイエスは、さらにこう言われた。「わたしに何をしてほしいのか。」すると、盲人は言った。「先生。目が見えるようになることです。」
10:52 するとイエスは、彼に言われた。「さあ、行きなさい。あなたの信仰があなたを救ったのです。」すると、すぐさま彼は見えるようになり、イエスの行かれる所について行った。

この盲人は、暗闇の中で長い年月を貧しく乞食として生きてきました。彼はどんなに光を望んだことでしょうか？そういう時に、彼は、あちこちで多くの病人を癒されたイエスという方が街に来られるという噂を聞きました。彼は噂を聞いただけで、この方こそ、自分の盲目を癒してくださる方と確信しました。

それは、彼がイエス様に向かって、『ダビデの子のイエス様、私をあわれんでください』と叫んだことで分かります。ダビデの子とは、神様が、ダビデ王の子孫に霊的な神の国を地上にもたらすとイスラエルの民に約束された救い主のことであり、彼は、イエス様こそ、その救い主だと信じたのです。イエス様は、彼の信仰をよろこばれ、『あなたの信仰があなたを救った』とおっしゃって、即座に目が見えるようにしてくださいました。

このエピソードの中の盲人は、肉眼の盲（めし）いであります。しかしながら、このエピソードは、霊の暗闇に置かれた人間、すなわち、霊的な盲人をも意味しております。霊的盲人が、自分は今どこに居るのだろうか、どの方向に向かっていったらいいのだろうか、途方に暮れながら、悩み、苦しみ、手探りで人生を歩んでいる時に、イエス様のうわさを聞き、この方こそ自分を闇から救い出してくださる方と信じて、心から、『イエス様、助けてください』と叫べば、イエス様はただちに、ご自分のいのちの光によって、霊の目を開いて、暗闇の中から、光の中に移してくださいます。

そして、イザヤ書の 29 章 18 節に、『その日、耳しいた者が書物のことばを聞き、盲人の目が暗黒とやみの中から物を見る』とありますように、今までは、自分の頭で理解しようとしても分からなかった神様のみ言葉である聖書を、イエス様の光によって開かれた霊で深く味わうことができるようになり、歩むべき正しい道はイエス様を信じ、従って歩むことであると示され、その恵みを心から喜ぶようになるのであります。

ところが、イエス様を信じて、霊の目が開かれ、光の中に移され、主に従うものとされたものも、もし光であるイエス様から目を離しますと、たちまち、サタンの罠にかかって、霊の目が閉ざされ、再び、闇の中を歩む危険に陥ってしまうことになります。そうなりますと、主の御心がわからなくなり、信仰の歩みも、主に従って歩むのではなく、自分の信仰、自分の思いの信仰で歩むことになってしまいます。

そのような信者についてイエス様は、比喩的に次のようにおっしゃっております。

マタイ
15:14 ‥‥彼らは盲人を手引きする盲人です。もし、盲人が盲人を手引きするなら、ふたりとも穴に落ち込むのです。

このような霊的に失明した信者は、自分がイエス様をお入れしている単なる土の器であること、そして、その器を用いて、主がご栄光をあらわされるということが、もう分からなくなっております。そして、自分の考えによって、イエス様のみこころとは違う間違った方向へ人を導いたり、神様の愛ではなく、人間的な愛、ヒューマニズムの実践が正しい信仰の行いであると確信してしまうのであります。まさに、盲人が盲人を手引きするようなものになってしまうのであります。

このようにならないためには、いったいどうしたらいいのでしょうか？パウロは、私たちキリスト者に、次のように勧めております。

エペソ
5:8 あなたがたは、以前は暗やみでしたが、今は、主にあって、光となりました。光の子どもらしく歩みなさい。

主にあって光となるとはどういうことでしょう？それは、自分が光り輝くのではなくて、闇の中に光としておいでになったイエス様にしっかりと結び付いていった時に、そのイエス様の光を輝かすことができるということであります。

世の終わりが間近いことを示す兆候が、ますます明らかになりつつあるときにあって、かつては霊的な盲人であった私たちは、イエス様の愛によって霊の目が開かれた今、またと暗闇に戻らぬように、常に御霊の目薬を点眼していただきながら、光の子にふさわしく、イエス様の光

を輝かす燭台としての歩みを、イエス様にお会いするときまで続けることができるように、ご一緒に祈ろうではありませんか。

ありがとうございました。

三つのうめき

2023 年 10 月 1 日、町田福音集会
重田定義

ローマ
8:22 私たちは、被造物全体が今に至るまで、ともにうめきともに産みの苦しみをしていることを知っています。
8:23 それればかりでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、心の中でうめきながら、子にしていただくこと、すなわち、私たちのからだの贖われることを待ち望んでいます。

8:26 御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてくださいます。

それでは、今、ご紹介にありました『三つのうめき』、ローマ書の手紙の中にございます三つのうめきについて、ご一緒に学んでみたいと思います。

まず、被造物のうめきについてであります。言うまでもなく、被造物というのは、全知全能なる神、創造主なる神によって造られた、世界、全宇宙に存在する全てのものを指しております。

創世記の一章から二章には、神様は、無から全てのものをお造りになった。そして、造られたものをご覧になってよしとされた、すなわち、満足されたとあります。全てのものは、神様の御心にかなった出来栄えだったからであります。

これらの被造物は、神様のご栄光の現れとして造られたものでありました。その被造物が、うめき、苦しむと、擬人化されて表現されているその被造物のうめきとは、いったいどういうものなのでありましょうか？

創世記の一章の二十六節には、神様がご自分の御心に素直に従うことを願われて、ご自分に似るものとして、私たち人間をお造りになった。その人間に、ご自分のお造りになったすべての被造物を管理させようとお考えになったとあります。

その最初の被造物、人間の被造物は、アダムとエバであります。けれども、この二人は、自分の欲望を満たすために、神の御心に背いて、禁断の木の実を食べるという罪を犯してしまいました。その結果、アダムとエバの子孫である人類は、全て生まれながらにその罪の性質を受け継ぎ、罪あるものとなってしまったのであります。それゆえ、その罪は原罪と呼ばれます。それ以来、神様によって造られた被造物は、人間に管理されるどころか、かえって人間によって痛めつけられてきたのであります。

罪を持った人間が、神様のお造りになった被造物を正しく管理できないのは、これは当然のことであります。人間は自分たちの欲望を満たすために、勝手気ままに、神様によって造られた被造物を利用してきてしまったのであります。そのために被造物は、今に至るまで、現在に至るまで、うめいているのであります。

具体的な例はいくつも挙げられます。これまで、数多くの植物や動物が、人間のわがまま勝手な行動によって、絶滅したり、絶滅の危機に瀕しております。また、アマゾンやシベリアなどの世界に分布している大森林は、光合成――光の合成によって、大気中の二酸化炭素を酸素に変えるという、生態系にとって大切な役割を果たしておりますけれども、今や、大規模な開発によって、その姿はどんどん消滅しつつあります。

また、人間の生活に必要なエネルギーとして、大量の化石燃料が燃やされ、大気中の二酸化炭素は、どんどん増加しております。大気中の二酸化炭素の増加は、地球の温暖化の大きな原因であり、その影響は、地球の気象の変化となって現れ、その結果、人間の生活に、地球規模的な被害が起こっていることは、皆さん、ご承知の通りであります。

人間はようやく、このことの重大性に気づいて、世界各国の政治家や専門家たちが、何度も会議を開いて協議をしております。けれども、悲しいことに、その成果は、全くと言っていいほど、上がっておりません。どうしてでしょうか？それは、その根本原因が、自分たち人間の罪の性質、すなわち、自己中心という性質にあるからであります。地球の環境を守ることは大切と気づいても、そのために自分の欲望を抑えることはできない。これが被造物を、ますます苦しめることになっている原因なのであります。

では、いつ被造物は、この苦しみから解放されるのでありましょうか？いつ、うめきが喜びに変わるのでありましょうか？それは、黙示録をはじめ、聖書の各書に、次のように記されております。すなわち、天に戻られたイエス様が、サタンを縛り、イエス様を信じる者には永遠の祝福を、信じない者には永遠の滅びを与えるために、地上においでになり、千年のあいだ、王として信じるものとともに、この世を支配されるといういわゆる千年王国の時なのであります。

その時、被造物は人間の罪による束縛から解放され、神様が初めにお造りになったとおりの完全な姿、状態に回復されるのであります。天にあるもの、地にあるものの全てが完全な姿に回復されるのであります。聖書はこれについて、次のように記しております。

イザヤ
11:6 狼は子羊とともに宿り、ひょうは子やぎとともに伏し、子牛、若獅子、肥えた家畜が共にいて、小さい子どもがこれを追っていく。
11:7 雌牛と熊とは共に草を食べ、その子らは共に伏し、獅子も牛のようにわらを食う。
11:8 乳飲み子はコブラの穴の上で戯れ、乳離れした子はまむしの子に手を伸べる。
11:9 わたしの聖なる山のどこにおいても、これらは害を加えず、そこなわない。主を知ることが、海をおおう水のように、地を満たすからである。

これが、イエス様、ご再臨の時の被造物の姿なんですね。

ここには、完全にされた全ての被造物が、本当の平和の中で、神様を賛美し、神様の栄光を表すものとして生活する、本当に美しい情景がここに描かれております。

今はまだ、その前の生みの苦しみの時代なのであります。今の被造物のうめきは、この苦しみから解放される耐乏のうめきに他なりません。

次に、『御霊の初穂をいただいている私たち自身も、心の中でうめきながら、子にしていただくこと、すなわち、私たちのからだの贖われることを待ち望んでいます』という箇所について、考えたいと思います。

『御霊の初穂をいただいているもの』とは、イエス様を信じ、その保証として御霊を与えられた私たち信者です。しかし、どうしてイエス様を信じたものが、うめかなければならないのでありましょうか？

第一に考えられるのは、罪から解放されて新しく生まれ変わった信者の霊は、イエス様の御心に従うことを望んでいますけれども、この世に生きている信者の体は、まだ古いままなので、そのために霊と肉とのあいだの葛藤が起こるからなのであります。パウロの言葉は、それをよく言い表しております。

ローマ
7:18 私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。
7:19 私は、自分でしたいと思う善を行なわないで、かえって、したくない悪を行なっています。

7:21 そういうわけで、私は、善をしたいと願っているのですが、その私に悪が宿っているという原理を見いだすのです。
7:22 すなわち、私は、内なる人（・・・・つまり、イエス様を信じて、新生した霊のことです・・・・）としては、神の律法（・・・・すなわち、神様の御心・・・・）を喜んでいるのに、
7:23 私のからだの中には異なった律法があって、それが私の心の律法に対して戦いをいどみ、私を、からだの中にある罪の律法のとりこにしているのを見いだすのです。
7:24 私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。

熱心なユダヤ教徒であり、優れた聖書学者であったパウロは、初めは、イエス様が神の御子であることを認めず、イエス様を信じる者を迫害しておりました。けれども、復活のイエス様に出会って、霊の目が開かれてからのパウロは、ガラテヤ人への手紙で、次のように証しするほどの強い信仰者に変わりました。

ガラテヤ
2:2 私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

そのパウロが、『私は本当にみじめな人間です。誰がこの死の体から私を救い出してくれるのでしょうか』と嘆くほどに、この世に置かれた信者には、霊と肉との葛藤が激しいのであります。全く私たちも同様ではないでしょうか？

しかし、信者が未信者と決定的に異なっていることがあります。それは、イエス様の十字架のあがないを信じたものは、もはや、決して罪に問われないという事実であります。パウロは、こう断言しております。

ローマ
7:25 私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。

8:1 ・・・・今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。

8:34 罪に定めようとするのはだれですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、私たちのためにとりなしていてくださるのです。

このように、パウロは、イエス様を信じたものは、もはや決して罪に問われることはないと、心から確信しつつ、心の中でうめきながら、体のあがなわれることを待ち望んでいると言っているのであります。『体があがなわれる』とは、言うまでもなく、イエス様のご再臨の時に、信者の卑しい朽ちるからだが、イエス様に似た、朽ちることのない、きよい栄光の体に変えられるということであります。

ピリピ
3:20 けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。
3:21 キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。

では、その時は、いつなのでしょうか？イエス様は、次のように約束されました。

黙示録
22:12 見よ。わたしはすぐに来る。わたしはそれぞれのしわざに応じて報いるために、わたしの報いを携えて来る。
22:13 わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である。初めであり、終わりである。」
22:14 自分の着物を洗って（・・・・すなわち、イエス様の十字架の血潮によって清められて、信者となり・・・・）、いのちの木の実を食べる権利を与えられ、門（・・・・すなわち、天の御国の門・・・・）を通って都（・・・・天の都・・・・）にはいれるようになる者は、幸いである。

なんというすばらしい約束でありましょうか。私たち信者

は、『主よ、早く来てください』と祈りながら、その日を、今から今かと、待ち望むのであります。

三番目の御霊のうめきについて、これから考えてみたいと思います。

ローマ
8:26 御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてくださいます。

イエス様を信じた私たちの心の中には、イエス様のお約束どおり、御霊が住んでくださっています。そして、絶えず私たちを支え、励まし、慰め、導いてくださっています。先ほども申しましたように、私たち信者は、この世に生きているあいだは、自分の思いを制御することができずに悩み、苦しむことが多々あります。

しかし、ここで、『御霊ご自身が言いようもない深いうめきによって、私たちをとりなしてくださっている』とありますことに、私たちはあらためて深い感動を覚えます。私たち人間は、人の苦しみ、悩みを我がことのように覚えて、同じようにうめくことはなかなかできません。

けれども、神様から背き、離れた私たちを救うために、ご自身のいのちを捨ててくださったイエス様は、さらに御霊となって私たちの中に住んでくださり、私たちの痛み、苦しみをいつも、ともに負ってくださり、ともにうめいてくださるのであります。なんというイエス様の深いご愛ではありませんか。私たちはただ、感謝するばかりであります。

今日は、三つのうめきについて、ご一緒に考えてまいりました。

三つのうめきが止む時、それは、先ほども申しましたとおり、イエス様のご再臨の時であります。そして、その時が迫っていることは、イエス様ご自身が、その前兆について、弟子たちに答えておられることから知ることができます。

ルカ
21:8 イエスは言われた。「惑わされないように気をつけなさい。わたしの名を名のる者が大ぜい現われ、『私がそれだ。』とか『時は近づいた。』とか言います。そんな人々のあとについて行ってはなりません。
21:9 戦争や暴動のことを聞いても、こわがってはいけません。それは、初めに必ず起こることです。だが、終わりは、すぐには来ません。」
21:10 それから、イエスは彼らに言われた。「民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、
21:11 大地震があり、方々に疫病やききんが起こり、恐ろしいことや天からのすさまじい前兆が現われます。」

世界の現状は、まさに、イエス様がおっしゃったとおりに進んでいるのではないでしょうか？イエス様は、次の言葉で締めくくられました。

ルカ
21:36 「しかし、あなたがたは、やがて起ころうとしているこれらすべてのことからのがれ、人の子（・・・・すなわち、イエス様・・・・）の前に立つことができるように、いつも油断せずに祈っていなさい。」

イエス様が教えてくださったように、私たちは、いつうめきが喜びに変わる時が来てもいいように、御霊に満たされ、身を慎み、心を整えて、祈りつつ、その日を待ち望もうではありませんか？

ノアの箱舟の警告

2023 年 10 月 7 日、町田よろこびの集い
重田定義

今日は会場に出向き、皆様のお顔を見ながら、お話ししたかったんですけれども、九十六歳という歳に加えて、肺気腫などの持病があり、残念ながら、そちらに行く体力の余裕はありません。しかし、幸いなことに、気力だけはあり、このように大きな声も出せますので、ズームによって、これからお話をさせていただきたいと思います。

聖書を読んだことがなくても、ノアの箱舟の話をご存知の方は、少なくないのではないでしょうか？ノアという人は、どんな人で、なぜ箱船を作り、その中に入ることになったのでしょうか？その理由は、聖書の創世記に、次のように記されております。

創世記
6:9 ‥‥ノアは、正しい人であって、その時代にあっても、全き人であった。ノアは神とともに歩んだ。
6:10 ノアは三人の息子、セム、ハム、ヤペテを生んだ。
6:11 地は、神の前に堕落し、地は、暴虐で満ちていた。
6:12 神が地をご覧になると、実に、それは、堕落していた。すべての肉なるものが、地上でその道を乱していたからである。
6:13 そこで、神はノアに仰せられた。「すべての肉なるものの終わりが、わたしの前に来ている。地は、彼らのゆえに、暴虐で満ちているからだ。それで今わたしは、彼らを地とともに滅ぼそうとしている。
6:14 あなたは自分のために、ゴフェルの木の箱舟を造りなさい。‥‥」

7:1 主はノアに仰せられた。「あなたとあなたの全家族とは、箱舟にはいりなさい。あなたがこの時代にあって、わたしの前に正しいのを、わたしが見たからである。」

7:4「それは、あと七日たつと、わたしは、地の上に四十日四十夜、雨を降らせ、わたしが造ったすべての生き物を地の面から消し去るからである。」
7:5 ノアは、すべて主が命じられたとおりにした。

7:7 ノアは、自分の息子たちや自分の妻、それに息子たちの妻といっしょに、大洪水の大水を避けるために箱舟にはいった。

7:16 ‥‥それから、主は、彼のうしろの戸を閉ざされた。

天地万物の造り主であり、全知全能の生ける真の神様は、人間をご自分に従い、親しく交わることができるようにと、ご自分のいのちの息を吹き込んでお造りになりました。ところが、その最初の人間、アダムとエバは、サタンの誘惑に負けて、神様の御心に背いてしまいました。その結果、彼らは神様との正しい関係を失い、神様の前に堕落した者となってしまったのであります。

そして、これは彼らだけではなくて、彼らの遺伝子を受け継いだ人間すべてに及びました。今の聖書に記されておりますように、ノアの時代には、地上は悪と暴虐に満ちた様になっていたのであります。ただし、ノアだけは、正しい人、全き人であったとあります。

正しい人というのは、洪水の気配が全く見られなかった時にも、疑うことなく、ただ神様の仰せに素直に従って、大きな大きな箱船を作ったような、神様との関係において、神様をご信頼もうしあげた人、正しい人という意味であります。

ノアたちが箱舟に入り、神様が彼のうしろの戸をの閉ざされてから三日後に、神様がおっしゃったとおり、全ての高い山々も覆われるほどの大洪水が起こり、地上のすべての生き物は死に絶えてしまいました。聖書には、水は百五十日も引かなかったとあります。今日でも、世界中でしばしば大洪水が起こりますけれども、ノアの洪水は、それとは比較にならない地球規模の大きさであったのであります。

さて、ノアの時代からはるかに下った今日（こんにち）、世界の状態はどうでしょうか？

私たちが目にする世界は、まさにノアの時代、いやそれ以上に悪と暴虐が満ちているといえるのではないでしょうか？世界中で戦争やテロ、殺人、強盗、暴行など、数え切れないほどの凶悪な事件が、毎日のように起こっております。また、地球の温暖化に伴う気候の変動によって生じた大洪水、あるいは、反対に大干ばつ、あるいは、大きな山火事などの自然災害が、これもまた、地球規模で頻発しております。

その原因はすべて、相変わらず人間が神様に背を向けて自分の欲望を満たすことだけしか考えないような生き方をしていることに基づいているのであります。

では、神様は、このような罪に汚れた人間を滅ぼされるために、再びノアの時と同じような大洪水を起こされるのでありましょうか？このたいへんに気になる疑問に対して、聖書は次のように記しております。

第二ペテロ
3:3 まず第一に、次のことを知っておきなさい。終わり（‥‥これは世界の終わりのことですが‥‥）の日に、あざける者どもがやって来てあざけり、自分たちの欲望に従って生活し、
3:4 次のように言うでしょう。「キリストの来臨の約束（‥‥これは罪と悪にまみれた世界を滅ぼすために、御子イエス様が再び来られるというイエス様のお約束のことですが‥‥）はどこにあるのか。先祖たちが眠った時からこのかた、何事も創造の初めからのままではないか。」
3:5 こう言い張る彼らは、次のことを見落としています。すなわち、天は古い昔からあり、地は神のことばによって水から出て、水によって成った（‥‥これは創世記にそう記されております‥‥）のであって、
3:6 当時の世界（‥‥すなわち、ノアの時代の世界‥‥）は、その水により、洪水におおわれて滅びま

した。
3:7 しかし、今の天と地は、同じみことばによって、火に焼かれるためにとっておかれ、不敬虔な者どものさばきと滅びとの日まで、保たれているのです。

これによりまして、神様は、ノアの時代には、大洪水を起こされて、不敬虔な人間どもを滅ぼされましたけれども、今度は、水ではなくて、火によって滅ぼされるということがわかります。

世界が火によって滅ぼされるほどの大きな火というのは、いったいどうして起こるのでしょうか？私たちは、そのような火は、核爆発によって生じる他にはないということが、すぐに分かります。こんにち、いくつかの国は、核兵器を所有しており、その数はすでに地球を破壊するに十分なほどあります。そして今、ある国は、今にもその核兵器を使うぞと、本気で脅かしているのであります。

最近、アメリカのシンクタンクが、世界の終わりまでの時間を時計で示しました。それによりますと、東西の冷戦が終わった当時は 13 分であったのが、最近は、1 分 30 秒までに縮まったとのことであります。それほど、世の終わりは近いのです。

では、このような恐ろしい事態から逃れるには、どうしたらよいのでしょう？シェルターなどではとうてい、生き延びられません。もし、今の時代にも、ノアの箱舟のような立派な避けどころがあれば、手遅れにならないうちに入りたいと、誰でも思うのではないでしょうか？

しかし、神様は、きよく正しく厳しいお方であるとともに、愛と哀れみに満ちたお方であります。神様は、ノアの箱舟に代わる、もっともっとすばらしい救いの船を既に提供してくださっていたのであります。その船こそ、私たち人間を滅びから救い出してくださるために、神様が救い主として、この世にお遣わしになった神の御子、イエス様であります。

では、この船に入るには、どうしたらよいのでしょうか？もう一度、ノアの場合を考えてみましょう。ノアが箱舟に入ることができたのは、神様から正しいと認められたからでありました。ということは、私たちも、神様から正しいと認められればいいのであります。

では、私たちが神様から正しいと認められるには、どうしたら良いのでありましょうか？『これからは真面目に、きよく正しく生活します』と神様に誓えば、神様は認めてくださるのでしょうか？あるいは、一生懸命、社会奉仕や慈善活動をして、神様に認めていただくことでありましょうか？それでも、駄目なのであります。

人間の心の中まで見抜かれる神様は、私たちの心に、きよい生き方をしたとか、良い行いをしたとかという、そのような誇りやおごり、高ぶりが少しでもあれば、いくら努力をしても、神様は正しいとお認めにはなりません。

ではどうしたらいいのでしょうか？これに関して、イエス様は有名な例えをお話しになりました。

ルカ
18:9 自分を義人だと自任し、他の人々を見下している者たちに対しては、イエスはこのようなたとえを話された。
18:10「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりはパリサイ人で、もうひとりは取税人であった。

パリサイ人と申しますのは、ユダヤ教の一派で、神様の戒めを正しく守っていると自負しておりますけれども、実際にはそうではなくて、上べだけ守っているに過ぎない、そのような人々のことを指しております。

取税人と申しますのは、ユダヤ人でありながら、当時、支配国であったローマ帝国に収める税金を取り立てる集金人のことです。そして、彼らは余分に取り立てたお金を懐にする、そういう者が多いので、ユダヤ人から軽蔑されておりました。

ルカ
18:11 パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆすり者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。
18:12 私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』
18:13 ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』
18:14 あなたがたに言うが、この人が、（・・・・神様に・・・・）義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」

神様が正しいとお認めになるのは、この取税人のように心が砕かれ、神様に背き、欲望を満足させることに心を向けてきたという罪を認め、心から神様の前にへりくだるものであります。

私たちも、この取税人のように、自分が神様に背を向けて、自分の思いのままに生きてきたことを心から神様に謝罪した時に、神様は御子イエス様が私たちの罪を身代わりによって十字架にかかり、流されたきよい血潮によって、その罪をきよめてくださり、私たちを義、すなわち、正しいと認めてくださるのであります。

第二コリント
5:21 神は、罪を知らない方（・・・・すなわち、御子イエス様を・・・・）を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方にあって、神の義となるためです。

イエス様という救いの船に入れていただくために、どうしたらよいかは、以上ではっきりしました。では、いつ神様に謝ればいいのでありましょう？というのは、神様に謝る前に、自分にはまだやりたいことがあるから、それが終わってから謝ってもいいのではないかというふうに考える人がいるからであります。

しかし、その人は、いつイエス様が救いの船の扉を閉ざ

されるのかを知っていないのです。先ほどの聖書の箇所に、『それから主は彼のうしろ後ろの戸を閉ざされた』とありました。

ノアたちが箱舟に入った後、箱舟の戸はノアが中から閉めたのではなかったんですね。神様の手で外から、箱船の外から神様がお閉めになったんです。一度、神様によって閉められた戸はもう決して、開かれることはなく、いくら外から叫んで、『入れてください』と言っても入ることはできません。それと同様に、イエス様も時が来れば、救いの扉をご自分で閉ざされます。一度、締められた扉は、決して開かれません。

では、その時は、いつなんでしょうか？それは、先ほどお話ししたイエス様の再びおいでになる時、すなわち、ご再臨の時であります。

イエス様は、二千年前には神様に背き、離れた人間の罪をあがなう十字架の御業を成し遂げるために、この世においでになりました。けれども、今度は、暴虐と悪に満ちたこの世界を火によって滅ぼすためにおいでになります。

しかし、その直前に、イエス様はご自分が義と認められた人々、すなわち、正しいと認められた人々を、天の御国に携え上げてくださるために救いの運び手となって迎えに来てくださるのであります。イエス様は恐ろしい永遠の滅びから一人でも多くの人を救おうと、愛と忍耐をもって、箱舟の扉を閉める時を伸ばしておられるのであります。しかし、それにも限度があります。

世界の終わりの日は、間近に迫ってております。コリント人への第二の手紙の６章２節に、『確かに、今は恵みの時、今は救いの日です』とあるその恵みの時、救いの日である今、この集会の中に、自分もイエス様の救いの国に入れて欲しいと心から思う方がおられたならば、手遅れにならないうちに、あの取税人のように、自分が神様に背を向けて生きてきたことを、素直にイエス様に打ち明け、『助けてください、救ってください』とお願いしましょう。

イエス様は喜んで、ご自分の流されたきよい血潮であなたの罪を洗いきよめ、あなたを正しいと認めてくださり、救いの船に入るようにしてくださいます。

また、先に神様に義と認めていただいた者には、世の終わりが近いことを感じながらも、どうしてよいかわからず、恐れと不安の日々を送っている親族、友人、知人に、イエス様の大いなる恵みの福音を伝える使命が与えられていることを強く覚えて、これらの人々の救いを、心を尽くして祈らなければなりません。

どうも、ありがとうございました。

キリストのみからだなる町田集会

2024 年 1 月 7 日、町田福音集会
重田定義

エペソ人への手紙
4:16 キリストによって、からだ全体は、一つ一つの部分がその力量にふさわしく働く力により、また、備えられたあらゆる結び目によって、しっかりと組み合わされ、結び合わされ、成長して、愛のうちに建てられるのです。

どうもありがとうございます。新しい年を迎えました。今年も、よろしくお願いいたます。

昨年の十月の町田のよろこびの集いで、私は、ノアの箱舟というのはイエス様という箱舟であるというお話をさせていただきました。そしてまた、イエス様という箱舟は、イエス様の御体なる教会であると言ってもよいと思います。

そこで、今日はまず、キリストのみからだなる教会についてご一緒に学び、その後で、町田集会が、主のみからだなる教会であることをご一緒に考えてみたいと思います。

聖書には、先ほど読んでいただいた引用箇所の他にも、教会はかしらがキリストであり、信者はそのからだであるという箇所がいくつかございます。

ローマ
12:4 一つのからだには多くの器官があって、すべての器官が同じ働きはしないのと同じように、
12:5 大ぜいいる私たちも、キリストにあって一つのからだであり、ひとりひとり互いに器官なのです。

コロサイ人への手紙
1:18 また、御子はそのからだである教会のかしらです。

そして、さらに、このキリストのみからだなる教会についてパウロは、第一コリントで、詳しく解き明かしをしております。少し長くなりますけれども、全部、お読みいたします。

第一コリント
12:14 ・・・・からだはただ一つの器官ではなく、多くの器官から成っています。
12:15 たとい、足が、「私は手ではないから、からだに属さない。」と言ったところで、そんなことでからだに属さなくなるわけではありません。
12:16 たとい、耳が、「私は目ではないから、からだに属さない。」と言ったところで、そんなことでからだに属さなくなるわけではありません。
12:17 もし、からだ全体が目であったら、どこで聞くのでしょう。・・・・
12:18 しかしこのとおり、神はみこころに従って、からだの中にそれぞれの器官を備えてくださったのです。
12:19 もし、全部がただ一つの器官であったら、からだはいったいどこにあるのでしょう。
12:20 しかしこういうわけで、器官は多くありますが、からだは一つなのです。
12:21 そこで、目が手に向かって、「私はあなたを必要としない。」と言うことはできないし、頭が足に向かって、「私はあなたを必要としない。」と言うこともできません。
12:22 それどころか、からだの中で比較的に弱いと見られる器官が、かえってなくてはならないものなのです。
12:23 また、私たちは、からだの中で比較的に尊くないとみなす器官を、ことさらに尊びます。こうして、私たちの見ばえのしない器官は、ことさらに良いかっこうになりますが、
12:24 かっこうの良い器官にはその必要がありません。しかし神は、劣ったところをことさらに尊んで、からだをこのように調和させてくださったのです。
12:25 それは、からだの中に分裂がなく、各部分が互いにいたわり合うためです。
12:26 もし一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、もし一つの部分が尊ばれれば、すべての部分がともに喜ぶのです。
12:27 あなたがたはキリストのからだであって、ひとりひとりは各器官なのです。

すばらしい置き明かしであります。

約二千年前に、まだ医学が未発達の時代に、このように人体の機能を正確に把握し、それをキリストのみからだなる教会に結びつけたというパウロのこの解き明かしは、まさにすばらしく、御霊の導きによるものとしか考えられません。

しかしながら、現実の世界を見ますと、このような教会は、決して多くはないどころか、むしろ、わずかしかないと言ってもよいでありましょう。どうしてでしょうか？これからその理由について考えてみたいと思います。

その最大の理由の一つは、御霊の働きのない信者にあります。御霊とは何でしょう？イエス様はおっしゃいました。

ヨハネ
14:16 わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。
14:17 その方は、真理の御霊です。

そして、イエス様は、この御霊の働きについて、次のように教えました。

ヨハネ
14:26 ・・・・助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。

このように御霊は、私たち信者が信仰の歩みを進めるために、なくてはならないものなのであります。そして、またパウロは、その御霊が、私たち信者の体を住まいとして

くださると、次のように言っております。

第一コリント
6:19 あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。

しかし、実際には、御霊が住んでいても、信者の肉が御霊の働きを阻止している信者、いや、もっとひどいのは、御霊を締め出している信者がいることであります。御霊が働けない、あるいは、御霊を締め出している――そのような信者は、神の義と人間の義、神の愛と人間の愛の違いがわからず、それを取り違えてしまう危険に陥りやすいのであります。その良い例を、ひとつ挙げましょう。

マタイ
16:21 その時から、イエス・キリストは、ご自分がエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、そして三日目によみがえらなければならないことを弟子たちに示し始められた。
16:22 するとペテロは、イエスを引き寄せて、いさめ始めた。「主よ。神の御恵みがありますように。そんなことが、あなたに起こるはずはありません。」
16:23 しかし、イエスは振り向いて、ペテロに言われた。「下がれ。サタン。あなたはわたしの邪魔をするものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」

人間の愛は、肉的であり、自己中心的であり、生ぬるいものでありますけれども、神様の愛は、霊的であり、自己犠牲的であり、また、厳しいものであります。その神様の愛の厳しさについて、ヘブル人への手紙には、次のように記されております。

ヘブル
12:5 ・・・・あなたがたに向かって子どもに対するように語られたこの勧めを忘れています。「わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。
12:6 主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。」
12:7 訓練と思って耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです。

神様は、私たち信者を子として愛してくださり、信者を御心にかなうように成長させようと、愛の鞭を加えられるのです。

未信者は、自己中心的な肉的な愛しか知らない――これは当然のことでありますけれども、御霊の導きを失った信者もまた、未信者のように肉的なことしか考えられない。そのために、信者のあいだで争いが起こったり、また、教会が分裂するという危険すら起こり得るのであります。初代教会でも、そのようなことが起こり、パウロは、次のように信者を戒めております。

第一コリント
3:1 さて、兄弟たちよ。私は、あなたがたに向かって、御霊に属する人に対するようには話すことができないで、肉に属する人、キリストにある幼子に対するように話しました。

3:3 あなたがたは、まだ肉に属しているからです。あなたがたの間にねたみや争いがあることからすれば、あなたがたは肉に属しているのではありませんか。そして、ただの人(・・・・これは未信者をさしています・・・・)のように歩んでいるのではありませんか。
3:4 ある人が、「私はパウロにつく。」と言えば、別の人は、「私はアポロに。」と言う。そういうことでは、あなたがたは、ただの人たちではありませんか。

このようにパウロは、コリントの教会の信者を戒めております。

もうひとつ大切なことがあります。それは、御言葉は、御霊に裏付けされていなければならない、すなわち、御霊の保証が必要だということであります。なぜならば、サタンでさえも御言葉を使ってイエス様を誘惑したように、信者は自分の肉の考えや行いを正当化するために、都合の良い御言葉を選ぶという危険があるからであります。

イエス様は、ご自分のきよい血潮で、私たちの罪に汚れた心を洗い清めてくださいました。しかし、その清められた心に、聖霊が宿っていないと、再び、悪霊が入り込む恐れがあります。

ルカ
11:24 汚れた霊が人から出て行って、水のない所をさまよいながら、休み場を捜します。一つも見つからないので、『出て来た自分の家に帰ろう。』と言います。
11:25 帰って見ると、家は、掃除をしてきちんとかたづいていました。
11:26 そこで、出かけて行って、自分よりも悪いほかの霊を七つ連れて来て、みなはいり込んでそこに住みつくのです。そうなると、その人の後の状態は、初めよりもさらに悪くなります。」

ですから、私たちは常に、私たちの内に宿された御霊に満たされているようにと祈る必要があります。

さて、これまで主イエス様の御体なる教会について、ご一緒に学んでまいりました。

世界には数えきれないほどの多くの教会があります。しかし、前に申しましたように、パウロの言うような主のみからだなる教会の数は極めて少ないと言わざるを得ません。それは、多くの教会がかたちとしてはイエス様を頭(かしら)としてはいても、それは飾り物にすぎず、実際には、牧師や司祭といった人間が頭(かしら)となって、教会を支配しているからであります。そこでは、霊的な愛ではなく、人間的な愛が語られるだけであります。

ここで主題に掲げました、私たちの集う町田集会はどうでありましょうか？主のみからだなる教会と言って良いでありましょうか？答えは、然りであります。その理由は、数々あるとは思いますけれども、今日は三つだけあげます。

ひとつは、町田集会の成り立ちとその変遷であります。町田の集会は、ゼロから――無からスタートしました。そして、これまで三度も、その居場所を失うという危機に陥りました。しかし、その度に、私たちの願いをはるかに超えたすばらしい集会場が与えられております。まさに、これは奇蹟としか言いようがありません。主が、私たちが御霊にあってひとつとなって祈る、その祈りをよしとされ、町田集会をご自分の体として私たちに与えてくださったと、私たちは考えざるを得ません。

二つ目は、町田集会では、集会が立て上げられた最初から今日（こんにち）まで、賛美の歌――日々の歌、212番が福音集会の初めに歌われているということであります。日々の歌、212番の歌詞こそ、主のみからだなる教会を表すものであります。かつて、吉祥寺集会でも、火曜日の学びの冒頭で毎回、この賛美の歌がリクエストされておりました。しかし、ベック兄が召された後、いつとはなしにリクエストされなくなってしまったのは、本当に残念であります。町田集会の私たちが、この賛美の歌を旗印として高く掲げていること、これこそが主なる教会の印（しるし）ではないでありましょうか？

三つ目。町田集会では毎年、町田よろこびの集いと言う伝道集会を開いております。昨年の十月にも開かれ、メッセージや証し、賛美の演奏等々により、多くの未信者に主の愛と恵みに満ちた福音を伝えることができ、主のご栄光を拝することができました。

それは、集会の兄弟姉妹がたが、御霊にあって、一つになって、祈りながら準備を進め、当日も多くの兄弟姉妹が、目立つことのない裏方として、それぞれに与えられた役割を、黙々として果たされたからであります。これこそ、主のみからだなる教会の姿、パウロが言っております主のみからだなる教会の姿ではないでしょうか？

しかし、このような主のみからだなる町田集会にも――というよりも、主のみからだなる集会だからこそ、サタンの攻撃を受け、残念なことに、サタンに惑わされた何人かの兄弟姉妹は、集会から出て行かれました。

世の終わりがいよいよ迫っている今年、私たちは愛する町田集会が、さらに主のみからだなる教会として、この闇の世に主の栄光を輝かすことができるように、私たち一人一人が、主のみからだなる部分部分に組み入れられ、結び合わされている器官であることを強く自覚し、感謝し、御霊にあって強められ、心をひとつにして祈り合い、助け合い、支え合っていこうではありませんか。

ありがとうございました。

まことに、まことに、あなたがたに告げます

2024 年 4 月 7 日、町田集会
重田定義

> ヨハネの福音書
> 1:51 そして言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。天が開けて、神の御使いたちが人の子の上を上り下りするのを、あなたがたはいまに見ます。」

今日は、イエス様がおっしゃいました、「まことに、まことに、あなたがたに告げます」というみ言葉について、ご一緒に考えたいと思います。

イエス様は、ヨハネの福音書の中で、弟子たちやイエス様の話を聞きに来た群衆に向かって、『まことに、まことに、あなたがたに告げます』と、何度もおっしゃっております。これは、実はヨハネの福音書だけに、このみ言葉が示されている。それがどういうわけか、私には分かりません。教えていただければ感謝ですが、このヨハネの福音書の中で告げられているこの「まことに、まことに、あなたがたに告げます」とおっしゃったそのイエス様、これは、どうしてそんなことを、何回もイエス様はおっしゃったんだろうかと考えた時に、イエス様が、これは大切なことを私たちに告げておられるのではないかと、イエス様が、『わたしはこれからあなたがたに大切なことを話すから、よく聞きなさい』とおっしゃっているのではないかということに今、気づかされるのであります。

では、イエス様はどんな大切なことを、私たちに告げようと思われたのでありましょうか？ヨハネの福音書を読んでいきますと、その大切なことは、次の三つではないかと示されたのであります。

ひとつは、イエスご自身について、ご自分が誰で、何の目的でこの世に来られたのかを告げ知らせるため。二つ目は、すべての人間について、罪とは何か、霊的な死とは何か、神のさばきを受けないためにはどうしたらよいかなどについて告げ知らせるため。そして、三つ目は、イエス様を信じた信者たちの使命、役割について、告げ知らせるためであると示されました。これから、その一つ一つについて考えていきたいと思います。

まず一つ目は、イエス様ご自身についてです。イエス様は、ご自分が神と人との唯一の仲介者であることを、私たちに告げ知らせておられます。それが冒頭の御言葉であります。

> ヨハネの福音書
> 1:51 そして言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。天が開けて、神の御使いたちが人の子の上を上り下りするのを、あなたがたはいまに見ます。」

イエス様は、神の御子でありながら、人の子としてこの世にお生まれになったことをお示しになるために、よくご自分のことを、『人の子』とをおっしゃいます。そのイエス様の上を、天使たちが上ったり下ったりするとは、いったいどういうことなのでありましょうか？

イスラエルの族長のヤコブは、イエス様がお生まれになる約二千年前に、この御言葉と同じような夢を見ております。

> 創世記
> 28:10 ヤコブはベエル・シェバを立って、カランへと旅立った。
> 28:11 ある所に着いたとき、ちょうど日が沈んだので、そこで一夜を明かすことにした。彼はその所の石の一つを取り、それを枕にして、その場所で横になった。
> 28:12 そのうちに、彼は夢を見た。見よ。一つのはしごが地に向けて立てられている。その頂は天に届き、見よ、神の使いたちが、そのはしごを上り下りしている。

天から降ろされ、地に立ったはしごとは、天からこの世においでになったイエス様を意味しております。神様は、イエス様を天と地とを結ぶはしごとして、この世におつかわしになることを、ヤコブの夢を通して予告されたのであります。

そして、今度は、イエス様ご自身が、先ほど読んでいただいたこの御言葉にありますように、神の住まわれる聖い天と、罪に穢れた地を結ぶかけ橋となって、神様と人間とのあいだに立ってとりなしをしてくださる唯一のお方であることを、このように私たちに告げ知らせてくださったのであります。

次に、イエス様は、ご自分の命の永遠性について、証しをしておられます。

> ヨハネ
> 8:58 ・・・・「まことに、まことに、あなたがたに告げます。アブラハムが生まれる前から、わたしはいるのです。」

アブラハムは、イエス様がお生まれになる二千年前に生きていた人であります。しかし、イエス様は、そのアブラハ ムが生まれる前からいるとおおせになっているのです。これは、ご自身が限りである命に生きる人間ではなくて、永遠の命に生きておられる神様であると言っておられるのであります。

ヨハネは、この永遠の命の神が、人としてお出でになったイエス様であるということを、ヨハネの第一の手紙の一章の一節から二節で証しをして おります。

> 第一ヨハネ
> 1:1 初めからあったもの、私たちが聞いたもの、目で見たもの、じっと見、また手でさわったもの、すなわち、いのちのことばについて、
> 1:2 ――このいのちが現われ、私たちはそれを見たので、そのあかしをし、あなたがたにこの永遠のいのちを伝えます。すなわち、御父とともにあって、私たちに現わされた永遠のいのちです。――

次に、イエス様は、ご自分がこの世に来た使命を、天か

ら下ってきたパンに例えて、告げ知らせてくださっています。

ヨハネ
6:32 ・・・・「まことに、まことに、あなたがたに告げます。モーセはあなたがたに天からのパンを与えたのではありません。しかし、わたしの父は、あなたがたに天からまことのパンをお与えになります。
6:33 というのは、神のパンは、天から下って来て、世にいのちを与えるものだからです。」

そして、イエス様は、そのいのちのパンは、ご自分であるとおっしゃいました。

ヨハネ
6:48 わたしはいのちのパンです。
6:49 あなたがたの先祖は荒野でマナを食べたが、死にました。
6:50 しかし、これは天から下って来たパンで、それを食べると死ぬことがないのです。
6:51 わたしは、天から下って来た生けるパンです。だれでもこのパンを食べるなら、永遠に生きます。・・・・

モーセは、イスラエルの民を率いてカナンに向かう旅の途中で、荒れ野で飢えた時に、神様に祈り、天からマナというパンに似た食べ物を降らせていただいて、飢えをしのぎました。しかし、イエス様は、ここで食べても一時的に飢えを満たすパンではなくて、人間に永遠の命を与えてくださるために、神のパンとなって天から下ってきたと、ご自分の使命を天からのパンに例えて告げ知らせてくださったのであります。

次に、イエス様がご自分で死ななければならない理由について、私たちに告げ知らせた箇所を見てみたいと思います。

ヨハネ
12:24 まことに、まことに、あなたがたに告げます。一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのままです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。

ここでイエス様は、ご自分を一粒の麦に例え、ご自分の死がすべての人の罪をあがなうためであって、それによって数え切れぬほどの多くの人が滅びることなく実を結ぶ、すなわち、新しい命に生きるために必要であるということを、このように私たちに告げ知らせてくださったのであります。

以上のように、イエス様はご自分が誰であるか、何の目的でこの世に来られたのか、そして、何のために死ななければならないのかという大切なことを私たちに告げ知らせようと、『まことに、まことに』と繰り返しておっしゃったのであります。

二番目は、私たち人間すべてに関わることであります。

まずイエス様が、人間はすべて罪の奴隷であることを私たちに告げさせてくださったその箇所を見てみたいと思います。

ヨハネ
8:34 ・・・・まことに、まことに、あなたがたに告げます。罪を行なっている者はみな、罪の奴隷です。

私たち人間は、誰でも自分が罪の奴隷とは思ってもいないでしょう。しかし、イエス様が罪を行っているものとは、神様から心が離れ、自分の欲を満たすことを第一として、自分中心の生き方をしている人のことであって、すべての人間は、そのような生き方をしているのであります。このような生き方をしている人間のことを、イエス様は、罪に支配されている、罪に仕えている、罪の奴隷であるとおっしゃっているのであります。

次に、イエス様は、人間は罪を持ったままでは神の国に入ることはできない。入るために、新しく生まれなければならないということを、私たちに告げ知らせてくださいました。

ヨハネ
3:3 ・・・・「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」

『新しく生まれる』とは、肉体のことではなくて、罪に汚れて死んだようになっている霊のことであります。霊が新しく生まれることは、人間の力や努力では決してできません。神の御霊の注ぎを受けて、御霊によって罪に汚れて死んだようになっている人間の霊が洗い清められて初めて、生き返ることができる、そのことをイエス様は、私たちに告げ知らせてくださったのであります。

パウロはこれについて、テトスにあてた手紙の三章の五節六節で、次のように言っております。

テトス
3:5 神は、私たちが行なった義のわざによってではなく、ご自分のあわれみのゆえに、聖霊による、新生と更新との洗いをもって私たちを救ってくださいました。
3:6 神は、この聖霊を、私たちの救い主なるイエス・キリストによって、私たちに豊かに注いでくださったのです。

神の御国に入ることを許されるためには、私たちの霊が御霊によって新しく生まれ変わらなければならないと、イエス様は告げ知らせてくださったのであります。

さらにイエス様は、人間が罪から救われるためにはどうしたらいいか、その方法を私たちに告げ知らせてくださいました。

ヨハネ
5:24 まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方（・・・・すなわち父なる神様・・・・）を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。

5:25 まことに、まことに、あなたがたに告げます。死人が神の子（・・・・すなわち、イエス様・・・・）の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです。

イエス様が言われた死人とは、罪のために霊が死んだ人のことで、霊の死とは、神様の仰せに従うという本来の霊の働きが、神様に対する背きの罪によって失われて、何が正しいか、何が悪かを判断することができなくなった霊、正しく働かなくなり、死んだようになった霊のことであります。

このような霊的な死人を、聖書で罪人と言います。そして、人間が罪を持ったままで死ぬと、死後、神様の裁きによって永遠の滅びに至ることになるのです。しかし、神様はそのような人間を哀れんでくださり、恐ろしい罪から救い出してくださるために、御子、イエス様をこの世に遣わしてくださったのであります。

イエス様は、罪人が罪から救われるには、わたしの言葉を聞いて、父なる神様を信じることだとおっしゃいました。わたしの言葉とは、神様から離れて自分勝手に生きていた罪を神様に心から謝るものは神様が赦してくださるということであります。そして、そのイエス様の言葉を素直に信じれば、その瞬間に、死んでいた霊は生き返り、また、その瞬間に、永遠の命が与えられる、そして、今がその時である、そのことを、このようにイエス様は、私たちに告げ知らせてくださったのであります。

以上のように、イエス様はすべての人間に対して、生まれながらの人間は、すべて罪の奴隷であり、新しく生まれなければ神の御国に入れないこと、それにはイエス様を信じて罪が赦されることが必要であるという大切なことを私たちに告げ知らせるために、『まことにまことに』と、繰り返しておっしゃっているのであります。

三番目は、イエス様を信じたもの、すなわち、キリスト者に関することであります。イエス様はご自分の命によって罪からあがない出したものをご自分に属するものとして、ご自分の弟子として、伝道者として、複音伝道に用いようと伺いになっておられます。そして、そのために大切な心構えをお示しになりました。

ヨハネ
13:16 まことに、まことに、あなたがたに告げます。しもべはその主人にまさらず、遣わされた者は遣わした者にまさるものではありません。
13:17 あなたがたがこれらのことを知っているのなら、それを行なうときに、あなたがたは祝福されるのです。

イエス様から福音を述べ伝える使命を与えられ、この世に遣わされた信者が、とくに心しなければならないことは、イエス様のしもべとしての心からへりくだり、謙遜ということであります。

イエス様は仕えられる立場の方であられるのに、仕えるものとして、この世に来てくださいました。イエス様は弟子たちの足をお洗いになり、ヨハネの福音書の 3 章の 14 節から 15 節で、こうおっしゃいました。

ヨハネ
13:14 ・・・・主であり師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのですから、あなたがたもまた互いに足を洗い合うべきです。
13:15 わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするように、わたしはあなたがたに模範を示したのです。

イエス様は、信じる私たちにイエス様のしもべとして、常にイエス様と人とに仕える、へりくだった謙虚な姿勢で福音を述べ伝えることが大切であるということを、告げ知らせてくださったのであります。また、イエス様はご自分の弟子たちによって、主の救いの福音が世界中に述べ伝えられるようになることを信じる私たち告げ知らせておられます。

ヨハネ
14:12 まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしを信じる者は、わたしの行なうわざを行ない、またそれよりもさらに大きなわざを行ないます。わたしが父のもとに行くからです。

イエス様が福音を述べ伝え始めてから、十字架におかかりになるまでの三年の間に、イエス様が回られた地域はガリラ、サマリアやユダヤなどの地方でありました。

そのために、イエス様にお会いすることができた人、イエス様から話を聞いた人の数は、限られざるをえませんでした。けれども、復活されたイエス様が父なる神のもとに帰られた後、イエス様の御霊を受けた弟子たちは、御霊から力をいただいたいただいて、全世界に散って、イエス様の福音を伝え、その結果、イエス様を信じる人々は世界中に増え広がりました。

イエス様が、わたしを信じる者はわたしの行うわざを行い、また、それよりもさらに大きなわざを行いますと預言されたのは、実はこのことであります。そして、この福音伝道は、今日までずっと信じるものに受け継がれ、信じるるものの内に働く御霊によって、今も世界の至るところで、イエス様を信じて救われる人々が増え続けているのであります。

以上、『まことに、まことに、あなた方に告げます』で始まる多くの御言葉を、三つに分けて考えてまいりました。イエス様は、どの御言葉も、私たち人間にとって大切な真理であることを、このように繰り返し繰り返し、私たちに告げ知らせてくださったのであります。なんという深い主の御心でありましょうか？私たちは、イエス様の大きなご愛に心から感謝し、御心を行う歩みができますように、御霊の導きを心から祈りたいと思います。

ありがとうございました。

主に対するゆるがない信頼

2024 年 5 月 19 日、吉祥寺集会
重田定義

詩篇
57:7 神よ。私の心はゆるぎません。私の心はゆるぎません。私は歌い、ほめ歌を歌いましょう。

皆様、ご無沙汰しております。今日は、半年ぶりに吉祥寺集会の兄弟姉妹とともに、ご一緒に礼拝をおささげできたことを、本当に感謝しております。

ご覧のように、私は、今、酸素を吸入しながら、お話をしております。静かにしている時は、酸素がなくても、とくにどうということはないんですけれども、何かする時に、酸素がありません――吸入しませんと、途端に息苦しくなってしまいます。しかし、私は、この酸素というのは、イエス様の愛に例えることができるのではないかなと今、ふと考えたんです。イエス様の愛は、普段、私たちに注がれてはいるんですけども、あまり気にしないでも、すんでおりますけども、いざという時に、イエス様の愛がないと、途端に、私たち、とくにイエス様を信じるものは、呼吸困難に陥ってしまうのではないか？そのようなことを、今ちょっと考えました。

これは余談ですけれども、これから、今、公人兄弟に読んでいただきました詩篇の 57 篇の 7 節から、ご一緒にイエス様の御心を考えてみたいと思います。

この箇所、57 篇 7 節のとくに前半、これは主なる神様に対するダビデの不動の信頼を表す言葉であります。『私の心はゆるぎません。私の心はゆるぎません』と、二度も繰り返している言葉の中に、主なる神様に対する彼の信頼が、いかに深いかをうかがい知ることができます。

この時、ダビデはサウロ王から命を狙われ、その追跡の手を逃れて、洞窟に潜んでおりました。命の危険にさらされている時に、どうしてこのように言えるのでありましょうか？

ダビデの神様に対するこの揺るぎない信頼は、いったい、どこから生じたのでありましょうか？それは、ダビデが主なる神様との人格的、霊的な交わりを通し、自分がどんなに主に愛され、守られているかを知って、いかなる逆境にあっても、主に自分の全てをゆだねることこそが、最善の道であり、それこそ主の御心であると、確信できたからではないでしょうか。

主が、サウロの手からダビダを救い出された日に、彼は次のように、主を賛美しました。第二サムエルの 22 章からお読みいたします。

第二サムエル
22:2 ・・・・「主はわが巌、わがとりで、わが救い主、
22:3 わが身を避けるわが岩なる神。わが盾、わが救いの角、わがやぐら。私を暴虐から救う私の救い主、私の逃げ場。
22:4 ほめたたえられる方、この主を呼び求めると、私は、敵から救われる。
22:5 死の波は私を取り巻き、滅びの川は、私を恐れさせた。
22:6 よみの綱は私を取り囲み、死のわなは私に立ち向かった。
22:7 私は苦しみの中に主を呼び求め、わが神に叫んだ。主はその宮で私の声を聞かれ、私の叫びは、御耳に届いた。

22:17 主は、いと高き所から御手を伸べて私を捕え、私を大水から引き上げられた。

22:20 主は、私を広い所に連れ出し、私を助け出された。主が私を喜びとされたから。

22:47 主は生きておられる。ほむべきかな。わが岩。あがむべきかな。わが救いの岩なる神。

ダビデと主なる神様との交わりは、彼が羊飼いであった少年の時に遡ります。神様は、少年ダビデに目を留められ、御心にかなわぬサウル王を退け、ダビデを次の王として選ばれ、それから後、彼にさまざまな厳しい試練を与えて、訓練なさいました。

それは、ダビデをただ主にのみ、より頼む信仰の人にふさわしく成長させ、用いようという主の御心でありました。その試練の一つがサウル王の部下として連戦連勝して、民衆の人気を得たダビデを嫉妬したサウロ王に、命を狙われたことだったのでありました。

王になってからも、ダビデは何度となく、困難な状況に陥りましたが、そのような状況にあっても、彼の死に対する揺るがぬ信頼は、決して軽くなることはありませんでした。例えば、ダビデは自分の息子のアブシャロムからさえも、命を狙われましたけれども、その時に、彼は、主に次のように祈っております。

詩篇
3:1 主よ。なんと私の敵がふえてきたことでしょう。私に立ち向かう者が多くいます。
3:2 多くの者が私のたましいのことを言っています。「彼に神の救いはない。」と。
3:3 しかし、主よ。あなたは私の回りを囲む盾、私の栄光、そして私のかしらを高く上げてくださる方です。
3:4 私は声をあげて、主に呼ばわる。すると、聖なる山から私に答えてくださる。
3:5 私は身を横たえて、眠る。私はまた目をさます。主がささえてくださるから。
3:6 私を取り囲んでいる幾万の民をも私は恐れない。

また、ダビデがペリシテ人に、捕らえられた時にも、次のように、主に信頼して動じませんでした。

詩篇
56:1 神よ。私をあわれんでください。人が私を踏みつけ、一日中、戦って、私をしいたげます。
56:2 私の敵は、一日中、私を踏みつけています。誇らしげに私に戦いをいどんでいる者が、多くいます。
56:3 恐れのある日に、私は、あなたに信頼します。

56:4 神にあって、私はみことばを、ほめたたえます。私は神に信頼し、何も恐れません。肉なる者が、私に何をなしえましょう。

しかし、主なる神様は、ダビデのみならず、ご自分がお選びになったものを、試練という方法で訓練してくださいます。それは、ご自分のしもべとして、また、子として用いるために、ご自分にのみより頼むように、その者の信仰を成長させようという主の御心なのであります。

ヘブル
12:7 訓練と思って耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです。父が懲らしめることをしない子がいるでしょうか。

12:11 すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。

しかしながら、私たちを愛してくださるがゆえに、主は訓練と同時に、それから逃れる道をも備えてくださっておられます。

第一コリント
10:13 ・・・・神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。

主は、ご自分が選ばれた者に対して、常に最終的な責任を負ってくださいます。ですから、どんな困難に直面しても恐れるということはないのであります。

ローマ
8:31 ・・・・神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。

私たち信者は、主の一方的なあわれみによって、救いの対象に選ばれました。そして、主は、その私たちに対して、ご自分に対するゆるぎない信頼を求めておられます。それは、救われた私たちが主のしもべとして、主の子供として用いられるために、ぜひとも必要なことであるからであります。

では、主に対するゆるぎない信頼の根拠となるものは、いったい何でありましょうか？

それは、次の事実によっております。第一は、キリストが私たちのために、十字架の上で尊い血を流し、私たちの罪をあがなってくださったという事実であります。

神の御子であられながら、人としてこの世に生まれてくださり、十字架の上できよい血を流し、尊い命を捨ててまでして、神様に逆らい自分勝手に生きていた私たちを愛してくださり、そのままでは滅びしかない私たちの罪を負ってくださったいうというその事実こそ、私たちの主に対する揺るがぬ信頼の根拠であります。

第一ペテロ
2:22 キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。
2:23 ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。
2:24 そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために(・・・・すなわち、義なる神様に従うために・・・・)生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。

また、主に対する揺るぎない信頼の根拠となるものは、主イエス・キリストがよみがえられ、信じる私たちにご自分のよみがえりの命を与えてくださったという事実によってであります。

ヨハネ
11:25 ・・・・「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。
11:26 また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことがありません。・・・・」

第一コリント
15:17 そして、もしキリストがよみがえらなかったのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もなお、自分の罪の中にいるのです。
15:18 そうだったら、キリストにあって眠った者たちは、滅んでしまったのです。
15:19 もし、私たちがこの世にあってキリストに単なる希望を置いているだけなら、私たちは、すべての人の中で一番哀れな者です。
15:20 しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。

このようにあります。また、主に対する揺るぎない信頼の根拠となるものは、主イエス・キリストが、私たちを決してお見捨てにならないという主のお約束によってであります。第二コリント四章でパウロはこう言っております。

第二コリント
4:8 私たちは、四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。途方にくれていますが、行きづまることはありません。
4:9 迫害されていますが、見捨てられることはありません。倒されますが、滅びません。

このように言っており、そして、ヘブル人への手紙の 13 章、には、次のようにあります。

ヘブル
13:5 ・・・・主ご自身がこう言われるのです。「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。」
13:6 そこで、私たちは確信に満ちてこう言います。「主は私の助け手です。私は恐れません。人間が、私に対して何ができましょう。」

最後に、神に対するゆるぎない信頼の根拠となるものは、

信じる者に宿ってくださっている御霊が、これまでに述べてきた数々の主の約束、全てを保証してくださるという事実によってであります。第二コリントの一章でパウロは次のように言っております。

第二コリント
1:20 神の約束はことごとく、この方（・・・・すなわちイエスキリスト・・・・）において「しかり。」となりました。それで私たちは、この方によって「アーメン。」と言い、神に栄光を帰するのです。
1:21 私たちをあなたがたといっしょにキリストのうちに堅く保ち、私たちに油（・・・・すなわち、聖霊・・・・）を注がれた方は神です。
1:22 神はまた、確認の印を私たちに押し、保証として、御霊を私たちの心に与えてくださいました。

今日の世界は、手のつけられないような大混乱に陥っております。今まで、安心、安全と信じて依存していたものがすべてガラガラと崩壊し、世界中の人々がこの先どうなるか、どう生きていけるのか、不安と恐怖におののき、おびえております。

目に見えるものがいかに堅固に見えても、それがどんなに脆いものか、そのようなものに依存して生きていることがいかに愚かなことであるかを、如実に示しているのが、今日の世界ではないでしょうか？

そして、このような嵐の荒れ狂う世界に生きている私たち信者も、ともすれば、この世の人々と同じように恐れたり、動いしたりしてしまいます。しかし、嵐の中にあっても、日々、私たちが主にゆるがぬ信頼を置いていれば、主という固い岩にしっかりと信仰の土台を据えてさえいれば、どんな嵐が吹き荒れようとも、決して倒れるようなことはありません。このことをイエス様は例えによって、私たちに約束してくださっております。

ルカ
6:47 わたしのもとに来て、わたしのことばを聞き、それを行なう人たち（・・・・それを行うというのは、主を信頼して従うということですが・・・・）がどんな人に似ているか、あなたがたに示しましょう。
6:48 その人は、地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を据えて、それから家を建てた人に似ています。洪水になり、川の水がその家に押し寄せたときも、しっかり建てられていたから、びくともしませんでした。
6:49 聞いても実行しない人（・・・・すなわち、主を信頼しない人・・・・）は、土台なしで地面に家を建てた人に似ています。川の水が押し寄せると、家はーぺんに倒れてしまい、そのこわれ方はひどいものとなりました。」

イエス様がおっしゃっているように、私たちはイエス様という固い岩の上に、深く土台を据えた信仰の家を建てたいものであります。

かつて、イエス様は弟子たちとともにガリラヤ湖を小船で渡っておられたときに、大暴風が起こり、船が沈みそうになったことがありました。弟子たちは、溺れ死ぬではないかと恐れおののきました。しかし、イエス様はそのような時にも、ぐっすり眠っておられたのです。弟子たちは、イエス様を起こし、『助けてください』と叫びました。目を覚まされたイエス様は弟子たちにおっしゃいました。『なぜ怖がるのか信仰のうすい者たちだ』と。

もし、弟子たちがイエス様に全き信頼を置いていれば、嵐の中でも安らかに眠っておられるイエス様を目の前にした時に、イザヤ書の 41 章 10 節に、

イザヤ
41:10 恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。

とありますように、イエス様が自分たちと同じ船におられるという安心、平安な心で、嵐も恐れることなく、揺れる小舟に身を任せることができたでありましょう。けれど、もし私たちが、弟子たちのように主に信頼しなければ、イエス様は共におられても、不安と恐れを覚えて、うろたえてしまうのであります。

今、世界中に吹き荒れている嵐は、聖書で予言されているとおり、世の終わりを示す前兆であり、それは、また、主のご再臨の間近い印でもあります。

この時にあって、私たち信者は、自分の上に何が起ころうとも、たとえ命の危険にさらされようとも、主に全き信頼を置いて、ダビデのように、『主よ、私の心はゆるぎません。私の心はゆるぎません』ということができる信仰に固く立って、主にある兄弟姉妹と心を一つにして、日々、ご再臨を待ち望みつつ、主を証しする信仰の歩みを続けることができるように、御霊のお導きと支えを心から祈る次第であります。

最後に、詩篇 16 篇のみ言葉をお読みして終わります。

詩篇
16:8 私はいつも、私の前に主を置いた。主が私の右におられるので、私はゆるぐことがない。
16:9 それゆえ、私の心は喜び、私のたましいは楽しんでいる。私の身もまた安らかに住まおう。

ありがとうございました。

上からの知恵

2024 年 7 月 7 日、町田福音集会
重田定義

> ヤコブの手紙
> 3:13 あなたがたのうちで、知恵のある、賢い人はだれでしょうか。その人は、その知恵にふさわしい柔和な行ないを、良い生き方によって示しなさい。
> 3:14 しかし、もしあなたがたの心の中に、苦いねたみと敵対心があるならば、誇ってはいけません。真理に逆らって偽ることになります。
> 3:15 そのような知恵は、上から来たものではなく、地に属し、肉に属し、悪霊に属するものです。
> 3:16 ねたみや敵対心のあるところには、秩序の乱れや、あらゆる邪悪な行ないがあるからです。
> 3:17 しかし、上からの知恵は、第一に純真であり、次に平和、寛容、温順であり、また、あわれみと良い実とに満ち、えこひいきがなく、見せかけのないものです。

それでは、これから少しご一緒に、上からの知恵ということで、考えていきたいと思います。

世間では、いろいろな難しい問題を適切に判断し、うまく処理する――そういう人のことを指して、あの人は知恵がある、賢いというふうに評価しております。あるいは、巧妙に立ち回って、自分の立場を有利にもっていくような人、いわゆる世渡りの上手な人のことも、一種の皮肉を込めて、あの人は賢いと言います。また、悪知恵と言われるような悪事を企んだり、人を陥れたりする知恵もあります。

けれども、今、読んでいただきましたみ言葉にある知恵というのは、今、挙げましたような人間の知恵とは、全く違うことに気がつきます。

そこで、今日は、この上から来る知恵について、さらに考えてみたいと思います。

聖書には、上からの知恵について、多くの記載があります。そのうちのいくつかを引用したいと思います。

ひとつ目。箴言の九章の十節。

> 箴言
> 9:10 主を恐れることは知恵の初め、聖なる方を知ることは悟りである。

という御言葉です。ここでは、主なる神様、すなわち、天地万物を創造され、それらを全て御手のうちに納めておられる主権者であり、そして、聖にして義なる生ける神を知ること、そして、その神様を恐れ敬うことこそが、知恵の始めであると言っております。

けれども、この神を知る知恵は、人間の知恵によってではなくて、上から来る、すなわち、神様から来る知恵によってのみ与えられるものであり、神様によって自我が砕かれ、霊の目が開かれて、初めて与えられるものなのであります。

旧約聖書のヨブ記の主人公、有名なヨブ、自分を義人と認めていたこのヨブは、神様から激しい試練を受けた結果、自我が砕かれ、自分の知恵がいかに愚かで傲慢なものか、そして、また神様の知恵が、いかに深く大きなものかを知りました。そして、次のように神様に悔い改めました。

> ヨブ記
> 42:2 あなたには、すべてができること、あなたは、どんな計画も成し遂げられることを、私は知りました。
>
> 42:5 私はあなたのうわさを耳で聞いていました。しかし、今、この目であなたを見ました。
> 42:6 それで私は自分をさげすみ、ちりと灰の中で悔い改めます。

このようにヨブは、自我が砕かれ、悔い改めた結果、上から来る、すなわち、神から来る知恵によって、義は神様から恵みとして与えられたものであるということを、知ることができたのであります。

また、神様は、人間の知恵によっては、ご自分を知ることはできないと、預言者イザヤにおっしゃっております。

> イザヤ書
> 6:9 ‥‥「行って、この民に言え。『聞き続けよ。だが悟るな。見続けよ。だが知るな。』
> 6:10 この民の心を肥え鈍らせ、その耳を遠くし、その目を堅く閉ざせ。自分の目で見、自分の耳で聞き、自分の心で悟り、立ち返って、いやされることのないために。」

これは読んだだけでは、神様はいったい何を仰せになってるのか、わかりにくい御言葉でありますけれども、これは、神の民としてお選びになったイスラエルの民が、ご自分から心が離れて、自分勝手に生きているのを嘆かれた神様が、イスラエルの民が人間の勝手な判断で、自分の知恵で、ご自分のところに戻ることをはっきり拒まれておるんですね。そして、彼らの自我が完全に砕かれて、心から悔い改めて、ご自分に立ち帰ることを願って、これを逆説的に今のような御言葉で言い表しておられるのであります。

二つ目。預言者イザヤは神の知恵は、やがて神の御座からこの世に人としておいでになる御子、神の御子、キリストによって表されるというふうに、次のように預言しております。

> イザヤ
> 11:1 エッサイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ。
> 11:2 その上に、主の霊がとどまる。それは知恵と悟りの霊、はかりごとと能力の霊、主を知る知識と主を恐れる霊である。

このみ言葉は、神の知恵が霊的なものであることを、はっきりと示しております。エッサイとは、ダビデの父であります。従いまして、このみ言葉はダビデの家系から造り

主、キリストが出ることを示唆しております。

まさに、神の知恵そのものであられるイエス様が、人の子となって、人の子として、上から、すなわち、神の御座からこの世においでになったのであります。

私たちキリスト者も、かつては、知恵といえば、この世的な人間の知恵しか知らないものでありました。しかしながら、上から、天から、救いの御手を差し伸べてくださった神様の大きな御愛と恵みによって、霊の目を開いていただいた結果、自分の知恵によっては決して知ることはできなかったイエス・キリストの十字架のあがないの御業が、他ならぬ自分の救いのためであったと信じ、救われたのであります。

これについてパウロは、、コリント人への手紙の中で次のように書いております。

> 第一コリント
> 1:18 十字架のことばは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちには、神の力です。
> 1:19 それは、こう書いてあるからです。「わたしは知恵ある者の知恵を滅ぼし、賢い者の賢さをむなしくする。」
> 1:20 知者はどこにいるのですか。学者はどこにいるのですか。この世の議論家はどこにいるのですか。神は、この世の知恵を愚かなものにされたではありませんか。
> 1:21 事実、この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです。それゆえ、神はみこころによって、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救おうと定められたのです。
> 1:22 ユダヤ人はしるしを要求し、ギリシヤ人は知恵を追求します。
> 1:23 しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えるのです。ユダヤ人にとってはつまずき、異邦人にとっては愚かでしょうが、
> 1:24 しかし、ユダヤ人であってもギリシヤ人であっても、召された者にとっては、キリストは神の力、神の知恵なのです。

パウロはここで、神の御子のイエス様が十字架にかかって死なれたのは、私たち人間の罪を身代わりに負ってくださるためであったというこのメッセージは、この世の知恵しか知らない人にとっては、どんなに愚かしく響くか、これは自分には、十分にわかっている。けれども、神様、この世の知恵しか受け入れようとしない人々にとっては、愚かに見えるこの十字架のみわざが、自分の罪のためであったと心に示され、心砕かれ、神の御前にへりくだる者を救ってくださる。

こうして、神様の恵みによって救われた者だけが、十字架のあがないの御業が、神の力そのものであることを確信することができるというふうに言っているのであります。

そして、彼は続けて、イエス・キリストは人々を救うために死なれたという福音について話すと、ユダヤ人は証拠を示せと言い、ユダヤ人以外の外国人は、そんなことは常識ではとても理解できないと馬鹿にするけれども、どの国の者であれ、すべて救いに導かれた人々にとっては、イエス・キリストご自身こそ、人々を救う神の知恵なのであるというふうに、はっきりとここで言い切っているのであります。

三つ目は、キリスト者には、神の知恵としての御霊が与えられているということであります。私たちキリスト者には、恵みによって、神の知恵そのものである御霊が宿ってくださいます。それは、キリスト者がこの世の知恵によってではなく、神の知恵によって生きることが必要だからであります。

パウロは、ローマ書の 8 章で、次のように言っております。

> ローマ
> 8:11 もしイエスを死者の中からよみがえらせた方の御霊が(・・・・すなわち、神様の御霊が・・・・)、あなたがたのうちに住んでおられるなら、キリスト・イエスを死者の中からよみがえらせた方は、あなたがたのうちに住んでおられる御霊によって、あなたがたの死ぬべきからだをも生かしてくださるのです。
>
> 8:13 もし肉に従って生きるなら、あなたがたは死ぬのです。しかし、もし御霊によって、からだの行ないを殺すなら、あなたがたは生きるのです。

もし肉に従って生きるなら、あなたがたは死ぬ。しかし、御霊によって、からだの行ないを殺すなら、あなたがたは生きるというのは、もし、キリスト者が、救われる前と同じように、古い罪深い性質に従って生きるなら、そういうキリスト者は滅びるけれども、キリスト者のうちに住んでくださる御霊の知恵により頼むことによって、罪に支配されている古い肉の行いから離れるならば、主のみ心にかなう良い行い、生き方ができるいうことを、ここで言っているのであります。

けれども、実際はどうでしょう？いちばん最初に読んでいただいたみ言葉に、『あなたがたのうちで、知恵のある賢い人はだれでしょうか』とあります。

これは、イエス様を信じる者の全てが、上からの知恵によって主に褒めていただけるような賢い人として歩んでいるとは言えないということを、表しているのではないでしょうか。

前にも申しましたように、上からの知恵として挙げられている純真、平和、寛容、温順、哀れみ、公平、誠実などは、これは、イエス様のご人格そのものであり、また同時に、私たちキリスト者のうちに宿っている御霊のご人格でもあります。

そして、そのご人格がキリスト者を通して外に現れる時に、その信者は初めて、その知恵にふさわしい柔和な行いを良い生き方によって示すことが、言い換えますと、御霊の実を結ぶ生き方をすることができるのであります。

御霊の実については、パウロがガラテヤ人の五章の中で次のように挙げております。

> ガラテヤ

5:22 御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、
5:23 柔和、自制です。

けれども、私たちキリスト者は、果たして、この上からの知恵、神からの知恵によって賢い人のように生きているでありましょうか？言い換えますと、主に用いられる器として、御霊の実を結ぶにふさわしい生き方をしているでしょうか？私自身、私の心を見通されている主から、あなたはいったい知恵のある賢い人かと、厳しく問われているようで、身が縮むような思いがいたします。

もし冒頭の御言葉に記されているように、自分の心の中に妬みや争いの思いが少しでもあるならば、到底、御霊によって支配されているとものとは言えません。せっかく上からの知恵、神からの知恵をいただきながら、主に用いられる器として生きるているとは言えません。

では、神からの知恵を与えられている私たちキリスト者が、その知恵によって賢い歩みをするには、いったいどうすればよいでしょうか？

それには、私たちのうちに住んでくださっている主の御霊が、そのご人格を私たちを通して表すことがおできになれるようにすること、御霊が私たちの器を通して働くことがおできになれるようにすることです。そのためには、私たちのかたくなな自我が、もっともっと砕かれることが必要なのであります。パウロが、第二コリントの４章で、

第二コリント
4:7 私たちは、この宝を、土の器の中に入れているのです。それは、この測り知れない力が神のものであって、私たちから出たものでないことが明らかにされるためです。

と言っておりますように、自分は、主の御霊をお入れするにも値しないような欠けた土の器に過ぎないものであるということを、心の底から認め、自分の思いを捨てて、主に全て自分を明け渡すことであります。

そして、パウロが、同じ第二コリントの五章で、

第二コリント
5:9 そういうわけで、肉体の中にあろうと、肉体を離れていようと、私たちの念願とするところは、主に喜ばれることです。

と言っておりますように、私たちは、自分を誇るのではなくて、イエス様だけを誇り、自分を喜ばすのではなくて、イエス様だけに喜んでいただくことを、心から願うことであります。

パウロはまた、有名なガラテヤの２章の 20 節で、次のように言っております。

ガラテヤ
2:20 私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

このように、私たちも罪の力に支配されておりました古い人は、イエス様と共に十字架につけられて死んで、代わって私たちのうちに住んでくださる御霊のご支配のもとに生きるもののとされたということを、しっかりと改めて心に覚えて、主の御霊をお入れする器に相応しく生きることができるように、器を空にして、御霊の満たしとお導きを、心から祈る必要があります。

またパウロは、キリスト者はいつも、賢い人のように歩んでいるかどうかよく吟味しなさい――吟味するようにと、次のように言っております。

エペソ
5:8 あなたがたは、以前は暗やみでしたが、今は、主にあって、光となりました。光の子どもらしく歩みなさい。
5:9 ――光の結ぶ実は、あらゆる善意と正義と真実なのです。――
5:10 そのためには、主に喜ばれることが何であるかを見分けなさい。
5:11 実を結ばない暗やみのわざに仲間入りしないで、むしろ、それを明るみに出しなさい。
5:12 なぜなら、彼らがひそかに行なっていることは、口にするのも恥ずかしいことだからです。
5:13 けれども、明るみに引き出されるものは、みな、光によって明らかにされます。
5:14 明らかにされたものはみな、光だからです。それで、こう言われています。「眠っている人よ。目をさませ。死者の中から起き上がれ。そうすれば、キリストが、あなたを照らされる。」
5:15 そういうわけですから、賢くない人のようにではなく、賢い人のように歩んでいるかどうか、よくよく注意し、
5:16 機会を十分に生かして用いなさい。悪い時代だからです。
5:17 ですから、愚かにならないで、主のみこころは何であるかを、よく悟りなさい。

ご再臨のすぐ間近い今、私たちが改めてイエス様をお入れする器にふさわしく整えられ、上からの知恵をいただいて、主を待ち望みつつ、御心にかなう賢い歩みをすることができるように、心から願う次第であります。

最後に、御言葉をお読みして終わります。

コロサイ
1:9 ・・・・どうか、あなたがたがあらゆる霊的な知恵と理解力によって、神のみこころに関する真の知識に満たされますように。
1:10 また、主にかなった歩みをして、あらゆる点で主に喜ばれ、あらゆる善行のうちに実を結び、神を知る知識を増し加えられますように。・・・・

ありがとうございました。

私にはある、キリストにあるすべてが

2024 年 10 月 6 日、町田福音集会
重田定義

ピリピ人への手紙
3:5 私は八日目の割礼を受け、イスラエル民族に属し、ベニヤミンの分かれの者です。きっすいのヘブル人で、律法についてはパリサイ人、
3:6 その熱心は教会を迫害したほどで、律法による義についてならば非難されるところのない者です。
3:7 しかし、私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。
3:8 それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています。・・・・

今、水渡兄に読んでいただいた御言葉は、イエス様を信じたことによってすばらしいものを得た結果、それまで自分が誇りとしていた血統や名声や経歴など、この世の価値あるものが皆、ちりあくたのように思えるようになったというパウロの証しであります。

パウロは、イエス様を信じることによって、このように、価値観が一変しました。しかし、これはパウロのみならず、多かれ少なかれ、イエス様を信じる者に共通する思いではないでしょうか？

イエス様に出会う前の私たちは、この世の人と同じように、目に見えるものだけに頼って生きておりました。それは、財産、知識、能力、地位といったものだけではなくて、国家や社会の制度などに安心、安全の保証を求めて生きていました。

そのようなものに頼ることが、虚しいはかないものかを知らずに、いや、知ってはいても、他に頼るものがないと思って生きておりました。

ルカの福音書
12:16 ・・・・「ある金持ちの畑が豊作であった。
12:17 そこで彼は、心の中でこう言いながら考えた。『どうしよう。作物をたくわえておく場所がない。』
12:18 そして言った。『こうしよう。あの倉を取りこわして、もっと大きいのを建て、穀物や財産はみなそこにしまっておこう。
12:19 そして、自分のたましいにこう言おう。「たましいよ。これから先何年分もいっぱい物がためられた。さあ、安心して、食べて、飲んで、楽しめ。」』
12:20 しかし神は彼に言われた。『愚か者。おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。そうしたら、おまえが用意した物は、いったいだれのものになるのか。』

また、ソロモンは、箴言の 23 章で、

23:4 富を得ようと苦労してはならない。自分の悟りによって、これをやめよ。
23:5 あなたがこれに目を留めると、それはもうないではないか。富は必ず翼をつけて、わしのように天へ飛んで行く。

と言っております。これは、自分の能力や富に頼り、それを手にすることによって、安心、安全を得ようとする人間の愚かさ、哀れさを、よく言い表している言葉であります。

前にもふれましたように、人間は、自分の安心、安全をこの世の富や力や、あるいは、政治や行政や社会制度に求め、それらに依存して得ようといたします。しかし、イエス様を信じる私たちは、そのようなものが、永遠不変の保証を与えてくれないことを、誰もコントロールできないほど激しく揺れ動いている世界の情勢の中で、痛いほど感じているのではないでしょうか。

真の安心、安全とは、このような不確実なもの、一時的なものではなくて、永遠に変わらないものでなくてはならないはずであります。けれども、果たして、永遠に変わらない確実な安心、安全など、いったいあるのでしょうか？あるとすれば、いったいそれは、どのようなものなのでしょうか？そして、それをどうしたら――もしあるとすれば――得ることができるのでしょうか？

まことの平安、安全は、この世の富や力や制度などの目に見えるものによってではなく、目に見えない富で与えられるものなのであります。パウロは、第二コリントの 4 章で、

第二コリント
4:18 私たちは、見えるものにではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。

と言っております。目に見えない富とは、いったい何でしょうか？それは、霊的な富であります。これこそ、永遠の富なのであります。では、その霊的な富とは、いったい何でしょうか？

その答えは、日々の歌の 60 番にありました。私たち、イエス様を信じる者には、その富があると、日々の歌 60 番で言っているのであります。そこで、そのひとつひとつの御言葉を聞きながら、これから確かめてみたいと思います。

60 番の歌詞に、『私にはある、頼る岩が』とあります。頼る岩とは何でしょうか？ダビデは、主が彼を敵の手から救い出された時、次のように賛美しました。

第二サムエル
22:2 ・・・・主はわが巌、わがとりで、わが救い主、
22:3 わが身を避けるわが岩なる神。わが盾、わが救いの角、わがやぐら。私を暴虐から救う私の救い主、私の逃げ場。
22:4 ほめたたえられる方、この主を呼び求めると、私は、敵から救われる。

また、ダビデは詩篇の 62 篇で

詩篇

62:5 私のたましいは黙って、ただ神を待ち望む。私の望みは神から来るからだ。
62:6 神こそ、わが岩。わが救い。わがやぐら。私はゆるがされることはない。
62:7 私の救いと、私の栄光は、神にかかっている。私の力の岩と避け所は、神のうちにある。
62:8 民よ。どんなときにも、神に信頼せよ。あなたがたの心を神の御前に注ぎ出せ。神は、われらの避け所である。

と言っております。このように、『頼る岩』というのは、主なる神様であり、信仰の先輩たちはどんな艱難が襲っても、自分には、岩となり、盾となり、砦となって守ってくださる主なる神様があり、どんな苦しい時にも、どんな嵐が吹きあれても、主なる神様という確実な避け所、隠れ場があると、主に信頼し、感謝しているのであります。

私たちも同じように、主が岩となって、盾となってくださったという自分自身の体験を通して、『私にはある、霊的な富である頼る岩が』と主を証しし、賛美することができるのであります。

また 60 番の歌詞に、『私にはある、永遠に立つ御言葉が』とあります。詩篇の 119 篇は、信仰者に対して語られた主の愛、恵み、救い、励まし、慰め、戒め、諭(さとし)など、数多くの御言葉の賛美に満ちておりますけれども、その中から二つだけ、挙げてみたいと思います。

詩篇 119
119:89 主よ。あなたのことばは、とこしえから、天において定まっています。
119:90 あなたの真実は代々に至ります。あなたが地を据えたので、地は堅く立っています。
119:91 それらはきょうも、あなたの定めにしたがって堅く立っています。すべては、あなたのしもべだからです。
119:92 もしあなたのみおしえが私の喜びでなかったら、私は自分の悩みの中で滅んでいたでしょう。
119:93 私はあなたの戒めを決して忘れません。それによって、あなたは私を生かしてくださったからです。

119:129 あなたのさとしは奇しく、それゆえ、私のたましいはそれを守ります。
119:130 みことばの戸が開くと、光が差し込み、わきまえのない者に悟りを与えます。
119:131 私は口を大きくあけて、あえぎました。あなたの仰せを愛したからです。

このように、信仰者は『私には、霊的な富である、永遠に立つ御言葉がある』と、主の御言葉に信頼し、御言葉に導かれて歩む安心、安全の喜びを賛美しております。主のみことばに慰められ、支えられ、導かれている私たちも、また、同じではないでしょうか？

また、60 番の歌詞には、『私にはある、神のマナが』とあります。神のマナとは何でしょう？これについては、イエス様と弟子たちの対話から知ることができます。

ヨハネの福音書
6:30 ‥‥彼ら(‥‥すなわち、弟子たち‥‥)はイエスに言った。「それでは、私たちが見てあなたを信じるために、しるしとして何をしてくださいますか。どのようなことをなさいますか。
6:31 私たちの先祖は、荒野でマナを食べました。『彼(‥‥すなわち、モーセ‥‥)は彼らに天からパンを与えて食べさせた。』と書いてあるとおりです。」
6:32 イエスは彼らに言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。モーセはあなたがたに天からのパンを与えたのではありません。しかし、わたしの父は、あなたがたに天からまことのパンをお与えになります。
6:33 というのは、神のパンは、天から下って来て、世にいのちを与えるものだからです。」
6:34 そこで彼らはイエスに言った。「主よ。いつもそのパンを私たちにお与えください。」
6:35 イエスは言われた。「わたしがいのちのパンです。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渇くことがありません。」

神のマナとは、私たちに永遠のいのちを与えてくださるために、天から下ってこられたイエス様ご自身なのであります。そして、私たちが永遠のいのちを求めて、イエス様のみもとに来る時に、イエス様は喜んでご自分のいのちを与え、永遠に生きるようにしてくださるのであります。ですから、信仰者は喜んで、『私にはある、霊的な富である、神のマナが』と、イエス様を賛美するのであります。

また 60 番の歌詞には、『私にはある、湧く泉が』とあります。『湧く泉』とは、イエス様がヨハネの福音書の四章で、

ヨハネの福音書
4:14 わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渇くことがありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます。

とおっしゃったように、イエス様が信じる者に与えてくださる御霊のことであり、そこからは、永遠にいのちの水が湧き出るので、その水を飲むものは、決して渇くことがないのであります。

イエス様を信じ、御霊をいただいた私たちもまた、喜んで、『私にはある、霊的な富である湧く泉が』と、主を賛美することができるのであります。

また、60 番の歌詞には、『私にはある、重荷を共に背負う方が』とあります。イエス様は、マタイの福音書 11 章で、

マタイ
11:28 すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。

とおっしゃいました。また、詩篇の 55 篇には、

詩篇

55:22 あなたの重荷を主にゆだねよ。主は、あなたのことを心配してくださる。主は決して、正しい者（・・・・すなわち、信仰者・・・・）がゆるがされるようにはなさらない。

とあります。そして、また詩篇 68 篇には、

詩篇
68:19 ほむべきかな。日々、私たちのために、重荷をになわれる主。私たちの救いであられる神。

とあります。さらに、イザヤ書の四十六章には、

イザヤ書
46:3 ・・・・胎内にいる時からになわれており、生まれる前から運ばれた者よ。
46:4 あなたがたが年をとっても、わたしは同じようにする。あなたがたがしらがになっても、わたしは背負う。わたしはそうしてきたのだ。なお、わたしは運ぼう。わたしは背負って、救い出そう。

とあります。このように、主は信じるものの霊的な、あるいは、肉体的な苦しみ、悲しみ、悩みなどの重荷を、いつも共に背負うと約束してくださっています。私たちは、自分自身の体験を通して、主のこのお約束は真実であることを知っております。ですから、私たちは喜んで、『私にはある、重荷を共に背負う方が』と、主を賛美することができるのであります。

また、60 番の歌詞には、『私にはある、帰るふるさと、天の御国が』とあります。

ヘブル
11:13 これらの人々（・・・・すなわちアブラハム、イサク、ヤコブなど・・・・）はみな、信仰の人々として死にました。約束のものを手に入れることはありませんでしたが、はるかにそれを見て喜び迎え、地上では旅人であり寄留者であることを告白していたのです。
11:14 彼らはこのように言うことによって、自分の故郷を求めていることを示しています。
11:15 もし、出て来た故郷（・・・・これは、地上の故郷ですね・・・・）のことを思っていたのであれば、帰る機会はあったでしょう。
11:16 しかし、事実、彼らは、さらにすぐれた故郷、すなわち天の故郷にあこがれていたのです。それゆえ、神は彼らの神と呼ばれることを恥となさいませんでした。事実、神は彼らのために都を用意しておられました。

イエス様は、ご自分が地上を去って、天の御国に行かれる目的を、弟子たちに次のように説明されております。

ヨハネ
14:2 わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言っておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。
14:3 わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。

私たちの生まれ育ったところを故郷と呼ぶならば、誰にでもそのような地上の故郷はあるはずです。けれども、地上の故郷は、永遠に存在するのではありません。

住む家も、迎えてくれる者もなくなった故郷は、もはや帰るべきふるさととは言えません。しかし、信仰者には、主が住むべき家を用意してくださって、ご自身が迎えに来てくださるというすばらしい帰るべき天の御国のふるさとがあるのであります。そこで、私たちが心から喜んで、『私にはある、霊的な富である帰るふるさと、天の御国が』と賛美することができるのであります。

ここまで、日々の歌の 60 番から、私たちキリスト者が手にすることができた数々の恵みを挙げてまいりましたけれども、最後に、その恵みの集大成といえる歌詞をお読みいたします。

私にはある、救い主が、
恵み豊かな神の御子が。
私にはある、すべてがある、
イエス･キリストにあるすべてが。

これこそ、キリスト者が手にすることができる誇るべき富であります。パウロが、

ピリピ
3:8 ・・・・私の主であるキリスト･イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています。・・・・

と、言い切ることができた根拠は、まさにここにあるのであります。

世の終わりを示す兆候が、ますます明らかになっているこの世にあって、主の愛と哀れみによって主のものとされた私たちが、

私にはある、救い主が、
恵み豊かな神の御子が。
私にはある、すべてがある、
イエス･キリストにあるすべてが。

と、主の与えてくださるまことの安心、安全によって守られ、導かれていることを心から喜びつつ、日々を過ごそうではありませんか。

ありがとうございました。

しらがになってもわたしを背負ってくださる主の恵み

2025 年 1 月 5 日、町田福音集会
重田定義

> イザヤ
> 46:3 わたしに聞け、ヤコブの家と、イスラエルの家のすべての残りの者よ。胎内にいる時からになわれており、生まれる前から運ばれた者よ。
> 46:4 あなたがたが年をとっても、わたしは同じようにする。あなたがたがしらがになっても、わたしは背負う。わたしはそうしてきたのだ。なお、わたしは運ぼう。わたしは背負って、救い出そう。

ありがとうございました。

それではこれから、しばらくのあいだ、聴いていただきたいと思います。あらためて、新しい年をともに迎えました。今年もよろしくお願いいたします。

新年、最初の福音集会では、普通ならば、これから始まる一年の信仰生活の歩みについての決意などを述べるというようなメッセージになると思いますけれども、今日は、そのようなメッセージではなく、主が私を背負って運ばれ、生きて働いておられるのを、この私の目に見せてくださったという証しをさせていただきたいと思います。

主は、私たちにどのように接してくださっておられるのでありましょうか？もっとも多いのは、導くという接し方でありましょう。一例を挙げます。

> 詩篇
> 78:14 神は、昼は雲をもって、彼らを導き、夜は、夜通し炎の光で彼らを導いた。

『導く』というふうにここにあります。また、『ともにいる』という表現の接し方も多く見られます。マタイの 28 章 20 節でイエス様はおっしゃいました。

> マタイ
> 28:20 ・・・・見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。

『ともにいます』とおっしゃいました。しかし、中でも私がもっとも力強く、また、ありがたく感謝な接し方と感じましたのは、さっき読んでいただきました。冒頭のみ言葉の言葉の中にあります。主みずからが、私を生まれる前から運び、しらがになるまで、年老いて――年を取るまで背負うという表現であります。

私は若い時、元気な時には、イエス様が自分を背負って運んでくださっているなどとは知りもしないで、信仰を持ってからも、しばしば、肉の思いに捕らわれて、喜んだり悲しんだりして、日々を過ごしていたような愚かな者でありました。しかしながら、年老いて体も衰えた今日、ようやくイエス様が、このように、愚かで取るに足りない者をも、今日まで背負って運んでくださり、主が生きて働かれるみわざをこの目に見せてくださったということに、気がつくことができました。

18 年前になりますが、当時 80 歳の私は、体調の衰えを感じ、長年、住み慣れた荻窪の家を引き払い、町田市にある入居者数、約三百人、スタッフの数、約百五十人の大きな老人介護施設、サンシティー町田に入居しました。数多くある老人施設の中で、どうしてここを選んだのか、はじめは自分の考えで選んだと思っておりましたけれども、入居したあと、最初から思いがけないことが、次から次へと起こり、初めて、これは主が自ら私を背負い、運んでここに連れてきてくださったのだと分かるようになりました。これからその証しをさせていただきます。

入居の際の面接で、いろいろと話しておりますうちに、私は自然と、私たち夫婦はキリスト者であり、死後には天の御国に召してくださるという希望があるから、死を恐れることない。入居者にも、幸せに余生を生きるためには、何が必要かを知って欲しいと、自然にそのような話をしておりました。私の話を黙って聞いていた支配人は、突然、その話を我々、スタッフにして欲しいと言いました。思いもかけないことでした。そして、スタッフの研修会でした話が、後に、『高齢者の幸せのために』という小冊子になって、世に出ることになったのであります。

このような施設では、宗教的、あるいは、政治的なことは一切、タブーとされているはずなのに、どうしてこうなったのか。全て、イエス様がなさったことなのであります。サンシティー町田に入居してからしばらく経ち、クリスマスを祝う催しが、ホールで開かれました。ジングルベル、ホワイト・クリスマス、赤鼻のトナカイなどの歌や踊りがスタッフによってなされ、皆さんが手を叩いたり、一緒に歌ったりして喜んでいました。

その時、私にイエス様が働いてくださり、このクリスマス・コンサートこそ、絶好の福音の機会ではないか、この機会に本当のクリスマスとは、神の御子、イエス様が全ての人の罪を救うために、救い主としてこの世に来られたその日を喜び、祝うことである。そのことを、入居者に知ってもらうようなコンサートにしたいという思いが与えられました。

さっそく、集会の兄弟姉妹に協力をお願いしました。支配人も賛成してくれ、2013 年、今から 12 年前に、集会の兄弟姉妹からなる合唱団によって、初めて、イエス様のご生誕を祝う数々の賛美の歌を歌うクリスマス喜びのコンサートが開かれました。

終わった後、数名の入居者が私のところに来ました。私たちも賛美の歌を歌いたいというのです。皆さん、未信者です。驚きました。まさに、イエス様が働いてくださったんです。こうしてサークル活動として、グローセリーベの会が誕生しました。それから、今日にいたるまで、新型コロナによる中断がありましたけれども、ずっとグローセリーベの会とクリスマス喜びのコンサートが続いております。グローセリーベの会は、初めは数名でしたけれども、だんだんと増えて、会員の数は現在 16 人となりました。これまでに亡くなった方も 6 人おられますけれども、皆さん、毎回、喜んで歌っておられました。イエス様は、この方々を天に召してくださったと私は確信しております。

会員の中で、初めから集っておられ、後に町田集会にも来られるようになった方もいます。会員の高齢化が進み、現在、平均年齢は 84 歳ですね。耳の遠い方、歩行器に頼らなければ歩けない方、体調を崩す方なども見えました。

しかし皆さん、練習の初めは声も小さく弱々しいですけれども終わるころには、声も大きく元気になってくるのがわかります。賛美の歌の歌詞が力を与えてくださったのであります。練習曲は、これまで日々の歌から、主の愛、恵み、十字架、救い、招き、平安、慰め、復活、天の御国など、約 50 曲に上ります。中でも 58 番の『理解できないが』が、定番中の定番です。

現在、集会から 6 人の兄弟姉妹がたが入居者の救いを祈って、暑い夏も、寒い冬も、遠方から指導に来てくださっており、会員の皆さん、月一回の練習の日を楽しみにしています。練習後には、ラウンジで兄弟姉妹がたが、コーヒーを飲みながら交わってくださいますが、これも会員の皆さんにとっては、楽しみとなっております。

このような様々な事実を目にした時、会員の皆さんは、信仰の告白こそされておりませんけれども、素直に主を受け入れておられると思わざるを得ません。主は、皆さんを背負い運んでおられるのであります。

クリスマスの喜びのコンサートは、今では主催者がサンシティ町田となり、支配人をはじめ、施設を上げて、喜んで協力してくれています。昨年、12 月 21 日に開催されたクリスマス・コンサートでは、グローセリーベの会員、集会の兄弟姉妹がた、そして、支配人をはじめ、サンシティ一町田の職員、合計、約 60 人の大合唱団がステージに並び、約一時間にわたって、ハレルヤをはじめ、イエス様のご生誕を祝う多くの曲を合唱しました。

信者も未信者も一緒に、心を合わせて元気な声で、喜んで顔を輝かせながら、イエス様のご生誕を賛美するこのようなコンサートは、まさに主のお導きによるとしか、考えられないとと感動いたしました。

その時に、スタッフが取ってくれた写真がありますので、お見せしたいと思います。こういうものです。ご覧になれますか？こういうふうに、たくさん入居者の方も聞いてくださっています。最前列に座っているのが――小さくてわかりにくいと思いますが――、グローセリーベの会員の人たちで、ずっと後ろに並んでいる人たちが、集会の兄弟姉妹とスタッフの人たちです。このコンサートは、町田集会の兄弟が、音楽と映像ライブで録って CD と DVD を作ってくださっています。

もう一つ、うれしいご報告があります。コンサートの終了後、出演者全員が、コーヒーとケーキをともにする交わりの時を持ちました。その際、コンサートでバイオリンの演奏をしてくれた集会の若い兄弟の親友で、ピアノの伴奏をした鶴原壮一郎さんという東京芸大の青年と交わる機会が与えられ、その場で素直にイエスさまを信じるという奇蹟が起きました。主が働かれたのだと思います。彼の信仰が、主にかたく立つ信仰となるようにお祈りください。

以上、サンシティ一町田に、入居してから今日まで、次から次へと起こった出来事を思い返しますと、まさにこれは、主のみわざとしか考えられません。そして、年老いて体も衰え、今は、酸素を吸いながら生きているようなこの私でをもなお、背負い運んでくださって、このようなみわざを見せてくださる主に、心から感謝するばかりであります。

イエス様が、背負い運んでくださるという恵みは、イエス様を主と信じるものであれば、どなたでも預かることができます。しかし、主が背負い運んでくださるという恵みに預かるためには、自我が砕かれる必要があります。

人生が順風満帆の時、自分の思い通りにことが運んでいる時には、その恵みはわかりません。自我が砕かれていないからです。それでは逆に、人生の様々な嵐にあって、自分の知恵や力で乗り切ろうと手を尽くしたけれども、どれも失敗して、自分の無力さを思い知り、自我が砕かれたとき、主が働かれて初めて、主が自分を背負い運んでくださるという恵みを体験することができるのであります。そのことは集会の兄弟がたによって語られるメッセージや集会の機関誌、主は生きておられるに載っている多くの兄弟姉妹の証しなどからも知ることができます。

私たちが、罪とは、人間に対する罪ではなく、神様に対する背きの罪であったことを知って、悔い改めることができたのも、自分の知恵によったからでありましょうか？そうではなく、イエス様によって愛され、かたくなな自我が砕かれ、弱められたからではないでしょうか？

また、イエス様の十字架の救いのみわざが、自分自身の罪のためであったと信じることができたのも、これは自分の知恵によったからでありましょうか。そうではなく、イエス様に愛され、自我が砕かれ、弱められたからではないでしょうか？

また、イエス様に自分を明け渡すこと、自分を委ねることができたのも、自分の力や努力によったからでありましょうか？そうではなくて、イエス様に愛され、自我が砕かれ、弱い者とされたからではないでしょうか？

それらがすべて、イエス様が私たちを背負い運んでくださるためにしてくださったことなのであります。そして、イエスさまが、その者に、もっともふさわしいかたちと方法で、ご自分のみわざを表してくださるのであります。

今年は、世の終わりがますます迫る年になるでありましょう。世界の情勢は、そのことを明らかに示しております。しかし、私たち信者にとっては、ご再臨がいよいよ近いという希望、イエス様に直接、お会いできるという希望の年であります。この時期にあって、主にある兄弟姉妹がともに主に背負われ、運ばれる恵みに預かって、喜びつつ、天の御国に携え上げられるよう、心からお祈りいたします。

最後に、日々の歌の 137 番の歌詞を読んで終わります。

私のそばには目には見えないが、
愛する主イエスが共におられる。
御国に上りて主の御姿を
この目で拝するその喜びよ。

生まれる前から私を背に追い、
しらがとなるともなお負いたもう。
御国に上りて主の御姿を
この目で拝するその喜びよ。

.取るに足りないこの私さえも、
いのちに代えて贖いたもう。
御国に上りて主の御姿を
この目で拝するその喜びよ。

ありがとうございました。

主によって強くされる

2025 年 4 月 6 日、町田福音集会
重田定義

ピリピ
4:13 私は、私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできるのです。

今日は、今、読んでいただいたみ言葉、すなわち、これは、パウロが、ピリピの教会の信者に宛てた手紙の中で、言っておりますが、この御言葉の意味を、ご一緒に考えたいと思います。したがって今日のメッセージは、どちらかといえば、信者向きと言ってもいいと思います。

人間、誰でも自分が強くなりたいということを考えている。そう思って、願望しているのではないでしょうか。それはスポーツに限らず、この世を生きていく上で、何ごとにおいても弱いよりも強い方が有利だからであります。強者は弱者に勝つのが、この世の常識だからであります。ですから、どうすれば自分が強くなれるか、人間はあらゆる知恵を絞って、また努力を尽くしてがんばります。

けれども、パウロはここで、自分の力や意志によって強くなるのではなくて、イエス様が自分を強くしてくださるのだというふうに言っているのであります。しかも、パウロは、強くなるのは、それは自分のためではない、それは、主のためであって、それによって、主がご栄光を表されるためである――そのために自分はどんなことでもできるんだというふうに言っておるのであります。

この点が、パウロとこの世の人々と全く違うところであります。これから、旧約聖書、および、新約聖書に記されているいくつかの例から、そのこと見てみたいと思います。

まず、旧約聖書。旧約聖書には、信仰によって、主に強められた人々の事例が数多く記されております。そのうちの、いくつかを見てみたいと思います。

まず、第一サムエルの 17 章を見てみたいと思います。ここには少年ダビデがペリシテ人の巨人ゴリアテを倒した記事が載っております。

第一サムエル
17:42 ペリシテ人はあたりを見おろして、ダビデに目を留めたとき、彼をさげすんだ。ダビデが若くて、紅顔の美少年だったからである。
17:43 ペリシテ人はダビデに言った。「おれは犬なのか。杖を持って向かって来るが。」ペリシテ人は自分の神々によってダビデをのろった。
17:44 ペリシテ人はダビデに言った。「さあ、来い。おまえの肉を空の鳥や野の獣にくれてやろう。」
17:45 ダビデはペリシテ人に言った。「おまえは、剣と、槍と、投げ槍を持って、私に向かって来るが、私は、おまえがなぶったイスラエルの戦陣の神、万軍の主の御名によって、おまえに立ち向かうのだ。
17:46 きょう、主はおまえを私の手に渡される。私はおまえを打って、おまえの頭を胴体から離し、きょう、ペリシテ人の陣営のしかばねを、空の鳥、地の獣に与える。すべての国は、イスラエルに神がおられることを知るであろう。
17:47 この全集団も、主が剣や槍を使わずに救うことを知るであろう。この戦いは主の戦いだ。主はおまえたちをわれわれの手に渡される。」
17:48 そのペリシテ人は、立ち上がり、ダビデを迎え撃とうと近づいて来た。ダビデもすばやく戦場を走って行き、ペリシテ人に立ち向かった。
17:49 ダビデは袋の中に手を差し入れ、石を一つ取り、石投げでそれを放ち、ペリシテ人の額を打った。石は額に食い込み、彼はうつぶせに倒れた。
17:50 こうしてダビデは、石投げと一つの石で、このペリシテ人に勝った。・・・・

ダビデは、ここで、この戦いは自分の戦いではなく、主の戦いだと言っています。主の戦いであるがゆえに、彼は主が、弱く小さい自分を強くされて、この恐ろしい敵に勝つことができると確信して戦ったのであります。そして、このダビデの信仰を良しとされた主は、ダビデを通して、ご自身のご栄光を現わされたのであります。

次に、ダニエル書の六章から、獅子の穴に投げ込まれたダニエルについて書かれているところを見てみたいと思います。ダニエルは、捕囚の一人としてバビロンに連れて行かれ、バビロン王の信頼を受け、大臣に取り立てられるほどに出世しましたけれども、その地でも、彼はまことの神に対する信仰を守り続けました。そのダニエルを妬んだ王の家来たちは、ダニエルを陥れようとして、バビロン王だけに祈ること、さもなければ獅子の穴に投げ込むという禁令を作りました。

それでも、主なる神様に祈ることをやめなかったダニエルは、この禁令を犯した罪によって、ついに獅子の穴に投げ込まれてしまいます。しかし、この禁令がダニエルを陥れるものであるということを知った王様は、翌朝、ダニエルの様子を見に、この獅子の穴に急いで行くのです。

ダニエル
6:20 その穴に近づくと、王は悲痛な声でダニエルに呼びかけ、ダニエルに言った。「生ける神のしもべダニエル。あなたがいつも仕えている神は、あなたを獅子から救うことができたか。」
6:21 すると、ダニエルは王に答えた。「王さま。永遠に生きられますように。
6:22 私の神は御使いを送り、獅子の口をふさいでくださったので、獅子は私に何の害も加えませんでした。それは私に罪のないことが神の前に認められたからです。王よ。私はあなたにも、何も悪いことをしていません。」
6:23 そこで王は非常に喜び、ダニエルをその穴から出せと命じた。ダニエルは穴から出されたが、彼に何の傷も認められなかった。彼が神に信頼していたからである。

このように、捕らわれの弱い意味でありながら、主なる神様にどこまでも信頼したダニエルを、主は強めてくださって、そのダニエルを通して、主は異邦人の王に対しても、ご栄光を表されたのであります。

預言者のエレミヤについては、どうだったでしょうか。エレニアが主の預言者として召し出されたときの様子は、

次のようなものでありました。

エレミヤ
1:4 次のような主のことばが私にあった。
1:5「わたしは、あなたを胎内に形造る前から、あなたを知り、あなたが腹から出る前から、あなたを聖別し、あなたを国々への預言者と定めていた。」
1:6 そこで、私は言った。「ああ、神、主よ。ご覧のとおり、私はまだ若くて、どう語っていいかわかりません。」
1:7 すると、主は私に仰せられた。「まだ若い、と言うな。わたしがあなたを遣わすどんな所へでも行き、わたしがあなたに命じるすべての事を語れ。
1:8 彼らの顔を恐れるな。わたしはあなたとともにいて、あなたを救い出すからだ。」

エルミアは、たいへん弱い性格の人であったようであります。しかし、主は、この弱いエレミヤを主の預言者に選ばれたのであります。そして、主によって強められたエレミヤは、主に信頼しつつ、激しい迫害を受けながらも、教えることなく、生涯、主のみことば、メッセージを伝え続けました。そして、主はそのエレミヤを通して、ご栄光を表されたのであります。

ヘブル人への手紙には、主によって強められた人々について、次のように書かれております。

ヘブル
11:32 これ以上、何を言いましょうか。もし、ギデオン、バラク、サムソン、エフタ、またダビデ、サムエル、預言者たちについても話すならば、時が足りないでしょう。
11:33 彼らは、信仰によって、国々を征服し、正しいことを行ない、約束のものを得、ししの口をふさぎ、
11:34 火の勢いを消し、剣の刃をのがれ、弱い者なのに強くされ、戦いの勇士となり、他国の陣営を陥れました。

主は、生まれつき強い者を、そのままではお用いになりません。それは、生まれつき強い者は、何ごとも、信仰でさえも、自分の強さによって対処できるという高ぶった自我の思いを持っているからであります。ですから、主はまず用いようとするものの自我を砕いて弱くされます。

次に、新約聖書から、その実例を二つ挙げてみたいと思います。

ひとつは、主イエス様の弟子ペテロであります。彼は生まれつき強い性質の持ち主でありました。その性質のゆえに、イエス様が弟子たちに、今夜、わたしが捕らえられたら、あなたがたは皆、わたしにつまずき、散り散りになる――そういうふうにおっしゃったときに、ペテロは何と言ったか。

マタイ
26:33 ・・・・「たとい全部の者があなたのゆえにつまずいても、私は決してつまずきません。」

このように彼は豪語しました。そして、続いて、イエス様がペテロに、今夜、鶏が鳴く前にあなたは三度、わたしを知らないというとおっしゃった時にも、彼は何と言ったか。

マタイ
26:35「たとい、ごいっしょに死ななければならないとしても、私は、あなたを知らないなどとは決して申しません。」

と言い張りました。にも関わらず、ペテロはイエス様が預言されたとおり、イエス様を裏切ることになったことを通して、彼は完全に自我が砕かれたのであります。そして、そのようにして、砕かれ弱められたペトロを、主は御霊によって強めてくださり、その結果、彼は主の器として用いられ、迫害にあいながらも、殉教の死を遂げるまで、主の福音を力強く述べ伝え続けたのであります。

次はパウロであります。彼は、次のように証しをしております。

第二コリント
12:7 ・・・・私は、高ぶることのないようにと、肉体に一つのとげを与えられました。それは私が高ぶることのないように、私を打つための、サタンの使いです。
12:8 このことについては、これを私から去らせてくださるようにと、三度も主に願いました。
12:9 しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。
12:10 ですから、私は、キリストのために、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです。

パウロは、かつては自我の強い、誇り高い人でありました。これについて、彼は次のように告白しております。

ピリピ
3:4 ・・・・私は、人間的なものにおいても頼むところがあります。もし、ほかの人が人間的なものに頼むところがあると思うなら、私は、それ以上です。
3:5 私は八日目の割礼を受け、イスラエル民族に属し、ベニヤミンの分かれの者です。きっすいのヘブル人で、律法についてはパリサイ人、
3:6 その熱心は教会を迫害したほどで、律法による義についてならば非難されるところのない者です。

このように、彼はたいへん自我の強い、誇り高い人でありました。しかしながら、彼の証しにあります通り、イエス様は、パウロの自由を砕いて弱くされた後で、パウロを御霊によって強めて、主の器として大いに用いられたのであります。

主の器とされたパウロは、コリント教会の信者にあてた手紙の中で――先ほど申しましたが――、自分は弱いものであることをよく知っている。だから、福音伝道の成果は、自分の人間的な知恵や力によってではなくて、御霊の力に支えられて行われた結果であるというふうに言っております。

第一コリント
2:3 あなたがたといっしょにいたときの私は、弱く、恐れおののいていました。
2:4 そして、私のことばと私の宣教とは、説得力のある知恵のことばによって行なわれたものではなく（・・・・すなわち、自分の知恵によってではなく・・・・）、御霊と御力の現われでした。

このように言っております。また、パウロは、次のようにも証ししております。

第一コリント
9:19 私はだれに対しても自由ですが、より多くの人を獲得するために、すべての人の奴隷となりました。
9:20 ユダヤ人にはユダヤ人のようになりました。それはユダヤ人を獲得するためです。律法の下にある人々には、私自身は律法の下にはいませんが、律法の下にある者のようになりました。それは律法の下にある人々を獲得するためです。
9:21 律法を持たない人々に対しては、――私は神の律法の外にある者ではなく、キリストの律法を守る者ですが、――律法を持たない者のようになりました。それは律法を持たない人々を獲得するためです。
9:22 弱い人々には、弱い者になりました。弱い人々を獲得するためです。すべての人に、すべてのものとなりました。それは、何とかして、幾人かでも救うためです。

これこそパウロが、『私は私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできる。私が弱いときにこそ、私が強いからです』と証していることの具体的な表れでありましょう。

これまで、旧約聖書、そして、新約聖書に記されている主の器として用いられた人々について見てまいりました。そして、これらの人々はすべて、自分の弱さを知って、あるいは、主に弱められた結果、自我が砕かれ、自分自身を主に委ねることによって、主に自分を明け渡すことによって、主から力をいただいて強くされた人々であります。そして、このように、主によって強められた人々を通してのみ、主はご自身のご栄光を表されたのであります。

イエス様は、私たちすべての信者に対しても、これらの人たちと同じように用いたいと望んでおられます。主は私たちをご自分の尊い死によって、罪からあがない出してくださったのは、ただ罪から救い出すためではなくて、私たちを主のしもべとして、主の器として用いようという御心なのであります。そのためには、主によって強めていただかなければなりません。

しかし、主によって強められるためには、まず自分が弱くされ、自分の自我を主に明け渡す必要があるのであります。バプテスマのヨハネが、ヨハネの福音書三章 30 節で、『あの方は盛んになり私は衰えなければなりません』と言っているのはこのことであります。

私たちはどうでしょうか？私たちも心からヨハネのように言うことができるでしょうか？それとも、信じた後も相変わらず強い自我のままで日々、過ごしているでしょうか。

それでは、主が私たちを主の御用のためにお持ちになれないことは、すでにお分かりだと思います。

主イエス様のご再臨の近い今、私たちは自分の中になおも根強く残っている自我を主によって砕いていただき、弱められて自分を主に全て明け渡し、主の御前にへりくだり、み言葉を確信し、御霊に満たしていただくようにして、よって強められて、『私が弱い時こそ、私は強いからです』と証しすることができますように、そして、主の器として用いていただくことができますように、そのことを通して、主にご栄光を表していただくことができますようにと、心から祈りたいと願う次第であります。

最後に、私たちを強くしてくださる主のお約束のみ言葉をお読みして終わります。

イザヤ
41:10 恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。

ありがとうございました。

年老いた私を背負ってまでして、御業を見せてくれる主

2025 年 6 月 1 日、吉祥寺福音集会
重田定義

> イザヤ
> 46:3 わたしに聞け、ヤコブの家と、イスラエルの家のすべての残りの者よ。胎内にいる時からになわれており、生まれる前から運ばれた者よ。
> 46:4 あなたがたが年をとっても、わたしは同じようにする。あなたがたがしらがになっても、わたしは背負う。わたしはそうしてきたのだ。なお、わたしは運ぼう。わたしは背負って、救い出そう。

皆様、おはようございます。おはようございますではなく、こんにちはなりましたけど。もしもし、聞こえますか？聞こえますか？はい。装置の不具合でこのように、遅くなってしまったことをお詫びいたします。半年前もこういうことが起こりまして、今回はうまくいくと思ったんですけど、なかなかそうはいかなくて残念でした。今日も礼拝のお祈りに参加しようと思いましたけれども、これもかなわないで、兄弟方のお祈り、お一人お一人のお祈りに合わせて『アーメン』と唱和することができたことは幸いでございました。

実は、私は一週間前に、右目に眼底出血を起こしまして、視力がたいへん低下してしまいました。そのために、メッセージの原稿も、時々、読み違うことが起こる可能性があります。お聞きづらい点があると思いますが、ご容赦いただきたいと思います。それでは、本題に入らせていただきます。よろしいでしょうか。聞こえますね？

聖書には主なる神様、主なるイエス様が人を選び、その者を導き、その者に御業を見せることによって、ご自分が生きて働かれる神であることをお示しになった例が数多く記されています。そして、主は、今も同じように生きて働いておられるのです。そのことは、集会の兄弟がたによって語られるメッセージや、多くの兄弟姉妹の証しなどからも知ることができます。

そして、なぜかわかりませんが、私のようなものをも選んでくださり、その恵みにあずかりました。私は今年二月で九十八歳になりました。今、振り返ってみますと、私のようなちりに等しい者をも主は愛し、哀れんでくださり、生まれてから今日まで守り導いてくださったことを強く覚えます。

まさに、今、読んでいただきました御言葉通りの恵みが、私のような者にも、与えられていたのであります。五十年前に吉祥寺キリスト教会に集うことになったきっかけも、また、主のお導きによるものであり、そのことについては、以前に証しをさせていただきました。

けれども、私は、愚かにも長いあいだ、主のお導きが主が私を生まれる前から背負ってくださっていたというほど、身近に感じることはできませんでした。お恥かしい限りであります。しかし、年老いて体が衰えた今、とくに、十八年前にサイシティー町田という老人施設に移り住んでから今日まで、私の身の回りに、偶然とは思えないような出来事が次々と起こり、私のような愚かで鈍いものも、これは主が生きて働かれている、主の御業だと気がつき、ようやく、私は、生まれる前から今日まで、主が背負って運んでくださって、この目で働かれる主の御業を見る恵みにあずかることができたのであります。

そして、私はこのことは自分の胸の中だけに納めておくべきではない、多くの方々に知っていただきたい、それが、私にかせられた使命であり、責務であると思った次第でございます。そこで、これからその証しをさせていただきます。

主が働かれた一つ目の出来事。十八年前に当時、八十歳の私は、体調の衰えを感じ、長年、住み慣れた荻窪の家を引き払い、町田市にある入居者、約三百人、スタッフ約百五十人の大きな老人施設、サンシティー町田に入居をいたしました。

数多くある老人施設の中で、どうしてここを選んだのか——はじめは、自分の考えで選んだと思っておりましたけれども、入居した最初から思いがけないことが、次から次へと起こり、初めてこれは、主が自ら、私を背負い込んで、ここに連れてきてくださったのだと分かるようになったのであります。

主が働かれた二つ目の出来事をお話します。入居の際に面接がありました。いろいろと話しているうちに、私は、自然と自分たちはキリスト者であり、死後には、天の御国に召してくださるという希望があるから、死をも恐れることはない。そして、入居者にも幸せに余生を生きるためには何が必要かということを知って欲しいと、自然に話しておりました。

私の話を黙って聞いていた支配人は突然、その話を私たちスタッフにして欲しいと言いました。思いもかけないことでありました。

そして、入居後しばらくして。各地にある十三のサンシティーの介護職員の研修会でした話が、のちの『高齢者の幸せのために』という冊子となって、世に出ることになったのであります。このような施設では、宗教的、政治的なことはタブーとされているはずなのに、どうしてこうなったのか。すべては、主がなさったことなのでありました。

主が働かれた三つ目の出来事。世に出た『高齢者の幸せのために』は、はじめは集会の兄弟姉妹が用いてくださって、サイシティー町田の図書室に置いてももらったり、要望のあった個人の方や、教会、養護学校、福祉施設などにお配りしておりましたけれども、そのうち大口の注文があり、とても私の手では処理しきれなくなりました。そこに、印刷所を経営しておられる横浜集会のある兄弟が、この仕事を引き受けてくださると申し出てくださり、それからは、そちらにお任せしております。

時々、横浜集会からどのぐらいの数の冊子が出ているのか、報告がありましたが、それもなくなりました。ところが、二カ月前、私の手元にも冊子がなくなったので、横浜集会に五十冊ほど送ってほしいと電話したところ、今、在庫ありません。けれども、今でもたくさんの注文が集会の外からもあるので、三千冊を至急、作っているから待

って欲しいとのことでありました。

びっくりしました。そして、私は思いました。主は、そのことを見通された上で十八年前に、私にこの老人施設を選ばせたのではないか。そして、私は初めて主のご計画の深さ、大きさを覚えた次第であります。どうかこの冊子を読まれた多くの方々が、主の救いの恵みにあずかりますように、お祈りしております。

主が働いていた四つ目の出来事。サンシティー町田に入居してからしばらく経ち、クリスマスを祝う催しがホールで開かれました。ジングル・ベルやホワイト・クリスマス、赤鼻のトナカイなどの歌や踊りが、スタッフによってなされ、皆さんが手を叩いたり、一緒に歌ったりして喜んでいました。

その時、私は思いました。このクリスマス・コンサートこそ、絶好の福音の機会ではないだろうか。この機会に本当のクリスマスとは、神の御子イエス様が、すべての人の罪を救うために救い主としてこの世に来られた日をよろこび、祝うことにある、そのことを入居者に知ってもらうようなコンサートにしたい――そのように思ったのであります。

早速、集会の兄弟姉妹にご協力をお願いいたしました。支配人も賛成してくれて、2013 年、今から十二年前に、集会の兄弟姉妹からなる合唱団によって初めてのイエス様のご降誕を祝う数々の賛美の曲を歌うクリスマス喜びのコンサートが開かれました。

主が働かれた五つ目の出来事。コンサートが終わった後、数名の入居者が私のとこに来ました。彼らはこう言いました。私たちも賛美の歌を歌いたい。皆さん、未信者です。驚きました。まさに、イエス様が働いてくださったのです。こうしてサークル活動としてグローセリーベの会が誕生しました。それから、今に至るまで、新型コロナによる中断がありましたけれども、ずっと、グローセリーベの会と、それからクリスマスの喜びのコンサートが続いております。

主が働かれた六つ目の出来事。グローセリーベの会ははじめは数名でしたけれども、だんだんと増えて、会員の数は現在、十六人となりました。これまでに、亡くなった方も六人おられますが、皆さん、毎回、喜んで歌っておられました。イエス様はこの方々を天に召してくださったと、私は確信しております。

会員の中で初めから集っておられ、後に町田集会にも来られるようになった方もいます。会員も高齢化が進み、現在、平均年齢は 85 歳。耳のほとんど聞こえない方もいます。歩行器に頼らなければ、歩けない方もいます。体調を崩す方も増えてきました。しかし、皆さん、練習の初めは、声も小さく弱々しいですけれども、一時間ほどの練習が終わる頃には声も大きく、元気になるのがわかります。賛美の歌の歌詞が、力を与えてくださるのです。練習曲は、日々の歌から、主の愛、恵み、十字架、救い、招き、平安、慰め、復活、天の御国などを選んでいます。

現在、集会から六人の兄弟姉妹が入居者の救いを祈って、暑い夏も、寒い冬も遠方から指導に来てくださっており、会員の皆さんは月一回の練習を楽しみにしています。練習後には、ラウンジで兄弟姉妹がたがコーヒーを飲みながら交わってくださいますが、これも皆さんにとって楽しみになっております。いい福音を伝える機会としております。

このようなさまざまな事実を目にした時、会員の皆さんは、信仰の告白こそされていませんけれども、素直に主を受け入れておられると思わざるを得ません。主が皆さんを背負い、運んでおられるのでありましょう。

主が働かれた七つ目の出来事。クリスマス喜びのコンサートは今では、主催者がサンシティー町田となっております。はじめは、私たちが主催しておりましたけれど、今はサンシティー町田が主催者となっており、支配人をはじめ、この施設を挙げて、喜んで協力をしてくれています。

昨年の 12 月の 21 日に開催されたクリスマス・コンサートでは、グローセリーベの会員、そして、集会の兄弟姉妹がた、そして、支配人を始め、サンシティー町田の職員、合計約六十人の大合唱団がステージに並んで、約一時間にわたって、ハレルヤをはじめ、イエス様のご生誕を祝う多くの曲を合唱しました。

信者も、未信者も一緒に声を合わせて、力強く元気な声で、喜んで顔を輝かせながら、イエス様のご生誕を賛美する――このようなコンサートは、まさに主のお導きによるとしか考えられないと感動いたしました。

以上、サンシティー町田に転居してから今日まで、私の身の回りで次から次へと起こった出来事を思い返しますと、これは主の御業しか考えられません。そして、年老いて、体衰えた私をも、なお背負い運んでくださって、このようなみわざを見せてくださる主に、ただ心から感謝するばかりであります。

イエス様が背負い運んでくださるという恵みは、イエス様を主と信じる者であれば、どなたでもあずかることができます。しかし、主が背負い運んでくださるということを、実体験するためには、ひとつ条件があります。それは、自我が砕かれるということであります。

人生が順風満帆のとき、自分の思い通りにことが進んでる時には、その恵みはなかなかわかりません。福音を述べ伝える時も、自分の知恵に頼ってしまいます。自我が砕かれていないからです。それとは逆に、人生の様々な嵐にあって、自分の無力さを思い知り、自我が砕かれた時に、主が働かれて初めて、主が自分を背負い運んでくださるという恵みを実体験することができるのではないでしょうか。

私たちが、罪とは人間に対する罪ではなく、神様に対する背きの罪であったことを知って悔い改めることができたのも、自分の知恵によったからでしょうか、そうではなくて、イエス様によって愛され、かたくなな自我が砕かれ、弱められたからではないでしょうか。また、イエス様の十字架の救いの御業が、自分自身の罪のためであったと信じることができたのも、自分の知恵によったからでしょうか？そうではなく、イエス様によって愛され、自我が砕かれ、弱められたからではないでしょうか。

また、イエス様に自分を明け渡すこと、自分を委ねることができたのも自分の力や努力によったからでしょうか。そうではなくて、イエス様に愛され、自我が砕かれ、弱い者とされたからではないでしょうか。それらはすべてイエス様が私たちを背負い、運んでくださるためにしてくださったことであります。そして、イエス様は、その者にもっとも相応しい形と方法で、ご自分のみわざを表してくださるのであります。

今年は、世の終わりがますます迫る年になるでありましょう。世界の情勢は、そのことを明らかに示しております。しかし、私たち信者にとっては、これは携挙の時がますます迫っているという希望を示しております。

イエス様に直接お会いできる日が近いという希望の年でもあります。この時にあって、主にある兄弟姉妹がともに、主に背負われ運ばれるという恵みにあずかって、喜びながら、天の御国にたずさえ上げられるように心からお祈りいたします。

ありがとうございます。最後に日々の歌の 137 番の歌詞を読んで終わります。

私のそばには目には見えないが、
愛する主イエスが共におられる。
御国に上りて主の御姿を
この目で拝するその喜びよ。

生まれる前から私を背に追い、
しらがとなるともなお負いたもう。
御国に上りて主の御姿を
この目で拝するその喜びよ。

取るに足りないこの私さえも、
いのちに代えて贖いたもう。
御国に上りて主の御姿を
この目で拝するその喜びよ。

ありがとうございました。

自分を誇る人間と神を誇る人間

2025 年 7 月 6 日、町田福音集会
重田定義

詩篇
20:7 ある者はいくさ車を誇り、ある者は馬を誇る。しかし、私たちは私たちの神、主の御名を誇ろう。

ありがとうございました。今日は今、読んでいただいたこの詩篇の御言葉から、人間には自分を誇る人間と、神を誇る人間の二通りの人間があるということにつきまして、ご一緒に考えたいと思います。

まず、自分を誇る人間というのはどういう人間でしょうか。

今、読んでいただいた御言葉にある『いくさ車』というのは、当時、いくさのために使われていた二頭の馬に引かれた二輪馬車のことを言います。そのいくさ車を誇るというのは、戦いに強い強力ないくさ車を持っていると自分を誇るということです。また、馬を誇るというのは、戦いに強い俊足な強靭な馬を持っていると、自分を誇るということであります。

このように、昔は、強力ないくさ車を持つことや、優れた馬を持つことは、自分の力を誇示するものであって、多くのいくさ車や優れた馬を持っている人間ほど、強力な支配者としての地位を保つことができたのであります。

これは、現代でも同じです。昔のいくさ車や馬は、現代では、強い権力、高い地位や身分、立派な経歴、豊かな財産などに置き換えられるでありましょう。そして、現代の人間は、これらを持っていることによって、自分を誇っているのではないでしょうか。

けれども、人間が誇りとするこれらのものは、いったい私たちにどんな保障を与えてくれるのでありましょうか。

イザヤ
31:1 ああ。助けを求めてエジプトに下る者たち。彼らは馬にたより、多数の戦車と、非常に強い騎兵隊とに拠り頼み、イスラエルの聖なる方に目を向けず、主を求めない。

31:3 エジプト人は人間であって神ではなく、彼らの馬も、肉であって霊ではない。主が御手を伸ばすと、助ける者はつまずき、助けられる者は倒れて、みな共に滅び果てる。

これは、イスラエルが、強国のアッシリアに攻められて、エジプトに助けを求めた時のことであります。イスラエルがエジプトに助けを求めた理由は、エジプトが、多数の戦車と強力な騎兵隊を持っている強国であったからであります。

けれども、本当にイスラエルを助けることができるのは、イスラエルをご自分の民として選ばれた主なる神様なのであり、神様は、これまで何度となく、イスラエルの危機を救ってくださいました。しかし、イスラエルは、そのことをすっかり忘れて、多数の戦車や強力な騎兵隊を持つエジプトに頼ってしまったのです。そして、神様は、エジプトに頼っても無駄だと、自分が手を伸ばせば、助けるエジプトも、助けられようとしているあなたがたイスラエルも、ともに滅び果ててしまうからだと言っておられるのであります。

次に、冒頭の御言葉にあります『私たちは私たちの神、主の御名を誇ろう』ということを、考えてみたいと思います。

私たちの神様とは、聖書の神、すなわち、天地万物の造り主であり、支配者である永遠に生きる偉大な神様であります。その神様を誇る人間とは、どういう人間でありましょうか。また、神を誇る人間となるためには、いったいどうしたら良いのでありましょうか。

エレミア
9:23 主はこう仰せられる。「知恵ある者は自分の知恵を誇るな。つわものは自分の強さを誇るな。富む者は自分の富を誇るな。
9:24 誇る者は、ただ、これを誇れ。悟りを得て、わたしを知っていることを。」・・・・

主なる神様は、誇る者は、自分の知恵や強さを誇るのではなくて、ただ悟りを得て、ご自分を、すなわち、神様を知っていることを誇れとおっしゃっているのであります。

ここで大切なことは、神様を誇るには、ただ神様を知識として知るのではなくて、悟りを得て知ることなのであります。では、悟りを得て知るとは、いったいどういうことなのでありましょうか。その例を、ピリピ人への手紙の 3 章のパウロの証しから見てみたいと思います。パウロはこう証しております。

ピリピ
3:5 私は八日目の割礼を受け、イスラエル民族に属し、ベニヤミンの分かれの者です。きっすいのヘブル人で、律法についてはパリサイ人、
3:6 その熱心は教会を迫害したほどで、律法による義についてならば非難されるところのない者です。
3:7 しかし、私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。
3:8 それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。・・・・

このように証しをしております。パウロは混じり気のない生粋のユダヤ人であり、中でも、ベニヤミン族というイスラエル民族の中でも誇り高い部族であり、律法、すなわち、神様からイスラエルの民に与えられた命令、掟を忠実に守ろうとするパリサイ派というグループに属しておりました。

それゆえ、イエス様を救い主と信じる人たちを、律法に反する敵として迫害することは正しいと信じて、それを実行しておりました。しかし、これらの誇るべきパウロの血統や経歴も、彼が復活のイエス様に出会って、霊が開かれ、自我が粉々に砕かれて、パウロの言葉をそのまま引用すれば、『私の主であるキリスト・イエスを知ったこと

のすばらしさのゆえに、私にとって得であったこれらのものを、すべて損と』思うようになりましたと、告白するまでに、変えられたのであります。

そして、パウロは、それまで律法の敵と思い込んでいたイエス様を、『私の主、私のキリスト・イエス』とお呼びするように一変しました。これが、悟りを得て、主を知るということであります。

悟りを得て、イエス様を主と信じたパウロは、エペソ人の手紙の２章でエペソの信者や教会の信者に対して、次のように言っております。

> エペソ
> 2:8 あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。
> 2:9 行ない（・・・・これは良き行い・・・・）によるのではありません。だれも誇ることのないためです。

そのように救いというのは、神様の恵みによる賜物なのであって、自分の行いが良かったから救われたと自分を誇ることのないようにと、信者を戒めております。

そして、さらに、ガラテアの教会の信者に送った手紙の６章の 14 節では、私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外、すなわち、私たち人間の神様に対する背きの罪を身代わりに負って十字架にかかってくださった主イエス様以外に、誇りとするものは決してあってはなりませんと、言い切りました。

> 【参考】ガラテア
> 6:14 しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあってはなりません。この十字架によって、世界は私に対して十字架につけられ、私も世界に対して十字架につけられたのです。

パウロのように私たちは、イエス様だけを誇りとするということができるでしょうか。また、そのように言い切るにはいったい、何が必要なのでありましょうか。

ここで、私自身がどのようにして、イエス様を誇るようになったかを証しをさせていただきます。

私は、子供の頃は日曜学校に通い、医学生になってからは、教会に集い、洗礼――これは、滴礼による洗礼でしたけれども――洗礼も受けました。しかし、ある問題で、牧師を批判して教会を離れてからは、教会制度に反対し、無教会主義を掲げた内村鑑三や矢内原忠雄、塚本虎二などの書いた著書を書いた読んで満足する、そのような自己中心的な信仰にとどまっておりました。

けれども、そのような私にも誇りが与えられたのであります。

私たち夫婦が結婚してから十年目に、一人の娘が与えられました。私たちは喜んで、真理という名前をつけました。真理は幼い頃からたいへん賢く、また、素直で心の優しい子として、周囲から愛されておりました。そして、私はそのような娘を自分の誇りとするようになったのであります。

私は、娘に大きな期待を持ち、娘のためと自分勝手に考えて、娘と相談もしないで、自分の立てた計画を娘に押し付けました。娘が、黙って私の計画に従っておりましたので、私は何の問題もないと思っておりました。しかし、それは大きな思い違いでありました。娘は、懸命に私の言うことを守ろうとしていたのであります。私は、そのことに気がつかずに、娘に重圧をかけ続けていたのです。

娘は、私の勧めた大学に入学し、寮生活を始めましたけれども、間もなく重症の鬱病にかかってしまいました。あの元気な子が・・・・と、私は驚き、すぐに大学の精神科に治療をお願いし、また、親子ともに吉祥寺キリスト集会に導かれ、信仰生活を始めました。

娘は、熱心に聖書を読み――これは今、娘の聖書を開けてみますと、赤い線がいたる所に引いてあって、どんなに一生懸命に聖書を読んでいたかが分かります――そのように聖書を読み、ベック兄を始め、集会の兄弟姉妹に愛され、交わりを楽しんでいるようでありました。娘の病は解放に向かったように見え、私はほっと安心しました。しかし、娘の苦しみは、続いていたのであります。

娘の苦しみを見ておられた主は、愚かな私に娘を任せておくことはできないと、突然、高松のベック兄の知人の宣教師の下でリハビリをしていた娘を、みもとに引き上げられました。私の唯一の誇りは、こうして取り去られました。

私は、悲しみのどん底に沈みました。私は、主からお預かりした娘を育てることができなかったばかりか、その命すら守ってやれなかったという大きな罪を犯してしまったのです。

私の自我は、粉々に砕かれました。娘のために生きるという希望を失った私は、呆然自失の日々を過ごしていました。頭が冴えて、夜も眠れませんでした。これまで娘と過ごした思い出が走馬灯のように現れては消えていきました。主はそのような私を憐れみ、なおも愛してくださいました。

そして、お前の罪は、わたしの命によって贖った。これからは、わたしのために生きなさい、わたしに従って生きなさいと、声をかけてくださいました。なんという温かい御声だったでありましょう。私は霊が開かれて、こんな愚かな私をもお見捨てにならずに、尊いいのちによって贖ってくださってまでして愛してくださる主こそ、主イエス様こそ、自分の誇るべき唯一のお方であると示され、イエス様を誇る者へと変えられました。

そして、これからは、古い自分は死んで、新しく生まれた者として、すべて、イエス様にお委ねして生きていくことだけが、イエス様の愛に報いる道であると決心して、今日に至った次第であります。

旧約聖書のダビデをはじめとする預言者たちや、新約聖書のパウロや弟子たちもまた、様々な試練や患難に遭い、自我が砕かれ、霊が開かれて、イエス様がそのよう

な時も自分を守ってくださったことを知って、イエス様の御名を誇る者へと、変えられたのだと思います。

私たち信者は、信仰の歩みを続ける中で、様々な試練や　患難が生じます。それは、私たちの肉にとっては、辛く苦しいものです。しかし、そのような試練、患難は、私たちが主を信じてはいても、まだ、自分の中に残っている自我を砕き、それまでは、自分の思いを中心に生きてきた私たちを、主のために生きるように導いてくださる主の愛のむちなのであります。

しかも、主は、私たちが耐えられないような試練、患難は、お与えになりません。こうして私たちは、主に導かれ、自我砕かれて、自分の誇りを捨て、主の御名のみを誇る者へと変えられていくのであります。

最後に、詩篇の五章の十一節をお読みいたします。

> 詩篇
> 5:11 こうして、あなたに身を避ける者がみな喜び、とこしえまでも喜び歌いますように。あなたが彼らをかばってくださり、御名を愛する者たちがあなたを誇りますように。

ありがとうございました。

偶像を警戒しなさい

2025 年 10 月 5 日、町田福音集会
重田定義

ヨハネの手紙第一
5:21 子どもたちよ。偶像を警戒しなさい。

それでは、これから少し時間をいただいて、ご一緒に聖書から学んでみたいと思います。

広辞苑という辞書には、偶像とは、『木や石や土や金属などで神、神仏に形取り、作った像』とあります。また、大きな権力や能力を持った生きた人間も偶像になります。これは、現在も、政治や宗教の分野などで、少なからず見られます。問題なのは、人間が偶像を礼拝したり、崇拝したり、仕えたりすることであります。

イザヤ書の 44 章には、偶像礼拝がいかに愚かであるかを、揶揄した箇所があります。それは、次のようなものであります。

人間は、木を植え、育てて、たきぎにしたり、燃料にしたりする。そして、その残りで神を創り、それに、ひれ伏して拝み、『私を救ってください』と言う。彼らの目はふさがって見ることもできず、ふさがって悟ることもできない。

まったく、その通りであります。しかし、神様が偶像礼拝を固く禁じておられることを知っている者でも、その戒めを破ってしまうことが、しばしば起こります。

今日は、ヨハネが初代教会の信者に宛てた手紙の結びとして記した、今、読んでいただきました御言葉から、イエス様を信じる者が、いかに偶像を警戒しなければならないかということを考えたいと思います。

神様は、私たち人間に、ご自分だけが唯一、真の生ける神であることを、次のように仰せになりました。

イザヤ
45:22 地の果てのすべての者よ。わたしを仰ぎ見て救われよ。わたしが神である。ほかにはいない。

そして、この神様は、ご自分が選ばれたイスラエルの民に、指導者、モーセを通して、私の言うことを守りなさいと、十戒、すなわち、十の戒めの言葉を与えられました。その一番目と二番目の戒めは、次のようなものでありました。

出エジプト記
20:3 あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。
20:4 あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の下の水の中にあるものでも、どんな形をも造ってはならない。
20:5 それらを拝んではならない。それらに仕えてはならない。あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神、わたしを憎む者には、父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし、
20:6 わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、恵みを千代にまで施すからである。

このように、神様はもっとも大切なことは、ご自分だけに仕えることであり、決して偶像に仕えてはならないと、厳しく命じられたのであります。

しかし、神の民として選ばれたイスラエルの民は、この戒めを破って、何度も偶像を作って、それを神として拝み、これに仕えるという愚かな罪を犯し、その度に神様から厳しく裁かれました。

そのような事例のうちから、イスラエルの王、ソロモンについて見てみましょう。

ソロモンは、ある夜、夢を見ました。夢の中で、神様はソロモンに、『あなたに何を与えようか、願え』と仰せになりました。彼は次のように答えました。列王記の第一、三章の中から、要約してお話しいたします。

『神様、あなたは私の父ダビデに代わって、このしもべを王とされました。しかし、私はまだ若く、未熟なもので、このおびただしいイスラエルの民を裁くすべを知りません。どうか教えてください。』

神様は、このようにへり下ったソロモンの態度を喜ばれ、彼に非常な知恵を与えられました。彼は、その知恵を使って、イスラエルの国を繁栄させ、彼の名声は海外にまで及びました。

しかし、ソロモンは晩年になって、神様の戒めに背き、平定した国々の多くの女を妻やそばめとして愛し、その結果、彼女たちの礼拝している偶像の神々に、心を傾けてしまったのであります。列王記の第一、十一章には、次のように書いてあります。

第一列王記
11:9 主はソロモンに怒りを発せられた。それは彼の心がイスラエルの神、主から移り変わったからである。主は二度も彼に現われ、
11:10 このことについて、ほかの神々に従って行ってはならないと命じておられたのに、彼は主の命令を守らなかったからである。
11:11 それゆえ、主はソロモンに仰せられた。「あなたがこのようにふるまい、わたしが命じたわたしの契約とおきてとを守らなかったので、わたしは王国をあなたから必ず引き裂いて、あなたの家来に与える。
11:12 しかし、あなたの父ダビデに免じて、あなたの存命中は、そうしないが、あなたの子の手からそれを引き裂こう。

『彼の子供の手から』、神様がそのようにおっしゃった、『引き裂こう。』ソロモンの王国を引き裂くとおっしゃったんですね。

この神様の御言葉の通り、ソロモンの死後、父ダビデが統一したイスラエル王国は、北のイスラエルと南のユダに分裂しました。

このソロモンのケースは、私たちイエス様を信じる者に、大きな警告を与えるものではないでしょうか。私たちキリスト者も、偶像に心を奪われ、神様、イエス様から心が離れることがないでありましょうか。

私たちは冒頭で、ヨハネが、『子供たちよ、偶像を警戒しなさい』と言っていることに、留意しなければいけません。『子供たちよ』というのは、私たち、イエス様を信じる信者たちのことであります。

イエス様は、次のようにおっしゃっています。

> マタイの福音書
> 6:24 だれも、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません。

富というのも、偶像の一つになります。このようなことを仰っております。

私たちキリスト者も、イエス様に祈る一方で、知らず知らずに、偶像に心を奪われていることはないでしょうか。

世界一の知恵を持ったソロモンですら、神様から心が離れ、神様の忌み嫌われる偶像に心を奪われてしまったということを知って、私たちはあらためて、偶像の恐ろしさを覚えます。

また、ソロモンのケースから、どんなに優れた人間でも、一旦、心を奪われた偶像から、自分の知恵や力で離れることは、極めて難しいということも知るのであります。

では、どうしたら私たちは、この恐ろしい偶像から、自分を守ることができるのでありましょう。

それには、いつも霊の目をはっきり覚ましていることが必要なのであります。なぜならば、偶像に心が奪われるのは、必ず私たちの霊が眠っている時、霊が衰えている時だからであります。

そして、そのためには、信じる者に与えられた御霊が、聖霊が、自分の霊を強めてくださるように、絶えず御霊の助けと導きを祈るということが必要になってまいります。

私たちの霊は、御霊に満たされている時は、生き生きとした元気に満ちておりますけれども、イエス様にしっかり結びついていなければ、どんどん衰えてしまい、簡単にサタンの餌食となり、偶像に囚われてしまうのであります。

ソロモンのケースに戻ってみましょう。

神様は、警告なしにソロモンを裁かれた のではありません。列王記の第 11 の 9 節から 10 節には、主は二度も、彼、すなわち、ソロモンに現れ、このことについて、他の神々に従ってはならないと命じておられたのに、彼は、その主の命令を守らなかったとありました。

神様は、ソロモンに一度ならず、二度までも警告されたのに、ソロモンの霊が衰えていたために、神様の警告が聞こえなかったのであります。

私たちも、偶像に心を奪われた時には、神様は、私たちに警告してくださいます。そして、もし私たちが警告を受け入れない時には、神様は、私たちを懲らしめられます。

神様の懲らしめは、私たちの肉にとっては、大きな苦痛となります。しかし、私たちが、この苦痛は、神様の愛から来た警告であることを知って、偶像に心を奪われていたことに気がついて、悔い改めて、直ちに偶像を捨てた時に、神様は、その私たちの悔い改めを、喜んで受け入れてくださるのであります。

神様は、次のように約束しておられます。

『イスラエルよ。』イスラエルとありますが、神様の民であり、そして、イエス様を信じる私たちのことです。

> ホセア
> 14:1 イスラエルよ。あなたの神、主に立ち返れ。あなたの不義がつまずきのもとであったからだ。
> 14:2 あなたがたはことばを用意して（・・・・ことばというのは、悔い改めの言葉のことです・・・・）、主に立ち返り、そして言え。「すべての不義を赦して、良いものを受け入れてください。私たちはくちびるの果実をささげます。

『くちびるの果実』というのは神様への賛美のことです。

> 14:3 アッシリヤは私たちを救えません。・・・・

アッシリヤというのは強い力のある人間、すなわち、偶像のことです。

> 14:3 アッシリヤは私たちを救えません。私たちはもう、馬にも乗らず、自分たちの手で造った物に『私たちの神』とは言いません。・・・・

『馬にも乗らず』とありますが、この馬というのは、この世の力のことです。

> 14:3 ・・・・自分たちの手で造った物に『私たちの神』とは言いません。みなしご（・・・・すなわち、頼る者もいない弱い無力な者、外国の保護や援助を断ち切ったイスラエルのことを指しておりますが、みなしご・・・・）が愛されるのはあなたによってだけです。」

このようにホセア書にあります。

> ホセア
> 14:4 わたし（・・・・すなわち、主なる神さま・・・・）は彼らの背信をいやし、喜んでこれを愛する。わたしの怒りは彼らを離れ去ったからだ。

> ホセア
> 14:8 エフライムよ。（・・・・エフライムというのは神様の民、すなわち、イエス様を信じる私たちのことで

す・・・・）もう、わたしは偶像と何のかかわりもない。わたしが答え、わたしが世話をする。わたしは緑のもみの木のようだ。あなたはわたしから実を得るのだ。
14:9 知恵ある者はだれか。その人はこれらのことを悟るがよい。悟りある者はだれか。その人はそれらを知るがよい。主の道は平らだ。正しい者はこれを歩み、そむく者はこれにつまずく。

なんという愛に満ちたありがたい神様のお言葉でありましょうか。

神様はここで、知恵ある者は誰か、その人はこれらのことを悟るがよいと、仰せになっています。

ソロモンの知恵は、自分で得たものではなくて、神様から与えられた賜物でありました。その知恵を、彼は、神様の栄光のために用いないで、自分の栄光のために用いてしまって、ついには、心が神様から離れて、偶像に傾くようになってしまったのであります。

私たちにも、神様は、一人一人、その人にふさわしい知恵と、能力を与えてくださっております。世の終わりの近い今の時にあって、私たちキリスト者は、偶像――とくに生きた偶像ですね――に、心を奪われることがないように、そして、神様から与えられた知恵と能力を、自分のためにではなくて、ただ主のために用いることができますように、御霊のお導きを、これから祈る次第であります。

ありがとうございました。

自分を誇る人間から神を誇る人間へ

2025 年 10 月 12 日、吉祥寺福音集会
重田定義

詩篇
20:7 ある者はいくさ車を誇り、ある者は馬を誇る。しかし、私たちは私たちの神、主の御名を誇ろう。

本当にお久しぶりでございます。

私は、二ヶ月前に、眼底出血を起こしまして、右側の目があまり見えないです。ところが、左の方もなんだかボケてきましてね。これはいかんと思うんですが、ともかく、見える間は、お役をさせていただきたいなと思っておるんですが、そういうわけで、メッセージの原稿を作って、これからお読みしますけども、なんとなく、字がボケてましてね。果たして正確に読めるかどうかも、わからない状態なんですけども、お許しください。

あらためて、お久しぶりでございます。

吉祥寺集会の兄弟姉妹には、何年ぶりでしょうか。十年近くお目にかかってないんのではないかと思うんです。本当に懐かしく、ボケた目でありながら、お一人お一人のお顔を何とか見分けることができました。

けれども、吉祥寺集会の兄弟姉妹の中には、お名前を挙げますと古谷兄姉とか山田渉兄とか、岩本姉妹、あるいは、大場姉妹のように、サンシティ――私たちが入居しております――サンシティ町田のグローセリーベの会という賛美の会に、毎月一回、指導に来てくださっております。

そして、また毎年、行われますサンシティ町田のクリスマス喜びのコンサートには、三十人ぐらいの多くの兄弟姉妹が、合唱団として来てくださっています。ですから、これらの兄弟姉妹にはお会いしていましたけれども、その他の吉祥寺集会の兄弟姉妹方には、本当に久しぶりにお会いできました。

だいぶ、頭が白くなったり、薄くなったりした方もおられますが、これは当然のことであります。そういうわけで、ただこの建物は、私はね、驚いたんです。今日、この集会場、なんか以前よりも、きれいになっちゃった。どういうわけですかね。なんか設備も、よくなったんじゃないですか。そのぐらい、ボケてますが、そういうことで、本当に新鮮な思いで今日は参りました。

本来ならばですね、礼拝からご一緒にさせていただきたかったんですけれども、この携帯酸素ボンベの容量に限りがありましたので、残念ながら、断念いたしました。

私も来年の二月には、九十九歳になります。召される前に一度、吉祥寺集会の皆様にお会いしたいなと思っておりましたので、本当にこの機会を与えてくださったことに、心から、主に感謝いたします。

今日は、今、公人兄に読んでいただきましたこの詩編の御言葉からですね、人間には、二通りの人間、すなわち、自分を誇る人間と、神を誇る人間があること、そして、次に、自分を誇る人間から、神を誇る人間へと変えられること、そして、それにはいったい何が必要かということについて、ご一緒に考えたいと思います。

まず、自分を誇る人間というのは、どういう人間なのでありましょうか。

先ほど読んでいただいた御言葉の中にすらあります。いくさ車というのが出てきますね。当時、戦のために使われておりました。馬にひかれた二輪馬車のことを言いますけれども、そのいくさ車を誇るというのは、戦に強い強力ないくさ車を持っていること、そして、持っているということは、それが、自分の誇りになる。

また馬を誇るというのも、やはり、戦いに強い足の丈夫な強靭な馬を持っているということを誇る、それが、自分の誇りになっているということを意味していると思います。

このように昔は、強力ないくさ車を持つことや、優れた馬を持つことというのは、自分の力を誇示するものであって、多くのいくさ車や、優れた馬を持っている人間ほど、強力な支配者としての位置を保つことができたのであります。

しかし、これは、現代でも同じではないでしょうか。昔のいくさ車や馬は、現代では、強い権力、高い地位や身分、立派な経歴、豊かな財産などに置き換えられるのではないでしょうか。それではなくても、他人と比べて、少しでも自分に優れたものがあると思えば、すぐに、自分を誇る、これが私たち人間ではないでしょうか。

結局、そういうことは、人間というのは誰でも、多かれ少なかれ、自分を誇るものだと言えると思います。けれども、人間が誇りとするこれらのものは、いったい私たちにどんな保障を与えてくれるのでありましょうか。

イザヤ書
31:1 ああ。助けを求めてエジプトに下る者たち。彼らは馬にたより、多数の戦車と、非常に強い騎兵隊とに拠り頼み、イスラエルの聖なる方に目を向けず、主を求めない。

31:3 エジプト人は人間であって神ではなく、彼らの馬も、肉であって霊ではない。主が御手を伸ばすと、助ける者はつまずき、助けられる者は倒れて、みな共に滅び果てる。

これは、イスラエルが、強国アッシリアに攻められて、エジプトに助けを求めた時のことであります。イスラエルが、エジプトに助けを求めた理由というのは、エジプトが多数の戦車と強力な騎兵隊を持っている強国であったからであります。

けれども、本当にイスラエルを助けることができるのは、イスラエルをご自分の民として選ばれた主なる神様なのであり、神様はこれまで何度となく、イスラエルの危機を救ってくださいました。

しかしながら、イスラエルは、そのことをすっかり忘れて、多数の戦車や強力な騎兵隊を持つエジプトに頼ってしま

ったんですね。そして、神様は何とおっしゃいましたか？エジプトに頼っても無駄だ、自分が手を伸ばせば助ける。エジプトも、助けられようとするイスラエルもともに、滅びてしまうからだと、そういうふうに言っておられるのであります。

次に、冒頭の先ほど読んでいただきました御言葉にある、『私たちは私たちの神、主の御名を誇ろう』ということを考えてみたいと思います。

私たちの神様とは、言うまでもなく、聖書の神、すなわち、天地万物の創造主であり、支配者であるばかりか、愛と恵みに満ちた神様であります。

その神様を誇る人間とは、どういう人間でありましょうか。そしてまた、神を誇る人間となるためには、どうしたらよいのでありましょうか。

神様を誇る人間も、もとは、全て自分を誇る者でありました。しかしながら、ある時、神様に目を止めていただいて、自我を砕いていただいたので、その結果、神様を誇ることができるようになったのであります。

パウロも、その一人でありました。パウロは、混じりけのない生粋のユダヤ人であり、中でもベニヤ民族というイスラエル民族の中でも誇り高い部族であり、律法、すなわち、神様からイスラエルの民に与えられた命令、規定を忠実に守ろうとするパリサイ派というグループに属しておりました。

それゆえ、イエス様を救い主と信じる人たちを、律法に反する敵として迫害するということが正しいと信じて、それを実行しておりました。

しかし、これらの誇るべきパウロの血統や経歴も、彼が復活のイエス様に出会って、自我が粉々に砕かれ、ガラテア人の手紙の 2 章 20 節で、『私はキリストと共に十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私の中に生きておられるのです』と、証しすることができるようになりました。

> 【参考】ガラテア
> 2:20 私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

これこそ、自我が砕かれたものにしか言えない言葉ではないでしょうか。パウロはさらに、ガラテアの教会の信者に送った手紙の 6 章 14 節では、私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外、すなわち、私たち人間の神様に対する背きの罪を、身代わりによって、十字架にかかってくださったその主イエス様以外に、誇りとするものは、決してあってはなりません。このように言い切っております。

> 【参考】ガラテア
> 6:14 しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあってはなりません。この十字架によって、世界は私に対して十字架につけられ、私も世界に対して十字架につけられたのです。

パウロのように、イエス様だけを誇りとすると言い切ることができるためには、イエス様に目を止めていただいた私たちも、自我が砕かれることが必要なのではないでしょうか。

私自身も、なぜか分かりませんけれども、主に目を止めていただいて、自分の身勝手な育て方をしたために、私が誇りとしていた愛する一人娘を失うという大きな痛みを通して、自我が砕かれました。そして、自分を誇る者から、主を誇る者へと変えられた一人であります。

そして、パウロには到底、およびもつきませんけれども、自分は、キリストともに十字架につけられた、もはや自分が生きているのではなくて、キリストが、自分の中に生きているのだということを、証しすることができるように、これからはすべて、主におゆだねして生きていくことだけが、イエス様のご愛に報いる道であると、決心いたしました。

五十六歳の時であります。その後も、主の御心を嘆かせることの多い私でしたけれども、主はそのような私をも愛し、背負い、運んでくださって、数え切れないほどの主の御業を拝するという恵みに預かりました。聖書の学びを通して、集会の主にある多くの兄弟姉妹方との霊的な交わりが与えられたということも、そのひとつであります。

今日は、その恵みを体験させていただいたもう一つの例をご紹介したいと思います。それは先ほども少しふれましたサンシティ町田のクリスマスよろこびのコンサートのことであります。

私どもが入居しておりますサンシティ町田は、全国に数多くある高齢者施設の一つであります。こういう施設では、宗教的、政治的な行事というのは、タブーとされております。サンシティ町田も同様でありました。

しかし、十五年前から突然、変わりました。主が介入された、主が働かれたと思わざるを得ないのであります。そのことをこれから順番にお話していきたいと思います。

かつて、クリスマス・シーズンには、サンシティ町田でも、クリスマスを祝うコンサートが開かれておりました。しかし、それは、ジングル・ベルとか、サンタクロースが出てくるという世俗的なものでありました。

ところが今、申しましたように、十五年前から主が働かれ、そして、集会の兄弟姉妹がたの大きな祈りと支援を受けて、変わったんですね、そういうふうに。すべてですね。どういうふうに変わったかというと、ハレルヤを含めて、イエス様を賛美する歌ばかり合唱するという、そういうコンサートに変わってしまったんです。

その中には、日々の歌の『理解できないが』があります。どういう歌かご存知だと思いますけど、その内容を申しますと、イエス様が十字架で血を流して、私の罪をあがなわれて、すべて赦してくださったということは、到底、理

解できないけれども、それは真のことである。聖書が語る御言葉は、唯一の真理である。これも、真のことであるという内容の歌なんですね。

この歌について、実は、次のようなことが起こったんです。

ある年のクリスマス・コンサートの時でありました。一人の中年の女性のスタッフ――彼女は、チーム・リーダーだったと思うんです――が、私のところに来まして、私はこの歌が大好きですと、言ったんです。驚きました。

表現こそ違いますが、これは立派な信仰告白なんです。本当に私は嬉しくなりました。主の御業が彼女に働かれたなということを感じ、本当に心から、主に感謝をいたしました。

このコンサートの合唱は、入居者、そして、スタッフ、そして、集会の兄弟姉妹からなる六十人ほどの大合唱団なんですね。ステージにずらっと並んで歌います。グロースリーベのメンバーの方の中には、車椅子の方もいます。耳の遠い人もいるんですけど、それでも一緒になって歌ってくれます。

そして、聴衆の入居者の皆さんには、一人一人、歌詞集が配られております。聞くだけでなくて、一緒に歌ってくださいと言うと、一緒に歌う人も出てきました。

歌詞集をどうして配ったかと言いますと、そのコンサートで聴くだけではなくて、それぞれの部屋に帰って、あらためて、歌詞を読んでくださいという願いが込められていたからであります。

このような高齢者施設で、未信者も、信者も一つになって、主のご生誕を祝う、喜びうたう、しかも、十五年間も続くというようなコンサートは、なかなか他には、見られないのではないでしょうか。まさに、主の御名は誇るべきかなであります。

遠くの方はご覧になりにくいかもしれませんが、これは、今年のクリスマス・コンサートの時のポスターなんです。一人のスタッフが、数日前に私のところに来まして、『ポスターができました、見てください』と言うんですね。『なんだ、10 月なのに、ちょっと早すぎるんじゃないか』と、思ったんですけれども、嬉しかったですね。彼女は、一生懸命、忙しい中を作ってくれたんです。

可愛らしいポスターです。十二月になったら施設の各所にこれを貼るそうです。これは差し上げます、後で、ごゆっくりご覧ください。そういうふうなこともありました。

今までお話ししてまいりましたことから考えますと、このサンシティ町田に起こされた一連のこと、これは到底、人間の知恵や力でできるものではない。極めて緻密に、計画されたものではないかと思わざるを得ません。

到底、これは、人間の知恵や力でできるものではない。全知全能の主の恵みの御業によって、初めて可能になるものではないかと思わざるを得ません。

集会のほとんどの兄弟姉妹は、これまでに様々な辛い苦しみとか痛みを経験された、あるいは、今も経験されておる方もおられるのではないかと思います。それは、主が、その兄弟姉妹に目を留めておられる証拠なのであります。その兄弟姉妹を、しもべとして、弟子として、あるいは、友として用いて、自分の栄光を現わそうと考えておられるのであります。

しかし、そのためには、まだ私たちの中に残っております この自我を砕いて、自分を誇る者から、神を、主を誇る者へと変える必要があるんです。

私たちの経験する痛み、苦しみというのは、そのための訓練ではないでしょうか。主による自我の砕き、これは私たちの肉にとっては、確かに、辛く痛いものであります。しかし、主は、私たちが耐えられないような訓練を、決してお与えになりません。ですから、私たちは、それを嘆き、悲しむのではなくて、愛のむちとして、恵みとして、お受けいたしましょう。

こうして私たちは、自我が砕かれて、自分を誇る者から、主の御名のみを誇る者へと、変えられていくのであります。

もう最後になりました。最後にもう一回、最初の御言葉をお読みして終わりたいと思います。

詩篇
20:7 ある者はいくさ車を誇り、ある者は馬を誇る。しかし、私たちは私たちの神、主の御名を誇ろう。

ありがとうございました。

町田キリスト集会はいかに主に愛され祝福されている集会か

2026 年 1 月 4 日、町田福音集会
重田定義

> マタイ
> 16:18 わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。

新しい年を迎えました。今年もよろしくお願いいたします。

年の初めにあたりまして、今日は、私たちの集う教会がいかに主に愛されている、祝福された集会かということを、ご一緒に考えて、主に感謝したいと思います。

まず第一は、町田キリスト集会は、主イエス様によって建てられたという点であります。

町田集会の歴史については、以前、黒田兄がメッセージをされましたけれども、ここであらためて、その誕生から、お話したいと思います。

町田集会という集会は、初めから存在していたのではありません。影も形もありませんでした。私は、それまで住んでいた荻窪から 18 年前に、サンシティ町田という老人施設に移りました。その時に、最寄りの集会が相模原集会だったので、そこに集うようになりました。吉祥寺集会は、ここからは車でも一時間あまりかかりますので、通いきれないなと思って探したところ、相模原集会が 20 分くらいで行けるところだったので、そこに集うことになったんです。

ところが、ある日、ベック兄から突然、相模原集会から出るようにと言われました。驚きました。その理由は、相模原集会の建物の持ち主である兄弟が、集会に使う部屋の改造に、献金を使っていたこと、また、相模原集会は吉祥寺集会に属しているのではなく、独立した集会であり、勝手にメッセンジャーを送ってきたのだというふうなことを、彼が言っていた。そういうことでありました。

約二十名が相模原集会から出たように思います。この兄弟姉妹が、後に町田集会を形成する最初の兄弟姉妹でありました。みんなで手分けして、次の集会所を探しました。けれども、なかなか見つかりません。当然であります。

ある日、桜美林大学が、京王多摩センター駅の近くにある旧厚生年金施設を買って、陶芸教室とか書道教室などのいろいろなサークルに貸しているという情報が入りました。そういう部屋の一つでも借りたいと思いまして、数名の兄弟がたと早速、支配人に会いに行きました。

私たちの話を聞いた支配人は、それなら、結婚式場に使っていたチャペルがあるから、それを貸しましょうと言ってくれました。夢かと思いました。まさに、礼拝にはぴったり、集会にはぴったりであります。

『ただし‥‥』と彼は言いました。正面玄関に、当日の行事を知らせる縦看板を出さなければならない。それに、町田キリスト集会と書くと、反対されるかもしれない。そのように言われました。皆で考えました。そして、その結果、『聖書を学ぶ会』という名前で看板を出そうと、言うことにしました。しかし、これも最初のうちで、まもなく、『町田キリスト集会』と堂々と、書くようになりました。問題は起こりませんでした。

町田キリスト集会の公のこれが誕生であります。はじめは、チャペルだけでしたけれども、隣の部屋も、借りることができ、子供たちのための日曜学校も行われるようになりました。礼拝、福音集会、兄弟姉妹に分かれての祈り会、すべて、ゆとりのある部屋で行われ、私たちは主の恵みに、心から感謝しました。

また、この施設には、大きな劇場型ホールやレストラン、そして、ホテルもありました。そこで、これを利用して、伝道集会をしようということになりました。町田喜びの集いの始まりです。

みんなで力を合わせて、準備しました。土曜日の午後と、バイキング形式の夕食を挟んで、夜の二回の福音集会、そして、遠方からの人は一泊して翌朝の礼拝と、充実した、伝道集会でありました。会場はいつも、人があふれ出るほどでありました。

このような祝福された状況が、二年くらい、続いたと思います。兄弟姉妹も、どんどん増えました。

ところが、ある年、十二月に入った頃だったと思います。支配人から、来年度から航空学科という新しい学科を開設することになったので、施設を貸すことはできなくなったと言われました。ビックリしました。大きな試練でした。皆で祈りながら、新しい会場を探し始めました。

ある日、朗報が入りました。集会の今は亡き上田兄が、京王プラザホテルの社長と親しい関係があり、交渉の結果、京王プラザホテル多摩の宴会場を貸してくださることになったのであります。ホテルですから、喜びの集いも盛大に行うことができます。大きなホテルの宴会場で、礼拝や福音集会、祈り会、そして、喜びの集いができるなんて、なんと感謝なことでありましょうか。

しかし、これも長くは続きませんでした。経営不振で閉館されることになったのであります。またもや試練です。兄弟姉妹がたは必死で祈りました。そして、与えられたのが現在の場所、ホテルのすぐそばの多摩市公営の施設であるパルテノン多摩でありました。

このように町田集会は何度もその場所を失うという試練に遭いました。しかし、その度に、私たちの願いをはるかに超えたすばらしい集会場が与えられました。これは奇蹟としか言いようがありません。兄弟姉妹が御霊にあって一つとなって祈る、その祈りを主が良しとされ、町田集会を御心にかなう教会として立てて、守ってくださったことを、改めて心から感謝したいと思います。

町田集会が、いかに主に愛され祝福された集会であるかの第二の点は、町田集会が、主のみからだなる教会であるということであります。

パウロは、教会とは主のみからだであると、いくつかの初代教会にあてた手紙に書いております。いくつか読んでみたいと思いますが、まずコロサイ人への 1 章 18 節には、『御子はそのからだである教会のかしらです』とあります。

エペソ
4:16 キリストによって、からだ全体は、一つ一つの部分がその力量にふさわしく働く力により、また、備えられたあらゆる結び目によって、しっかりと組み合わされ、結び合わされ、成長して、愛のうちに建てられるのです。

ローマ
12:4 一つのからだには多くの器官があって、すべての器官が同じ働きはしないのと同じように、
12:5 大ぜいいる私たちも、キリストにあって一つのからだであり、ひとりひとり互いに器官なのです。

さらにパウロは、第一コリントの十二章で、教会が主のみからだであることを詳しく説明しておりますけれども、長い文章なので、18 節から後のところを、とびとびにお読みいたします。

第一コリント
12:18 ‥‥神はみこころに従って、からだの中にそれぞれの器官を備えてくださったのです。
12:19 もし、全部がただ一つの器官であったら、からだはいったいどこにあるのでしょう。
12:20 しかしこういうわけで、器官は多くありますが、からだは一つなのです。
12:21 そこで、目が手に向かって、「私はあなたを必要としない。」と言うことはできないし、頭が足に向かって、「私はあなたを必要としない。」と言うこともできません。
12:22 それどころか、からだの中で比較的に弱いと見られる器官が、かえってなくてはならないものなのです。

これは、具体的に言いますと、大きい体の器官といえば、手や足でしょう。いちばん小さい器官というのは、私は、涙を出す器官、涙腺だと思います。本当に目頭にある小さな器官ですけど、これがないと、目玉が乾いて失明してしまいますので、これも小さい器官ですけど、なくてはならない、弱い器官ですけど、体にとってはなくてはならない器官であります。そういうふうないろいろな器官があります。パウロは、その後、こう言っております。

第一コリント
12:27 あなたがたはキリストのからだであって、ひとりひとりは各器官なのです。

2000 年前にこのように、人体の機能をキリストのみからだなる教会に結びつけたパウロの説き明かしは、驚くべきものであります。ここで、パウロが説き明かしたいくつかのみ言葉を整理してみたいと思います。

主の身体なる教会は、人間の体の構成と同じように、信者が人間の器官のように、大きな力の強い信者も、小さく力の弱い者も、それぞれに与えられた役割を果たしながら、かしらであるイエス様の命令のもとに、互いに助け合い、祈り合い、一つとなって体を支え歩んでいく。これが、主のみからだなる教会である。このようにパウロは言っております。

このことは、私たちの町田集会に、そのまま当てはまります。まさしく、町田集会は主イエス様をかしらとするみからだなる教会なのであります。

さて、最近、ZOOM を利用して、礼拝する人が増えております。現在、町田集会に集う兄弟姉妹は、約 80 名ですけれども、そのうち、半数は ZOOM による礼拝者であります。

ZOOM 礼拝は、高齢者や病人、遠距離の人など、集会に行きたくてもいけない兄弟姉妹にとっては、大変ありがたい方法です。けれども、ZOOM 礼拝には、会場で兄弟姉妹が顔と顔とを合わせて、一つになって祈り、賛美し、交わることができないという一体感、緊張感に欠けるもどかしさがあります。

これは、私自身の経験でも、はっきりそのことが分かります。ZOOM 礼拝が、集会の一致を損なうことがないように、正しく使うこと、これが、主のみからだなる町田集会が、これからも主に愛される集会として、主のご栄光を輝かす大切な条件になるのではないでしょうか。

最後に、町田集会が立て上げられてから今日まで、集会の旗印として歌われてきた日々の歌の 212 番の歌詞をお読みして終わります。

1.世界のうちに選び出され、
主に立てられた小さな群れ、
主イエスひとりをかしらとして、
建てあげられた主のみからだ。

2.みことばだけを頼りとして、
御心求め共に祈る、
いのちあふれるこの集いを、
主は御手をもて造りたもう。

3.救いの民は一つに群れ、
一つの心、一つの御名、
一つのからだ、一つの霊、
一つの祈り、一つの歌。

ありがとうございました。

聖書は神のみことば、神のメッセージが入った宝石箱

2026 年 4 月 5 日、町田福音集会
重田定義

> ヨハネ
> 5:24 まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。

おはようございます。私は、ただいま紹介していただいたように、いつもはズームで町田集会に参加しておりましたけれども、九十九歳になって、生きているうちに一度はパルテナン多摩の集会場に行きたいと思っておりました。今日は、その願いが叶えられて、本当に感謝であります。しかし、そのために、礼拝の途中から参加するなど、ご迷惑をおかけしました。また、木内兄には、車で運んでいただくことをまずしてくださって、その上、司会までお願いしてしまいました。

今日は、イースターの日でありますけれども、テーマはイースターとは直接は関係ないテーマ、先ほど読んでいただいたテーマでお話したいと思います。

聖書は神の御言葉、神のメッセージという宝石を入れた宝石箱。これがテーマなんです。これは、話せば大変長くなってしまいますので焦点をぐっと絞りまして、大切なポイントだけを短い時間でお話したいと思います。

聖書を持っている人は、どのぐらいいるのでありましょうか。毎年、二十万から三十万冊は、世に出ているということが分かっておりますので、かなり多くの人が持っているのではないでしょうか。ところが、ただ持っているだけの人、本棚に立てておくだけの人が、圧倒的に多いのではないかと思います。いったい、どうしてでしょうか。

それは、聖書の神が、自分たちの神とは全く違うので、分からないからであります。日本人の神というのは、全てこれは偶像の神、木や石や金属で作られた神であります。にもかかわらず、日本人はその神に願い事をし、祈りを捧げているということですね。そして、その神に捧げる祈りが、おみこし――華麗な飾りをつけたおみこし――、あるいは、京都の祇園祭りや東北のねぶた、そういう風な山車ですね。あるいは、阿波踊りみたいに行列を作って、大勢で練り歩く踊り、そういう風なお祭り、あるいは、初詣で始まる様々な願い事、例えば、出産とか、受験とか、就職とか、交通安全とか、商売繁盛、いろいろそういう風なものになってですね、国中の町々村々にもう定着している。これが日本の神なんですね。

もうこれは伝統文化の中に、入れられているような状態なんです。そういう風な日本人にとって、聖書の神というのは、どういう風に映っているか。まず目に見えない。けれども生きている。そして、天地万物を造って、人間も造った。しかも、それらを支配している。さらに、意志を持っていて、怒ったり喜んだりする。そういうふうな神は、とうてい日本人には理解できない。これは元来は、イスラエル民族、あるいは、ユダヤ民族の宗教の神だから。そして、後になって、世界に広まったのだから、自分たちには関係ない。そういうふうに思っても、仕方がないとも言えます。

しかしながら、聖書は、神がそのような哀れな人間をも、お見捨てにならずに、愛して滅びの道を歩んでいるその人間を救う計画をお立てになる。その計画を、御子なる神に命じられて、御子なる神は、救い主イエス・キリストとして、その使命を完全にまっとうされた。そういう風に、聖書は記しております。

けれども、聖書の神がこのような偉大な神であると分かるだけではなく、さらに信じることができるためには、その前提条件として、大切な条件があるんです。それは、聖書は頭で読むのではなくて、心で読まなければならないということであります。これが、普通の本の読み方とまったく違うところなのであります。

心で読むためには、当然、心を開かなければならない。そして、心を開くために、あるいは、心を閉じる、心の開閉というものは、どうしたらできるか。自我が大きく関係します。自我が強いと、心は閉ざされます。自我が砕かれると、人間の心は開かれます。けれども、この自我というのは、自分で砕くことはできない。当然でしょうね。では、どうしたら自我が砕かれるか。神が愛のむちをもって、様々な方法で、人間の自我を砕いてくださるのであります。それは人間の肉にとっては、辛く痛いものでありますけれども、神は、耐えられないような痛み、苦しみを与えないと、約束してくださっておられます。

こうして、神によって自我が砕かれ、心が開かれたときに、次に今度は、助け主なる御霊が働いて、ここで初めて、人間は聖書の神のメッセージが、これは人ごとではなくて、自分の救いのためであるということを知って、まことの神である父なる神、そして、御子なる神、イエス様を信じる恵みにあずかることができるのであります。私たちもこのようにして、自我が砕かれ、救われたのではないでしょうか。

ここで、聖書とイエス様についてのすばらしい言葉を御紹介します。それは、十七世紀のフランスの哲学者、パスカルの言葉です。パスカルは皆さんご存知ですよね。有名なパスカルの定理というものを作った人ですし、『パンセ』という本も書いておりますけれども、このパスカルの言葉は、スイス人のパウル・トルニエという医者で、しかも、伝道者の書いた本、著書、『聖書と医学』から、私はそのまま引用しました。このパスカルの言葉を、これからお読みいたします。

> 『私たちは、イエス・キリストによってのみ生と死を知る。イエス・キリストから離れては、私たちは、私たちの命が何であり、私たちの死が何であるかを知らないし、神を知らず自分自身を知らない。このようにイエス・キリストがその唯一の対象である聖書なくしては、私たちは何も知らないし、神についても、私たち自身の本性についても、曖昧と混乱のほかは何も見ることができない。』

もう一度お読みします。

『私たちはイエス・キリストによってのみ、生と死を知る。イエス・キリストから離れては、私たちは、私たちの命が何であり、私たちの死が何であるかを知らないし、神を知らず自分自身を知らない。このようにイエス・キリストがその唯一の対象である聖書なくしては、私たちは何も知らないし、神についても、私たち自身の本性についても、曖昧と混乱のほか何も見ることができない。』

すばらしい言葉ではないかと思うんですね。まさに、イエス・キリストをなくしては、そして、聖書なくしては、私たち人間は何も知らないで滅んでしまうしかないのではないでしょうか。このように短い言葉で、的確に聖書とイエス様を証ししたパスカルはさすがだと、私は感心しました。これで終わっちゃうんです、今日は。

今日は、聖書は神のメッセージ、神の言葉という宝石を入れた宝石箱というテーマでお話ししたつもりであります。しかし今、お話ししたように、そのようにわかるためには、自我が砕かれて、心を開いて聖書を読むということが是非とも必要なのであります。心を開いて読めば、神のメッセージ、神の御言葉はダイヤモンドのように光り輝く宝石となりますけれども、心を閉じて読めば、ただの石としか見えなくなってしまうのであります。

今の世界は、聖書の予言通り、神が裁き主として、罪と汚れに満ちたこの古い世界を滅ぼし、新しい清い世界を作るためにおいでになるのが近いことをはっきりと示しております。この時代に生きる私たちは、神のメッセージ、神の御言葉という宝石を入れる宝石箱を、御心にかなうようにしっかり用いること、神はそのことを私たちに求めておられるのではないでしょうか。

最後に、この宝石箱の中から、四つの御言葉を取り出してお読みします。

詩篇
119:103 あなたのみことばは、私の上あごに、なんと甘いことでしょう。蜜よりも私の口に甘いのです。

119:105 あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です。

119:130 みことばの戸が開くと、光が差し込み、わきまえのない者に悟りを与えます。

エレミヤ書
15:16 私はあなたのみことばを見つけ出し、それを食べました。あなたのみことばは、私にとって楽しみとなり、心の喜びとなりました。

このように御言葉を味わうことのできる人こそ、聖書を神のメッセージ、神の御言葉の宝石箱として用いることができる人と言えると思います。ありがとうございました。

わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い

2026 年 5 月 31 日、吉祥寺福音集会
重田定義

（古田公人兄によるお祈り）212 番を賛美しますと、ベック兄がおられた頃の学び会を思い出します。でもここに、『一つの群れ、一つの体』とありますけど、先に天に召された兄弟姉妹も、この地上に今いる私たちも、一つの体であります。目に見えないだけでつながっているのではないかと私は信じています。では、お祈りをさせていただきます。愛するイエス様、尊い御名を賛美します。あなた様がご自身のいのちを犠牲にして、私たちを罪から贖い出してくださり、今、あなた様のみ身体につながる一つ一つの機関として、共に歩ませてくださっていることを感謝いたします。福音の奥義を、今から重田定義兄弟を通して、あなた様がお語りくださいますけれども、御霊様の導きのうちに、一人一人がふさわしく、御言葉を受け取ることができますように、どうぞ支え導いてください。また語ってくださる重田兄弟の、とくに、おからだを、この間もお守りくださって、御心が存分にお語りになることができますようにお守りください。福音集会を始めるにあたり、尊い御名によって、感謝してお祈りします。アーメン。

> イザヤ
> 55:8「わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、わたしの道は、あなたがたの道と異なるからだ。――主の御告げ。――
> 55:9 天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。

おはようございます。また参りました。半年前には、これが最後だ、最後の機会だと思いましたけれども、主の御心は、私の思いとは全く違っていました。今、私は、先生に叱られた生徒のような気持ちでここにおります。イエス様に叱られた生徒のような気持ちです。今日は、そのような私の自戒の思いも含めまして、今、お読みいただいた、『わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い』というメッセージを、これからさせていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

イエス様を信じる私たちは、日々の歩みの中で、しばしば、主の御心がわからない、いったい、主のお考えは何だろうと、思い悩んでしまうことがあるのではないでしょうか。しかし、それは、今、お読みした御言葉にあるように、主のお考えは、目先のことしか見えない、わからない、私たち人間の考えが及ばないほど高いものであり、人の頭ではとうてい、主の御計画、お考えを知ることなどできないからなのであります。

このことについては、聖書に数多くの例が、記されておりますけれども、今日は、その中から、三人の有名な人物の例を見てみたいと思います。

最初は、バプテスマのヨハネの例であります。イスラエルは、昔から繰り返し繰り返し、周囲の強国に侵略されるという苦難の歴史を味わってきました。これは、イスラエルの民が、神様に選ばれた神の民であるにもかかわらず、たびたび神様に背いて、偶像の神を拝するという罪を犯したために、神様から与えられた罰なのであります。

けれども、神様は、そのイスラエルの民をお見捨てにならないで、なおも愛してくださり、預言者の口を通して、イスラエルを救うメシアを起こし、恒久的な王国をこの地に建てるというお約束をなさったのであります。

バプテスマのヨハネの時代には、イスラエルはローマ帝国に支配され、圧政に苦しんでおりましたので、人々は、神様が約束されたメシアの現れを今か今かと、待ち望んでおりました。そのような時に、神様からメシアの道を整える使命を与えられたこのバプテスマのヨハネは、人々に、神様に背いた罪を悔い改めるように勧め、ヨルダン川のほとりで、悔い改めのための洗礼を授けておりました。『バプテスマのヨハネ』の名の由来はここにあります。

そこに、イエス様がおいでになったのであります。バプテスマのヨハネは、イエス様を見た途端に、御霊の啓示を受けて、この方こそ、自分たちが長いあいだ待ち望んだ救い主、メシアであると、人々に証言をいたしました。

その彼は捕らえられて、牢に入れられました。理由は、ユダヤの領主が、兄弟の妻を妻としているという不道徳を責めたからであります。彼はその後、首をはねられて死にましたけれども、獄中でも、イエス様の噂は彼の耳に入ってきました。しかし、その噂を聞いた彼の心には、疑惑の思いが湧き上がってきたのであります。それは、彼が期待していたような、メシアの業を、イエス様は一向に実行される気配がないからでありました。そこで彼は、自分の弟子たちに、次のような質問を託して、イエス様のもとに遣わしました。

> マタイ
> 11:3 ・・・・「おいでになるはずの方は、あなたですか。それとも、私たちは別の方を待つべきでしょうか。」

こういう質問を、ヨハネが弟子たちに託したんですね。イエス様は、ヨハネの弟子たちに、次のようにお答えになりました。

> マタイ
> 11:4 ・・・・「あなたがたは行って、自分たちの聞いたり見たりしていることをヨハネに報告しなさい。
> 11:5 盲人が見、足なえが歩き、らい病人がきよめられ、つんぼの人が聞こえ、死人が生き返り、貧しい者には福音が宣べ伝えられているのです。
> 11:6 だれでも、わたしにつまずかない者は幸いです。」

イエス様はヨハネに、あなたはイスラエルを救う強いメシアとしてのわたしを期待しているようだけれども、その思いは、わたしの思いとは違う。わたしは、あなたの弟子たちが見たり聞いたりしている通り、苦しみ、悲しみ、弱っている人、貧しい人を救うメシアとして、業（わざ）を行うために来た。誰でもわたしにつまずかないものは幸いだと、このようにおっしゃっているのであります。

そして、冒頭の神様の御言葉、『わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。わたしの口から出るわたしの言

葉は、必ずわたしが望むことを成し遂げ、わたしが言い送ったことを成就させる』という神様のお約束通り、神の御子、イエス様は、神様の御言葉を成就なさるために、この世に人の姿を取って来てくださったのであります。

しかもそれは、イスラエルの民のみならず、全ての民の神様に対する背きの罪を、神の御子自らのいのちをもって贖うという考えられないような御業によって成就されたのであります。まさに、神様のお考えは、私たち人間の考えを遥かに超えた、高く深いものでありました。

イエス様のお答えを、バプテスマのヨハネがどう理解したか、聖書には書かれておりません。しかし、後にイエス様から、『女から生まれた者』、すなわち、全ての人間の中で、『バプテスマのヨハネよりも優れた人間は出ませんでした』と称賛されたほどのヨハネですから、彼がイエス様のお答えを聞いて、主のお考えは小さな自分の頭では、とうてい計り知ることができないほど、高く深いものであることを悟って、イエス様につまずいたことを悔い改め、イエス様は必ず、神様の御心を成し遂げてくださると確信し、よろこんで、自分のいのちを主にお委ねして、死んでいったのではないでしょうか。

次に、ペテロの例から見てみたいと思います。イエス様が、弟子たちを従えて、ピリポ・カイザリアの地方に行かれた時のことでありました。イエス様は弟子たちに、人々はわたしを誰と言っているのかと、お尋ねになりました。彼らは口々に、バプテスマのヨハネだとか、預言者エリアやエレミア、あるいは、その他の預言者だとか言っていると答えました。

そこでイエス様は彼らに、『あなたがたはわたしを誰だと思っているのか』と質問されました。この問いにペテロは、あなたは生ける神の御子キリストですと答えました。それをお聞きになったイエス様は、『あなたは幸いです。このことをあなたに明らかに示したのは人間ではなく、天にいますわたしの父です』と、祝福されたのであります。

以上のことは、マタイの福音書の 16 章の 13 節から 17 節に、記されております。

続いてイエス様は、弟子たちに驚くべきことを告げられました。それは、ご自身は、これからエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、そして、三日目によみがえらなければならないということでありました。それを聞いた弟子たちが、どんなに驚いたことか、理解できます。その一人、ペテロが言ったことと、それに対するイエス様のお答えが、マタイの福音書の 16 章 22 節、23 節にあります。

> マタイ
> 16:22 するとペテロは、イエスを引き寄せて、いさめ始めた。「主よ。神の御恵みがありますように。そんなことが、あなたに起こるはずはありません。」
> 16:23 しかし、イエスは振り向いて、ペテロに言われた。「下がれ。サタン。あなたはわたしの邪魔をするものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」

イエス様が、十字架にかけられることは、神様に対する背きの罪に汚れた人間を救う、神様のご計画が成就するためには、必要不可欠でありました。しかし、『あなたは、生ける神の御子、キリストです』と、証ししたペテロも、彼の頭では、人類を救う神様の大いなる御計画を計り知ることは、とうてい、できませんでした。

イエス様のおっしゃったことを、受け入れられなかったペテロの口から、思わず出た言葉が、『そんなことが、あなたに起こるはずありません』でした。ペテロは、自分は誰よりも、イエス様を思っている、愛していると自負していたようでありますけれども、その思いはまったく、人間的な思いだったのであります。

同時に、イエス様が殺されてから、自分たちは、どうなるだろうという、自分のことを心配する思いもあったことでありましょう。そして、あなたは、神のことを思わないで、人のことを思っているというペテロに対するイエス様の叱責は、また、ともすれば、イエス様を霊的にではなく、人間的に敬愛するという信仰、イエス様のお考えではなく、自分の考えを中心とするというような誤った信仰に陥りがちな私たち信者に対する、神様、主の戒めと受けとめることも必要でありましょう。

このことを通じて、私たち、信者は、いつもへり下って、主のお考えは、私たちの思いをはるかに超えた、高く深いものであることを深く覚えて、自分の思いではなくて、主の御心だけがなるように、常に祈ることが大切だと思います。

三番目に、今度は、パウロの例を見てみたいと、思います。熱心なユダヤ教徒で、また、高名な律法学者であったパウロは、イエス様を救い主として信じる人々を、律法を軽んじているとして迫害することに、熱心でありました。

しかし、キリスト教徒を、迫害するために、タマスコに向かう途上で、復活されたイエス様に、『なぜ、わたしを迫害するのか』というイエス様の声を聞いて、悔い改めました。一変して、彼は異邦人にイエス様を述べ伝える伝道者と変えられたのであります。

そのパウロは殉教の死を遂げるまで、都合三回、大きな伝道旅行をしておりますけれども、二回目の伝道旅行の時に、主は彼が行こうとしていた地方に行くことを、二度も止められたのであります。

> 使徒行伝
> 16:6 それから彼ら(・・・・彼らというのはパウロとシラスですが・・・・)は、アジヤでみことばを語ることを聖霊によって禁じられたので、フルギヤ・ガラテヤの地方を通った。
> 16:7 こうしてムシヤに面した所に来たとき、ビテニヤのほうに行こうとしたが、イエスの御霊がそれをお許しにならなかった。
> 16:8 それでムシヤを通って、トロアスに下った。

いろんな私たちに目新しいような地方のこと、街のことが出てきますけれども、彼らはまず現在、小アジアと呼ばれているトルコ地方に福音を述べ伝えようとしていました。ところが聖霊によって、それは止められたのであります。

そこで次に北の方、黒海の沿岸のビテニア地方に行こうとしましたけれども、またも、主の御霊がその計画を禁じられたのであります。主のために福音を述べ伝えにその地に行こうとしていた自分たちをなぜ、二度も主が止められるのか、その時には、彼には主の御心が全く理解できませんでした。

その夜、パウロは幻を見ました。その結果、彼はなぜ主が自分たちを止められたのか、主は自分たちをどこに遣わそうとされるお考えなのかを、確信することができたのであります。

使徒の働き
16:9 ある夜、パウロは幻を見た。ひとりのマケドニヤ人が彼の前に立って(‥‥このマケドニアというのは、ギリシャの北方の地方でありますが‥‥)、「マケドニヤに渡って来て、私たちを助けてください。」と懇願するのであった。
16:10 パウロがこの幻を見たとき、私たちはただちにマケドニヤに出かけることにした。神が私たちを招いて、彼らに福音を宣べさせるのだ、と確信したからである。

このようにあります。そして、この伝道旅行の結果、多くのギリシャ人たちが福音を受け入れて、マケドニア地方の都市のピリピやテサロニケに、聖書に知られた諸教会が建てられることになったのであります。

最初に申しましたように、私たち信者は、信仰の歩みの中で理解できないような出来事、思いがけないような出来事にあったり、あるいは、祈っても思うような結果が得られないと、主の御心がわからなくなり、途方に暮れ、思い悩み、はてはなぜか、どうしてかと主を疑ってしまうような信仰の弱い者ではないでしょうか。

そのような疑いや迷いが起こる大きな原因は、私たちが主に全き信頼を置いていないから、主に完全に自分を明け渡していないから、また、主を第一としていると思っていながら、自分の思いを中心に置いているからではないでしょうか。モーセの後継者で、イスラエルの指導者、ヨシュアは、イスラエルの民に次のように言いました。

ヨシュア
23:14 ‥‥あなたがたは、心を尽くし、精神を尽くして知らなければならない。あなたがたの神、主が、あなたがたについて約束したすべての良いことが一つもたがわなかったことを。それは、一つもたがわず、みな、あなたがたのために実現した。

もういっぺん、お読みいたします。

ヨシュア
23:14 ‥‥あなたがたは、心を尽くし、精神を尽くして知らなければならない。あなたがたの神、主が、あなたがたについて約束したすべての良いことが一つもたがわなかったことを。それは、一つもたがわず、みな、あなたがたのために実現した。

これは、私たちキリスト者全てに言われていることであります。神様のお約束は、人間の小さな頭では、とうてい理解することはできません。しかし、自分には理解できなくても、私たちのために御子の尊いいのちを犠牲にしてくださるほど私たちを愛してくださる。全能にして生けるまことの神様のお約束である以上、信じる者の上にそのお約束はすでにひとつもたがわず、すべて実現したということを、私たちキリスト者は与えられた御霊によって、心に固く確信しなければならないと思います。

第二コリント
1:20 神の約束はことごとく、この方(‥‥すなわち、御子イエス・キリスト‥‥)において「しかり。」となりました。それで私たちは、この方によって「アーメン。」と言い、神に栄光を帰するのです。

1:22 神はまた、確認の印を私たちに押し、保証として、御霊を私たちの心に与えてくださいました。

その通りであります。私たち信者は、信仰の歩みの中で、たとえ主の考えがわからなくなるようなことが起こっても、疑うようなことなく、思い悩むことなく、ご計画のすべてをお考え通りに成し遂げられる大いなる全知全能の神様、そして、ご自分のいのちをお捨てになり、よみがえって永遠のいのちを与えてくださったばかりか、御霊として私たち信じる者の中に住んで、日々、『これが道だ、これに歩め』と導いてくださるイエス様をただ、無条件に信頼いたしましょう。そして、間もなく私たち信者の体を、朽ちない聖い体に変えて、天の御国に携え挙げてくださるために迎えに来てくださるというご再臨の約束を、確信と希望をもって待ち望みつつ、その日に備えて、御霊に導かれつつ、そしてまた、主から与えられたこの小さき群れ、お一人お一人、兄弟姉妹が助け合い、支え合い励まし合って、一つになって主にお従いして、信仰の歩みを歩み続けようではありませんか。

どうもありがとうございました

生きることはキリスト、死ぬことも益です

2026 年 7 月 5 日、町田集会
重田定義

> ピリピ
> 1:21 私にとっては、生きることはキリスト、死ぬことももまた益です。
> 1:22 しかし、もしこの肉体のいのちが続くとしたら、私の働きが豊かな実を結ぶことになるので、どちらを選んだらよいのか、私にはわかりません。
> 1:23 私は、その二つのものの間に板ばさみとなっています。私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。実はそのほうが、はるかにまさっています。
> 1:24 しかし、この肉体にとどまることが、あなたがたのためには、もっと必要です。

今日は今、読んでいただいた御言葉の中から、『生きることはキリスト、死ぬこともまた益』ということについて、ご一緒に考えてみたいと思います。

パウロの言葉から私たちは、彼にとって全ての生きがいはキリストにあるということが分かります。しかし、この世の見えるものに生きがいを求めて生きている人々には、このことは全く理解できないことなのではないでしょうか。パウルはまた、ガラテア人への手紙の 2 章の 20 節で、

> ガラテア
> 2:20 私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

とも言っております。

これはイエス様を信じる前の古い自分、自己中心の自分は、もはやイエス様とともに十字架につけられて死んだのだから、信じた今は、古い自分が生きているのではなくて、新しく生まれた自分の中に住んでくださっているイエス様の御霊によって生かされている――そういうパウロの信仰告白であります。

真の神様を知らない人間はみな、自分のいのちは自分のものと考えています。ですから、自分のいのちを自分の益のために、自分が生きるために用いること、これは当然のこととして、何の疑問も持ちません。

こうして人間は、自分の様々な願望を満たすために、また、人生を楽しむために、いのちを大切にしますし、また、一方、死を恐れるのであります。なぜならば、この世のいのちが全てだと思っている人にとっては、死ねば全てが終わりだからであります。

人々が、健康を維持するのに狂奔するのも、この世のいのちがあってこそと思っているからではないでしょうか。パウロ流の言い方をするならば、生きることは自分のためである、死ぬことは恐ろしい――ということになるのではないでしょうか。

けれども、自分のいのちによって、この世を楽しもうとしても、その人生は果たして、自分の思い通りになるのでしょうか。世界一の知恵者と言われ、ばく大な富や強大な権力を手にしたソロモン王は次のように告白しました。

> 伝道者の書
> 1:2 ・・・・空の空。すべては空。
> 1:3 日の下で、どんなに労苦しても、それが人に何の益になろう。
>
> 2:4 私は事業を拡張し、邸宅を建て、ぶどう畑を設け、
> 2:5 庭と園を造り、そこにあらゆる種類の果樹を植えた。
> 2:6 木の茂った森を潤すために池も造った。
> 2:7 私は男女の奴隷を得た。私には家で生まれた奴隷があった。私には、私より先にエルサレムにいただれよりも多くの牛や羊もあった。
> 2:8 私はまた、銀や金、それに王たちや諸州の宝も集めた。私は男女の歌うたいをつくり、人の子らの快楽である多くのそばめを手に入れた。
> 2:9 私は、私より先にエルサレムにいただれよりも偉大な者となった。しかも、私の知恵は私から離れなかった。
> 2:10 私は、私の目の欲するものは何でも拒まず、心のおもむくままに、あらゆる楽しみをした。実に私の心はどんな労苦をも喜んだ。これが、私のすべての労苦による私の受ける分であった。
> 2:11 しかし、私が手がけたあらゆる事業と、そのために私が骨折った労苦とを振り返ってみると、なんと、すべてがむなしいことよ。風を追うようなものだ。日の下には何一つ益になるものはない。

このように、ソロモンは言っております。ソロモンでなくても、この世に生き甲斐を求めて夢中で生きている人も、静まってそれまで歩んできた人生を真剣に振り返ってみたときに、いったい何のために自分は苦労して、生きてきたのだろう、自分は何をもって、生き甲斐としてきたのだろうと、これは歳を取れば取るほど、虚しさを感じざるを得ないのではないでしょうか。

> 詩編
> 90:10 私たちの齢は七十年。健やかであっても八十年。しかも、その誇りとするところは労苦とわざわいです。それは早く過ぎ去り、私たちも飛び去るのです。

とある通りです。しかし、多くの人々は、虚しさを感じながらも、どうすることもできずに、束の間の喜びや快楽や安らぎを求めて、生きるほかかないと諦めてしまっているのではないでしょうか。

けれども、諦めることはありません。そのような人でも、もし心から求めるならば、誰でもこの虚しい生き方から、脱却することができ、虚しい生き方ではなくて、尽きることのない希望と喜びと安らぎに満ちた生き方を、そして、死をも恐れぬ生き方をすることができるのであります。

では、そのような生き方をすることができるためには、どうしたらいいのでしょうか。そのために私たちは、何を成すべきなのでしょうか。昔から人間は、このために知恵を

絞り、また、努力をしてきました。けれども人間の知恵や努力ではできないことは、先ほどのソロモンの告白からも明らかであります。

けれども、希望と喜びと安らぎに満ちた生き方が、そして、人間がもっとも恐れる死をも恐れぬ生き方ができるという道が、ひとつだけあります。それには、私たちが自分の欲望に支配されて生きるという古い人を脱ぎ捨てて、新しい人、すなわち、新しいいのちに生まれ変わらなければならないのであります。そんなことは、いったいどうして可能なのでしょうか。

もちろん、人間の力では不可能であります。ただ一つ、天地万物の創造主であり、支配者である生ける神のひとり子が、私たちのために人の姿をとってこの世に来られた、そのイエス様を信じる信仰によってのみ、それが可能となるのであります。

神の御子のイエス・キリストがこの世に来られ、十字架にかかってくださったという目的はまさに、私たち人間を、そのままでは滅びるしかない虚しい生き方から救い出して、真の喜びと希望に満ちた新しい永遠のいのちに生きるようにしてくださるためだったのであります。

そして、虚しい生き方から脱却するために、私たちが成すべきことはただ一つ、今まで神様に背を向けて、自分の思いを満たすことだけを考えて、自分中心に生きてきたこと――これが聖書でいうところの罪でありますけれども――、そのような生き方を心から悔い改めて、そのような生き方をしてきたわがままな自分の罪を、身代わりになって十字架にかってくださったイエス様の大きなご愛に心から感謝し、これからの人生のすべてをイエス様にお委ねし、イエス様を主として従おうと固く決意をすることであります。

これが信仰告白であります。そして、これこそ神様が私たちに求めておられることなのであります。神様は、この信仰告白を喜ばれて、私たちの罪に穢れた古い人を、イエス様とともに十字架にかけてくださり、同時に、イエス様のよみがえりのいのちを与えて、新しく生まれ変わらせて、神の子供としてくださるのであります。

> ヨハネ
> 1:12 しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。

とあるとおり、そして、

> ガラテヤ
> 3:26 あなたがたはみな、キリスト・イエスに対する信仰によって、神の子どもです。

と記してあるとおりであります。ではイエス様を信じて生まれ変わった結果、私たちの意識は、私たちの死生観はいったいどのように変わるのでありましょうか。イエス様を信じる以前の古い人の時には、生きるのは自分のためと考えたものから一変して、生きる目的が自分のためではなくて、イエス様のためという風に変わります。パウロはこの心境の変化を次のように言い表しております。

> ローマ
> 6:4 私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあって(・・・・これはイエス様ですね、イエス様のいのちにあって・・・・)新しい歩みをするためです。
> 6:5 もし私たちが、キリストにつぎ合わされて、キリストの死と同じようになっているのなら、必ずキリストの復活とも同じようになるからです。
> 6:6 私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが滅びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。
> 6:7 死んでしまった者は、罪から解放されているのです。
> 6:8 もし私たちがキリストとともに死んだのであれば、キリストとともに生きることにもなる、と信じます。

パウロは、かつてはイエス様を、神を冒涜する者と考えて、イエス様を信じる人たちを迫害することに生き甲斐を感じていたような人間でありました。

けれども、復活のイエス様に出会って、霊の目が開かれ、自分が大変な罪を犯していたことを知って心から悔い改め、それからは、イエス様を主として従い、イエス様のために自分の人生を捧げて生きようというように変わりました。これについて、パウロは次のように告白しております。

> 第一テモテ
> 1:13 私は以前は、神をけがす者、迫害する者、暴力をふるう者でした。それでも、信じていないときに知らないでしたことなので、あわれみを受けたのです。
> 1:14 私たちの主の、この恵みは、キリスト・イエスにある信仰と愛とともに、ますます満ちあふれるようになりました。
> 1:15 「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた。」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。
> 1:16 しかし、そのような私があわれみを受けたのは、イエス・キリストが、今後彼を信じて永遠のいのちを得ようとしている人々の見本にしようと、まず私に対してこの上ない寛容を示してくださったからです。

パウロは、優れた律法学者であり、また家柄についても、律法を遵守することにおいても、イエス様を救い主として認めないユダヤ教の熱心な信者としても、自他ともに認めるほどの人物でありました。そのような知識と誇りの上に立って、イエス様を神を汚す者とみなして、イエス様を信じる者を迫害することに、彼は生き甲斐を感じていたのであります。

しかし、復活されたイエス様に出会って、霊の目が開かれた時に、イエス様の大きなご愛に直接、触れてこれまでの自分の愚かさ、自分の罪の大きさに初めて気がつき、心から悔い改め、それからは殉教の死を遂げるまで、イエス様のために生涯を捧げるという生き方へと大転換

をしました。この彼の心の変化について、彼は次のように語っております。

ピリピ
3:5 私は八日目の割礼を受け、イスラエル民族に属し、ベニヤミンの分かれの者です。きっすいのヘブル人で、律法についてはパリサイ人、
3:6 その熱心は教会を迫害したほどで、律法による義についてならば非難されるところのない者です。
3:7 しかし、私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。
3:8 それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています。それは、私には、キリストを得、また、
3:9 キリストの中にある者と認められ、律法による自分の義ではなくて、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基づいて、神から与えられる義を持つことができる、という望みがあるからです。

パウロは、イエス様に出会ったことのすばらしさのゆえに、今まで得と考えていたこの世的に価値のあるすべてのものが、全く無価値なものに変わってしまった、無価値なものになってしまったというふうに証しをしております。

イエス様と霊的な出会いをするということは、このように人間の価値観を一変させるほどすばらしいことなのであります。ここであらためて、最初のピリピの手紙の 1 章 21 節から 24 節のパウロの言葉を見てみたいと思います。

ピリピ
1:21 私にとっては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。
1:22 しかし、もしこの肉体のいのちが続くとしたら、私の働きが豊かな実を結ぶことになるので、どちらを選んだらよいのか、私にはわかりません。
1:23 私は、その二つのものの間に板ばさみとなっています。私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。実はそのほうが、はるかにまさっています。
1:24 しかし、この肉体にとどまることが、あなたがたのためには、もっと必要です。

この手紙は、パウロが投獄された獄中で書いたことが分かっております。イエス様に出会って霊的に生まれ変わった彼は、異端の教えとして禁じられていたイエス様の福音を述べ伝え続けたために、捕らえられて牢獄に入れられました。パウロが毎日、死を覚悟していたことは、コリント人の第 2 の手紙の 4 章 10 節から 11 節を見れば分かります。お読みします。

第二コリント
4:10 いつでもイエスの死をこの身に帯びていますが、それは、イエスのいのちが私たちの身において明らかに示されるためです。
4:11 私たち生きている者は、イエスのために絶えず死に渡されていますが、それは、イエスのいのちが私たちの死ぬべき肉体において明らかに示されるためなのです。

そして、ピリピの手紙 1 章 23 節で、『私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。実はそのほうが、はるかにまさっています』とも言っておりますように、パウロ自身としては、イエス様を述べ伝えるがゆえに受ける迫害の中で、早く天に召されて、イエス様のみもとに行きたいという切なる思いがありました。

しかし、一方では、自分はイエス様から、異邦人の世界に福音伝道するという大きな務めを果たすために選ばれ、救われたのだという強い使命感を持っておりました。そのためには、たとえ体は死ぬほどの苦しみにあっても、生きていることが必要だと考えたのであります。

彼の切なる願いは、生きるにしても死ぬにしても自分の身によってキリストのご栄光が表されることであったのであります。まさに、パウロにとって、生きることはキリスト、死ぬこともまた益なのであります。

しかし、この『生きることはキリスト、死ぬこともまた益です』というパウロの証しは、パウロだけの証しとして済ますわけにはいきません。主は、私たち信者にも、このように生きることを切望しておられるのであります。世の終わりの時が、そして、ご再臨の時が迫っていることを強く覚える今日、イエス様を信じる私たちが、私たち全ての信者もまた、イエス様と霊的な出会いによって開かれた霊によって、ガラテアの二章二十節にありますように、

ガラテア
2:20 私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

という信仰に固く立って、私たちの内に住んでくださる御霊に強められ、励まされて、生きることはキリスト、死ぬこともまた益ですと高らかに証しすることができますように、そして、私たち信者を通して、主がご栄光を表されますように、切に祈る次第であります。最後に、第二コリントの 5 章 15 節の御言葉をお読みして終わります。

第二コリント
5:15 キリストがすべての人のために死なれたのは、生きている人々が、もはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きるためなのです。

ありがとうございました。